

# 流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 3

—流山市思井上ノ内遺跡—

平成28年 3月

千葉県教育委員会

# 流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 3

ながれやまし おもい かみ の うち い せき  
—流山市思井上ノ内遺跡—







思井上ノ内遺跡空中写真（北から）



思井上ノ内遺跡奈良・平安時代土器



## 序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第11集となる、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市思井上ノ内遺跡の発掘調査報告書です。調査成果としては、旧石器時代の石器集中ブロック、縄文時代早期の炉穴や後期の竪穴住居跡、土坑、貝ブロックや埋葬人骨、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物、土器焼成遺構、中・近世の火葬遺構、土坑墓や区画整形など地域の歴史を知る上での貴重な成果を数多く得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成28年3月

千葉県教育委員会  
文化財課長 永沼 律朗



## 凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、千葉県流山市思井字上ノ内418-1ほかに所在する思井上ノ内遺跡（遺跡コード220-039）の第1次から第6次までの成果を取録している。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、平成24年度まで公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、平成26年度からは千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章に掲載した。
- 5 本書の執筆は、以下の通りである。編集は安井が行った。
  - 第1章第1節 高梨友子（千葉県教育庁教育振興部文化財課）
  - 第1章第2節、第2章第2節7・8・9の一部、第3章第1節 安井健一（千葉県教育庁教育振興部文化財課）
  - 第2章第1節 鳥立 桂（公益財団法人千葉県教育振興財団）
  - 第2章第2節1～6 西川博孝（公益財団法人千葉県教育振興財団）
  - 第2章第2節9の一部 四柳 隆（公益財団法人千葉県教育振興財団）
  - 第2章第3節、第3章第2節 糸川道行（公益財団法人千葉県教育振興財団）
  - 第2章第4節、第3章第3節 森本和男（公益財団法人千葉県教育振興財団）
- 6 縄文時代埋葬人骨の分析・同定については渡辺新氏、貝層から出土した動物遺存体の分析・同定については芝田英行氏にそれぞれ依頼し、その分析の成果を付章に掲載した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで千葉県県土整備部市街地整備課・流山区画整理事務所、流山市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 9 本書で使用した地形図は下記の通りである。
  - 第1～4図 流山市発行 1/2,500 流山市都市計画地図
  - 第6・199・201図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「流山村」
  - 第7図 国土地理院発行 1/25,000「流山」(NI-54-25-1-2)・「松戸」(NI-54-25-2-1)平成17年発行
- 10 図版1で使用した航空写真（遺跡周辺航空写真）は、昭和48年に京業測量株式会社が撮影したものである。



【遺構種別記号】

SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構・区画整形遺構 SI：竪穴住居跡

SK：土坑、竈穴、陥穴、竈跡・ピット群・ピット、貝ブロック、土器焼成遺構・焼土遺構、火葬遺構

【旧石器時代凡例】

石器

Kn：ナイフ形石器 Tp (▲)：台形石器 Po：槍先形石器 Kp：角錐状石器 Es：搔器 Ss (○)：削器

Gr：彫器 Dr：錐状石器 Pq (○)：楔形石器 Rf (○)：加工痕ある剥片 Uf (○)：使用痕ある剥片

Bl：石刃 Ax：石斧 Hs (■)：敲石類 As：台石 Uk：その他 Fl (●)：剥片 Ch：碎片

Co (□)：石核 Ge：原石 Pe (★)：礫

石材1

Ob：黒曜石 ObA：栃木県高原山産黒曜石 ObB：信州和田峠・霧ヶ峰周辺産黒曜石 ObC：信州八ヶ

岳周辺産黒曜石 ObD (●)：箱根畑宿産黒曜石 ObE：伊豆天城峠産黒曜石 ObF：神津島産黒曜石

ObG：その他・不明黒曜石

石材2

An (○)：安山岩 Rh (■)：流紋岩 Sh：頁岩 ShA：東北産頁岩 ShB：北関東産頁岩

ShC (□)：嶺南産頁岩 ShD：珪化度の強い頁岩 ShE：黒色頁岩 ShX (●)：その他の頁岩

石材3

Ch (●)：チャート Sa (●)：砂岩 Ho (★)：ホルンフェルス Yj：黄玉石

【図凡例】



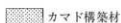
貝層



灰



竈・カマド火床部



カマド構築材



焼土

(奈良・平安時代型穴住居)



柱痕



焼土

(奈良・平安時代焼土遺構)

● 胎土に植物繊維を含む土器

# 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法と調査概要	4
第2節	遺跡の位置と環境	9
1	遺跡の地理的環境	9
2	周辺の遺跡と歴史的環境	9
第2章	検出された遺構と遺物	19
第1節	旧石器時代	19
1	概要	19
2	遺構と遺物	19
(1)	第1文化層	19
(2)	第2文化層	42
(3)	第3文化層	43
(4)	その他の出土遺物	45
第2節	縄文時代	49
1	竪穴住居跡	49
2	炉跡・ピット群・ピット	80
3	土坑	83
4	貝ブロック	97
5	炉穴	101
6	陥穴	113
7	出土人骨	115
8	出土動物遺存体	118
9	遺構外出土遺物	132
(1)	縄文土器	132
(2)	縄文時代土製品・石製品	190
(3)	縄文時代石器	190
第3節	奈良・平安時代	203
1	竪穴住居跡	203
2	掘立柱建物	231
3	土器焼成遺構・焼土遺構	243
4	土坑	250

5	遺構外出土遺物	253
第4節	中・近世	261
1	遺構	261
2	遺物	271
第3章	まとめ	273
第1節	縄文時代	273
1	集落の変遷	273
(1)	早期の状況	273
(2)	後期の状況	275
2	出土人骨について	279
(1)	人骨が検出された遺構について	279
(2)	葬法について	281
(3)	他遺跡の墓葬事例について	283
第2節	奈良・平安時代	284
1	集落の変遷	284
2	土器の様相	287
3	思井上ノ内遺跡をとりまく交通について	289
4	思井上ノ内遺跡と桑原郷	291
第3節	中・近世	298
付章	自然科学分析	299
第1節	S1008貝ブロックA出土人骨の分析	299
1	保存状態・出土状態の概況	299
2	骨破片の部位同定	299
3	所見	299
4	概要	301
第2節	思井上ノ内遺跡出土の動物遺体	305
1	はじめに	305
2	種名表	305
3	各遺構内貝層における動物遺体の概要	308
4	微小貝について	315
5	まとめ	315

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図	流山運動公園周辺地区土地区画整理事業 地内遺跡……………	2	第25図	J56ブロック出土遺物分布図(2) - 石材別分布図 - ……	42
第2図	思井上ノ内遺跡の調査範囲と地形……	3	第26図	J56ブロック出土遺物実測図……………	43
第3図	調査次別範囲と上層確認調査トレンチ配 置及びグリッド配置……………	5	第27図	I56ブロック出土遺物分布図(1) - 石器別分布図 - ……	44
第4図	調査次別範囲と下層確認調査トレンチ配置 ……………	6	第28図	I56ブロック出土遺物分布図(2) - 石材別分布図 - ……	44
第5図	上層遺構全体図……………	7	第29図	I56ブロック出土遺物実測図……………	45
第6図	遺跡の立地と周辺の地形……………	10	第30図	上層遺構等出土遺物実測図(1) ……	46
第7図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………	16	第31図	上層遺構等出土遺物実測図(2) ……	47
第8図	旧石器時代ブロック全体図……………	20	第32図	縄文時代遺構全体図……………	50
第9図	L56ブロック出土遺物分布図(1) - 石器別分布図(1) - ……	25	第33図	SI001住居跡・SK013土坑、出土遺物(1) ……………	51
第10図	L56ブロック出土遺物分布図(2) - 石器別分布図(2) - ……	26	第34図	SI001住居跡出土遺物(2)……………	52
第11図	L56ブロック出土遺物分布図(3) - 石器別分布図(3) - ……	27	第35図	SI002住居跡、出土遺物……………	52
第12図	L56ブロック出土遺物分布図(4) - 石材別分布図(1) - ……	28	第36図	SI003住居跡……………	53
第13図	L56ブロック出土遺物分布図(5) - 石材別分布図(2) - ……	29	第37図	SI004住居跡、出土遺物……………	53
第14図	L56ブロック出土遺物実測図(1) ……	31	第38図	SI005住居跡、出土遺物……………	55
第15図	L56ブロック出土遺物実測図(2) ……	32	第39図	SI006住居跡、出土遺物(1)……………	56
第16図	L56ブロック出土遺物実測図(3) ……	33	第40図	SI006住居跡出土遺物(2)……………	57
第17図	L56ブロック出土遺物実測図(4) ……	34	第41図	SI006住居跡出土遺物(3)……………	58
第18図	L56ブロック出土遺物実測図(5) ……	35	第42図	SI007住居跡、出土遺物(1)……………	60
第19図	L56ブロック出土遺物実測図(6) ……	36	第43図	SI007住居跡出土遺物(2)……………	61
第20図	L56ブロック出土遺物実測図(7) ……	38	第44図	SI007住居跡出土遺物(3)……………	62
第21図	L56ブロック出土遺物実測図(8) ……	39	第45図	SI009住居跡、出土遺物……………	62
第22図	L56ブロック出土遺物実測図(9) ……	40	第46図	SI008住居跡、SK018・019土坑、出土遺 物(1)……………	64
第23図	L56ブロック出土遺物実測図(10) ……	41	第47図	SI008住居跡出土遺物(2)……………	65
第24図	J56ブロック出土遺物分布図(1) - 石器別分布図 - ……	42	第48図	SI010・011住居跡、SK020・030土坑、 出土遺物……………	68
			第49図	SI012住居跡、出土遺物……………	70
			第50図	SI013住居跡、SK021土坑、出土遺物(1) ……………	72

第51図	SI013住居跡、SK021土坑出土遺物(2) ……………73	第79図	SK061・062・063・064・065陥穴、出土 遺物……………114
第52図	SI014住居跡、出土遺物……………73	第80図	SI008貝ブロックA人骨検出状況 ……116
第53図	SI015住居跡、SK066土坑、出土遺物(1) ……………75	第81図	SI008貝ブロックA出土土器……………117
第54図	SI015住居跡、SK066土坑出土遺物(2) ……………76	第82図	人骨個体別位置図……………117
第55図	SI016住居跡、出土遺物……………76	第83図	動物遺存体採取位置……………119
第56図	SI017住居跡、出土遺物(1)……………78	第84図	出土貝種組成グラフ(後期遺構) ……130
第57図	SI017住居跡出土遺物(2)……………79	第85図	出土貝種組成グラフ(早期遺構) ……131
第58図	SK001・002・003土坑、出土遺物 ……81	第86図	主要貝種殻長グラフ(早期遺構) ……131
第59図	SK004・005・006・007土坑、SK029貝 ブロック、出土遺物……………82	第87図	主要貝種殻長グラフ(後期遺構) ……132
第60図	SK008・009・010土坑、出土遺物 ……84	第88図	遺構外出土土器 第Ⅰ群・第Ⅱ群(1) ……………134
第61図	SK011土坑、出土遺物……………85	第89図	遺構外出土土器 第Ⅱ群(2) ……135
第62図	SK012土坑……………87	第90図	遺構外出土土器 第Ⅱ群(3) ……136
第63図	SK014土坑、出土遺物……………88	第91図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(1) ……137
第64図	SK015・016土坑、出土遺物……………90	第92図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(2) ……138
第65図	SK017・022・024土坑、出土遺物 ……92	第93図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(3) ……140
第66図	SK023土坑、出土遺物(1)……………93	第94図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(4) ……141
第67図	SK023土坑出土遺物(2)……………94	第95図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(5) ……142
第68図	SK025・026・027土坑、出土遺物 ……96	第96図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(6) ……143
第69図	SK028・031・032・033・035貝ブロック、 出土遺物……………98	第97図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(7) ……144
第70図	SK034貝ブロック、出土遺物(1) ……99	第98図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(8) ……145
第71図	SK034貝ブロック土坑出土遺物(2) ……………100	第99図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(9) ……146
第72図	SK036・037・038・039・040・041炉穴、 出土遺物……………102	第100図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(10) ……148
第73図	SK042・043・044・045・046・047炉穴、 出土遺物……………103	第101図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(11) ……149
第74図	SK048・049・052・053炉穴、出土遺物 ……………105	第102図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(12) ……150
第75図	SK050・055・058炉穴、出土遺物 ……107	第103図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(13) ……151
第76図	SK051炉穴、出土遺物……………108	第104図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(14) ……153
第77図	SK054・056炉穴、出土遺物……………110	第105図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(15) ……155
第78図	SK057・059・060炉穴、出土遺物 ……112	第106図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(16) ……156
		第107図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(17) ……157
		第108図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(18) ……158
		第109図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(19) ……159
		第110図	遺構外出土土器 第Ⅲ群(20) ……160
		第111図	遺構外出土土器 第Ⅳ群(1) ……162
		第112図	遺構外出土土器 第Ⅳ群(2) ……163
		第113図	遺構外出土土器 第Ⅳ群(3) ……164

第114図	遺構外出土土器	第V群(1)……	166	第150図	SI020住居跡、出土遺物……………	207
第115図	遺構外出土土器	第V群(2)……	167	第151図	SI021住居跡……………	207
第116図	遺構外出土土器	第V群(3)……	168	第152図	SI022住居跡、出土遺物……………	209
第117図	遺構外出土土器	第V群(4)……	169	第153図	SI023住居跡、出土遺物……………	210
第118図	遺構外出土土器	第V群(5)……	170	第154図	SI024住居跡、出土遺物……………	212
第119図	遺構外出土土器	第V群(6)……	171	第155図	SI025住居跡、出土遺物……………	214
第120図	遺構外出土土器	第V群(7)……	172	第156図	SI026住居跡、出土遺物(1)……	216
第121図	遺構外出土土器	第V群(8)……	173	第157図	SI026住居跡出土遺物(2)……	217
第122図	遺構外出土土器	第V群(9)……	174	第158図	SI026住居跡出土遺物(3)……	218
第123図	遺構外出土土器	第V群(10)……	175	第159図	SI027住居跡、出土遺物……………	222
第124図	遺構外出土土器	第V群(11)……	177	第160図	SI028住居跡、出土遺物……………	224
第125図	遺構外出土土器	第V群(12)……	178	第161図	SI029住居跡、出土遺物……………	226
第126図	遺構外出土土器	第V群(13)……	179	第162図	SI030住居跡、出土遺物……………	227
第127図	遺構外出土土器	第V群(14)……	180	第163図	SI032・033住居跡、出土遺物……	227
第128図	遺構外出土土器	第V群(15)……	181	第164図	SI031住居跡、出土遺物……………	229
第129図	遺構外出土土器	第V群(16)……	182	第165図	SB001掘立柱建物……………	232
第130図	遺構外出土土器	第V群(17)……	183	第166図	SB002掘立柱建物及び周辺の土坑群 ……………	233
第131図	遺構外出土土器	第V群(18)……	184	第167図	SB003掘立柱建物……………	236
第132図	遺構外出土土器	第V群(19)……	185	第168図	SB004掘立柱建物……………	237
第133図	遺構外出土土器	第V群(20)……	187	第169図	SB005・006掘立柱建物、出土遺物 ……………	238
第134図	遺構外出土土器	第V群(21)……	188	第170図	SB007掘立柱建物……………	239
第135図	遺構外出土土器	第V群裝飾突起 ……………	189	第171図	SB008掘立柱建物……………	240
第136図	遺構外出土土器	第V群底部……	191	第172図	SB009・SB010掘立柱建物、出土遺物 ……………	242
第137図	遺構外出土土器	第VI群(1)……	192	第173図	SK067焼土遺構、出土遺物……………	243
第138図	遺構外出土土器	第VI群(2)……	193	第174図	SK068土器焼成遺構、出土遺物…	245
第139図	遺構外出土土器製品・石製品	……………	194	第175図	SK069焼土遺構、出土遺物……………	247
第140図	遺構外出土土器(1)……………	……………	195	第176図	SK070焼土遺構、出土遺物(1)…	249
第141図	遺構外出土土器(2)……………	……………	196	第177図	SK070焼土遺構出土遺物(2)……	250
第142図	遺構外出土土器(3)……………	……………	197	第178図	SK071土坑、出土遺物……………	252
第143図	遺構外出土土器(4)……………	……………	198	第179図	SK072土坑、出土遺物……………	252
第144図	遺構外出土土器(5)……………	……………	199	第180図	SK073土坑、出土遺物……………	252
第145図	遺構外出土土器(6)……………	……………	200	第181図	遺構外出土遺物(1)……………	254
第146図	遺構外出土土器(7)……………	……………	201	第182図	遺構外出土遺物(2)……………	255
第147図	奈良・平安時代遺構全体図	……………	202	第183図	中・近世遺構全体図……………	262
第148図	SI018住居跡、出土遺物……………	……………	204			
第149図	SI019住居跡、出土遺物……………	……………	205			

第184図	SK074・075・076火葬遺構	263
第185図	SK077～080土坑、SD001～005溝状遺構	265
第186図	SK081・082・083土坑、SD007溝状遺構	267
第187図	SD008溝状遺構	268
第188図	SD006・009・010溝状遺構	268
第189図	SD011～017溝状遺構	269
第190図	中・近世の遺物	272
第191図	縄文時代早期遺構分布	274
第192図	縄文時代後期遺構分布	274
第193図	縄文時代後期遺構時期別変遷図(1)	276

第194図	縄文時代後期遺構時期別変遷図(2)	277
第195図	人骨個別位置図	279
第196図	SI008及び人骨安置施設概念図	280
第197図	人骨個体A変位概念図	282
第198図	思井上ノ内遺跡奈良・平安時代集落変遷図	285
第199図	下総国府・国分二寺と思井上ノ内遺跡・思井堀ノ内遺跡の位置	290
第200図	『千葉県史』で想定された805年～10・11世紀の駅路	291
第201図	思井上ノ内遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡分布	293

## 表目次

第1表	思井上ノ内遺跡(1)～(6)調査一覧表	4
第2表	遺構番号新旧対照表	8
第3表	周辺遺跡一覧	17
第4表	L56ブロック石材別石器組成表	21
第5表	L56ブロック石材別礫組成表	22
第6表	L56ブロック接合資料等一覧	23
第7表	L56ブロック接合資料一覧	24
第8表	J56ブロック石材別礫組成表	42
第9表	J56ブロック石材別石器組成表	43
第10表	I56ブロック石材別石器組成表	45
第11表	I56ブロック石材別礫組成表	45
第12表	思井上ノ内遺跡貝サンプル一覧	120
第13表	貝類種名一覧	125
第14表	貝類同定結果	126
第15表	奈良・平安時代土器観察表	257
第16表	奈良・平安時代遺構の時期区分	284
第17表	流山運動公園周辺の奈良・平安時代遺跡と遺構数	292

第18表	思井上ノ内遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡	294
第19表	骨破片部位同定(1)	302
第20表	骨破片部位同定(2)	303
第21表	NaS61下顎骨に伴う歯牙群	304
第22表	NaS17下顎骨に伴う歯牙群	304
第23表	NaS18下顎骨に伴う歯牙群	304
第24表	遊離歯牙群	304
第25表	SI005(P1)出土魚類遺体一覧	317
第26表	SI005(P15)出土魚類遺体一覧(1)	317
第27表	SI005(P15)出土魚類遺体一覧(2)	318
第28表	SI006(貝ブロックA)出土魚類遺体一覧	318
第29表	SI006(貝ブロックB)出土魚類遺体一覧(1)	318
第30表	SI006(貝ブロックB)出土魚類遺体一覧(2)	319

第31表	SI008出土魚類遺体一覧	319	第46表	SK022出土魚類遺体一覧	327
第32表	SI014出土魚類遺体一覧	319	第47表	SK023出土魚類遺体一覧	328
第33表	SI015出土魚類遺体一覧	319	第48表	SK024出土魚類遺体一覧	328
第34表	SI017出土魚類遺体一覧	320	第49表	SK030出土魚類遺体一覧	328
第35表	SK005出土魚類遺体一覧	321	第50表	SK031出土魚類遺体一覧	328
第36表	SK012出土魚類遺体一覧(1)	321	第51表	SK032出土魚類遺体一覧	328
第37表	SK012出土魚類遺体一覧(2)	322	第52表	SK034出土魚類遺体一覧	329
第38表	SK014出土魚類遺体一覧(1)	322	第53表	SK051出土魚類遺体一覧	329
第39表	SK014出土魚類遺体一覧(2)	323	第54表	SK056出土魚類遺体一覧	329
第40表	SK015出土魚類遺体一覧(1)	323	第55表	遺構外出土魚類遺体一覧	329
第41表	SK015出土魚類遺体一覧(2)	324	第56表	両生・爬虫類遺体一覧	329
第42表	SK015出土魚類遺体一覧(3)	325	第57表	鳥類遺体一覧	330
第43表	SK015出土魚類遺体一覧(4)	326	第58表	哺乳類遺体一覧	331
第44表	SK016出土魚類遺体一覧(1)	326	第59表	微小貝一覧(1)	334
第45表	SK016出土魚類遺体一覧(2)	327	第60表	微小貝一覧(2)	335

## 図版目次

巻頭図版	思井上ノ内遺跡空中写真(北から)	SI008
	思井上ノ内遺跡奈良・平安時代土器	SI008貝ブロックA
		SI008人骨出土状況
図版1	遺跡周辺航空写真	図版4 SI011
図版2	K57・L57グリッド付近調査前状況	SI012
	上層確認調査状況(1)	SI013
	上層確認調査状況(2)	SI014
	上層確認調査状況(3)	SI014炉
	SK049調査状況	SI015・SK066
	土偶出土状況	SI015貝層検出状況
	SI001	SI015・SK066土層断面
	SI002	図版5 SI016
図版3	SI004	SI017
	SI004伏鉢	SI017遺物出土状況
	SI005貝層断面(1)	SI017炉
	SI005貝層断面(2)	SK001
	SI007	SK008



	SK009		SK060
	SK010		SK061
図版6	SK012		SK062
	SK012土層断面		SK063
	SK014		SK064
	SK014遺物出土状況	図版11	調査区中央部航空写真(1)
	SK015		調査区中央部航空写真(2)
	SK016		SB001・002・009・010周辺航空写真
	SK017	図版12	SI018
	SK018・SK019		SI019
図版7	SK020		SI022
	SK021		SI023
	SK022		SI023遺物出土状況
	SK023		SI023カマド
	SK024		SI024
	SK024具層検出状況		SI025
	SK025	図版13	SI025
	SK026		SI026
図版8	SK028		SI026カマド遺物出土状況
	SK031・SK032		SI027
	SK034		SI027カマド遺物出土状況
	SK034具層断面		SI028
	SK036		SI029・SB009
	SK037		SI029
	SK039	図版14	SI029円面硯出土状況(1)
	SK040		SI029円面硯出土状況(2)
図版9	SK011・SK042・SK043		SI030
	SK044		SI031
	SK045		SI031遺物出土状況
	SK048		SI031カマド
	SK049		SI033
	SK050		SB003
	SK051	図版15	SB003
	SK051具層断面		SB004
図版10	SK055		SB005・SB006
	SK056		SB005
	SK027・SK058・SK059		SB006

	SB007		遺構出土縄文土器 (5)
	SB008	図版29	遺構出土縄文土器 (6)
	SB009		遺構出土縄文土器 (7)
図版16	SI029・SB010	図版30	遺構出土縄文土器 (8)
	SK067		遺構出土縄文土器 (9)
	SK067焼土検出状況	図版31	遺構出土縄文土器 (10)
	SK068		遺構出土縄文土器 (11)
	SK068焼土検出状況	図版32	遺構出土縄文土器 (12)
	SK069		遺構出土縄文土器 (13)
	SK070	図版33	遺構出土縄文土器 (14)
	SK070遺物出土状況		遺構出土縄文土器 (15)
図版17	SK070遺物出土状況	図版34	遺構出土縄文土器 (16)
	SK071		遺構出土縄文土器 (17)
	SK071遺物出土状況	図版35	遺構外出土縄文土器 (1)
	SK072	図版36	遺構外出土縄文土器 (2)
	SK073	図版37	遺構外出土縄文土器 (3)
	SK073遺物出土状況		縄文土製品・石製品
図版18	SD007A～D	図版38	縄文時代石器 (1)
	SD012		縄文時代石器 (2)
	SD013	図版39	縄文時代石器 (3)
図版19	SK075		縄文時代石器 (4)
	SK076	図版40	縄文時代石器 (5)
	SK081		縄文時代石器 (6)
	SK082	図版41	縄文時代石器 (7)
	SD014		縄文時代石器 (8)
	SD015	図版42	奈良・平安時代土器 (1)
	SD016	図版43	奈良・平安時代土器 (2)
	SD017	図版44	奈良・平安時代土器 (3)
図版20	旧石器時代出土遺物 (1)	図版45	奈良・平安時代土器 (4)
図版21	旧石器時代出土遺物 (2)	図版46	奈良・平安時代土器 (5)・文字記号資料 (1)
図版22	旧石器時代出土遺物 (3)		
図版23	旧石器時代出土遺物 (4)	図版47	奈良・平安時代文字・記号資料 (2)
図版24	旧石器時代出土遺物 (5)		砥石・土製紡錘車・輪羽口・土製支脚
図版25	遺構出土縄文土器 (1)	図版48	鉄製品
図版26	遺構出土縄文土器 (2)	図版49	奈良・平安時代土器転用視・転用品・鉄滓
図版27	遺構出土縄文土器 (3)	図版50	中・近世遺物
図版28	遺構出土縄文土器 (4)	図版51	SI008貝ブロックA出土人骨 (1)

図版52 SI008貝ブロックA出土人骨 (2)

図版53 魚類遺体 (微小資料) (1)

図版54 魚類遺体 (微小資料) (2)

図版55 魚類遺体 (微小資料) (3)

図版56 魚類遺体 (微小資料) (4)

図版57 魚類遺体 (微小資料) (5)

図版58 魚類遺体 (微小資料) (6)

図版59 魚類遺体 (微小資料) (7)

図版60 魚類遺体 (微小資料) (8)

図版61 魚類遺体 (微小資料) (9)

図版62 魚類遺体 (微小資料) (10)

図版63 魚類遺体 (11)

図版64 両生・爬虫類、鳥類遺体、哺乳類遺体 (1)

図版65 哺乳類遺体 (2)

図版66 微小貝類

文中写真1 人骨拡大写真 (椎骨)

文中写真2 人骨拡大写真 (寛骨)

文中写真3 大腿骨捻転状況

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、常磐新線（現・つくばエクスプレス）の建設に関連して流山運動公園周辺地区土地区画整理事業を計画し、事業実施に先立って「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会教育長あてに提出した。千葉県教育委員会は、事業予定地内に27か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認して、その旨回答した（第1図）。

その後、事業を受け継いだ千葉県県土整備部と千葉県教育委員会は、事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて慎重な協議を重ね、現状保存及び計画変更が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとした。記録保存のための発掘調査は、財団法人千葉県文化財センター（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）が実施することとなり、千葉県県土整備部との間に委託契約が締結され、平成9年度から発掘調査が開始された。

思井上ノ内遺跡は、流山市思井上ノ内418-1ほかに所在し、面積は19,000㎡を測る（第2図）。このうち約45%にあたる8,629㎡について、平成10年度から平成14年度まで、準備の整った地点から6回にわたって発掘調査を行った。

上層については、平成10年度と平成11年度にそれぞれ第1次調査2,318㎡、第2次調査343㎡の確認調査を行い、遺構・遺物の検出された調査範囲及び周辺を含む計4,338㎡について、平成13年度に本調査を行った（第3次調査）。また、平成14年度には、第4～6次調査を実施した。第4次調査として、隣接する部分1,693㎡についての本調査、第5次調査として、2,003㎡についての確認調査とそのうち1,660㎡の本調査、第6次調査として平成10年度確認調査範囲のうち152㎡についての本調査を、それぞれ行った（第3図）。

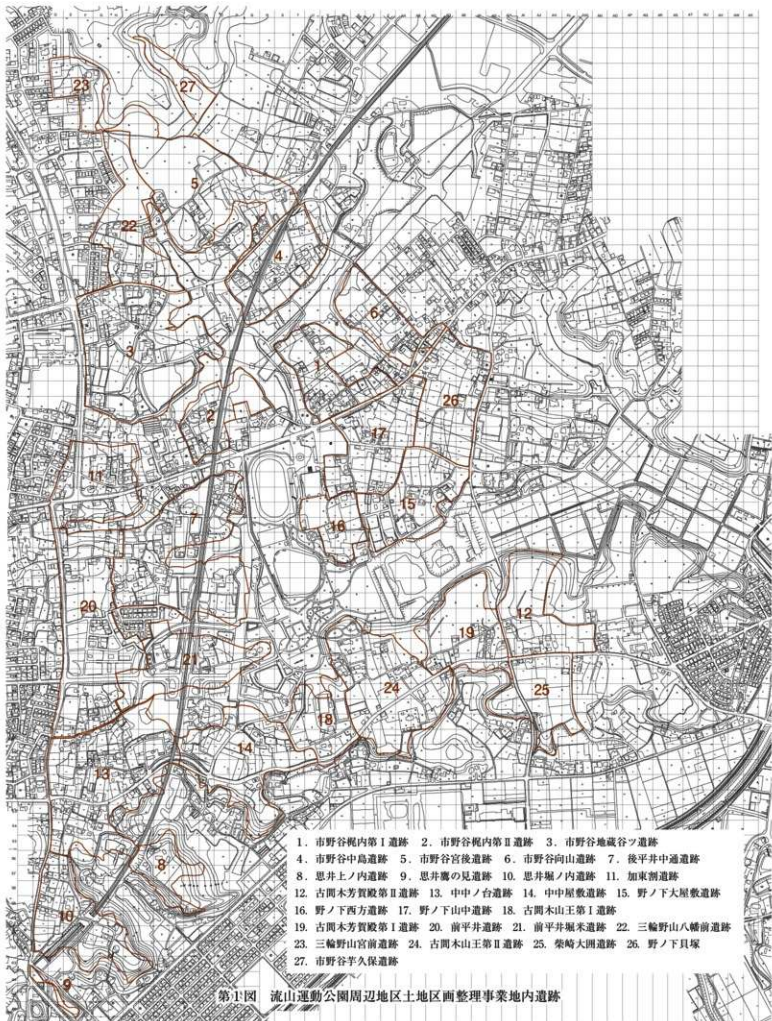
下層については、第1・3～6次調査でそれぞれ対象面積の5%前後の確認調査を行ったところ、第3～5次調査において旧石器時代の石器群が出土した。ただし、いずれにおいても出土遺物の広がりが限定的であったことから、確認調査をもって終了した（第4図）。

なお、発掘調査にあたっては、確認調査・本調査の別に関係なく、調査次について第1次調査を「(1)」、第6次調査を「(6)」のように表現することとした。「(1)」～「(6)」の表記は調査区域を限定していないため、平面的に重複する場合がある。

区画整理地内における遺跡の調査成果としては、これまでに思井堀ノ内遺跡について、中世編及び旧石器～奈良・平安時代編の2冊の報告書が、財団法人千葉県教育振興財団（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）により上梓されている<sup>[1]・[2]</sup>。本書はその3冊目となる。

思井上ノ内遺跡の整理作業は、平成20年度から平成24年度まで公益財団法人千葉県教育振興財団が、さらに平成26年度から平成27年度まで、千葉県教育庁教育振興部文化財課が引き継いで実施し、平成27年度に報告書刊行に至った。

発掘調査及び整理作業に関わった各年度の担当職員、作業内容等は第1表のとおりである。





第2図 思井上ノ内遺跡の調査範囲と地形 (S=1/4,000)

第1表 思井上ノ内遺跡(1)～(6)調査一覧表

## 【発掘調査】

調査次	年度	調査期間	調査体制	担当者	対象面積 (㎡)	確認調査(㎡)		本調査(㎡)		
						上層	下層	上層	下層	
(1)	平成10	H11.2.1～H11.2.25	財団法人千葉県文化財センター 西部調査事務所	調査部長 沼澤豊 所長 坂本定実	宇井 恭洋一	2,318	264/2,318	20/443	-	0
(2)	平成11	H12.2.2～H12.2.10	財団法人千葉県文化財センター 西部調査事務所	調査部長 沼澤豊 所長 及川淳一	研究員 廣瀬和之 研究員 山田貴久	343	34/343	-/-	-	-
(3)	平成13	H13.4.5～H13.4.29	財団法人千葉県文化財センター 西部調査事務所	調査部長兼企画課長 佐久間豊 所長 田嶋浩	研究員 栗石圭一 研究員 沖松信隆	4,338	-/-	168/4,338	4,338	0
(4)	平成14	H14.4.4～H14.5.31	財団法人千葉県文化財センター 西部調査事務所	調査部長兼企画課長 森本剛 所長 田嶋浩	研究員 豊田秀治	1,693	-/-	140/1,693	1,693	0
(5)	平成14	H14.6.3～H14.9.13	財団法人千葉県文化財センター 西部調査事務所	調査部長兼企画課長 森本剛 所長 田嶋浩	研究員 豊田秀治	2,003	200/2,003	112/2,003	1,660	0
(6)	平成14	H14.12.2～H14.12.20	財団法人千葉県文化財センター 西部調査事務所	調査部長兼企画課長 森本剛 所長 田嶋浩	研究員 豊田秀治	152	-/-	8/152	152	0

## 【整理作業】

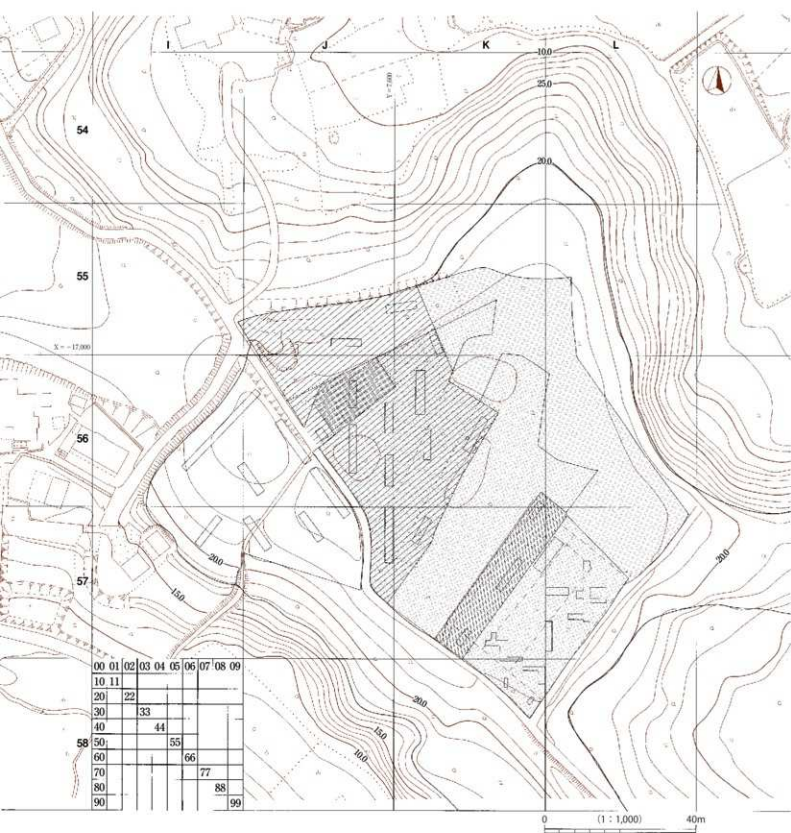
遺跡名	年度	期間	調査体制	担当者	内容	
思井上ノ内 (1)～(6)	平成20	H20.4.1～H21.3.31	財団法人千葉県教育振興財団 財団	調査研究部長 大原正義 所長 及川淳一	水洗・洋記	
	平成22	H22.9.1～H23.3.31	財団法人千葉県教育振興財団 財団	調査研究部長 及川淳一 所長 野口行雄	主査研究員 南宮信太郎 上層研究員 豊田貴司 整理技師 平井真紀子	記録整理、分類、接合、実測
	平成23	H23.8.1～H24.3.31	財団法人千葉県教育振興財団 財団	調査研究部長 及川淳一 副部長兼整理課長 西川博之	上層研究員 上守春明 上層研究員 赤川道行 上層研究員 新田浩二	選別(目録)、実測、接合、拓本、トレース、撮影、抄写、図版、原稿
	平成24	H24.10.1～H24.10.31 H25.2.1～H25.3.31	公益財団法人千葉県教育振興財団 財団	調査研究部長 関1建彦 調査2課長 橋本勝徳	主任上層文化財主事 高倉幸徳 主任上層文化財主事 山田貴久 主任上層文化財主事 四輪隆 上層文化財主事 西川博之	計測、母片分類、素面作成、接合、実測、トレース、拓本、撮影、図版、原稿
	平成26	H26.4.1～H27.3.31	千葉県教育庁 教育振興部文化財課	課長 水沼洋郎 副課長 大倉けい子 副課長 金丸風 庶長 藤原孝之	主任上層文化財主事 加藤正弘 主任上層文化財主事 李淳伊織 上層文化財主事 高野友子	抄写、図版、原稿、編纂、取納整理
	平成27	H27.4.1～H28.3.31	千葉県教育庁 教育振興部文化財課	副課長 大倉けい子 副課長 大野孝男 庶長 藤原孝之	主任上層文化財主事 安井舞一	抄写、取納整理

## 2 調査の方法と調査概要

調査にあたっては、区画整理事業地内の遺跡を網羅するように、日本測地系に基づくグリッド設定を行った。X = -14,800m、Y = +7,600mを起点とする40m×40mの方眼を大グリッドとし、北から南へ1～67、西から東へA～Z及びAA～ANとし、大グリッドはアルファベットと数字の組み合わせにより「C2」「K11」のように表示することとした。今回報告する思井上ノ内遺跡(1)～(6)は、大グリッドで示すとI55～57・J55～57・K55～58・L55～58グリッドの範囲にあたる(第1・2図)。大グリッドの中は、更に4m×4mの小グリッドに100分割し、小グリッドは北西角から東へ00、01、02…、南へ00、10、20…とし、南東角を99とした。これにより、大グリッドとの組み合わせで、例えば「P49-25」のように小地区名を表示することとした(第3図)。

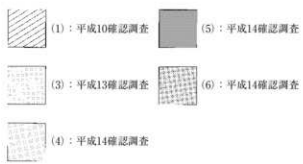
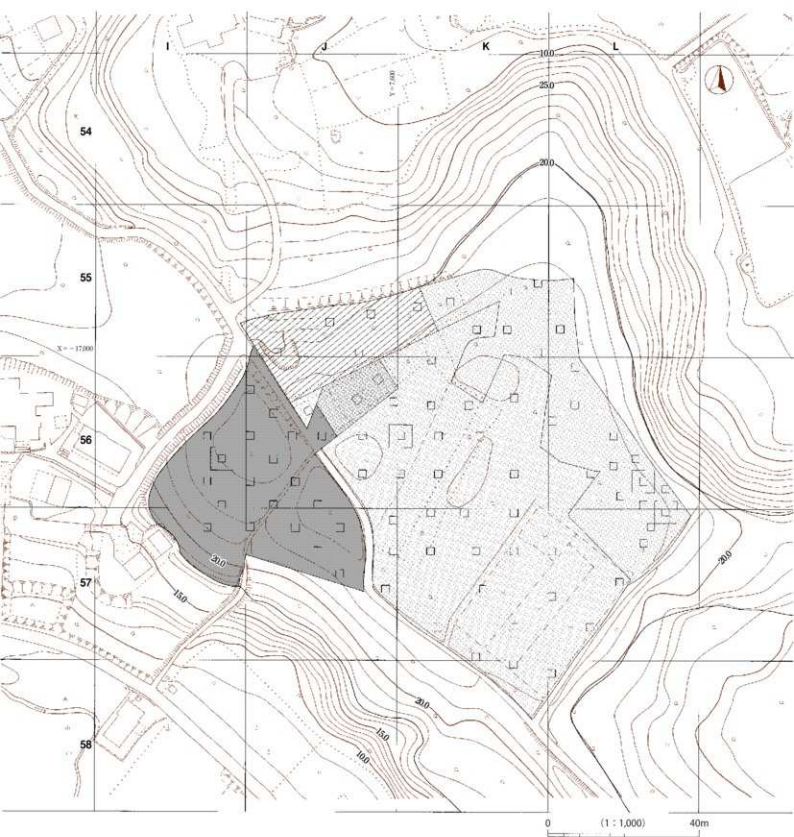
遺構名については、6次にわたる調査全体を通して、遺構の時代や種別に関係なく3桁の数字の連番とし、遺物への注記も調査時の遺構名で行った。しかし整理作業を進める中で検出された遺構の検証を行った結果、各調査次に付された遺構名をそのまま報告書に掲載すると混乱を招く恐れがあることから、全ての遺構を時代毎・種別毎に分類し、遺構種別記号と3桁の数字とを組み合わせた遺構名を新たに縄文時代から付け直すこととした。遺構種別記号は凡例に示したとおりであり、調査時と本報告における遺構名対照表は第2表のとおりである。

調査の結果、検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡17軒、住居跡の可能性はあるが炉底の焼け具合や不規則な配列のため住居跡と判断するには至らなかった遺構7基、土坑20基、貝ブロック8か所、炉穴25基、陥穴6基、奈良・平安時代の竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡10棟、土器焼成遺構・焼土遺構4基、土坑3基、中・近世の溝状遺構・区画整形遺構21条、火葬遺構3基、土坑7基となった(第5図)。

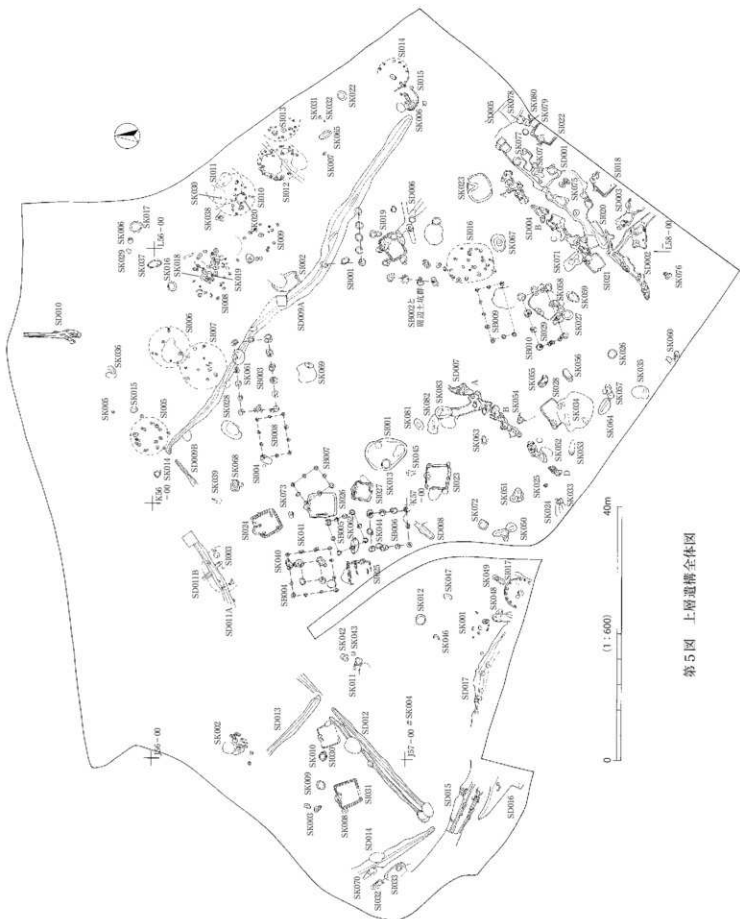


第3図 調査次別範囲と上層確認調査トレンチ配置及びグリッド配置





第4図 調査次別範囲と下層確認調査トレンチ配置



第5図 上層遺構全体図

第2表 遺構番号新旧対照表

【縄文時代】

新遺構名	旧遺構名	種別
SI001	001	竪穴住居跡
SI002	113	竪穴住居跡
SI003	212	竪穴住居跡
SI004	040A・071	竪穴住居跡
SI005	068,076,K55-02P1~P6,K56-02P1~P6,K56-03P1,K55-03P1・P2の一部	竪穴住居跡
SI006	142・143・144・140・P1	竪穴住居跡
SI007	140	竪穴住居跡
SI008	135・145・146	竪穴住居跡
SI009	167	竪穴住居跡
SI010	156	竪穴住居跡
SI011	171	竪穴住居跡
SI012	163	竪穴住居跡
SI013	162	竪穴住居跡
SI014	150	竪穴住居跡
SI015	170,173ピット群	竪穴住居跡
SI016	004・005・007・008・009のピット 及びK57-29を中心としたピット	竪穴住居跡
SI017	177	竪穴住居跡
SK001	180	如路・ピット群・ピット
SK002	176	如路・ピット群・ピット
SK003	193	如路・ピット群・ピット
SK004	198	如路・ピット群・ピット
SK005	091	如路・ピット群・ピット
SK006	152B	如路・ピット群・ピット
SK007	168	如路・ピット群・ピット
SK008	208	土坑
SK009	192	土坑
SK010	190	土坑
SK011	185C	土坑
SK012	178	土坑
SK013	001A	土坑
SK014	080	土坑
SK015	080	土坑
SK016	141	土坑
SK017	154	土坑
SK018	146P.9	土坑
SK019	146A	土坑
SK020	156A	土坑
SK021	162A	土坑
SK022	166	土坑
SK023	023	土坑
SK024	074	土坑
SK025	073	土坑
SK026	125	土坑
SK027	137	土坑
SK028	066	土坑
SK029	152A	貝ブロック
SK030	172	貝ブロック
SK031	164	貝ブロック
SK032	165	貝ブロック
SK033	075	貝ブロック
SK034	005・129	貝ブロック
SK035	126	貝ブロック
SK036	092	仰穴
SK037	159	仰穴
SK038	161	仰穴
SK039	050	仰穴
SK040	082	仰穴
SK041	059	仰穴
SK042	185B	仰穴
SK043	185A	仰穴
SK044	083	仰穴
SK045	045	仰穴
SK046	184E	仰穴
SK047	184D	仰穴
SK048	179・186	仰穴
SK049	181	仰穴
SK050	043	仰穴
SK051	041	仰穴
SK052	104	仰穴
SK053	130	仰穴
SK054	100	仰穴
SK055	132	仰穴
SK056	131	仰穴
SK057	127	仰穴
SK058	133	仰穴
SK059	138	仰穴

新遺構名	旧遺構名	種別
SK060	109	仰穴
SK061	072	陥穴
SK062	079	陥穴
SK063	081	陥穴
SK064	128	陥穴
SK065	169	陥穴
SK066	170A	陥穴

【奈良・平安時代】

新遺構名	旧遺構名	種別
SI018	002	竪穴住居跡
SI019	011A	竪穴住居跡
SI020	027	竪穴住居跡
SI021	029	竪穴住居跡
SI022	030	竪穴住居跡
SI023	032	竪穴住居跡
SI024	036	竪穴住居跡
SI025	037	竪穴住居跡
SI026	041	竪穴住居跡
SI027	042A	竪穴住居跡
SI028	096	竪穴住居跡
SI029	110	竪穴住居跡
SI030	187	竪穴住居跡
SI031	201	竪穴住居跡
SI032	207	竪穴住居跡
SI033	209	竪穴住居跡
SI001	012	竪立柱建物跡
SI002	010P1・011B・014・015・016・017・018・019・114A・114B・115・124・134・136	竪立柱建物跡
SI003	046	竪立柱建物跡
SI004	062	竪立柱建物跡
SI005	063	竪立柱建物跡
SI006	064	竪立柱建物跡
SI007	069	竪立柱建物跡
SI008	086	竪立柱建物跡
SI009	111	竪立柱建物跡
SI010	112	竪立柱建物跡
SK067	001	土器焼成遺構・焼土遺構
SK068	047	土器焼成遺構・焼土遺構
SK069	093	土器焼成遺構・焼土遺構
SK070	204	土器焼成遺構・焼土遺構
SK071	028	土坑
SK072	038	土坑
SK073	088	土坑

【中・近世】

新遺構名	旧遺構名	種別
SD001	003	溝状遺構・区画整形遺構
SD002	025	溝状遺構・区画整形遺構
SD003	024	溝状遺構・区画整形遺構
SD004	A・B・C	溝状遺構・区画整形遺構
SD005	120,121	溝状遺構・区画整形遺構
SD006	115	溝状遺構・区画整形遺構
SD007	A	溝状遺構・区画整形遺構
SD007B	103	溝状遺構・区画整形遺構
SD007C	105	溝状遺構・区画整形遺構
SD007D	106	溝状遺構・区画整形遺構
SD008	070	溝状遺構・区画整形遺構
SD009	A	溝状遺構・区画整形遺構
SD009B	049	溝状遺構・区画整形遺構
SD010	155	溝状遺構・区画整形遺構
SD011	A・B	溝状遺構・区画整形遺構
SD012	201	溝状遺構・区画整形遺構
SD013	194	溝状遺構・区画整形遺構
SD014	202	溝状遺構・区画整形遺構
SD015	205	溝状遺構・区画整形遺構
SD016	206	溝状遺構・区画整形遺構
SD017	183	溝状遺構・区画整形遺構
SK074	003A	火葬遺構
SK075	003B	火葬遺構
SK076	007	火葬遺構
SK077	123	土坑
SK078	117	土坑
SK079	122	土坑
SK080	119	土坑
SK081	097	土坑
SK082	099	土坑
SK083	101	土坑

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の地理的環境

思井上ノ内遺跡は、流山市思井字上ノ内に所在している（第6図）。流山市は千葉県北西部に位置し、江戸川に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接している。遺跡はこの流山市の南西部、標高235mの下総台地上に立地している。台地の西側直下には江戸川が流れ東京湾へ注いでおり、南側は松戸市との境をなす支流の坂川が流れている。遺跡の立地する台地は、東側の下総台地を開析して江戸川や坂川の流れる古東京湾沿岸に形成された広い低地へと半島状に突出す形状を呈しており、さらに両河川に注ぐ小支谷によって複雑に開析された舌状台地が連なる。これらの舌状台地上はほぼ全て埋蔵文化財埋蔵地であることが確認されており、思井上ノ内遺跡は坂川に面した南東向きの舌状台地上に立地する。既に報告済みの思井堀ノ内遺跡は、南西側に隣接する舌状台地上に位置している。背面の台地西側は同様の舌状台地を介して江戸川を望める地形にあり、当遺跡は西側の江戸川と南東側の坂川、そして台地下に広がる低地をあたかも眼下に納める位置にあると言ってもよい。遺跡の南側を流れる坂川についてみると、遺跡付近から南西へ約3.5kmの地点で江戸川へと合流する小河川であるが、沿岸の坂川低地はこの地域では最大規模の開析谷であり、東側に広がる下総台地へと複雑に深く入り込んでいる。このためその谷頭は遺跡の北東側約7.5kmにある手賀沼と、そこに注ぐ小河川に接するような地点にまで延びている。ちなみに遺跡地から東側そして北側の台地へと入り込む坂川の支谷と手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は分水嶺をなし、台地の幅がわずかに300m～500mである。手賀沼は利根川（古鬼怒川）、霞ヶ浦（香取海）を経て太平洋へと通じる水系にあり、その意味ではこの坂川は太平洋水系の手賀沼と東京湾を結ぶ水路のような位置にあると言える。

### 2 周辺の遺跡と歴史的環境

流山市は高度経済成長期から首都圏のベッドタウンとして開発が進められ、数多くの遺跡が調査され失われてきている。それらの調査歴を全て網羅すると膨大なものとなることや、流山市が調査した遺跡のうち三輪野山地区については詳細が不明なため、ここでは流山運動公園の事業地とその周辺を中心に、代表的な調査成果を示してこの地域の歴史的環境を俯瞰したい（第7図、第3表）。

流山市内の旧石器時代の遺跡は近年、運動公園に隣接する流山新市街地の事業地内において著しく資料が増加している。思井堀ノ内遺跡（5）、三輪野山北浦（旧三輪野山第Ⅱ）遺跡（56）<sup>(注3)</sup>、西初石五丁目遺跡（63）<sup>(注4・8・9)</sup>、市野谷入台遺跡（61）<sup>(注5・8)</sup>、市野谷二反田遺跡（58）<sup>(注6)</sup>、大久保遺跡（60）<sup>(注7)</sup>、市野谷向山遺跡（52）<sup>(注7・8)</sup>、東初石六丁目第Ⅰ遺跡（79）<sup>(注7)</sup>、東初石六丁目第Ⅱ遺跡（77）<sup>(注7)</sup>、十太夫第Ⅱ遺跡<sup>(注7)</sup>、市野谷中島遺跡（51）<sup>(注8)</sup>、市野谷半久保遺跡<sup>(注9)</sup>、地図の外になるが桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡、中野久木遺跡、若葉台遺跡、桐ヶ谷南割（上貝塚）遺跡などで石器群が検出されている。思井堀ノ内遺跡ではⅢ層からⅨ層にかけて11ブロック、三輪野山北浦遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて6ブロック、市野谷入台遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて26ブロック、市野谷二反田遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて12ブロック、西初石五丁目遺跡ではⅢ層からⅨ層にかけて6ブロック、大久保遺跡ではⅣ層とⅨ層で41ブロック、市野谷向山遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて22ブロック、東初石六丁目第Ⅰ遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて3ブロック、東初石六丁目第Ⅱ遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて5ブロック、十太夫第Ⅱ遺跡ではⅤ層からⅦ層にかけて1ブロック、市野谷中島遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて1ブロック、市野谷半久保遺跡では



Ⅲ層からⅩ層にかけて46ブロックがそれぞれ調査されている。

縄文時代の遺跡はきわめて多い。早期では思井堀ノ内遺跡で野鳥式から縄島式期を中心とする堅穴住居跡2軒、炉穴35基などが検出されている。三輪野山Ⅲ遺跡(55)<sup>(10)</sup>では縄島式期の堅穴住居跡1軒と炉穴10基が調査されている。炉穴の検出例は数多く、大原神社遺跡(12)<sup>(11)</sup>や平和台遺跡(11)<sup>(12-13)</sup>、三輪野山八重塚Ⅱ遺跡(42)<sup>(14)</sup>、三輪野山八重塚遺跡(43)<sup>(15-16)</sup>、市野谷立野遺跡<sup>(19)</sup>などで報告されている。市野谷立野遺跡ではこのほか早期と思われる大規模な礎群が検出されている。前期では多くの遺跡で集落が調査されている。坂川を隔てた対岸にあたる松戸市の幸田貝塚(83)では、花積下層式期から関山式期を中心とした多数の堅穴住居跡と大規模な貝層が検出されており、当地域における拠点的な集落である。流山市内では主に黒浜式期の遺構が多数確認されており、堅穴住居跡に限っても思井堀ノ内遺跡<sup>(12)</sup>、西初石五丁目遺跡、下花輪荒井前(旧下花輪Ⅱ)遺跡(69)<sup>(17)</sup>、三輪野山八幡前遺跡(旧下屋敷遺跡)(46)<sup>(18)</sup>、加北谷津第Ⅰ遺跡(40)<sup>(19)</sup>、同第Ⅱ遺跡(39)<sup>(20)</sup>、加町畑遺跡(26)<sup>(20-21-22)</sup>、三輪野山八重塚遺跡<sup>(23-24)</sup>、三輪野山北浦遺跡<sup>(23)</sup>、大野西割遺跡(65)<sup>(25)</sup>などで検出されている。県調査分は道路幅に限られているものが多いこと、市調査分は確認調査のみで終了しているものが多いため、遺構群の広がりについては正確な把握が難しい部分があるが、いくつかの遺跡では大規模な集落の存在が想定される。なお、隣接する流山新市街地地区土地区画整理事業地内でも同時期の遺構が検出されており、市野谷芋久保遺跡や市野谷立野遺跡などで堅穴住居跡が確認されているが<sup>(19)</sup>、内陸部に位置するためか全体に遺構数は少なく密度は希薄である。諸磯式期では長崎遺跡(116)<sup>(26)</sup>で貝層を伴う堅穴住居跡から良好な資料が出土している。中期では中葉から後半に多くの遺跡が見られる。野々下元木戸遺跡(119)<sup>(27-28)</sup>と向下遺跡(121)<sup>(29)</sup>は包蔵地としては別々に扱われているが本来は同一の集落跡と考えられるもので、中期後半から後期前葉までの堅穴住居と土坑群、貝ブロックを伴うピットなどが検出されている。名都借宮ノ脇遺跡(名都借Ⅱ遺跡)(129)<sup>(30)</sup>では中期中葉の堅穴住居跡とフラスコ状土坑が検出されている。また地図の外になるが、中野久木谷頭遺跡では中峠式期から加曾利E式前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。中期末から後期初頭にかけては一時的な遺跡数の減少が認められるが、後期前葉の堀之内Ⅰ式以降は多くの遺跡が所在する。思井上ノ内遺跡が位置する江戸川と坂川に挟まれた台地の南端(先端)部には鱈ヶ崎(前ヶ崎)貝塚(10)が存在する。1950年代初頭に酒詰仲男氏と岡田茂弘氏に率いられた学習院高等科史学部が調査を実施し、堀之内式期から加曾利B式期にかけての遺構群が濃密に分布することが明らかになっている<sup>(31)</sup>。目を北に転じると、市野谷二反田遺跡<sup>(16)</sup>では後期初頭の称名寺式期を中心とする堅穴住居跡が13軒検出されているほか、大久保遺跡<sup>(19)</sup>ではやはり称名寺式の埋設土器を伴う堅穴住居跡が検出されており、後期初頭は内陸部の遺跡で集落が営まれる傾向にある。古間木菜英木谷遺跡(37)<sup>(32)</sup>では部分的な調査ではあるが後期の堅穴住居跡が検出され、集落の存在が想定される。三輪野山貝塚(45)<sup>(33-34-35)</sup>では後期から晩期にかけて100軒を超える堅穴住居跡、5箇所の貝層、20基余りの土坑墓群、晩期中葉と考えられる道路状遺構、水場遺構、埋葬人骨などが検出されているほか、環状に構築された堅穴住居跡をはじめとする遺構群に囲まれるようにすり鉢状に削られた窪地が存在する。削られた土砂は周囲に盛り上げられたと考えられ、いわゆる環状盛土と中央窪地の関係をよく示す成果である。三輪野山貝塚に関連すると思われる遺構は周辺遺跡からも検出されており、三輪野山宮前遺跡(54)<sup>(36)</sup>などで土坑群が検出されている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚のほか、野々下貝塚(33)<sup>(37-38)</sup>、上貝塚貝塚(139)<sup>(3)</sup>、地図の外になるが上新宿貝塚は大規模な環状貝塚として知

られている。いずれの貝塚も後期前葉の堀之内式期あたりから形成が開始され、晩期中頃まで存続するのが確認されているが、晩期末頃は遺構・遺物ともほとんどみられなくなる。

弥生時代は遺跡の分布が希薄である。流山市域では江戸川流域の三輪野山北浦遺跡で中期の須和田式土器が出土し、加村台遺跡(25)と下花輪荒井前遺跡で宮の台式期の住居跡が検出されている程度である。その中で加村台遺跡では環濠と推測されるV字溝が検出されている。坂川流域では対岸の松戸市内で中芝遺跡(84)、道六神遺跡(85)、原の山遺跡(88)があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が大きく増加してくる。前期から中期にかけては、江戸川流域では三輪野山地区で三輪野山宮前遺跡、三輪野山第Ⅲ遺跡、三輪野山北浦遺跡等が、また坂川流域では市野谷地区で市野谷宮尻遺跡(62)<sup>(112)</sup>、市野谷入台遺跡、市野谷山遺跡等が各々集落群を形成している。市野谷地区は坂川流域では北側の最も奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。市野谷宮尻遺跡は3世紀中頃から始まる集落遺跡で、前期の竪穴住居跡が90軒検出され、そのうちの1軒から東日本で最も古い墨書土器が出土している。市野谷入台遺跡では前期から中期にかけての竪穴住居跡が35軒検出されているほか、小規模ながら石製模造品の製作跡も検出されており、江戸川流域では最古級に位置づけられる。同じく坂川水系の最奥部に位置する西初石五丁目遺跡では前期の竪穴住居跡が20軒検出されており、そのうち1軒から小形仿製鏡が出土している。野々下元木戸遺跡と向下遺跡からは前期の竪穴住居跡が19軒検出されている。西初石五丁目遺跡や野々下元木戸遺跡・向下遺跡の竪穴住居は比較的短期間の構築にとどまっており、開拓集落的な様相を呈している。後期になると集落遺跡は更に増加し、三輪野山地区や市野谷地区以外にも分布域が広がり、思井上ノ内遺跡に近い江戸川流域の加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡(25)、加町畑遺跡、加北谷津第Ⅰ遺跡、同第Ⅱ遺跡、平和台遺跡等が顕著な集落遺跡群を形成してくる。とりわけ加町畑遺跡は後期の竪穴住居跡74軒のみならず、奈良・平安時代の竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡17棟が検出されており、拠点集落の一つである。一方古墳の分布は顕著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳(64)が、本遺跡の南約500mには前方後円墳の三本松古墳(鱸ヶ崎塚の越遺跡内)が、そして加地区に終末期古墳の北谷津古墳(加北谷津第Ⅱ遺跡内)が所在している。

奈良時代から平安時代になると遺跡は飛躍的に増大する。本遺跡や思井堀ノ内遺跡の所在する思井地区から前平井遺跡(14)や平和台遺跡、加町畑遺跡、三輪野山宮前遺跡の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に集落遺跡が集中している地域である。また三輪野山地区には式内社比定社の茂呂神社が、平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山廃寺(138)<sup>(113)</sup>が位置している。これら遺跡群の様相と関係については第3章にてまとめてあるので、ここでは詳細は省略する。

鎌倉時代以降の中・近世遺跡は比較的多い。このうち城郭跡は江戸川流域で本遺跡北方2.3kmの花輪城跡(67)、坂川対岸の南1.7kmの小金城跡(94)、同東1.7kmと2.2kmにある名都借城跡(124)、前ヶ崎城跡(122)があるが、これらは中世後期の戦国時代に小金城を本拠とした高城氏関係の城跡と考えられている。発掘調査された中・近世遺跡の多くが、地下式坑や土坑墓そして土屋敷跡と考えられてきている台地整形区画等が検出されている中世後期以降の遺跡であり、鎌倉時代から室町時代前半の遺跡は千葉県内の他地域と同様少ない。このうち思井堀ノ内遺跡<sup>(111・114)</sup>からは13世紀から15世紀にかけての掘立柱建物群、方形周溝区画墓、土坑群、地下式坑群が検出されている。特に方形周溝区画墓からは青磁碗・皿、白磁皿、和鏡、円

形木製品、木櫛、菊花形皿などが副葬された成人女性骨が出土している。時期は13世紀後半から14世紀初頭と考えられ、被葬者は13世紀台に当地を支配していた地頭矢木式部大夫胤家の妻である可能性が指摘されている。なお、掘立柱建物群も同時期と考えられ、矢木氏の居館であると推測される。市野谷入台遺跡では13世紀台と考えられる方形竪穴建物群が検出されている。さらに本遺跡周辺をみると中屋敷遺跡<sup>(11)</sup>、前平井遺跡、前平井堀米遺跡(15)、加東割遺跡(28)<sup>(11)(13)(14)</sup>、加町畑遺跡、西平井根郷遺跡(2)<sup>(11)</sup>、西平井二階畑遺跡(3)<sup>(11)(15)</sup>、三輪野山宮前遺跡<sup>(11)(16)</sup>、三輪野山道六神遺跡(53)<sup>(11)(17)</sup>、三輪野山第Ⅲ遺跡等から台地整形区画、地下式坑、土坑墓等が確認されており、思井地区から西平井、前平井地区、加地区、三輪野山地区が奈良・平安時代に引き続き拠点的な位置を占めていたことを想定させている。

## 注

- (財)千葉県教育振興財団 2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1-流山市思井堀ノ内遺跡(中世編)-』(財)千葉県教育振興財団
- (財)千葉県教育振興財団 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器~奈良・平安時代編)-』(財)千葉県教育振興財団
- (財)千葉県文化財センター 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書-流山市南割遺跡・上貝塚第Ⅱ遺跡・上貝塚第Ⅰ遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡-』(財)千葉県文化財センター  
なお、この報告書に掲載されている三輪野山第Ⅱ遺跡の調査範囲は、現在の三輪野山北浦遺跡と三輪野山道六神遺跡の2遺跡にまたがっている。また、下花輪第Ⅲ遺跡は現在桐ヶ谷浅間後遺跡と呼称されている。
- (財)千葉県教育振興財団 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市西初石五丁目遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- (財)千葉県教育振興財団 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3-流山市市野谷入台遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- (財)千葉県教育振興財団 2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4-流山市市野谷二反田遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- (財)千葉県教育振興財団 2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5-流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅰ遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡-』(財)千葉県教育振興財団
- (公財)千葉県教育振興財団 2013『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書6-流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡-旧石器時代編』(公財)千葉県教育振興財団
- (公財)千葉県教育振興財団 2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7-流山市市野谷宇久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ遺跡(上層)・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡-』(公財)千葉県教育振興財団
- 流山市教育委員会 1988『千葉県流山市三輪野山第Ⅲ遺跡』流山市教育委員会
- 山武考古学研究所 1982『大原神社遺跡』山武考古学研究所
- 流山市教育委員会 1993『千葉県流山市平和台遺跡発掘調査概報』流山市教育委員会
- 流山市教育委員会 2003『1. 平和台遺跡(2)』『平成13年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会

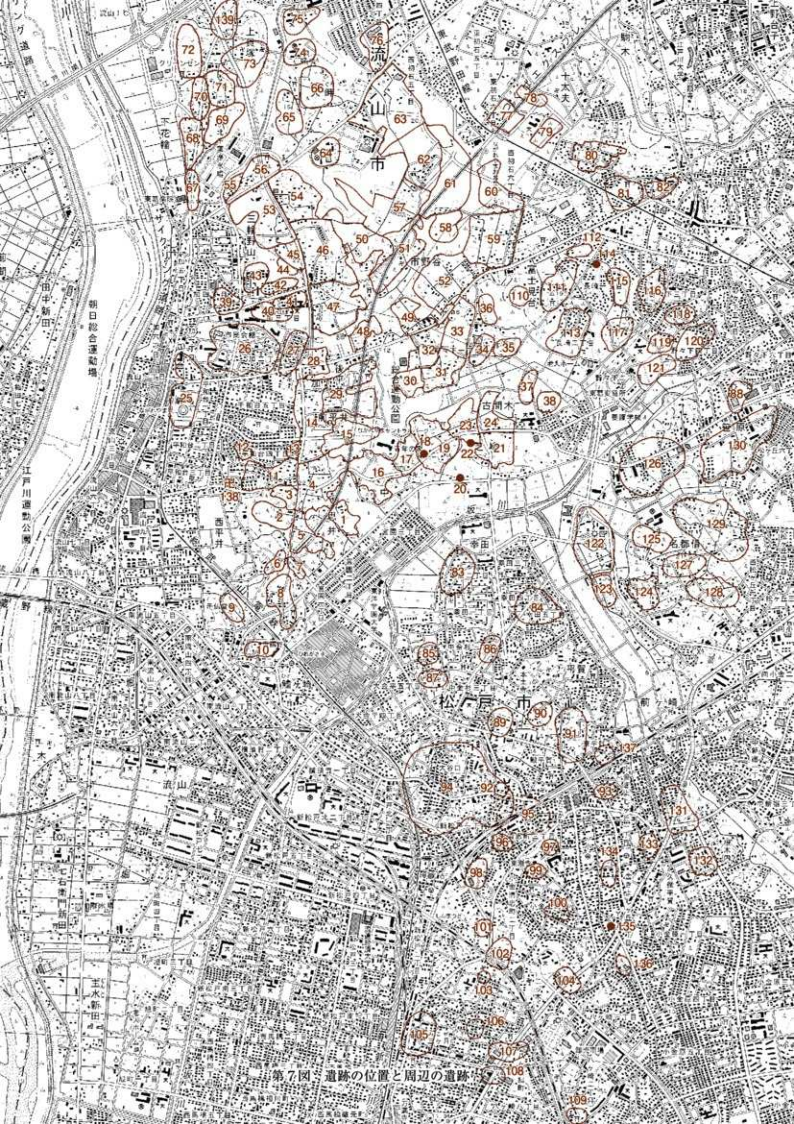


- 14 流山市教育委員会 1985『千葉県流山市三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡』流山市教育委員会
- 15 三輪野山八重塚遺跡調査会 1982『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡』三輪野山八重塚遺跡調査会
- 16 流山市遺跡調査会 1985『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡B地点』流山市遺跡調査会
- 17 (財)千葉県教育振興財団 2010『流山市下花輪荒井前遺跡—高度浄水施設建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書—』(財)千葉県教育振興財団
- 18 下屋敷遺跡調査会・流山市教育委員会 1986『流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 19 流山市教育委員会 1989『加地区遺跡群Ⅰ』流山市教育委員会
- 20 流山市教育委員会 1991『加地区遺跡群Ⅱ』流山市教育委員会
- 21 流山市教育委員会 1994『加地区遺跡群Ⅲ』流山市教育委員会
- 22 流山市教育委員会 2000『加地区遺跡群Ⅳ』流山市教育委員会
- 23 流山市教育委員会 1991『Ⅲ. 三輪野山八重塚遺跡F地点』『平成2年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 24 流山市教育委員会 2002『Ⅰ. 三輪野山八重塚遺跡I・J地点』『平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 25 流山市教育委員会 2003『Ⅰ. 大群西割遺跡』『平成14年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 26 流山市遺跡調査会 1985『千葉県流山市長崎遺跡』流山市遺跡調査会
- 27 (株)地域文化財コンサルタント 2009『流山市野々下元木戸遺跡(第3次調査)』(株)地域文化財コンサルタント
- 28 (株)東京航業研究所 2011『流山市野々下元木戸遺跡(第2次調査)』(株)東京航業研究所・流山市教育委員会
- 29 流山市教育委員会・(株)地域文化財研究所 2012『向下遺跡 野々下元木戸遺跡(第4次)』流山市教育委員会
- 30 流山市教育委員会 1989『千葉県流山市名都借第Ⅱ遺跡発掘調査概報』流山市教育委員会
- 31 酒誌伸男・岡田茂弘他 刊行年不詳(1952~1953?)『千葉県前々崎貝塚発掘調査報告』学習院高等科史学部
- 32 流山市教育委員会 1997『Ⅱ. 古間木茶英木谷遺跡』『平成8年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 33 (財)千葉県文化財センター 2001『主要地方道松戸野田線住宅地関連埋蔵文化財調査報告書—流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前—』(財)千葉県文化財センター
- 34 (財)千葉県文化財センター 2004『主要地方道松戸野田線住宅地関連埋蔵文化財調査報告書(2)—流山市三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡—』(財)千葉県文化財センター
- 35 流山市教育委員会 2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市教育委員会
- 36 流山市教育委員会 2010『Ⅱ. 三輪野山宮前遺跡A地点8』『平成21年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 37 (財)千葉県文化財センター 1995『流山市野々下貝塚確認調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 38 流山市教育委員会 2013『Ⅲ. 野々下貝塚』『平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 39 (財)千葉県教育振興財団 2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—流山市野谷尻遺跡—』(財)千葉県教育振興財団

- 40 辻 史郎 1998「119 流山廃寺」『千葉県歴史資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 41 流山市教育委員会 2007「V. 思井堀ノ内遺跡」『平成17年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 42 流山市教育委員会 1998「I. 中中屋敷遺跡」『平成9年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 43 (財)千葉県文化財センター 1997『流山市若宮第Ⅱ遺跡—都市計画道路3・3・2号線（新川南流山線）埋蔵文化財発掘調査報告書—』(財)千葉県文化財センター
- なお、調査範囲は若宮第Ⅱ遺跡から加東割遺跡にまたがっており、中世遺構が検出された部分は加東割遺跡の範囲内に当たる。
- 44 (株)地域文化財研究所 2014『加東割遺跡 3次』(株)地域文化財研究所
- 45 流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室 2004『流山市西平井・鱈ヶ崎地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室
- 46 流山市教育委員会 2011「Ⅲ. 三輪野山宮前遺跡A地点8-2」『平成22年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
- 47 北澤 滋 1998「72 三輪野山遺跡群（三輪野山道六神遺跡B地点）」『千葉県歴史資料編 中世1（考古資料）』千葉県

#### 上記以外の参考文献

- (財)千葉県文化財センター 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V—谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)—』(財)千葉県文化財センター
- 流山市教育委員会 1989『千葉県流山市三輪野山遺跡群—昭和63年度確認調査概報—』流山市教育委員会
- (財)千葉県文化財センター 1994『流山市上新宿貝塚発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- (財)千葉県史料研究財団編 2000『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県
- 流山市立博物館編 2015『ふるさと流山のあゆみ』流山市教育委員会



第7図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第3表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代
1	思井上ノ内遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)、古墳、奈良・平安、中近世
2	西平野根跡遺跡	縄文、中世
3	西平野二階堂遺跡	縄文、中世
4	中中屋敷遺跡	平安、近世
5	思井堀ノ内遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)、古墳(中)、奈良・平安、中近世
6	西平野大崎遺跡	縄文
7	思井堀の見遺跡	縄文(早・前)、古墳、近世
8	榑々崎塚の礎遺跡(三本松古墳)	古墳(後)
9	榑々崎塚の礎台遺跡	古墳(後)
10	榑々崎貝塚	縄文(早・中・後)、平安
11	平和台遺跡	縄文(中)、古墳、平安、中近世
12	大原神社遺跡	縄文(早)、古墳(後)、平安
13	宮本遺跡	縄文(早)、平安
14	前平野遺跡	縄文(前・中)、平安
15	前平野堀米遺跡	古墳(後)、奈良・平安
16	中中屋敷遺跡	縄文(前・中)、平安
17	古間山王第1遺跡	縄文(前)、平安
18	古間山第1塚	近世
19	古間山王第2遺跡	縄文、古墳(後)、奈良・平安
20	芝崎第2号遺跡	古墳
21	芝崎大洲遺跡	縄文(前・中)、古墳、平安
22	芝崎第1号遺跡	古墳
23	古間山芳賀第1遺跡	縄文(前・中)、平安
24	古間山芳賀第2遺跡	縄文(前)、平安
25	加付台遺跡	弥生(中)、古墳(後)、平安、近世
26	加付畑遺跡	縄文、古墳、奈良・平安
27	加古第1遺跡	旧石器、縄文、平安
28	加東畑遺跡	縄文(前)、中近世
29	後平野中浦遺跡	古墳(後)、奈良・平安
30	野々下西方遺跡	縄文(前・中)
31	野々下大原敷遺跡	縄文(後)、平安
32	野々下山中遺跡	縄文(前)、平安
33	野々下貝塚	縄文(前・中・後・晩)
34	野々下根郷第1遺跡	平安
35	野々下根郷第2遺跡	縄文(後)、平安
36	野々下藤原	縄文(後)、近世
37	古間山本栗木谷遺跡	縄文(早・前・後)
38	古間山本栗木田遺跡	縄文(前)
39	加北谷津第2遺跡(北谷津古墳)	縄文、古墳、平安
40	加北谷津第1遺跡	旧石器、縄文、平安
41	加古第3遺跡	縄文、平安
42	三輪野山人家第1遺跡	縄文(早)、平安
43	三輪野山人家第2遺跡	縄文、古墳、平安
44	三輪野山形田遺跡	古墳(後・晩)
45	三輪野山日塚	旧石器、縄文(前・中・後・晩)
46	三輪野山人家前遺跡	縄文、古墳、平安、近世
47	市野谷地蔵谷ノ遺跡	古墳(後)、平安
48	市野谷内第2遺跡	縄文
49	市野谷内第1遺跡	縄文(前・中)、古墳(中・後)
50	市野谷後遺跡	縄文
51	市野谷中島遺跡	縄文(前・中)、平安
52	市野谷向山遺跡	縄文(前・中)、古墳(後)
53	三輪野山道六神遺跡	縄文、古墳、平安、中近世
54	三輪野山宮前遺跡	縄文(前)、古墳(後)、平安、近世
55	三輪野山第5遺跡	縄文、古墳(後)、平安、近世
56	三輪野山北浦遺跡	縄文、縄文(前・後)、古墳、平安、
57	市野谷平久保遺跡	縄文(早)
58	市野谷二反田遺跡	縄文(前)
59	市野谷立野遺跡	縄文(前)、古墳(後)
60	大久保遺跡	縄文(前)
61	市野谷人台遺跡	古墳(前)
62	市野谷宮内遺跡	古墳(後)、奈良・平安
63	西初石5丁遺跡	縄文
64	三輪野山河原古墳	縄文(前)、弥生、古墳(前)
65	大野西原遺跡	縄文(早・中)、古墳(後)、平安
66	大野中ノ原遺跡	縄文(早・前・中)、平安
67	花輪城跡	中世
68	下花輪林下遺跡	縄文(後)、古墳(後)
69	下花輪弁原遺跡	弥生、古墳、平安
70	下花輪西山遺跡	縄文、古墳、中世
71	下花輪荒井遺跡	縄文(中・後)、平安、近世

番号	遺跡名	時代
72	上貝塚大門遺跡	縄文(前・後)、平安
73	榑々谷浅間後遺跡	旧石器、縄文(前・後)、平安
74	大野台遺跡	縄文(前)、古墳、中世
75	西初石依存遺跡	縄文(前・中・後)、近世
76	花山東遺跡	旧石器、縄文、奈良・平安
77	栄初石6丁目第2遺跡	縄文(後)、平安
78	十大第1遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
79	栄初石6丁目第1遺跡	縄文(中)、平安
80	十大第3遺跡	縄文(前)
81	諏訪神社遺跡	縄文(中)
82	榑々木講堂遺跡	縄文(前)
83	幸田貝塚	旧石器、縄文(前・中・後)、古墳
84	中芝遺跡	弥生(後)、古墳(前・中・後)
85	道六神遺跡	縄文(早・前・中・後)、弥生(後)、古墳(後)、奈良・平安
86	太口1(中金)遺跡	縄文(後)、古墳(中)
87	中金杉台遺跡	縄文(後)
88	原の山遺跡	縄文(早・前)、弥生、古墳(中・後)、平安
89	殿平賀遺跡	縄文(後)
90	殿平賀向畑遺跡	縄文(中)
91	東平賀遺跡	旧石器、縄文(前・中・後)、中世
92	殿平賀向山遺跡	旧石器、縄文(早・前)、古墳(前・中・後)
93	東平賀向台遺跡	古墳
94	小金城跡(大谷1(小金城跡))	縄文、古墳、平安、中世
95	小金古城跡	古墳
96	西(小倉)北小倉遺跡	縄文(前・中・後)
97	地外3遺跡	旧石器、縄文(前)
98	榑々ノ上(源の脇)遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(前・中・後)
99	地外(北小金駅付近)(東漸寺)遺跡	縄文(前・後)
100	山王前遺跡	縄文(前・中)
101	畑ノ脇遺跡	縄文(早・前・中)
102	幸谷城跡	中世
103	観音下遺跡	縄文(後)
104	後田遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
105	馬場城跡	中世
106	上野台(二ツ木向台1)遺跡	弥生(後)
107	二ツ木向台(二ツ木二ツ木第2)遺跡	縄文(早・前・後)、弥生(後)、古墳(後)
108	勢至前遺跡	縄文(早・前)、古墳(後)
109	入遺跡	縄文(前)
110	富士見台(1)遺跡	中世
111	長崎大形屋遺跡	縄文(中)、古墳(中・後)
112	富士見台(2)遺跡	縄文(中・後)
113	長崎五斗代遺跡	縄文(中)
114	長崎塚原	近世
115	長崎五斗代遺跡	縄文(前・中)、平安
116	長崎遺跡	縄文(早・前・中・後)
117	長崎金泉院遺跡	古墳、平安
118	野々下長田遺跡	縄文(前・中・後)
119	野々下元木戸遺跡	縄文(中・後)、古墳(後)、平安
120	野々下土手内遺跡	縄文(中)
121	向下遺跡	縄文(中・後)、平安
122	榑々崎城跡	中世
123	榑々崎遺跡	縄文(前)
124	名都常城跡	中世
125	清滝院前遺跡	縄文(前)、平安、近世
126	豊原(1)遺跡	縄文(中)、弥生、古墳
127	名都常磐岩込遺跡	縄文(前・中)、平安
128	名都常磐木遺跡	縄文(中)、平安
129	名都常磐ノ脇遺跡	縄文(中)
130	豊原(2)遺跡	縄文(前)
131	根木内城跡	中近世
132	根木内遺跡	縄文(前・中・後)、中近世
133	行人台遺跡、行人台城跡	縄文(早・前・中)、古墳(中・後)、中世
134	久保平賀(殿平賀向山)遺跡	古墳
135	久保平賀古遺跡	古墳
136	二ツ木向台遺跡	縄文(前)
137	仲通遺跡	旧石器、縄文(前・中)、古墳(中)
138	流山庵寺遺跡	奈良
139	上貝塚貝塚	旧石器、縄文(前・中・後・晩)、中・近世



## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代

#### 1 概要

平成13年度及び平成14年度に実施した3回の調査（思井上ノ内遺跡（3）～（5））によって、旧石器時代の石器群が検出された。ただし、いずれの調査においても出土遺物の広がりが限定的であったことから、確認調査をもって調査を終了している。

調査の結果、3か所の石器集中地点（ブロック）が検出され、出土層準に基づいて、3時期の文化層に分けることができた。

第1文化層は、立川ローム層のⅨ層下部を中心に包含される石器群で、遺跡東端のL56・57グリッドからブロック1か所が検出され、147点の石器・礫が出土した（L56ブロック）。このブロックは、中・小規模の石器群のまとまり（クラスター）が6か所と、その周辺に分布する石器群によって構成される。石器群の内容は、不定形の剥片を素材とする台形石器と剥片類、石核、敲石、礫である。石器石材は青灰色のチャートが主体をなしており、剥片石器全体の86%を占める。これに安山岩、流紋岩、頁岩、ホルンフェルスが少量ずつ含まれている。

第2文化層は、立川ローム層のⅥ層からⅧ層にかけて包含される石器群で、遺跡北西部のJ56、K56グリッドからブロック1か所が検出され、資料総数9点の石器・礫が出土した（J56ブロック）。安山岩及び頁岩による剥片類に焼礫が伴う小規模なブロックである。

第3文化層は、立川ローム層のⅣ層からⅤ層を中心に包含される石器群で、遺跡西端のI56グリッドからブロック1か所が検出され、資料総数9点の石器・礫が出土した（I56ブロック）。資料数が少ないため詳細は不明であるが、箱根畑宿産と想定される黒曜石と県南嶺岡産の頁岩による剥片類に焼礫が伴う小規模なブロックである。

以上の他に、上層遺構やその周辺から、形態的特徴や石器石材、表面の風化状況等から旧石器時代と判断される石器が出土している。

#### 2 遺構と遺物

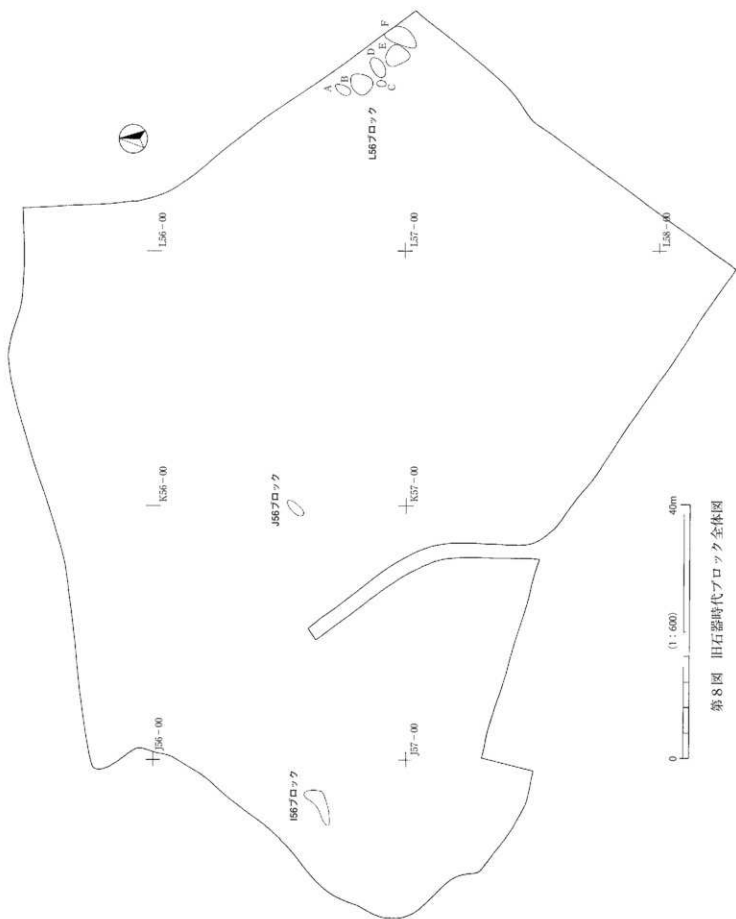
##### (1) 第1文化層

第1文化層は、立川ローム層Ⅸ層を中心に包含される石器群で、第4次調査で検出されたL56ブロックが該当する。

**L56ブロック**（第9～23図、第4～7表、図版20～24）

##### 1) ブロックの概要（第9図～第13図、第4・5表）

L56ブロックは、L56-76・86・87・96-98、L57-07・08グリッドに位置し、長さ13.2m、幅7.2mほどの帯状の範囲に147点の石器・礫が分布する。ただし、この分布状況には粗密があることから、中・小規模のまとまり6か所（クラスターA～F）に区分した。また、いずれのクラスターにも帰属しない資料が7点ある。このような分布の形状は、立川ローム層のⅨ層を中心とする層準においてしばしば見られ



第8図 旧石器時代ブロック全体図

第4表 L56ブロック石材別石器組成表

クラスター	石材	Kn	Tp	Po	Kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	Ge	合計	重量 (g)	
A	安山岩																	3				3	52.0	
	流紋岩		1																			1	6.7	
	チャート		1									2							1			4	60.8	
	小計		2									2							4			8	119.5	
B	安山岩																		1				1	12.3
	頁岩X																		2	1			3	31.3
	チャート																		13	1			14	149.3
	小計																		16	2			18	192.9
C	安山岩														1								1	530.0
	流紋岩														1								1	303.5
	小計														2								2	833.5
D	チャート										1								8				9	64.8
	小計										1								8				9	64.8
E	安山岩																	7					7	134.1
	流紋岩														1								1	1,253.0
	チャート											2							13	3			18	162.9
	砂岩														1								1	183.3
	小計											2			2				20	3			27	1,735.3
F	安山岩																		1				1	7.8
	流紋岩														6								6	1,261.4
	チャート						1				2	3							45	4			55	406.0
	ホルンフェルス										1												1	27.6
小計						1				1	2	3						46	4			63	1,702.8	
周辺部	安山岩																		1				1	5.5
	チャート																		2				2	6.7
	小計																		3				3	12.2
全体	安山岩														1				13				14	741.7
	流紋岩			1											8								9	2,826.6
	頁岩X																		2	1			3	31.3
	チャート			1			1					3	7						82	8			102	850.5
	砂岩														1								1	183.3
	ホルンフェルス											1											1	27.6
合計			2			1				1	3	7			10			97	9			130	4,661.0	

る、環状ブロック群の一部に類似する。

出土層準は、立川ルーム層のⅨ層からⅩ層にかけてで、0.8mの厚さをもって、ほぼ水平に包含されている。特に、Ⅸ層とⅩ層の境界付近に集中する。

石器組成は、台形石器2点、削器1点、楔形石器1点、加工痕ある剥片3点、使用痕ある剥片7点、敲石10点、剥片97点、石核9点、礫17点である。石器石材は、安山岩14点、流紋岩9点、頁岩X類3点、チャート102点、砂岩1点、ホルンフェルス1点、礫の石材は、安山岩1点、流紋岩10点、砂岩6点である。

## 2) 接合資料 (第7表)

接合資料は、19組55点を確認した。内訳は、安山岩2組 (接合資料13・14:4点)、流紋岩3組 (接合資料18~20:13点)、チャート12組 (接合資料1~12:30点)、頁岩X類1組 (接合資料15:3点)、砂岩1組 (接合資料17:5点) である。各資料の概要は、以下のとおりである。

接合資料1:チャートによる小形不定型の剥片1点、剥片素材の石核1点、合計2点(25.6g)で構成される。両者ともクラスターEに分布し、両者の距離は0.8mである。



接合資料2：チャートによる剥片素材の石核2点（接合して1個体：28.7g）で構成される。クラスターBとFに分布し、両者の距離は8.3mである。

接合資料3：チャートによる剥片2点（接合して1個体：46.2g）で構成される。折れ面で接合し、大形不定型の剥片1個体となるが、なお不足部分がある。両者ともクラスターFに分布し、互いの距離は1.8mである。

接合資料4：チャートによる大小の剥片3点（接合して2個体：83.1g）で構成される。いずれもクラスターFに分布する。折れ面で接合して1個体となる剥片は相互に近接して分布するが、その正面に接合する小形の剥片は、2m離れている。

接合資料5：チャートによる中形不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片1点、中形不定型の剥片1点（欠損品）、合計2点（21.4g）で構成される。使用痕ある剥片はクラスターEに、剥片はクラスター外に分布し、両者の距離は4.7mである。

接合資料6：チャートによる加工痕ある剥片1点、剥片2点、合計3点（26.0g）で構成される。本資料は、もともと中形不定型の剥片1個体であったものが、剥片剥離時に破砕され、そのうちの1点が加工痕ある剥片となったものである。なお、3点の接合資料ではもとの状態にもとらない。いずれもクラスターFにあり、直径0.9mの範囲に分布する。

接合資料7：チャートによる小形不定型の剥片2点、剥片素材の石核1点、合計3点（27.6g）で構成される。すべてクラスターFにあり、直径1.5mほどの範囲に分布する。

接合資料8：チャートによる小形不定型の剥片4点（合計8.6g）で構成される。すべてクラスターFにあり、直径1mほどの範囲に分布する。

接合資料9：チャートによる小形不定型の剥片2点（10.9g）で構成される。それぞれクラスターE、Fに分布しており、両者の距離は4mである。

接合資料10：チャートによる中・小形不定型の剥片3点（53.6g）で構成される。クラスターAに剥片1点、クラスターBに剥片2点が分布する。クラスターBに分布する剥片2点の距離は2mほどであるが、クラスターAの剥片とは、近い方でも3.1mある。

接合資料11：チャートによる加工痕ある剥片1点、剥片1点、合計2点（20.5g）で構成される。本資料は、もともと中形不定型の剥片1個体であったものが、剥片剥離時に破砕され、そのうちの1点が加工痕ある剥片となったものである。なお、2点の接合資料ではもとの状態にもとらない。加工痕ある剥片はクラスターDに、剥片はクラスターBに分布しており、両者の距離は5.5mである。

接合資料12：チャートによる小形不定型の剥片2点（2.8g）で構成される。いずれもクラスターFに分布するが、両者の距離は3.1mである。

接合資料13：安山岩による中形不定型の剥片2点（122.3g）で構成される。いずれもクラスターEに分布し、両者の距離は0.2mほどである。

第5表 L56ブロック石材別礫組成表

クラスター	石材		個数	重量 (g)
B	流紋岩	Rh	1	55.9
	砂岩	Sa	3	358.3
	小計		4	414.2
C	砂岩	Sa	1	655.0
	小計		1	655.0
D	流紋岩	Rh	1	0.6
	小計		1	0.6
E	流紋岩	Rh	1	17.2
	小計		1	17.2
F	安山岩	An	1	1.0
	流紋岩	Rh	5	1,957.6
	小計		6	1,958.6
周辺部	流紋岩	Rh	2	47.7
	砂岩	Sa	2	749.0
	小計		4	796.6
全体	安山岩	An	1	1.0
	流紋岩	Rh	10	2,079.0
	砂岩	Sa	6	1,762.3
	合計		17	3,842.2

第6表 L56ブロック接合資料等一覧

石材	接合番号	A		B		C		D		E		F		周辺部		合計		
		個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量(g)	
安山岩	13									2	122.3					2	122.3	
	14									2	8.1					2	8.1	
	その他	3	52.0	1	12.3	1	530.0			3	3.8	2	8.8	1	5.5	11	612.4	
	小計	3	52.0	1	12.3	1	530.0			7	134.1	2	8.8	1	5.5	15	742.7	
流紋岩	18					1	303.5					5	992.4			6	1295.9	
	19											5	1957.6			5	1957.6	
	20									1	1255.0	1	269.1			2	1524.1	
	その他	1	6.7	1	55.9			1	0.6	1	17.2			2	47.7	6	128.1	
	小計	1	6.7	1	55.9	1	303.5	1	0.6	2	1272.2	11	3219.0	2	47.7	19	4905.6	
頁岩X	15			3	31.3											3	31.3	
	小計			3	31.3											3	31.3	
チャート	1									2	25.6					2	25.6	
	2			1	15.2							1	13.5			2	28.7	
	3											2	46.2			2	46.2	
	4											3	83.1			3	83.1	
	5									1	16.0			1	5.4	2	21.4	
	6											3	26.0			3	26.0	
	7											3	27.6			3	27.6	
	8											4	8.6			4	8.6	
	9										1	5.5	1	5.4			2	10.9
	10	1	27.9	2	25.7											3	53.6	
	11			1	8.5			1	11.9							2	20.4	
	12												2	2.8			2	2.8
	その他	3	32.9	10	99.8			8	52.9	14	115.9	36	192.8	1	1.3	72	495.6	
小計	4	60.8	14	149.3			9	64.8	18	162.9	55	406.0	2	6.7	102	850.6		
砂岩	17			3	358.3	1	655.0							1	740.0	5	1753.3	
	その他									1	183.3			1	9.0	2	192.3	
	小計			3	358.3	1	655.0			1	183.3			2	749.0	7	1945.6	
ホルンフェルス	その他											1	27.6			1	27.6	
	小計											1	27.6			1	27.6	
合計		8	119.4	22	607.1	3	1488.5	10	65.5	28	1732.6	69	3661.4	7	808.9	147	8303.4	

接合資料14:安山岩による小形不定型の剥片2点(8.1g)で構成される。いずれもクラスターEに分布し、両者の距離は0.6mである。

接合資料15:頁岩X類による小形不定型の剥片2点、剥片素材と想定される小形の石核1点、合計3点(31.3g)で構成される。いずれもクラスターBに分布し、直径0.4mの範囲に分布する。

接合資料17:砂岩の円礫で、5点が接合して90%ほどの遺存状態である(1753g)。礫の大きさは、23cm×9cm×7cmと想定される。被熱により破碎されている可能性があるが、自然面全体が褐色を呈し、色調差が乏しいことから、はっきりしない。クラスターBに3点(358g)、クラスターCに1点(655g)、クラスター外に1点(740g)が分布する。クラスターBでは、直径1.4mの範囲に3点が分布し、最も南の資料とクラスターCの資料とは2.3m離れている。また、クラスター外の資料は、クラスターBの南端の

第7表 L56ブロック接合資料一覧

接合番号	石材	クラスター	Rf	Uf	Hs	Fl	Co	Pe	合計
1	Ch	E				1	1		2
		小計				1	1		2
2	Ch	B					1		1
		小計					2		2
3	Ch	F				2			2
		小計				2			2
4	Ch	F				3			3
		小計				3			3
5	Ch	E		1					1
		周辺部				1			1
		小計		1		1			2
6	Ch	F	1			2			3
		小計	1			2			3
7	Ch	F			2	1			3
		小計			2	1			3
8	Ch	F				4			4
		小計				4			4
9	Ch	E				1			1
		F				1			1
		小計				2			2
10	Ch	A				1			1
		B				2			2
		小計				3			3

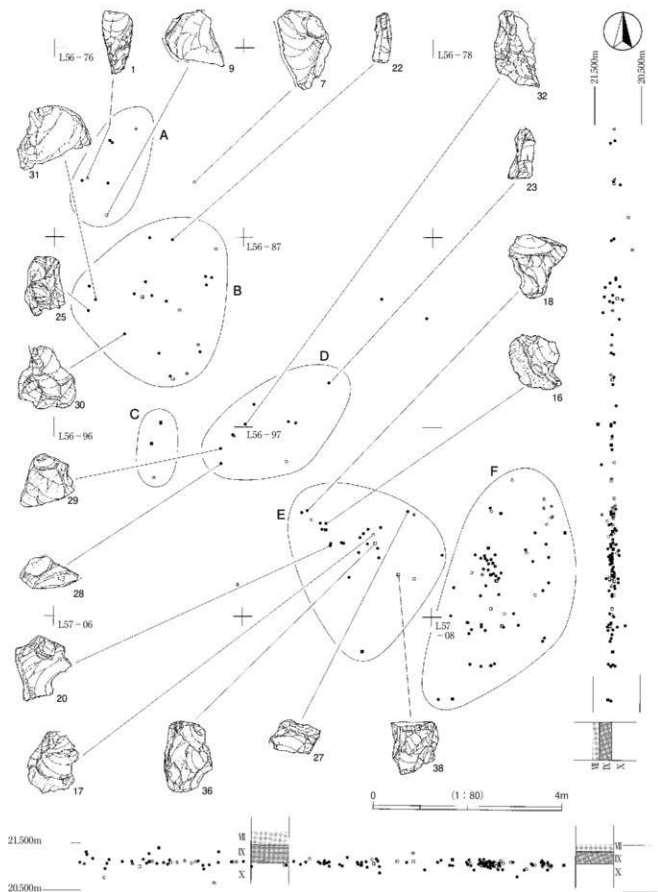
接合番号	石材	クラスター	Rf	Uf	Hs	Fl	Co	Pe	合計
11	Ch	B					1		1
		D	1						1
		小計	1				1		2
12	Ch	F				2			2
		小計				2			2
13	An	E				2			2
		小計				2			2
14	An	E				2			2
		小計				2			2
15	ShX	B				2	1		3
		小計				2	1		3
17	Sa	B						3	3
		C						1	1
		周辺部						1	1
		小計						5	5
18	Rh	C			1				1
		F				5			5
		小計				6			6
19	Rh	F						5	5
		小計						5	5
20	Rh	E			1				1
		F				1			1
		小計				2			2
合計			2	1	8	29	5	10	55

資料と4.5m離れている。比較的大形の資料2点が、それ以外の破片と離れて分布する状況である。

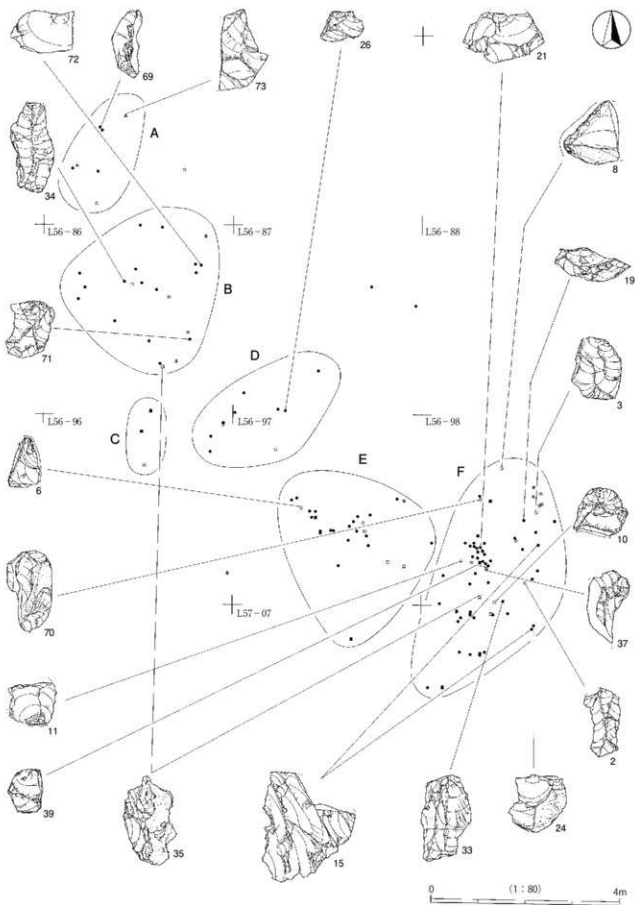
**接合資料18:** 流紋岩の円礫による大形の敲石で、5点の破片が接合する(1300g)。色調に変化があることから、被熱によって破碎したと考えられる。クラスターCに1点(303g)、クラスターFに残りの4点(997g)が分布する。クラスターF内では、3点がまとまっており(互いに1.3m~1.7mの距離)、もう1点が2.7m離れて分布する。また、クラスターCの資料とクラスターFの資料とは、最短で7.4m離れている。

**接合資料19:** 流紋岩の円礫で、5点が接合して95%ほどの遺存状態である(1960g)。礫の大きさは、23cm×10cm×6cmである。色調差が乏しいこと、互いに近接して分布することから、自然に割れたと考えられる。すべてクラスターFに分布する。

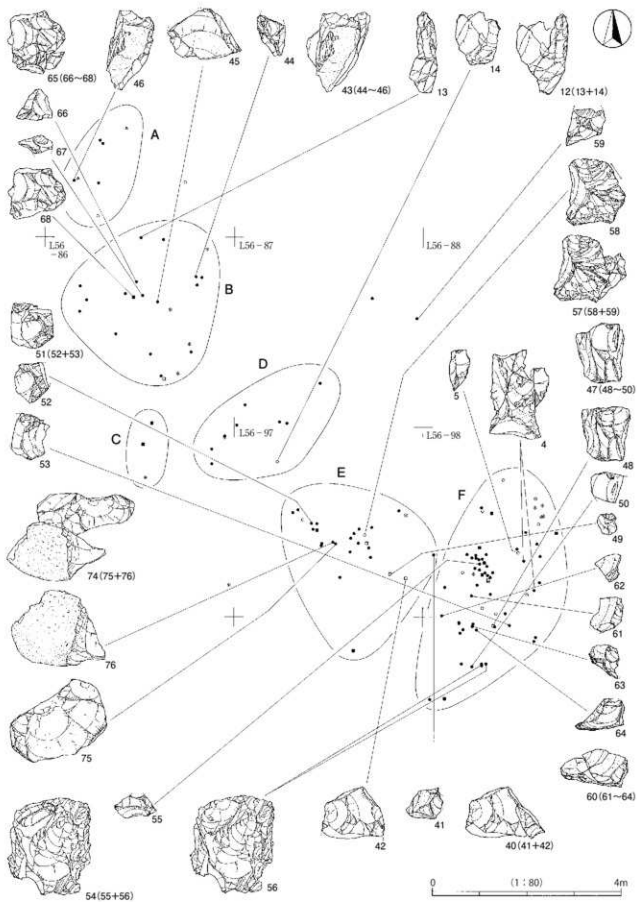
**接合資料20:** 流紋岩の円礫による大形の敲石で、2点の破片が接合する(1524g)。クラスターEに1点(1255g)、クラスターFに1点(269g)が分布し、両者の距離は3.4mである。



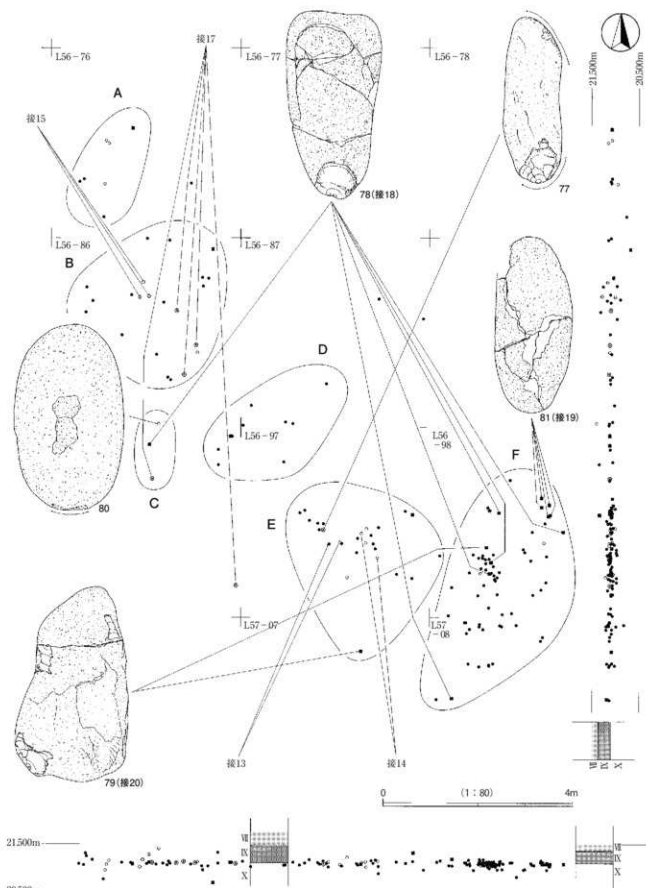
第9図 L56ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図(1) -



第10図 L56ブロック出土遺物分布図(2) - 石器別分布図(2) -



第11図 L56ブロック出土遺物分布図(3) -石器別分布図(3) -



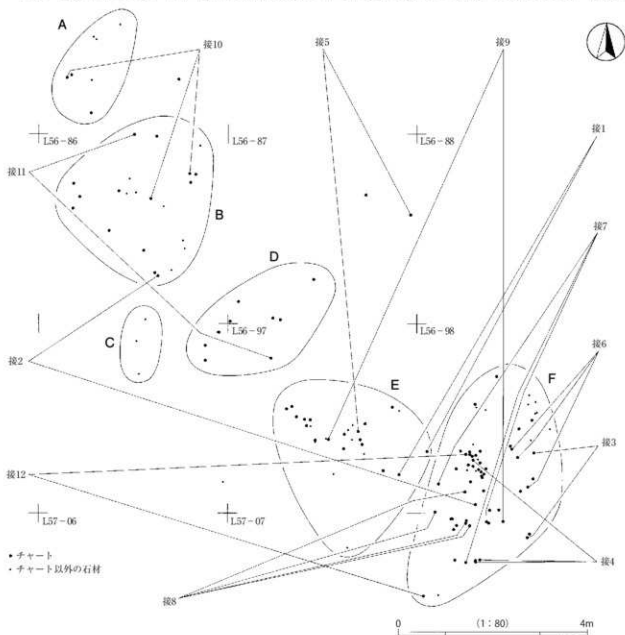
第12図 L56ブロック出土遺物分布図(4) - 石材別分布図(1) -

### 3) 出土遺物

#### a. チャート製石器群 (第14図1～第19図64)

本ブロックでは、129点の石器群のうち、102点(79%)がチャートである。このチャートの特徴は、青灰色の地に暗青灰色の縞が網目状に入るものが主体をなし、この他に地の色調が灰白色や灰緑色のものも含まれている。ただし、1個体の石器にあっても、色調が漸变的に変化しており、接合資料を含めて検討したが、母岩分類はできなかった。チャートの石器群全体を見渡してみると、自然面の残る資料が少ないこと、相互に類似した色調、質感であるにも関わらず接合率が悪いことから、概ね同一の産地に由来する多数の母岩の可能性はある。自然面の状態から原石の大きさを考えると、かなり大形の原石、あるいは岩脈からの割出しといった特殊なものではなく、拳大から小児の頭までの範囲と想定される。なお、チャートの産地については、石の質がごく一般的な内容であることから、特定できない。

1は、台形石器である。中形不定型の剥片を素材として、素材の打面を基部側にあてたもので、右側縁



第13図 L56ブロック出土遺物分布図(5) - 石材別分布図(2) -



は剥片の鋭利な縁辺を交互剥離で調整加工されている。左側縁は、節理に沿った折れ面があり、これを打面として、細かな剥離痕が見られる。上端は、剥片の鋭利な末端がそのまま残されている。2は、削器である。中形不定形の縦長剥片を素材として、裏面の左側縁に大ききの不揃いな剥離痕が連続して見られる。上端(素材の打面側)は欠損する。3は、加工痕ある剥片である。中形不定形の剥片を素材として、裏面の左側縁に粗い剥離痕が連続する。4は、大形不定形の剥片であるが、その一部(5)は加工痕ある剥片である。5の正面右側縁には、粗い剥離痕が見られる。4が剥離された時に、不純物や節理が影響してか、数点の破片に割れ、その1点が石器に加工されたと考えられる。

6~11は、大きさにばらつきがあるが、不定形の剥片を素材とする使用痕ある剥片である。なお、11は、剥離面の形状から、両極打撃によって得られた剥片が利用されたと考えられる。12は、加工痕ある剥片1点、剥片1点が接合して、中形不定形の剥片1個体となる資料である。15~21・24~32は不定形の剥片、22・23・33・34は縦長剥片である。

35~39は、石核である。いずれも厚手の剥片、ないしは節理面で分割された破片を素材として、交互剥離等によって中・小形不定形の剥片が剥離されている。自然面は、爪痕状の傷が無数に入る、円礫面である。接合資料1 40は、小形不定形の剥片1点(41)と剥片素材の石核1点(42)の接合資料である。大形厚手で不定形の剥片を石核の素材として、表裏両面を作業面にあてて、交互剥離によって中・小形不定形の剥片が生産される内容である。接合図の右側面には節理面、裏面の右半分には素材時の主要剥離面が残されている。なお、剥片剥離作業中に石核が大きく損傷し、作業が終了したと考えられる。

接合資料10 43は、不定形の剥片3点(44~46)の接合資料である。接合資料から想定される作業手順は、以下のとおりである。

①はじめに、円礫が節理に沿って分割され、石核の素材が得られる。接合図の正面には滑らかな円礫面があり、裏面には分割面と考えられる節理面が残されている。また、左側面にも節理面があり、これも石核素材時に形成された剥離面の可能性がある。その他、右側面の上半部を中心にして、敲打痕が多数見られる。原石の分割やその後の剥片剥離時に付着したものであろう。

②接合図の右側面を作業面として、上位から44を含む剥片数枚が剥離される。なお、44は上半部が欠損するため、打面の位置は不明である。

③②の剥離面を打面、下端を作業面として、剥片が剥離される。

④接合図裏面を打面、上面を作業面として剥片数枚が剥離される。なお、③の工程との先後関係は不明である。

⑤④の剥離面を打面、右側面を作業面として、46を含む剥片が剥離される。

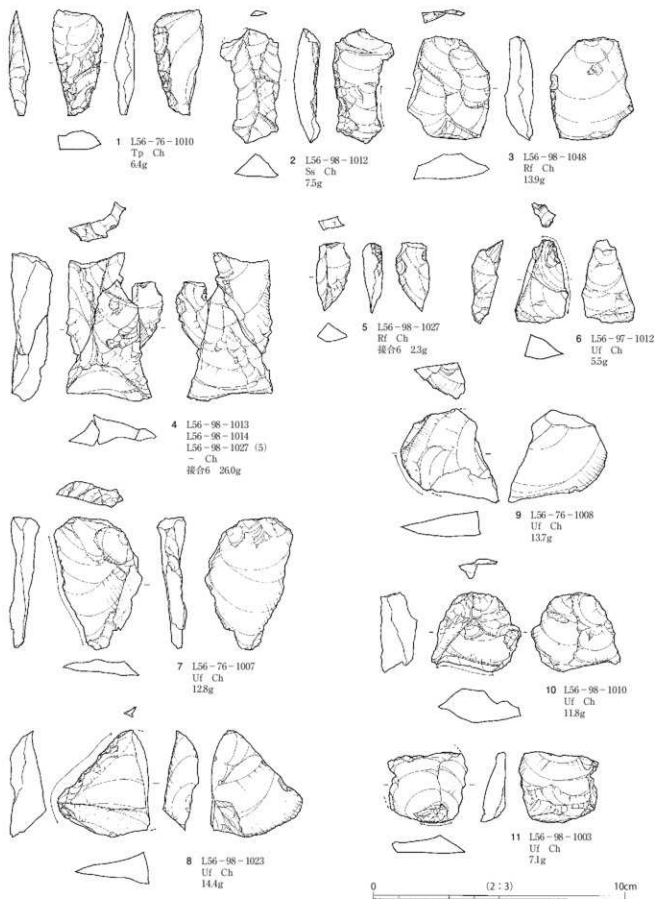
⑥接合図左側面を打面、裏面を作業面として、45が剥離される。石核は、かなり扁平なものになっているはずであるが、残されていない。

接合資料7 47は、小形不定形の剥片2点(49・50)と厚手の剥片を素材とする石核1点(48)の接合資料である。接合資料から想定される作業手順は、以下のとおりである。

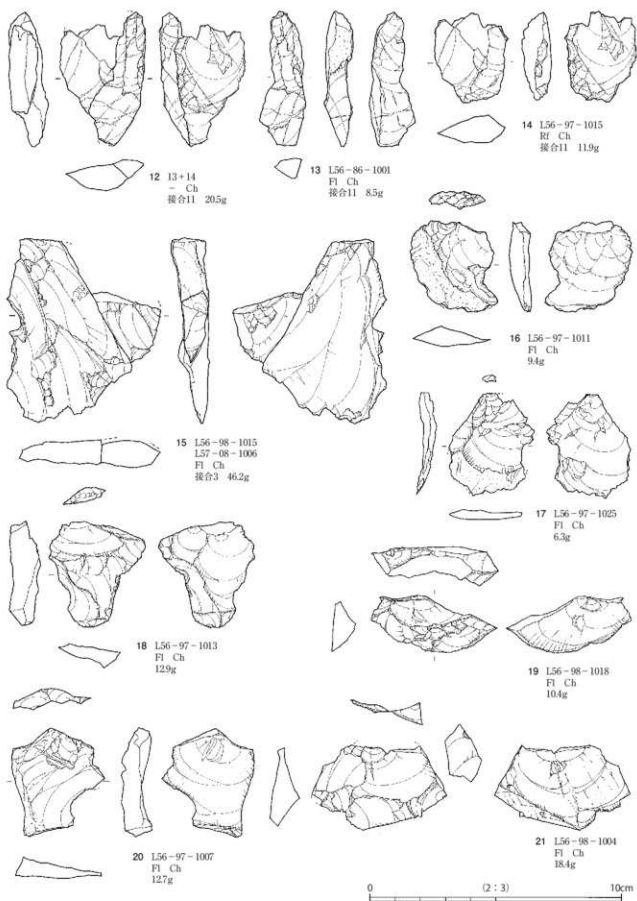
①厚手の剥片が剥離されて、石核の素材となる。接合図の表裏両面には、広く平坦な剥離面があり、裏面が石核素材時の主要剥離面と考えられる。

②接合図の上面を打面、正面を作業面として50が剥離される。

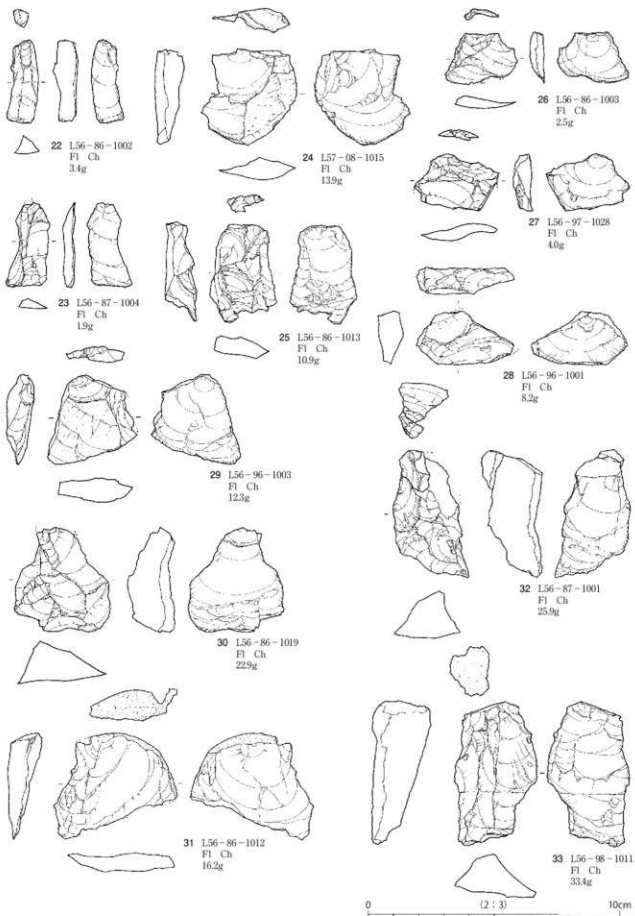
③接合図裏面を打面、右側面を作業面として剥片が剥離される。



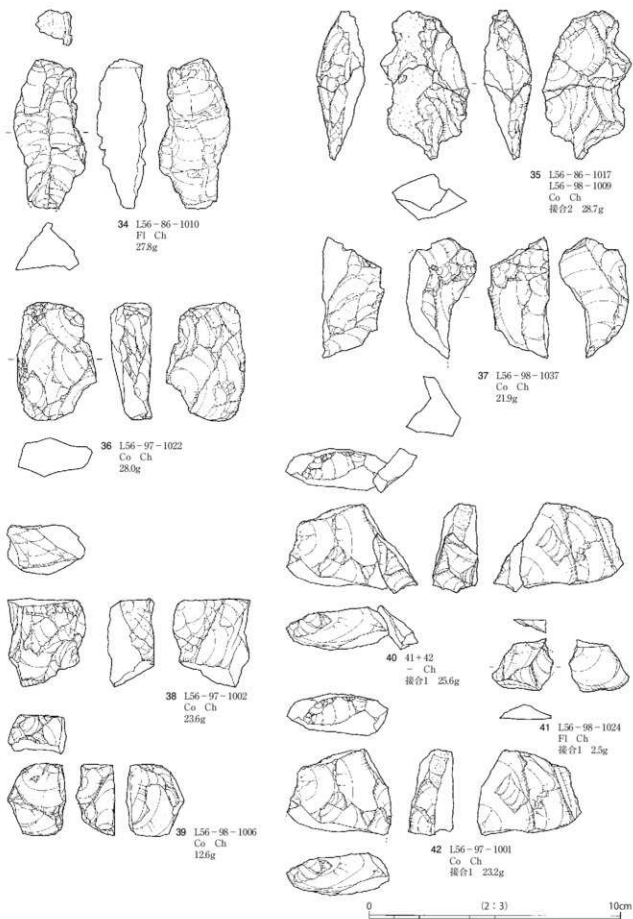
第14図 L56ブロック出土遺物実測図(1)



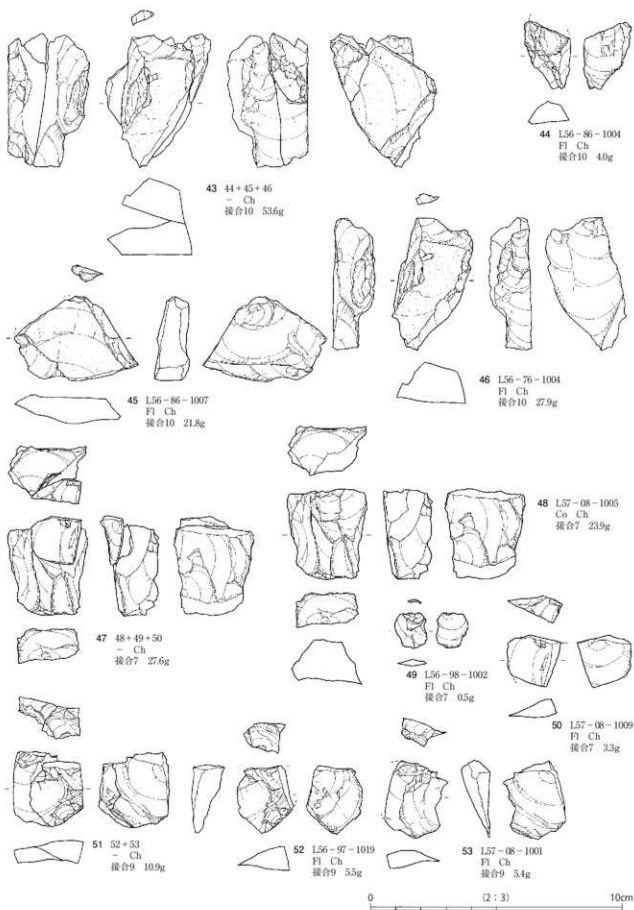
第15図 L56ブロック出土遺物実測図(2)



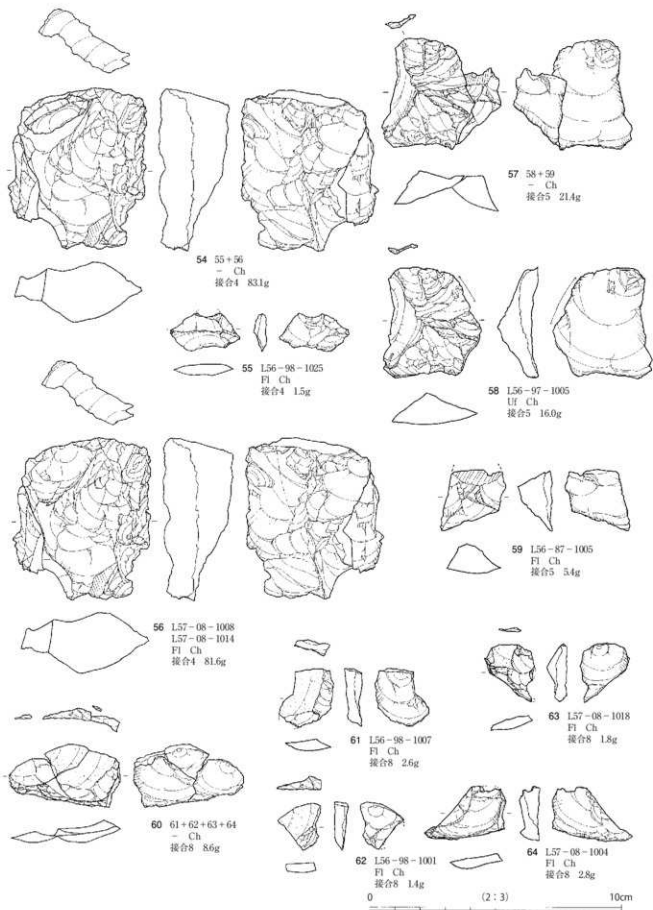
第16図 L56ブロック出土遺物実測図(3)



第17図 L56ブロック出土遺物実測図(4)



第18図 L56ブロック出土遺物実測図(5)



第19図 L56ブロック出土遺物実測図(6)

- ④左側面を打面、正面を作業面として剥片が剥離される。なお、③と④の先後関係は不明である。
- ⑤接合図正面を打面、上面を作業面として剥片が剥離される。
- ⑥⑤の剥離面を打面、正面を作業面として49を含む剥片数枚が剥離される。
- ⑦接合図右側面を打面、裏面を作業面として剥片が剥離されるが、この時に石核(48)の下端が欠損したと考えられる。

接合資料9 51は、小形不定型の剥片2点(52・53)の接合資料である。上位の打面から52→53の順に剥片が剥離されている。

接合資料4 54は、小形不定型の剥片(55)と大形厚手の剥片(56)の接合資料である。上位の打面から55→56の順に剥離されている。

接合資料5 57は、中形不定型の剥片2点(58・59)の接合資料である。上位の打面から、58→59の順に剥離されている。なお、59は、打面を含む上半部が欠損するため、58と59が同一打面より剥離されたか否か、不明である。

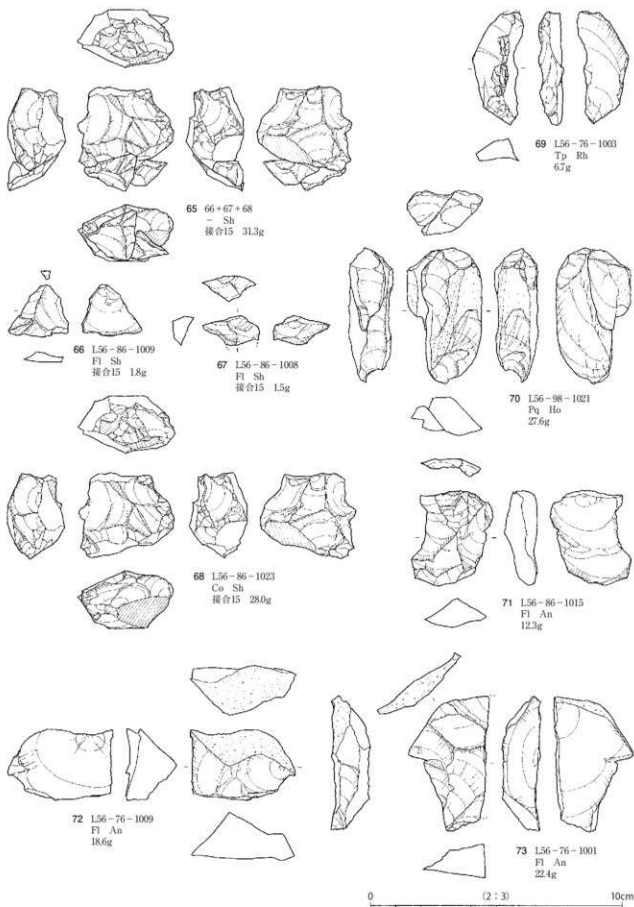
接合資料8 60は、小形不定型の剥片4点(61~64)の接合資料である。大きく湾曲した折れ面のような剥離面を打面として、接合図正面の右端(61)→中央(62)→右端(64)→左端(63)の順に剥離している。

#### b. チャート以外の石材による石器群(第20図65~第23図81)

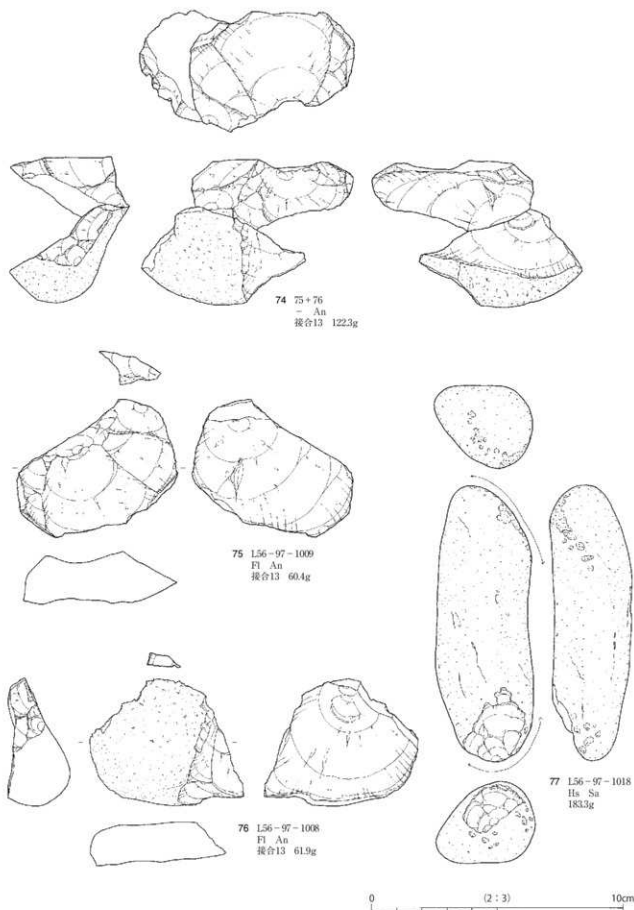
69は、台形石器である。石材は、自然面は橙褐色で滑らかな円礫面、内部は淡黄白色の地に淡灰緑色の部分が帯状に入る流紋岩である。自然面を打面とする中形不定型の剥片を素材とする石器で、右側面の折れ面から正面に向けて平坦な調整加工が施されている。70は、楔形石器である。石材は、自然面、内部ともにくすんだ黒灰色の地に灰色の部分が帯状に入るホルンフェルスである。裏面には主要剥離面が広く残る。71は、中形不定型の剥片で、石材は、灰色の地に直径1mmほどの夾雑物が散在するきめの細かな安山岩である。72・73も中形不定型の剥片で、石材は、自然面は黄色みを帯びた灰褐色で紙やすり状の円礫面、内部は灰褐色の地に直径0.5mm~1mmの夾雑物をわずかに含む安山岩である。

77~80は、敲石である。77は、わずかに青みがかった淡黒灰色の砂岩で、11.5cm×4cm×3cmの棒状の円礫である。上下両端に使用による潰れた痕跡があり、特に下端は衝撃によって割れている。78は、自然面は赤みがかった淡褐色から黄白色までの変異がある円礫面、内部は黄灰色の地に大小の夾雑物が多量に入る流紋岩(石英斑岩)である。表面の色調が部分的に赤化していることから、破碎の原因に被熱も含まれると考えられる。破碎された割れ面の状況は、大半が赤褐色を呈する平面で、鉄分が沈着した節理面のように観察されるが、実測図下部1/3ほどの破片の折れ面は、打撃によって形成されている。したがって、本個体は、被熱と打撃の両者によって、破碎されたと考えられる。なお、破碎された面(折れ面)に、さらなる被熱の痕跡はない。使用の痕跡としては、下端が衝撃によって割がれ部分的に潰れている。大きさは、16.5cm×8cm×7cm、重さは1,300gと一般的な敲石よりも大形である。79は、自然面は黄色みを帯びた淡い灰色を呈する滑らかな円礫面、内部は青みがかった淡黒灰色で、直径1mmほどの夾雑物を多く含む流紋岩である。部分的に色調の変化があり、被熱した可能性がある。下端の左右両側に衝撃による潰れた痕跡があり、左側面では剥離が長く伸びている。また、上部が割れて2個になった後も、それぞれの割れ面から剥離が見られる。大きさは、16.5cm×10cm×7cm、重さは1,524gで、78よりもやや大形である。80は、桃色を帯びた黒灰色の多孔質の安山岩で、12.5cm×7cm×4.5cmの円礫が用いられている。表面の中央部と下部部に衝撃によると想定される潰れた痕跡がある。

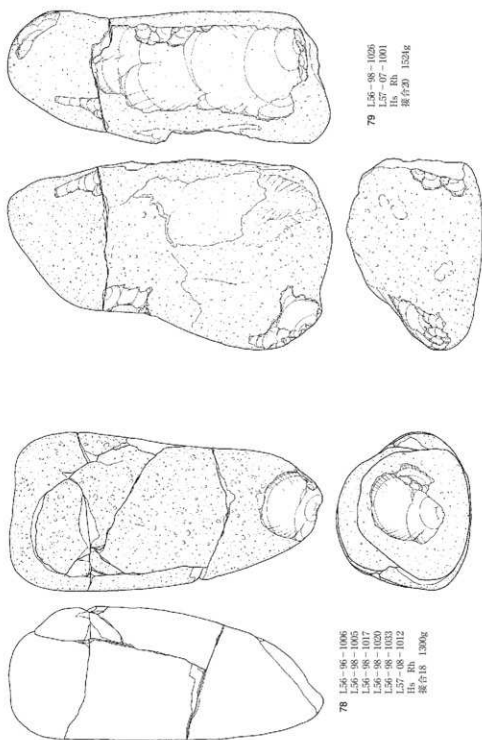




第20図 L56ブロック出土遺物実測図(7)



第21図 L56ブロック出土遺物実測図(8)



79 L56-98-1026  
L57-07-1001  
Hs. Bb. 1324g  
集合20

78 L56-98-1006  
L56-98-1005  
L56-98-1017  
L56-98-1020  
L56-98-1033  
L57-08-1012  
Hs. Bb.  
集合18 1300g

0 10cm  
(1:2)

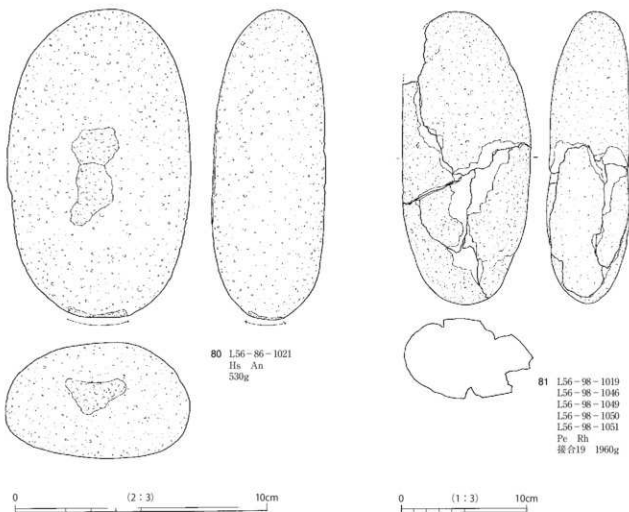
第22図 L56ブロック出土遺物実測図(9)

81は、流紋岩による大形の円礫である。5点の破片が接合するが、互いに近接して分布していること、被熱痕跡が確認できないことから、自然に割れたと考えられる。潰れた痕跡等の使用痕が確認できず、利用目的が想定できない資料である。クラスターFの外縁部に分布する。

接合資料15 65は、小形不定型の剥片2点(66・67)と石核1点(68)の接合資料である。石材は、黒灰色の地に灰白色の縞(節理)が入る頁岩である。表裏両面の各所で交互剥離がなされ、その過程で66→67の順に小形の剥片が剥離されている。同じ石質のものは、図示した以外にはなく、剥片剥離作業の最終段階に属する資料である。

接合資料13 74は、中形で厚みのある不定型の剥片2点(75・76)の接合資料である。石材は、自然面は灰色を呈し、細かな凹凸が多数ある円礫面、内部はわずかに青みがかった淡黒灰色で、直径1mmほどの夾雑物が顕著な安山岩である。接合資料から見た剥片剥離作業の工程は、以下のとおりである。

- ①接合面の正面を打面、上面を作業面として剥片が剥離される。
- ②①の剥離面を打面、正面を作業面として剥片が剥離される。その中で、76が剥離される。
- ③②の剥離面を打面、上面を作業面として75を含む剥片が剥離される。



第23図 L56ブロック出土遺物実測図(10)

(2) 第2文化層

第2文化層は、立川ローム層のⅥ層からⅧ層にかけて包含される石器群で、第3次調査のJ56ブロックが該当する。このブロックは資料総数が9点と少なく、剥片類数点と焼礫で構成されることから、詳細な内容は不明である。

J56ブロック (第24～26図、第8・9表、図版24)

1) ブロックの概要 (第24・25図、第8・9表)

J56ブロックは、調査範囲中央のJ56-59、K56-50グリッドに位置し、長軸2.8m、短軸1mほどの楕円形の範囲に9点の石器、礫が散漫に分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅵ層からⅧ層にかけてで、ほぼ水平に包含されている。

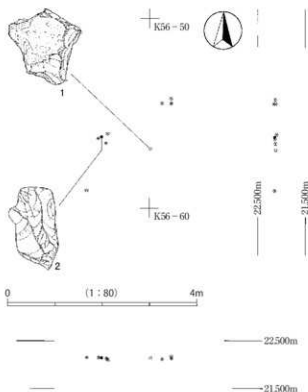
石器組成は、加工痕ある剥片1点、剥片1点、礫7点である。石器の石材は、安山岩1点、頁岩X類1点、礫の石材は、流紋岩1点、砂岩6点である。

2) 出土遺物 (第26図1・2)

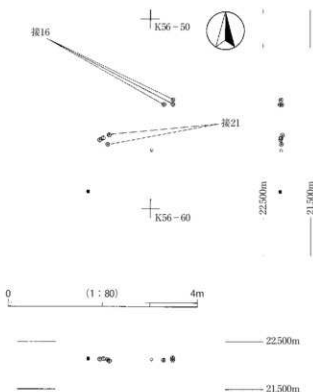
1は、加工痕ある剥片である。石材は、灰褐色に風化した安山岩で、自然面は痘痕状の窪みが多数ある円礫面である。中形不定型の剥片を素材として、打面は裏面からの粗い剥離によって除去されている。2は、不整形の縦長剥片である。石材は、自然面は赤橙色、内部は薄い黄緑色を呈し、よく珪化した緻密な頁岩である。正面は、多方向からの剥離面に覆われている。

第8表 J56ブロック石材別礫組成表

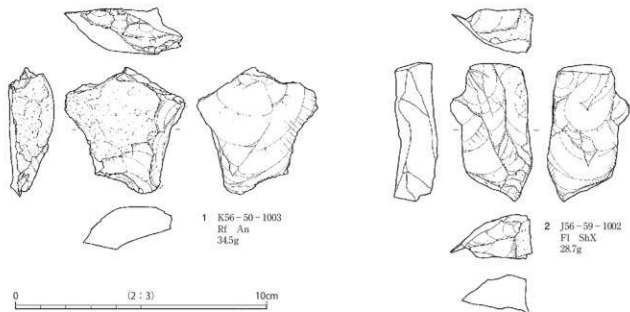
石 材		個数	重量 (g)
流紋岩	Rh	1	63.5
砂岩	Sa	6	452.0
合 計		7	515.5



第24図 J56ブロック出土遺物分布図 (1)  
- 石器別分布図 -



第25図 J56ブロック出土遺物分布図 (2)  
- 石材別分布図 -



第26図 J56ブロック出土遺物実測図

第9表 J56ブロック石材別石器組成表

石材	Kn	Tp	Po	kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	Ge	合計	重量 (g)
安山岩	An									1											1	34.5
頁岩X	ShX																1				1	28.7
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	63.2

### (3) 第3文化層

第3文化層は、立川ローム層のⅣ層からⅤ層を中心とする層準に包含される石器群で、第5次調査のI56ブロックが該当する。このブロックは資料総数が9点と少なく、剥片類数点と焼礫で構成されることから、詳細な内容は不明である。

#### I56ブロック (第27～29図、第10・11表、図版24)

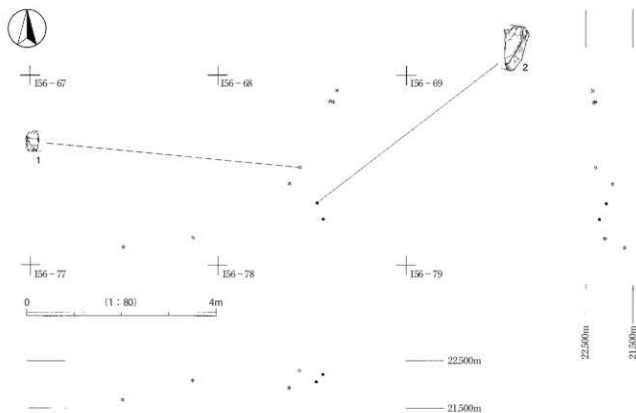
##### 1) ブロックの概要 (第27・28図、第10・11表)

I56ブロックは、調査範囲西端のI56-67・68グリッドに位置し、長さ5.6m、幅1.2mほどの帯状の範囲に9点の石器、礫が散漫に分布する。出土層準は、立川ローム層Ⅳ層からⅤ層を中心としており、0.8mの厚さをもって地形に沿って包含されている。

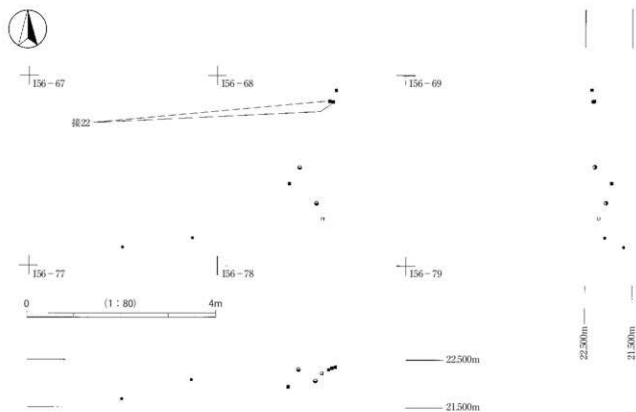
石器組成は、加工痕ある剥片1点、剥片2点、礫6点である。岩石の種類について、石器は黒曜石D類2点、頁岩C類1点、礫は流紋岩4点、チャート2点である。流紋岩の礫は、2点が接合して完形になるものが含まれている。

##### 2) 出土遺物 (第29図1・2)

1は、小形不定型の剥片で剥離時に打点から折れた小片であるが、左側縁に微細な剥離痕が連続する資料である。この剥離痕は、剥片の鋭利な縁辺に見られる「刃こぼれ」とは異なり、連続して剥離角が急であることから、加工痕ある剥片とした。2は、小形不定型の剥片で1と同様打点から折れている。両者と



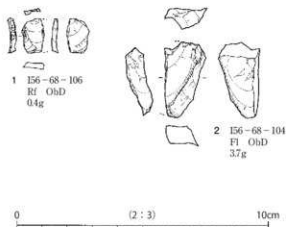
第27図 I56ブロック出土遺物分布図(1) - 石器別分布図 -



第28図 I56ブロック出土遺物分布図(2) - 石材別分布図 -

第10表 I56ブロック石材別石器組成表

石 材	Kn	Tp	Po	kp	Es	Ss	Gr	Dr	Pq	Rf	Uf	Bl	Ax	Hs	As	Uk	Fl	Ch	Co	Ge	合計	重量 (g)
黒曜石D	ObD									1							1				2	4.1
頁岩C	SbC																1				1	0.7
合 計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3	4.7



第29図 I56ブロック出土遺物実測図

第11表 I56ブロック石材別礫組成表

石 材	個数	重量 (g)	
流紋岩	Rh	4	317.4
チャート	Ch	2	46.5
合 計		6	363.8

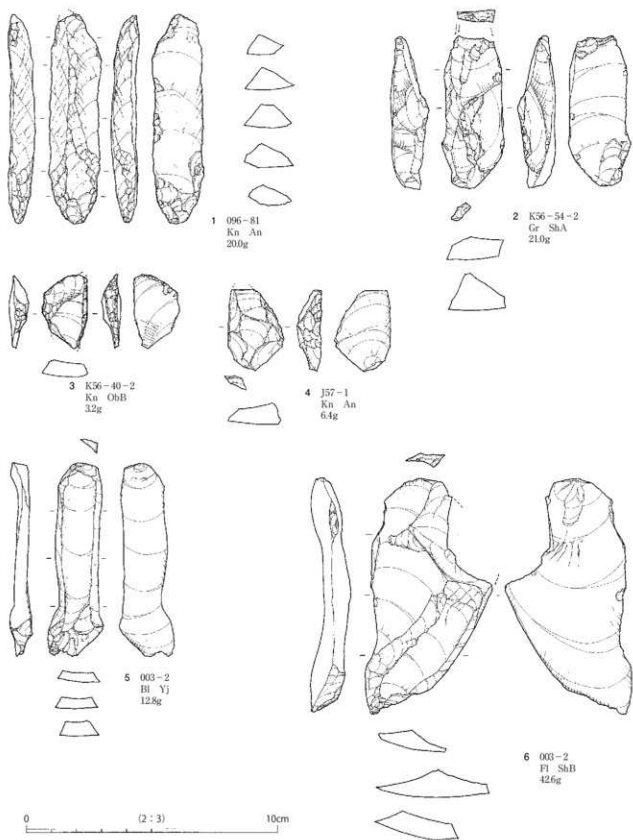
も黒灰色不透明で、夾雑物を多く含む黒曜石であり箱根畑宿産と想定される。

#### (4) その他の出土遺物 (第30・31図、図版24)

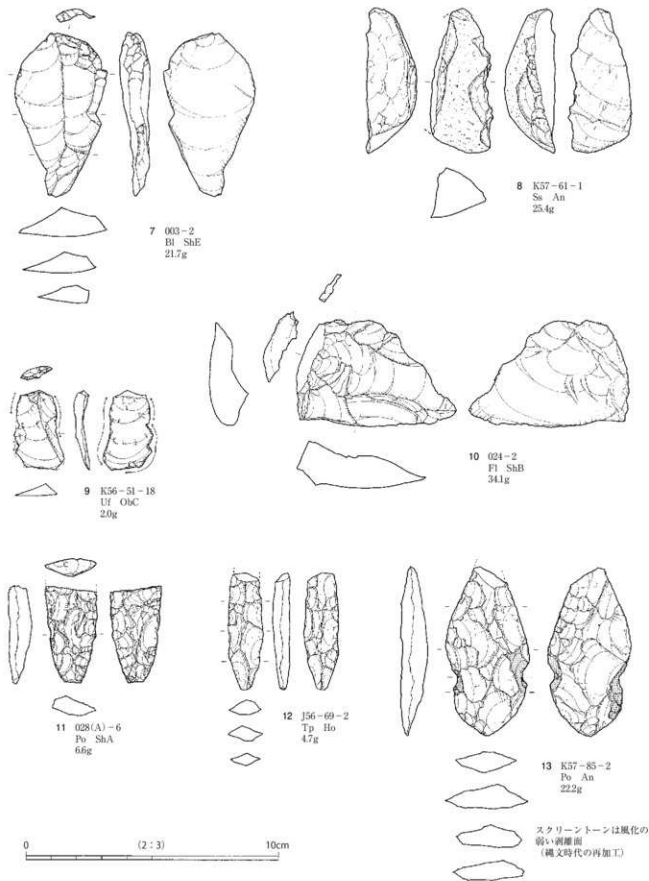
上層遺構の調査中に、旧石器時代から土器出現期(縄文時代草創期)までの時期に帰属すると判断した石器が40点出土している。この中で、代表的な資料について実測図を掲載した。

1は、上層遺構SI028から出土した基部調整のナイフ形石器である。石材は、灰白色に風化した安山岩で、北関東産と想定される。大形の石刃を素材として、打面を基部側にあてて基部の両側縁と先端の一部に裏面から急角度の調整加工がなされている。また、基部の裏面には、打縮の高まりを除去するための平坦な調整加工が見られる。正面右側は、本資料の剥離よりも古い段階に石刃が剥離された痕跡を留めており、石刃石核の作業面の一部と考えられる。一方、左側は広く平坦な剥離面で、石核素材時の分割面等、作業面とは異なる剥離面と考えられる。先端はわずかではあるが欠損する。2は、上層遺構検出中にK56-54グリッドから出土した彫器である。石材は、暗褐色から灰色までの変異があり硬質緻密で油脂状光沢のある頁岩で、東北産と想定される。中形でやや厚手の石刃を素材として、末端部に正面から細かな調整加工がなされて打面が形成され、器体にはほぼ直交する角度で両側縁に槌状剥離がなされている。形態は、「小板型」彫器と呼称されているものに共通する。3は、K56-40グリッドから出土した切出形のナイフ形石器である。石材は、淡黒色透明で、夾雑物の見られない良質な黒曜石で、信州の霧ヶ峰から和田峠までの地域に産すると想定される。不定型の剥片を素材として、素材の打面周辺と末端部に対して裏面からの急角度の調整加工によって成形されている。基部側は欠損する。4は、J57グリッドから出土したナイフ形石器である。石材は、灰褐色に風化した安山岩である。不定型の剥片を素材として、右側縁の一部に、





第30图 上層遺構等出土遺物実測図(1)



第31図 上層遺構等出土遺物実測図(2)

裏面から急角度の調整加工がなされ、素材の打面は残されている。形態と石材から見て、立川ローム層Ⅳ層下部に帰属すると考えられる。

5～7は、上層遺構SD001から出土した資料である。5は、中形の石刃で、石材は暗黄褐色を呈する「黄玉石」である。打面は平坦な剥離面によるもので、正面上端には頭部調整が見られる。正面の中央と右側の剥離面は、主要剥離面と同一方向であるが、左側には横方向からの剥離面がある。また、末端部周辺に横方向の細かな剥離面があり、石核の調整痕と考えられる。6は、大形不定形の縦長剥片で、石材は黒色から灰色までの変異があり、よく珪化した硬質緻密な頁岩である。7は、中形幅広の石刃で、石材は灰色に風化した黒色頁岩である。打面は比較的平坦な剥離面で、正面上端に頭部調整が見られる。正面は、主要剥離面と同一方向の剥離面で構成される。5～7は、以上の内容から立川ローム層第2黒色帯上部に帰属する可能性が高い。

8は、K57-61グリッドから出土した鋸歯縁削器である。石材は、灰褐色に風化した安山岩である。自然面は浅い爪痕状の傷が細かく入る円礫面で、原石は拳よりも小振りかと想定される。中形不定形で厚手の剥片を素材として、右側縁に粗い調整加工がなされている。左半分は折れている。9は、K56-51グリッドから出土した使用痕ある剥片である。石材は、淡黒色透明で黒灰色の縞が平行して入り、また円形の気泡を含む比較的良好な黒曜石で、八ヶ岳周辺に産するものと想定される。小形の縦長剥片を利用しており、左右両側縁に刃こぼれが見られる。10は、上層遺構SD002から出土した中形の横長剥片である。石材は、黒褐色に風化した硬質緻密な頁岩で、6と同質である。正面には、左側面にある平坦面を打面として石刃が剥離された形跡があり、その打面と正面との成す角度が鈍角であることから、作業面を更新するために剥離された剥片と考えられる。

11は、上層遺構のSK071から出土した槍先形石器である。石材は、暗褐色を呈し、硬質緻密で油脂状光沢のある頁岩である。両面調整であるが、表裏の状況は均等ではなく、正面側がやや影り裏面側は平坦になっている。また、縦方向にもわずかに湾曲する。形態は、大形細身の木葉形で、ナイフ形石器の消滅する時期から土器出現期までのいずれかの時期に帰属すると考えられる。なお、本資料には被熱による損傷が見られる。12は、J56-69グリッドから出土した有茎尖頭器である。石材は、灰緑色を呈する砂岩質のホルンフェルスで、風化により剥離面の稜が不鮮明になっている。13は、K57-85グリッドから出土した両面調整の石器である。石材は、淡灰褐色に風化した安山岩で、北関東産と想定される。もともとは両面調整による中形幅広の木葉形で、土器出現期を中心とする時期の槍先形石器と考えられるが、風化の少ない剥離面（スクリーントーンで示した剥離面）が両側縁を挟むように見られることから、旧石器時代の槍先形石器が縄文時代に石器に再加工された可能性がある。

## 第2節 縄文時代

### 1 竪穴住居跡

明確に竪穴住居跡と判断されるもののほか、掘込みが認められず炉とピットの配置等から住居跡と推定されるもの及びピットが集中して同じく住居跡と推定されるものを含め、この項で扱うこととした。合計17軒である。図中のP○(○)は、ピット番号と深さを示している。なお、住居跡と切り合っている土坑のうち同時期もしくは近接している時期と考えられるものについては、相互に何らかの関係の有している可能性があるためあわせて扱うこととした。また、土坑や炉穴も含め遺構に堆積していた貝層からは分析用のサンプルを採取しており、それらの詳細については「8 出土動物遺存体」及び付章にまとめて掲載している。したがって本項中では採取した位置等を記載するにとどめている。

#### SI001・SK013 (第33・34図、図版2・28・38・39)

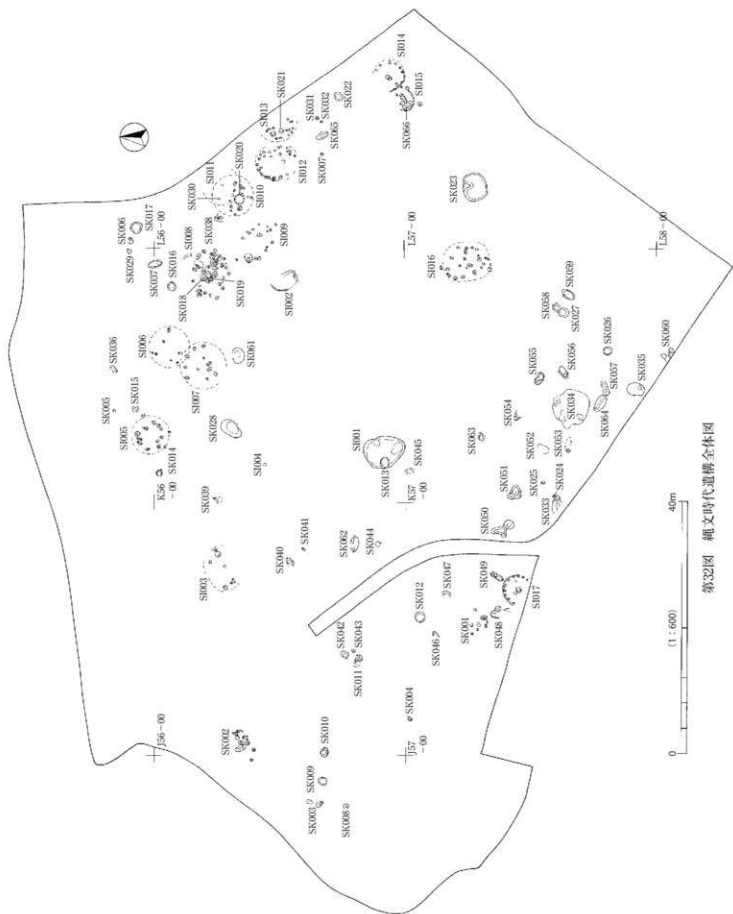
SI001はK56-81・82・91・92グリッドに位置し、南西約1mにSK045炉穴がある。長軸6.75m、短軸5.04mで、卵形の平面形をなす。住居跡の東側及び南側には攪乱がある。遺構確認面からの深さは中心付近の最も深いところで28cmを測り、壁は傾斜を持つ。床はソフトロームを突き固めた貼床で、壁際を除くほぼ全面に認められる。炉及び柱穴は検出されなかった。遺物は覆土中から散漫に出土した。出土土器は4を除きいずれも早期後半の鵜ガ島台式から茅山下層式であり、本住居跡もこの時期の所産と考えられる。

SK013はK56-91グリッドに位置する。1.52m×1.48mのほぼ円形で、遺構確認面からの深さは49cmを測り、鍋底状の断面形態を持つ。SI001住居跡(早期)を壊して構築されている。遺物が出土しなかったため推測となるが、周辺には後期の遺構はなく早期の所産と思われる。

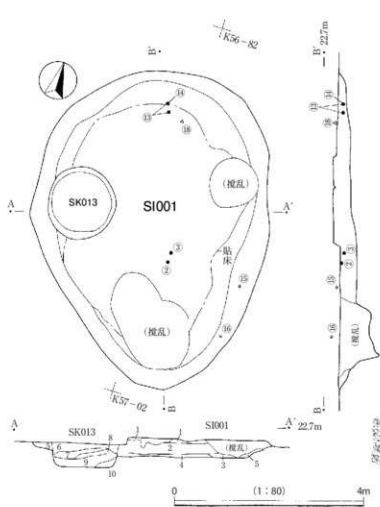
図示した遺物は18点で、いずれもSI001出土である。なお、4・5・9・11・17は当遺構内の攪乱から出土しているものの、当遺構に伴うものと判断されるため掲載した。1~14はいずれも繊維を含む土器である。1は口縁部の破片で、口唇部には押捺列が施される。沈線により区画され、その交点には竹管横断面を使用した円形刺突文が施されている。区画内には短沈線が充填されている。地文は表裏とも横位に貝殻条痕文が施される。2・3も口縁部の破片で、同一個体と考えられる。ゆるやかな波状口縁をなすとみられ、口唇部にはキザミが施される。外面は格子状に沈線が施され、内面は無文である。4は外面に羽状縄文が施されている。内面は無文である。5は磨耗によりはつきりしないが、外面は斜方向に、内面は横位に貝殻条痕文が施されている。波状口縁部の破片で、口唇部は平坦である。6も磨耗しているが、内外面とも横位に貝殻条痕文が施される。波状口縁部の破片で、口唇部にはキザミが施される。7は外面は縦位に、内面は横位に貝殻条痕文が施された口縁部の破片で、わずかに遺存する口唇部は内削ぎ状を呈する。8は外面に貝殻条痕文が横位に施され、内面は無文である。口縁部には短沈線が施される。9~14は内外面ともに貝殻条痕文の施される破片である。15・16は石鏝で、15は流紋岩製、16はチャート製である。17は砂岩製の敲石である。18は安山岩製の磨石で、被熱している。

#### SI002 (第35図、図版2・28・40)

K56-48・58グリッドに位置し、北東約4mにSI009住居跡がある。長軸4.36m、短軸2.68mで、南半は隅丸方形、北半は円形の形状をし、北東側に大きな攪乱がある。床面と壁の境は不明瞭で、中央部が最も深い皿状断面を持ち、床面には凹凸がある。遺構確認面からの深さは最も深いところで23cmを測る。炉は検出されず、ピットが1基南壁際中央で確認された。規模は49cm×35cm、床面からの深さは55cmを測る。出土遺物は尖底土器1点、敲石・磨石各1点のほか、黒浜式と諸磯A式の小片が少量混在する。当遺構の

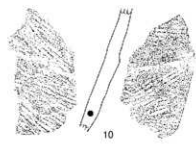
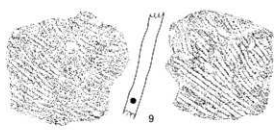
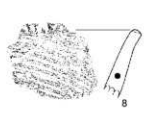
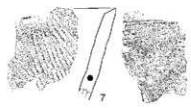
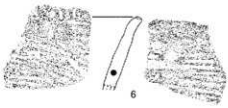
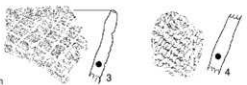
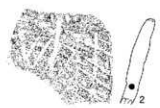


第32図 縄文時代遺跡全体図



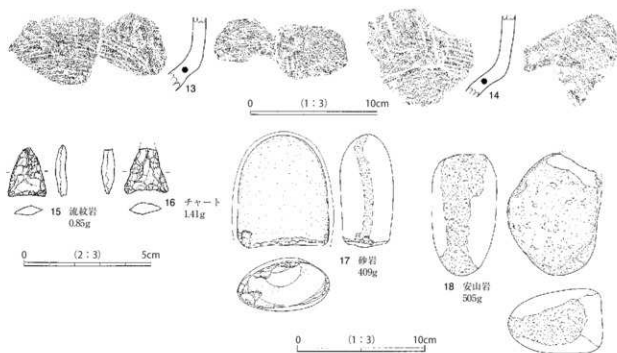
SI001

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
3. 暗褐色土 黄褐色土が塊状に混ざる
4. 暗褐色土 點珠
5. 黄褐色土 ローム土主体
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土 ローム粒・ローム小塊を多く含む
8. 黒褐色土 ローム粒を含む
9. 暗褐色土 ローム粒・ローム小塊を多量に含む
10. 黒褐色土 ローム粒・ローム小塊を含む

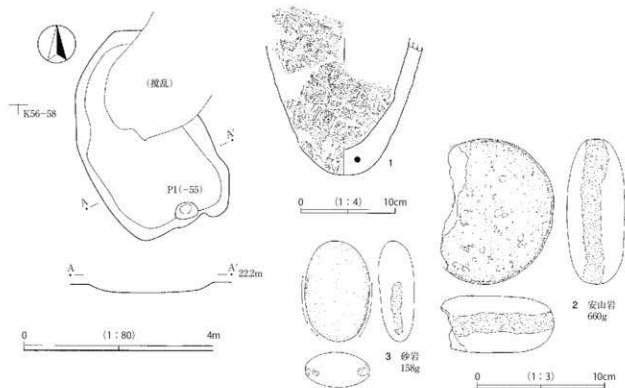


0 (1:3) 10cm

第33図 SI001住居跡・SK013土坑、出土遺物(1)



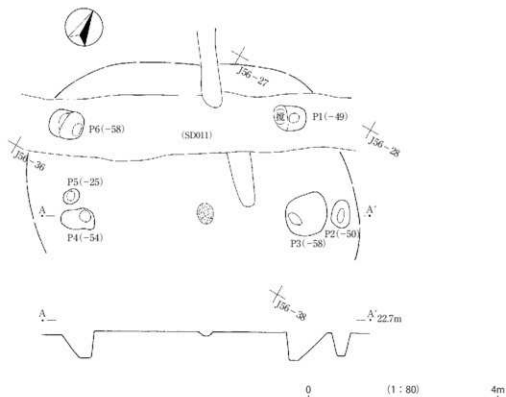
第34図 SI001住居跡出土遺物（2）



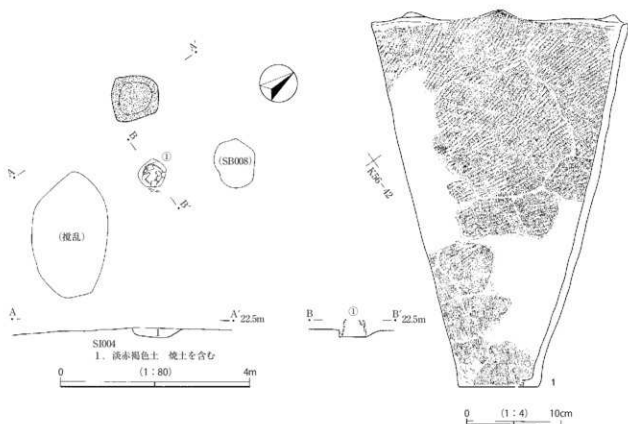
第35図 SI002住居跡、出土遺物

時期は、尖底土器の大形破片から早期後半の所産である可能性が高い。

図示した遺物は3点で、全て一括取り上げである。1は尖底土器の底部である。磨滅が著しいが、内外面とも貝殻条痕文が施されている。子母口式から鶴ガ島台式にかけての尖底であろう。2は安山岩製の磨石である。3は砂岩製の敲石である。側縁部が磨滅している。



第36図 SI003住居跡



第37図 SI004住居跡、出土遺物



#### SI003 (第36図)

J56-26-28・36-38グリッドに位置する。南東約10mにSI004住居跡がある。長軸42cm、短軸34cmの楕円形で、深さ10cmの炉跡を中心として6基のピット群が確認されたことから、住居跡と判断した。破線が住居跡の推定範囲であるが、南半は不明である。範囲内にはSD011があり、ピット2基が壊されている。出土遺物は繊維を含まない無文の小破片で、少量出土したのみであった。したがって、本遺構の時期は確定できないが、後期前葉の所産と考えたい。

#### SI004 (第37図、図版3・25)

K56-41グリッドに位置する。北東約12mにSI007住居跡がある。炉跡及び炉跡に近接して倒置された土器が出土したことから住居跡と判断した。周辺には柱穴となるようなピットは検出されなかった。炉は50cm×47cmで、掘込みは20cmを測り、炉底はわずかに焼けた程度であった。炉の南東約50cmに倒置された土器は周辺からわずかに床面を窪ませて置かれていた。この土器が当遺構の時期を示しているものと考えられ、堀之内1式の所産であろう。

図示した遺物は1点である。1はほぼ完形に近いが、底部の中央部分を欠損する。口縁部は全周遺存しており、3単位の突起をもつ。胴部上半は全面的に縄文が施される。口径27.2cm、底径8.4cm、器高39.8cmを測る。

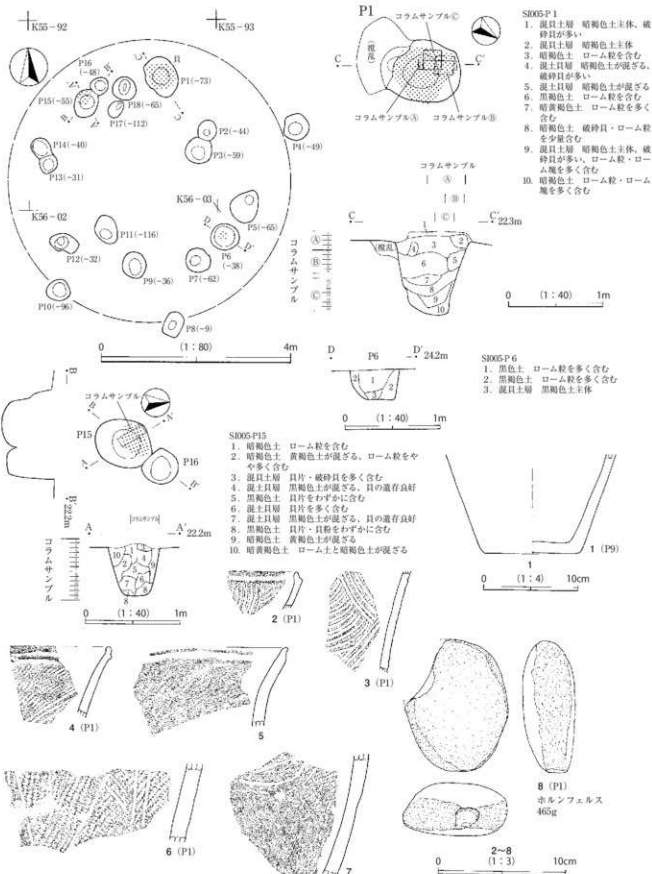
#### SI005 (第38図、図版3・28・40)

K55-92・93、K56-02・03グリッドに位置する。北東約1.5mにSK015が、南西約3mにSK014がある。炉は検出されなかったが、深さのあるピット群が不整形に集中することから住居跡と判断した。P1・P6・P15から貝ブロックを検出した。P1は85cm×65cm、深さ73cmを測り、遺構確認面ではほぼ全体に貝層が認められ、覆土全体に堆積していた。このためコラムサンプルは確認面から坑底までの貝層中心部で採取した。P6は直径56cmで深さ38cmを測り、底に小規模な貝ブロックが認められた。P15は71cm×53cm、深さ55cmを測る。やはり遺構確認面から底近くまで複数の貝層が認められ、コラムサンプルを採取した。貝ブロックを伴わないピットは13基あり、深いものが多い。住居跡の範囲はわからないが、直径6mの円を参考に図示した。ピット内から堀之内1式から2式にかけての破片が出土したが、大形破片は堀之内1式がほとんどであり、当遺構も堀之内1式の所産と判断される。

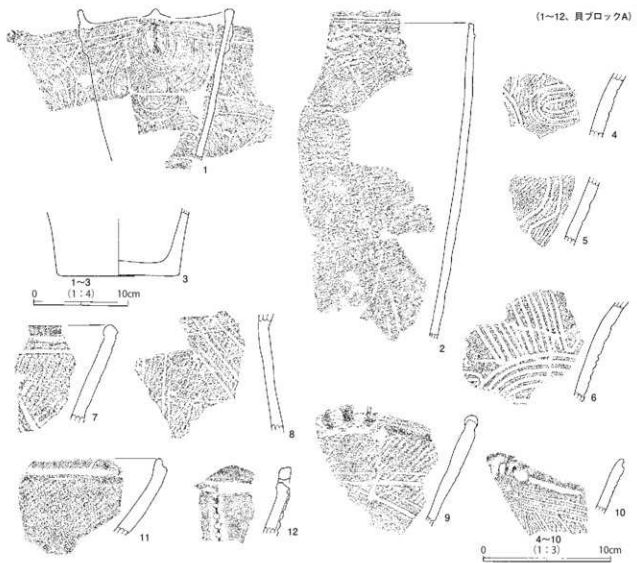
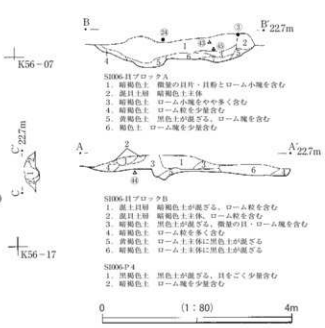
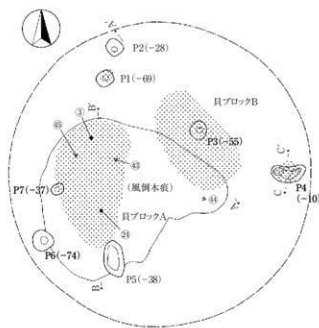
図示した遺物は8点で、1がP9から、2～4・6・8がP1から出土した。1は底部の約70%が遺存しており、残存器高10.5cm、底径10.0cmを測る。内面の底部を除く部分に煤が付着している。2・3は地文の縄文を磨り消して平行沈線による文様が描かれる。4は口縁部に隆線が巡る。上下端はなぞられている。5は口縁部に浅い沈線が巡る。6は地文の縄文に2本一単位の沈線が施される。7も同様で、遺存部下半は磨かれている。8はホルンフェルス製の磨石である。

#### SI006 (第39～41図、図版25・28・29・40・41)

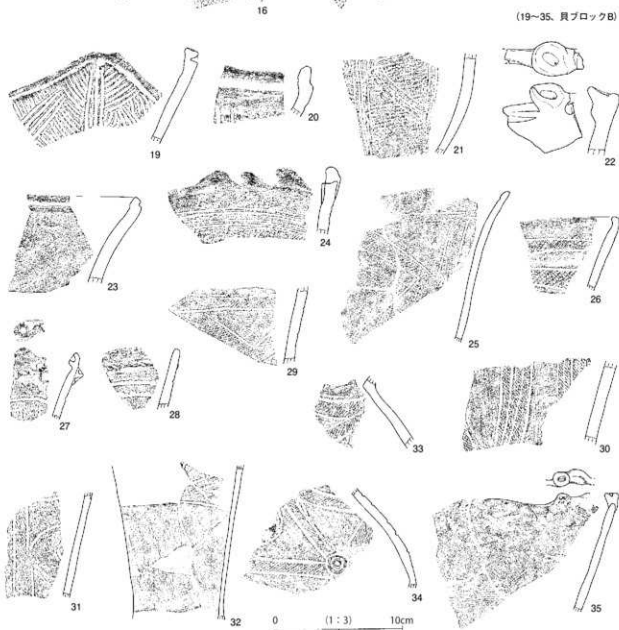
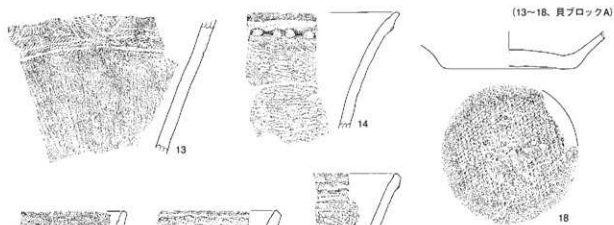
K56-06グリッドを中心として他グリッドにまたがる範囲に位置する。大小4か所の貝ブロックとピット群及び比較的豊富な遺物の出土状況から住居跡と判断した。しかし、住居跡推定範囲の中央に大きく風倒木痕があり、その南東に隣接して大きい樹木があったため住居跡の原形をほとんど残していない。なお、南西端でSI007住居跡と切り合っていた可能性が高い。炉は確認できず、風倒木痕内の覆土にも焼土は認められなかった。ピットは7基確認され、その内3基は深さが50cm以上あり、柱穴と思われる。貝ブロックはピット内貝ブロック2か所(P1・P4)と、風倒木痕上にあつて原位置を保っていない貝ブロック



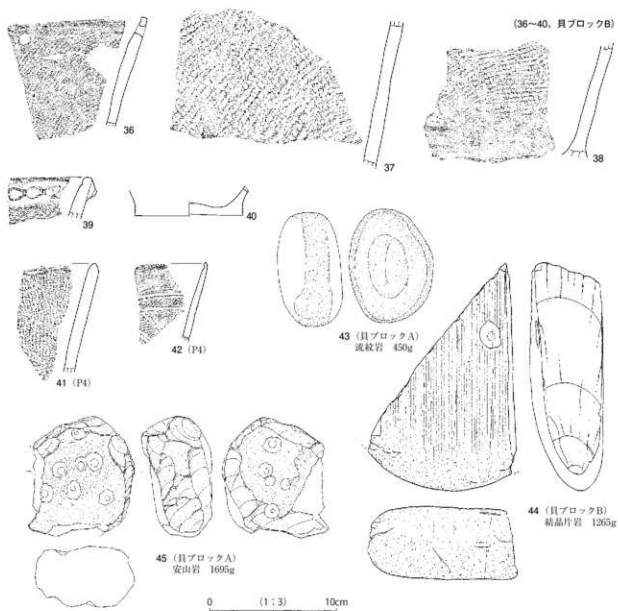
第38図 SI005住居跡、出土遺物



第39図 SI006住居跡、出土遺物(1)



第40図 SI006住居跡出土遺物(2)

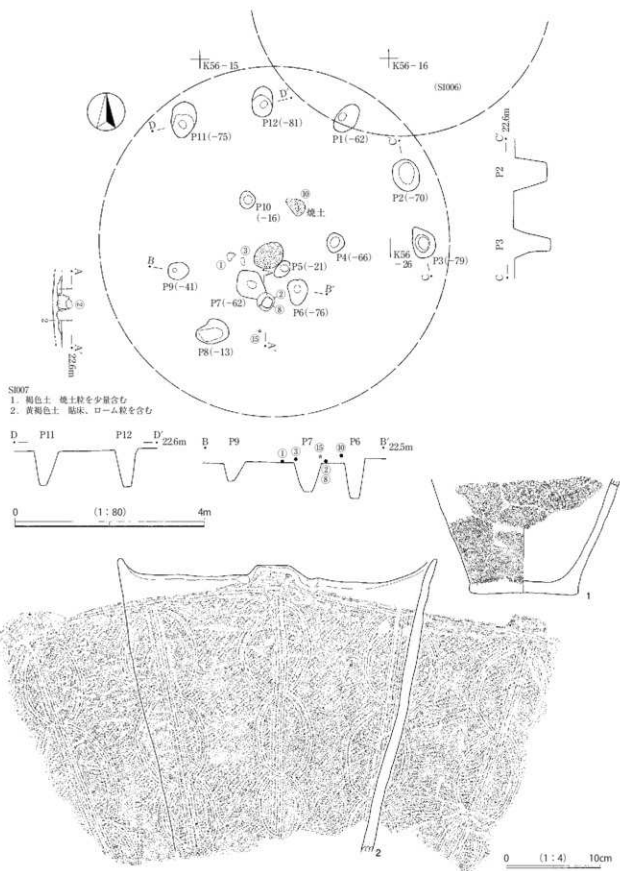


第41図 SI006住居跡出土遺物 (3)

2か所(貝ブロックA・貝ブロックB)がある。このうち貝ブロックAは遺構確認面より上で検出され、長軸2.7m、短軸1.5mの広がりを持ち、一部に貝密度の濃い混貝土層が認められるものの、大部分が貝を微量含む土層で、最も厚いところでその堆積は50cmを超える。貝ブロックBも遺構確認面より上で検出され、長軸2.2m、短軸1.4mの広がりを持ち、分布の中央付近を主に厚さ26cmの混土貝層が認められた。P1は風倒木痕跡の遺構確認面で検出され、厚さ65cmの堆積が認められた。P4は2基が重なった浅いピット上に検出された。貝がごく少量混ざるブロックである。出土遺物は風倒木痕内を主に多く出土し、堀之内2式が多数を占める。ピットからも堀之内2式の土器が出土しており、当遺構も堀之内2式の可能性が高いと判断される。

図示した遺物は45点で、1~18・43・45は貝ブロックA、19~40・44は貝ブロックB、41・42はP4の貝ブロック出土である。1は口縁部の約50%が遺存しており、口径16.6cm、残存器高16.0cmを測る。口唇部には4単位の突起をもつとみられる。4単位の口唇部直下には、縦位の線縁が貼付される。胴部の文様

は沈線のみで描かれ、地文は無文である。2は地文に縄文が施され、口縁部には紐線文が貼付され、上から指頭で粗雑に押捺される。口縁部内面には、棒状工具等によるくっきりとした沈線が施される。3は底部がほぼ完全に遺存しており、残存器高7.1cm、底径は13.0cmを測る。4・5は縄文を地文とし、複数の沈線によって文様が描かれている。沈線と沈線の間は、磨り消されていない。6は集合沈線が施される。7は縄文を地文とし、口縁部直下を2本一組の浅い沈線が巡る。胴部にも2本一組の沈線が施されているようである。内面口唇部直下は指でなぞったような浅い沈線が巡る。8は縄文を地文とし、集合沈線による文様が施される。9は波状をなす口縁部の破片で、頂部に3個の粘土粒が貼付される。縄文を地文とし、2本一組の沈線で文様が描かれ、内面は口唇部直下に浅い沈線が巡る。10は口縁部の突起付近の破片である。頂部はキザミが施され、口縁部直下には沈線が巡る。胴部は縄文を地文とし、集合沈線で文様が描かれる。11は縄文のみである。口縁部直下に沈線が巡る。12は深鉢の把手部分である。口縁部直下には2本の沈線が巡り、頂部の位置には貫通孔があげられている。縦位に貼り付けられた紐線には細い棒状工具によるとみられる押捺が施されるが、一番上は刺突となっている。13は地文に縄文が施された後、沈線で文様が描かれている。文様帯より下側は丁寧に縦方向に磨かれている。14・15は縄文を地文とし、口唇部直下にキザミの施された紐線文が巡る。口内面口縁部には沈線が巡る。16・17も同様だが、2本一組の沈線が胴部に施される。18は網代瓦痕のある底部で、底径9.9cm、残存器高3.0cmを測る。19は口縁部頂部の破片である。頂部の刺突を中心に集合沈線による文様が施される。20も縄文を地文として集合沈線が施されていたものかもしれない。21も同様だが、集合沈線は櫛歯状工具により施されたものとみられる。22は把手部分の破片で、遺存部分は無文である。遺存部右端には貫通孔がある。23は口唇部直下に沈線が巡る以外は無文である。24は突起部分の口縁部破片で、縄文を地文とし、櫛歯状工具により横位に沈線が施される。25は波状口縁をなす。縄文の地文を沈線で区画し、区画内は磨り消される。26も同様である。27はキザミの施された隆線上に刺突により「8」の字状の隆線が貼付される。内面口唇部にも中心に刺突の施された円形の粘土が貼付される。浅鉢と思われる。28は器面が磨耗しており、遺存部分に縄文の地文があるが明らかでない。29は縄文の地文を沈線で区画し、区画内は磨り消される。30は地文の縄文上に縦位に粗く4本の沈線を施し、外側の部分を磨り消している。31は2本の沈線により直線と円形文様が施される。文様の外側は縄文が磨り消されている。32は器壁が薄く、内外面とも丁寧に磨かれている。遺存部上端には沈線による文様帯が認められる。磨耗により明らかではないが、地文に縄文が施されていたかもしれない。33・34は注口土器で同一個体である。LR縄文を地文とし、帯状の平行沈線で幾何学的な意匠を描出して帯の外側の三角形部分を磨り消す。34左端の楕状になっている部分は注口の圓縁と推測される。35は胴部に多状の平行沈線を横走させ、口縁部との間を同一原体と思われる多条の平行沈線による斜格子で充填する。口唇上は小さな円筒状の把手と捻り紐状の隆帯が貼り付けられるが、欠損しているため全容は不明である。焼成は良好であるが全体に歪みが大きい。36～38・41は縄文施文の深鉢で、底部から口縁部へ直線的に開く器形を呈する。39は縄文地文に口縁部に沿って紐線文が貼り付けられるものである。口縁内部には細い棒状工具による沈線が巡る。加曽利B式の粗製深鉢である。42は25などと同様、地文縄文で平行沈線による幾何学文描出後、平行沈線内を残して縄文を磨り消す。40は深鉢底部で、底径は8.6cmである。43は流紋岩製の磨石である。44は結晶片岩製の石皿である。45は安山岩製の凹石である。

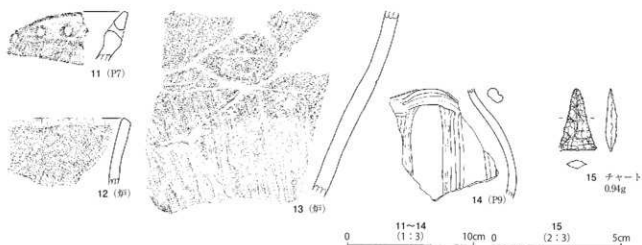


第42図 SI007住居跡、出土遺物(1)

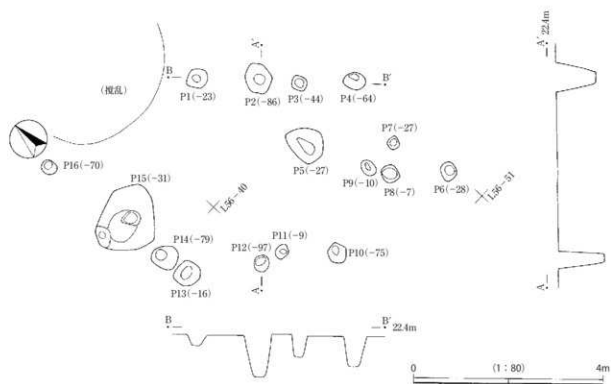


第43図 SI007住居跡出土遺物(2)

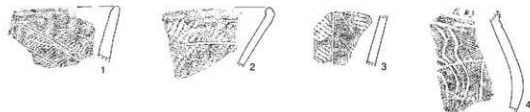




第44図 SI007住居跡出土遺物 (3)



(1~4, P2)



第45図 SI009住居跡、出土遺物

0 (1:3) 10cm

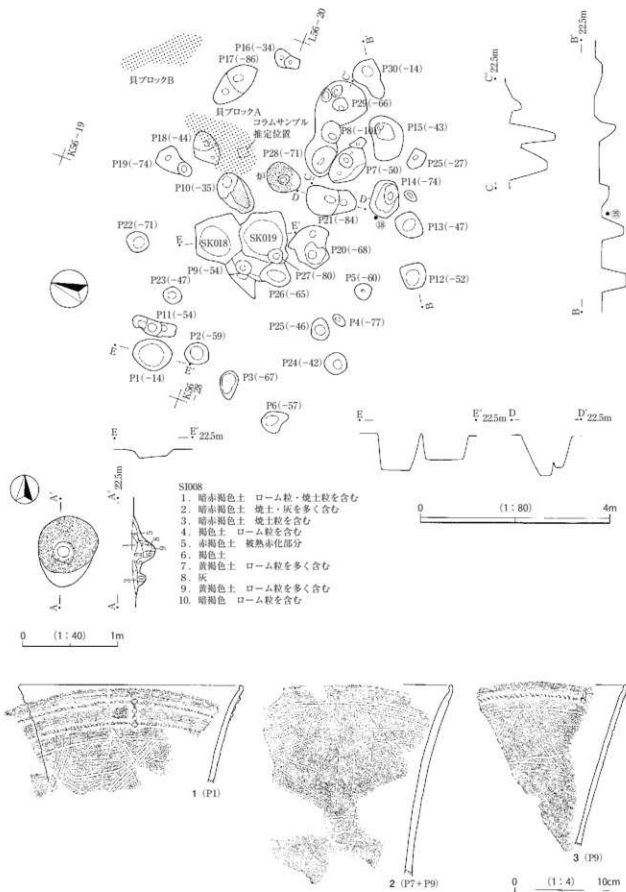
SI007 (第42～44図、図版3・25・29・38)

K56-14-16・24-26グリッドで検出された。掘込みはないが、炉、炉付近の床面から出土した倒立土器及び周辺の掘込みの深いピットから住居跡と判断した。住居跡の平面形は不明瞭であるが、炉を中心に直径7.4mの破線で囲んだ部分がおおよその範囲であろう。北側の一部はSI006住居跡と切り合っていたと思われる。炉周辺の住居跡中心部分の床はピットの遺構確認面より8cmほど低く、貼床が認められた。炉は長軸68cm、短軸53cmの楕円形で、炉底は比較的良好に焼けていた。炉の南側へ1m離れた貼床上から土器2が倒立した状況で出土し、炉の北東側1mには焼土の堆積が認められた。炉周辺のピットは深さ40cm以上のものが9基検出され柱穴と思われるが、他の浅いピットは柱穴かどうか判断できない。遺物は倒立土器も含め比較的まとまっており、大多数が堀之内1式である。当遺構の時期を示していると思われる。

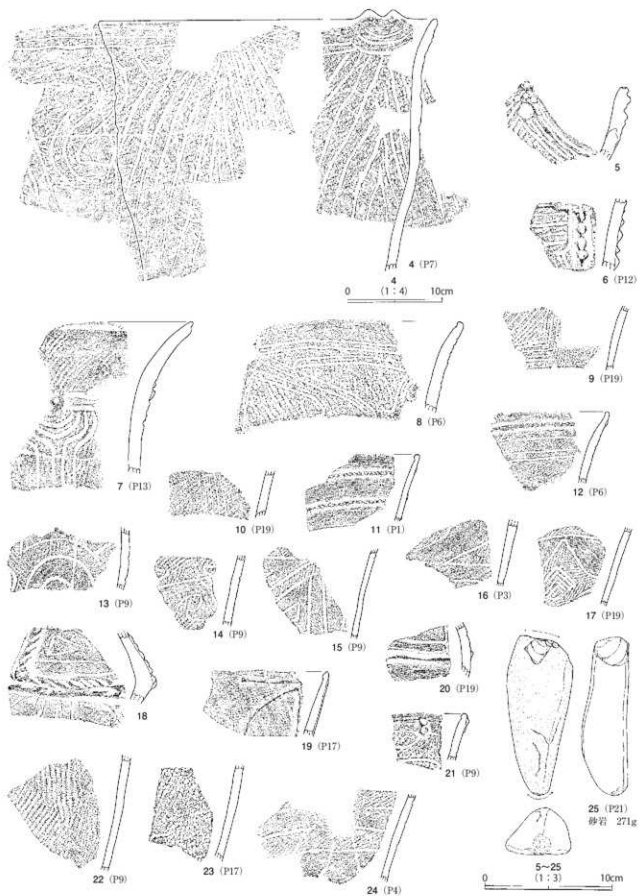
図示した遺物は15点で、1・2・8が床面直上、7・12・13が炉、6がP12、11がP7、14がP9、他は覆土中出土である。1～3・5は器形復元ができる土器である。1はLR縄文を地文とする深鉢底部で、残存器高12.1cm、底径は11.5cmを測る。熱を受けており磨耗している。2は深鉢上半部で、口径は33.6cm、残存器高は30.9cmを測る。LR縄文を地文とし、横長逆台形の把手が口唇上に四単位貼り付けられ、そこから6～7本一単位の櫛羽状工具による多条沈線を垂下させる。この多条沈線は突起と突起の間にも配されており、全部で8単位の沈線が垂下されている。そしてこの沈線が中心となるように、多条沈線でそれぞれ外反するように3対の弧線を描出する。3は底部から口縁部に向かって直線状に開く器形を呈し、頂点三対の波状口縁となっている。口径は40.0cm、残存器高は26.0cmを測り、器面にはLR縄文が施されるのみである。なお3と10は同一個体である。5は底部から開くように器壁が立ち上がり、胴部中間から直立する器形を呈するものである。残存器高は40.0cm、胴部最大径は30.6cmを測る。これも器面にはLR縄文が施されるのみである。熱を強く受けている。4・6・7・11・12は深鉢口縁部である。4は底部から口縁部に向かって直線状に開く器形を呈し、LR縄文を地文として半截竹管による平行沈線で紡錘形あるいは菱形の幾何学文を描出する。なお4と9は同一個体である。6・7はいずれもLR縄文を地文とし、2本一組の沈線を口縁に沿って巡らせ垂下する沈線を配する。11は扇状の把手をもち3か所穿孔され、胴部側はLR縄文である。12は外反する形状の口縁部でLR縄文を地文とし、口唇部が外削ぎ状に整形される。8は直線的に開く器形を呈する深鉢胴部で2に伴って出土している。半截竹管による幾何学文が施されるが、熱を強く受けており器面の磨耗が顕著である。13は深鉢胴部でLR縄文を地文とし、かなり幅の広い2本一組の平行沈線が水平方向から鋭角に向きを変えている。14は球形の胴部に口縁部がすぼまる器形を呈する鉢と思われる、垂直方向の2本の隆帯を繋ぐように橋状の把手が付けられる。15はチャート製の石敷である。

SI008・SK018・SK019 (第46・47図、図版3・6・25・29・30・40)

SI008はK56-18-19・28・29グリッド位置する。掘込みはないが、炉及び周辺に掘込みの深いピットが集中することから住居跡と判断した。住居跡の広がりは不明であるが、炉を中心とした直径約8mの図示した部分とその範囲と思われる。SI009住居跡が南東に隣接し、炉の西約1mにSK018・019土坑がある。炉は長軸76cm、短軸60cmの略円形で、中央に直径25cm、深さ20cmのピット状の窪みを持つ。ピットの壁を含む炉底は堅く焼けており、ピット内には灰の堆積が認められ、炉内には焼土、灰混じりの焼土が堆積していた。またP1からは獣骨が出土し、P10内には焼土の堆積が認められた。ピットは30基以上あり、重複するものもある。ピットの規模、深さはさまざまであるが、深さ40cmを超えるものが柱穴と思われる。



第46図 SI008住居跡、SK018・019土坑、出土遺物(1)



第47図 SI008住居跡出土遺物(2)

ビットの配置はかなり複雑であるが、大まかに直径約6m～8mの楕円形に配置されるものと、直径約4mの円形に配置されるものの2種類が観察される。これらの性格については第3章で述べる。

SK018・019はK56-28グリッドに位置し、SI008住居跡内にある。発掘時はSI008と一体の遺構として調査したが、規模と深さから土坑と判断した。SI008との新旧関係は不明である。SK018は1.17m×1.03mの略円形をなし、深さ50cmを測る。SK019は1.1m×0.9mの略円形をなし、深さ78cmを測る。なお、遺物は全てSI008のP9出土として取り上げているため、区分はできない。

炬の北には長軸1.9m、短軸1.0mの範囲を持つ貝ブロックAが検出され、貝層内から埋葬人骨が出土した。貝層の厚さは人骨をわずかに覆う程度でごく薄い。埋葬人骨については後述する。貝層からはコラムサンプルを採取している。貝ブロックAの北東には長軸1.8m、短軸0.66mの範囲を持つ貝ブロックBが検出された。貝層の厚さは最も厚い部分で22cmを測る。

出土遺物は堀之内1式と堀之内2式が混在している状況で、一様ではない。ここでは堀之内1式の遺構と堀之内2式の遺構が切り合っている可能性を指摘しておく。

図示した遺物は39点である。1～25はSI008出土で、1・11はP1、2・4はP7、2・3・13～15・21・22はP9（もしくはSK018・019）、6はP12、7はP13、8・12はP6、9・19・17・20はP19、16はP3、19・23はP17、24はP4、25はP21、その他は覆土中である。なお、貝ブロックA出土の土器は、埋葬人骨の項の第81図に示した。1・2は器形復元が可能な深鉢で、いずれも底部から口縁部に向かって外反する器形を呈する。1は推定口径23.7cm、残存器高は10.3cmを測る。キザミを持つ2段の横走細隆線と、それを連結する円形刺突を持つ縦位の隆線により口縁部文様帯が構成される。胴部は横走沈線に区画され、3本一組の沈線による対向三角文と単沈線による長楕円とが横方向に交互に配される。地文はL R縄文であるが不鮮明である。11も同一個体である。2はP7とP9出土の破片が接合している。沈線による上下区画の中を、三角形を基調とする磨消縄文帯で充填する。3は口縁に沿った1段の細隆線に、先の尖った棒状工具による刺突列が施され、「8」の字状貼付文が配される。胴部は沈線で区画し、2本一組の平行沈線を上向きと下向きの三角形が交互に横並びに配されるように配する。熱によって磨耗しており極めて不鮮明である。4はやや大形の深鉢で、推定口径35.8cm、残存器高は27.5cmを測る。総数は不明であるが小突起2単位を一組とした突起が口縁に配され、それを囲むように3本一組の沈線が半円状に配される。そこを起点に口縁と平行する沈線と放射状に垂下する沈線とが描かれ、間を「S」字状の沈線で充填する。地文はかなり軸の太い原体を用いている。5は液状口縁を呈する深鉢の口縁部で、波頂部と周辺に先の尖った棒状工具による刺突を施し、口縁に沿って多条の沈線を配する。6・7は頸部にくびれを持つ深鉢である。6は頸部に当たり、刺突列を伴う縦位の隆線の両側に半截竹管による平行沈線を配する。SK010の1と同一個体である。7は頸部に刺突を持つボタン状の貼付文を配し、囲むように弧状の沈線と垂下する沈線を配する。被熱により器面は荒れている。8は半截竹管による平行沈線を口縁に沿って巡らし、その下を三角形基調のモチーフで充填するが、角は丸くなりやや曲線的に変化している。9・10は多条沈線によって縦区画もしくは三角形のモチーフを描出する。12は口縁下に細隆線を巡らし、その下に多段の横位沈線を配して交互に磨消縄文帯を構成する。被熱によって器面は荒れており、細隆線にキザミがあるかどうかは不明である。13は球形の胴部に頸部がすぼまる形状を呈すると思われる鉢で、平行沈線により曲線的なモチーフを描出する。14～17は直線的に外反する深鉢の胴部である。文様は14は曲線的、15は直線的で平行沈線による磨消縄文、16は中間的、17は菱形を構成し中心部を多条沈線で充填する。18は注口土

器と考えられ、胴部屈曲上にキザミを伴う隆帯を配するとともに、縦位に区画する隆帯との交差部に円形刺突を伴うボタン状貼付文を配する。横位隆帯に沿って平行沈線による縄文帯と三角形のモチーフを配する。19は縄文を施文せず、細隆線を口縁沿いと縦位及び弧状に配する。口縁部の細隆線は途中で剥落している。モチーフ及び技法はやや異質であるが、口唇部の断面形状や成形技法から堀之内2式でも矛盾無いと考えられる。20は球形の胴部に頸部がすぼまる器形を呈する鉢と考えられるもので、胴部のもっとも膨らんだ部分に横位の細隆線を貼り付け、その上側にやや平らな棒状工具による平行沈線を配する。沈線底に微量の赤色顔料が付着しており、赤彩土器であった可能性がある。21は直線的に外反する深鉢口縁部で、単沈線による楕円形のモチーフが描かれるが、縄文の磨消しは行わない。22・23は縄文施文のみの深鉢胴部である。24は直線的に外反する深鉢胴部で、横走する沈線を区画として交互に縄文帯を配する。被熱しており器面は荒れている。25は砂岩製の敲石である。上端側にも細かい敲打痕が観察される。

#### SI009 (第45図、図版30)

K56-39・49、L56-30・40グリッドに位置する。北西約2mにSI008住居跡、北東約2mにSI010住居跡がある。17基のピットがほぼ長楕円形に廻り、深いものもあることから住居跡と判断した。なお、北端は攪乱があり、ピットの存在は不明である。中央付近には皿状の浅い掘込みがあるが、焼土は確認できなかった。遺物はごく少ないが堀之内2式が主体であり、当遺構も堀之内2式の所産と推測される。

図示した遺物は4点で、全てP2出土である。1・2は直線的に開く深鉢の口縁部である。1は縄文を地文として櫛羽状工具による集合沈線を縦位及び斜位に施す。口縁部の内側を削いで断面尖頭状としている。2も縄文を地文として単沈線を水平に巡らせる。3は直線的に開く深鉢の胴部で、縄文施文後沈線で幾何学的なモチーフを描出し、帯状に磨り消している。4は胴部が下膨れで頸部がすぼまる形状の鉢の胴部で、図上端部で屈曲して外反する。沈線で区画された隆線に指頭押圧でキザミを施し、下側は縦及び蛇行する沈線を配して縄文を充填する。

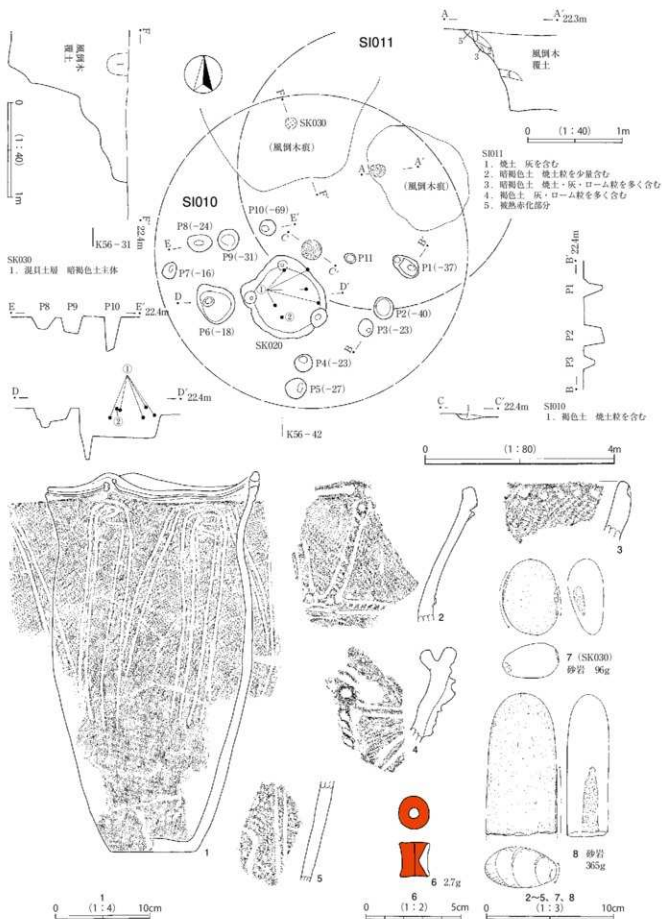
#### SI010・SI011・SK020・SK030 (第48図、図版4・7・26・30・40)

SI010はL56-21・22・31・32グリッドに位置する。炉及び周辺のピット群から住居跡と判断した。住居跡の広がりとは不明であるが、炉を中心とした直径約6.6mの破線で図示した部分はその範囲であろう。炉の南西に隣接してSK020土坑が重複するが、SI010と同一の遺構として調査したため新旧関係は確認されていない。炉は直径42cmの略円形で掘込みは浅く、炉底もほとんど焼けていない。炉の東60cmにあるピットには貝が詰まっていた。ピットは15基検出され大部分は本住居跡に属する柱穴と思われるが、一部はSI011のピットの可能性もある。

SI011はL55-22グリッドに位置する。風倒木によって壊された住居跡の炉である。炉の西側掘込みの堅く焼けた面が遺構確認面から深さ20cmまでわずかに残り、炉覆土の焼土や灰は風倒木痕側流れ込んでいる。住居跡の炉と判断したが、風倒木の北東側は調査範囲外で柱穴の有無は不明である。参考までに本炉を持つ住居跡の推定範囲を、炉を中心とした直径6mの破線で示した。なお、風倒木痕内からの遺物の出土はない。

SK020はL56-31・32グリッドに位置する。長軸1.66m、短軸1.53mの略円形で、遺構確認面からの深さは60cmを測り、鍋底状の断面形態を持つ。壁に沿って3か所小ピットが穿たれる。

SK030貝ブロックはL56-22グリッドに位置する。風倒木痕内の遺構確認面から検出した。直径22cmの円形の広がりを持ち、23cmの厚さで堆積していた。SI010住居跡に属するものか、SI011住居跡に属するもの



第48図 SI010・011住居跡、SK020・030土坑、出土遺物

か判断できない。敲石が1点出土している。

各遺構の時期は、SI010とSK020は堀之内1式の所産と判断される。SI011とSK030貝ブロックは不明である。

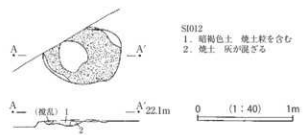
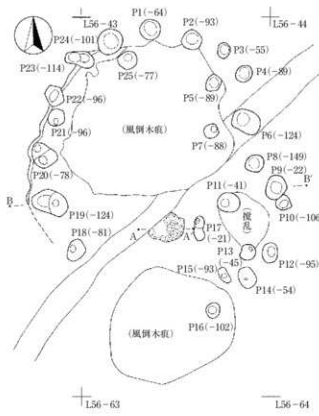
図示した遺物は8点で、7以外はSI010もしくはSK020出土である。1と2は平面上ではSK020の範囲内から出土しているが、SI010との新旧関係が不明なため帰属を判断することはできない。仮にSK020が新しい場合は素直にSK020出土とすることができるが、SI010が新しい場合SI010の床面出土と判断することも可能である。1は頸部にくびれをもつ深鉢で、口径22.5cm、器高40.0cm、底径9.0cmを測る。縄文地文に単沈線2本一組で縦位のモチーフを6対配する。内側の沈線は蛇行しており堀之内1式の古い様相の名残を留めている。2も1と同様の器形を呈する深鉢で、縄文地文に頸部くびれの部分にキザミの入った横位の隆線を貼り付け、その下を磨り消している。3～6・8は一括取上げである。3は底部から緩やかに開き、徐々に直立する形状を呈する深鉢の口縁部である。口唇に沿って連続した指頭押圧を施す。4は底部から直線的に外反する器形を呈する深鉢の口縁部である。キザミをもつ縦位の隆線の上端に円形刺突をもつボタン状貼付文を配し、その上に橋状把手をつけている。把手正面には円形刺突が施されるが拓本では省略している。5は深鉢の胴部で、周縁部が研磨されたような痕跡がある。円盤への加工を意図したものかは不明である。6は土製耳飾りである。長さ18mm、最大径16mm～18mm、孔径5mm、重量2.7gを測る。一部欠損があるがほぼ完形である。全面に赤彩が施される。8は砂岩製の敲石で、側縁部に敲打痕が観察されるほか、表面全体に研磨痕が観察される。7はSK030から出土した敲石で砂岩製である。両側縁に敲打痕が観察される。

#### SI012 (第49図、図版4・30・40)

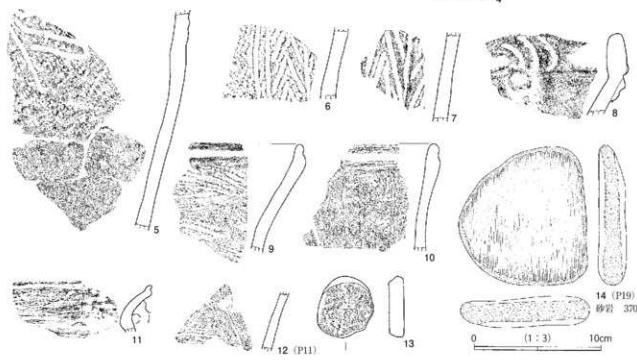
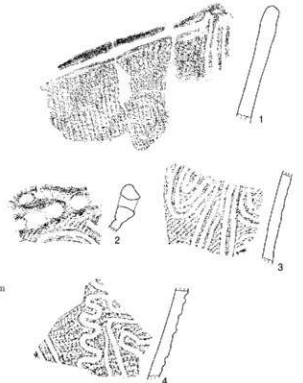
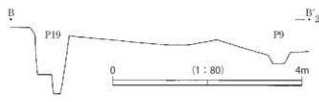
L56-42～44・52～54グリッドに位置する。東側にSI013住居跡が隣接し、北西3mにSI010住居跡がある。溝や掘乱が各所に入るが、住居跡全体の形状はほぼわかる。ほぼ南北に長軸を持つ楕円形をなし、長軸の長さ約6.5m、短軸の長さ6mを測る。住居跡の北側から西側にかけて高さ15cm程度の壁がかろうじて確認できた。炉は住居跡の中心からやや南東にずれた位置に設けられている。一部を溝に壊されているが、東西に長い楕円形をなし、規模は80cm×60cm、深さ7cmを測る。炉底は堅く焼け、灰混じりの焼土が薄く堆積していた。ピットは24基あり、壁際に一重ないし二重に巡る。ほとんどが柱穴と思われ、深いものが多い。遺物は床面から散漫に出土したが、風倒木の掘乱内の遺物も本来は住居跡に帰属するものとみなしてともに掲載した。遺構の時期は出土遺物から堀之内1式と判断される。

図示した遺物は14点である。12がP11から、14がP19から出土した他は全て風倒木の掘乱あるいは覆土一括である。1・2は直線状に開く器形を呈する深鉢の口縁部である。1は波状口縁で、縦位LR縄文を施文し、波頂部から沈線を垂下させる。2は波状口縁の波頂部に小把手を設けるもので、正面側に1か所の穿孔と2か所の刺突、上面にも1か所刺突が施される。3・4・6・7は同様の器形の深鉢の胴部で、いずれも沈線を多用する。6・7は縦位沈線の間に「V」字状モチーフの沈線を充填し、7は地文が省略される。8～10は頸部に弱いくびれをもつ器形を呈する深鉢の口縁部である。8は口唇部を山形に突出させ、断面円形の棒状工具で3本の弧線を配し、その両側に円形刺突とそこを起点とする沈線を配する。弧線の下側には粘土粒をボタン状に貼り付け円形刺突を施し、下側にキザミをもつ隆線を縦位に配する。9・10は口縁に沿って沈線を巡らせるもので、9は地文縄文、10は無文である。5は同様の器形を呈する深鉢の胴部で、器壁が底部から開くように立ち上がりだんだん直立する。下側は被熱が顕著で器面は荒れてい





SI012  
 1. 暗褐色土 焼土粒を含む  
 2. 焼土 灰が混ざる



第49図 SI012住居跡、出土遺物

る。11は球形の胴部と頸部がすままる器形を呈する鉢の口縁部から頸部にかけてで、屈曲はかなり強い。欠損しているが図右側には小突起があり、その下側には橋状把手が付けられている。12は直線的に開く深鉢の胴部で、地文縄文に平行沈線による幾何学的なモチーフが描かれるが、縄文を磨り消した痕跡は認められない。13は土器片円盤で、上下長33.0mm、最大厚7.5mm、重量8.6gを測る。左側は欠損している。14は砂岩製の磨石である。

#### SI013・SK021（第50・51図、図版4・7・26・27・30）

SI013はL56-44・54・55グリッドに位置する。東側は調査区域外で、西側にSI012住居跡が隣接する。深さ50cm以上のピットが弧状に並ぶことから住居跡と判断した。範囲内にはSK021がある。合計13基のピットのうちP1とP6から貝ブロックが検出された。いずれもピット内に貝が充満していた。

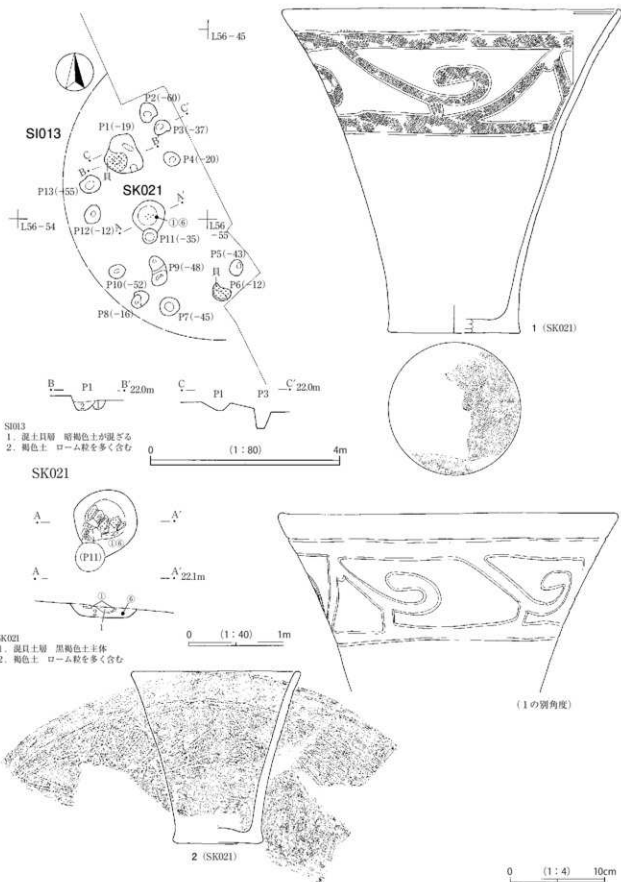
SK021はL56-44グリッドに位置する。SI013住居跡のほぼ中央にあり、直径66cmの円形で、深さ15cmを測る。鍋底状の断面形態を持ち、底から浮いた状態で土器1が出土した。また、土器上には貝小ブロックが認められた。

SK021から出土した遺物は堀之内2式が主体であるが、それ以外のピットから出土した土器は堀之内1式がほとんどである。SI013は堀之内1式、SK021は堀之内2式の所産と判断される。

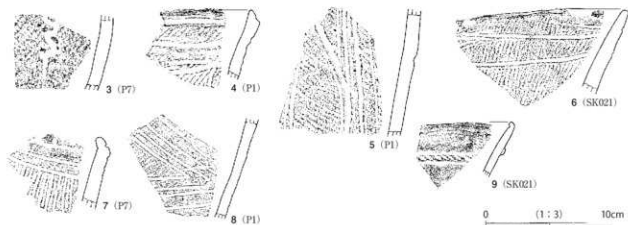
図示した遺物は9点で、1・2・6・9がSK021から、3・7がP7から、4・5・8がP1から出土した。1は直線的に開く形状の深鉢で、口径35.3cm、器高34.3cm、推定底径14.0cmを測る。口縁下3cmを上端、14cmを下端として2.5cm間隔の平行沈線を上下それぞれ水平に巡らせて区画を構成し、上側の平行沈線から斜めに下がって下側の区画沈線直上で転回して閉塞する、釣針に似たモチーフを5対、配すると思われる（残存しているのは4対）。下側の区画沈線に接近した位置には縦位の平行沈線が配されて、釣針状のモチーフと下側区画沈線とを連結している。縄文は後から充填されている。実測図右側の三角形のモチーフは1か所しか描かれていないため、ここが正面になる可能性が高い。全体に調整は丁寧で焼成も良好である。2は1と同様の形状を呈する深鉢で、口径17.4cm、器高18.2cm、推定底径9.6cmを測る。上側の区画沈線はとりえず2本一組ではあるが間隔は不揃いで、下側に至っては途中で線が1本消滅している。また、区画内のモチーフも菱形や三角形などを描こうとしているのは認められるが、製作技法は全体に粗雑である。なお、縄文は沈線施文後充填されているが、かなり不鮮明である。3は底部から器壁が開くように立ち上がり口縁部へ直立する形状の深鉢胴部で、縄文地文に蛇行する単沈線が配される。4は底部から器壁が直立し口縁部へ外反する形状の深鉢口縁部で、若干肥厚した口唇部を外削ぎ状に成形し、沈線を巡らせる。平口縁として復元しているが、右側縦位の沈線上を波頂部とする小波状口縁となっている可能性もある。5は3と同様の形状の深鉢胴部で、沈線の施文具は半載竹管である。6は4と同様の器形を呈する深鉢口縁部で波状口縁である。地文はLR縄文の条が縦位になるよう施文し、沈線は半載竹管を工具としている。7は口縁部がやや強く外反する形状の深鉢で、口唇部を内側へ折り返し、口唇上に沈線を巡らせる。口縁部に沿った横走沈線の下側は縦位の沈線を多数集合させる。8は直線的に開く形状の深鉢胴部で、縄文施文後平行沈線を多重に描き、中心側を残して縄文を磨り消している。9も同様の形状の深鉢口縁部で、口縁部外面は無文のままキサミをもつ隆線を貼り付ける。

#### SI014（第52図、図版4・26・31・40）

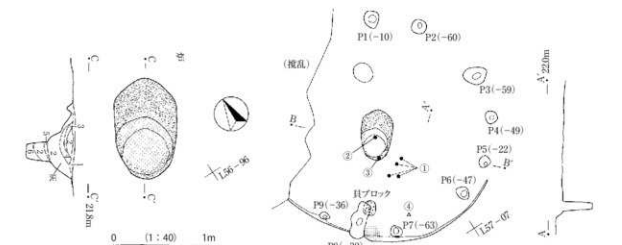
L56-86・87・96・97グリッドに位置する。南西側の一部はSI015と重複していたと思われる。南西は深さ16cmの掘込みが残るが、東から北にかけては検出できなかった。また、北西側は撓乱が広くみられ住



第50図 SI013住居跡、SK021土坑、出土遺物(1)

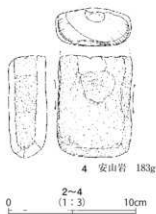
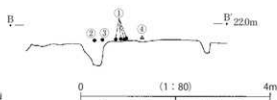
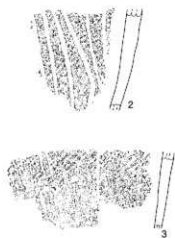
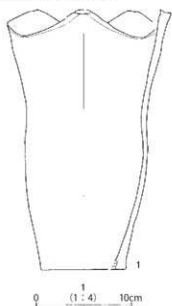


第51図 SI013住居跡、SK021土坑出土遺物(2)



SI014

1. 褐色土 焼土粒・灰を含む
2. 灰
3. 焼土
4. 暗褐色土
5. 黄褐色土 灰を含む
6. 黒色土 炭化材を多量に含む



第52図 SI014住居跡、出土遺物

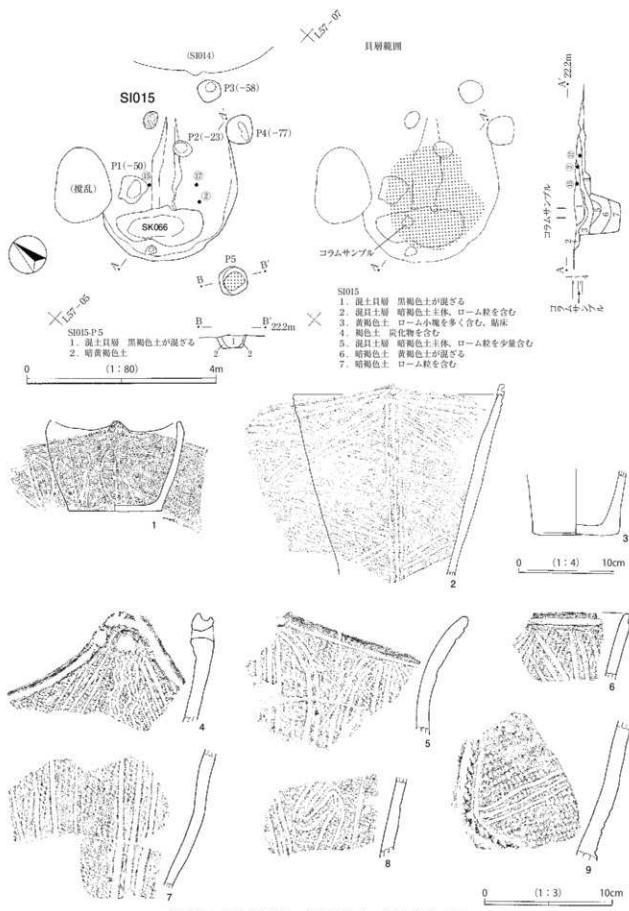
居跡全体の規模は把握できないが、北西-南東方向に長軸を持ち、短軸長約5mの小判形の形状であったと思われる。炉は住居跡の中心よりやや南西に片寄っているようである。直径110cmの円形をなし、中心に直径50cm、炉底からの深さ50cmを測るピット状の掘込みを持つ。ピット底には炭化材が詰められ、その上に灰が厚く堆積していた。炉底は堅く焼け、その範囲は炉の北東外にまで及んでいた。炉の北東に灰の堆積が認められ、南西壁際に貝ブロックと焼土が検出された。貝ブロックは30cm×26cmの範囲に床面に接して8cmの厚さで堆積していた。サンプルとして一括採取した。ピットは10基確認された。規模の小さいものが多いが、いずれも壁柱穴と思われる。当遺構は出土遺物から堀之内1式の所産と判断される。

図示した遺物は4点で、1は床面から、2・3は炉の上面から、4は覆土中から出土した。1は胴部に弱くびれをもつ深鉢で、口縁部はほとんど遺存していないが3単位の波状口縁になるものと思われる。推定口径は17.7cm、器高は27.4cm、推定底径は9.0cmである。器面は縦方向のケズリ調整を施してあるのみである。2・3は1と同様の器形を呈すると思われる深鉢の胴部で、いずれも縄文地に断面円形の棒状工具を用いて縦位の沈線を配する。図上で復元していないが、3の胴部径は上端側で9.0cmである。4は安山岩製の敲石である。左右両側縁と表面中央部に敲打痕が認められるほか、下端部には研磨痕が観察される。

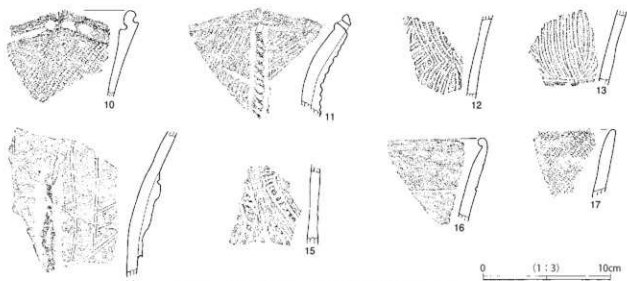
#### SI015 (第53・54図、図版4・26・31)

L56-95・96、L57-05・06グリッドに位置する。北東にSI014住居跡が接し、切り合っていた可能性が高い。炉及び一部に確認された貼床から住居跡と判断した。炉は40cm×30cmの楕円形をなし、掘込みはごく浅く、焼土の堆積はほとんどない。炉底下は被熱を受けた痕跡が残る程度である。炉の覆土中の貝を一括で採取した。炉の南西側は直径約3mの略円形に20cm程度窪んでおり、貼床が残る。貼床下からはSK066陥穴と炉の南からSK066に向かって次第に深さを増す溝が検出された。貼床はSK066上では落ち込んでおり、貼床の設置目的はSK066の存在によるためと思われる。溝状の施設については目的がよくわからない。ピットは炉の南側に5基確認されたが、炉から北側は明らかでない。P4・P5は住居跡の壁の外側に位置するが、さらに広い住居跡が存在した可能性も考慮した。貼床上及びP5内には貝ブロックが認められた。貼床上の貝ブロックは2.1m×2.0m、厚さは最も厚いところで20cmを測り、床面に接して堆積していた。このブロックからコラムサンプルを採取した。P5内の貝ブロックは46cm×36cm、厚さは最も厚いところで26cmを測り、底面に接して堆積していた。当遺構は出土遺物から堀之内1式の所産と判断される。

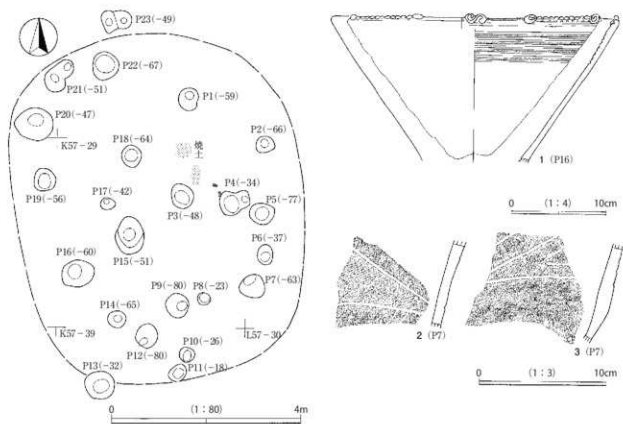
図示した遺物は17点で、4・16が貝層中、3が床面直上、その他は覆土中出土である。1は器形復元可能な鉢で、底部からやや開くように立ち上がり徐々に直立する器形を呈する。推定口径13.7cm、器高9.5cm、推定底径10.0cmを測る。平口縁であるが山形の小突起が付けられる。口縁部遺存率30%程度で小突起は1か所しか残っていないが、以下の理由により3単位である可能性が高い。文様は先が尖った棒状工具による沈線を2本口縁に沿って巡らし、小突起の下側に半截竹管による縦位の沈線を垂下させる。その沈線を中心として左右に弧状の沈線を半截竹管及び棒状工具によって描出し、同じモチーフを横並びに配している。小突起はこのモチーフの直上に付けられるものと推測され、4分の1周に当たる位置ではなく3分の1周に当たる位置に来るように描かれている。2・4・6は底部から直線的に開く器形を呈する深鉢の口縁部である。2は推定口径22.0cm、残存器高20.3cmを測る。平口縁であるが円形刺突をもつ山形の小突起が付けられる。断面円形の棒状工具による沈線が3本小突起から垂下され、そこを中心と同じく3本一組



第53図 SI015住居跡、SK066土坑、出土土物(1)



第54図 SI015住居跡、SK066土坑出土遺物（2）



第55図 SI016住居跡、出土遺物

の沈線が斜めに配される。図の左端には弧状の沈線が見えるが、斜行沈線はそこから折り返して元の沈線に戻り、三角形を描いている。地文はRL縄文であるが、当遺跡の縄文土器では極めて少ない。4は波状口縁で、波頂部から半截竹管による蛇行沈線を垂下させ、左右に斜行する沈線を同じ半截竹管で描く。3は深鉢底部で、底径9.0cm、残存器高7.0cmを測る。内部に貝層由来と考えられるカルシウム分が付着している。8・9・12・13・15は同様の器形を呈する深鉢の胴部である。9は縦位の隆線により胴部文様を縦

に区画するもので、右側に曲がっている部分に左側へ隆線が分岐している痕跡が残っている。12と13は同一個体である。15は平行沈線の間を短沈線で充填するものである。5・7・10・11は胴部に弱いくびれをもつ深鉢である。5と7は同一個体である。14は底部から直線状に強く外反し、胴部下半で内側に屈曲したあと弱いくびれをもって口縁部へ直立する器形の深鉢である。途中から縦位の隆線が貼り付けられ、棒状工具によって縦方向の刺突が施される。16・17は直線的に開く器形を呈する深鉢の口縁部である。

#### SI016 (第55図、図版5・26・31)

K57-29グリッドを中心として他グリッドにまたがる範囲に位置する。SK023土坑が東約7mにある。焼土及び炭化材、周辺ピットから大形土器片が出土したことから、住居跡と判断した。焼土は2か所で確認されたが、炉跡と断定はできなかった。北側は厚さ12cm、南側は厚さ8cmの焼土が堆積していたが、底面はほとんど焼けていなかった。ピットは焼土を中心に深さ50cmを超えるピットが11基確認され、そのうちP16の覆土中から堀之内2式～加曾利B1式の浅鉢破片1、P7から堀之内2式の破片2・3が出土した。これらの深いピットは柱穴である可能性が高いが、その配列は必ずしも規則的ではなく、複数軒の住居跡が切り合っている可能性もある。図上では単独存在と仮定して、長軸7.4m、短軸6mの範囲を破線で示した。当遺構は出土遺物から堀之内2式～加曾利B1式の所産と判断される。

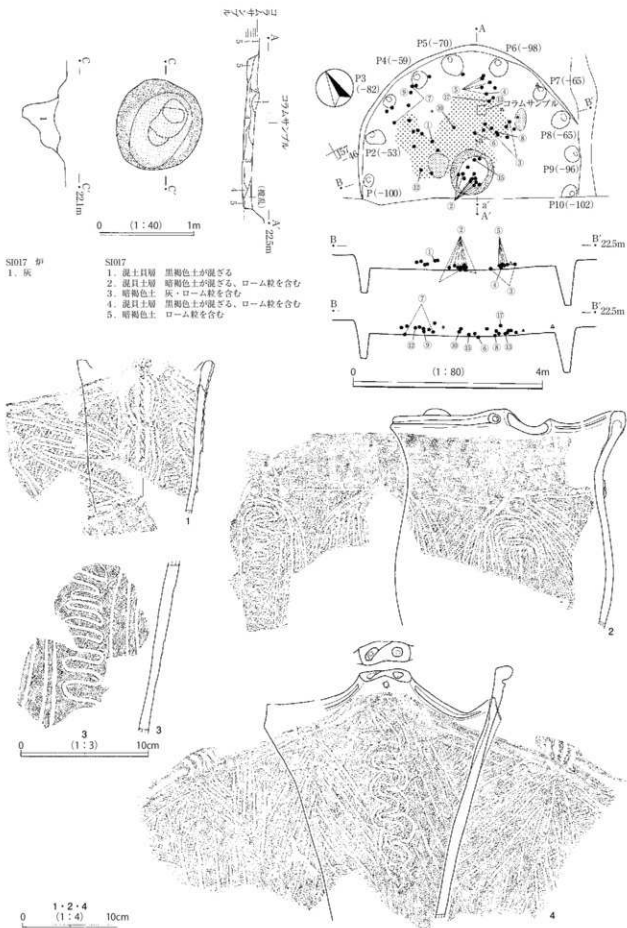
図示した遺物は3点である。1は底部から直線的に開く器形を呈する鉢で、推定口径30.5cm、残存器高15.7cmを測る。内外面とも丁寧なミガキ調整が施される。口縁部内側を肥厚させ、横「S」字もしくは「C」字状及び逆「C」字状の瘤を貼り付け、その間に沈線を配する。「C」字と逆「C」字の瘤間には連続刺突を施し、外側の逆「C」字と「C」字の瘤間には口唇に沿って細かいキザミを施す。横「S」字の瘤はその中間に配される。胴部内側には8本の平行沈線を巡らせ、その間を交互にキザミで充填する。2・3は同一個体で、底部からやや大きく直線的に開き、胴部下側で屈曲してやや直立するように立ち上がる器形を呈する深鉢である。3はその屈曲部に当たるもので、屈曲より上側に沈線により幾何学状の文様が描かれ縄文が充填される。2は3よりやや上部に当たるものである。

#### SI017 (第56・57図、図版5・26・31)

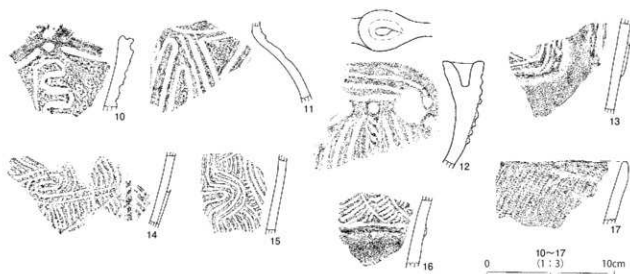
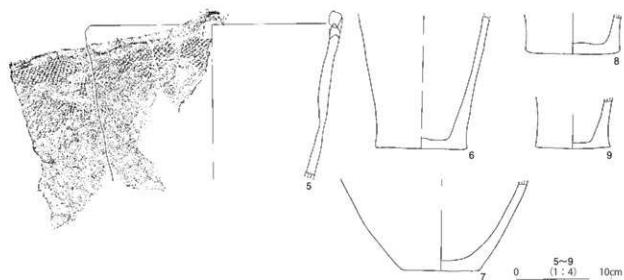
J57-36・46・47グリッドに位置する。北西約2mにSK001がある。縄文後期の住居跡としては唯一壁が明瞭な堅穴住居跡である。住居跡の南側は調査区域外のため未調査で東端は根切り溝に切られており、全体の約1/2が遺存する。住居跡の規模は不明であるが、南北方向に長い小判形の形状をなし、遺存する短軸幅は最大で4.8mを測る。壁高は10cmから30cmを測り、床面は木の根による掘乱で荒れているものの中央部分がやや深いことがわかる。炉は住居跡のほぼ中央に位置するものと思われ、長軸95cm、短軸90cmの楕円形をなし、中央が50cmの深さでピット状に窪んでいる。炉の壁面は堅く焼け、灰が充満していた。ピットは合計10基ですべて壁際に検出され、深さも50cm以上あることから壁柱穴と思われる。いずれも住居跡内側に傾斜をもって掘られており、テント状の上屋構造を想起させる。床面には炉から北側にかけて貝層が広く堆積し、最も厚い個所では遺構確認面まで達する。貝層の北東部分からコラムサンプルを採取した。一部には焼土の堆積も見られる。遺物は床面及び覆土中から多数出土した(図では非掲載遺物も含め出土位置がわかるものはすべて示している)。当遺構は出土遺物から堀之内1式の所産と判断される。

図示した遺物は17点である。そのうち11はA-A'の東側、14・16は西側の覆土一括で、他は図に示したとおりの出土状況である。1・3～6は器壁が底部から直線的に開く器形を呈する深鉢である。1は口径14.2cm、残存器高16.0cmを測る。波状口縁の波頂部から斜めにキザミを持つ隆線を垂下させ、胴部下方で





第56図 SI017住居跡、出土遺物(1)



第57図 SI017住居跡出土遺物（2）

口縁と平行するように巡らせた隆線で文様帯を区画する。区画内は縄文地文で断面円形の棒状工具により入組み状のモチーフを配する。3は本来かなり大形になる深鉢の胴部破片で、垂下する沈線と蛇行する沈線を配する。4は口縁部がほぼ全て遺存しており、口径は27.0cm、残存器高は26.3cmを測る。上面に2か所の刺突がある台形状の突起を前後2対、弧状の沈線を4本配する山形の小突起を左右2対配する。図正面の台形状突起から3本一組の沈線が蛇行するように垂下するが、背面の台形状突起の下側には2本一組の平行沈線二組の間に斜行沈線を充填するモチーフが配されており、前後でモチーフが異なっている。両台形状突起の間はL R縄文を地文として鋸歯状のモチーフで充填している。5は推定口径25.9cm、残存器高17.6cmを測る。橋状の小把手が付けられており、単位数は不明である。口縁付近にL R縄文が施されるが、胴部下半はケズリ調整が施されており縄文も削り取られている。2は頸部にくびれをもつ深鉢で、推定口径24.7cm、残存器高22.9cmを測る。口縁部とくびれの間は無文帯となっており、口縁部3単位の小突起の下側に無文帯を挟んでボタン状の貼付文を配する。さらにその中間にもボタン状貼付文が配されるた

め、計6単位の貼付文が配されることになる。その下側に蛇行沈線を垂下させ、それを囲むように貼付文を起点とした集合沈線を垂下させる。6・8・9は器壁が底部から直線的に開く器形を呈すると考えられる深鉢の底部である。6は底径9.6cm、残存器高14.0cm、8は推定底径10.0cm、残存器高4.3cm、9は底径7.8cm、残存器高5.5cmをそれぞれ測る。いずれも個体も内外面に丁寧なミガキ調整が施されているが、6は一部に強い被熱が認められる。7は器壁が外反し徐々に直立する器形を呈するもので、浅鉢もしくは鉢と推測される。底径は8.0cm、残存器高は9.6cmである。内外面に丁寧なミガキ調整が施されている。10・12～17は器壁が底部から直線的に開く器形を呈すると考えられる深鉢である。12は橋状把手で拓本右手の白抜け部分が橋状部にあたる。13は波状口縁波頂部から垂下された隆線が胴部下半で水平方向へ曲がる部分で、隆線の刺突は断面円形の棒状工具を下から上へ押圧している。14～16はモチーフの間を短沈線で充填するもので、14は縄文が地文に残るが15・16は沈線のみとなっている。17は縄文のみの口縁部である。11は注口土器と思われるもので、頸部が強く屈曲し胴部が大きく張り出す。頸部横沈線の上部はおそらく無文であろう。

## 2 炉跡・ピット群・ピット

この項に含めた炉跡・ピット群は炉底の焼け具合や不規則な配列のため、いずれも住居跡と判断するに至らなかったもので、併せて単独で発見されたピットについてもここで扱うこととした。なお、SK029貝ブロックはSK006炉跡と近接して検出されており、相互に関係ある可能性が強いためここに掲載した。

### SK001 (第58図、図版5・31・39)

J57-24・25・35グリッドに位置する。炉跡、被熱赤化面、ピット群を一括した。炉跡は長軸113cm、短軸73cm、深さ20cmで、覆土下半から底面にかけて焼土が充満していた。被熱赤化面は炉跡の北西1mにあり、長軸73cm、短軸48cmの範囲でよく焼けていた。ピットは炉跡の北西半で6基検出され、P3には底面まで貝が充満していた。なお、炉跡は焼土の範囲が長楕円形をなし、炉底は強く焼けておらず焼土に灰も混じらない。また、南東70cmにはSK048があることから同じく炉穴の可能性もあり、SK001に伴うかどうか判断しにくい面もある。P2から堀之内1式の土器片が出土しており、当遺構も堀之内1式の可能性が最も高いが、同一の遺構でない可能性もある。

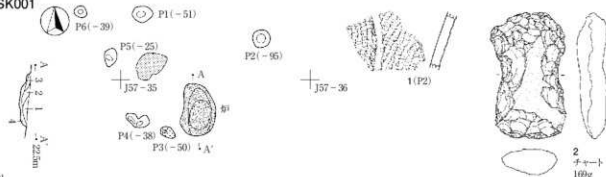
図示した遺物は2点である。1はP2出土の土器で、R L縄文を地文とする。2はチャート製の打製石斧で、炉の東側から出土した。

### SK002 (第58図、図版31)

J56-30グリッドに位置するピット群である。SI003住居跡が東約20mにある。大小13基のピットが集中していたが配列はきわめて不規則である。深さは様々で、南西端のP1・P2は深さが50cmを超えている。遺物はほとんどすべてのピットから出土した。出土遺物はP3以外は堀之内2式が主であるが、P3は堀之内1式が主であり、同一の遺構でない可能性がある。

図示した遺物は7点で、4・6が全体で一括上げられたほかはピットから出土している。1は堀之内1式の深鉢頸部であるが、隆線より上部は磨耗が顕著で蛇行沈線の上にあるはずの円形刺突も底の部分がかろうじて残存している状況である。3～7はいずれも堀之内2式に相当するもので、底部から直線的に外反する器形を呈する。3は縄文はなく沈線のみで、口縁に平行する沈線と、そこを起点とする斜行沈線とで三角形のモチーフを描く。4は口縁に沿って断面三角形の隆線を巡らせ、その下に無文帯をおいて沈

SK001



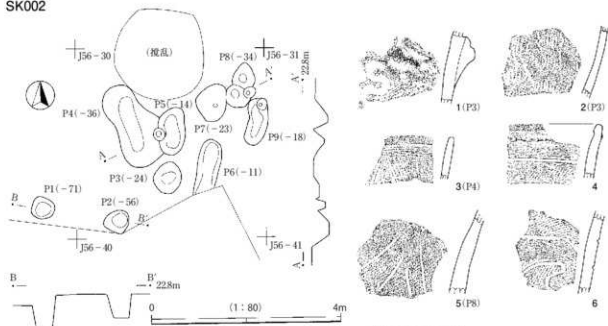
SK001

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 焼土粒を含む
3. 褐色土 ローム粒を含む
4. 暗褐色土 焼土粒を多く含む

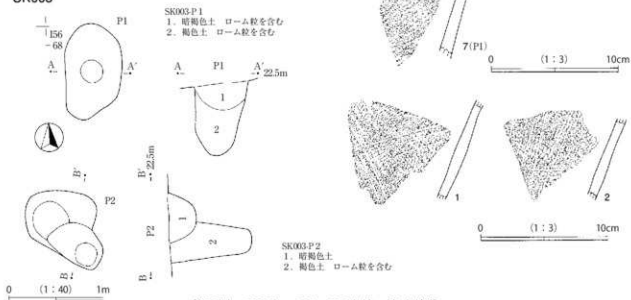
0 (1:80) 4m

0 (1:3) 10cm

SK002



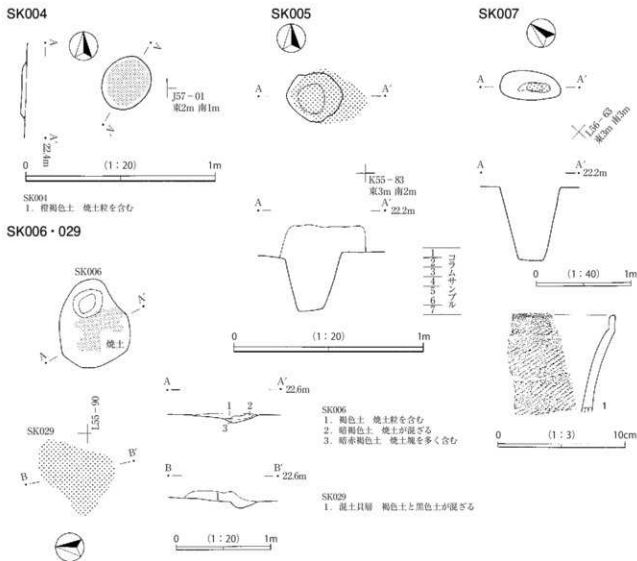
SK003



- SK003-P1
1. 暗褐色土 ローム粒を含む
  2. 褐色土 ローム粒を含む

- SK003-P2
1. 暗褐色土
  2. 褐色土 ローム粒を含む

第58図 SK001・002・003土坑、出土遺物



第59図 SK004・005・006・007土坑、SK029貝ブロック、出土遺物

線で区画された縄文帯を配する。5は縄文地文に2本一組の平行沈線によって幾何学的なモチーフを描くもので、縄文は磨り消さない。6は沈線で曲線的なモチーフを描いた後、縄文を充填する。7は縄文施文だけが施される。

#### SK003 (第58図)

I56-68に位置する2基のピットである。南東約3mにSK009土坑がある。P1は長軸102cm、短軸60cm、深さ76cmを測る。P2は深さ86cmと57cmの重複である。出土遺物のうち2点の土器を採拓したが、どちらのピットの出土か不明である。当遺構は出土遺物から堀之内2式の所産と判断される。

図示した遺物は2点で同一個体である。RL縄文を地文とし、半截竹管による条線を斜格子状に施す。

#### SK004 (第59図)

J57-01に位置する単独の炉跡である。東約15mにSK012土坑がある。29cm×25cmを測る楕円形をなし、厚さ2cm程度の焼土が堆積し、炉底は焼けていた。図示できる遺物はない。

#### SK005 (第59図)

K55-83グリッドに位置する。貝ブロックを伴う単独のピットである。南約3mにSK015土坑がある。30cm×27cmの略円形で、深さ30cmを測る。遺構確認面より上から貝ブロックが検出され、ピット底面まで堆積していたため、コラムサンプルを採取した。図示できる遺物はないが、周辺は後期前葉の遺構がほとんどであり、当遺構も同時期と考えられる。

#### SK006・SK029 (第59図)

SK006はL55-80・90グリッドに位置する炉跡である。西90cmにSK029貝ブロックが、南東1.4mにSK017土坑がある。90cm×76cm、深さ20cmの不整楕円形の掘込みの中央に不定形の広がりを持つ焼土が認められた。焼土の北東には深さ77cmのピットを伴う。

SK029はK55-89グリッドに位置する貝ブロックである。遺構確認面より上から確認され、91cm×76cmを測り、形状は不整形である。貝ブロックの厚さは最も厚いところで11cmを測り、ブロック下は浅い落込みが認められた。

いずれからも図示できる遺物は出土しなかった。

#### SK007 (第59図、図版31)

L56-63グリッドに位置する。貝ブロックを伴う単独のピットである。SI012住居跡が北約3mにある。長軸64cm、短軸30cmの長楕円形をなす。深さは77cmで、遺構確認面で25cm×10cmのごく小規模な貝ブロックを検出した。当遺構は出土遺物から堀之内2式の所産と判断される。

掲載した遺物は1点で覆土中一括である。やや強く外反し口唇直下で屈曲して直立する。L R縄文を地文とするが、屈曲部直下は無文帯とし、屈曲部を帯状に施文している。屈曲部内面は断面方形の棒状工具によってナゾリ状の沈線を入れている。

### 3 土坑

縄文時代の土坑は20基検出された。これらは平面形が円形で一定の深さがある貯蔵穴と思われるもの、皿状の土坑などがあり、大部分が後期に属すると考えられるが、SK013・SK026・SK027は、出土遺物などから早期とするのが妥当なものである。なお、住居跡と切り合っている土坑のうち、住居と同時期もしくは近接している時期と考えられるものについては住居跡の項で扱っている。また、土坑内貝ブロックについては「8 出土動物遺存体」及び付章で扱っているので参照されたい。

#### SK008 (第60図、図版5・31)

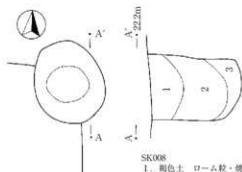
I56-77グリッドに位置し、SK003が北約3mにある。奈良・平安時代のSI031に切られる。89cm×75cmの楕円形で、遺構確認面からの深さは97cmを測り、円筒形の断面形態を持つ。出土遺物の時期がやや離れており、出土状況も不明なため時期は判断できない。

図示した遺物は2点である。1はやや強く外反する深鉢の口縁部である。口縁に沿って紐線文を巡らせ、下側はL R縄文地文に沈線による縦と横の区画が認められる。加曾利B 1式の粗製土器である。2は口縁部がやや内湾する深鉢である。器面はほとんど調整がなされず、半截竹管によって浅い沈線が縦位に配される。堀之内1式であろう。

#### SK009 (第60図、図版5・32)

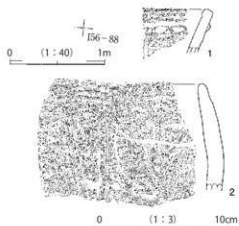
I56-68グリッドに位置し、SK010土坑が東約3mにある。147cm×121cmの略円形で、遺構確認面から

SK008

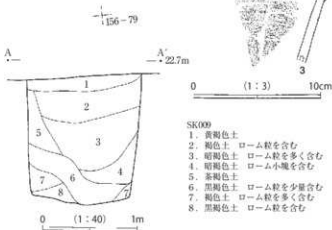
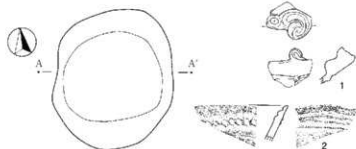


SK008

1. 褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
2. 暗褐色土 ローム粒を含む
3. 褐色土 ローム粒を多く含む



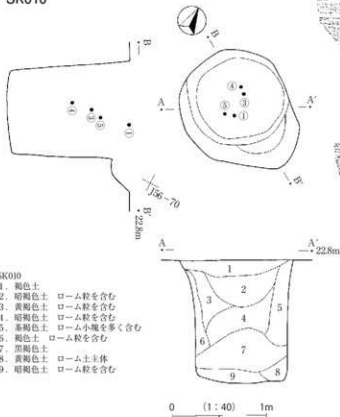
SK009



SK009

1. 黄褐色土
2. 褐色土 ローム粒を含む
3. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
4. 暗褐色土 ローム小塊を含む
5. 茶褐色土
6. 黒褐色土 ローム粒を少量含む
7. 褐色土 ローム粒を多く含む
8. 黒褐色土 ローム粒を含む

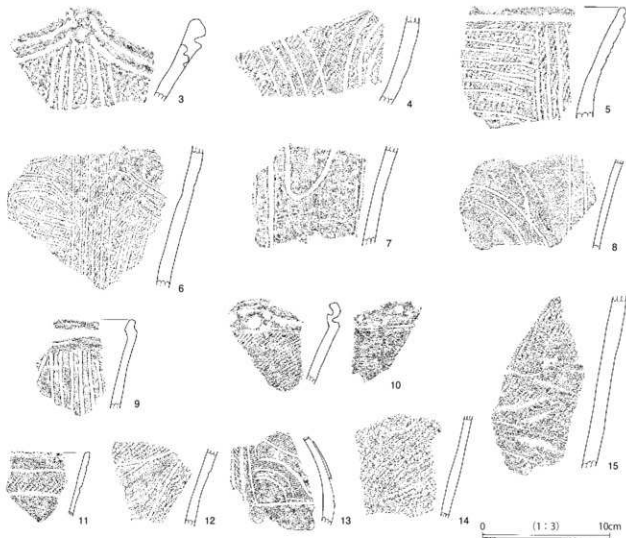
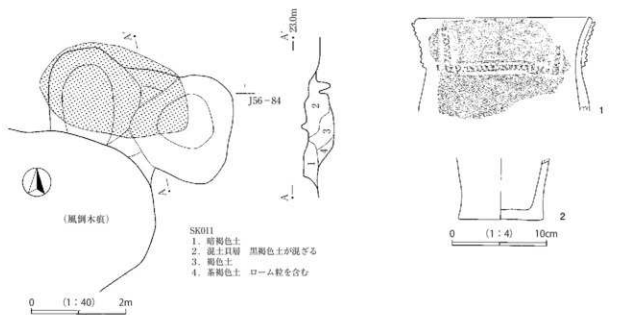
SK010



SK010

1. 褐色土
2. 暗褐色土 ローム粒を含む
3. 黄褐色土 ローム粒を含む
4. 暗褐色土 ローム粒を含む
5. 茶褐色土 ローム小塊を多く含む
6. 褐色土 ローム粒を含む
7. 黒褐色土
8. 黄褐色土 ローム土主体
9. 暗褐色土 ローム粒を含む

第60図 SK008・009・010土坑、出土遺物



第61図 SK011土坑、出土遺物



の深さは142cmを測り、円筒形の断面形態を持つ。出土遺物は称名寺2式が1点出土したものの（未掲載）主体は堀之内2式であり、当遺構も堀之内2式の所産であろう。

図示した遺物は3点である。1は堀之内2式の浅鉢の口縁部に付けられる把手である。把手下側の外面には円形刺突が配され、そこを起点に細隆線が左右と下に伸びる。2・3は直線的に開く形状を呈する深鉢の口縁部である。2は外面の隆線上に断面円形の棒状工具を使用して斜めのキザミを規則正しく施す。内面の沈線は平行になっておらず沈線両脇の盛り上がった粘土もそのままでありやや雑である。3の口縁直下の隆線は平坦形状の棒状工具によりキザミが施される。下側には区画沈線による帯縄文が認められるが、器面は熱を強く受けており磨耗が著しい。

#### SK010（第60図、図版5・32）

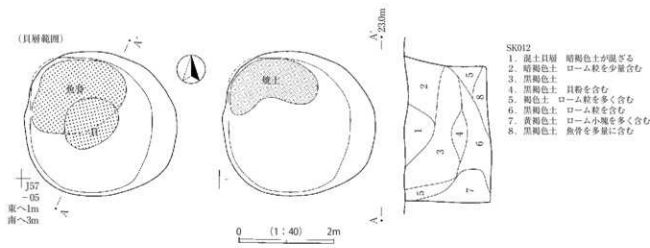
J56-60グリッドに位置し、SK009土坑が西約3mにある。1.39m×1.26mの略円形で、遺構確認面からの深さは131cmを測り、円筒状の断面形態を持つ。南西の張り出しは攪乱の可能性もある。主体となる遺物は縄文施文のみで決め手に乏しいものの、小破片の有文土器はいずれも堀之内2式であり、当遺構も該期と推測される。

図示した遺物は5点で、いずれも土坑覆土の上層から出土している。ほかに黒浜式土器が混入していたが図化していない。1は深鉢の頸部で、SI008の6と同一個体である。刺突列をもつ縦位の隆線の両側に半截竹管による平行沈線を配する。2～5は直線的に開く形状を呈する深鉢である。2はLR縄文を地文として横位の沈線を巡らせる。3～5は縄文施文のみのものである。3と4は同一個体である。

#### SK011（第61図、図版27・32）

J56-83グリッドに位置し、SK012土坑が南東約11mにある。東側の118cm×113cm、深さ18cmの土坑と西側の幅93cm、深さ18cmの土坑が切り合っている。遺構確認面より上で貝層が検出され、一部は坑底まで堆積していた。貝層は最も厚いところで27cmを測る。南西側に風倒木による大きな穴が存在するが、記録からは風倒木痕とSK011との新田関係を直接判断することはできない。調査担当者は風倒木痕よりSK011の方が新しいとするコメントを残しており、図化しなかった部分で新田関係がはっきり捉えられていたものとする。出土遺物は堀之内1式と2式が混在しているが、主体は堀之内2式であり該期と推測される。

図示した遺物は15点で、風倒木痕出土のものと一緒に取り上げられている。1は頸部にくびれを持つ深鉢で、推定口径18.0cm、残存器高9.9cmを測る。口縁部からキザミを持つ隆線が4対垂下され、くびれの部分を横走するキザミを持つ隆線と接した部分に円形刺突を持つボタン状貼付文を配する。胴部側はLR縄文を地文としてボタン状貼付文を中心に弧状と放射状の沈線を施す。2は深鉢底部で全周する。底径9.0cm、残存器高6.5cmを測る。3・9・10は直線的に開く形状を呈する深鉢の口縁部で、3は波状口縁、9・10は平口縁で10には小突起が付けられる。いずれもLR縄文を地文とし口唇に沿って沈線を巡らせ、3と9は集合沈線を垂下させる。4・5は頸部にくびれを持つ深鉢で、いずれもLR縄文を地文とする。5は口縁から垂下する集合沈線がおそらく3ないし4対配され、その間を横位の集合沈線で充填する。6～8は直線的に開く形状を呈する深鉢の胴部で、6はLR縄文を地文として半截竹管による3単位の縦位沈線を配し、両側を同じ半截竹管による曲線的なモチーフで充填する。7・8は地文はなく、断面円形の棒状工具を使用している。11～13は堀之内2式に相当するもので、11・12は直線的に開く形状を呈する深鉢、13は注口土器である。13は断面半円形の隆線を縦位に配し、隆線沿いの縦位沈線と胴部の膨れた部分を巡らせる横位沈線で区画する。区画内は重弧線を配し、LR縄文を充填する。14・15は縄文のみの深鉢で、い



第62図 SK012土坑

ずれも直線的に開く形状を呈する。

#### SK012 (第62図、図版6)

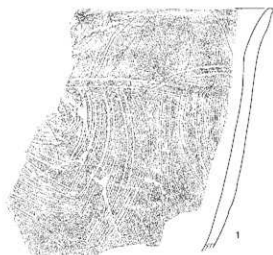
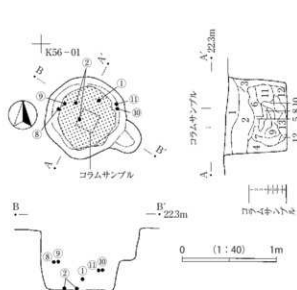
J57-05グリッドに位置し、SK001が南約6mにある。1.64m×1.56mの略円形で、遺構確認面からの深さは90cmを測り、円筒状の断面形態を持つ。底面は焼けている。遺構確認面でも厚さ32cmの貝ブロックが検出され、さらに坑底には厚さ25cmの魚骨層(8層)を認めた。

堀之内1式土器が出土したが細片であり、図示できなかった。

#### SK014 (第63図、図版6・26・27・32)

K56-01グリッドに位置し、SI005住居跡が東約3mにある。直径84cmの略円形で、遺構確認面からの深さは69cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東部に深さ35cmのビット状の掘込みないしは張出し部がある。遺構確認面から-30cmで貝層が遺構プランのほぼ全面に現れ、坑底まで厚さ約40cm堆積していた。コラムサンプルを中心部で採取した。思井上ノ内遺跡の他の土坑では貝ブロックは開口部から堆積しており、当遺構のように覆土の下半分のみに堆積している状況は異例である。貝層の上面とほぼ同じ深さで南東部の張出しが存在することから、もともと貝ブロックが堆積していた土坑に、後から別な土坑が構築されたものと思われる。遺物の主体は堀之内2式であり、坑底からも出土していることから当遺構及び貝層の時期は堀之内2式と判断されるが、後から作られた土坑は時期不明である。

図示した遺物は12点である。出土位置が点で示されているもののほかは、7がコラムサンプルカット7(坑底から約10cm上)、12が同じくカット4(坑底から約25cm上)から出土しており、それ以外は一括取上げである。1は頸部に弱い屈曲をもつ大形の鉢で、図の下側からほどなくして底部に至ると思われる。口縁から屈曲部までは無文で、屈曲部に半截竹管による横位の沈線を巡らせ、胴部側は半截竹管による同心円状もしくは重弧状の沈線を配する。2は直線的に開く形状を呈する深鉢で、坑底から出土した。口径21.2cm、残存器高11.2cmである。口縁に沿ってキザミを持つ隆線を巡らせ、全部で4対、「8」字状貼付文が配される。その下側は2本の横走沈線を幅約6cm離して巡らせて上下を区画し、貼付文の下側に配された縦位沈線が左右を区画する。区画の内部は直線や弧線で三角形もしくは半円形を描出し、2本一組の平行沈線で帯状になっている部分にLR縄文を充填する。口縁内側は「8」字状貼付文とは違う位置に山形の小突起を付けて縦位の短沈線を3本配し、その間を1本ないし3本の沈線を巡らせている。1本の沈線の部分は口唇を削ぎ落として低くなるようにしている。内外面とも器壁の調整はきわめて丁寧である。3

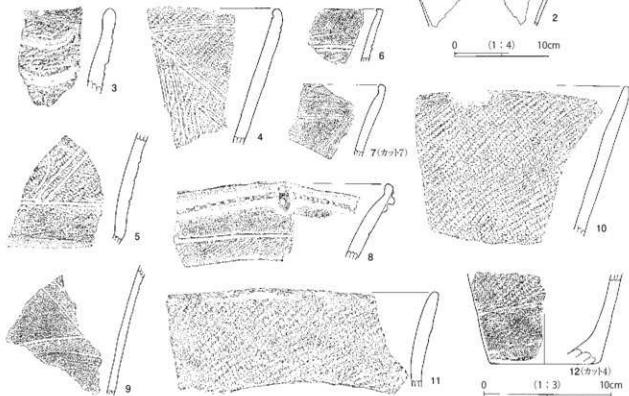


SK014

1. 黒陶色土 黄陶色土が斑状に混ざる
2. 黒色土 ローム粒・炭化粒・破砕貝を若干含む
3. 暗陶色土 黄陶色土が混ざる。ローム粒を多く含む
4. 黒色土
5. 黒色土 灰を含む
6. 凝貝土層 黒色土主体、完存貝・準完存貝・貝粉を少量含む。灰を多量に含む
7. 凝貝土層 黒色土主体、準完存貝・貝片を含む
8. 凝土貝層 黒色土が混ざる。完存貝・準完存貝を多量に含む
9. 凝貝土層 黒色土主体、準完存貝・貝片を少量含む
10. 凝貝土層 黒色土主体、完存貝・準完存貝・灰を含む
11. 凝貝土層 黒色土主体、貝片を含む
12. 凝貝土層 黒色土主体、貝片を含む
13. 凝土貝層 黒色土が混ざる。完存貝・準完存貝を多量に含む



0 (1:4) 10cm



0 (1:3) 10cm

第63図 SK014土坑、出土遺物

は深鉢口縁部で器形は不明である。LR縄文を地文としてやや太い半截竹管で波状のモチーフを描く。4・6～10は直線的に開く形状を呈する深鉢である。4・6・7は口縁部に沿って沈線を巡らせ、その下胴部側を文様帯としている。4は半截竹管、6・7は断面円形の棒状工具による単沈線である。8は口縁に沿ってキザミを持つ隆線を巡らせ、下側は沈線で区画された縄文帯を横位に配する。キザミは断面円形の棒状工具を縦位に押し込んでいる。9は平行沈線で区画された縄文帯で幾何学的なモチーフを描くものである。10は縄文施文のみの深鉢口縁である。5は底部から強く外反し、胴部下側で屈曲して直立するように立ち上がる器形の深鉢である。図の下端部が屈曲で、その直上に横位の沈線を巡らせ縄文施文し、断面円形の棒状工具で直線ないしは弧線を描出している。11は頸部にくびれを持つ深鉢の口縁部である。12は深鉢底部で、推定底径8.8cm、残存器高7.1cmを測る。底面に貝層由来のカルシウム分が多量に付着している。

#### SK015 (第64図、図版6・32)

K55-93グリッドに位置し、SI005住居跡が南西約1mにある。長軸107cm、短軸96cmの略円形で、遺構確認面からの深さは73cmを測る。断面形態は坑底の立上りが丸みを持ち、開口部が広がっている。貝ブロックが土坑のほぼ中心部に遺構確認面から約20cm上位で検出され、柱穴状に坑底まで堆積していた。貝ブロックの中心部でコラムサンプルを採取した。当遺構は出土遺物から堀之内2式の所産と判断される。

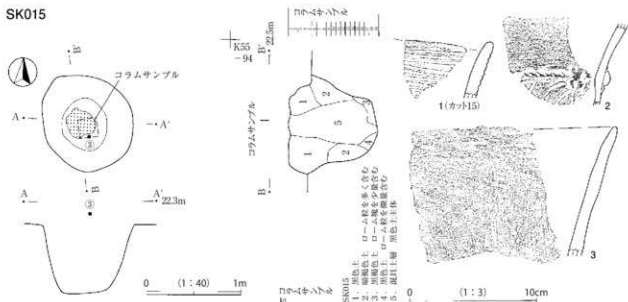
図示した遺物は3点で、1はコラムサンプルのカット15(坑底から約20cm上)出土、3は貝ブロック最上部、2は一括取上げである。1は深鉢であるが詳細器形は不明で、縄文地文に半截竹管による横位の沈線を密に施す。2は頸部にやや強いくびれをもつ深鉢もしくは鉢で、くびれ部分に斜め方向のキザミを持つ隆線を巡らせ、上側は無文帯、下側は沈線で区画された縄文帯を配する。3は直線的に開く形状を呈する浅鉢で、図下端部直下は底部になると考えられる。口唇部に細かい欠損が多数認められる。

#### SK016 (第64図、図版6・27・32)

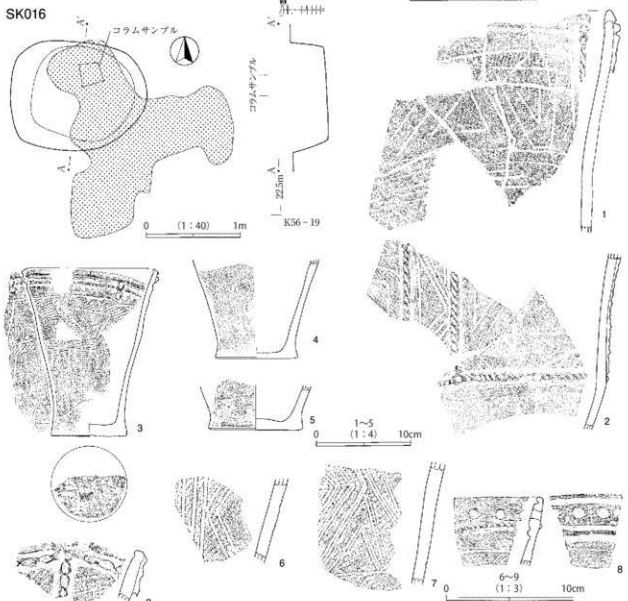
K56-08グリッドに位置し、SI008住居跡が南東に隣接する。長軸145cm、短軸116cmの略円形で、深さは37cmを測り、断面形態は鍋底状である。貝層が遺構確認面より上で検出された。貝層は平面プランのほぼ全体に広がり、東側と南側に向かってさらに延び、東西長170cm、南北長210cmのT字形に分布する。土坑外の貝層は薄く、土坑内では覆土下部まで堆積していた。コラムサンプルを貝層の最も厚い位置で採取した。当遺構は出土遺物から堀之内2式の所産と判断される。

掲載した遺物は8点で、すべて一括取上げである。1・2は底部から強く外反し、胴部下側で屈曲して直線的に立ち上がる形状を呈する深鉢で、接合しないが同一個体である。口縁部に小突起を設けてそこからキザミを持つ隆線を垂下させ、屈曲部直上で横走する隆線と交差させ区画を構成する。全体にLR縄文を施した上で、2本一単位の縦位隆線の間は斜行沈線を充填し、外側は沈線で幾何学的なモチーフを描出して縄文を磨り消している。全体に熱を強く受けており1は特に磨耗が顕著である。3～8は底部から直線的に開く形状を呈する深鉢で、底部直上は軽く絞られる。3は推定口径13.5cm、器高10.9cm、推定底径8.0cmを測る。口縁に沿ってキザミ隆線を巡らせ「8」字状貼付文を配する。胴部は上下を沈線で区画した文様帯にLR縄文を充填させ、三角形のモチーフを描いた後磨り消している。底面には網代瓦痕が認められる。4は推定底径8.8cm、残存器高10.5cmを測る。半截竹管と思われる工具による条線の末端が図の上部に認められ、粗製土器の可能性が高い。5は推定底径10.0cm、残存器高4.7cmを測る。6・7は胴部破片で、いずれも半截竹管が用いられている。8は口縁部破片で、外面は口縁に沿ったキザミ隆線と沈線で区画された縄文帯で構成され、内面は口唇下3cm幅で内側に肥厚させ、上下を沈線で区画して間を穿孔す

SK015



SK016



第64図 SK015・016土坑、出土遺物

る。図では3か所穿孔しているが、貫通していない刺突が1か所認められ、あるいは山形の小突起を形成している可能性もある。9は波状口縁に沿って縦線文を巡らせ、波頂部からは縦位の縦線文を配する。加曾利B1式の粗製土器である。

**SK017** (第65図、図版6・38)

L55-90グリッドに位置し、SK029貝ブロック、SK006炉跡が西に近接する。174cm×166cmの略円形で、遺構確認面からの深さは53cmを測り、鍋底状の断面形態を持つ。遺構上半は擾乱が激しい。覆土中から堀之内1・2式の小破片が出土したが、採拓できるものはなかった。

図示した遺物は1点である。1はチャート製の石鏃である。

**SK022** (第65図、図版7・32・33)

L56-76グリッドに位置し、SK031・032貝ブロックが西に近接する。143cm×121cmの楕円形で、遺構確認面からの深さは98cmを測り、鍋底状の断面形態を持つ。上層と下層から貝を含まない土層を挟んで2層の貝ブロックを確認した。上層の貝ブロックは分布中心部で遺構確認面から厚さが27cmを測る。下層の貝ブロックは厚さ17cmを測り、灰混じりであった。遺構のほぼ中心部で遺構確認面から坑底まで貝層のコラムサンプルを採取した。当遺構は出土遺物から堀之内1式の所産と判断される。

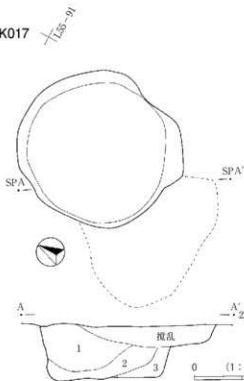
図示した遺物は8点で、3がコラムサンプルのカット10(坑底から約50cm上)、8が3層中から出土したほかはすべて一括取り上げである。1～6は直線的に開く形状を呈する深鉢で、2と3、4と5がそれぞれ同一個体である。いずれも縄文を地文とし、断面円形の棒状工具を用いて施文している。6の縄文はかなり原体が細い。7は頸部にくびれを持つ深鉢が。地文はなく沈線のみである。8は深鉢底部で全周する。底径9.4cm、残存器高7.5cmである。全体に貝層由来のカルシウム分が付着している。

**SK023** (第66・67図、図版7・27・33)

L57-22グリッドに位置し、SI016住居跡が西約7mにある。長軸454cm、短軸384cmの隅丸長方形をなす大型の土坑である。北側掘り残したような張り出し部があり、底面は凹凸があって最も深いところで遺構確認面から71cmの深さを測る。遺構の南半に東西400cm、南北最大160cmの貝層を検出した。貝層は混土貝層で、遺構確認面から検出され、遺構南端から中央に向かって傾斜をもって堆積していた。また、貝層上面には一部に焼土が認められた。ほぼ単一の貝層(6層)であるが、土層セクションA-A'のA'付近では主要貝層の上にさらに1層の薄い貝層(4層)を確認した。また、6層下には貝を少量含む混貝土層(8層)も認められた。6層の堆積が34cmと最も厚い個所でコラムサンプルを採取した。当遺構は出土遺物から堀之内2式の所産と判断される。

図示した遺物は40点である。34は図上で示した位置から出土したほか、1と32も点上げされているはずであるが記録が残っていない。それ以外の37点は一括取り上げであるが、遺構に十字に設定したセクションのラインによって4分割されて取り上げられている。北東側からは7・23・24・37、北西側からは11・15・40(以上は貝層外)、南東側からは2・3・5・8・12~14・16・17・25~27・31・33・36・39、南西側からは4・6・9・10・18~22・28~30・35・38(以上は貝層内)がそれぞれ出土している。1は器形復元できたもので、推定口径32.8cm、残存器高20.4cmを測る。口縁に沿って断面円形の棒状工具でキザミを入れた隆帯を巡らせ、「8」字状貼付文を配する。胴部は2本の沈線を約10cm幅で水平に配し、間を台形のモチーフで描出してLR縄文を充填する。2は深鉢底部で底径11.2cm、残存器高6.2cmを測る。底面にアンベラ圧痕が施される。3は深鉢または鉢の底部で底径9.8cm、残存器高6.3cmを測る。4・8~11は

SK017

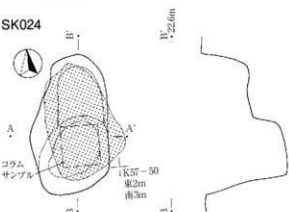


SK017

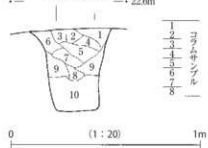
1. 暗褐色土 ローム小塊を多く含む
2. 暗褐色土 ローム小塊を含む
3. 暗褐色土 ローム粒を含む



SK024



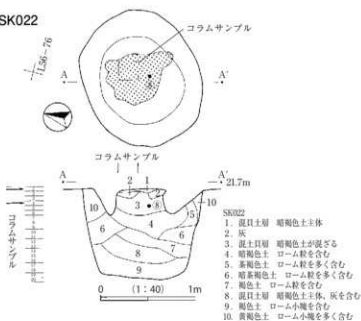
A コラムサンプル A' 22.6m



SK024

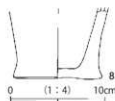
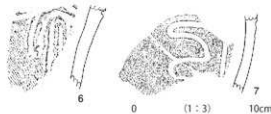
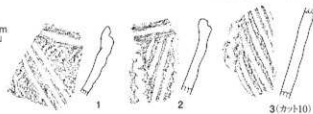
1. 暗褐色土 ローム粒を含む
2. 混貝土層 黒褐色土主体、破砕貝が90%以上
3. 黒褐色土
4. 混貝土層 黒褐色土主体、貝片・準定存貝が約50%、ローム粒を含む
5. 混貝土層 暗褐色土主体、貝片・準定存貝が約50%
6. 暗褐色土 貝粉を含む、黄褐色土が混ざる
7. 混貝土層 黒褐色土主体、貝片・準定存貝が40%以下
8. 黒褐色土 破砕貝、貝粉を含む
9. 暗黄褐色土 ローム土主体に暗褐色土が混ざる、ローム粒を含む
10. 暗褐色土 黒褐色土と黄褐色土が混ざる、貝粉を少量含む

SK022



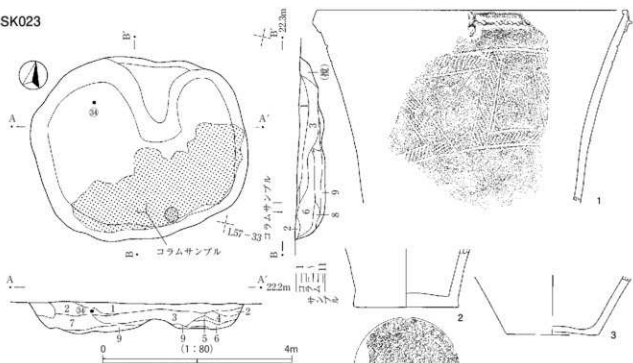
SK022

1. 混貝土層 暗褐色土主体
2. 混土貝層 暗褐色土が混ざる
3. 暗褐色土 ローム粒を含む
4. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
5. 茶褐色土 ローム粒を多く含む
6. 暗茶褐色土 ローム粒を多く含む
7. 褐色土 ローム粒を含む
8. 混貝土層 暗褐色土主体、灰を含む
9. 褐色土 ローム小塊を含む
10. 暗褐色土 ローム小塊を多く含む



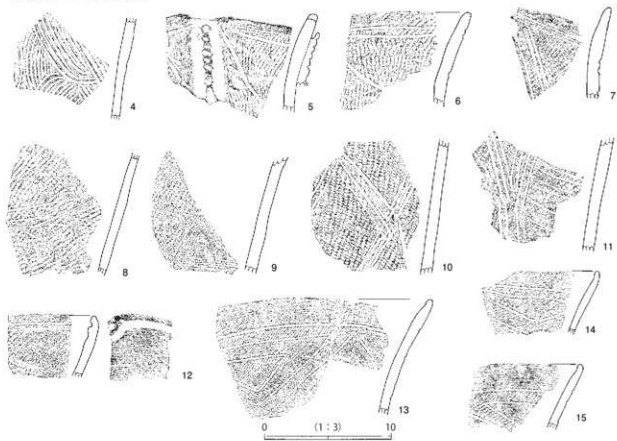
第65図 SK017・022・024土坑、出土遺物

SK023



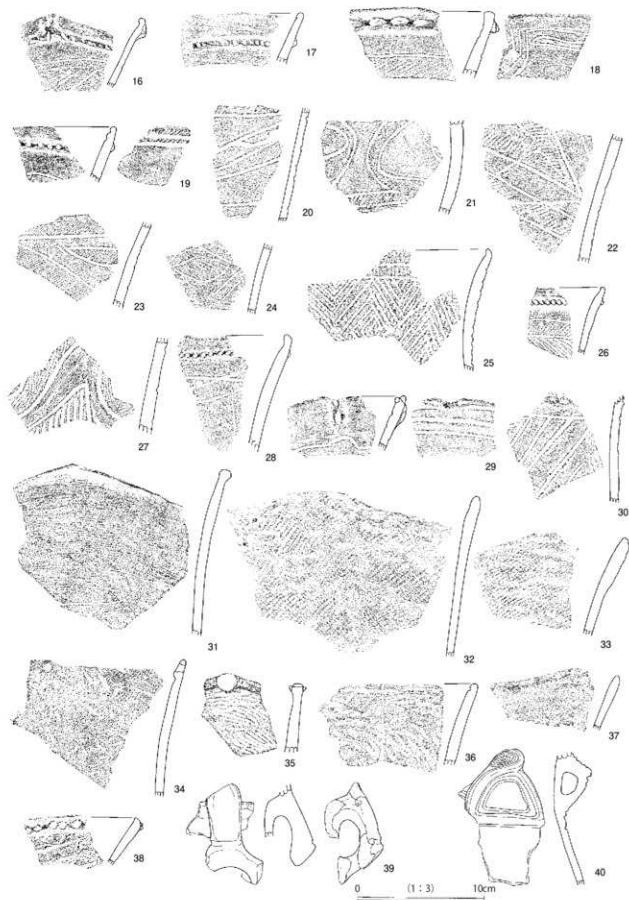
SK023

1. 褐色土 明褐色土が混ざる
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
3. 黒褐色土 ローム粒を含む
4. 混土状層 黒褐色土が混ざる
5. 暗褐色土 ローム粒を含む
6. 混土状層 暗褐色土が混ざる
7. 黒褐色土 ローム粒を含む
8. 混土状層 暗褐色土主体
9. 明褐色土 ローム粒を多く含む



第66図 SK023土坑、出土遺物 (1)





第67図 SK023土坑出土遺物(2)

直線的に開く形状を呈する深鉢である。4は集合沈線を充填する。8～11はLR縄文を地文として半截竹管による幾何学的なモチーフを描出する。5～7は頸部にくびれを持つ深鉢の口縁部で、5と6は同一個体である。12～20・22～37は底部から直立するように立ち上がり口縁に向かって外反する器形を呈する深鉢である。12は内面に円形刺突をもつボタン状貼付文を配し、その部分だけ口唇を内側へ押し込んでいる。13～15は2本の平行沈線で文様帯の上下を区画し、間に幾何学的なモチーフを描出するもので、縄文はすべて後から充填したものである。16～19・26・28・30は口縁に沿って隆線を巡らせ、その下側に文様帯を区画する。隆線には断面円形の棒状工具で縦位もしくは斜位のキザミを施すものがほとんどであるが、18は指頭押圧、30は棒状工具による横方向の刺突を施している（30はもう少し外反する器形かもしれない）。25は縄文地文に口縁に沿って2本の平行沈線を巡らせ、下側は沈線による三角形もしくは菱形のモチーフを充填する。29は口縁に沿った隆線はなく、「8」字状貼付文が単独で存在するものである。内側には棒状工具による横方向の刺突が施されている。31は波状口縁になるもので、半截竹管による流水文風の蛇行沈線が描かれる。32・33・35・37は同じく波状口縁となるもので、縄文施文のみあるいは無文のものである。34は平口縁で縄文施文のみであるが、小突起が設けられ穿孔されている。36は平口縁で無文のものである。20・22～24・27は同じ器形を呈する深鉢の胴部である。いずれも沈線で区画されたモチーフに縄文を充填する。27はあわせて集合沈線の充填も見られる。21は注口土器と思われるもので、外面は丁寧なミガキ調整が施されている。38は加曾平B1式の粗製土器である。39・40は注口土器の把手である。39は下部が二股に分かれている。側面には円形刺突が上下2カ所施される。40は図ではわからないが把手の下の器面上に沈線による方形のモチーフが2段描かれている。

#### SK024 (第65図、図版7)

K57-50グリッドに位置する。直径41cmの略円形の土坑と連続する長楕円形の土坑からなる。前者は深さ42cm、後者は深さ25cmを測る。遺構確認面でほぼ全体から貝の散布が認められ、以下略円形の土坑の坑底近くまで貝ブロックが堆積していたが貝密度は様ではなかった。コラムサンプルは略円形土坑で採取した。遺構確認面から坑底まで採取したが、坑底付近はほとんど貝が混入していなかったためデータ計測は行っていない。

出土遺物は堀之内式の小破片が少量出土したが、掲載に耐えるものはなかった。

#### SK025 (第68図、図版7・34)

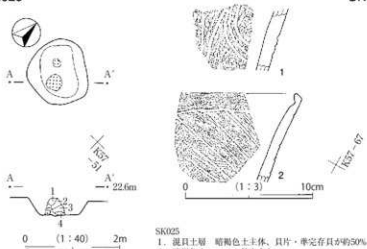
SK024土坑と同じくK57-50グリッドに位置する。長軸71cm、短軸64cmの不整楕円形で、遺構確認面からの深さは18cmを測り、鍋底状の断面形態を持つ。遺構確認面で検出された混貝土層と下層で確認されたより小規模な混貝土層とがあるが、それらの外側からも貝片が疎らに出土した。当遺構は出土遺物から堀之内2式の所産と判断される。

図示した遺物は2点で、すべて一括取上げである。1は直線的に開く形状を呈する深鉢胴部で、縄文地文に断面円形の棒状工具を用いる。2は底部から直立するように立ち上がり口縁に向かって外反する器形を呈する深鉢である。口縁に沿って沈線を巡らせ、下側は2本一組の平行沈線で幾何学的なモチーフを描出する。LR縄文を充填している。

#### SK026 (第68図、図版7・34)

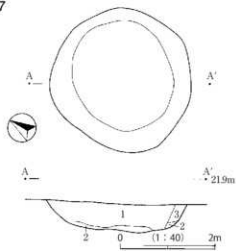
K57-75グリッドに位置し、SK057炉穴が西約4mにある。直径132cmの円形で、遺構確認面からの深さは46cmを測り、鍋底状の断面形態を持つ。出土遺物から本土坑は早期後葉に属するものと考えられる。

SK025



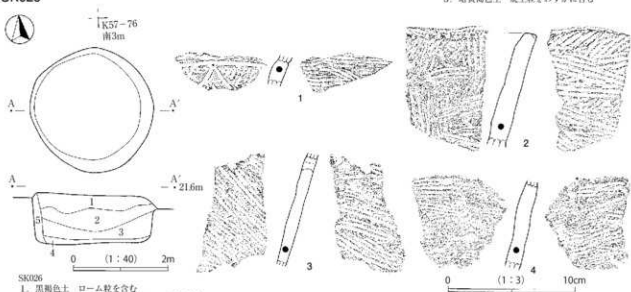
- SK025
1. 混貝土層 暗褐色土主体、貝片・半定存貝が約50%
  2. 暗褐色土 ローム粒を含む
  3. 混貝土層 暗褐色土主体、焼砂貝を少量含む
  4. 暗褐色土 焼砂貝・半定存の貝をわずかに含む
  5. 暗黄褐色土 ローム土・暗褐色土が混ざる

SK027



- SK027
1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
  2. 黄褐色土 暗褐色土が混ざる
  3. 暗黄褐色土 焼土粒をわずかに含む

SK026



- SK026
1. 黒褐色土 ローム粒を含む
  2. 暗褐色土 ローム塊・多量のローム粒を含む
  3. 黒褐色土 ローム粒・ローム塊を含む
  4. 黄褐色土 暗褐色土が混ざる
  5. 黒褐色土 ローム土が混ざる

第68図 SK025・026・027土坑、出土遺物

図示した遺物は4点である。1は鵜ガ島台式の深鉢で、円の直上が屈曲して直立する器形になると推測される。屈曲に沿うように沈線を巡らせ、その下側は斜行する平行沈線により幾何学的なモチーフを描出する。沈線の交点は円形竹管による刺突が配される。平行沈線の外側の三角形区画は棒状工具による刺突を充填する。2～4は表裏に条痕が施される深鉢である。2は口縁部で、口唇外側のキザミは棒状工具を横方向に押しきするようにして施文している。

SK027 (第68図)

K57-67グリッドに位置し、SK058炉穴が北東に隣接し、SK059炉穴が南東約2mにある。直径150cmの円形で、遺構確認面からの深さは28cmを測り、断面形態は皿状である。出土遺物はないが覆土に焼土粒が含まれ、SK058炉穴に近接することから早期の土坑と思われる。

#### 4 貝ブロック

この項では、風倒木痕内から検出された貝ブロック及び浅い落込み内に堆積した貝ブロックを掲載した。  
SK028 (第69図、図版8・34)

K56-22・23・32・33グリッドに位置する風倒木痕内から検出された貝ブロックである。北東約8mにSI007住居跡、南西約5mにSI004住居跡がある。30cm×25cm、22cm×10cmの規模の小ブロックに分かれ、厚さはともに10cmを測る。西南西から東南東に向かって傾斜を持つ。脆弱な貝破片を主体とする混貝土層である。風倒木痕内からは縄文時代各時期の土器片が出土した。

図示した遺物は4点で、風倒木痕内出土一括取上げであるため、明確に貝ブロック出土と指摘できるものはない。1・2は早期の条痕文土器である。いずれも器面は熱による磨耗が著しく、鶯が島台式であることがろうじて認識できる状況である。1は図上部に横位の沈線が配され、そこを起点とする2本の平行沈線が斜めに伸びる。交点には円形刺突が施され、横位沈線と斜行沈線との間の三角形の区画を短沈線で充填する。2は縦位の平行沈線と、そこを起点とする斜行する平行沈線で区画が構成され、やはり短沈線で充填する。沈線の交点には円形刺突は施されない。3・4は後期堀之内式と考えられる深鉢胴部である。3は縄文施文であるが、器面の磨耗が著しい。

SK031・SK032 (第69図、図版8)

ともにL56-65グリッドに位置する。東約2mに貝ブロックを伴うSK022土坑がある。どちらも浅い落込み内から遺構確認面で検出され、厚さは10cm程度である。中央付近でコラムサンプルを採取した。SK031で堀之内式の小破片が出土したが採拓できるほどの大きさではない。SK032からの出土はなかった。

SK033 (第69図)

J57-59・69、K57-50・60グリッドに位置する風倒木痕内から検出された貝ブロックである。北東約2mに貝ブロックを伴うSK024土坑がある。貝ブロックは遺構確認面で検出され、24cm×16cm、厚さは最も厚いところで15cmを測る。破砕貝及び貝の細片を主とする混貝土層で、貝層の下面は風倒木痕の中心に向かって傾斜を持つ。風倒木痕内からは土器片が少量出土したが、採拓できるものはなかった。

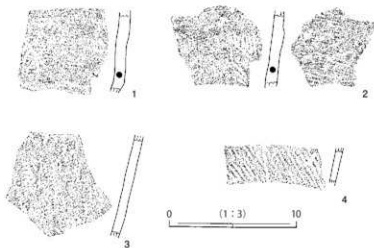
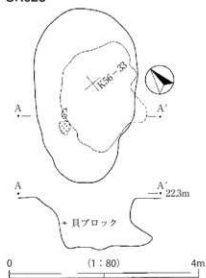
SK034 (第70・71図、図版8・27・34・39)

K57-63グリッドに位置する風倒木痕内から検出された貝ブロックである。奈良・平安時代のSI028住居跡がこの風倒木に壊されている。西約10mに貝ブロックを伴うSK024土坑及びSK033貝ブロックがある。貝ブロックは北側のブロック群Aと南西端のブロックBに別れ、貝ブロック及びその周辺を調査し、風倒木痕本体は掘り抜いていない。

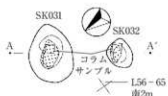
北側貝ブロック群Aの平面図貝層範囲は遺構確認面直下でのもので、掘り進むにしたがって東西2か所の厚い混貝土層を中心としたブロックにまとまった。このうち、西側ブロックの混貝土層は厚さ50cmを測り、東に向かって傾斜し、その先端側及び下層は分層してはいるが、暗褐色土や暗褐色ロームを主体とした破砕貝を多く含む混貝土層が認められた。断面C-C'に現れた混貝土層も同一層である。東側ブロックの混貝土層は厚さ50cmを測り、逆に西に向かって傾斜していた。その上層は薄い混貝土層に分層されたが基本的には同一の層と思われる。東ブロックの最も良好なところでコラムサンプルを採取した。貝層中及び周辺からは多くの土器片が出土し、堀之内2式を主として加曾利B1式まで確認される。

南西端の貝ブロックBは混貝土層で、遺構確認面より上で2か所の小ブロックとして検出されたが、その内1か所のブロックは風倒木痕の壁面に沿って深く内部に流れ込んでいた。出土土器片は北側ブロック

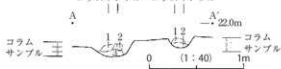
SK028



SK031・032



コラムサンプル



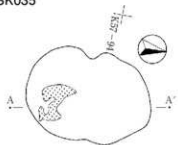
SK031

1. 泥貝土層 暗褐色土主体
2. 暗褐色土 貝を少量含む
3. 黄褐色土 黒色土が少量混ざる、貝を少量含む

SK032

1. 泥貝土層 暗褐色土が混ざる
2. 暗褐色土 黒色土が混ざる

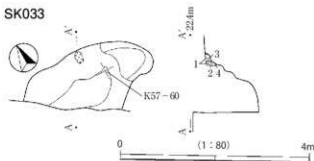
SK035



SK035

1. 泥貝土層 暗褐色土主体
2. 暗褐色土 ローム粒を含む
3. 黒樹木北填土

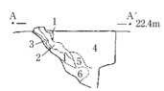
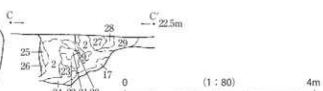
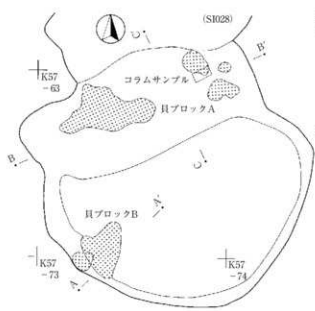
SK033



SK033

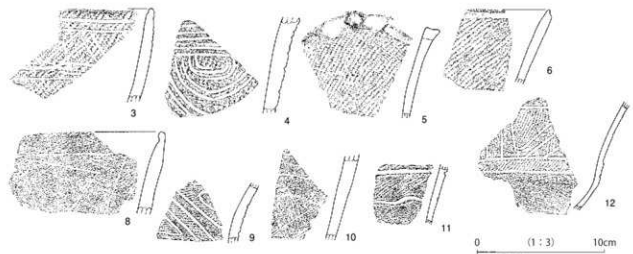
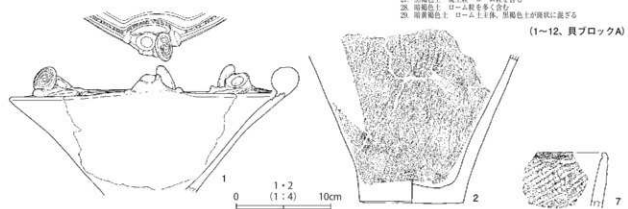
1. 暗褐色土 磁砂貝・少量のローム粒を含む
2. 暗褐色土 貝断片を少量含む
3. 暗黄褐色土 暗褐色土と黄褐色土が混ざる
4. 暗褐色土 黄褐色土が混ざる

第69図 SK028・031・032・033・035貝ブロック、出土遺物

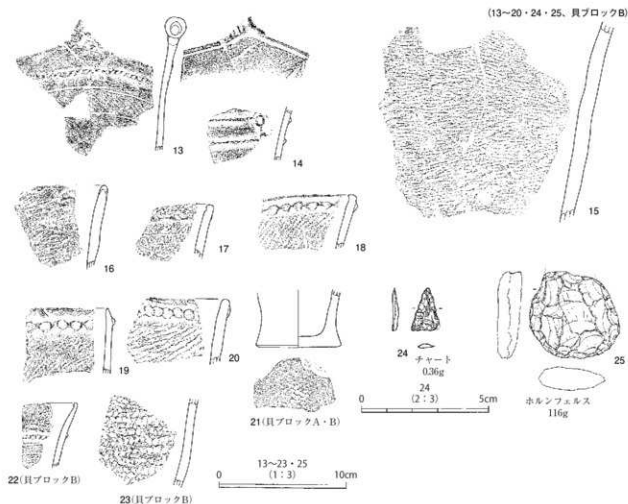


- SK034 SPA-A'
1. 暗褐色土 ローム殻を少量含む
  2. 混土貝層 サルボオ・ハマグリ・オキシジミを主体
  3. 暗黄褐色土 ローム殻を含む
  4. 暗黄褐色土 ローム土主体、再堆積土
  5. 暗褐色土 ローム土が混ざる、再堆積土
  6. 黄褐色土 ローム土主体、ローム殻を含む

- SK034 SPB-B'・SPC-C'
1. 暗褐色土 暗褐色ローム殻を含む
  2. 暗褐色土 暗褐色ローム土
  3. 暗褐色土 貝片・貝殻を含む
  4. 混土貝層 暗褐色土主体、暗褐色土を多く含む
  5. 混土貝層 サルボオ・ハマグリ主体
  6. 暗褐色土 貝殻・貝小片を少量含む
  7. 暗褐色土 暗褐色土主体、少量の貝殻を含む
  8. 暗褐色土 貝殻・貝小片を少量含む
  9. 混土貝層 暗褐色土主体
  10. 暗褐色土 暗褐色土主体
  11. 混土貝層 暗褐色土主体、少量の貝片を含む
  12. 混土貝層 ハマグリ・サルボオ・オキシジミ主体
  13. 混土貝層 暗褐色土主体
  14. 暗褐色土 貝片・貝殻を含む
  15. 暗褐色土 暗褐色土主体
  16. 暗褐色土 ローム土
  17. 暗褐色土 ローム殻を含む
  18. 暗褐色土 暗褐色土主体
  19. 暗褐色土 ローム殻を少量含む
  20. 混土貝層 暗褐色土主体、暗褐色土多し
  21. 混土貝層 暗褐色土主体、暗褐色土・貝片多し
  22. 暗褐色土 暗褐色土主体、暗褐色土・貝片多し、暗褐色ローム殻を含む
  23. 暗褐色土 貝片・貝殻、少量の炭化穀・焼土殻を含む
  24. 暗褐色土 貝片を含む
  25. 暗褐色土 暗褐色土主体
  26. 暗褐色土 暗褐色土主体、黄褐色土が斑状に混ざる
  27. 暗褐色土 焼土殻、ローム殻を含む
  28. 暗褐色土 ローム殻を少量含む
  29. 暗黄褐色土 ローム土主体、暗褐色土が斑状に混ざる



第70図 SK034貝ブロック、出土遺物(1)



第71図 SK034貝ブロック土坑出土遺物(2)

ほど多くないが、内容的にはほとんどかわらない。

図示した遺物は25点で、1~20・24・25はAブロック、22・23はBブロックから出土し、21は双方から出土したものが接合している。1は底部から大きく広がる器形を呈する浅鉢で、推定口径29.0cm、残存器高13.5cmを測る。外面は無文で、内面は口唇直下に沈線で挟まれた隆線が巡る。隆線には断面円形の棒状工具でキザミが施される。平口縁であるが山形の小突起が付けられる。小突起は内側に刺突が施されるほか、渦巻文が入った円盤状の飾りが横向きに付けられる。内・外面とも丁寧なミガキ調整が施されるが、外面の小突起下側は剥落が目立つ。2は深鉢の胴部から底部にかけてで、底径11.0cm、残存器高16.5cmを測る。底部は全周する。3は緩やかに直立する器形を呈するもので、鉢か浅鉢であろう。L R縄文を地文として口縁直下とそこから5cm下に半截竹管による平行沈線を横位に巡らせ、間に同じ半截竹管で鋸歯状のモチーフを描く。4・6は頸部にくびれを持つ深鉢である。4は図上側の横位沈線が頸部にあたり、胴部側は半截竹管による重痕線が描かれる。5・7・8・10・11・13・14・16・22は口縁部が直線的に開く深鉢である。5は波状口縁で、波頂部口唇上に指頭押圧を入れ両側に切込みを入れて独立した突起にしている。8は先の鋭い刃物のような工具(石器か)を用いて施文している。13・14・22は口縁に沿ってキザミを持つ隆線を巡らせる。13は断面円形の棒状工具で斜め方向にキザミを入れている。沈線区画内の縄文

はきわめて浅い。口唇上には円盤状の小突起が付けられる。14は隆線が2段となっているもので、図の右端では円形刺突をもつボタン状貼付文とそれを結ぶ縦線隆線によって両者が連結されている。16は瘤状の小突起が付けられる。22は断面円形の棒状工具を用いるが、キザミの間隔が狭い。9・12は器壁が底部から強く外反するように立ち上がり、胴部で屈曲して立ち上がる器形を呈する深鉢である。9は磨消縄文、12は充填縄文である。17~20は加曽利B1式の深鉢である。17は縄文施文後口縁に沿って断面三角形の隆線を貼り付け、指頭押圧で紐線文としている。条線は半截竹管を用いて施文している。18~20も文様構成は同一であるが、縄文施文が後になる。紐線文も20は17と同様指頭のみであるが、18・19は爪を立てている。21は深鉢底部で、底部直上の紋りがやや強い。底径6.7cm、残存器高4.5cmを測る。23は縄文施文の深鉢胴部で、原体がかなり太いことから加曽利B1式の粗製土器と判断される。24はチャート製の石鏝である。25はホルンフェルス製の打製石斧で、半分欠損している。

#### SK035 (第69図)

K57-84・94グリッドに位置する風倒木痕上から検出された貝ブロックである。周辺には縄文時代後期の遺構はなく、約5m北にSK057が、約5m南東にSK060炉穴がある。遺構確認面より上で検出され、75cm×75cm程度の不定型な広がりを見せるごく薄い混貝土層である。条痕文土器及び堀之内式土器の小片が出土したが、採拓できる破片はなかった。

## 5 炉穴

この項では、炉穴とみられる遺構を掲載した。なお、足場から炉床部に向かう長軸中心線が真北または真南の方位からずれる角度を「主軸」として計測した。

#### SK036 (第72図、図版8)

炉穴群の分布の北端、K55-85グリッドに位置する。やや離れて南東約17mにSK037炉穴がある。炉床部長軸側立上がり部分及び足場側の一部には攪乱が入り、遺存状態はよくない。全体の形状は長楕円形をなすと思われ、長軸遺存長150cm、短軸90cm、深さ18cmを測る。主軸はS-64°-Wをとる。炉部には50cm×45cmの範囲に厚さ4cmの焼土が堆積していた。出土遺物はない。

#### SK037 (第72図、図版8)

K56-09グリッドに位置する。SK038炉穴がやや離れて南東約11mにある。形状は長楕円形をなし、長軸209cm、短軸106cm、深さ15cmを測る。主軸はS-19°-Eをとる。炉床部には焼土の堆積はなかったが、33cm×45cmの範囲が非常によく焼けていた。出土遺物はない。

#### SK038 (第72図)

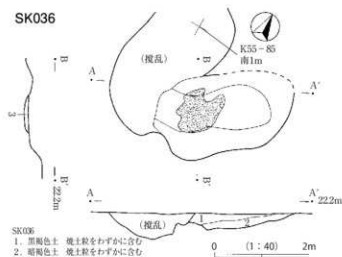
L56-21グリッドに位置する。北西約11mにSK037炉穴が、南西約13mにSI002住居跡(早期)がある。周辺はすべて攪乱で炉床部のみが残る。炉床部には60cm×70cmの範囲に厚さ3cmの焼土が堆積し、炉底はよく焼けていた。鶴ガ島台式及び条痕文土器の小片が出土したが、掲載に耐えうるものはなかった。

#### SK039 (第72図、図版8)

K56-20グリッドに位置する。やや離れて南西約13mにSK040炉穴がある。遺構確認面ではほぼ全体に攪乱が認められたため、炉床部周辺の下半部しか認識できなかった。形状は長楕円形で、主軸はおおよそN-23°-Eをとると思われる。炉床部には厚さ8cmの焼土が堆積し、炉底はよく焼けていた。出土遺物はない。



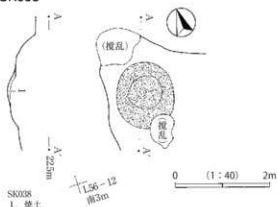
SK036



SK036

1. 黒褐色土 焼土粒をわずかに含む
2. 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む
3. 焼土

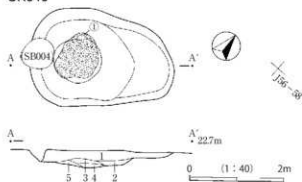
SK038



SK038

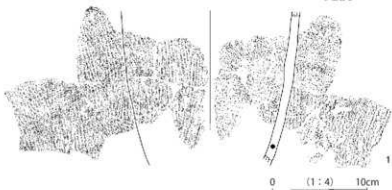
1. 焼土

SK040

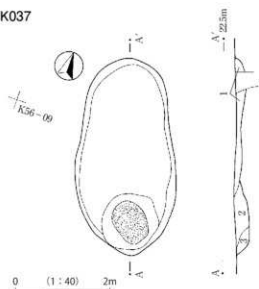


SK040

1. 黒褐色土 焼土粒をわずかに含む
2. 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む
3. 暗褐色土 焼土粒を多く含む
4. 褐色土 焼土粒を多量に含む
5. 暗褐色土 焼土粒を少量含む



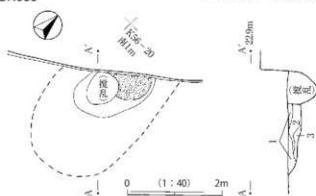
SK037



SK037

1. 黒褐色土 ローム粒を含む
2. 黄褐色土 焼土粒を含む
3. 暗黄褐色土 焼土を含む

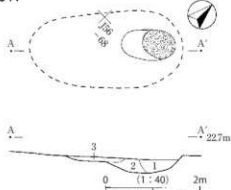
SK039



SK039

1. 暗褐色土 ローム塊・焼土粒を含む
2. 暗褐色土 ローム塊を多く含む
3. 褐色土 ローム塊を含む、焼土粒やや多く含む

SK041

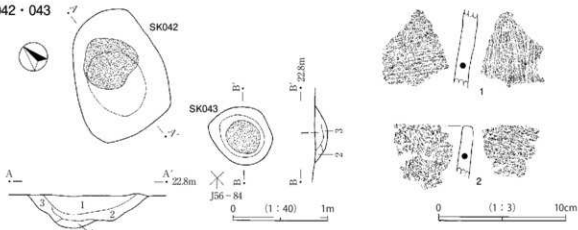


SK041

1. 暗褐色土 焼土粒・焼土塊を含む
2. 暗褐色土 ローム粒を含む
3. 暗褐色土 ローム粒を多く含む

第72図 SK036・037・038・039・040・041好穴、出土遺物

SK042・043



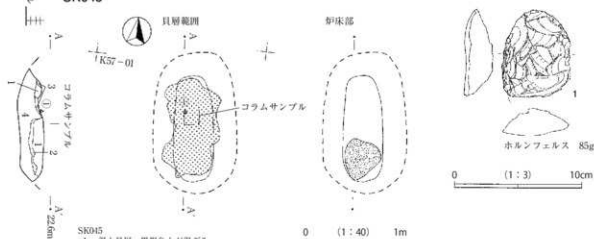
SK042

1. 暗褐色土 硝子土が混ざる。焼土粒・ローム粒を含む
2. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒を含む
3. 黄褐色土 ローム粒を含む
4. 暗褐色土 焼土粒を含む

SK043

1. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒を含む
2. 黄褐色土 ローム粒を含む
3. 暗褐色土 焼土粒を含む

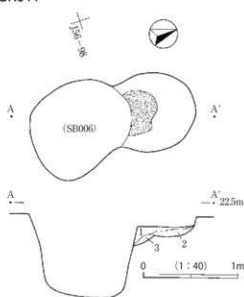
SK045



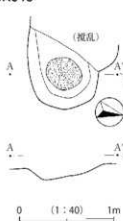
SK045

1. 混土貝層 黒褐色土が混ざる
2. 混土貝層 黒褐色土主体
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土 ローム粒含む

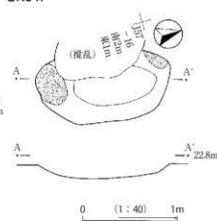
SK044



SK046



SK047



SK044

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む
2. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む
3. 焼土

第73図 SK042・043・044・045・046・047好穴、出土遺物

**SK040** (第72図、図版8・27)

J56-57グリッドに位置する。南東約2mにSK041炉穴がある。炉床部長軸側の立上がり部分をSB004掘立柱建物跡の柱穴に切られている。長楕円形をなし、長軸200cm、短軸103cm、深さ12cmを測る。主軸はS-49°-Wをとる。炉床部には52cm×47cmの範囲に厚さ10cmの焼土が堆積していた。

図示した遺物は1点である。土器1は深鉢胴部で焼土上から出土したものである。上端部の径が19.0cm、残存器高は16.3cmを測る。表裏とも縦方向の貝殻条痕文が施される。

**SK041** (第72図)

J56-58・68グリッドに位置する。北西約2mにSK040炉穴がある。遺構確認面ではほぼ全体に攪乱が認められたため、炉床部周辺の下半部しか検出できなかった。形状は長楕円形で、主軸はおおよそN-45°-Eをとると思われる。炉床部には35cm×30cmの範囲に厚さ8cmの焼土が堆積していた。出土遺物はない。

**SK042** (第73図、図版9・32)

J56-74グリッドに位置する。長さ134cm、幅97cmの楕円形で、遺構確認面からの深さは36cmを測る。主軸はN-22°-Eである。炉床部は焼土の堆積はないが、58cm×59cmの範囲がよく焼けている。

**SK043** (第73図、図版9・32)

J56-74グリッドに位置し、SK042が隣接する。70cm×61cmの略円形で、遺構確認面からの深さ13cmを測り、炉床部のみが残存する。炉床部は焼土の堆積はないが、33cm×37cmの範囲がよく焼けている。

出土遺物はSK042炉穴と一緒に一括で取り上げられている。1は深鉢胴部で表裏に貝殻条痕が施される。2は深鉢口縁部で、表面と口唇上に貝殻腹縁圧痕が施され、内面は貝殻条痕が施される。

**SK044** (第73図、図版9)

J56-88グリッドに位置する。東約11mにSI001住居跡(早期)がある。足場部から炉部の一部にかけてSB006掘立柱建物跡の柱穴に切られている。短軸最大幅82cm、深さは炉底の最も深いところで22cmを測る。炉床部の最大幅は47cm、焼土の堆積は最も厚いところで7cmを測る。出土遺物はない。

**SK045** (第73図、図版9・39)

K57-01グリッドに位置する。SI001住居跡が北東に隣接している。遺構確認面ではほぼ全体に攪乱が認められたため、遺構下半部しか認識できなかった。形状は長楕円形で、長軸150cm、短軸90cm程度の大きさで、主軸はS-6°-Eをとると思われる。炉床部には45cm×40cm、厚さ5cmの焼土が堆積していた。遺構中心部分の覆土上半に約100cm×50cmの範囲に厚さ15cmの貝ブロックが堆積していた。コラムサンプルを採取した。

図示した遺物は1点である。1はホルンフェルス製の礫石斧で、半分欠損している。

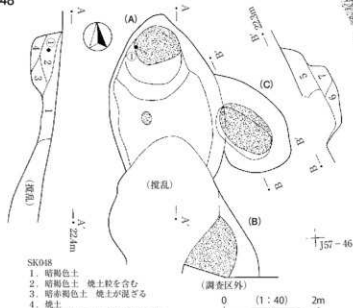
**SK046** (第73図)

J57-14グリッドに位置する。東約7mにSK047炉穴が、南東約9mにSK048炉穴がある。足場部は根による攪乱を受け、炉部のみが残る。形状は長楕円形であったと思われ、短軸幅73cm、深さ10cmを測る。主軸はおそらくN-70°-E程度であろう。炉床部は48cm×35cmの範囲がわずかに焼けた程度であった。出土遺物はない。

**SK047** (第73図)

J57-16グリッドに位置する。西約7mにSK046炉穴が、南約7mにSK049炉穴がある。西測縁に攪乱があるが、形状は長楕円形をなすと思われる。長軸140cm、短軸81cm、深さ11cmを測る。焼土範囲は2か

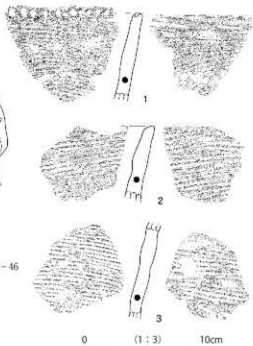
SK048



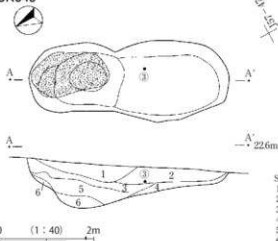
SK048

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 焼土粒を含む
3. 暗赤褐色土 焼土が混ざる
4. 焼土
5. 暗黄褐色土 焼土粒を少量含む
6. 褐色土 焼土粒を含む
7. 暗褐色土 焼土粒を含む

(調査区外)  
0 (1:40) 2m



SK049

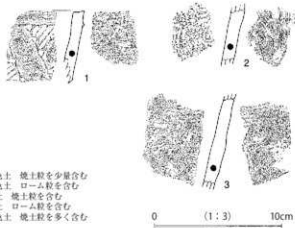


57-56

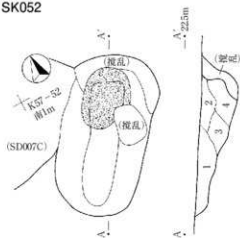
SK049

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む
2. 暗褐色土 ローム粒を含む
3. 褐色土 焼土粒を含む
4. 褐色土 ローム粒を含む
5. 暗褐色土 焼土粒を多く含む
6. 焼土

0 (1:40) 2m



SK052



(SD007C)

K57-32  
南1m

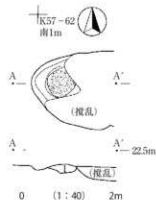


SK052

1. 暗褐色土 ローム粒・ローム塊・少量の焼土粒を含む
2. 褐色土 焼土粒・少量のローム粒を含む
3. 暗褐色土 焼土粒を多く含む
4. 焼土

0 (1:40) 2m

SK053



K57-62  
南1m

SK053

1. 焼土

第74図 SK048・049・052・053炉穴、出土遺物

所あるが、どちらもわずかに焼けた程度である。位置的には30cm×42cmのひろがりをもつ南側が炉床部と推定される。したがって、主軸はS-15°-Wと思われる。出土遺物はない。

#### SK048 (第74図、図版9・34)

J57-35・45グリッドに位置する。東約4mにSK049炉穴がある。3基の重複である。A炉穴の足場とB炉穴の炉床部との間に攪乱が入り、B炉穴は一部が調査区域外にかかり、炉床部だけが残っていた。また、AとCは重複するが、新旧関係は把握できなかった。A炉穴の形状は楕円形をなすと思われる、長軸長は不明であるが、短軸幅は121cm、深さ32cmを測る。主軸はN-1°-Wをとるとされる。炉床部には49cm×40cmの範囲に厚さ12cmの焼土が堆積していた。B炉穴は深さが23cmで、炉床部には焼土の堆積はなく、炉底は焼けていた。C炉穴は長軸長が不明で、短軸幅は80cm、深さ36cmを測る。主軸はS-57°-Eほどであろう。炉床部には65cm×39cmの範囲に厚さ15cmの焼土が堆積していた。A・Bからは採掘した3点の条痕文土器片のほか、鴉が島台式の小破片も出土した。Cからは条痕文土器の小片が1点出土したが掲載に耐えうるものはなかった。

図示した遺物は3点である。1はA炉穴出土、2は攪乱中から出土したもの、3はA炉穴もしくはB炉穴覆土の一括取上げである。1は深鉢口縁部で、表裏に貝殻条痕が施される。口唇は丸みを帯びており、先が尖った棒状工具を斜位に連続刺突を加える。2も深鉢口縁部で、口唇を内削ぎ状に成形するがキザミは施されない。3は深鉢胴部で表裏に貝殻条痕が施される。焼成はやや不良でもよい。

#### SK049 (第74図、図版9・34)

J57-36・37グリッドに位置する。西約4mにSK048炉穴が、東約6mにSK050炉穴がある。形状は長楕円形をなし、長軸212cm、短軸72cm、深さ47cmを測る。主軸はN-29°-Eをとる。炉床部は中央が一段深く窪んでおり、79cm×46cmの範囲に厚さ13cmの焼土が堆積し、炉底はよく焼けていた。足場は炉床部に向かって傾斜をもっていた。

図示した遺物は3点で、3は図示した位置から出土し、ほかは一括取上げである。1は鴉が島台式の深鉢口縁部である。口縁に沿って細隆線を巡らせ、そこを起点として2本一組の平行細隆線を斜位に配する。細隆線の交点には断面円形の棒状工具で斜め方向の刺突を加え、三角形の区画を短沈線で充填する。口唇上は内削ぎ状に成形する。2は深鉢胴部で、施文は器面の状況が悪くわかりにくい貝殻背圧痕文と思われる。内面は板状工具によるケズリ調整が施される。胎土の植物繊維含有量が1に比べてかなり多く、早期末に位置づけられる可能性がある。3も深鉢胴部で、表裏とも貝殻条痕が施される。

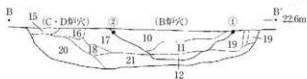
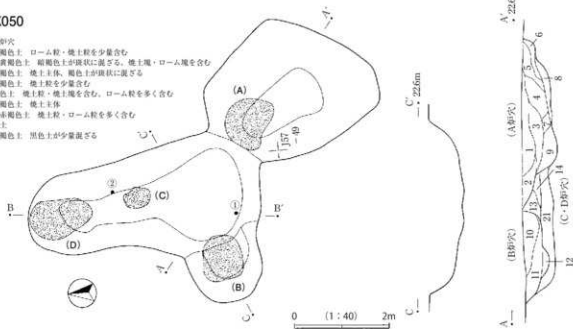
#### SK050 (第75図、図版9・34)

J57-38・39・49グリッドに位置する。東約3mにSK051炉穴、西約6mにSK049炉穴がある。4基の炉穴が重複する。断面A-A'・B-B'からA炉穴とB炉穴がC・D炉穴より新しいことがわかる。A炉穴はC・D炉穴の足場側末端と一部重複する。幅広の不整楕円形をなし、長軸160cm、短軸138cm、深さは最も深い炉底部で37cmを測る。主軸はN-26°-Wをとる。炉床部には55cm×43cmの範囲に焼土が厚さ16cmで堆積していた。B炉穴は足場をC・D炉穴の覆土中に貼床(土層12)を貼って構築しているが、足場側の末端は把握できなかった。したがって、B炉穴の規模は長軸長が不明、短軸76cm、深さは炉底部で26cmである。主軸はおおよそS-58°-Wであろう。炉床部には50cm×45cmの範囲に厚さ7cmの焼土が堆積し、炉底はよく焼けていた。D炉穴は足場側が非常に長く思われたが、調査中に新たな火床面(C)が発見されたため、C→Dと炉床部が主軸に沿って重複することが判明した。しかし、D炉穴の足場側の立上がりは把握

### SK050

C・D印穴

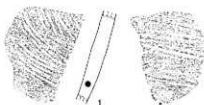
13. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む
14. 暗褐色土 暗褐色土が塊状に混ざる。焼土塊・ローム塊を含む
15. 赤褐色土 焼土主体。褐色土が塊状に混ざる
16. 暗褐色土 焼土粒を少量含む
17. 褐色土 焼土粒・焼土塊を含む。ローム粒を多く含む
18. 赤褐色土 焼土主体
19. 暗赤褐色土 焼土粒・ローム粒を多く含む
20. 焼土
21. 暗褐色土 黑色土が少量混ざる



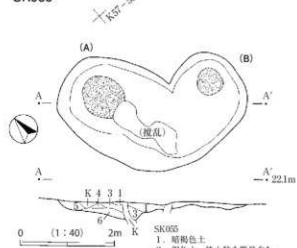
SK050

A印穴

1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を多く含む
3. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土塊を含む
4. 暗褐色土 ローム粒・ローム塊・焼土塊を含む
5. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
6. 暗褐色土 ローム土と暗褐色土が混ざる。ローム塊を含む
7. 暗赤褐色土 暗褐色土に焼土が混ざる
8. 暗褐色土 黑色土が少量混ざる
9. 焼土
10. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む
11. 褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
12. 暗褐色土 褐色土・ローム土主体。土粒を含む



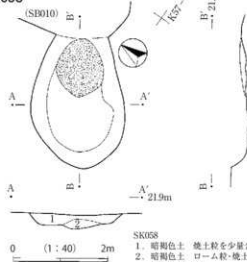
### SK055



SK055

1. 暗褐色土
2. 褐色土 焼土粒を少量含む
3. 暗褐色土 焼土粒少量含む
4. 暗赤褐色土 暗褐色土と焼土が混ざる
5. 褐色土
6. 焼土

### SK058

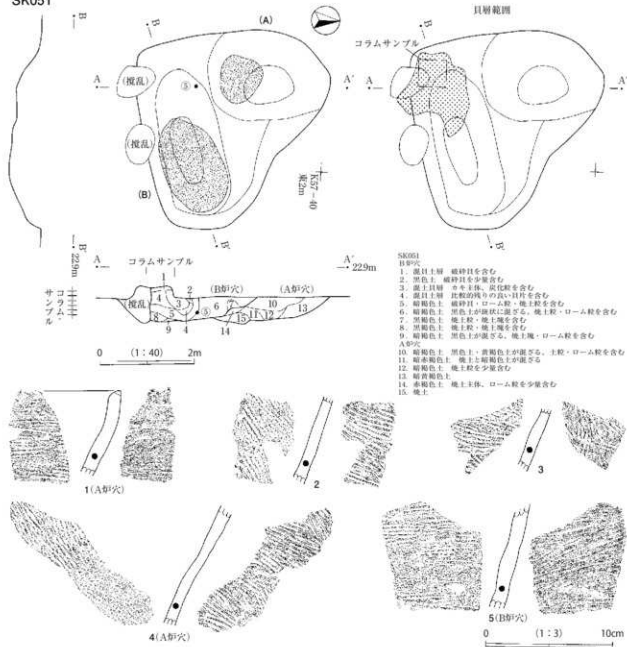


SK058

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土塊を含む
3. 焼土

第75図 SK050・055・058印穴、出土遺物

SK051



第76図 SK051炉穴、出土遺物

できなかった。したがって、D炉穴の規模は長軸長が不明、短軸86cm、深さは41cmである。主軸はN-5°-Wであろう。炉床部には66cm×41cmの範囲に厚さ25cmの焼土が堆積していた。炉穴Cは炉床部が30cm×25cmの範囲の火熱を受けた炉底のみ残る。なお、SPB'寄りの足場からその立上りは炉穴Cのものであろう。以上、SK050炉穴の4基の重複は古いものから新しい順に以下になると考えられる。

C → D → B  
    ↘ A

出土土器は少なく、採拓できたのは2点のみであった。図示した遺物は2点で、そのうち2はD炉穴の覆土中であるが、1はB炉穴とC炉穴の境にあたり、帰属は不明確である。1・2とも深鉢胴部で、表裏に貝殻条痕が施される。

#### SK051 (第76図、図版9・34)

K57-40グリッドに位置する。西約3mにSK050炉穴、南東約7mにSK052炉穴がある。2基の炉穴が重複する。A炉穴の炉床部側立上がりがりB炉穴によって切られている。A炉穴は楕円形をなし、長軸128cm、短軸95cm、深さ26cmを測る。主軸はS-3°-Eをとる。炉床部には50cm×40cmの範囲に厚さ11cmの焼土が堆積していた。B炉穴は長楕円形をなし、長軸205cm、短軸125cm、深さ35cmを測る。主軸はN-75°-Eをとる。炉床部には102cm×62cmの範囲に厚さ20cmの焼土が堆積していた。また、足場側には95cm×85cmの範囲に厚さ35cmの貝ブロックが堆積しており、コラムサンプルを採取した。

図示した遺物は5点で、そのうち1・4はA炉穴、5はB炉穴出土である。1は深鉢口縁部で、口唇を内削ぎ状に成形し、断面円形の棒状工具でキザミを入れる。内面の貝殻条痕はかなり弱くわかりにくい。2～4は同一個体と思われる深鉢胴部で、表裏にしっかりとした貝殻条痕が施される。焼成は良好で器面の状態も硬質で良好である。5は深鉢胴部で表裏に貝殻条痕が施される。外面は熱を受けており若干磨耗している。

#### SK052 (第74図、図版38)

K57-52グリッドに位置する。北東約5mにSK054炉穴が、南約2mにSK053炉穴がある。炉部の周辺2か所に攪乱を受け、北西側は中世遺構SD007Cによって切られている。全体の形状は長楕円形をなすと思われ、長軸約173cm、短軸82cm、深さ37cmを測る。主軸はN-34°-Eをとる。炉床部には49cm×63cm範囲に厚さ24cmの焼土が堆積していた。遺物は鶴が島台式及び条痕土器の小破片が出土したが、採掘できるものはなかった。

図示した遺物は1点である。1は黒曜石製の石鎌で、片面整形であるが実用に耐えると考えられるため完成品扱いとした。

#### SK053 (第74図)

K57-62グリッドに位置する。北約2mにSK052炉穴がある。大きく攪乱を受けており、炉床部のみが残る。炉床部には35cm×30cmの範囲に厚さ10cmの焼土が堆積していた。出土遺物はない。

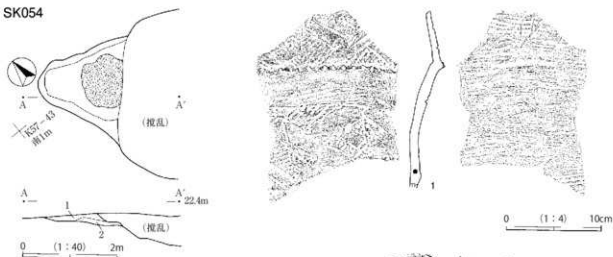
#### SK054 (第77図、図版27・34)

K57-43グリッドに位置する。南西約5mにSK052炉穴が、南東約6mにSK055炉穴がある。足場部から炉床部の一部にかけて攪乱を受けている。深さは炉底の最も深いところで14cmを測る。主軸はおおよそN-55°-Wをとるものと思われる。炉床部は略円形をなすようで、直径約55cmの範囲に厚さ3cmの焼土が堆積していた。攪乱中から鶴が島台式土器が出土しており、本来は本炉穴に所属するとみて掲載した。

図示した遺物は4点である。1は深鉢口縁で、器壁が複数の屈曲を経て口縁部へ直立するように立ち上がる形状を呈する。屈曲部には断面円形の棒状工具でキザミが施された隆線が貼り付けられる。屈曲の間は横走沈線と斜行沈線によって三角形ないしは菱形の区画が構成され、沈線の交点には竹管による円形刺突が配される。区画の中は棒状工具による押し文が充填される。内面は横位の貝殻条痕が施される。2は深鉢で口縁部にほど近い部位と考えられる。細隆線で横区画を行い、斜めの区画は沈線で行う。交点は半載竹管の刺突を配し、区画内は棒状工具による押し文を充填する。3は深鉢胴部で屈曲を有する。屈曲に沿った横位の隆線に縦位の隆線が交差しており、隆線を結ぶように斜行沈線が配され区画を形成する。隆線と沈線の交点には竹管の円形刺突が配され、三角形の区画内は棒状工具による押し文が施される。4は深鉢胴部で、区画をすべて沈線で行うものである。沈線の施文工具はごく細い棒状工具であるため識別しづら

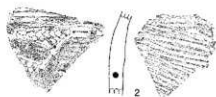


SK054

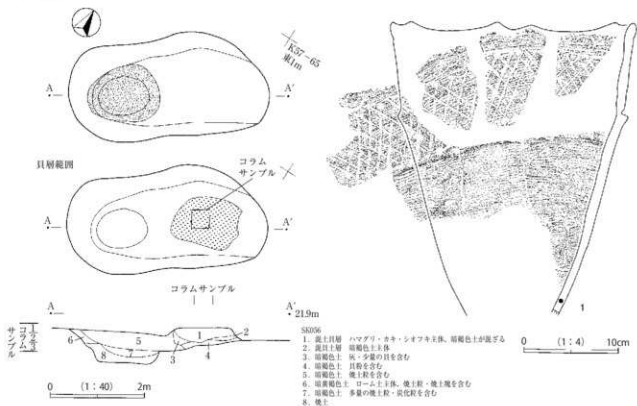


SK054

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む  
2. 暗褐色土 焼土粒を多く含む



SK056



SK056

1. 黄土層 ハマダリ・カキ・シオアキ天株、暗褐色土が混ざる  
2. 黄土層 暗褐色土主体  
3. 暗褐色土 灰・少量の貝を含む  
4. 暗褐色土 貝殻を含む  
5. 暗褐色土 焼土粒を含む  
6. 暗褐色土 ローム土主体、焼土粒・焼土塊を含む  
7. 暗褐色土 多量の焼土粒・炭化粒を含む  
8. 焼土

第77図 SK054・056竈穴、出土遺物

い。沈線の交点は竹管による円形刺突、区画の中は棒状工具による押引文が施される。

#### SK055 (第75図、図版10)

K57-54・55グリッドに位置する。南約2mにSK056炉穴が、北西約6mにSK054炉穴がある。2基の重複であるが、掘込みが浅いため、切合い関係は不明である。西側をA炉穴、東側をB炉穴とする。A炉穴の形状は長楕円形と思われ、長軸170cm程度、短軸100cm、深さ18cmを測る。主軸はN-21°-Wをとると思われる。炉床部には46cm×42cmの範囲に厚さ8cmの焼土が堆積していた。B炉穴の形状は長軸長の短い楕円形と思われ、短軸幅は85cm、深さ10cmを測る。主軸はN-83°-Eをとると思われる。炉床部には直径28cmの範囲に焼けた面のみが残る。出土遺物は条痕文土器の小片が1点のみであった。

#### SK056 (第77図、図版10・27)

K57-64・65グリッドに位置する。北約2mにSK055炉穴が、南約5mにSK057炉穴がある。足場の長軸側立上がり不明であるが、形状は長楕円形をなすと思われる。残存長軸長214cm、短軸110cm、深さ32cmを測る。主軸はS-57°-Wをとる。炉床部には80cm×59cmの範囲に厚さ8cmの焼土が堆積していた。足場部に遺構確認面から遺構底面まで貝層が堆積し、4層に分層できた。貝層の範囲は80cm×57cm、厚さ16cmである。コラムサンプルを採取した。鵜ガ島台式の大破片が1点出土した。

図示した遺物は1点で、一括上げである。1は鵜ガ島台式の深鉢で、推定口径25.6cm、残存器高30.9cmを測る。尖底から砲弾型に立ち上がり、1段の屈曲を経て口縁部へ若干反するように立ち上がる。屈曲に沿って隆線を通らせ、上下を区画する。下側は貝殻条痕のみで、底部付近は特に熱による剥落が目立つ。口縁部は小突起2基で1単位を構成しており、遺存状況が悪いため断定はできないが、全部で4単位となっている可能性が高い。口縁に沿って幅の狭いへら状の工具による沈線を通らせ、胴部の隆線との間を斜格子状の沈線で充填する。竹管による円形刺突は口縁側の沈線と隆線に沿って主に施されるが、斜格子部分にもいくつか認められる。ただし場所はかなりランダムである。口唇形状は丸く、先の鋭い刃物のような工具でキザミを施している。

#### SK057 (第78図、図版34)

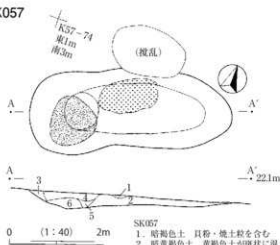
K57-74・84グリッドに位置する。東約4mにSK026土坑が、北約5mにSK056炉穴がある。長楕円形の形状をなし、長軸215cm、短軸89cm、深さ18cmを測る。主軸はS-70°-Wをとる。炉床部には53cm×50cmの範囲に厚さ13cmの焼土が堆積していた。中央北側の覆土最上部に64cm×34cmの範囲で厚さ6cmの密度の薄い貝粉ブロックが検出された。

図示した遺物は2点で、いずれも中央の貝ブロック付近から出土している。1は深鉢口縁部で、外面は横位の貝殻条痕、内面は縦位の貝殻条痕が施される。口唇形状は丸く、断面円形の棒状工具によるキザミが施される。2は深鉢口縁部で、外面はR L縄文、内面は横位の貝殻条痕が施される。口唇は内削ぎ状に成形され先端が尖っており、口縁から5cmほど下がった外面には横走する隆線が貼り付けられる。早期末から前期初頭に位置づけられる。

#### SK058 (第75図、図版10)

K57-47・57グリッドに位置する。南西にSK027土坑が近接し、南東約2mにSK059炉穴がある。炉床部側は平安時代のSI029住居跡の下から検出され、炉部先端はSB010掘立柱建物跡の柱穴によって切られている。形状は楕円形をなすと思われ、長軸長は不明であるが、150cm程度であろう。短軸長は100cm、深さは18cmを測る。主軸はおおよそN-55°-Eをとる。炉床部には62cm×50cmの範囲に厚さ7cmの焼土が堆積し

SK057



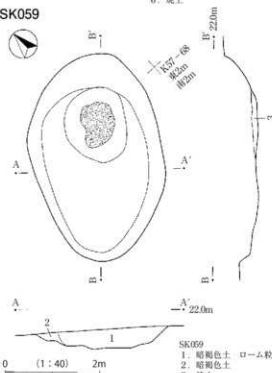
SK057

1. 暗褐色土 貝粉・焼土粒を含む
2. 暗褐色土 黄褐色土少環状に混ざる
3. 暗褐色土 焼土を少量含む
4. 暗赤褐色土 暗褐色土と焼土が混ざる
5. 褐色土 焼土が多く混ざる
6. 焼土



0 (1:3) 10cm

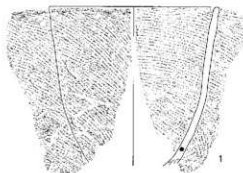
SK059



SK059

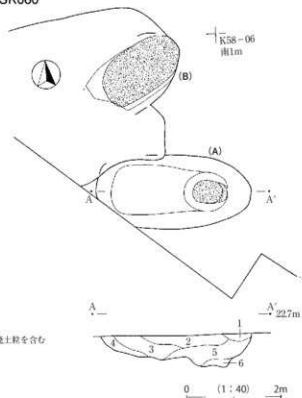
1. 暗褐色土 ローム粒・少量の焼土粒を含む
2. 暗褐色土
3. 焼土

0 (1:40) 2m



0 (1:4) 10cm

SK060



SK060

1. 暗赤褐色土 褐色土と焼土が混ざる
2. 暗赤褐色土 褐色土と焼土が混ざる、焼土粒を多く含む
3. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒を少量含む
4. 暗褐色土 黄褐色土が環状に混ざる
5. 暗赤褐色土 暗褐色土と焼土が混ざる
6. 焼土

0 (1:40) 2m



0 (1:3) 10cm

第78図 SK057・059・060戸穴、出土遺物

ていた。出土遺物はない。

#### SK059 (第78図、図版10・27)

K57-68グリッドに位置する。北西約2mにSK058炉穴、SK027土坑がある。形状は楕円形をなし、長軸220cm、短軸142cm、深さ30cmを測る。主軸はN-43°-Eをとる。炉床部には47cm×36cmの範囲に厚さ6cmの焼土が堆積していた。

図示した遺物は1点で、一括取上げである。1は小形の深鉢で推定口径18.0cm、残存器高16.8cmである。器形は砲弾型を呈し、内外面とも貝殻条痕文が施される。口唇上は貝殻背圧痕が施され、放射肋がキザミのような効果を上げている。外面下端部は熱により磨耗している。

#### SK060 (第78図、図版10・34)

炉穴群の南端、K58-05・06に位置する。北約9mにSK026土坑(早期)が位置する。2基の炉穴が攪乱をはさんで近接している。重複するか不明だが、一括して扱った。A炉穴は足場側が一部調査範囲外となり、かつ攪乱を受けている。長楕円形の形状をなし、長軸165cm、短軸79cm、深さ33cmを測る。主軸はS-84°-Eをとる。炉床部には35cm×25cmの範囲に厚さ7cmの焼土が堆積していたが、炉底はあまり焼けていなかった。B炉穴は全体に攪乱を受け、炉床部の下半のみが残る。形状は長楕円形をなし、主軸はN-60°-Eをとると思われる。炉部には90cm×51cmの範囲に厚さ19cmの焼土が堆積していたが、炉底はあまり焼けていなかった。

図示した遺物は1点で、B炉穴から出土した。1は鶴ガ島台式の深鉢胴部であるが、植物繊維の含有量が少なく貝殻条痕が施されない。横位沈線を境に若干外反し、沈線区画の中は断面円形の棒状工具による短沈線を充填する。

## 6 陥穴

#### SK061 (第79図、図版10・34)

K56-35グリッドに位置する。遺構の上部をSD009溝に切られ、北端はわずかにSB003掘立柱建物跡の柱穴に壊されている。平面は略円形をなし、断面形は中段にテラスを持つ。長軸側239cm、深さ145cmを測る。覆土は下半にしまったロームが厚く堆積していた。

出土遺物は図示した1点で、一括取上げである。堀之内2式の深鉢口縁部で、直線的に開く形状を呈する。口縁に沿って2本の平行沈線を巡らせ、間をLR縄文で充填する。

#### SK062 (第79図、図版10)

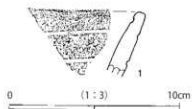
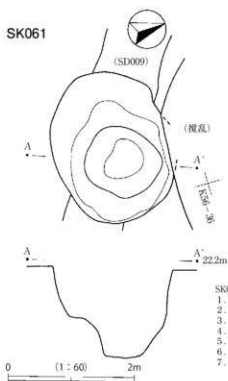
J56-78・88グリッドに位置する。遺構確認面の形状は長楕円形だが、底面では溝状をなす。遺構規模は確認面で長軸243cm、短軸117cmで、底面で長軸268cm、短軸18cmを測る。したがって、縦断面は袋状をなす。深さは1.43mで、覆土は中層にローム主体の層が認められた。掲載に耐えうる出土遺物はなかった。

#### SK063 (第79図、図版10)

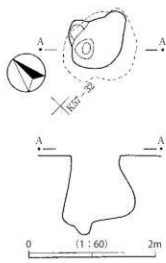
K57-22・32に位置する。遺構確認面の形状は略楕円形だが、底面ではほぼ円形をなす。遺構規模は確認面で長軸109cm、短軸69cmで、底面で長軸127cm、短軸105cmを測る。深さは102cmで、断面形態は袋状をなす。底面には深さ約20cmのピットが認められた。出土遺物としては条痕文及び黒浜式の土器小破片、堀之内式と思われる無文土器片があるが、掲載に耐えうるものはなかった。

#### SK064 (第79図、図版10)

SK061



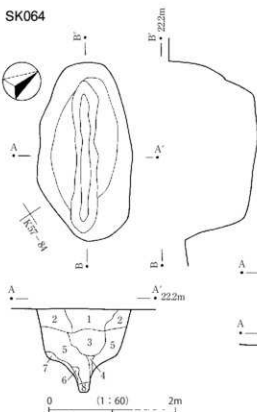
SK063



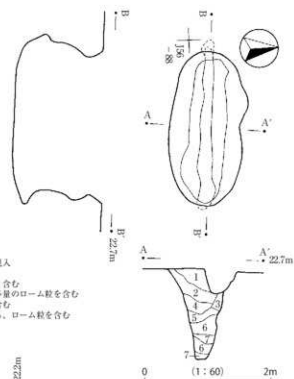
SK064

1. 暗褐色土 暗褐色ローム主体
2. 暗黄褐色土 ローム主体
3. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
4. 暗褐色土 暗褐色ローム主体、ローム粒を含む
5. 暗褐色土 暗褐色ローム主体、ローム粒を少量含む
6. 暗褐色土 ローム主体
7. 黄褐色土 ローム主体
8. 暗褐色土 ローム粒・ローム塊を含む

SK064

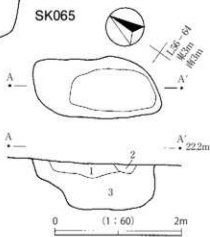


SK062



- SK062
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 ローム粒少量混入
3. 黄褐色土 ローム粒主体
4. 黄褐色土 ローム粒を多く含む
5. 暗黄褐色土 ローム塊・多量のローム粒を含む
6. 褐色土 ローム粒を多く含む
7. 暗褐色土 黒色土が混ざる、ローム粒を含む

SK065



SK065

1. 黒褐色土 ローム粒を含む
2. 暗褐色土 ローム粒を含む
3. 黄褐色土 ローム主体

第79図 SK061・062・063・064・065陥穴、出土遺物

K57-73・74グリッドに位置する。遺構確認面の形状は長楕円形だが、底面では溝状をなす。遺構規模は確認面で長軸282cm、短軸151cmで、底面で長軸239cm、短軸45cmを測る。深さは141cmである。覆土はほとんどが暗褐色土系であった。出土遺物はない。

#### SK065 (第79図)

L56-64グリッドに位置する。遺構確認面の形状は不整長方形をなす。遺構規模は確認面で長軸195cm前後、短軸98cmで、深さは72cmを測る。覆土はほとんどがローム主体の層であった。掲載に耐えうる出土遺物はなかった。

#### SK066 (第53図、図版4)

L57-05グリッドに位置する。SI015住居跡の貼床下から検出された。平面形態は長楕円形で、横断面は鍋底をなす。長軸185cm、短軸90cm、遺構確認面からの深さ96cmを測る。掲載に耐えうる出土遺物はない。

## 7 出土人骨

### (1) 概要

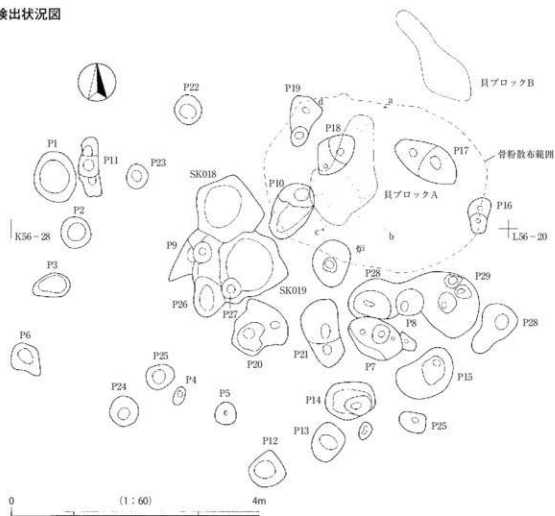
人骨はSI008住居跡の炉の北に形成された貝ブロックAの内部から出土した(第80図、図版3)。遺存状況は総じて不良であるが、その中で一見1体分の成人骨の胴部から下半身にかけてが比較的状况が良好であり、解剖学的位置を概ね保ち頭を南側に、脚を北側に向けた伸展葬の状態で検出されている。一方で下肢骨付近から下顎骨が出土しているほか、50cmほど西側に離れた地点から頭蓋骨などが出土していることから、当初から複数個体が存在するか、あるいは二次的な移動があったものと考えられた。調査に際しその点を留意して可能な限り微小な骨片までも出土位置を記録している。拡大図には形状が明確なもののみ、明らかに人骨であることが確認された骨片を点で示している。人骨は床面直上ではなく下に10cm程度土が堆積した状態で検出され、北側の下顎骨S18は床面から13cm、西側の下顎骨S17は同じく5cm～6cm、後頭骨S01は17cm床面から浮いていた。人骨を覆っている貝ブロックの規模は南北1.9m、東西1.0mの不整円形で、厚さはごく薄く人骨をわずかに覆う程度である。貝ブロックの外側には東西約3.5m、南北約2.6mにわたって骨粉が散布している(検出状況図の破線の範囲)。なお、SI008住居跡のP10とP18は一部が貝ブロックに覆われているが、人骨はぎりぎり干渉していないように見える。ただし一部の骨片はビット覆土の上面に散布しているのが観察される。

人骨の形質学的所見については渡辺新氏に分析を依頼し、成果を付章第1節に掲載したので参照されたい。なお、分析の結果最低5個体が存在することが認識されたため、第82図に各個体の位置を示した。また、各個体は同時に安置されたものではなく時間差があったものと推測される。詳しくは第3章のまとめで述べる。

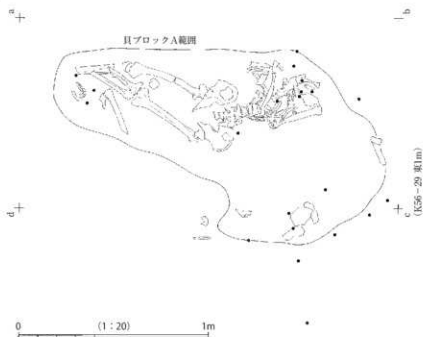
### (2) 出土遺物

第81図1～14は人骨を覆っていた貝ブロックA出土土器である(図版30)。検出状況から最後の人骨が安置されてから貝層が堆積するまで時間差は少ないと考えられ、これらの出土土器が最後の人骨の時期を示していると言える。1は堀之内1式の深鉢口縁部で、多条の沈線を垂下させる。2～10は堀之内2式である。2・4・5・8～10は直線的に開く深鉢の口縁部である。2は縄文地文に櫛羽状工具による条線が施されるが、器面に残る痕跡はごく浅くわかりにくい。4は平行沈線による幾何学的な区画を縄文で充填

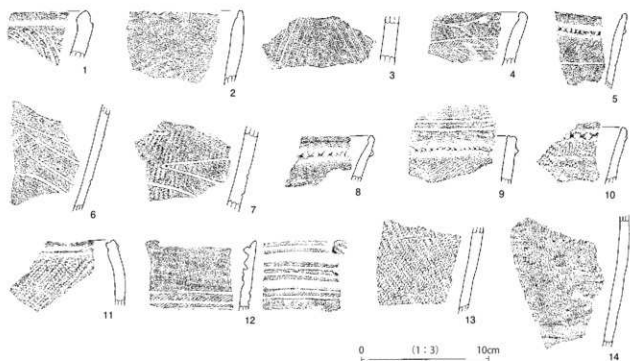
検出状況図



拡大図



第80図 SI008貝ブロックA人骨検出状況



第81図 SI008貝ブロックA出土土器

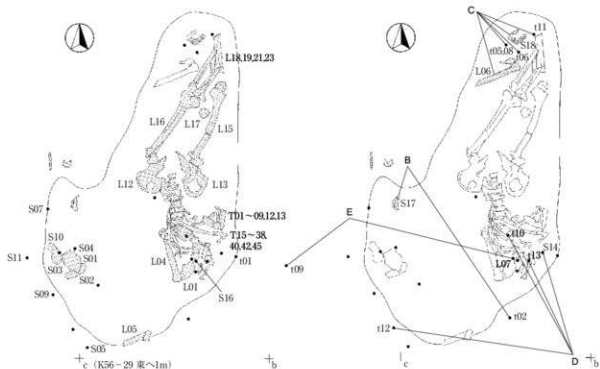
個体A

†<sub>d</sub>

個体B~E

†<sub>d</sub>

†<sub>a</sub>



第82図 人骨個体別位置図



する。5は口縁に沿って指頭押圧によるキザミをもつ細隆線を貼り付け、その下に沈線で区画された縄文帯を配する。8は棒状工具によるキザミをもつ細隆線が貼り付けられるがその下は無文のもの、9は指頭押圧によるキザミをもつ細隆線が貼り付けられるもので、口唇上面にも沈線が入る。10は口縁部沿いの細隆線に指頭押圧が施されるものであるが、9に比べ隆線は太くなり押圧も大きくなる。断面図ではわかりにくい口縁内側にごく細い沈線が配されている。3・6・7は直線的に深く深鉢の胴部である。3は目の粗い櫛羽状工具によって斜行する集合沈線が施される。6・7は単沈線によってやや曲線的なモチーフを描くもので、6は区画された沈線に縄文を充填するが、7は縄文を先に施文して後で沈線を加えている。11・12は加曾利B1式である。11は口縁部がすぼまる器形を呈する鉢の口縁部で、口縁に沿って断面三角形の細隆線が貼り付けられる。口縁内側を沈線が巡るほか、口唇上も抉り状の沈線が入る。12はグラス状を呈する深鉢口縁部で、器面は内・外面とも黒色処理され光沢を放っている。外面は縄文施文後沈線で帯状に区画し、口縁部を磨り消している。内面は多段の沈線を巡らせて部分的に斜行する短沈線を充填する。13・14は胴部破片で、縄文施文のみである。14は縄文原体が太く粗くなっており、加曾利B式製土器の特徴を示している。

## 8 出土動物遺存体

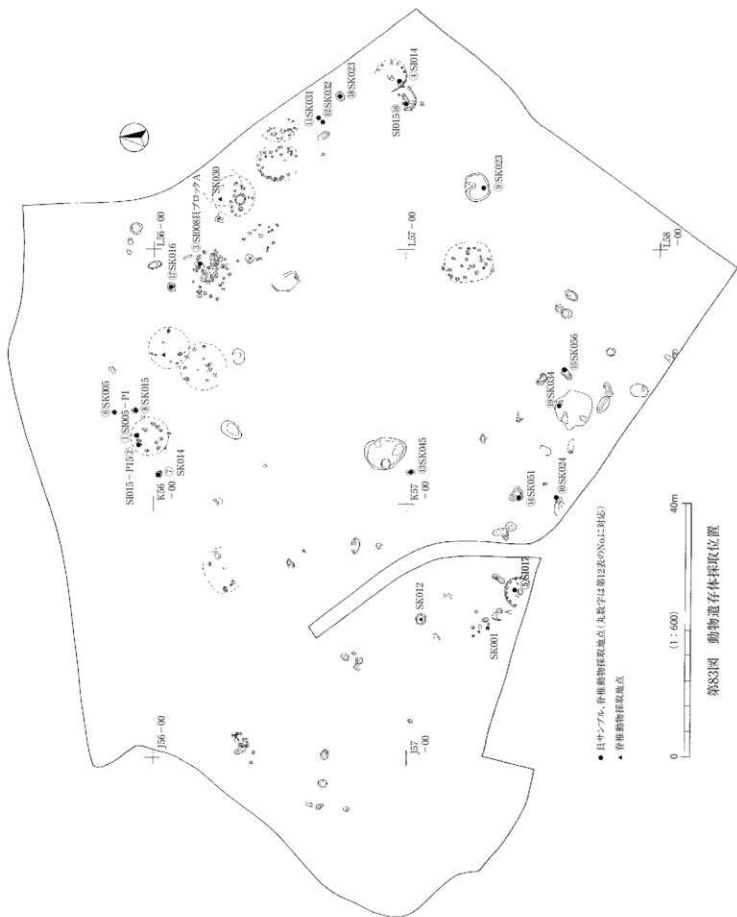
### (1) 採取地点とその状況

当遺跡では遺構の覆土を中心に小規模な貝ブロックが検出されている。概要については遺構の説明の中で述べているが、これらのうち遺存状況が良好なものについてはサンプルを採取している。また、サンプルを採取しなかった貝ブロックについても現場で簡易な簡い分けを実施し、動物骨については可能な限り回収を行っている。採取地点は第83図の通りである。サンプルの水洗から貝類の選別、同定、計測に至る作業は（公財）千葉県教育振興財団が行ったが、微小貝と脊椎動物を中心とする動物遺存体の分類、同定については芝田英行氏に分析を依頼し、成果を付章第2節に掲載したので参照されたい。

### (2) 貝サンプルの分析方法と概要

貝サンプルの一覧は第12表の通りである。竪穴住居跡5軒6か所、ビットないしは土坑9基9か所、炬穴3基3か所、風倒木痕から1か所の計19か所である。調査時はSI014住居跡覆土のごく小規模な貝ブロックを除いてコラムサンプルを採取した。コラムサンプルは基本的に平面20cm四方で厚さ5cmを1カットとして貝層の上端から下端まで採取したが、貝層の堆積状況やブロックの規模に応じて40cm×10cmにしたものなどもある。このうちNa16～19の4サンプルについては、貝ブロックが必ずしも原位置をとどめているとは言えないもの、あるいは他に時期や形状が同じで機能や用途も同じと思われる他の遺構の分析があるなどの理由で、1ないしは2カット分のみでの簡易な分析にとどめている（柱状図では矢印で示している）。時期は炬穴から採取した3サンプルは早期後葉の糸痕文期、それ以外は後期前葉の堀之内式期から中葉の加曾利B1式期が中心である。なお、後期遺構については4時期に区分している。詳細は第3章のまとも述べているが、堀之内1式を1期と2期、堀之内2式から加曾利B1式を3期と4期に区分しており、第84図と第87図の各サンプルのデータはその時期順に並べている。

貝サンプルは9.52mm、4mm、2mm、1mm、0.5mmメッシュの試験篩による水洗分離を行った。選別したサンプルの量と水洗前の重量は第12表の通りである（水洗後の重量は未計測）。貝類の選別は4mm以上を対象とした。二枚貝類は殻長部の鋭角が半分以上遺存するものを左右別に集計し、多い方を最小個体数とし



- 貝ヤングム、骨椎動物採集地点(丸数字は第12表のNo.に対応)
- ▲ 骨椎動物採集地点

第83図 動物遺存体採取位置

第12表 思井上ノ内遺跡貝サンプル一覧

No	遺構名	遺構種別	時期	採取法	cut	採取量 (g)	分析量 (ℓ)	備考
1	SI005-P1	住居跡	2期 (堀之内1)	コラム	16	27,510	36.45	
2	SI005-P15	住居跡	2期 (堀之内1)	コラム	13	21,200	26.40	
3	SI008貝ブロックA	住居跡	4期 (堀之内2~加曾利B1)	コラム	4	6,100	7.20	分析は一括扱い
4	SI014	住居跡	1期 (堀之内1)	一括	-	425	6.45	貝ブロックと葺の両方から採取
5	SI017	住居跡	1期 (堀之内1)	コラム	5	12,090	17.20	
6	SK005	ピット	不明	コラム	7	13,520	16.40	
7	SK014	土坑	3期 (堀之内2)	コラム	8	17,360	21.10	
8	SK015	土坑	2期 (堀之内1)	コラム	19	41,760	56.30	
9	SK023	土坑	3期 (堀之内2)	コラム	11	23,770	29.20	
10	SK024	土坑	堀之内	コラム	8	18,350	21.90	
11	SK031	貝ブロック	堀之内	コラム	3	1,950	2.20	
12	SK032	貝ブロック	不明	コラム	3	950	1.10	
13	SK045	竈穴	早期	コラム	4	10,900	14.60	
14	SK051	竈穴	柔直文	コラム	7	20,450	25.80	
15	SK056	竈穴	縄ガ島台	コラム	3	6,850	11.60	
16	SI015	住居跡	1期 (堀之内1)	コラム	19	3,820	4.60	カット3を分析
17	SK016	土坑	3期 (堀之内2)	コラム	10	4,610	4.50	カット1・2を分析
18	SK022	土坑	2期 (堀之内1)	コラム	20	3,990	4.80	カット1・4を分析
19	SK034貝ブロックA	貝ブロック (風倒木)	4期 (堀之内2~加曾利B1)	コラム	15	3,590	4.60	カット8を分析
合計						239,195.00	312.40	

た。巻貝類は各軸下端が遺存するものを集計した。同定した貝種一覧は第13表、個体数の集計結果は第14表の通りで、各カットの種名ごとの個体数と割合を示している。なお、網掛けは先に示した個体数の集計基準に満たない破片しか確認できなかったものの、出土した事実を示すために入力しているものであり、実際の破片数にかかわらず「1」と入力している。この結果から主要な貝種を抽出して構成比をグラフ化したのが第84・85図である。第84図が後期遺構、第85図が早期遺構を示す。グラフ化にあたっては時期不明のサンプルは除外している。

葺長の計測作業は種別同定した個体を対象として、計測が可能なものに対してのみ実施した。一部個体数が多い貝種については最大数を100とした。計測はデジタルノギスを使用してパーソナルコンピュータに直接データ入力した。入力したデータのうち、サンプルの時期が明確であるもの、1サンプルあたりの個体数が10以上であるもの、主要な貝種であるものを対象としてヒストグラムを作成し、さらにグラフ化を行った。なお2枚貝は左右両方の葺長を計測したが、最小個体数として採用した方のデータを分析処理している。データ処理はMicrosoft Excelの分析ツールを使用した。結果は第86・87図の通りで、第86図が早期遺構、第87図が後期遺構を示す。これも時期不明サンプルは除外している。

各サンプルの採取方法と概要はNo順に以下の通りである。

#### SI005-P1・P15 (第38図)

2か所とも堅穴住居内のピット内の貝ブロックである。P1は85cm×65cm、深さ73cmを測るやや大形のピットで、遺構確認面ではほぼ全体に貝ブロックが認められ、覆土中位から下位にも堆積していた。このためコラムサンプルは各層に対応して上層はA、中層はB、下層はCとブロックの各中心部で採取した。Aサンプルは40cm×10cmの範囲で4カット分採取した。BサンプルはAサンプルの北側を中心に20cm×20cmの範囲で5カット採取した。Cサンプルは南側へ移動して20cm×20cmの範囲で7カット分採取した。時期

は2期（堀之内1式）と判断される。貝種組成はハマグリが39%で最多であり、オキシジミ15%、アサリ8%と続いて上位3種で63%を占める。

P15は71cm×53cm、深さ55cmを測る。やはり遺構確認面から坑底近くまで貝層が堆積していたため、コラムサンプルを30cm×10cmの範囲で13カット採取した。時期はP1と同じく2期と考えられる。貝種組成はハマグリが43%で最多であり、シオフキ12%、オキシジミ11%、アサリ9%と続いて上位4種で75%に達している。

#### SI008（第46図）

堅穴住居跡の覆土内に堆積している貝ブロックであるが、住居跡の掘込みは失われており遺存状況は不良であった。規模は長軸1.9m、短軸1.0mで、厚さはごく薄い。貝ブロック内から前項で説明した埋葬人骨が出土している。貝ブロックからはコラムサンプルを採取しているが、図面にはコラムサンプルに関する記述が一切なかったため復元不能と思われた。しかし現場写真にピンボール4本と水系で四角く囲われた貝ブロックが写されていたため図面を精査したところ、該当すると思われる位置に注記のないポイントが4か所記載されていたため、そこがコラムサンプル採取位置であろうと推測して推定復元したものである。ポイントが示している範囲は20cm×20cmである。断面図は存在しないため貝層の堆積状況とカットレベルは不明である。サンプルは4カット分取り上げられていたため選別、同定まではカット単位で行ったが、結果をカットごとに提示する意味が認められないため表は一括で掲載した。時期は4期（堀之内2式～加曾利B1式）と判断される（土器は第81図）。貝種組成はハマグリが61%で最多であり、その他はオキシジミ10%、ハイガイ8%が多少目立つ程度である。

#### SI014（第52図）

堅穴住居跡の覆土内に堆積している貝ブロックである。貝ブロックは30cm×26cmの範囲に床面に接して8cmの厚さで堆積していた。ごく少量であるため一括採取した。また、やや規模の大きな炬を設けており、覆土中から多量の灰とともに少量ではあるが貝が出土したため、それらの選別結果も掲載した。時期は貝ブロックから直接出土した土器がなかったため断定はできないが、堅穴住居跡と同じく1期（堀之内1式）と推測される。貝種組成は67%をサルボオが占めているが、分母が小さいためこのような結果になった可能性がある。他はマガキが12%で多少目立つ程度である。

#### SI017（第56図）

堅穴住居跡の覆土内に堆積している貝ブロックである。貝殻片が散布する範囲は住居跡覆土中心部にまとまっているが、貝が多少なりとも密集していたのはごく狭い範囲であり、貝殻片が少量混入する混貝土層がほとんどであった。最も厚い箇所では床面から遺構確認面まで約25cmである。コラムサンプルは20cm×20cmの範囲で5カット採取した。時期は1期（堀之内1式）と判断される。確実に集計基準を満たしているのが6個体であるため貝種組成のデータとしては信頼性に乏しい。このうち4個体がハマグリである。

#### SK005（第59図）

単独のピット覆土内に堆積している貝ブロックである。遺構確認面より14cm上から貝ブロックが堆積しており、径30cm×27cm、深さ30cmの覆土全体に堆積していた。ピット内の貝はコラムサンプルと同じ要領で5cmごとに7カット採取し、それより上の貝は一括採取した。したがってサンプルの平面範囲はピットの形状に規定されており、厳密に言えば定量サンプルではない。時期は不明であるが後期前葉と推測される。貝種組成はアサリが41%で最多であり、サルボオが26%、ハマグリが10%と続いて上位3種で77%に達す

る。

#### SK014 (第63図)

土坑の覆土に堆積している貝ブロックである。深さ69cmの土坑を30cm掘り進めた段階で直径84cmのプラン全面に貝ブロックが検出され、不均質ながら坑底まで約40cmの厚さで堆積していた。中心部から20cm×20cmの範囲でコラムサンプルを8カット採取した。時期は3期（堀之内2式）と判断される。貝種組成はハマグリが44%で最多であり、アサリ10%、シオフキ9%、オキシジミとサルボオ8%と続いて上位5種で78%を占めるが、貝種が多い分上位種の寡占度も若干低い。

#### SK015 (第64図)

土坑の覆土に堆積している貝ブロックである。土坑のほぼ中心部に遺構確認面から約20cm上位で検出され、柱穴状に坑底まで堆積している。土坑自体が直径約1mの略円形であるのに対し、貝ブロックは最大径50cm程度である。中心部から20cm×20cmの範囲でコラムサンプルを19カット採取した。時期は2期（堀之内1式）と判断される。貝種組成はハマグリが38%で最多であり、ハイガイ18%、サルボオ13%、オキシジミ8%と続いて上位4種で77%を占める。

#### SK023 (第66図)

土坑の覆土に堆積している貝ブロックである。この土坑は長軸454cm、短軸384cm、最大深71cmと大形で、貝層も東西400cm、南北最大160cmと範囲が広い。何枚かの貝層（貝の含有率はかなり異なる）が堆積しているが、主要な貝層は土坑の南壁付近に最も厚く堆積している。34cmと最も厚い個所で、コラムサンプルを20cm×20cm範囲で11カット採取した（最上端のカット1は10cm、カット2以下は5cm厚である）。時期は3期（堀之内2式）と判断される。貝種組成はハマグリが68%と圧倒的多数を占め、他はオキシジミの14%が目立つ程度である。

#### SK024 (第65図)

土坑の覆土に堆積している貝ブロックである。遺構確認面全域で貝の散布が認められ、坑底近くまで貝ブロックが堆積していた。コラムサンプルは20cm×20cm範囲で8カット採取した。時期は小片ではあるが堀之内式の土器（非掲載）が出土しており、該期と考えられる。貝種組成はハマグリが40%で最多であり、ハイガイが16%、マガキが10%、アサリが8%と続いて上位4種で74%を占める。

#### SK031・SK032 (第69図)

浅い落込み内に堆積している貝ブロックである。遺構確認面で検出され、厚さはいずれも10cm程度である。中央付近でコラムサンプルを10cm×10cmの範囲で3カット採取したが、SK032のカット3は小破片のみで種名が判別できなかったため省略した。時期はSK031は出土土器（非掲載）から堀之内式と考えられる。SK032は出土遺物はなかったが、SK031と同じく堀之内式と推測される。いずれのサンプルも絶対数が少ないためデータの信頼性はやや劣る。貝種組成はSK031ではハマグリが34%で最多であり、オキシジミ16%、アサリ13%、マガキとハイガイが9%などとなっている。SK032ではハマグリが59%で最多であり、ハイガイ11%、マガキとアサリとオキシジミが7%となっている。

#### SK045 (第73図)

炉穴の覆土に堆積している貝ブロックである。覆土上層を中心に範囲約100cm×50cm、厚さ15cmの貝ブロックが堆積しており、ほぼ中心から15cm×15cmの範囲でコラムサンプルを4カット採取した。時期は出土遺物がないため断定できないが、当遺跡の他の炉穴と同じく条痕文期と推測される。貝種組成はマガキ

が67%で圧倒的多数を占めており、他はオオノガイが10%で目立つ程度である。

#### SK051 (第76図)

炬穴の覆土に堆積している貝ブロックである。2基の炬穴が切り合っており、新しいB炬穴側の覆土上層に範囲95cm×85cm、厚さ35cmの貝ブロックが堆積している。30cm×30cmの範囲でコラムサンプルを7カット採取した。時期は型式名までは明確にできないが糸痕文期と考えられる。貝種組成はマガキが75%と圧倒的多数を占めており、他はウミナナ科が10%で目立つ程度である。

#### SK056 (第77図)

炬穴の覆土に堆積している貝ブロックである。遺構確認面から遺構底面まで貝層が堆積し、特に上層側の貝含有量が多い。貝層の範囲は80cm×57cm、厚さ16cmである。20cm×20cmの範囲でコラムサンプルを3カット採取した。時期は出土土器から縄文式期と判断される。貝種組成はマガキが69%で圧倒的多数を占めており、オオノガイ9%、シオフキ8%と続いて上位3種で86%を占める。

#### SI015 (第53図)

竪穴住居跡の覆土中に堆積している貝ブロックである。南西側に掘込みが残存しており、その中にはほぼすっぽり収まるように貝ブロックが検出された。確認面から貼床土まで堆積しており、最も厚いところで20cmを測る。20cm×20cmの範囲でコラムサンプルを4カット採取し、カット3の分析結果を掲載した。時期は1期(堀之内1式)と判断される。貝種組成はハマグリが47%で最多であり、シオフキ18%、オキシジミ16%と続いて上位3種で81%を占める。

#### SK016 (第55図)

土坑の覆土中に堆積している貝ブロックであるが、遺構確認面より上では土坑の平面プランから大きくはみ出しており、土坑が埋まった後も形成が続いたと考えられる。土坑外の貝層は薄く、土坑内では覆土下部まで堆積していた。20cm×20cmの範囲でコラムサンプルを貝層の最も厚い位置で10カット採取したが、断面図が存在せず情報が不足しているため、カット1・2の分析結果のみを掲載した。時期は3期(堀之内2式)と判断される。貝種組成はハマグリが49%で最多であり、アサリ15%、シオフキ13%と続いて上位3種で77%を占める。

#### SK022 (第65図)

土坑の覆土中に堆積している貝ブロックである。土坑の深さは98cmで、上層と下層から2枚の貝層を確認した。ブロックの中心部でコラムサンプルを20cm×20cmの範囲で20カット採取したが、下層の貝層は灰が多量に混入しており状況は不良であったため、上層の貝層を対象にカット1と4の分析結果を掲載した。時期は2期(堀之内1式)と判断される。貝種組成はハマグリが52%で最多であり、オキシジミ10%、アサリ8%と続いて上位3種で70%を占める。

#### SK034 (第70図)

風倒木痕内から検出された貝ブロックである。貝ブロックは北側のブロック群Aと南西端のブロックBの2地点から検出されている。貝ブロック群Aは攪乱された状況を呈しているが、本来は単一のかかなり大規模な貝層であったものと推測される。遺存状況は東側が良好であったため40cm×20cmの範囲でコラムサンプルを15カット採取したが、風倒木痕内からの出土であり原位置を保っているものではなく、本来の堆積状況を復元するのも不可能なため、参考程度としてカット8の分析結果を掲載した。時期は最も多量に出土した4期(堀之内2式+加曾利B1式)である可能性が高い。貝種組成はハマグリが49%で最多であ

り、アサリ25%、オキシジミ14%と続いて上位3種で88%に達する。

### (3) 分析結果

同定された貝は第13表の通り27科53種以上である。ただしこれは早期と後期双方のサンプルをあわせての結果である。計測データについては時期ごとに説明したい。

早期遺構の貝種構成は第85図の通りである。主要5種のデータを提示したが、実際にはマガキがどの遺構でもおおよそ70%を占めて圧倒的多数である。このうち土器が出土し時期が明らかなSK051とSK056では、マガキだけでなくウミニナ科やシオフキ、オキシジミなどもきわめて類似した構成比となっており、近接した時期であることは明瞭である。それに対し土器が出土していないSK045は、貝種構成は一見SK051やSK056と同じ傾向を示しており、炉穴出土であることから時期は大きく離れていないようにみえる。しかしマガキの殻長計測の結果を見ると（第86図）、SK051とSK056では30mm～35mmがピークで小さい方に漸減していくのに対し、SK045は定まったピークがないことに加え、他の遺構ではほとんどない70mmを超える個体がまとまって出土している（SK045は9個体、SK051は0、SK056は1）。時期が若干異なるか、あるいは攪乱が著しかったことを考えると混入があった可能性がある。

後期遺構の貝種構成は第84図の通りで、時期順に並べてある。主要6種の構成比を提示した。一目瞭然であるのが内湾砂底種であるハマグリが多数を占めていることで、40%を超えるサンプルが全体の半数以上を占めている。その他の貝ではアサリ、オキシジミ、マガキがほぼ全サンプルでまとまった出現状況を見せるのに対し、ハイガイ、シオフキ、サルボオはサンプルによってかなりの差異があるが、サンプルの貝の総数によって差が出た可能性もあるため一概に評価はできない。ただし全体としては、時期が新しくなるにつれてハマグリは構成比が高くなっている一方で、マガキの構成比が低下している傾向が読み取れる。殻長計測のデータは第87図の通りで、これも時期順に並べてある。ただしデータとして提示できるだけの量が計測できたサンプルは多くはなく、全時期通じて経過が提示できる貝種がなかったため時期変遷を追うには不足する部分が多い。そうした中でデータを見ると、ハマグリは殻長のうち最大分布を示すのが30mm～40mmで、ほぼ全てのサンプルでこの範囲に平均値が収まる。一方で最小値はどのサンプルも20mm前後であるが、最大値は1期で50mm前後であるのに対し、2期以降60mmを超え、中には70mmを記録するサンプルも出現する。ハイガイやオキシジミも少しずつではあるがピークがグラフの右側に移行しており、大形化する傾向が読み取れる。東京湾岸の後期貝塚において、堀之内1式期における殻長の小形化とその後の再大形化について、大形貝塚の出現と捕獲圧の関係から考察が示されたことがあるが<sup>(11)</sup>、同様の現象が奥東京湾沿岸にも発生していた可能性がある。ちなみに早期のSK051から採取されたハマグリは、最小24mm～最大53mmと飛び抜けて大形ではないが、平均値は40mmを超えており、堀之内1式期のハマグリが小形であることが傍証される。

簡単にまとめると、縄文海進が本格化した早期後葉以降、思井上ノ内遺跡が立地する台地周辺の低地部分でも、マガキやハマグリなど内湾泥底種あるいは内湾砂底種の生息に適した環境が出現し拡大し始めた状況がうかがえる。当然現在の江戸川沿岸、いわゆる古奥東京湾沿いの低地が主体となろうが、坂川沿岸の低地までも含むのかは今後の検討課題であろう。その後の前期と中期のデータは当遺跡では存在しないため途中の推移は不明であるが、後期前葉に至っても早期後葉と同じく内湾砂底種が主体となっていることがうかがえる。近隣の三輪野山貝塚においては後期末から晩期には汽水化が進んでヤマトシジミ主体となっていることが報告されているが<sup>(12)</sup>、当遺跡の主体である堀之内1式・2式の段階ではそうした状況

第13表 貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ミミガイ科	マダカアワビ属種不明	<i>Nordotis</i> spp.				
		ユキノカサガイ科	ツボミガイ	<i>Patelloida pygmaea lampnicola</i>				
		ニシキズガイ科	イボキサゴ	<i>Umboium (Sachium) moniliferum</i>				
	中腹足目	リュウテンサザエ科	スガイ		<i>Umboium (Sachium) giganteum</i>			
			タニシ科	オキタニシ	<i>Lucella coronata coreensis</i>			
			マルタニシ		<i>Cipangopaludina japonica</i>			
		カワニナ科	カワニナ			<i>Cipangopaludina chinensis lacta</i>		
			フトヘナタリガイ			<i>Semisulcospira libertina</i>		
			ヘナタリガイ			<i>Cerithidea rhizophorum</i>		
			カワイイガイ			<i>Cerithideopsisilla cingulata</i>		
			ウミナ			<i>Cerithideopsisilla djadjaricensis</i>		
			イボウミナ			<i>Batillaria multiformis</i>		
		ウミナ科	ウミナ属			<i>Batillaria zonalis</i>		
			オニノツノガイ科	カニモリガイ		<b>Batillaria</b> sp.		
			タマガイ科	ツメタガイ		<i>Proclava kochii</i>		
新腹足目	アケキガイ科	アコニシ		<i>Glossanlax didyma</i>				
		イボニシ		<i>Rapana venosa</i>				
		レイシガイ			<i>Thais (Reithia) clavigera</i>			
	ムシロガイ科	アラムシロガイ			<i>Thais (Reithia) clavigera</i>			
		ムシロガイ			<i>Reticonassa festiva</i>			
	エゾバイ科	バイ			<i>Nintha livescens</i>			
	コロモガイ科	コロモガイ			<i>Balytonia japonica</i>			
	イモガイ科	イモガイ科種不明			<i>Sydaphera spengleriana</i>			
	腹足綱	ツノガイ目	ツノガイ		<b>Conidae</b> gen. & sp. indet.			
			ツノガイ		<i>Antalis wcinhuangii</i>			
二枚貝綱	ツネガイ目	ツネガイ科	ハイガイ	<i>Dentalium (Paradentalium) octangulatum</i>				
		ツネガイ科	ツネガイ科種不明	<b>Dentalidae</b> gen. & sp. indet.				
	ウグイスガイ目	ナミマガシワガイ科	ナミマガシワガイ		<i>Tagillaria gramosa</i>			
			イタボガキ科	イタボガキ	<i>Scapharca subcrenata</i>			
		イシガイ目	イシガイ科	イシガイ		<i>Anomia chinensis</i>		
				マツカサガイ		<i>Crassostrea gigas</i>		
			マルスタレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ		<i>Ostrea denselamellosa</i>	
					バカガイ		<b>Ostreidae</b> gen. & sp. indet.	
				ニッコウガイ科	ユウシオガイ			<i>Inversidens japonensis</i>
					ニッコウガイ科種不明			<i>Unio douglasiae</i>
		シオサザナミガイ科	シオサザナミガイ科	ムラサキガイ		<b>Unionidae</b> gen. & sp. indet.		
				フジナミガイ		<i>Mactra quadrangularis</i>		
	マテガイ科		マテガイ			<i>Mactra chinensis</i>		
			シジミ科	ヤマトシジミ		<i>Trossus keenae</i>		
	マルスタレガイ科		カガミガイ	カガミガイ		<i>Moerella ratula</i>		
				マサリ		<b>Tellinidae</b> gen. & sp. indet.		
			オキアサリ	オキアサリ			<i>Soletellina diplos</i>	
				チョウセンハマグリ			<i>Soletellina boedinghausi</i>	
	ハマグリ	ハマグリ			<b>Psammobiidae</b> gen. & sp. indet.			
		オキシジミ			<i>Solen strichus</i>			
オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ		<i>Corbicula japonica</i>				
計			27科	53種				

は認められず、海退の影響はまだ顕著ではなかったことが推測される。

## 注

- 金子浩昌・鶴岡英一 2007「第3章第4節第4項 動物遺存体」『市原市西広貝塚Ⅲ』市原市教育委員会
- 大内千年 2001「第5章第3節2 (4) 貝類遺体」『主要地方道松戸野田線住宅地間連理蔵文化財調査報告書—流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前—』(財)千葉県文化財センター



第14表-1 貝類同定結果 (SI005-P1)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		Cut 9	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	0	0	1	29	0	0	0	0	0	0	0	0	1	125	0	0	0	0
ウニナ科	0	0	1	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アカニシ	1	63	1	29	1	167	1	125	0	0	1	200	0	0	0	0	0	0
マガキ	0	0	3	86	1	167	0	0	0	0	1	143	0	0	0	0	0	0
ササゴ	0	0	3	86	0	0	1	125	0	0	0	0	1	125	0	0	0	0
ハイガイ	0	0	1	29	0	0	1	125	0	0	1	200	1	125	0	0	1	333
ハマグリ	7	438	15	429	3	500	1	125	5	714	1	200	3	375	1	333	1	333
アサリ	1	63	2	57	0	0	2	250	0	0	1	200	0	0	1	333	0	0
オオノガイ	0	0	1	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヤマトシジミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
オキシジミ	4	250	4	114	1	167	1	125	1	143	0	0	2	250	1	333	1	333
ナミマガシウ	0	0	0	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シオフキ	1	63	3	86	0	0	1	125	0	0	1	200	0	0	0	0	0	0
ウネナントマヤガイ	0	0	1	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	16	100	35	100	6	100	8	100	7	100	5	100	8	100	3	100	3	100

種名	Cut 10		Cut 11		Cut 12		Cut 13		Cut 14		Cut 15		Cut 16		合計		
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	
イボキサゴ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1.8	
ウニナ科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.8
アカニシ	0	0	1	167	0	0	0	0	0	0	1	200	0	0	7	5.3	
マガキ	0	0	1	167	0	0	1	77	1	100	1	200	0	0	8	6.1	
ササゴ	0	0	1	167	0	0	1	77	1	100	1	200	0	0	8	6.1	
ハイガイ	0	0	0	0	1	333	1	333	1	100	1	200	1	100	9	6.8	
ハマグリ	0	0	2	333	1	333	5	462	1	400	1	200	1	200	50	39.4	
アサリ	1	300	0	0	0	0	2	154	1	100	0	0	0	0	11	8.3	
オオノガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	100	0	0	0	0	3	2.3	
ヤマトシジミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	500	3	9.8	
オキシジミ	0	0	1	167	0	0	333	2	154	0	0	0	0	0	20	15.2	
ナミマガシウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.8	
シオフキ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	100	1	200	0	0	8	6.1	
ウネナントマヤガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.8	
合計	2	100	6	100	3	100	13	100	10	100	5	100	2	100	132	100	

第14表-2 貝類同定結果 (SI005-P15)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		Cut 9	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	0	0	1	17	1	12	1	69	0	0	0	0	0	0	0	0	1	67
ウニナ科	0	0	0	0	1	2	1	69	1	14	1	12	0	0	0	0	0	0
アカニシ	0	0	0	0	1	12	1	69	1	14	0	0	1	23	0	0	1	67
アワムシロガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14	0	0	0	0	0	0	0	0
スガイ	0	0	0	0	0	0	1	69	0	0	1	12	0	0	0	0	0	0
フトヘナナリ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14	1	12	0	0	0	0	0	0
マイマイ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
マガキ	1	143	1	17	2	23	7	64	2	27	5	60	1	23	3	43	8	59
ササゴ	1	143	6	103	7	81	5	45	4	54	6	72	1	23	1	14	0	0
ハイガイ	0	0	4	69	7	81	5	45	4	54	7	84	3	68	6	86	20	148
ハマグリ	4	571	30	517	38	442	55	500	38	514	32	386	20	455	20	471	56	415
アサリ	1	143	4	69	8	93	9	82	5	68	8	96	4	91	4	57	12	89
オオノガイ	0	0	0	0	1	12	2	18	1	14	2	24	0	0	0	0	2	29
オキシジミ	0	0	8	138	10	116	12	109	9	122	9	108	7	159	5	71	11	81
ナミマガシウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14	0	0
カサミガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14	0	0	0	0	0	0	0	0
シオフキ	0	0	2	34	9	105	9	82	5	68	10	120	6	136	14	209	19	141
マガキ	0	0	0	0	1	0	1	69	1	14	1	12	1	23	1	14	5	37
イシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ウネナントマヤガイ	0	0	0	0	0	0	1	69	0	0	0	0	0	0	0	0	1	67
合計	7	100	36	100	86	100	110	100	74	100	83	100	44	100	70	100	135	100

種名	Cut 10		Cut 11		Cut 12		Cut 13		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	1	67	1	67	0	0	0	0	5	6.5
ウニナ科	1	67	1	10	1	10	0	0	10	10
アカニシ	0	0	0	0	0	0	1	69	7	6.7
アワムシロガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.1
スガイ	1	67	0	0	0	0	0	0	3	3.0
フトヘナナリ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2.0
マイマイ類	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.1
マガキ	9	62	7	78	9	93	1	84	36	34.4
ササゴ	6	41	5	50	2	21	3	103	47	45.5
ハイガイ	10	69	9	90	10	103	1	34	86	82.0
ハマグリ	61	421	42	420	36	268	11	379	495	450.0
アサリ	17	117	12	120	11	113	3	103	98	94.0
オオノガイ	1	67	1	10	3	33	1	14	15	14.0
オキシジミ	12	83	10	100	13	134	5	172	111	107.0
ナミマガシウ	0	0	1	10	0	0	0	0	2	2.0
カサミガイ	1	67	0	0	0	0	0	0	2	2.0
シオフキ	22	152	9	90	20	206	1	34	136	123.0
マガキ	2	14	1	10	1	10	1	34	15	14.0
イシガイ	0	0	1	10	1	10	0	0	2	2.0
ウネナントマヤガイ	0	0	0	0	0	0	1	34	3	3.0
合計	145	100	100	100	97	100	29	100	1038	100

第14表-3 貝類同定結果 (SI008貝ブロックA)

種名	計	
	個体数	(%)
イボキサゴ	1	0.8
アカニシ	4	3.0
マイマイ類	1	0.8
マサゴ	1	0.8
サルゴオ	5	3.8
ハイガイ	11	8.3
ハマグリ	81	60.9
アサリ	5	3.8
オキノゴイ	1	0.8
オキシシミ	13	9.8
カサミガイ	1	0.8
シオフキ	6	4.5
合計	133	100

第14表-4 貝類同定結果 (SI014)

種名	目ブロック		計		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
マサキ		0.0	5	55.6	5	11.9
サルゴオ	28	84.8	0	0.0	28	66.7
ハイガイ		0.0	1	11.1	1	2.4
ハマグリ	2	6.1	1	11.1	3	7.1
アサリ	1	3.0	0	0.0	1	2.4
オキノゴイ		0.0	1	11.1	1	2.4
オキシシミ	1	3.0	1	11.1	2	4.8
シオフキ	1	3.0	0	0.0	1	2.4
合計	33	100	9	100	42	100

第14表-5 貝類同定結果 (SI017)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
マサキ	0	0.0	0	0.0	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	9.1
サルゴオ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	25.0	0	0.0	1	9.1
ハマグリ	1	100.0	1	100.0	1	25.0	1	25.0	0	0.0	4	36.4
アサリ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	25.0	1	100.0	2	18.2
オキノゴイ	0	0.0	0	0.0	1	25.0	1	25.0	0	0.0	2	18.2
シオフキ	0	0.0	0	0.0	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	9.1
合計	1	100	1	100	4	100	4	100	1	100	11	100

第14表-6 貝類同定結果 (SK005)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
ウニ科	0	0.0	2	2.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0	0	0.0	0	0.0	3	6.6
アカニシ	0	0.0	1	1.0	1	1.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	4.4
イボキサゴ	1	0.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.2
アラムシロ	1	0.9	0	0.0	0	0.0	1	1.3	2	1.9	0	0.0	0	0.0	4	8.7
スガイ	0	0.0	1	1.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.2
マサキ	1	0.9	1	1.0	1	1.0	1	1.3	1	1.0	1	3.0	1	20.0	7	15.3
イタダキ科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0	0	0.0	0	0.0	1	2.2
サルゴオ	26	23.6	23	22.5	37	37.4	23	28.3	23	22.1	7	21.2	1	20.0	140	25.9
ハイガイ	2	1.7	2	2.0	0	0.0	3	3.8	3	2.9	1	3.0	0	0.0	11	2.0
ハマグリ	15	12.8	5	4.9	9	9.1	9	11.3	10	9.6	7	21.2	0	0.0	55	10.2
アサリ	86	41.0	48	47.1	36	36.4	33	41.3	43	41.3	12	36.4	1	20.0	221	40.5
オキノゴイ	2	1.7	2	2.0	0	0.0	1	1.0	0	0.0	1	20.0	6	11	11	2.0
オキシシミ	12	10.3	10	9.8	7	7.1	5	6.3	13	12.5	3	9.1	1	20.0	51	9.4
ナニマダラ	1	0.9	0	0.0	0	0.0	1	1.3	0	0.0	1	3.0	0	0.0	3	6.6
カサミガイ	0	0.0	1	1.0	0	0.0	1	1.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	4.4
シオフキ	6	5.1	5	4.9	7	7.1	3	3.8	6	5.8	1	3.0	0	0.0	28	5.2
マサゴ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.2
イシゴキガイ	0	0.0	1	1.0	1	1.0	1	1.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	6.6
合計	117	100	102	100	99	100	80	100	104	100	33	100	5	100	540	100

第14表-7 貝類同定結果 (SK014)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	1	4.8	1	2.1	1	1.4	0	0.0	1	1.1	2	1.9	0	0.0	1	1.9	6	1.2
ウニ科	1	4.8	0	0.0	2	2.9	2	3.4	1	1.1	2	2.0	1	1.2	2	3.8	11	2.1
アカニシ	1	4.8	1	2.1	1	1.4	1	1.7	1	1.1	2	2.0	4	4.9	1	1.9	12	2.3
イボシロ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.2
アラムシロ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.0	0	0.0	1	1.9	3	0.6
カサミガイ	0	0.0	1	2.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
マサキ	1	4.8	1	2.1	1	1.4	1	1.7	1	1.1	4	4.0	2	2.4	5	9.4	16	3.1
サルゴオ	1	4.8	4	8.5	4	5.8	4	6.8	9	10.0	9	9.0	5	6.1	3	5.7	29	5.5
ハイガイ	1	4.8	1	2.1	5	7.2	3	5.1	3	3.3	6	6.0	4	4.9	3	5.7	26	5.0
ハマグリ	8	38.1	22	46.8	32	46.4	29	40.2	43	47.8	42	42.0	38	46.3	17	32.1	211	44.3
アサリ	2	9.5	8	17.0	5	7.2	6	10.2	5	5.6	13	13.0	7	8.5	6	11.3	52	10.0
オキノゴイ	1	4.8	1	2.1	3	4.3	1	1.7	4	4.4	4	4.0	4	4.9	4	7.5	22	4.3
オキシシミ	1	4.8	3	6.4	9	13.0	6	10.2	9	10.0	6	6.0	5	6.1	1	1.9	40	7.7
ナニマダラ	0	0.0	0	0.0	1	1.4	1	1.7	1	1.1	1	1.0	1	1.2	0	0.0	4	0.8
シオフキ	3	14.3	3	6.4	5	7.2	3	5.1	5	5.6	7	7.0	10	12.2	6	11.3	45	8.6
マサゴ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.7	1	1.1	0	0.0	1	1.2	1	1.9	4	0.8
ムラサキガイ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.9	1	0.2
ウネナシトマサゴ	0	0.0	1	2.1	0	0.0	1	1.7	1	1.1	0	0.0	0	0.0	1	1.9	4	0.8
合計	21	100	47	100	49	100	59	100	90	100	100	100	82	100	25	100	521	100

第14表-8 貝類同定結果 (SK015)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		Cut 9	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	00		00				00		00		00		00		00		00	
アカニシ	00		1	200	1	143	1	111					00		00		00	
イボニシ	00		00		00		00		00		00		00		00		00	
マガキ	00		00		00		1	143	00		00		00		00		00	
サルゴオ	1	167	1	200	1	143	00		00		1	333	00		00		00	
ハイゴイ	1	167	1	200	1	143	1	111	2	286	00		00		1	200	1	333
ハマグリ	2	333	1	200	2	286	6	667	4	571	1	333	1	1000	1	200	1	333
アサリ	00		00		00		00		00		00		00		1	200	00	
オオノゴイ	1	167	1	200	00		00		00		1	333	00		1	200	00	
オキシジミ	1	167	1	200	1	143	1	111	1	143	00		00		1	200	1	333
ナニマゴシツ	1	00	00		00		00		00		00		00		00		00	
シオフキ	00		00		00		00		00		00		00		00		00	
合計	6	100	5	100	7	100	9	100	7	100	3	100	1	100	5	100	5	100

種名	Cut 10		Cut 11		Cut 12		Cut 13		Cut 14		Cut 15		Cut 16		Cut 17		Cut 18	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	00		00		00		00		1	56	00		00		1	59	00	
アカニシ	1	111	1	200	00		00		1	77	1	91	1	59	00		00	
イボニシ	00		00		00		00		00		00		00		1	111	00	
マガキ	00		00		1	56	1	56	1	77	1	91	1	59	1	111	00	
サルゴオ	1	111	00		2	111	3	167	2	154	4	364	2	118	1	111	1	111
ハイゴイ	00		1	200	3	167	3	167	3	231	2	182	5	294	1	111	2	222
ハマグリ	4	444	1	200	9	500	7	389	5	385	2	182	4	235	3	333	5	556
アサリ	1	111	1	200	00		00		00		1	91	2	118	00		00	
オオノゴイ	00		00		1	56	00		00		00		00		1	111	00	
オキシジミ	1	111	1	200	1	56	1	56	1	77	00		1	59	00		00	
ナニマゴシツ	00		00		00		1	56	00		00		00		1	111	00	
シオフキ	1	111	00		1	56	1	56	00		00		00		1	111	1	111
合計	9	100	5	100	18	100	18	100	13	100	11	100	17	100	9	100	9	100

種名	Cut 19		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	00		2	13
アカニシ	00		1	51
イボニシ	00		1	06
マガキ	1	1000	8	51
サルゴオ	00		20	128
ハイゴイ	00		28	179
ハマグリ	00		39	278
アサリ	00		6	38
オオノゴイ	00		5	32
オキシジミ	00		13	83
ナニマゴシツ	00		1	06
シオフキ	00		5	32
合計	1	100	156	1000

第14表-9 貝類同定結果 (SK023)

種名	Cut 1		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		Cut 9	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	1	05	1	14	00		00		1	20	00		00		00	
ウニナ科	3	00	00		4	37	00		2	32	00		00		2	33
アカニシ	00		1	14	00		3	28	1	16	1	20	1	53	2	103
アラムシロ	00		00		00		00		00		00		00		00	
マルチンスマツムシ	1	05	00		00		00		00		00		00		00	
マガキ	1	05	1	14	1	09	1	09	2	32	1	20	2	105	1	53
サルゴオ	1	05	1	14	1	09	1	09	1	16	1	20	00		00	
ハイゴイ	7	32	2	28	4	37	4	38	2	32	1	20	2	105	1	53
ハマグリ	182	775	51	708	65	602	73	689	42	667	33	673	8	421	30	526
アサリ	3	14	1	14	4	37	5	47	3	48	3	61	1	53	00	
オオノゴイ	1	05	00		00		00		00		00		00		1	53
オキシジミ	27	129	9	125	23	213	16	151	7	113	5	102	4	211	3	158
シオフキ	2	10	5	69	5	46	2	19	2	32	4	82	1	53	1	53
ウネナシトマヤガイ	00		00		00		00		1	16	00		00		00	
合計	200	100	72	100	108	100	106	100	63	100	49	100	19	100	19	100

種名	Cut 10		Cut 11		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
イボキサゴ	1	67	00		00	
ウニナ科	00		00		8	11
アカニシ	00		00		14	19
アラムシロ	00		00		2	03
マルチンスマツムシ	00		00		1	01
マガキ	1	67	00		16	22
サルゴオ	1	67	00		7	10
ハイゴイ	1	67	1	333	28	39
ハマグリ	8	533	1	333	488	675
アサリ	1	67	1	333	00	22
オオノゴイ	1	67	00		5	07
オキシジミ	1	67	1	333	102	141
シオフキ	1	67	00		34	33
ウネナシトマヤガイ	00		00		1	01
合計	15	100	3	100	723	100

第14表-10 貝類同定結果 (SK024)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		合計		
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数
ウニニナ科	00		1	32	1	22	1	15	1	17	2	22	2	24	4	24	12	22	
アカニシ	00		00		00		00		15	2	34	1	11	00	3	18	7	13	
アラムシロ	00		00		00		00		00	1	11	00	00	00	00	00	00	1	02
マゴキ	00		00		00		00		00	00	00	00	00	00	00	1	06	1	02
マゴキ	00		1	32	1	22	5	75	4	69	12	132	12	145	19	116	54	99	
ササギ	00		1	32	2	44	5	75	2	34	4	44	1	12	3	18	18	33	
ハイガイ	1	200	11	355	10	222	12	179	10	172	13	143	9	108	22	134	88	162	
ハマグリ	3	600	10	323	21	467	27	403	21	362	33	363	32	386	71	433	218	401	
アサリ	00		200		00		3	47	5	75	4	60	10	7	84	14	83	44	83
オキシロ	00		00		00		00		00	00	00	00	00	00	00	00	00	2	04
オキシロ	00		1	32	1	22	1	15	1	17	1	11	1	12	3	18	9	17	
オキシロ	00		4	129	4	89	5	75	5	86	5	55	8	96	10	61	41	75	
ナニマゴシ	00		1	32	1	22	00		00	00	00	00	00	00	00	00	00	2	04
カサシ	00		00		00		00		00	00	00	00	00	00	00	00	00	1	02
シロフキ	00		1	32	1	22	3	45	5	86	6	66	6	72	10	61	32	58	
マゴキ	00		00		00		00		00	00	00	00	00	00	00	00	00	3	06
イチョウシロ	00		00		00		00		00	00	00	00	00	00	00	00	00	1	02
ウニナシ	00		00		00		00		15	2	34	2	22	2	24	3	18	10	18
合計	5	100	21	100	45	100	67	100	58	100	91	100	83	100	164	100	544	100	

第14表-11 貝類同定結果 (SK031)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
アカニシ	00		1	71	1	83	2	63
マゴキ	1	167	1	71	1	83	3	94
ササギ	00		1	71	1	83	2	63
ハイガイ	1	167	1	71	1	83	3	94
ハマグリ	1	167	6	429	4	333	11	344
アサリ	1	167	1	71	2	167	4	125
オキシロ	1	167	3	214	1	83	5	156
シロフキ	1	167	00		1	83	2	63
合計	6	100	14	100	12	100	32	100

第14表-12 貝類同定結果 (SK032)

種名	Cut 1		Cut 2		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
ウニニナ科	00		00		00	
マゴキ	1	125	1	53	2	74
ハイガイ	1	125	2	105	3	111
ハマグリ	5	625	11	579	16	593
アサリ	00		2	105	2	74
オキシロ	00		1	53	1	37
オキシロ	1	125	1	53	2	74
合計	8	100	19	100	27	100

第14表-13 貝類同定結果 (SK045)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		合計		
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	
ウニニナ科	00		00		2	24	1	77	3	15	
マゴキ	9	429	61	735	62	729	4	308	136	673	
ハイガイ	2	95	3	36	2	24	1	77	8	40	
ハマグリ	3	143	4	48	00		00	7	325	00	
アサリ	1	48	1	12	00		00	1	77	3	15
オキシロ	2	95	6	72	10	118	2	154	20	99	
オキシロ	1	48	00		1	12	00	2	18	00	
ナニマゴシ	00		4	48	1	12	1	77	6	30	
カサシ	00		00		00		00	00	7	32	
シロフキ	1	48	1	12	1	12	1	77	4	20	
マゴキ	1	48	00		1	12	00	2	18	00	
ウニナシ	1	48	3	36	4	47	1	77	9	45	
合計	21	100	83	100	85	100	13	100	202	100	

第14表-14 貝類同定結果 (SK051)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		合計						
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)					
イボキ	00		00		00		00		00		00		00		00						
ウニニナ科	3	56	48	153	31	78	29	110	00		6	48	1	56	00	120	100				
アカニシ	00		00		00		00		00		00		00		00		2	02			
イボキ	00		00		00		00		00		00		00		00		00	1	01		
アラムシロ	1	19	4	63	2	85	00		00		00		00		00		4	63	4.5		
マゴキ	40	741	227	723	318	755	200	760	99	792	9	509	6	545	899	745	545	899			
ササギ	00		00		00		00		00		00		00		00		00	4	63		
ハイガイ	2	37	5	16	5	19	4	32	3	167	1	91	4	91	25	21	00	4	63		
ハマグリ	3	56	9	29	18	43	11	42	3	24	00		00		00		44	36	00		
アサリ	1	19	1	63	2	85	2	68	2	16	00		00		00		91	9	67		
オキシロ	00		00		03	1	02	56	04	00		00		00		00	4	63	00		
オキシロ	00		7	22	13	31	3	11	2	16	00		00		00		25	21	00		
ナニマゴシ	3	56	5	16	00		00		00		00		00		00		00	9	67	00	
カサシ	00		03	1	02	00		00	1	08	00		00		00		3	02	00		
シロフキ	1	19	7	22	25	59	8	30	5	40	1	56	1	91	48	40	00	6	67	00	
マゴキ	00		03	1	02	1	04	1	08	00		00		00		00	6	67	00		
イチョウシロ	00		00		00		00		00		00		00		00		00	1	01	00	
ウニナシ	00		03	1	02	00		00	00		00		00		00		00	1	01	00	
合計	54	100	314	100	421	100	283	100	125	100	18	100	11	100	136	100	136	100	100	100	

第14表-15 貝類同定結果 (SK056)

種名	Cut 1		Cut 2		Cut 3		合計	
	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)	個体数	(%)
ウミニナ科	13	6.7	21	4.1	4	6.5	38	5.0
アカニシ	0	0	1	0.2	1	1.6	2	0.3
イボニシ	0	0	1	0.2	1	1.6	2	0.3
アラムシ目	0	0	0	0	1	1.6	1	0.1
マガキ	119	61.7	308	72.2	41	66.1	528	69.0
サルボオ	0	0	0	0	1	1.6	1	0.1
ハイガイ	2	1.0	12	2.4	2	3.2	16	2.1
ハマグリ	4	2.1	8	1.6	0	0.0	12	1.6
アサリ	9	4.7	11	2.7	2	3.2	25	3.3
オキノガイ	0	0	1	0.2	0	0.0	1	0.1
オキシジミ	11	5.7	55	10.8	6	9.7	72	9.4
ナニマゴシワ	0	0	0	0	1	1.6	1	0.1
カサミガイ	0	0	1	0.2	0	0.0	1	0.1
シオフキ	33	17.1	27	5.3	2	3.2	62	8.1
マサガイ	1	0.5	1	0.2	0	0.0	2	0.3
ウネナシトマサガイ	1	0.5	0	0.0	0	0.0	1	0.1
合計	193	100	510	100	62	100	763	100

第14表-16 貝類同定結果 (SI015)

種名	Cut 3	
	個体数	(%)
ウミニナ科	2	1.3
アカニシ	1	0.6
マガキ	10	6.5
サルボオ	4	2.6
ハイガイ	2	1.3
ハマグリ	73	47.1
アサリ	7	4.5
ヤマトシジミ	1	0.6
オキシジミ	25	16.1
シオフキ	28	18.1
マサガイ	1	0.6
イチョウシラトリガイ	1	0.6
合計	155	100

第14表-17 貝類同定結果 (SK016)

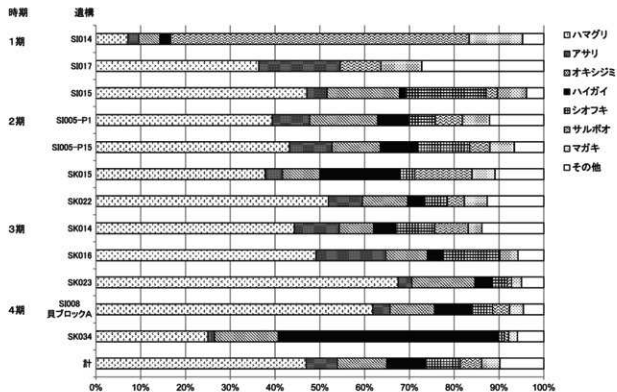
種名	Cut 1・2	
	個体数	(%)
イボニナ科	3	1.7
ウミニナ科	1	0.6
アカニシ	1	0.6
マガキ	7	4.0
サルボオ	2	1.1
ハイガイ	6	3.4
ハマグリ	85	48.6
アサリ	27	15.4
オキノガイ	3	1.7
ヤマトシジミ	1	0.6
オキシジミ	16	9.1
シオフキ	22	12.6
マサガイ	1	0.6
合計	175	100

第14表-18 貝類同定結果 (SK022)

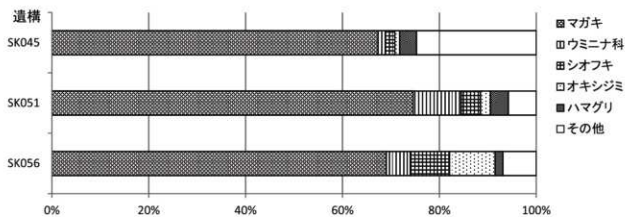
種名	Cut 1・4	
	個体数	(%)
アカニシ	1	1.3
アラムシ目	3	3.8
ヤマナシトマサガイ	2	2.5
マガキ	4	5.1
イタボヤ科	1	1.3
サルボオ	3	3.8
ハイガイ	3	3.8
ハマグリ	41	51.9
アサリ	6	7.6
オキノガイ	1	1.3
オキシジミ	8	10.1
ナニマゴシワ	1	1.3
シオフキ	4	5.1
ムラサキガイ	1	1.3
合計	79	100

第14表-19 貝類同定結果 (SK034)

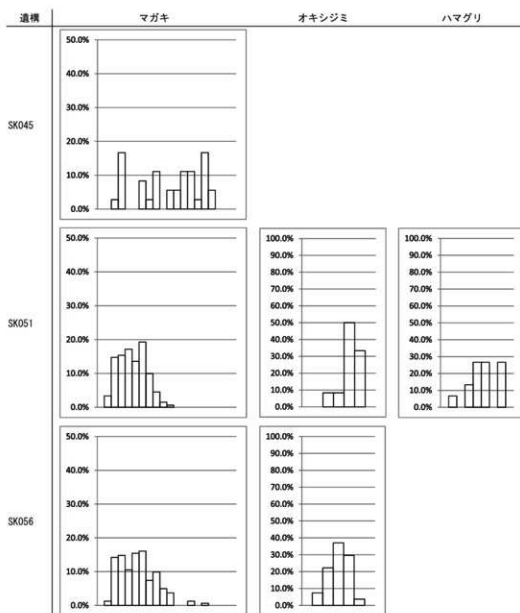
種名	Cut 8	
	個体数	(%)
ウミニナ科	1	0.5
アカニシ	2	1.0
マイマイ類	1	0.5
マガキ	4	2.0
サルボオ	2	1.0
ハイガイ	100	49.0
ハマグリ	51	25.0
アサリ	3	1.5
オキノガイ	4	2.0
オキシジミ	29	14.2
ナニマゴシワ	1	0.5
カサミガイ	1	0.5
シオフキ	3	1.5
マサガイ	1	0.5
オキアサリ	1	0.5
合計	204	100



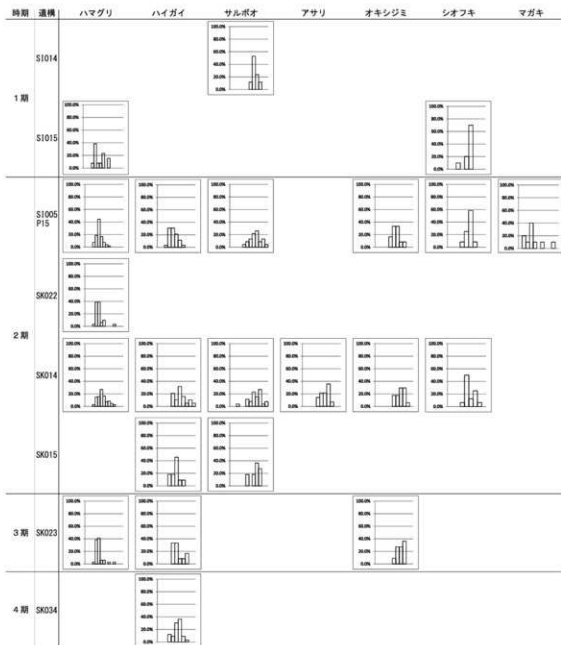
第84図 出土貝種組成グラフ (後期遺構)



第85図 出土具種組成グラフ (早期遺構)



第86図 主要具種長グラフ (早期遺構)



第87図 主要貝種殻長グラフ（後期遺構）

## 9 遺構外出土遺物

### (1) 縄文土器

#### 第Ⅰ群土器（第88図1・2）

縄文時代早期初頭の撚糸文系土器を本群とする。図示できたのは2点のみである。

1は口唇部が強く外反し、上端部には口縁方向に縄文原体が圧痕され、外面部には斜め方向に原体が圧痕される。図の右側は右下がりに、左側は左下がりに圧痕されており、鋸歯状を呈する。その下の胴部側は横位の縄文が施される。井草Ⅰ式に相当する。2はまばらな撚糸文が縦位に施されるもの。全体に磨滅が顕著である。外周部には研磨したような痕跡があり、円盤への加工を意図したものかもしれない。

#### 第Ⅱ群土器（第88図3～第90図98）

縄文時代早期中葉の沈線文系土器を本群とする。3～40・95は鋭く尖った棒状工具を施文具とし、横位沈線で上下を区画して間を鋸歯状文や短沈線によって充填する文様を特徴とする。文様帯は多段構成を取るの一般的なものである。三戸式に相当するものである。41～83・85～94は太くて丸い棒状工具を施文具とし、横位あるいは斜行沈線を密集させる。また、幾何学的な区画に沈線を充填させるものも多い。全体に大形化し器壁は厚い。54～64は胎土に雲母片や石英類などを多量に含み、器面にはそれらを引きずった痕跡が明瞭に残る。田戸下層式に相当する。84は胴部が強くくびれ、沈線区画刺突列を横位に配する。焼成はややあまい。田戸上層式と考えられる。96～98は本群の底部で、全て尖底である。特に97はかなりの大形個体である。

### 第Ⅲ群土器（第91図99～第110図464、図版35）

縄文時代早期後葉から前期初頭の土器群を本群とする。早期後葉の条痕文系土器を中心に、一部前期初頭の花積下層式土器を含む。胎土中に植物繊維を含むことを特徴のひとつとする。

型的には野鳥式土器、鶺鴒ガ島台式土器、茅山下層式土器、花積下層式土器が出土している。このうち主体をなすのは鶺鴒ガ島台式土器で、図示した366点のうち当該期としたもの（第2類）が194点、やや新しい特徴を有し茅山下層式土器への過渡期的な段階に位置づけたもの（第3類）が48点と、約2/3を占めている。詳細型式まで判別できなかった底部の資料にも、当該期のものが含まれている。

**第1類**（105～112）野鳥式土器を本類とする。出土量はわずかで、図示した9点が出土したもののすべてである。このうち105～108と110は同一個体の可能性が高い。いずれも胎土中の植物繊維の含有量は少なく、器壁はうすく、堅敏な焼成状況を示す。

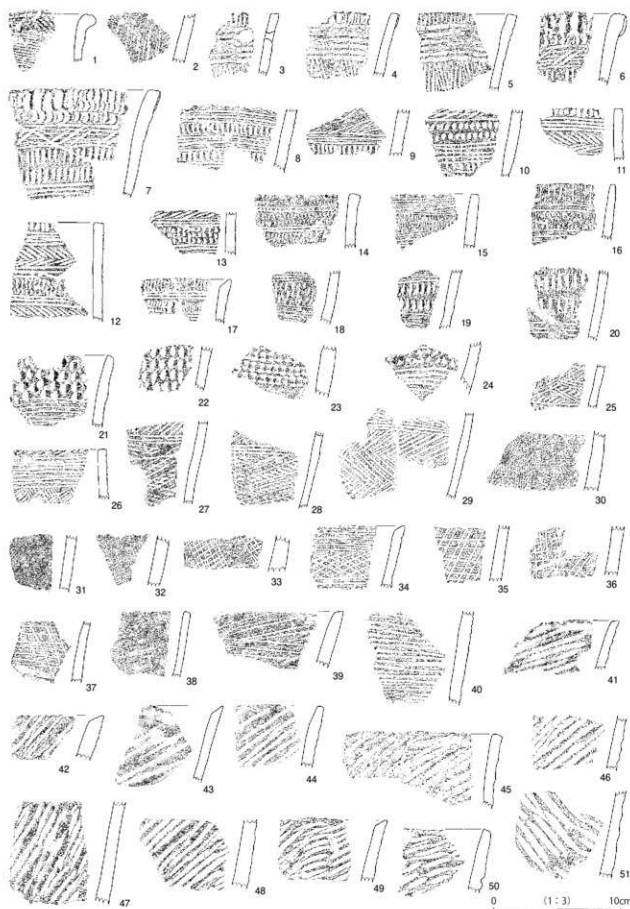
105～110は細隆線によって横位や斜位に区画文が描出され、区画内に平行細隆線が縦位や横位に充填されている。111は口縁部文様帯（区画文帯）と胴部無文帯（条痕文帯）との境界付近の破片と思われる。区画の形状は明らかでないが、破片上部を横走る細隆線が区画文帯の下端をなし、その上位に縦位集合細隆線が充填されていると判断した。ほかよりもやや厚手である。112はやや様相を異にする。破片左上から右下方向に、なぞりをくりかえして幅の広い沈線を施し、その両側に集合沈線を直交させて充填している。

**第2類**（99～102・113～303）鶺鴒ガ島台式土器を本類とする。鶺鴒ガ島台式土器には、口縁部文様帯を持つ有文土器と表裏とも条痕文のみの無文土器がある。有文土器の口縁部文様帯は直線の組み合わせによる区画文を基本とし、区画文を構成する細隆線や沈線の交点には竹管横断面を使用した円形刺突文が施されることが多い。文様要素としての細隆線と沈線では後者のほうが多く、これは鶺鴒ガ島台式土器を出土する遺跡では同様の傾向がうかがえる。

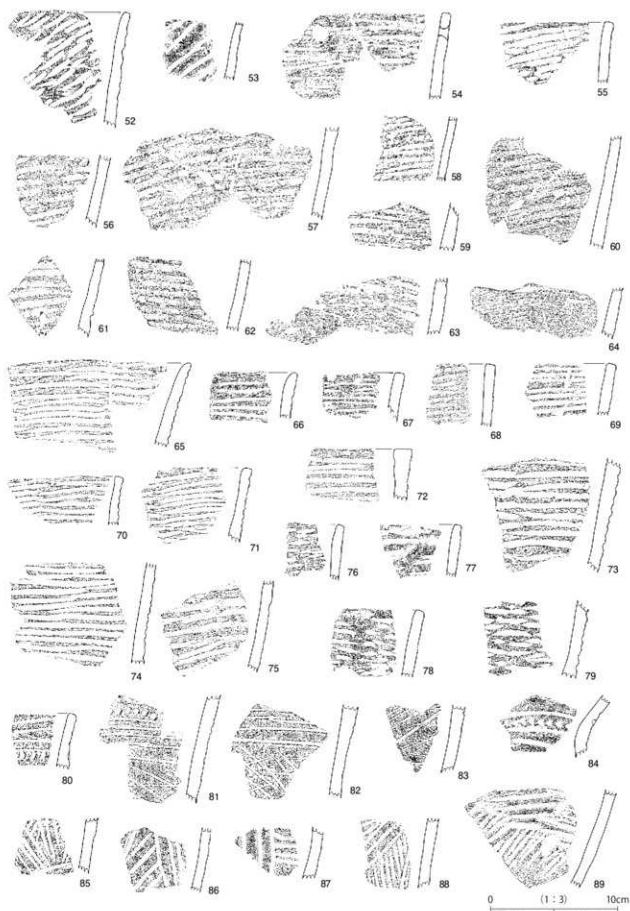
器形をみると、平縁または4単位を基本とする波状口縁の深鉢形土器が一般的で、口縁部から胴部上半にくびれを持つものと持たないものがある。くびれが2段に及ぶものもある。有文土器にはくびれをもつ器形が多く、口縁部区画文帯の幅は基本的にくびれ部の幅に対応する。すなわち、くびれが2段に及ぶものは、口縁部文様帯も2段構成をとることが多いといえる。無文土器にはくびれを持たない器形のものが多く、くびれを持つものでも1段までで2段に及ぶ例はない。

胎土中には植物繊維を含んでいるがその量は少量で、多量に含むものはみられない。なお、今回の調査では、少量の植物繊維と併せて金雲母を中心とする砂粒を大量に含みあたかも縄文時代中期の阿玉台式土器のような器壁をみせるもの（125・126）が出土している。

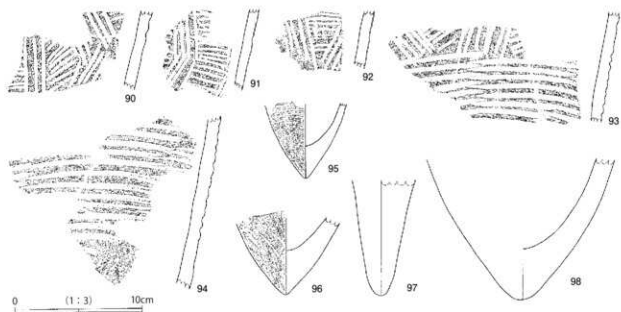




第88図 遺構外出土土器 第I群・第II群 (1)



第89回 遺構外出土土器 第Ⅱ群 (2)



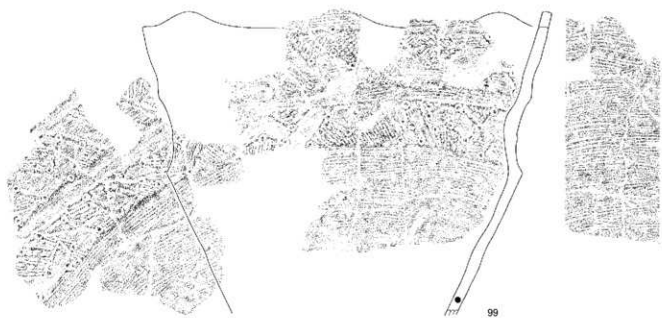
第90図 遺構外出土土器 第Ⅱ群(3)

条痕文はほとんどが貝殻条痕で深くはっきり施文されたものが多く、茎束条痕文や無文のものはほとんどみられない。なお、表裏とも条痕文のみのいわゆる無文土器は本類4種に分類し、次の茅山下層式段階の無文土器は第4類3種としたが、これは植物繊維の含有量や条痕文の特徴の傾向から分別したもので、厳密なものではない。

Ⅰ種(99-113~134) 有文土器のうち、口縁部の区画文を細隆線によって構成するものを1種とする。99は、今回出土した縄ガ局台式土器のうちで最も完形に近い状態で復元できたものである。4単位ないし6単位の波状口縁を呈するが、遺存部位が少なく確定できない。復元された口径は43.2cmである。口唇部の外側には細かなキザミが施される。胴部上半には2段のくびれ部を有し、それに対応して口縁部文様帯は2段構成をとる。細隆線による区画文の交点には竹管による円形刺突が施され、幾何学的な区画内には交互かつ規則的に結節沈線状の連続押捺文が充填される。

113~120には区画文交点の円形刺突が直径5mmを超える大形のを、121~126には径5mm以下の小形のを、127~134には工具が竹管によらず棒状で小孔状の刺突になっているものを示した。区画文を細隆線によって構成する本種には、この刺突文が省略されるものは皆無であった。

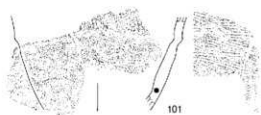
本類の口縁部をみると、口縁部の遺存する15点のうち平縁の可能性のあるのは128の1点のみで、ほかはいずれも波状口縁であることは間違いない。128とて口縁の遺存部位はわずかで、波状口縁である可能性もある。本種の口縁部形態は、波状口縁が一般的であるということができよう。また、これらのうち胴部上半のくびれ部が2段となるのは99・113・128の3点のみで、その場合下段がくびれの度合いが強く、上段は比較的直線的に立ち上がっている。そのような目でみると、117~120のような胴部破片も2段のくびれ部を有する器形となろう。114~116・129はくびれ部が1段であることが確実なもので、そのくびれ部は2段のものの上段と同じくくびれの度合いは弱く直線的に立ち上がっている。1種のみには、くびれ部を持たない器形であることが確実な例はみられない。129は横帯構成の口縁部文様帯を細隆線によって縦に区画しているため本種としたが、区画文は沈線で描出しており2種に含めるべきかもしれない。



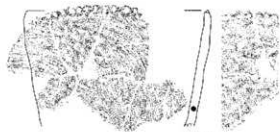
99



100



101



104



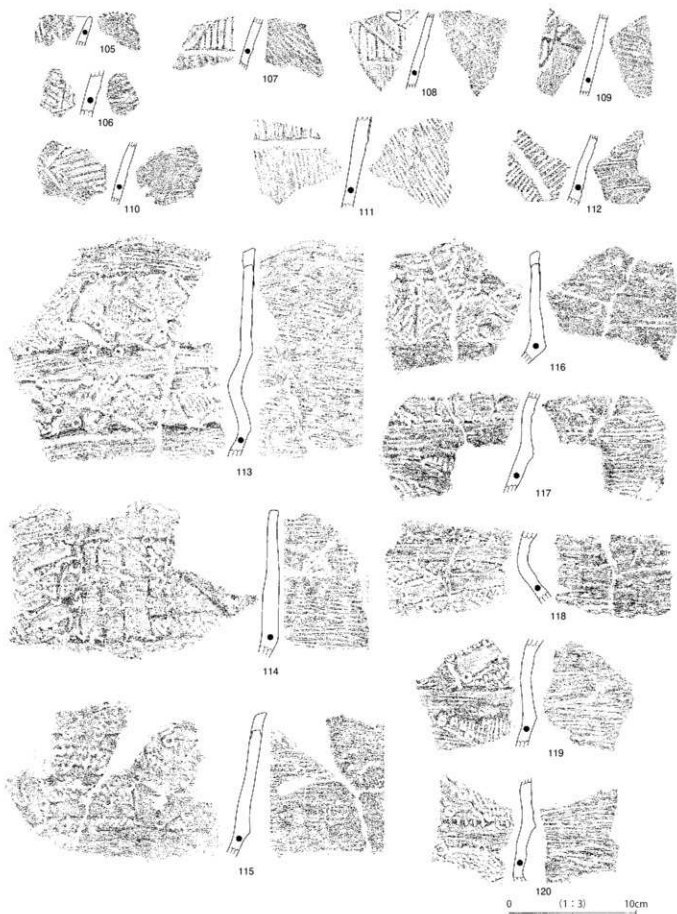
102



103

0 (1:4) 10cm

第91図 遺構外出土土器 第Ⅲ群(1)



第92图 遗構外出土土器 第Ⅲ群(2)

表面の胴部下半と裏面は横方向の貝殻条痕文を基本とする。表面の口縁部区画文帯の、連続押捺文や集合沈線が充填されない区画内にも同様の条痕文が認められることから、器壁全面に条痕文（調整というべきか）を施した後に文線帯を描出していることがわかる。118のように莖東条痕の可能性もあるものも認められるが、ほとんどは貝殻条痕文がはっきりと施されている。

いずれも胎土中には植物繊維を含んでいるが、概要でもふれたとおり125と126は同一個体で、植物繊維とともに金雲母粒や砂粒を大量に含み、一見すると中期阿玉台式かのである。表裏面とも条痕文が認められないという特徴もあわせ持つ。器壁がもろく、剥落が激しいため裏面の拓影採取を断念した。

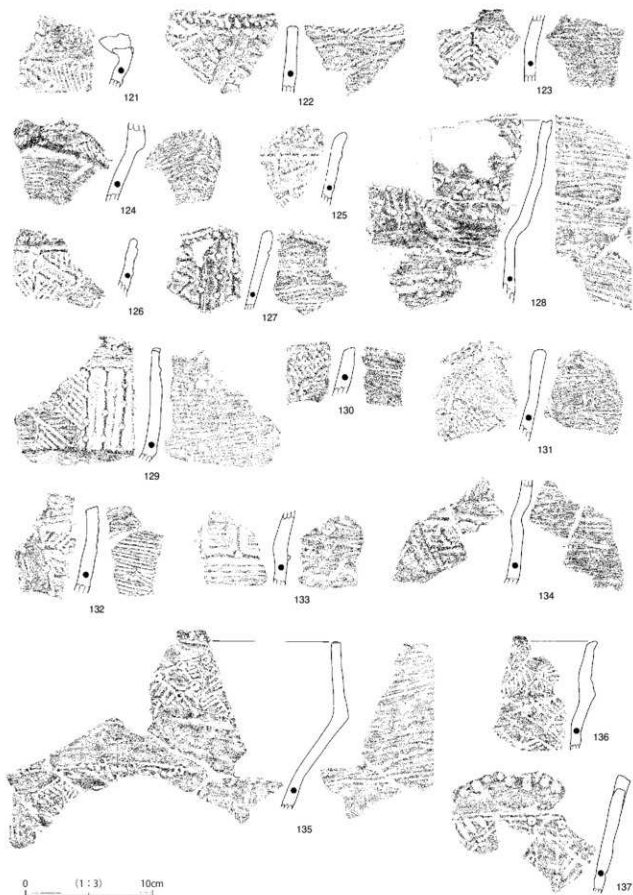
2種（100～102・135～238）有文土器のうち、口縁部の区画文を直線的な沈線によって構成するものを2種とする。100～102は径を復元できたもので、そのうち100は99について良好な遺存状況である。口縁は平縁で口唇部は細かいキザミが施されて鋸歯状を呈し、口径は26.4cmを測る。胴部上半のくびれは2段あり、口縁部区画文帯も2段構成をとる。区画文は縦位の3条の平行沈線によって4分割され、直線的な沈線による棒状の区画文が描出され、区画内には規則的に結節沈線状の連続押捺文が充填される。沈線による区画文の交点には、径5mmほどの円形刺突が施される。表裏面とも、貝殻条痕文が丁寧に施されている。

101は口縁部区画文帯と胴部条痕文帯の境界付近の破片である。口縁部区画文帯の下端で復元される径が17.8cmの、小形の深鉢形土器である。口縁部区画文帯はあまり遺存していないが、尖鋭な沈線による棒状の区画文と思われ、空隙には連続押捺文が充填される。破片でみれば、区画文交点の刺突は施されていない。土器内面の貝殻条痕文は深くはっきりと施文されているが、外面胴下部の条痕文は磨滅の影響もあろうがあまり明瞭ではない。

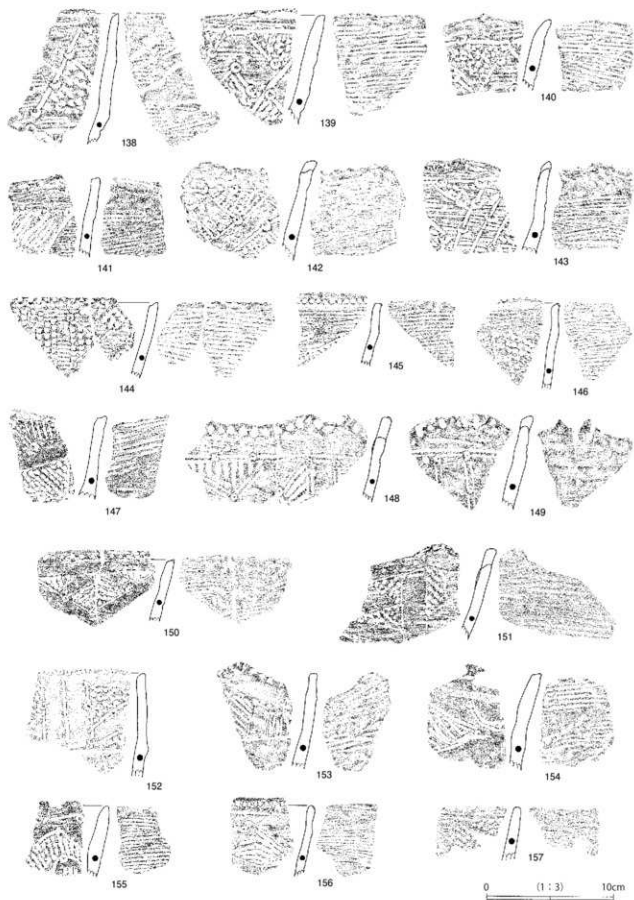
102は平縁を呈する口縁部破片で、復元口径15.2cmと101よりもさらに小形である。沈線によって幾何学的文様の区画を描出し、その交点や要所には径3mmほどの細い竹管による円形刺突が施される。区画内には交互かつ規則的に縦位の集合文線を充填する。土器内面は莖東条痕の可能性もある。

1種と同様区画文交点の円形刺突に着目すると、100・102・135～176が竹管断面による円形刺突のもので、1種では竹管の径によって2分して提示したが、2種では大半が径5mm程度またはそれ以上の大型のもので、小形のものは102や153・157など数えるほどしかみられない。177～211が棒状工具による小孔状の刺突になっているものである。明瞭に分別できるわけではないが、円形刺突のものとは比べて沈線が直線的でなく、区画文の構成が不整になる傾向がうかがえる。さらに本種には、212～238のように1種にはみられなかった交点の刺突文が完全に省略されるものも含まれている。222や223のようにただ刺突が省略されただけのものもあるが、212・214・215・219のように区画文を構成する沈線が太く充填される集合沈線とほぼ同じくらいのものや、224・225のように区画文も充填されるものもひかいたような細い沈線であるものが多く、全体に省略化の方向がうかがえる。縄が島台式土器のなかでも、比較的新しい段階の特徴を備えているといえよう。

口縁部形態をみると、図示した46点のうち1種では劣勢であった平縁の深鉢が25点と過半数を占める。先の区画文交差部刺突の特徴と対比させると、円形刺突のものは23点のうち11点が、小孔状刺突のものは13点中5点が、刺突を持たないものは10点中9点が平縁となっており、より新しい特徴を示すものに平縁が多いという傾向がうかがえる。口縁部に関連して特徴的なものとして、185と186を図示した。185は波状口縁深鉢形土器の波頂部付近の破片で、上方からみるとほぼ直角を呈している。口縁部文線帯部分が方形の箱形を呈する器形であろう。186は波状口縁深鉢形の波頂部に付された把手の一部と思われる。筒状

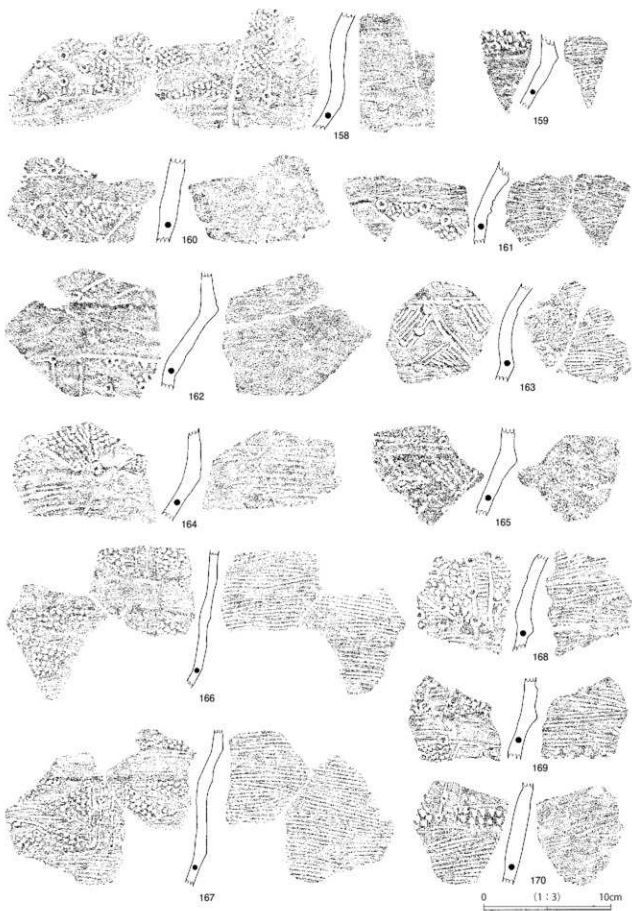


第93図 遺構外出土土器 第Ⅲ群(3)

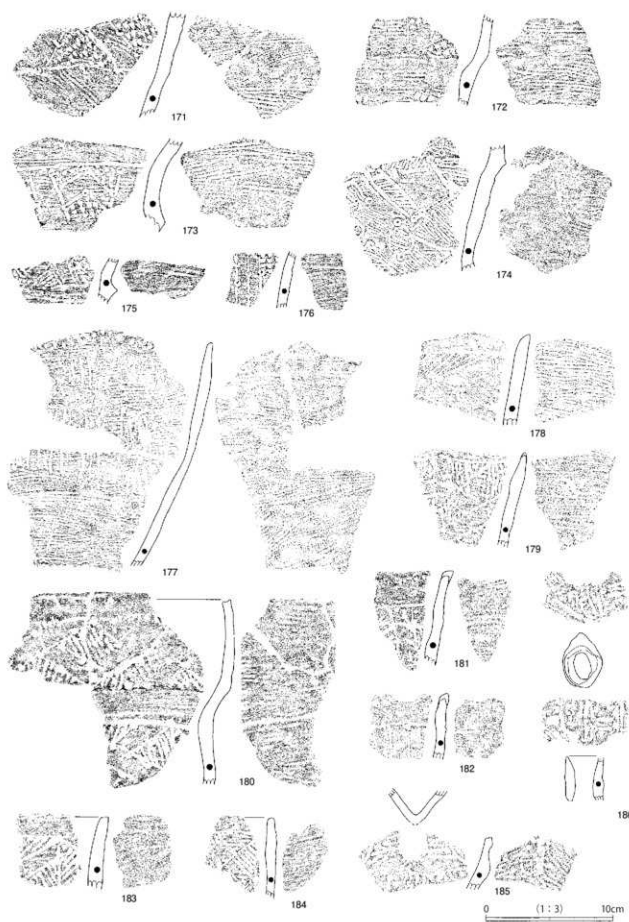


第94図 遺構外出土土器 第Ⅲ群(4)

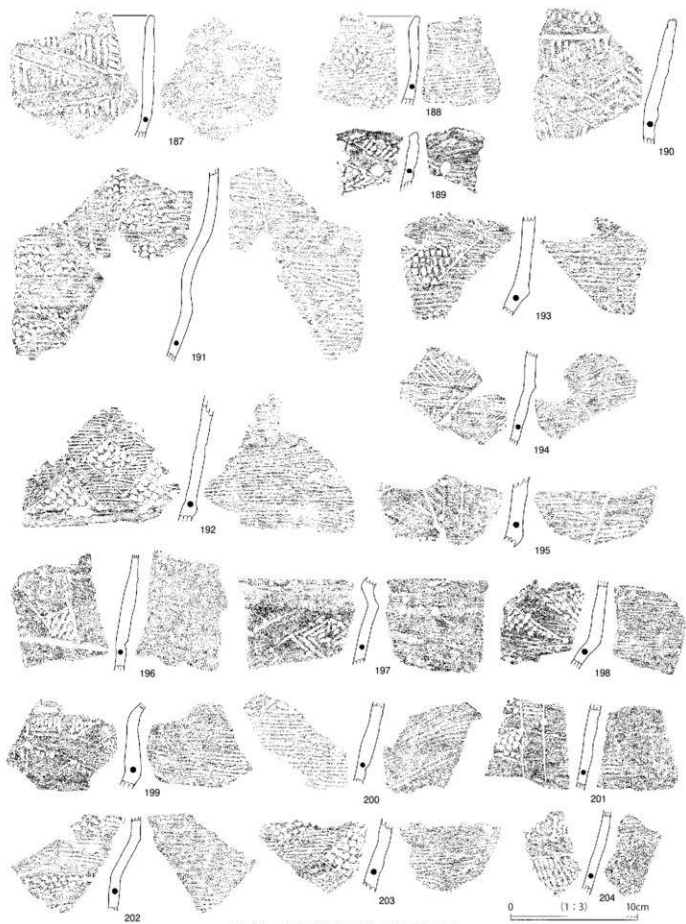




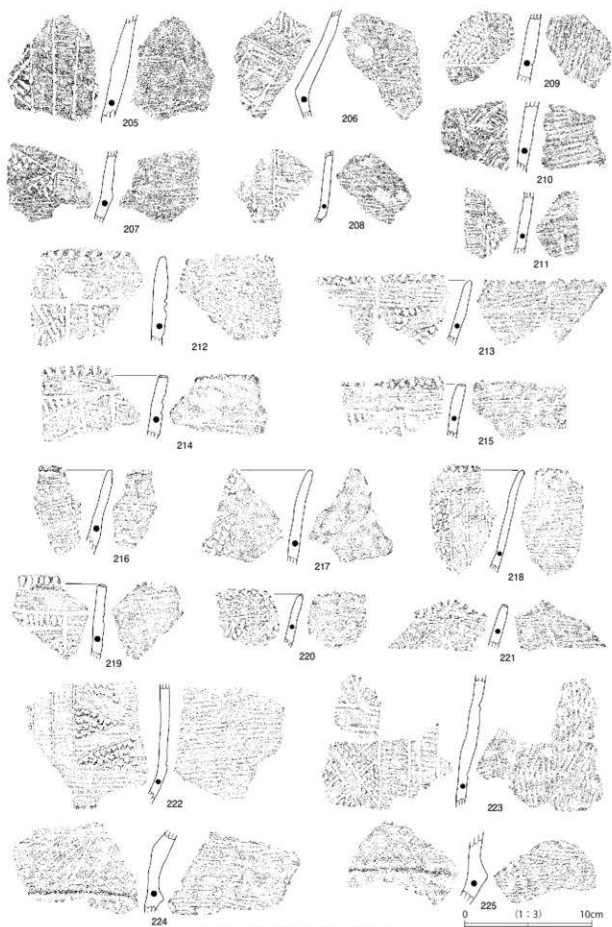
第95図 遺構外出土土器 第Ⅲ群 (5)



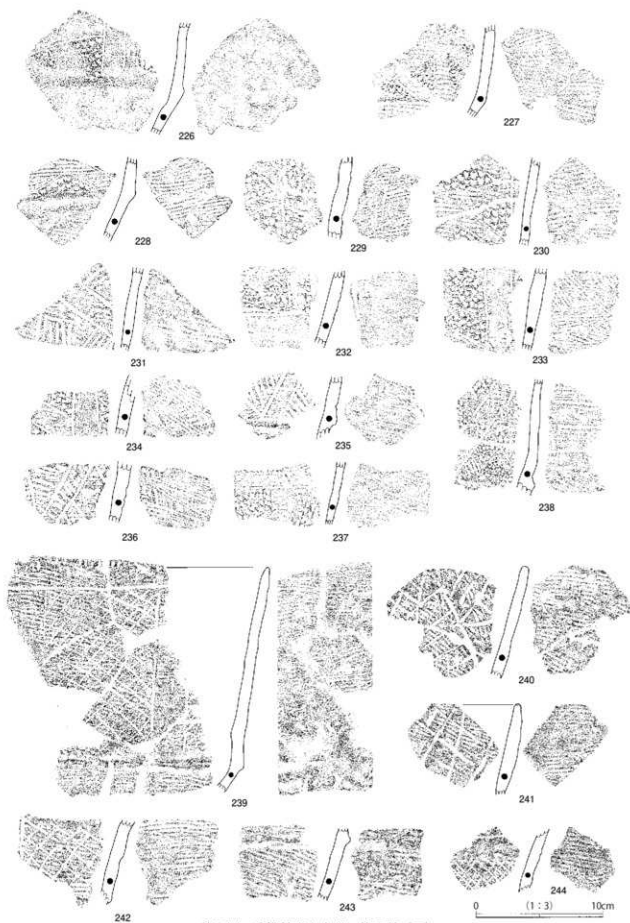
第96图 遗構外出土土器 第Ⅲ群(6)



第97図 遺構外出土土器 第Ⅲ群 (7)



第98図 遺構外出土土器 第Ⅲ群(8)



第99図 遺構外出土土器 第Ⅲ群 (9)

を呈しており注口のような用途も考えられるが、干潟町（現旭市）桜井平遺跡600号跡に筒状の把手が各波頂部に1単位、計4単位付された例が報告されている。

器形には1種と同様胴部上半にくびれ部を1段ないし2段持つものがある。2段となるのが確実な例は135・136・152・162・167・180・191などで、1種の同様の例に比して下段のくびれの度合いが弱い傾向がうかがえる。また、177のように有文土器であるにもかかわらず、くびれ部のない例が少ないながら存在する。170や171のように、口縁部区画文帯と胴部条痕文帯の境界に稜がなくまっすぐ立ち上がるものも、くびれ部のない器形である可能性が高い。

器壁全体に施される条痕文は貝殻条痕文が主体で横方向を基本に深くはっきりと施文されるものが多いが、223の裏面のように縦方向に施すもの、161や170のように茎条痕である可能性があるもの、214・217・226のように条痕文は施されず指頭で押さえるように調整を加えているものなども散見される。

3種（239～255・294） 有文土器のうち、口縁部区画文帯が簡略化された沈線による斜格子状の文様で構成されるようになったものを3種とする。

口縁が遺存するものは239～241と294の4点しかなく、240は波状口縁の可能性が残る3点は平縁である。全体の器形が判明するのは239のみで、湾曲の度合いの小さいくびれを1段持ち、くびれ部が斜格子状の文様による口縁部文様帯、胴部下半が横位の貝殻条痕文となっている。ほかに器形がわかるものはないが、245や254のように斜格子状文様帯の上方に稜が横走するものは2段構成になる可能性が高いといえよう。294は口唇部に刻みを持ち、外面口縁部直下、格子目状の文様の上部に円形の細沈線と刺突による小孔4個によってボタンのような意匠を描出している。何らかを象徴したものであろうか。

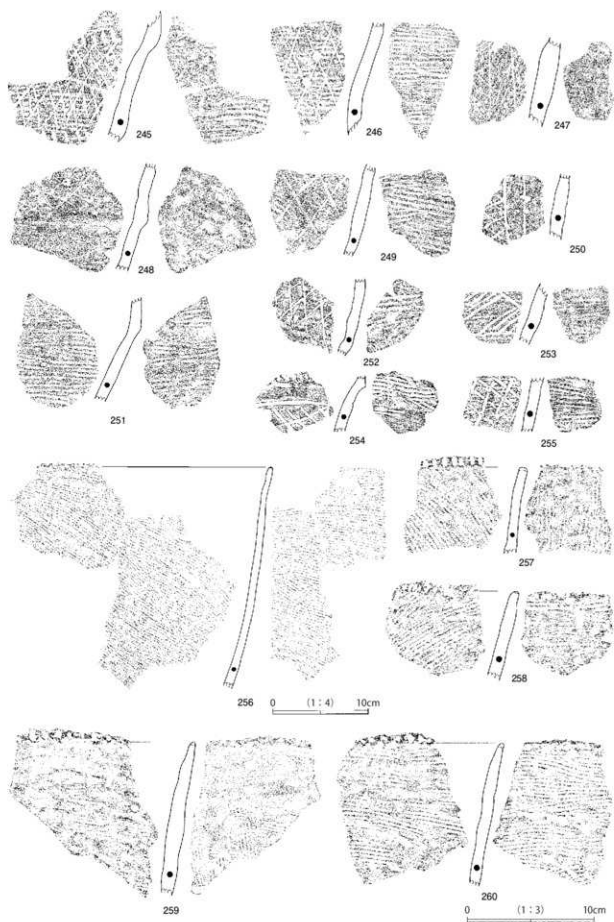
斜格子状の沈線の交点には刺突文が施されるものと施されないものがほぼ同数の割合で存在し、施される刺突文のなかには竹管断面による円形のものや棒状工具による小孔状のものがあるが、円形刺突文は概して径の小さな竹管を使用したものが多く、径5mmを超えるような太いものはみられない。

器壁に施される条痕文は横位の貝殻条痕を基本とするが、247や253のように茎条痕の可能性が高いものや、248のように指頭で押さえることで調整し条痕文のみられないものもみられる。

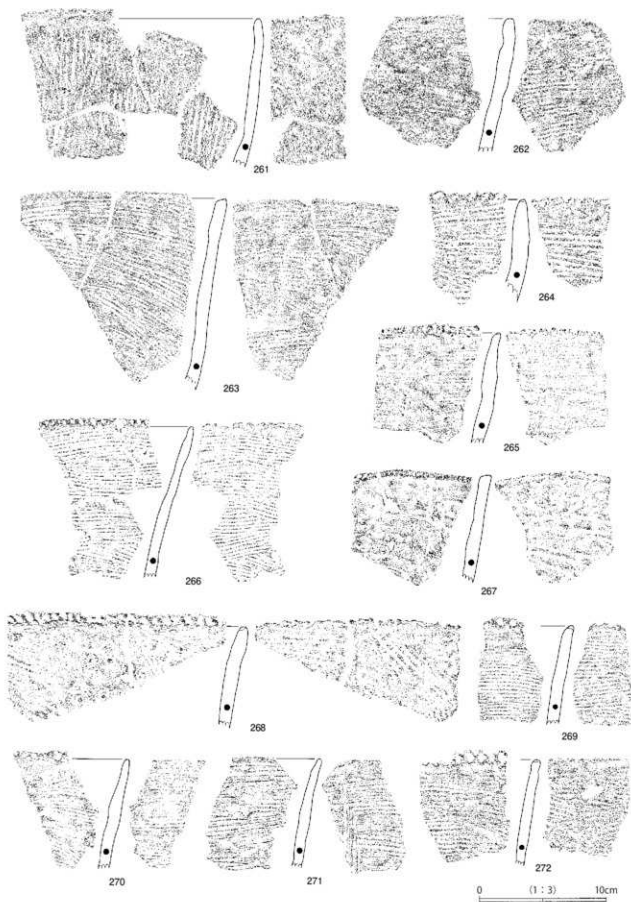
4種（256～293・295～303） 表裏とも条痕文のみが施される、いわゆる無文土器である。概要の項でもふれたとおり、植物繊維の含有量や条痕文の特徴、すなわち植物繊維の含有量が少ないことと貝殻条痕文が深くはっきりと施されていることを基準に分類したもので、瀬ガ島台式期と断定できるものではない。二つの特徴のうちでは植物繊維の含有量を優先しているため、茎条痕のものや調整痕のものも含まれている。

256～293・295・296は口縁部の資料で、40点中波状口縁に復元されたものは3点とわずかでありほとんどが平縁であった。また、確実にくびれ部を持つと判断できるものも口縁部破片のなかには存在しない。口唇部の、特に外側には刻みを伴うものが多い。297～303が当該期に属すると判断した胴部破片で、このうち297～302のように外面に稜が横走するものや屈曲部を持つものはくびれ部を有する器形になると考えられる。297や298では稜の上面に刻みを伴っている。

さきにもふれたとおり、条痕文は深くはっきりと施文された貝殻条痕文を主体とするが、有文土器とことなって施文の方向は縦位であったり斜位であったり、または複数方向が組み合わせられて施文されたりというバラエティがある。ただし、くびれ部を有する器形と判断されるものについては、横走する稜に規制されるためか貝殻条痕文も横方向に施されるものが主体となる。

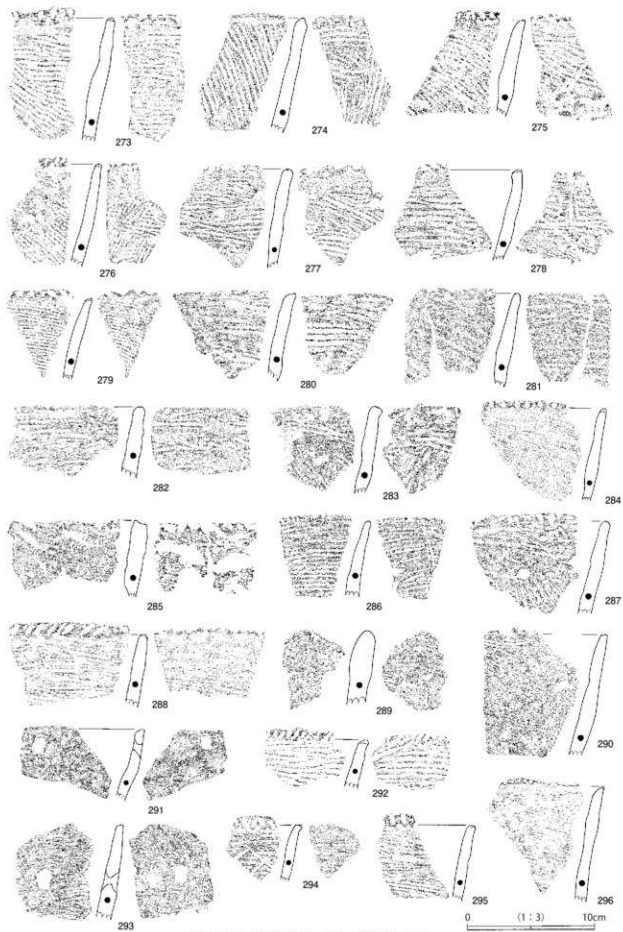


第100図 遺構外出土土器 第三群 (10)

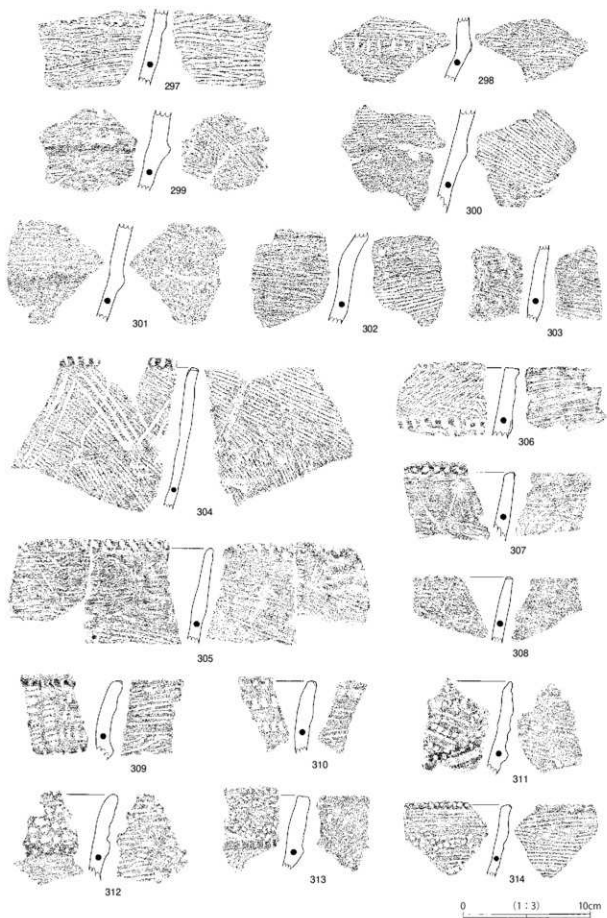


第101図 遺構外出土土器 第Ⅲ群 (11)





第102図 遺構外出土土器 第三群 (12)



第103图 遺構外出土土器 第三群 (13)

**第3類** (103・304~351) 鶴ガ島台式から茅山下層式にかけての過渡期的な様相を呈する土器群を本類とする。鶴ガ島台式土器の特徴である口縁部文様帯の区画文がくずれて簡略化される傾向がうかがえ、口縁部文様帯そのものが消滅するものもみられる。当然この段階の資料にも条痕文のみの無文土器が伴うはずであるが、明確に分別することは困難であることから本類では有文土器のみを扱っている。

**1種** (103・304~308・331~333) 胴部上半に沈線や平行沈線、集合沈線などを用いて波状や鋸歯状、崩れた格子状などの文様を描くものを1種とする。306のように沈線文様の下位に刻みをもつ稜が横走り文様帯を画しているものもあるが、304のように口縁部文様帯を区画する要素が消滅したものが主体となるようである。前者は1段のくびれ部を持つ器形に、後者はくびれを持たない器形が想定される。

施される貝殻条痕文は第2類と同様に深くはっきりしたものが多いが、施文方向は斜位になるものが散見される。第2類4種と同様の理由によるものであろうか。

**2種** (309~320・331~343) 連続押捺や押しきなどにより方形や楕円形、菱形などの文様を描くものを2種とする。311や313のように襷状のモチーフの痕跡を残すものもあるが、沈線や細隆線による明瞭な区画は消滅する。施文具には半截竹管、角押文となる先端の角張ったもの、先の細い竹管や棒状のものなど、様々なものが想定される。器形の全容が判明するものはないが、309や311~313のように施文帯の下端は横走する稜で画されたものが多く、口縁部文様帯としての意識が残存している点で1種とは性格を異にするといえる。

条痕文は貝殻条痕文であるものが多いが、莖束条痕と思われるもの(311・317・319など)や調整が条痕によらないもの(313・316・320など)も相当数存在する。施文方向は、文様帯を画する稜に規制されるためか、横位のものが多い。

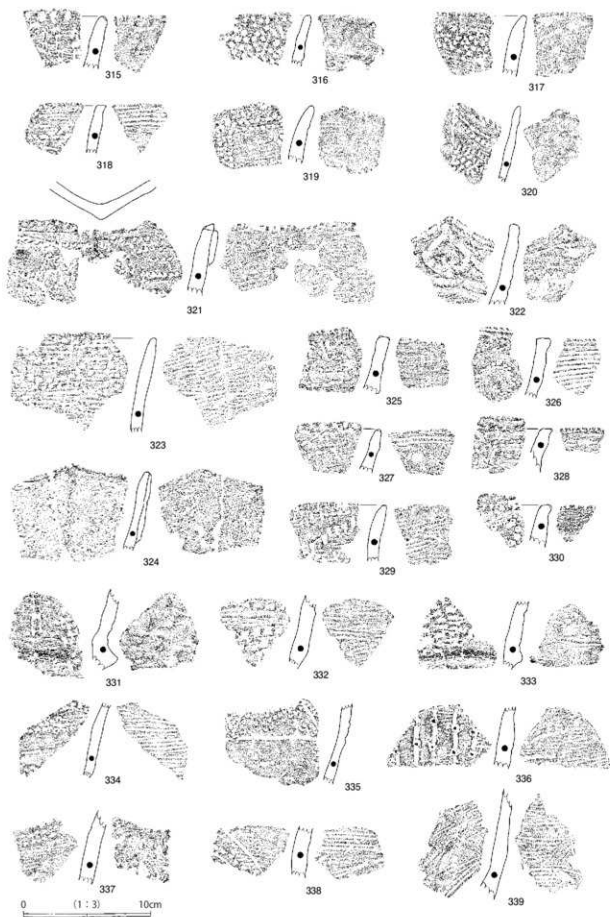
**3種** (321~330・344~351) 器表面を指頭で何度もなぞることによってできる太い凹線によって渦巻形やS字形、弧状などの文様を描出するものを3種とする。これらの文様は入り組むように密に配置され、なぞり残して微隆線状となった高まり部分に1~2列の刺突列を施している。刺突列の施文具はほとんどが細い竹管または棒状と思われるが、329は先の角張った多截竹管による角押文状に、330は径5mmほどの竹管断面による円形刺突文となっている。

口縁部破片は321~330の10点で、平縁・波状口縁ともに5点ずつであった。器形の判明するものはないが、反りの度合いの強い344や、外面に稜が横走する345・347などはくびれ部を持つ器形になるのであろう。321は波状口縁の波頂部から垂下させた隆線によって口縁部文様帯を縦に分割しており、185と同様波頂部を上面からみるとやや角張っている。

施文される条痕文は、326や351のように深くはっきりした貝殻条痕文もあるが、指頭による調整のみで無文のものが多くなっている。

**第4類** (104・352~448) 茅山下層式土器を中心に、前期初頭の花積下層式までを含めて本類とする。くびれ部を持つ器形や稜が横走する器形は口縁部文様帯を有するものに限定され、表裏とも条痕文のみや調整痕のみのものにはみられなくなる。

有文土器では、鶴ガ島台式にみられた口縁部文様帯の区画文は完全に消滅し、隆線や稜で画された口縁部文様帯には集合沈線や結節沈線、貝殻条痕文などが充填され、縄文が施されるものも出現する。表裏条痕文のみの無文土器では、貝殻条痕文が主体ではあるが莖束条痕や指頭による調整のみと思われるものが多くなり、貝殻条痕文も施文が粗雑で深くはっきりしたものは少なくなる傾向にある。



第104图 遺構外出土土器 第三群 (14)

1種(352~374) 口縁部文様帯を有するものを1種とする。口縁部破片は14点あり、うち平緑が9点、波状口縁が5点と平緑が優勢である。くびれ部や稜の存在を判断できないものもあるが、上面にキザミや押捺を伴う隆線などでくびれ部の下端を画し、口縁部文様帯を作出しているものが多い。

352・353は同一個体で、角張った幅のある口唇には細かくキザミを施し、口縁部文様帯には4条以上の結節沈線が横走している。裏面は調整痕のみで無文である。354・355・358・359は口縁部文様帯に沈線や平行沈線による鋸歯状や菱形などの文様が施されている。366は円孔状の小突起を伴い上面にキザミのある稜によって文様帯を画し、太沈線による集合沈線を充填している。これら5点は第3類に属する可能性もあるが、条痕文の特徴から本類と判断した。

356・357・360~374は口縁部文様帯の内部も条痕文や調整痕のみのものである。356・357は稜より上方の口縁部文様帯に縦位の貝殻条痕文を施す例で、特に356は胴部文様帯も縦位貝殻条痕文であり稀有な例といえる。356はくびれ部の幅がせまく、357では口唇部に円孔状の小突起が付されている。368は破片の上端と下方の2か所に上面にキザミを伴う稜が横走していることから2段のくびれ部を持つ器形になると思われ、口縁部文様帯下段には先端の角張った工具による幅広の沈線が斜位に施される。文様帯を区画する隆線や稜には上面にキザミや押捺を伴うものが多く、362などは縄文時代後期中葉以降にみられる粗製土器の紐線文のような隆線である。365・371・373・374の隆線上の押捺はハイガイのような小型のアナダラ属貝の殻頂部外面を用いており、これは当該期の特徴のひとつといえる。360・361・365・374には口縁部文様帯を縦に区画する隆線もみられ、特に360はこの区画する2条の隆線が口唇部を越えて内面でU字形に連結している。

2種(375~405) 表面に縄文が施されるものを2種とする。絡条体圧痕を伴うものや、アナダラ属貝殻復縁を施文具として使用しているものも本種に含めた。口縁部破片10点のうち平緑3点、波状口縁7点と、1種とは異なり波状口縁が優勢である。375・384~386の4点は、上面にキザミや押捺のある隆線で口縁部文様帯を作出している点では1種と同様の構成となる。このうち375と384では口縁部文様帯を縦に分割する隆線があり、375ではこの隆線が波頂部から垂下している。384ではこの縦位の隆線に円孔状の小突起が付されている。

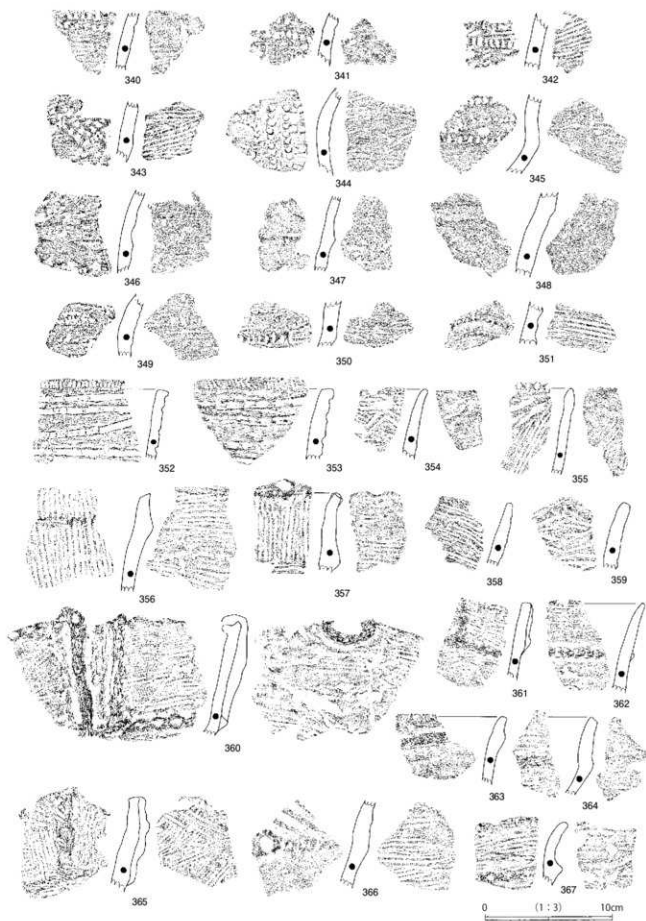
縄文の原体には様々なものがあり、摺り方向や施文方向などの傾向はうかがえない。399・400は同一個体で、0段多条の単節縄文LRを使用し施文方向を転換して羽状や菱形の縄文を施している。376・382・403・405には横位の絡条体圧痕文が数条施されており、これらは花積下層式段階に比定できよう。

398・404は施文具にアナダラ属貝殻を使用したものである。398は小形の貝殻復縁の押し引きによって疑似縄文を施している。404は中形の貝殻復縁を斜位に連続して押捺している。

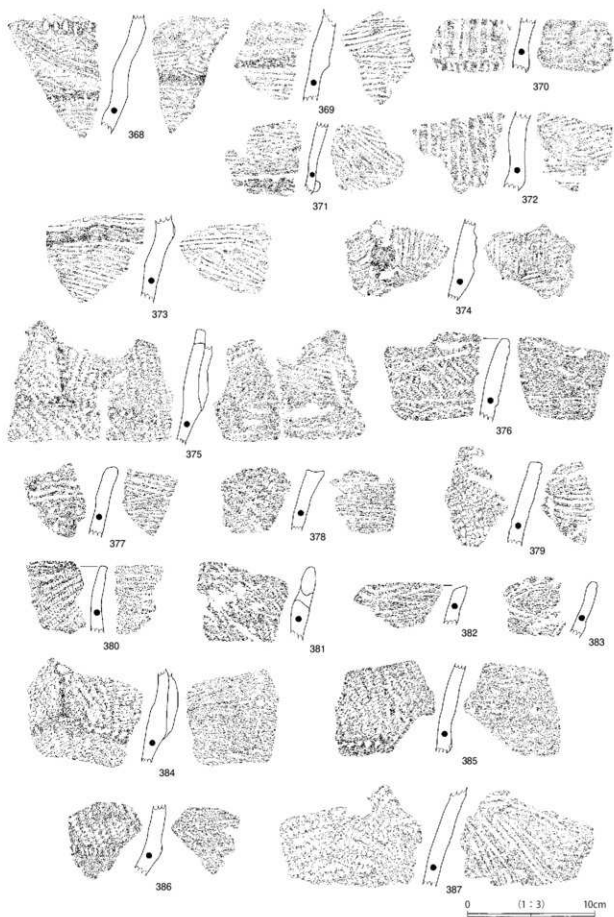
なお、382・383・403~405は裏面の拓影を図示していないが、これは小破片であるうえ遺存状況が不良であることから拓影の採取を断念したため、いずれも粗雑ながら条痕文が施されている。

3種(104・406~448) 表裏とも条痕文や調整痕のみの無文土器を3種とする。貝殻条痕文の施文は雑で浅くなり、莖条条痕や指頭による調整のみのものが占める割合が高くなる傾向があるが、明瞭に分別できるわけではなく縄文島台式段階の資料が混入している可能性がある。胎土中に含まれる植物繊維の量も増加する傾向にある。

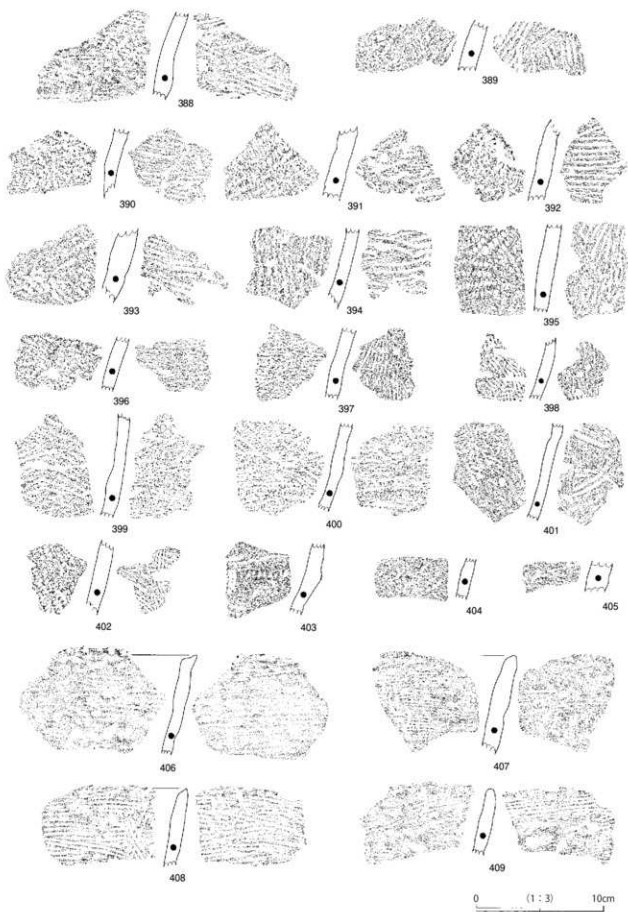
104は径19.4cmに復元された平緑の深鉢形土器である。口唇部にキザミ状の押捺が施され、表裏面とも莖条条痕による調整のみが観察できる。104も含めて口縁部が遺存する資料は25点あり、うち波状口縁に



第105图 遗構外出土土器 第三群 (15)

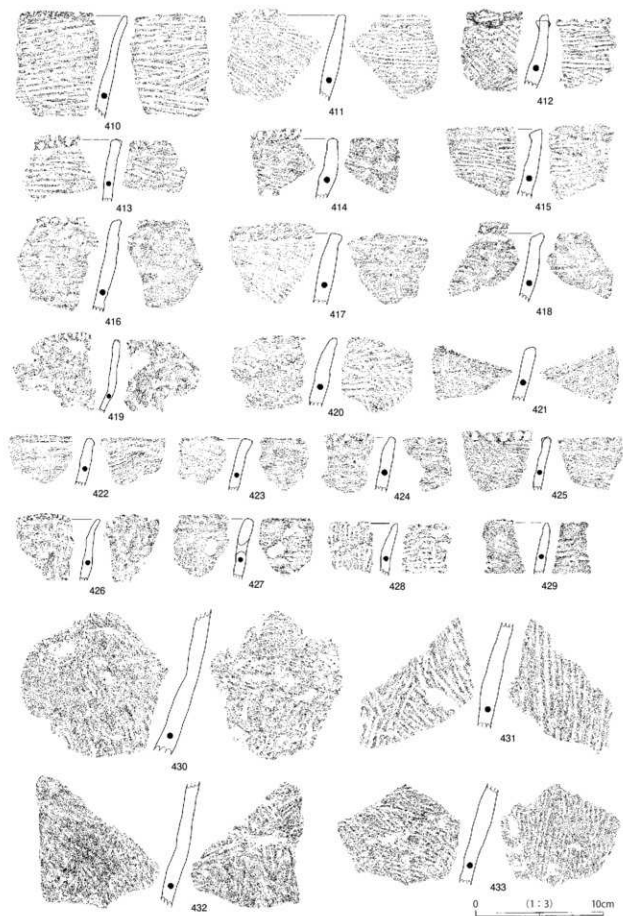


第106图 遗構外出土土器 第三群 (16)

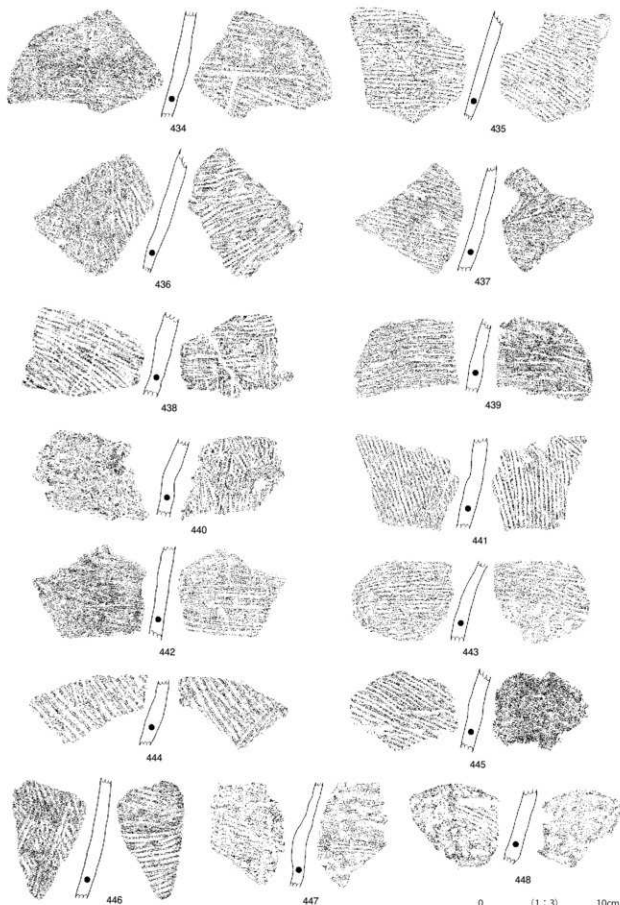


第107图 遗構外出土土器 第三群 (17)

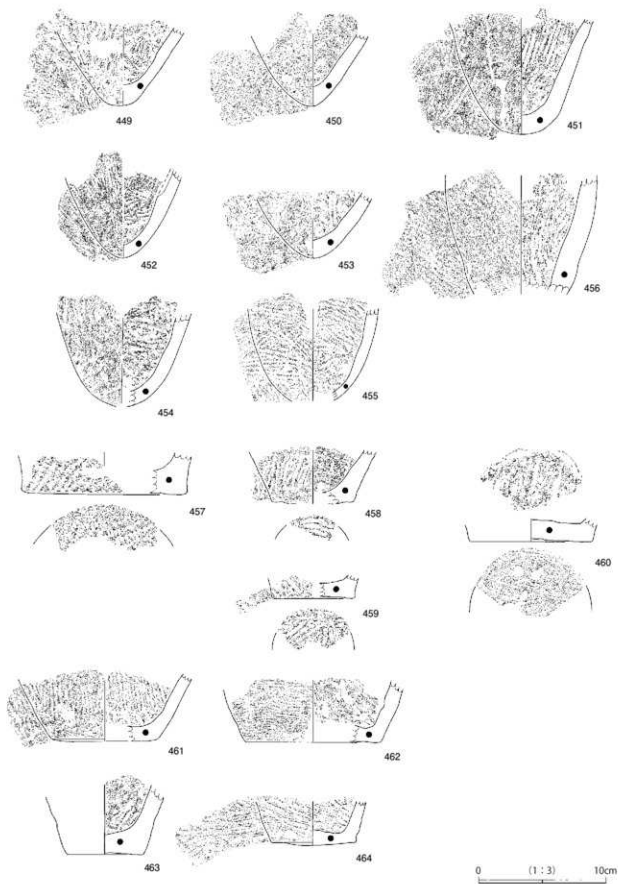




第108图 遗構外出土土器 第Ⅲ群 (18)



第109图 遗構外出土土器 第Ⅲ群 (19)



第110図 遺構外出土土器 第三群 (20)

復元されたのは2点とわずかで、大半は平縁である。口唇部にはキザミ状の押捺が施されるものが相当数あるが、波状口縁のものにはみられない。口唇部に関連して特筆すべきものとしては、412では貝殻復縁で大きくくぐるようにして掻き取ったような凹部を作出しており、417では節、条ともに細かい単節縄文LRを口唇上に回転施文している。417では口唇部外面がわずかながら肥厚しており、早期燃糸文系土器の口縁部をみるようである。

条痕文の特徴は先にふれたとおりであるが、施文方向についても鶴ガ島台式段階では横位の施文が中心であったのに対して、縦位や斜位、それらをランダムに行うものが多くなるようである。

**第5類** (449～464) 第2類から第4類に属する底部を一括した。胴部以上と接合するものがなく、底部のみからいずれの段階に含めるべきか判断がつかなかったため、一括して提示することとした。貝殻条痕文の特徴からすれば、451の内面や455などは比較的深くはっきり施文されており第2類段階の特徴を示しているともいえるが、確実ではない。457は縄文施文が行われていることから第4類に含まれよう。

449～455は尖底となるもので、いずれも砲弾形を呈し、第2群土器にみられるような細長く尖った形態のものはない。いずれも内外面とも条痕文が施されるか調整痕のみで、底部であるためか施文や調整は概していいいではない。

457～464は平底のもので、457～460は底面の外面にも縄文や条痕文が施されている。極端な上げ底になるものや丸底状を呈するものはない。457は胴部最下部には単節縄文LRが横回転施文され、底部の外面にも同一の原体による縄文が施されている。底面外面に縄文施文されること、上げ底にならないことなどから前期初頭と判断した。458・459は貝殻条痕文が、460では茎束によると思われる条痕が底面外面に施されている。463の外面は被熱によりもろくなっており、器壁の剥落が激しいため拓影の採取を断念した。

#### **第IV群土器** (第111図465～第113図585)

縄文時代前期中葉から中期にかけての土器群を本群とする。

**第1類** (465～525) 黒浜式を本類とする。器形が復元できるものではなく、器種も深鉢しか確認できなかった。

**1種** (465～509) 縄文施文のみのものを本種とする。

465～482は粗大な縄を原体とするものである。465～478は菱形ないしは羽状構成をとるもので、465～469は施文の端部同士が接する部分で粘土が盛り上がっているもの、470～478は盛り上がっていないものである。479～482は斜行縄文のみのものである。

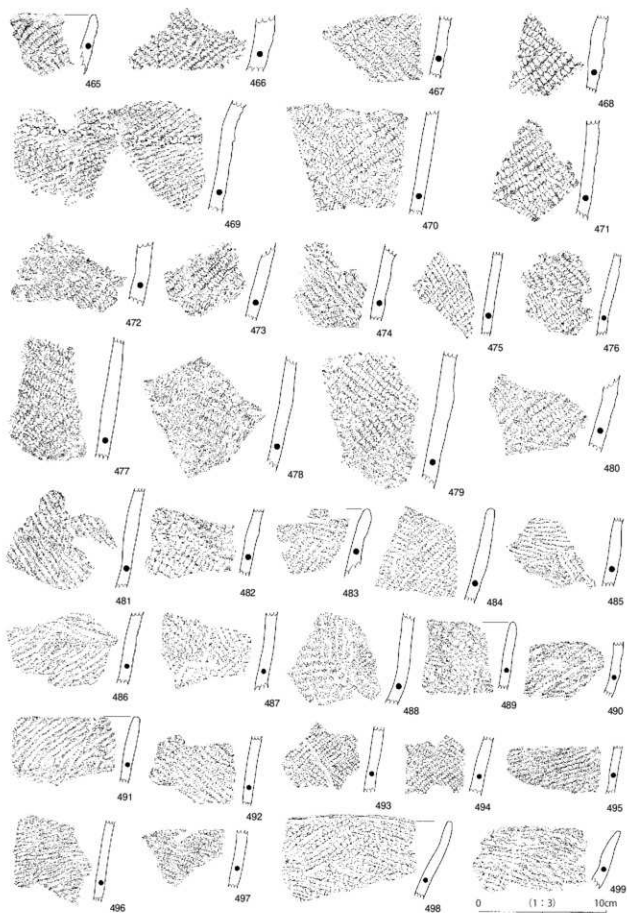
483～492は節が中粒な縄を原体とするものである。483～488は菱形ないしは羽状構成をとるが、均整がとれておらず乱れている。489～492は斜行縄文のみのものである。

493～497は節が細かい縄を原体とするものである。493・494は菱形ないしは羽状構成をとるもの、495～497は斜行縄文のみのものである。

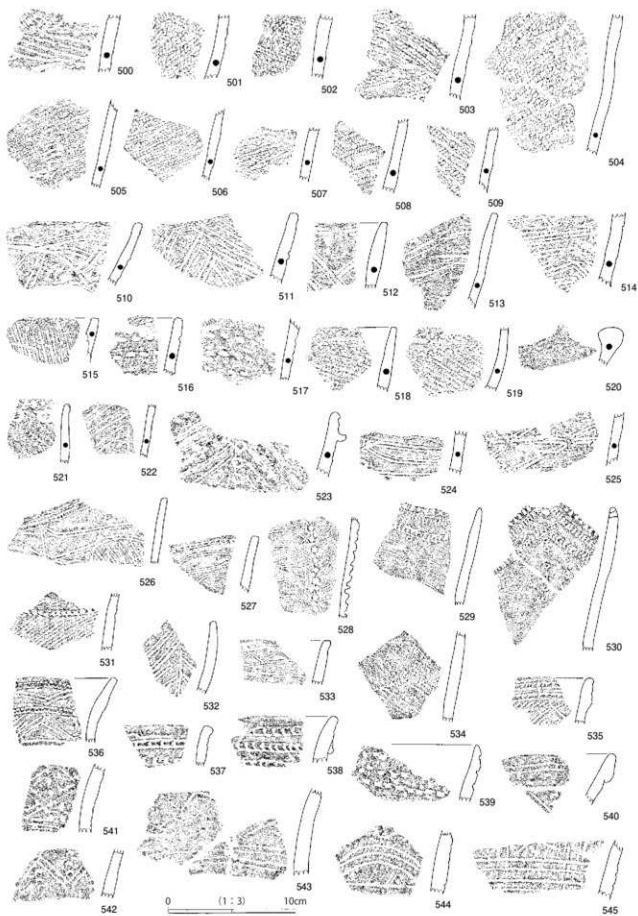
498～509は附加条縄文が施されるものである。498・500・501・503は菱形を構成する。

**2種** (510～525) 縄文以外の文様が施されるものあるいは縄文に加えてその他の施文具による文様が併用されるものを本種とする。

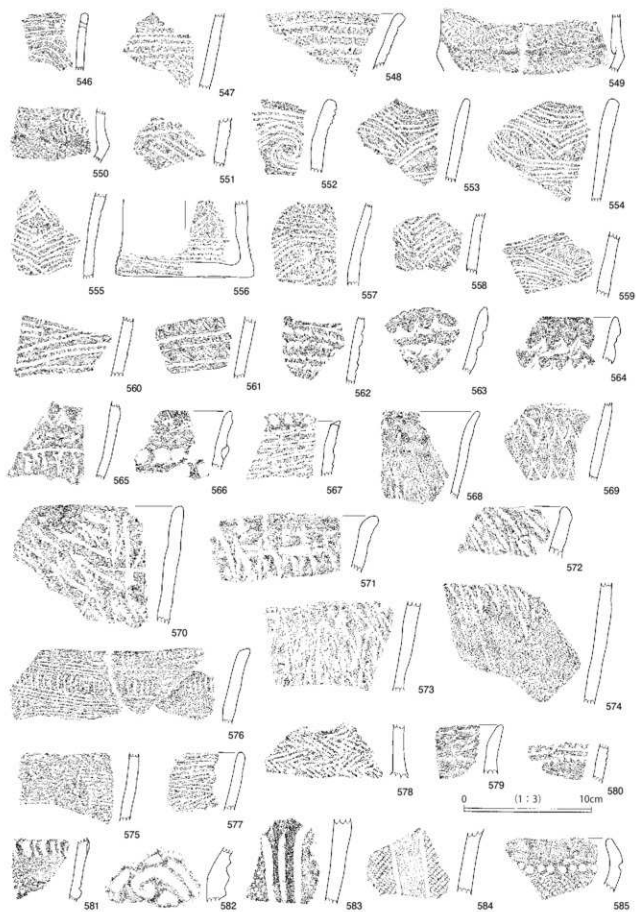
510～515は半截竹管ないしは櫛羽状工具で文様が描かれるもので、鋸歯状あるいは波状を呈するものの全体に粗雑である。516・517は棒状工具あるいは半截竹管による刺突列が配される。518～520は半截竹管によるコンパス文が描かれるもので、518・519は縄文と併用される。520はボタン状につまみ上げられた



第111图 遗物外出土器 第IV群 (1)



第112图 遗構外出土土器 第四群(2)



第113图 遗構外出土土器 第IV群(3)

小突起をもつもので、口縁に沿ってコンパス文が配されるが、その下は無文帯となっている。521は口縁に沿って円形竹管文が配されるもの。522は半載竹管による葉脈状文が施されるもの。523～525は半載竹管と円形刺突文が併用されるもの。523は波状口縁の深鉢で、口縁に沿って半載竹管による押し文が廻らされ、無文帯を挟んで隆帯が貼り付けられる。524・525は胎土の植物繊維の含有量もかなり少なくなっている。

**第2類** (526～585) 前期後半の諸磯式から中期加曾利E式までを本類とする。

**1種** (526～545) 諸磯a式を本種とする。浮島Iaを含んでいる。

**2種** (546～559) 諸磯b式以降を本種とする。

546～559は諸磯b式で、新段階を含む。560～575は浮島II式を主体とするものである。576は興津式である。577・578は諸磯c式である。579は前期末に位置づけられるものである。

**3種** (580～585) 中期を本種とする。量は極めて少ない。

580は五領ヶ台式である。581は阿玉台Ib式である。582～585は加曾利E2～3式である。

**第V群土器** (第114図586～第136図1081、図版35～37)

縄文時代後期の堀之内1式・2式土器を本群とする。当該期の遺構は思井上ノ内遺跡の主体をなしており、遺構外からも多量の遺物が出土した。

**第1類** (586～590・612～762) 堀之内1式を本類とする。本類については器形と文様構成別に分類し、その上で施文技法や文様構成要素などを基に種別に分類した。

**深鉢A** (586・587・612～721) 胴部文様帯が口縁部文様帯の下から底部にかけて単一で、段構成を取らないものを深鉢Aとした。器形は底部から口縁部に向かって直線的に開くもの、ほぼ垂直に立ち上がるもの、若干のくびれをもつものなどが認められる。

**1種** (586・587・612～696) 地文が縄文のものを本種とした。施文技法によってさらに細分される。

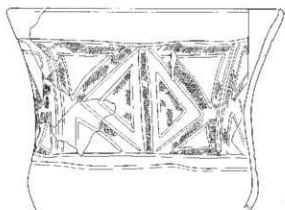
**1a種** (586・587・612～651) 断面円形の棒状工具を施文具として、一本描きの沈線による文様を描くものである。612は確立した単位文としての蕨状文を持つものである。全体の中では古相を示す。586・587・613～616は1本～4本の太い沈線で蛇行文や単位文が退化した縦位直線文を描くものである。全体に器壁が厚く、縄文は原体が粗くて太く、縄文施文部分が広い。遺構出土土器ではSI017-3が該当する。617～621はそれに加えて直線的な連結文を施すもので、縄文原体は太いもの、細いものがある。遺構出土土器ではSI017-1・4、SI015-4、SI010-1が該当する。622～626は1本～4本の太い沈線で斜線や格子目文を描くものである。627・628は1本～4本の太い沈線でH字文を施す。器壁は厚く、縄文は中太の原体もある。縄文施文部分は広い。629～631は縦位の隆線区画があるもので、器壁は全体に厚めで縄文原体は太めである。632～636は沈線の多条化が進行したもの、637～643は細沈線化したものである。地文の縄文は原体がかなり細くなっている。644～650は弧状の集合沈線を施すものである。644と649は縦位の刺突列が配される。651は縄文施文のみのものである。

**1b種** (652～696) 半載竹管または櫛羽状工具を施文具とするもの。文様の意匠は基本的に1a種を踏襲する。652～658は蛇行文や単位文が退化した縦位直線文を描くものである。縄文施文部分は広い。659～670は斜線や格子目文を描くもので、縄文施文部分は広い。671・672は縦位の隆線区画があるもの、673～694は上記文様の沈線が多条化したもので、縄文原体は細かい。695・696は器形は直線的に開くが後述する深鉢Cの文様が施される。





第114图 遗構外出土土器 第V群(1)



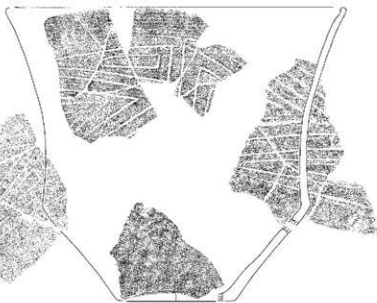
591



592



593



594



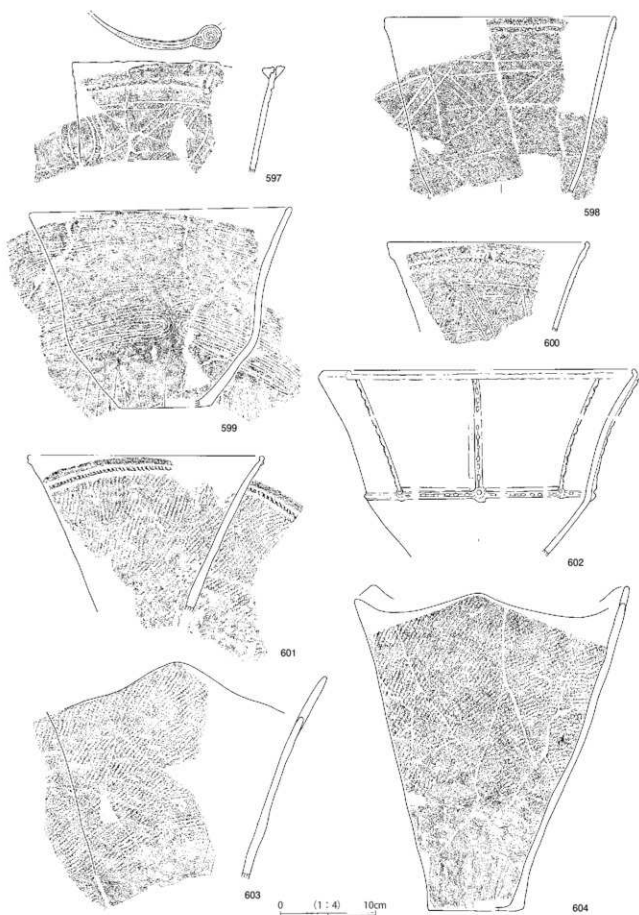
595



596

0 (1:4) 10cm

第115図 遺構外出土土器 第V群(2)



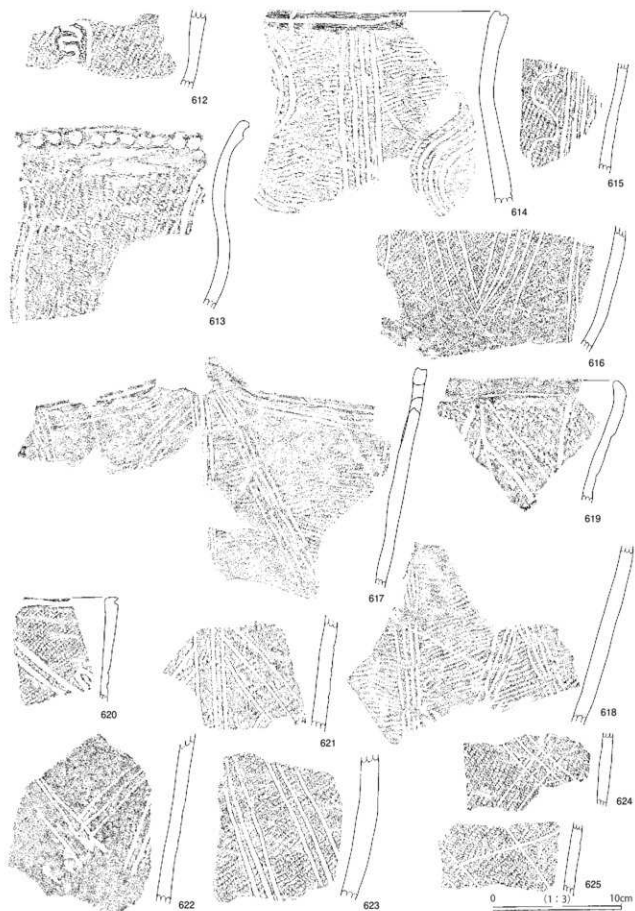
第116図 遺構外出土土器 第V群 (3)



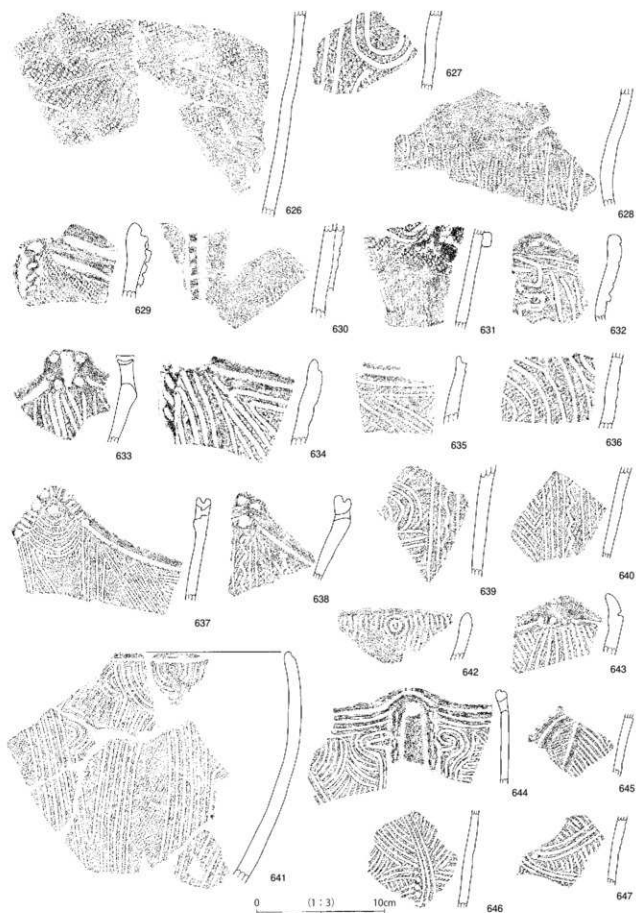
第117図 遺構外出土土器 第V群(4)

2種(697~721) 地に縄文を施さないものを本種とした。

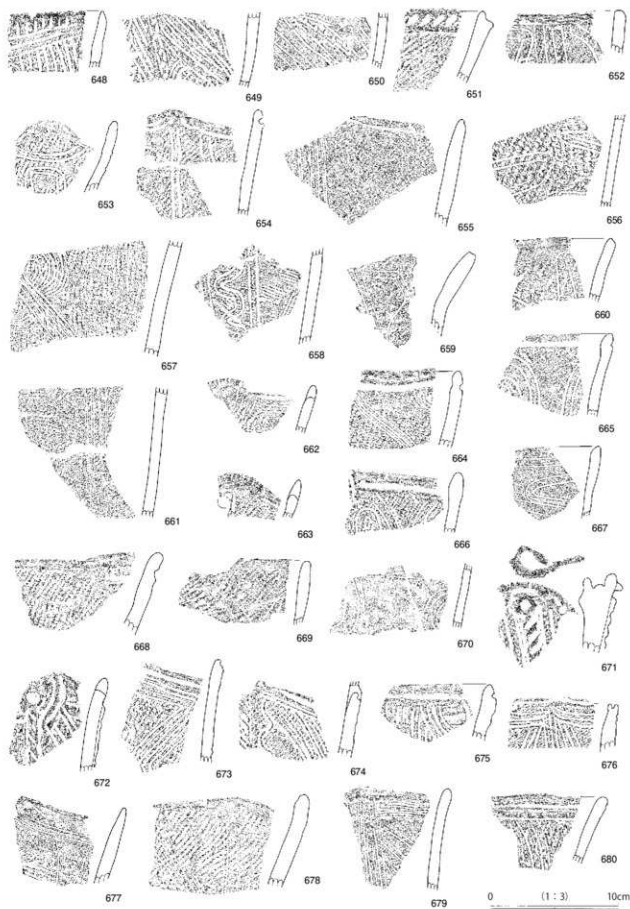
697は無文の口縁部に縦位の隆帯を貼り付けるもので、網取式の影響がうかがえる資料である。698~705は断面円形の棒状工具を施文具として、一本描き沈線で文様を描くもので、文様の意匠は1種に準じる。706~711は縦位の隆線により文様帯を区画するものと、弧状の集合沈線が認められるものである。



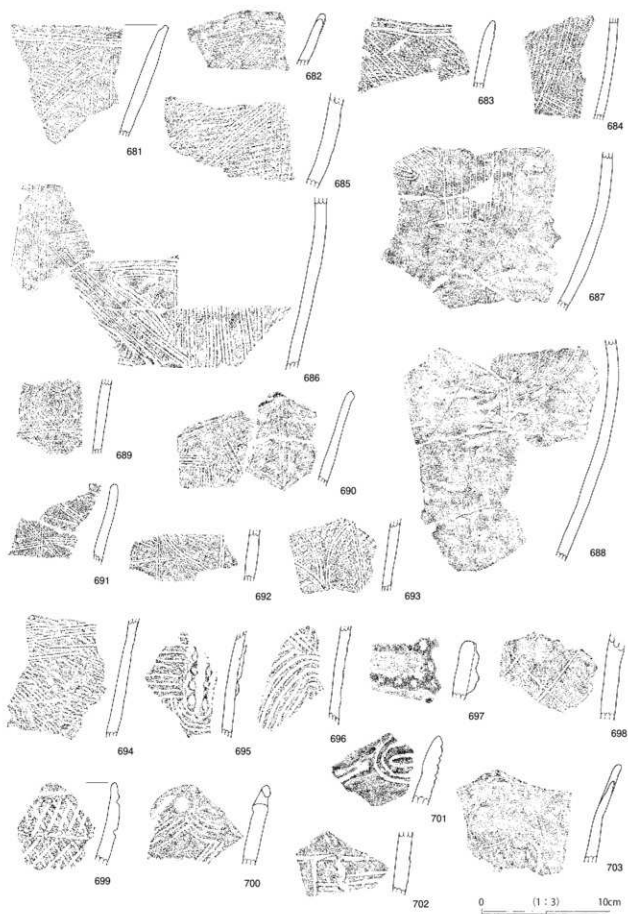
第118图 遺構外出土土器 第V群 (5)



第119图 遗物出土土器 第V群(6)

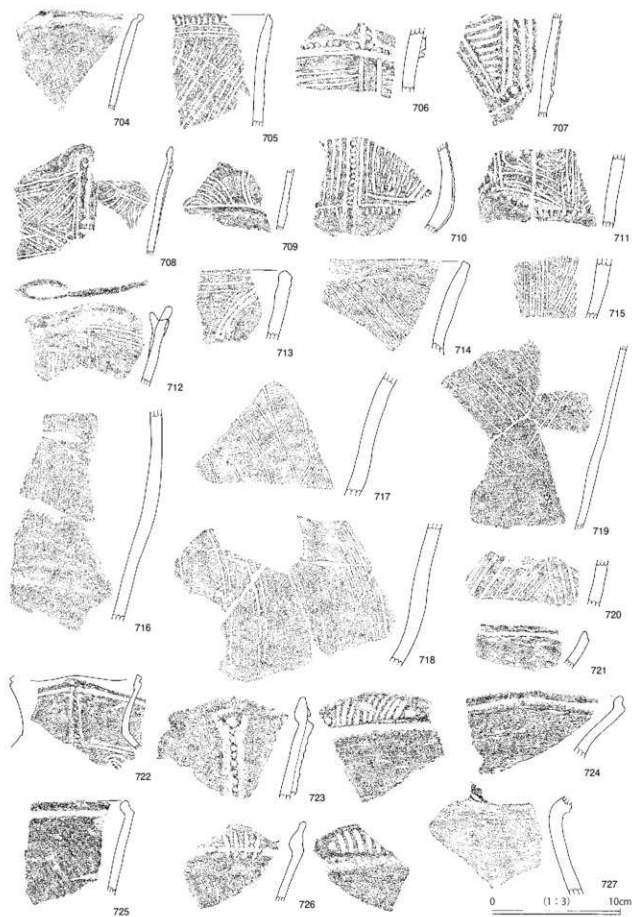


第120图 遗物出土土器 第V群 (7)

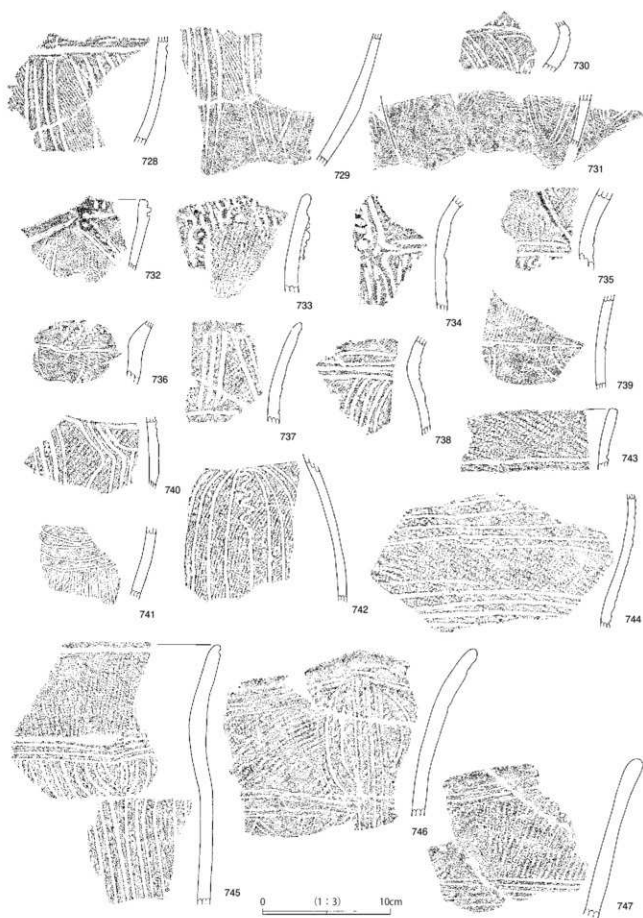


第121图 遺構外出土土器 第V群 (8)





第122図 遺構外出土土器 第V群 (9)



第123図 遺構外出土土器 第V群 (10)

712~721は半截竹管または櫛羽状工具を施文具とするもので、本種では多条化したものがほとんどである。**深鉢B** (589・590・732~762) 鉢の器形の影響を受けた土器で、頸部のくびれが弱い。ただし頸部を境に上下で文様帯が区画されており、深鉢との大きな違いがある。

589・590・732~744は断面円形の棒状工具を施文具として、一本描きの太い沈線で文様を描くもので、縄文を地文とする。732~736は隆線により文様帯が区画される。

745~752は半截竹管を施文具とするもので、縄文を地文とする。

753~762は地文がなく、沈線のみで文様を描くもので、西関東地方の影響をうかがわせる資料である。

**鉢** (588・722~731) 上半が強く外反し、くびれて膨らむ胴になる器形を呈する。くびれの部分で文様帯が明瞭に区画されるのを特徴とする。上半は無文、胴部は狭い磨消縄文を多用する。

588・722~726は口縁部破片である。727は無文の胴部破片である。728~731は同じく胴部破片で縄文を地文とし、4本程度の縦位沈線を施して間を磨消す。

**第2類** (591~611・763~1037) 堀之内2式を本類とした。本類についても第1類と同様器形別に分類し、その上で種別に分類した。

**深鉢A** (591~609・763~990) こちらも第1類と同様、胴部文様帯が口縁部文様帯の下から底部にかけて単一で、段構成を取らないものを深鉢とした。器形は堀之内1式から続けて底部から口縁部に向かって直線的に開くもの、ほぼ垂直に立ち上がるもの、若干のくびれをもつものなどに加え、小さめの底部から大きく外に広がるように器壁が立ち上がり、途中で大きく屈曲して直立あるいは若干内傾する形状のものが顕著に認められる。この屈曲が胴部文様帯の下端に当たる例も多い。

**1種** (591~598・763~836) 磨消縄文文様を持つものを本種とした。施文技法によって更に細分される。

**1 a種** (591~596・763~782) 口縁下に隆線が巡らされないものを本種とした。763・764は口縁下に沈線が配されるもので、堀之内1式の影響が顕著である。591~595・765~770は幾何学的あるいは直線的な文様構成をとるもので、591は被熱による磨耗が顕著である。771~776は円弧や雲形をモチーフとした曲線的な文様構成をとるもので、777~779は断片的な資料で全体構成が不明である。596・780~782は磨消部に多重沈線が入るものである。

**1 b種** (597・598・783~813) 口縁下に隆線が巡らされるものを本種とした。598・783~789は幾何学的あるいは直線的な文様構成をとるものである。597・790~796は円弧や雲形をモチーフとした曲線的な文様構成をとるものである。797~809は断片的な資料で全体構成が不明である。810~813は口縁部のみの破片で、全体の文様構成が不明である。

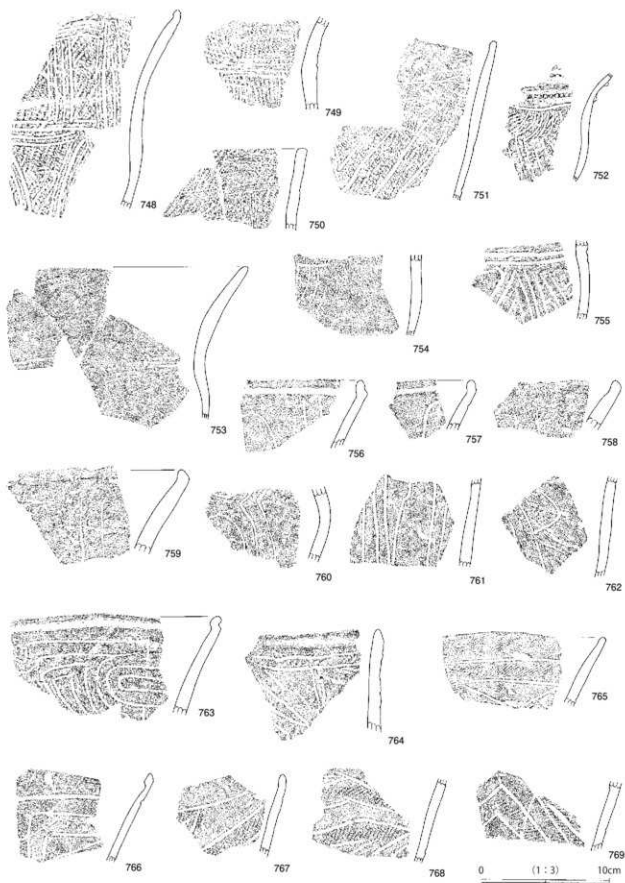
**1 c種** (814~836) 1種の胴部破片である。814~820は幾何学的あるいは直線的な文様構成をとるものである。821~826は円弧や雲形をモチーフとした曲線的な文様構成をとるものである。827~836は磨消部に多重沈線が入るものである。

**2種** (599・600・837~849) 1種としたものから縄文が脱落し、区画沈線のみが残存したものを本種とした。

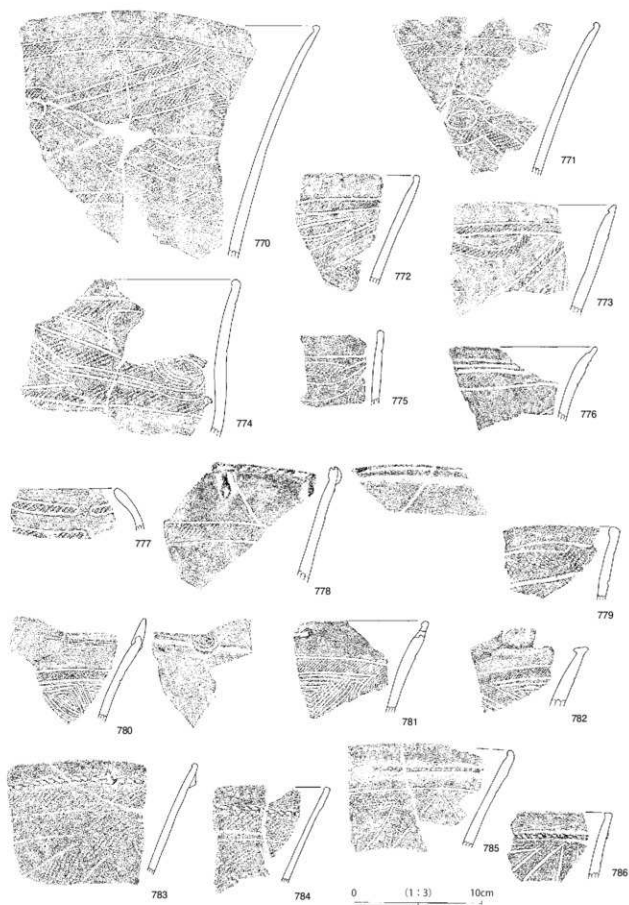
**2 a種** (599・837~842) 口縁下に隆線が巡らないものである。837~839は口縁直下に沈線が巡るほか、半截竹管によって斜行沈線が描かれており、堀之内1式の影響が認められる。

**2 b種** (600・843・844) 口縁下に隆線が巡るものである。600・843は曲線的な、844は直線的な文様構成をとる。

**2 c種** (845~848) 2種の胴部破片である。845は直線的な、846~848は曲線的な文様構成をとる。



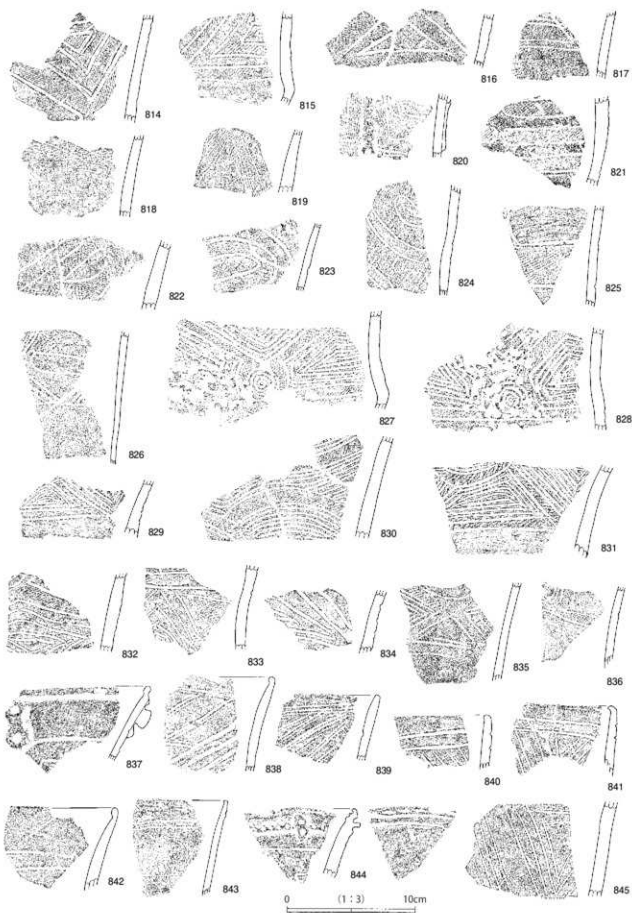
第124図 遺構外出土土器 第V群 (11)



第125图 遺構外出土土器 第V群 (12)



第126图 遗構外出土土器 第V群 (13)



第127图 遺構外出土土器 第V群 (14)

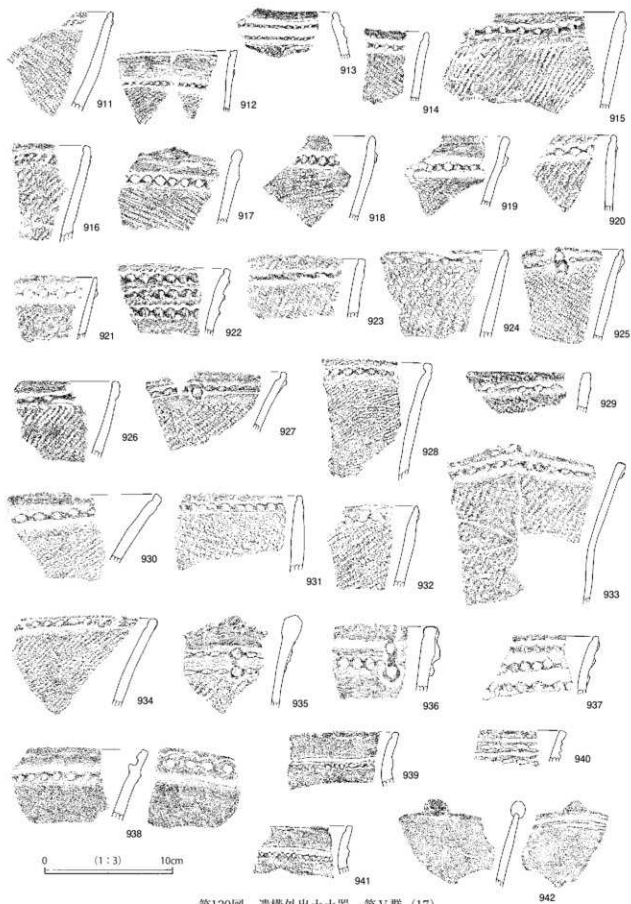


第128図 遺構外出土土器 第V群 (15)

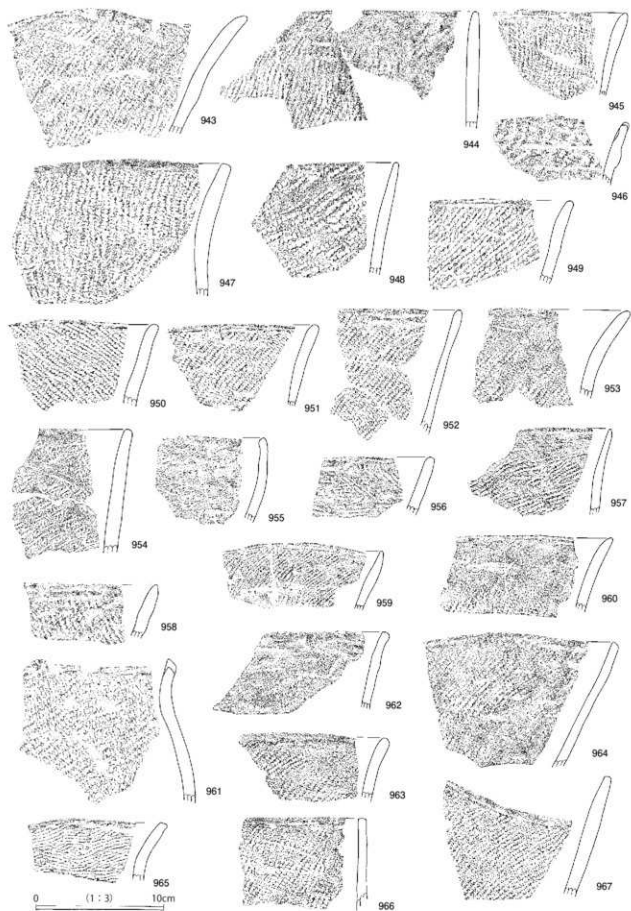




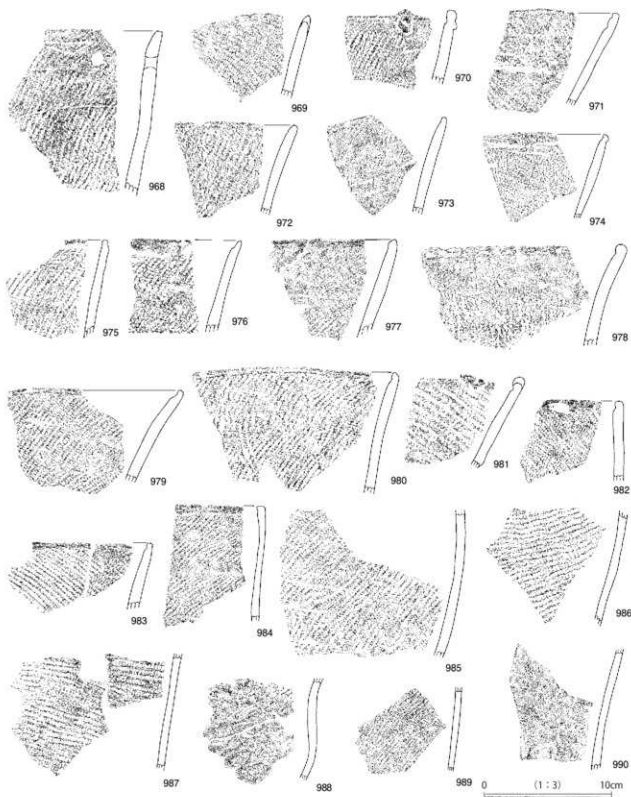
第129图 遗構外出土土器 第V群 (16)



第130图 遗構外出土土器 第V群 (17)



第131图 遺構外出土土器 第V群 (18)



第132图 遺構外出土土器 第V群 (19)

2 d種 (849) 文様構成が大きく崩れてしまっているものである。

3種 (850~900) 全面縄文に区画沈線・沈線を施すもので、磨消構成を取らないものを本種とした。

3 a種 (850~854・859~865) 口縁下に隆線を持たないものである。850~854は区画が半載竹管あるいは櫛羽状工具により描かれるもの、859~865は区画が棒状工具により描かれるものである。859・875~878は「8」字状貼付文をもつ。

3 b種 (855・866・879~893・898~900) 口縁下に隆線を持つものである。879は口縁直下に刺突列をもつもので、堀之内1式の影響が認められる。866・880~883は沈線区画が棒状工具によるもので、866・880・881は隆線上に棒状工具による刺突が施され、882・883は隆線上に指頭押捺が施される。855・884~893は半載竹管を施文具とするものである。855は区画を描くのに対し、884~893は区画は描かず条線と化しているもので、加曽利B式以降の粗製土器の祖型に当たる。890は隆線が2条、891は隆線が3条貼り付けられる。898~900は櫛羽状工具によって条線を描く。

3 c種 (856~858・867~878・894~897) この種の胴部破片である。856~858は区画が半載竹管あるいは櫛羽状工具により描かれるもの、867~878は同じく棒状工具により描かれるもので、894~897は条線と化している。

4種 (601・901~909・911~936) 口縁下に隆線が付き、胴部は縄文のみが施される。601・901~906は隆線上に直角方向の刺突が付くもの、907~909は隆線上に刻みが付くもの、911・912は隆線上に棒状工具の軽い押捺が付くものである。913~936は隆線上に指頭押捺が付くもので、913~921は爪跡が観察される。

5種 (602・937~942) 口縁下に隆線が巡り、その他に施文がないものを一括した。602・937~942は、縄文は施文されず区画沈線や条線なども施されないものである。942はボタン状の小突起がつけられる。

6種 (603~609・943~990) 縄文施文のみのものを本種とした。これらのうち、口唇部を整形しないものは堀之内1式の可能性があるが、全体の流れを理解することを優先させてすべて第2類6種とした。

6 a種 (603~606・943~967) 素口縁のものを一括した。943~948は縄文原体がかなり太く、それに對し949~955は細くなる。957~960は口端が細くなるもの、605・606・960~963は口端が外割ぎ状のもの、603・604・964~967は口端が角頭状をなすものである。

6 b種 (607・968~983) 口縁内面に沈線が入るものを一括した。968~971は素口縁のもの、973~976は口端が細くなるもの、977は口端が内割ぎ状のもの、978は内面が折返し風になるもの、979~981は口端が外割ぎ状のもの、607・982~984は口端が角頭をなすものである。

6 c種 (608・609・985~990) 本種の胴部破片を一括した。985~987は原体が粗い縄文を使用し、608・609・988~990は細かい縄文を使用している。

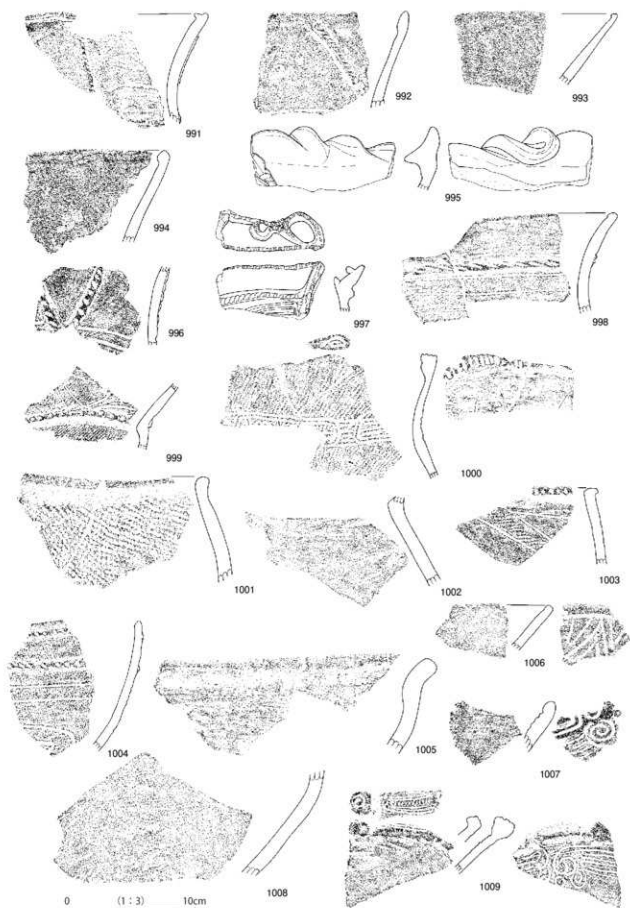
深鉢B (991~1000) 上半がやや強く外反し、くびれて膨らむ胴になる器形を呈するものである。頸部より上半は無文である。

1種 (991~995) 器形は堀之内1式とほぼ同じで、口縁内側に沈線が入る。995は口唇上に粘土紐を「8」字状に貼り付けた小突起である。

2種 (996~1000) 器形は1種に近似するが、口縁部の幅が短いものである。997は口縁内側に刺突をもつ隆線を横「8」字状に貼り付けるもの、1000は頸部を隆線ではなく3本の沈線が巡るものである。

その他の器形 (610・611・1001~1050)

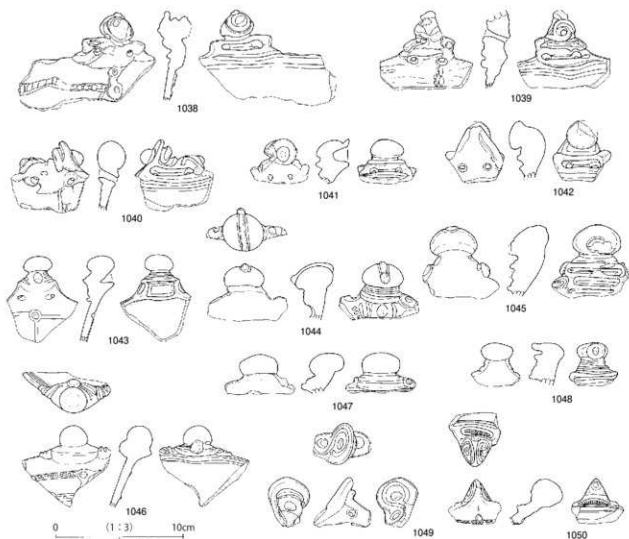
610・1001~1003は鉢で、底部から大きく器壁が広がり口縁部へすはまる器形を呈する。口縁部は立



第133图 遺構外出土土器 第V群 (20)



第134图 遺構外出土土器 V群 (21)



第135図 遺構外出土土器 第V群裝飾突起

上りがほとんどないかきわめて低い。1004は底部から緩やかに立ち上がる器形を呈する浅鉢である。1005・1008も浅鉢であるが、器壁は厚くかなり大形になると想定されるものである。611・1006・1007・1009～1018は底部から直線的に大きく開く器形を呈する浅鉢である。1006・1007・1009は器壁がやや厚く文様も整っていないのに対し、1010～1018は器壁が薄く焼成も良好となり、文様も精緻である。1019～1037は注口土器である。部位は、口縁部が1019・1020、胴部が1021～1027、把手が1028～1031、注口部が1032～1037である。1038～1050は浅鉢の裝飾突起である。

**底部**（1051～1081） 堀之内式から加曾利B式の底部を一括した。

1051・1053～1062は胴部立ち上がりが外傾するものである。1051は特に強く外反する。1063・1064は胴部立ち上がりがわずかにすばまって外傾するもの、1065～1069は垂直に立ち上がってから外傾するもの、1052・1070～1076は一旦内傾してから広がるものである。1077～1080は同じく一旦内傾してから広がるも



のであるが、底部縁が突出するものである。

#### 第Ⅵ群土器（第137図1082～第138図1112）

加曽利B式土器を本群とする。遺構の継続期間としてはここまで認められるが、遺物量は急速に減少しており、また、明確に加曽利B式以降に相当する遺物も見当たらず、集落の終焉を物語る。

1種（1082～1095）精製深鉢を本種とした。1082～1087・1090～1095は器壁がわずかに開くだけのコップ型を呈する小形の深鉢である。いずれも内・外面に水平方向の多段沈線を配するのを特徴とする。外面の沈線は、水平沈線のみのもものほか、斜行沈線（1086）、磨消縄文（1090・1091）、クランク状の連結沈線（1083）などがある。内面の沈線は間に円形刺突を充填するもの（1082）や、斜行沈線を充填するものなどがある（1084・1090）。1088・1089はやや間隔の広がった水平沈線間を縄文で充填するもので、「ハ」の字状区画がつけられる。これらの遺物の中では後出的である。

2種（1096～1107）鉢もしくは浅鉢を本種とした。1096～1099は球形の胴部形状を呈する鉢である。口唇が肥厚し外割ぎ状を呈する。外面には多段の水平沈線が巡らされるが、内面は施文されない。1100～1107は浅鉢で、底部から直線的に大きく開く形状を呈する。内面に多段の沈線を巡らせるのに対し、外面は無文のものが多い。

3種（1108）注口土器を本種とした。

4種（1109～1112）粗製深鉢を本種とした。1109は口縁部の紐線文が太く指頭押圧の幅も広い。加曽利B式以降に相当するものであろう。

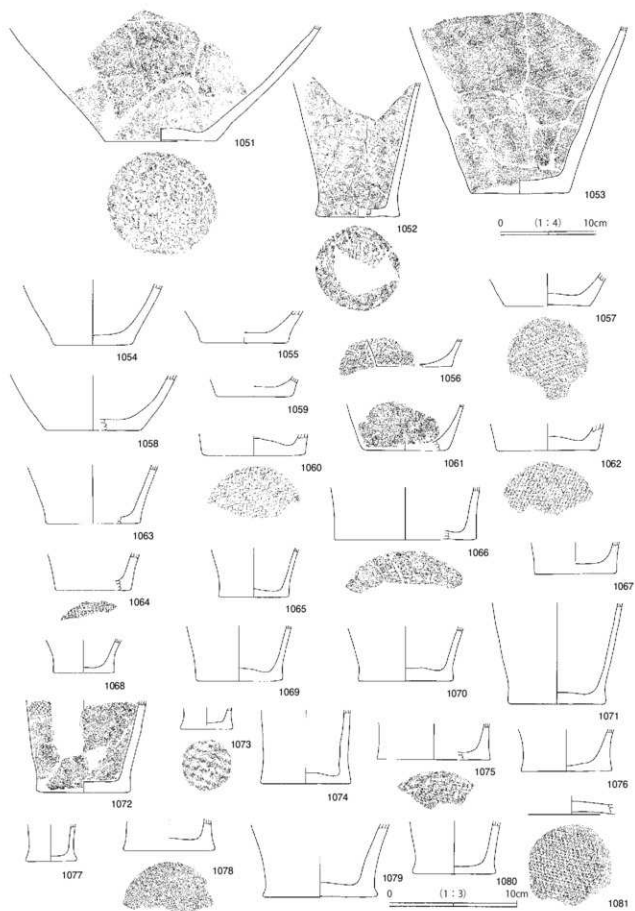
#### （2）縄文時代土製品・石製品（第139図1～14、図版37）

土製品のうち時期が分かるものはほとんどが堀之内1式から2式に属するものである。時期が不明なものも、この時期の所産である可能性が高い。

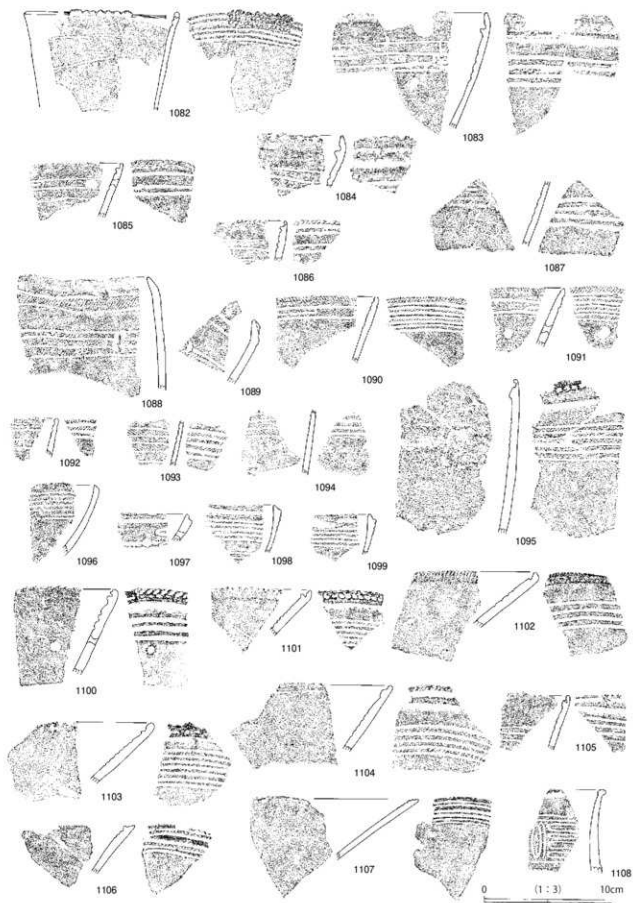
1は土偶の頭部である。顔面部は板状でハート形を呈する。眉と鼻がつながっており、両者をなぞるように沈線が顔面の輪郭を形作る。目の表現はなく、口は穿孔で表現される。額の部分も平坦面で表現され、その上部に堀之内2式の浅鉢で特徴的な円形の突起が付けられる。突起の背面から頸にかけて橋状の把手が付けられる。形状を見る限り当該期に特徴的なハート形土偶を思わせるが、背面が中空であることから筒形土偶の頭部である可能性が高い。焼成は良好である。2は筒形土偶の下半部である。底部より約3cm上に水平沈線を巡らせ、上側は縄文を施文する。下側は2列一組の刺突列を縦に少なくとも4単位配する。焼成はやや甘く器面は磨滅している。3は土製円盤である。4は蓋形土製品として復元したが、端部に沿って沈線が巡ることから、浅鉢形のミニチュア土器の可能性もある。5は深鉢形のミニチュア土器である。6は土器片錘である。7・8は土錘である。紐状の粘土に溝が刻まれたもので、縄文時代の錘としては類例は多くない。9～12は土器片円盤である。12は波状口縁の土器の波頂部を利用したもので、上端は原形をとどめるが左右は強く研磨されている。13は蛇紋岩製の垂飾である。本来は円環であったものを断面菱形になるよう研磨し、穿孔している。14も同じく蛇紋岩製の円盤状石製品である。全面研磨加工が施されており、特に端部はほぼ直角になるよう丁寧に整形されている。

#### （3）縄文時代石器（第140図1～第146図127、図版38～41）

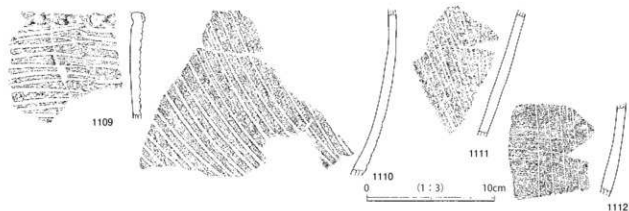
縄文時代の石器は、石鏃・石鏃未製品、石錐、削器、二次加工のある剥片、両極石核、石核、磨製石斧、



第136图 遺構外出土土器 第V群底部



第137图 遺構外出土土器 第Ⅵ群 (1)



第138図 遺構外出土土器 第Ⅵ群(2)

打製石斧、礫器、叩石、凹石、磨石、石皿など千葉県内の縄文時代遺跡にみられる一般的な器種が出土している。遺構外から出土した石器の時期を特定することは難しいが、石鎌や叩石や打製石斧などの一部を除けば、土器の主体となっている堀之内式土器の時期に属するものであろう。打製石斧のうち、礫石斧あるいは礫斧と呼ばれている石斧は、早期後半の条痕文土器の時期に特徴的に認められるものである。

石鎌(第140図1~37)基部の挟りが大きいもの、基部の挟りが僅かなもの、基部が直線を呈するもの、茎の作出しがなく尖頭器様を呈するもの、製作途中の欠損ないしは未製品のものなどに分けられる。基部の挟りが僅かなものが主体である。28・32・35~37は未製品であろう。

石錐(第140図38)不定形を呈し、片面のみ縁の剥離調整が行われている。

削器(第140図39~第141図41)39は下端に使用痕と思われる磨減が認められる。40は一部に二次加工が認められる。41は円礫を剥離し粗い調整加工を施している。

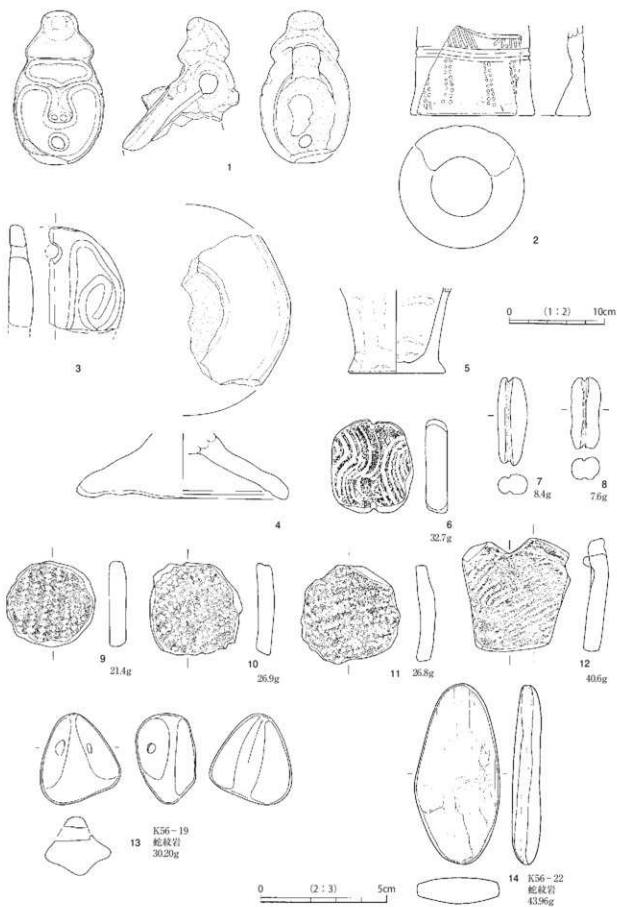
不定形石器(第141図42)分銅の形を呈し厚みがある。縁の調整が丁寧に行われ、両側縁に挟りが施されている。

両極石核(第141図43・44)楔形石器ともいえるが、石鎌製作のために両極打法により素材製作を行ったものかもしれない。

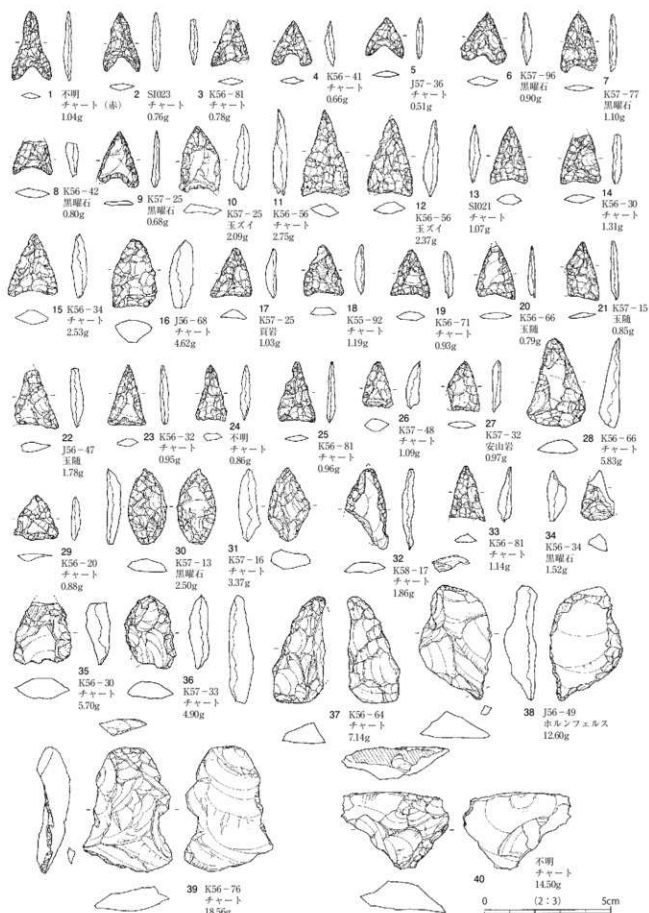
二次加工のある剥片(第141図45・46)剥片に細かな調整が施されている。石鎌の未製品の可能性もある。石核(第141図47・48)47は節理面が認められる。48も僅かに自然面を残している。打面転換し剥離を行っている。

磨製石斧(第142図49~54)定角式の磨製石斧である。49~51は小型品で加工用の石斧であろう。53・54は刃部が曲線を呈しており伐採斧であろう。いずれも堀之内式期の可能性が高い。

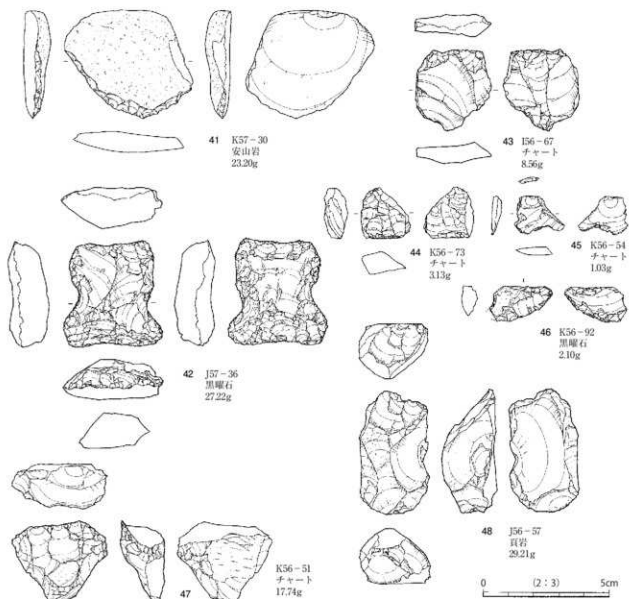
礫石斧(第142図55~第143図75)扁平で短冊形を呈する礫を選び、軽微な加工を施して刃部を作り出す礫石斧が出土している。早期後半の田戸上層式から条痕文期にかけて千葉県内でみられるものである。大半は片面に自然面を残している。刃部のみならず側縁の加工を施すものや基部まで調整が及ぶものもある。刃部には研磨を施すものもあるが、整形のための調整剥離は総じて粗い。55は欠損後研磨により刃部を再生している例であろう。56は刃部の研磨が丁寧に行われている。73~75は、礫石斧とするにはやや疑問が残るが、中期以降にみられる一般的な打製石斧の範疇には入らないものである。73は礫石斧の未製品かも



第139图 遺構外出土土製品・石製品



第140図 遺構外出土石器(1)



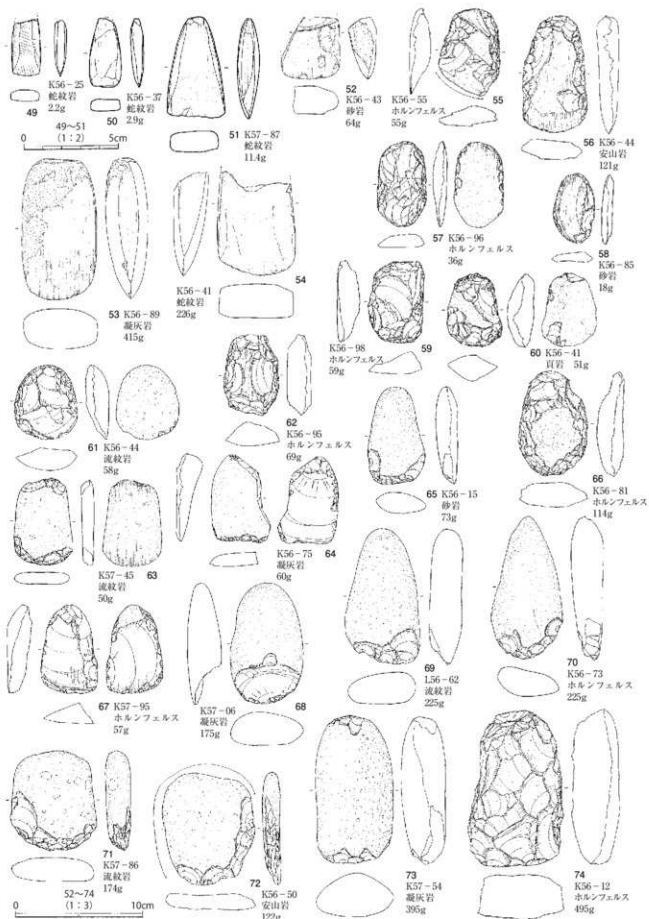
第141図 遺構外出土石器(2)

しれない。

礫器(第143図76)拳大の円礫の一端が複数回の敲打により剥離している。叩石とみることもできるが、軽度の敲打の痕跡がなく強い加撃による剥離と考えられる。

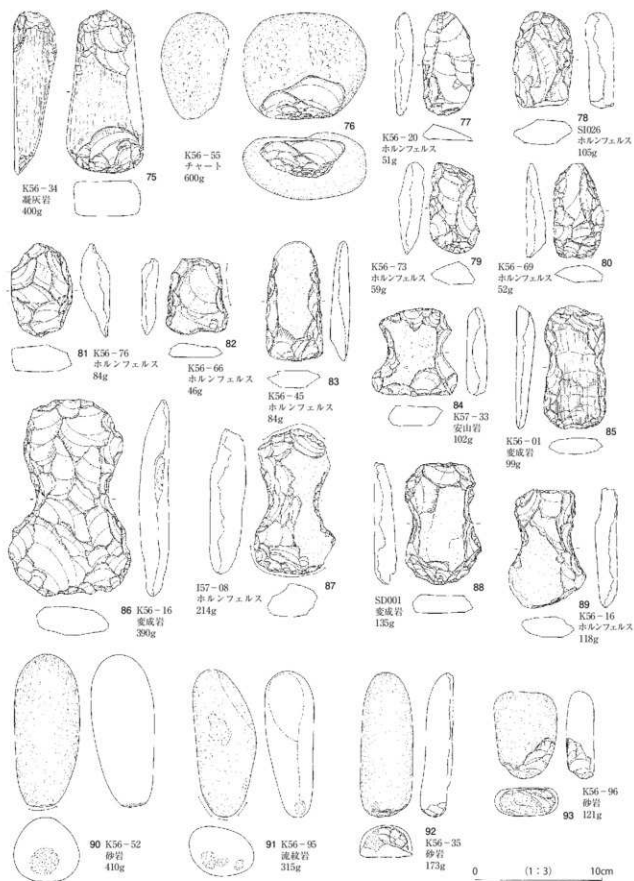
打製石斧(第143図77~89)整形のための剥離が丁寧に行われているものが多く、礫の自然面を残すものがある。おおよそ短冊形と分銅形の2種類に分けられる。77~82は、欠損のものもあるが、小形のもの、83~85・87~89は一般的な大きさである。86は15cmを上回るもので、千葉県内の出土例の中では大形である。これらの打製石斧の時期は、堀之内式期を主体と推測される。

叩石(第143図90~第144図104・106・107)棒状の礫の両端ないしは片方に敲打面をもつものと小振りの円礫の側縁に敲打面をもつものの2種類に分けられる。90~95は前者である。敲打面が限られており、貝輪製作遺跡などから特徴的に出土するタイプである。限定した範囲の敲打に使用するものである。96~

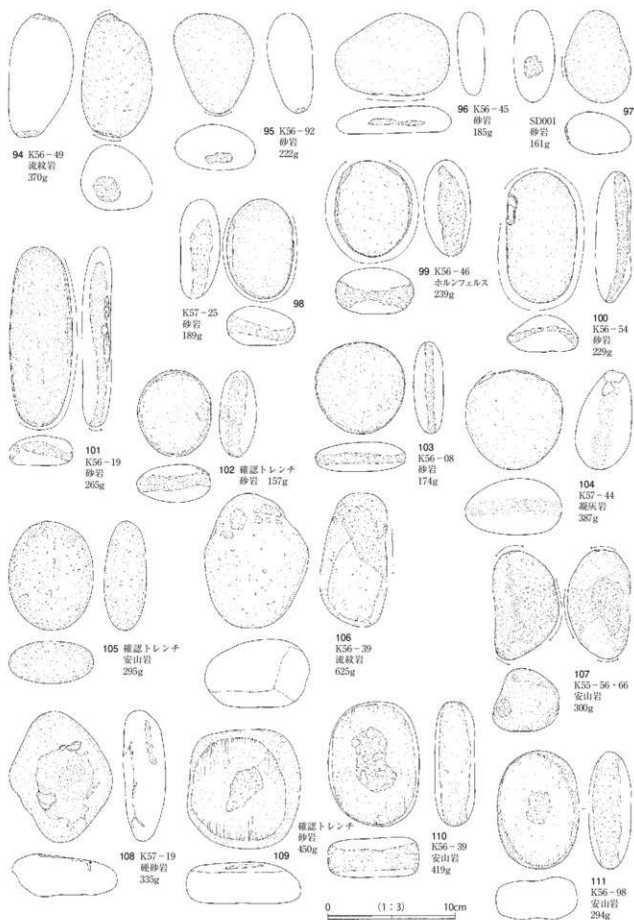


第142図 遺構外出土石器 (3)

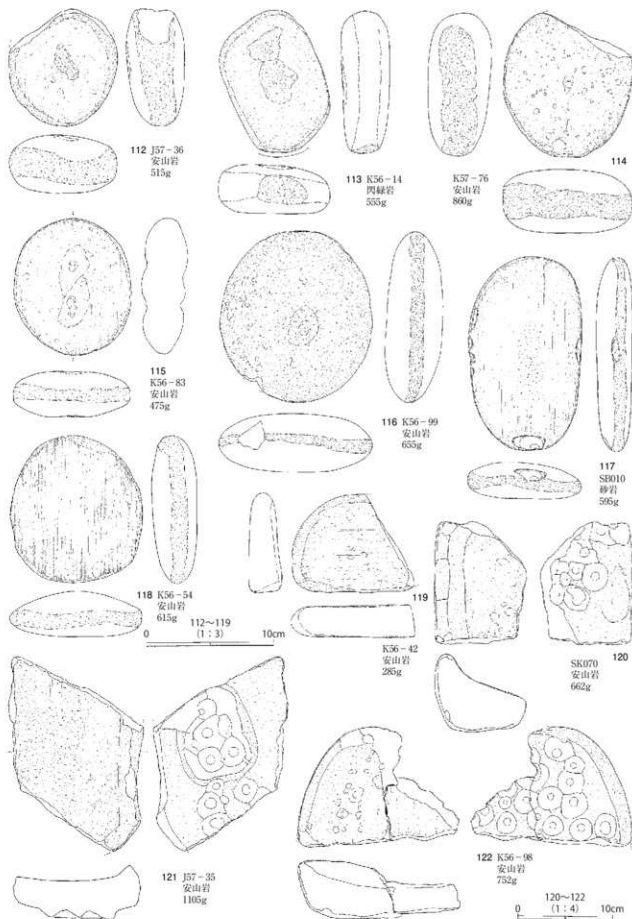




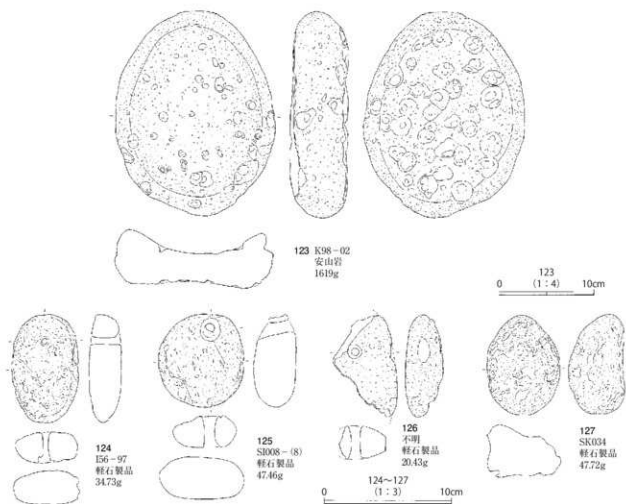
第143図 遺構外出土石器(4)



第144図 遺構外出土石器 (5)



第145圖 遺構外出土石器(6)



第146図 遺構外出土石器（7）

104・106・107は後者で、敲打範囲はそれぞれ異なるがおしなべて前者より広く、側縁全体を使用している個体もある。

凹石（第144図105・108～第145図116）手に持つのにちょうどよい大きさの楕円形の礫が選択されている。表裏中央に僅かな凹みが認められるものが多く、しっかりした深い凹みのものは少ない。表裏に研磨痕、側縁に敲打痕を伴うものがあり、凹み以外の属性を併せ持っている。

磨石（第145図117・118）表裏が研磨されている。凹みとは言えないが若干の敲打痕を伴うものもある。

石皿（第145図119～第146図123）いずれの個体も底面に多数の凹みを伴っており、中期以降の石皿によく見られるものであり、堀之内式のもの主であろう。119は平らな研磨面があり、小形の石皿である。120は長楕円形を呈し、一部に掻出し口をもつものであろう。121は周囲を突帯状に作り出し、掻出し部近くの突帯がくの字状に屈曲している。底面に脚をもつ。122・123は楕円形を呈する小形の石皿である。

軽石製品（第146図124～127）124～126は、扁平で円形ないし楕円形に加工して側縁に近い位置に穿孔を施したものである。穿孔は、回転穿孔によるものと考えられ表裏からの穿孔とみられる。127は不定形だが周囲が研磨されている。



### 第3節 奈良・平安時代

#### 1 竪穴住居跡

検出された遺構は第147図の通りである。個々の遺構を記述する前に計測値そのほかについて若干の説明を行う。規模については主軸長、副軸長で表した。これは壁上端間の数値であるが、カマドの突出部を含めない。主軸方向は、原則としてカマドに対面する辺から直交してカマド中心に向かう方向とし、北からの方位を記述した。なお隅カマドをもつ竪穴住居跡に関しては個々の状況に即して判断する。副軸は主軸に対して直交する方向である。壁上端での面積はカマドの突出部を含めている。また床面の面積は壁の直下内を計測した。竪穴内での位置関係については、東西南北のほか、左右及び前・奥（後）を使用した。後者についてはカマドの対壁、通常は出入口側からカマドに向かってみた状態での方向である。竪穴住居跡を構築するために地山を掘削した後、床面を整えるために充填された土を貼床、掘削された地山の底面を掘り方と記述する。

出土土器に関する観察所見は第15表に掲載した。

#### SI018（第148図、図版12・42・47～49）

位置 調査区南東のL57～72グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は3.72m、主軸方位はN-43°-Eである。副軸長は南東辺側が調査区外にあるため計測できない。平面形は方形をなすが、正方形に近いが、かなりの長方形になるか不明である。確認面からの深さは32cm～49cmである。面積は不明であるが、方形に近い形態であれば、確認面で13.5㎡、床面で11.5㎡程度と推測できる。

床面・壁溝 床面は概ね平坦で、中央がやや広く硬化している。壁溝は調査区内では途切れずに巡っており、全周すると思われる。北隅部の壁溝が広がっているが、隅部の床面を形成するために充填された黒褐色土系の土層（貼床）を掘りすぎたためと思われる。

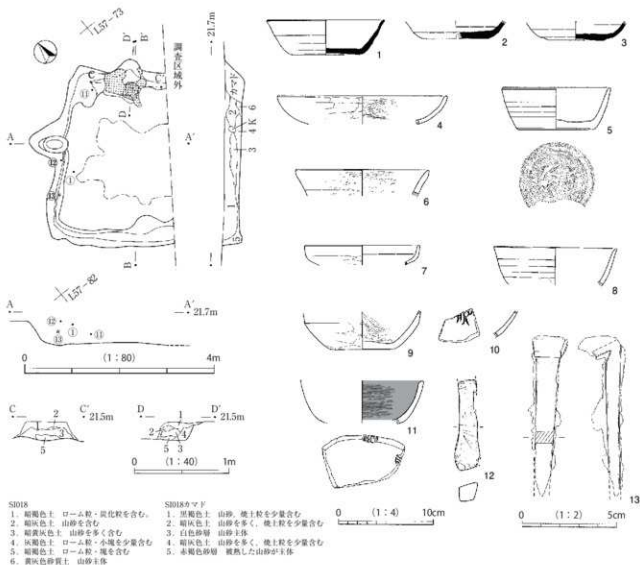
柱穴 調査区内では検出されなかったが、南西壁中央の壁溝が床面中央側に向かってやや広がっており、この位置に出入口ピットがあるのかもしれない。また古い出入口ピットが南東辺際中央に存在する可能性も考えられる。

カマド 北東辺北寄りで1基（カマドA）、北西辺中央やや北寄りでもう1基のカマド（カマドB）が検出された。Aは構築材の山砂が遺存しているのに対して、Bは構築材が全く遺存していない。このためBが旧カマド、Aが新カマドと理解できる。カマドの造り替えに際してBからAへ設置壁が付け替えられたと考えられる。Bは方形プランからかなり突出している。Aも突出するが、Bほどではない。Aの構築材は崩落しているが、量的には比較的良好に遺存しているといえる。火床部は被熱による赤化が著しいが、底面はあまり窪んでいない。

堆積土 暗褐色土主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物 図示した遺物は13点である。1～3は須恵器杯、4～10は土師器杯、12は砥石、13は鉄釘である。土器は遺存が概して少なく、最も遺存がよい1・5で全体の30%程度である。ほかは1・5を下回るが、9は底部の遺存がやや良い。

4・6・7・9・11は非ロクロの土師器杯、5・8・10はロクロ土師器杯である。4は扁平で盤状の杯である。7も浅い小形の土器である。9・11は深い器形である。11は内面に炭素吸着による黒色処理・ミガキが施され、やや深い器形である。器面は全体に磨耗し、口縁端部内面の一部には研ぎ痕と思われる数



第148図 SI018住居跡、出土遺物

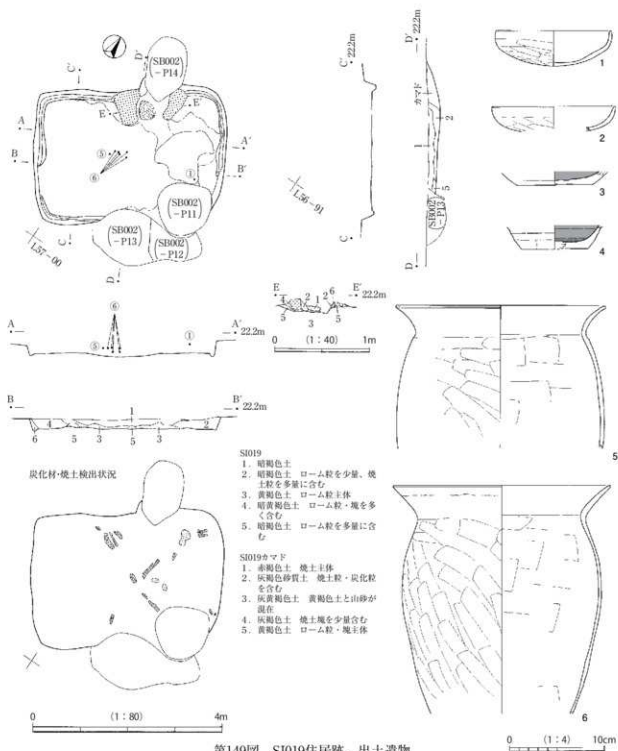
条の窪みがある。しかし形状が複雑であるため、ネズミなど齧歯類の小動物がかじった跡とも思われる。5は箱形の器形である。ロクロ目は弱く、底部外面は全面に回転ヘラケズリが施されている。中央からやや寄った位置にヘラケズリを切る1条の緩曲線がある。ヘラ書きよりも調整痕の可能性の方が高いと思われる。10は小破片で体部内面に墨書文字がみられるが、判読できない。

1～3はいずれも底部外面に回転糸切り痕がみられる。2は底部全面に糸切り痕があるが、1・3は周縁に回転ヘラケズリが施され、その部分の糸切り痕が消えている。いずれも胎土に白色針状物がみられ、南比企窯産と思われる。

12は凝灰岩製の砥石である。図示した上部の小口面は、より長かったものが薄くなった時点で破損したか折れたものであろう。全面的に使用されているが、四方の長側面は使い込まれて滑らかな状態の部分が多い。長さは9.55cm、幅は2.65cm、厚さは2.0cm、重さは64.89gである。

13は頭部を逆「V」字形に片方に折り曲げて、頭頂部を方形に整えた角釘である。釘先を欠損する。頭部や中央で鏝影れが著しい。幅・厚みのあるやや大型の釘である。

出土位置のわかるものの状況を見ると、11は北隅の下層から出土し、12・13は北西壁際の中・上層から出土した。



### SI019 (第149図、図版12・42)

位置 調査区東のL56-90グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は2.86m、副軸長は4.1mである。平面形は横長の長方形をなす。確認面からの深さは17cm~32cmである。主軸方位はN-32°-Wである。確認面の面積は11.33㎡、床面積は9.92㎡である。

床面・壁溝 床面は概ね平坦で、全体的に硬化している。壁溝は重複造構による欠損部分を除くと南西壁の一部と南東壁の一部で途切れるが、そのほかは巡っており、全周に近い状況である。



柱穴 主柱穴は検出されなかった。出入口ピットは重複遺構の影響で不明と思われる。

カマド 北西辺北寄りに位置する。煙道部側でSB002のP14と重複し、切られている。両袖の遺存はあまり良好でなく、特に右袖は遺存が悪い。構築材の山砂が右袖前方、北東壁側中央に多く流出している。火床部は左袖寄りに図示したが、もう少し右袖側にも広がるであろう。SB002のP14による影響を受けているとみられる。両袖間には焼土が比較的厚く堆積する。煙道の突出部分はSB002のP14の影響で不明瞭であるが、袖部がほぼ方形プラン内に位置するため、突出は少ないと思われる。

堆積土 床面上に焼土・炭化材がみられる。炭化材は広く分布しており、廃材などの焼却または火災によるものと思われる。堆積土は暗褐色土主体で下層は焼土粒を多く含むが、上層は焼土・炭化粒の包含が少ない。

重複遺構 カマド側のSB002のP14のほか、南東側でSB002のP11・P12・P13と重複し、切られている。また南西壁はSB002のP16と接しているが、確認面より上方では切られていると思われる。

出土遺物 図示した遺物は6点である。1～4は土師器杯、5・6は土師器甕である。

1・2は非ロクロの杯、3・4はロクロ土師器杯である。1は1/2程度が遺存するが、ほかの土師器杯は小破片である。3は回転糸切り痕が底部外面全体にみられるが、周縁はナデまたは弱いヘラケズリにより糸切り痕が薄れている。3・4の内面は黒色処理が施されている。4は外面や断面も黒色の色調であり、黒色土器的であるが、外面は光沢をもつ部分が多く、油煙が付着していると思われる。もともと黒色みのある土器が灯明器として使用されたのであろう。それは破片としての使用状態かもしれない。5・6は武蔵型の甕である。5は口縁部から胴部上位にかけての破片である。6の口縁部はほぼ全周するため、明らかに異なる個体である。6よりも口縁部がやや短い。6は武蔵型の甕としては遺存がよく、口縁部はほぼ全周する。接合しない小破片を加えると、全体で3/4以上が遺存すると思われる。「く」の字形の口縁部が長く伸び、外面には接合痕がみられる。

そのほか図示していないが、灰黒陶器碗の口縁・体部片がある。内面の施釉は漬け掛けて、底部内面には施釉されない。

3・4は1・2・5・6よりも新しい遺物である。1・2・5・6が本遺構に近い時期の遺物であろう。1は北東（右）壁側中層から出土した。5・6は堅穴中央の中・下層から出土した。

#### SI020（第150図、図版42）

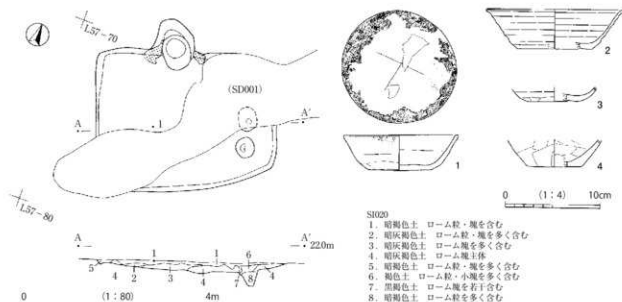
位置 調査区南東のL57-70グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は3.02m、副軸長は3.82mである。平面形は横長の長方形をなす。確認面からの深さは6cm～16cmであり、遺存は良好でない。主軸方位はN-21°-Wである。確認面の面積はおおよそ11.2㎡、床面積は9.7㎡である。

床面・壁溝 SD001に切られて、床面の遺存がやや少ない。遺存部分は概ね平坦であるが、南側がやや低い。これは遺構の遺存が南側で少ない影響と思われる。硬化面はみられない。SD001の影響と床面まで浅いことによるものと思われる。壁溝は検出されなかった。

柱穴 東壁側でピットが2基検出された。隅部に近いものは径43cm×39cm、深さ50cm、その北側のものは径52cm×39cm、深さ50cmである。南側のものは位置的には主柱穴に相当するが、ほかで検出されていないため、その可能性は低い。2基あわせてSD001に関連する遺構と思われる。

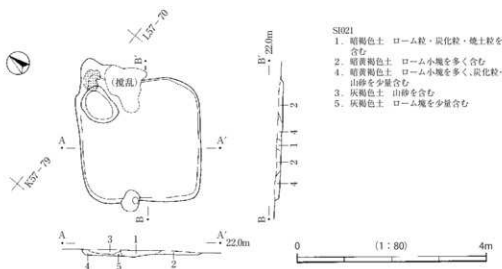
カマド 北辺中央に位置する。遺存が悪く、構築材は両袖の下部がわずかに残るのみである。しかしカマ



SI020

1. 暗褐色土 ローム粒・塊を含む
2. 暗灰褐色土 ローム粒・塊を多く含む
3. 暗褐色土 ローム塊を多く含む
4. 暗灰褐色土 ローム土主体
5. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む
6. 褐色土 ローム粒・小塊を多く含む
7. 黒褐色土 ローム塊を若干含む
8. 暗褐色土 ローム粒を多く含む

第150図 SI020住居跡、出土遺物



SI021

1. 暗褐色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒を含む
2. 暗黄褐色土 ローム小塊を多く含む
4. 暗黄褐色土 ローム小塊を多く、炭化粒・山砂を少量含む
3. 灰褐色土 山砂を含む
5. 灰褐色土 ローム塊を少量含む

第151図 SI021住居跡

下内には焼土が厚く堆積している。

堆積土 暗褐色土主体であるが、ローム粒・ロームブロックを含む。自然堆積か人為的堆積か不明である。

重複遺構 北東から南西に走る溝状遺構SD001に切られている。

出土遺物 図示した遺物は4点である。1～3はロクロ土師器坏、4は土師器甕である。

1は底部の一部を欠損するのみで、95%以上の遺存である。ただしやや細かく割れており、接合してほぼ完形の土器である。接合線は「V」字状・「U」字状を示す部分があり、意図的に打ち割ったと思われるが、断定しがたい。口縁部内面を全周する状態で油煙が付着しており、灯明器として使用された土器である。油煙は口縁部外面まで及ぶ部分が多い。油煙とは別に体部内面に墨書文字と思われるものがあるが、判読できない。また底部内面には「× (+)」の線刻がある。2は口縁部から底部外面周縁まで復元図化したのが、遺存は少ない。3は底部から体部下位までの破片である。底部外面は回転系切り離し後、周縁に回転ヘラケズリが施されている。4は小形の甕で、胴部下位から底部にかけての破片である。内外面

の各所に白色物質がみられ、山砂が付着していると思われる。

1は堅穴中央やや左寄りから出土した。確認面近くからの出土であるが、堅穴の遺存が悪いため下層といえるであろう。正位・倒位などの状況は不明である。

#### SI021 (第151図)

位置 調査区南東のK57-79グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は2.54m、副軸長も2.54mである。平面形はほぼ方形である。確認面からの深さは2cm~18cmである。南東壁側が非常に浅い。主軸方位はN-50°-Eである。確認面の面積は6.68㎡、床面積は5.73㎡である。

床面・壁溝 床面は若干の凹凸があるが、特定方向への傾斜はない。硬化面はみられない。壁溝は検出されなかった。

柱穴 主柱穴は検出されなかった。南西壁にかかって径45cm×38cm、深さ37cm~52cmのピットが検出された。カマドに対向する位置であり、出入口ピットの可能性が考えられるが、一部が堅穴の方形プランから突出するため断定しがたい。

カマド 北西辺北寄りで、北隅部近くに位置する。ほぼ隅カマドともいえる位置である。方形プランからの突出は大きい。遺存は極めて悪く、特に右側が木根による攪乱で大きく破壊されている。構築材の山砂は煙道部寄りに小さく分布する。またカマド内の堆積土に顕著な焼土はみられず、焼土粒が散布する程度である。カマド左側前方の床面が大きく10cm前後窪んでいる。火床部底面の窪みを含むものと思われる。

堆積土 ローム粒・ロームブロックをやや多く含む暗褐色土・暗黄褐色土主体の土層である。遺存が少ないため自然堆積か人為的堆積か判断しがたい。

出土遺物 少量の土器片が出土したが、いずれも小破片であり、図示した遺物はない。そのなかのロクロ土師器坯底部片は回転糸切り離し後、無調整である。また坯の体部片は高台付坯(椀)と思われるが、やや断定しがたい。

#### SI022 (第152図、図版12・42)

位置 調査区南東のL57-54グリッド付近に位置する。

形状・規模 副軸長は3.75mである。主軸長は南東辺側が調査区外にあるため計測できない。平面形は方形であろう。確認面からの深さは22cm~33cmである。面積は不明であるが、方形に近い形態であれば、確認面で14㎡、床面で12㎡弱程度と推測できる。主軸方位はN-60°-Wである。

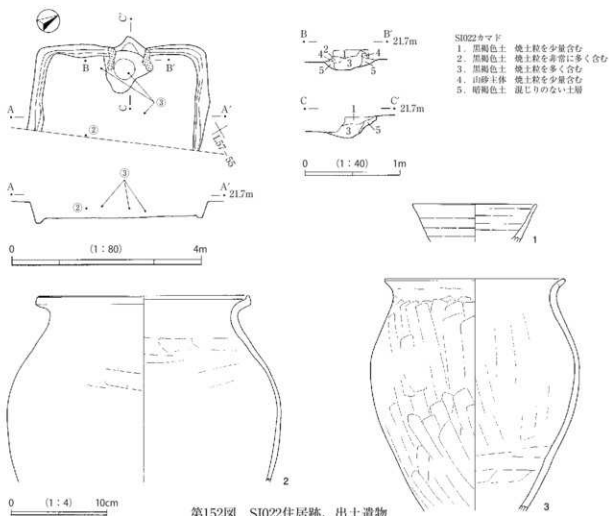
床面・壁溝 床面は平坦であるが、特に硬化した部分はみられない。壁溝は調査区内では巡っており、全周すると思われる。

柱穴 主柱穴は調査区内では検出されなかったが、調査区外の床面にも存在しないと思われる。出入口ピットは調査区外の南東壁際中央に存在する可能性が考えられる。

カマド 北西辺中央に位置する。遺存は悪く、袖部の名残を残す程度である。煙道部は方形プランから若干突出する。カマド内堆積土は焼土粒を含む土層で、一部に焼土を多量に含む部分がある。火床部底面には赤化した範囲がみられない。底面は床面よりもかなり窪んでいるが、灰のかき出しやカマドの設置・造り替えによるものであろう。

出土遺物 図示した遺物は3点である。1はロクロ土師器坯、2・3は土師器甕である。

1は口縁部から体部下位までの小破片である。箱形の器形をなすと思われる。2は常陸型の甕、3は在



第152図 SI022住居跡、出土遺物

地の土師器甕である。2は口縁部が全周する。胴部の遺存は現状ではやや少ないが、出土位置から調査区外に含まれていると考えられる。調査区外を考慮するとかなり遺存が良いかもしれない。胴部中位が張って丸をもつ器形である。胎土は白雲母、白色粒・白色の小石を多く含む。3は全体の40%程度の遺存である。口縁部の1/4弱から胴部下位まで連続的に遺存する。胴部中位の遺存はやや良い。口縁部が短く、胴部中位がやや張った器形である。器壁は厚い。

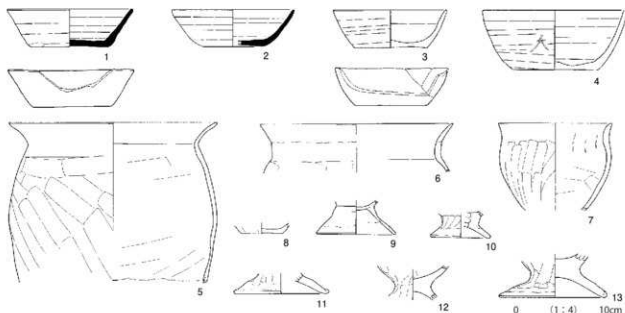
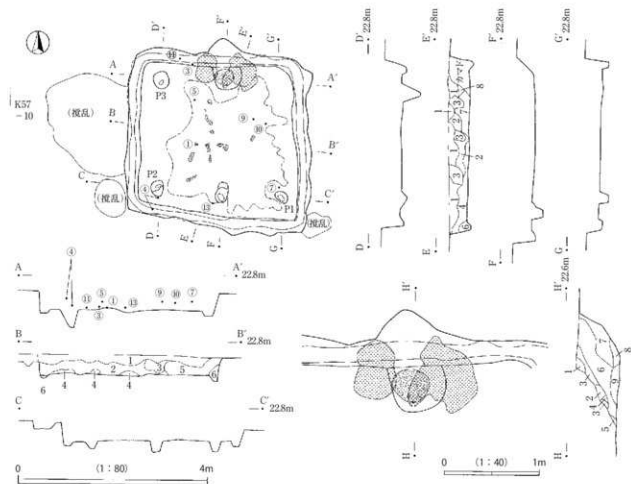
2は中央やや左寄りの中層から出土した。口縁部は割れてはいるがばらばらにならない状態での出土で、倒位の状態と思われる。3はカマド内外周辺及びやや離れた前方の中下層から出土した。

#### SI023 (第153図、図版12・42)

位置 調査区中央やや南のK57-11グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は3.74m、副軸長は3.8mである。平面形は方形をなす。確認面からの深さは30cm～42cmである。主軸方位はN-3°-Eである。確認面の面積は13.94㎡、床面積は12.88㎡、主柱穴間の面積は推定5.7㎡である。

床面・壁溝 床面は平坦である。壁際を除いて広く硬化している。また硬化度も高い。壁溝は全周する。柱穴 隅部で主柱穴が検出された。検出できたのは北東隅部を除く3か所であるが、完掘写真を見ると北



SI023

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
2. 暗褐色土 ローム粒・小塊を多く、炭化粒・山砂を若干含む
3. 暗黒褐色土
4. 暗褐色土 ローム粒・塊、焼土粒、炭化粒を含む
5. 褐色土 ローム粒・小塊を多く含む
6. 暗黄褐色土
7. 褐色土 炭化粒・焼土粒・山砂を含む
8. 暗褐色土 山砂・焼土粒をやや多く含む

SI023キマ下

1. 暗褐色土 山砂を少量含む
2. 灰白色土 山砂主体、焼土粒を含む
3. 暗褐色土 焼土粒を少量含む
4. 赤褐色土 山砂を少量含む
5. 暗褐色土 焼土粒を含む 山砂を少量含む
6. 暗褐色土 山砂・焼土粒を含む
7. 暗褐色土 山砂・焼土粒をやや多く含む
8. 暗褐色土 山砂・焼土粒を含む
9. 赤褐色土 焼土主体、山砂を含む

第153図 SI023住居跡、出土遺物

東隅部にも浅い窪みがあるので、その位置に主柱穴が存在したと思われる。P2は床面から12cmの深さで浅いが、北東隅部の主柱穴はそれよりも浅いのであろう。P1は深さが19cm、P3は深さが39cmである。

出入口ピットはカマドに対向する南壁際中央から検出された。床面からの深さは24cmである。

**カマド** 北辺中央に位置する。両袖が遺存するが、全体にやや崩れている。煙道部は方形プランからあまり大きく突出していない。火床部底面には赤化した範囲がみられる。床面からの窪みは浅い。上部に焼土主体の土層がやや厚く堆積する。カマド部分にも壁溝が走り、カマドはその上部に構築されている。

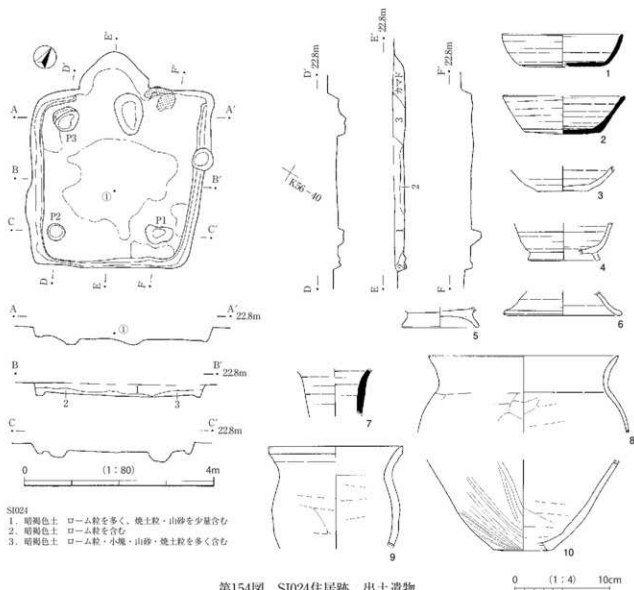
**堆積土** 炭化材が壑穴中央を主体とした床面上・下層に分布する。量的には多量でないため、廃材などの焼却が考えられる。下層は焼土粒・炭化物を含む暗褐色土・褐色土、上層は若干のローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする土層である。

**重複遺構** 周囲に攪乱があり、それらによって壊されている。

**出土遺物** 図示した遺物は13点である。1・2は須恵器杯、3・4はロクロ土師器杯である。5～13は土師器甕で、そのうち7は小型の甕、9～13は台付甕である。

1は新治窯産の須恵器杯である。口縁・体部の一部を弧状に欠損するほかは欠損がない。85%程度の遺存である。欠損部は意図的に打ち欠きされた可能性がある。胎土は多量の白雲母・白色粒を含む。色調は灰色である。2は口縁部から底部にかけての破片である。底部外面に回転糸切り痕がみられる。色調は淡灰色である。胎土は白色粒を含む。白色針状物の含有は不明瞭であるが、南比企窯産と思われる。3は全体の70%が遺存する。口縁・体部の1/2弱を欠損するが、底部には欠損がない。底形が大きく、やや箱形の器形である。底部全面と体部下位に回転ヘラケズリが施されている。底部外面の切り離し痕は消えてみえない。焼成があまり、器面が全体的に磨耗している。口縁・体部の欠損部は「口」的な形態を示し、破断面が磨られているように思われる。器面磨耗のためやや断定しがたいが、カマド左脇からの出土を考慮すると、意図的な打ち欠き・加工の可能性があると思われる。4は割れているが接合してほぼ完形の土器である。大形で深く、箱形的な器形の土器である。調整手法は3と同様である。「大」の線刻が体部外面に正位でみられる。故意に割られた可能性があると思われるが、形状からは断定しがたい。5・6は武蔵型の甕である。5の口縁部は「く」の字形に図示しているが、図化した部分ではない口縁部下部で直立気味のところがある。6ほどではないが、「く」の字の屈曲は弱まりつつ様相がうかがえる。6の口縁部は「コ」の字形口縁に近い形態を呈する。上部の屈曲はやや弱く、図示した部分は「コ」の字形が比較的に明瞭であるが、ほかでなだらかな器形のところがある。「く」の字形から「コ」の字形に移行しつつある様相といえる。口縁部の接合痕は外面でかなり明瞭である。外面は煤・山砂が付着している。7は口径と胴部最大径がほぼ同じで、鉢的な器形である。8は底部片である。質感からは6に近いが、器面は被熱状況の違いにより変わると思われ、6の底部であるかやや断定しがたい。9・13は台部がほぼ遺存するが、10～12は一部の遺存である。11は台部の底径が9・10と比較してやや大きい。12はやや不明瞭であるが、上部の甕はやや小形と思われる。

比較的遺存のよい個体の出土状況を見ると、1は中央部の床面から正位で出土した。3はカマド左袖外側の壁溝上から出土した。正位・倒位などの状況は不明である。4の主要部分は主柱穴P2脇の南西隅下層から正位で出土した。口縁・体部の一部破片が壁際中層に散っている。5はカマド左袖前方の中層からまとめて出土した。9は中央東壁寄りの中層から出土した。正位・倒位などの状況は不明である。13は出入口ピット脇で南壁際中央下層から倒位で出土した。



以上の遺物のうち、1・3・4・13は出土状況や遺物の様相からカマド・堅穴住居跡廃棄の祭祀に伴う可能性が考えられる。廃材などの焼却行為にさいして堅穴の各所に意図的に置かれたと思われる。13は上部の堯が除去され、台部のみにされた可能性が考えられる。

#### SI024 (第154図、図版12・42)

位置 調査区中央やや北寄りのJ56-49グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は3.8m、副軸長は3.6mである。平面形は方形をなす。北東隅がやや張り出している。確認面からの深さは10cm～26cmである。主軸方位はN-30°-Wである。確認面の面積は14.35㎡、床面積は12.18㎡、主柱穴間面積は推定5㎡である。

床面・壁溝 床面に大きな傾斜はないが、北東隅側がやや低い。本遺構は西壁際から南壁際西寄りを除いて掘り方がやや深く、黒色土を多く含む土で床面が形成されている。特に北東隅側の床面の把握が難しく、やや掘りすぎていることが低い一因と思われる。中央を主体として硬化面がみられる。壁溝は北壁東側を除いて巡るが、検出されなかった部分は掘りすぎによるものと思われ、本来は全周すると考える。

柱穴 北東隅部を除く3か所の隅部で支柱穴が検出された。P1は深さが22cm、P2は深さが12cm、P3は深さが16cmである。北東側は東壁北寄りのところで径45cm、床面からの深さ20cm、確認面からの深さ45cmのビットが検出された。周囲に遺構がなく、本遺構に関わる可能性が考えられるが、位置的に本遺構の支柱穴とは思えない。北東側の床面が黒ずんでいるため、本来存在した支柱穴を検出できなかったと思われる。ほかの柱穴の状況から浅いことが想定され、その点も未検出の要因であろう。

出入口ビットも検出されなかったが、完掘写真を見ると、南壁際中央に存在すると思われる。

カマド 北辺中央に位置する。遺存は極めて悪く、原形をとどめていない。北壁東側で検出された山砂は右袖部などの構築材が流出したものであろう。カマドは方形プランから大きく突出する。しかし遺存が悪いことから、ちょうどカマド部分が攪乱を受けたことも考えられる。カマド前の床面に広く、周囲から10cm程度の深さで窪む部分があるが、カマドに伴うものではなく、攪乱によるものかもしれない。

堆積土 ローム粒を含む暗褐色土が主体である。ロームの包含は上層で多く、下層は上層よりも少ない。

出土遺物 図示した遺物は10点である。1・2は須恵器環、3はロクロ土師器環、4～6はロクロ土師器高台付環、7は須恵器長頸壺、8～10は土師器甕である。

1は南比企窯産の環である。底部外面は全面に回転ヘラケズリが施され、糸切り痕はほぼ消されている。胎土は白色針状物を多く含む。2は新治窯産環である。70%程度の遺存で、口縁から底部まで所々が欠損する。底部外面はヘラ切り痕が顕著である。胎土は白色・淡黄色の砂粒・小石、白雲母を含む。3は体部から底部にかけての破片である。底部外面の調整は回転糸切り離し後無調整である。4～6は高台部周辺の破片である。4は小形の土器で、坏部は箱形と思われる。5は短い高台部が「ハ」の字状に付く。6は高台部が高いいわゆる足高高台の環(椀)と思われる。5も椀形の器形が考えられる。7は頸部の破片である。猿投窯などの東海産と思われる。内外面に灰緑色の釉が付着し、光沢をもつ。内面は上位に顕著である。8・9は口縁部から胴部上位にかけての破片、10は胴部中下位から底部にかけての破片である。8は武蔵型の甕である。口縁部は頸部が直立的であるが、「コ」の字形口縁には至っていない。9は小形の甕である。器壁は厚く、ずんぐりした作りである。胴部外面はヘラケズリが施されているが、胎土は白色粒を多く含む。口縁部形態と合わせて常陸型の小型甕と思われる。10は常陸型の甕である。胴部外面は縦方向の細かいミガキが施されている。胎土は灰白色・淡黄色の砂粒・小石を多量に含む。赤色粒もみられる。

1は竪穴中央の中層から出土した。

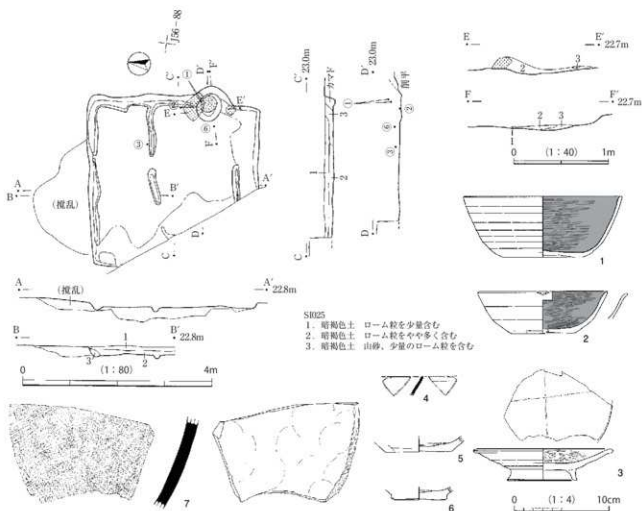
#### SI025 (第155図、図版12・13・43・49)

位置 調査区中央やや西寄りのJ56-87グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は3.6m、副軸長も3.6mである。平面形は方形をなす。確認面からの深さは11cm～18cmであり、上方の遺存が悪い。主軸方位はN-82°-Eである。確認面の面積は推定12.9㎡、床面積は推定11.6㎡である。

床面・壁溝 床面は概ね平坦である。広く硬化しているが、特に床溝間が硬い。壁溝は北壁およびカマド左脇の東壁に巡る。南壁側では検出できなかった。しかし南壁際の深さをみると、壁溝底面の深さと同等であり、本来は巡っていると考えられる。壁際の床面は黒みを帯びた貼床であるため、掘りすぎていると思われる。西壁側は多くが発掘されていないため不明瞭であるが、壁溝は全周する可能性がある。床面内には左右壁に平行する2条の床溝がみられる。1条は床面に左に1/3、右に2/3程度に分割する位置である。奥壁の壁溝から続いて延びており、途中で2か所途切れる部分がある。前壁側の様相が不明である





第155図 SI025住居跡、出土遺物

が、壁まで続く可能性が考えられる。床面からの深さは3cm～8cmである。もう1条は右壁側中央に存在する。奥壁側では検出されなかった。前壁側に延びるが、どこまで続くか不明である。

以上の床溝についてはSI025建てに伴うものとする見方もあるが、主軸長・副軸長が同値であることから、本遺構は当初からほぼ方形の堅穴住居跡と思われる。何らかの必要があって、床面または上部空間の機能を分割したものとする。

柱穴 主柱穴は検出されなかった。出入口ピットは前壁際に存在することが想定される。

カマド 東辺南(右)寄りに位置する。遺存が悪く、特に右軸はわずかな遺存である。方形プランからの突出は小さい。火床部底面には赤化した範囲がみられる。床面からの窪みは浅い。

堆積土 若干のローム粒を含む暗褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

重複遺構 北側で掘乱坑と重複する。調査時の所見では本遺構が切っており、本遺構よりも古い遺構が下部に存在すると考えられたが、検討した結果掘乱坑と判断した。それらの堆積土は複雑で、ローム粒・ロームブロックの混入の多寡により、黄褐色土・暗黄褐色土・暗褐色土・黒色土などに分かれる。それらは本遺構の掘り方堆積土と推測されるが、掘乱坑の覆土である可能性もある。

出土遺物 図示した遺物は7点である。1・2・5・6はロクロ土師器杯、3はロクロ土師器高台付皿、

4は灰釉陶器碗、7は須恵器甕片転用砥石である。

1は全体で40%、口縁・体部は1/4、底部は90%が遺存する。大形で深い坏である。2の遺存は全体の30%程度であり多くないが、口縁部から底部中央近くまで遺存する。5・6は底部周辺の破片である。2は口縁端部の一部が焼成前に押されて注口部状となっている。しかしわずかな窪みであるので、意図されたものではないかもしれない。1・2の内面は黒色処理・ミガキが施されている。2は手持ちヘラケズリが、1・5は回転ヘラケズリが、体部外面下位・底部外面に施されている。土師器坏・皿にはすべて回転糸切り痕がみられるが、1・2・5は周縁で消えている。6の底部は回転糸切り離した後、一部にナデが施されるだけでほぼ無調整である。小さな底部が円盤状に突出し、やや高台的な様相を呈する。3は全体の40%程度の遺存であるが、底部の残りはかなり良い。底部外面の糸切り痕は高台貼り付け時のヨコナデでかなり薄れている。内面に「× (+)」の線刻がある。欠損部まで続くかなり大きな線刻である。4は灰釉陶器碗の口縁部片である。軸は漬け掛けによる。7は破断面の一面が磨られて滑らかになっている。また外面も中央部が磨られており、タタキ目が消えている。内面も一部に滑らかな面があり、使用された可能性が考えられる。胎土は白色の砂粒・小石、白色針状物を多く含み、南比企窯産と思われる。

1・5～7はカマド周辺から出土した。2はカマド左袖外脇の床面から出土したが、1・6・7は中・上層からの出土である。3はカマドと左壁中間の中層から出土した。

#### SI026 (第156～158図、図版13・43・47～49)

位置 調査区中央のJ56-69・K56-60グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は4.16m、副軸長は3.76mである。平面形は縦長の長方形をなす。確認面からの深さは26cm～46cmである。主軸方位はN4°-Wである。確認面の面積は15.88㎡、床面積は12.54㎡である。

床面・壁溝 床面の構築に際して壁際を主体に、貼床が施されていたと思われる。貼床はあまり厚いものではないが、堆積土との区分が難しく、掘りすぎてしまった部分がある。検出した床面は一部壁際で低いが、本来は平坦であったと思われる。全体的に硬化しているが、特に中央から東壁寄りと南壁寄り部分が顕著である。壁溝は西壁中央で一部検出されたが、壁際の床面を掘りすぎているため、本来は全周すると思われる。西壁の壁溝は西壁からやや離れて図示しているが、拡張を考慮する必要はないと考える。

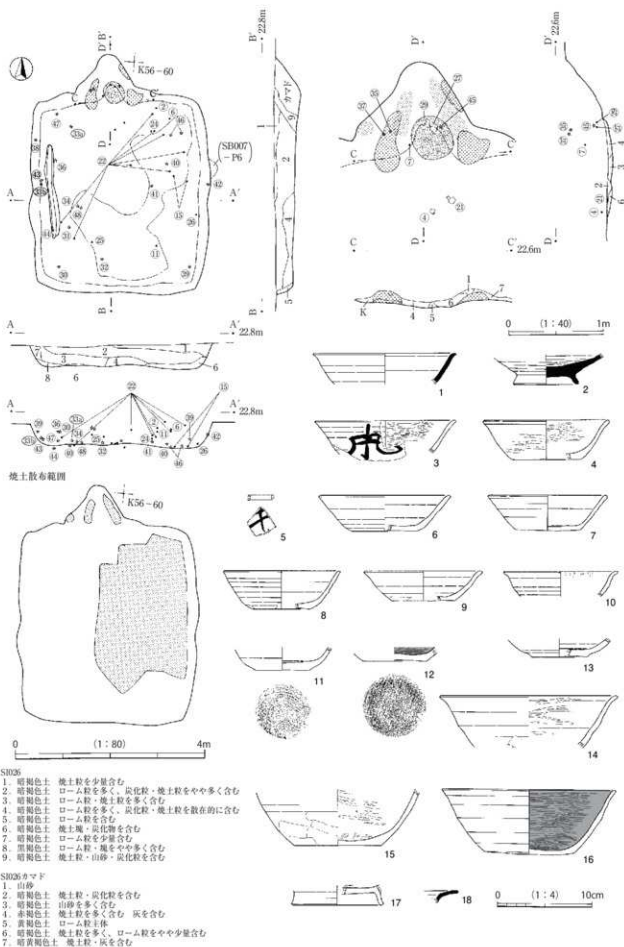
柱穴 主柱穴は検出されなかった。出入口ピットも検出できなかった。

カマド 北辺中央に位置する。方形プランから大きく突出し、火床部はほぼカマド両側の北壁を結ぶ線上にある。両袖の遺存は少なく、上部はかなり失われている。火床部底面には赤化した範囲がみられる。被熱痕跡は強く、煙道部の左右両壁まで赤化している。火床部底面は床面よりも窪んでいるが、あまり深いものではない。

堆積土 床面上・下層に焼土・炭化物を多く含む土層が堆積している。焼土の分布は特に中央から東壁側にかけて広範囲に及ぶ。しかし大きな炭化材の出土はなく、大規模な火災とは思えない。堅穴廃棄後の窪地におけるごみの焼却や焼土の廃棄などが考えられる。中・上層は焼土粒・炭化粒・ローム粒を含む暗褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

重複遺構 北東側で掘立柱建物SB007と重複する。新旧関係は不明である。

出土遺物 図示した遺物は49点で、非常に多量である。1は灰釉陶器碗、2は須恵器坏または皿、3～16はロクロ土師器坏、17はロクロ土師器高台付坏または皿、18は灰釉陶器段皿、19・20は土師器鉄鉢形土器、21は須恵器小型壺、22は須恵器長頸壺、23～26は須恵器甕、27は土師器甕または瓶、28・29は土師器甕、30～48は鉄製品である。



焼土散布範囲

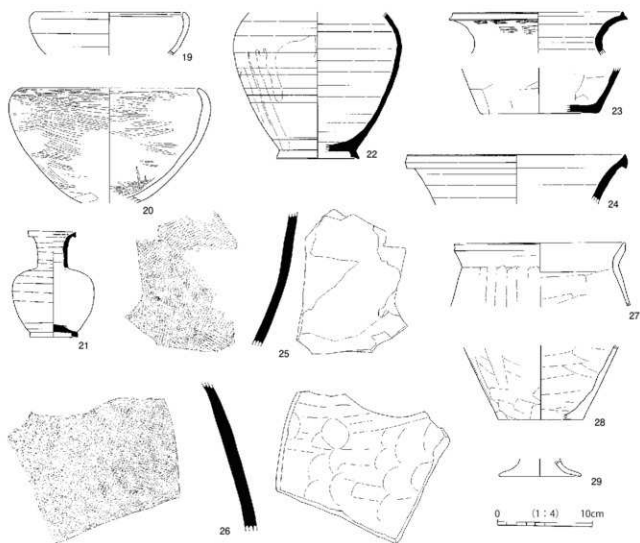
SI026

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含む
2. 暗褐色土 ローム粒を多く、炭化粒・焼土粒をやや多く含む
3. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を多く含む
4. 暗褐色土 ローム粒を多く、炭化粒、焼土粒を散在的に含む
5. 暗褐色土 ローム粒を含む
6. 暗褐色土 焼土塊、炭化物を含む
7. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
8. 暗褐色土 ローム粒、炭をやや多く含む
9. 暗褐色土 焼土粒、山砂、炭化粒を含む

SI026カマド

1. 山砂
2. 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む
3. 暗褐色土 山砂を多く含む
4. 赤褐色土 焼土粒を多く含む 灰を含む
5. 黄褐色土 ローム粒を多く含む
6. 暗褐色土 焼土粒を多く、ローム粒をやや少量含む
7. 暗黄褐色土 焼土粒、灰を含む

第156図 SI026住居跡、出土遺物(1)

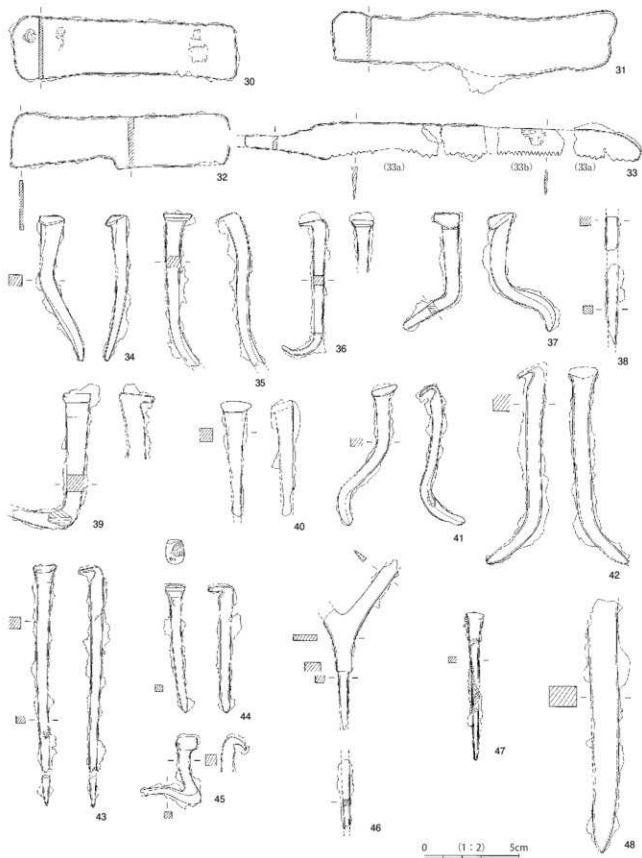


第157図 SI026住居跡出土遺物（2）

土器類は21の須恵器小型壺が完形に近い遺存であるほかは、遺存の良い遺物が少ない。比較的遺存のよい16でも40％程度であり、小破片のものも多い。

1は灰軸陶器碗の口縁・体部片である。内面の灰軸は口縁端部によく掛かっているが、そのほかは薄い。18は灰軸陶器段皿の口縁部片である。灰緑色の軸が内面に厚く掛かっている。2は底部周辺が多く遺存するが、口縁・体部の全周を欠損する。高台部は小さく、やや「ハ」の字状の形態を呈する。南比企窯産で、胎土は白色針状物・白色粒を多く含む。色調は黒灰色・黄灰色である。焼成は須恵器としてはややあまい。

ロクロ土師器環のうち、14～16は大形の坏で、口径18cm台、底径9cm台である。器高のわかるものは16のみで、7cm弱である。ほかのものはそれらに比べて小ぶりの土器であるが、通常の大さきといえるであろう。口径は12cm～13cm台、器高はほぼ3cm台、底径は6cm台が主体である。体部外面下位・底部外面の調整技法がわかる土器をみると、7・9・12・16は回転ヘラケズリが施され、4・8・15は手持ちヘラケズリが施されている。ただし4は器面磨耗により、8は遺存が少ないことにより、やや不明瞭である。8は回転ヘラケズリの可能性も考えられる。4の体部外面はあまりヘラケズリがされていないと思われる。



第158图 SI026住居跡出土遺物(3)

6はヘラケズリが施されているが、磨耗により手持ちか回転か不明瞭である。11・13の底部外面は回転糸切り離し後無調整であり、底部がやや突出する。体部外面はヘラケズリが施されていない。11・13以外で比較的底部の遺存がよい土器をみると、7は回転糸切り痕がヘラケズリにより消されてみえないのに対し、12・15・16は中央部などに若干遺存している。12・16は内面に黒色処理が施されている。3・5は墨書をもつ土器である。3は体部外面に大きく、正位と思われる墨書がある。則天文字で「天」を表す文字に似ている。5は底部外面にみられる。現状では「千」に似たものであるが、小破片であり、墨書は欠損部に続くため断定しがたい。10は口縁部内面に油煙が付着しており、灯明器として使用された土器である。17は高台部周辺の小破片である。口縁・体部が遺存しないため、坏か皿か判別できない。高台は低い。19は口縁・体部の小破片である。色調はやや暗い赤褐色で、器面がざらついている。20よりも小ぶりの土器と思われるが、遺存が悪く断定しがたい。20は深く、やや大形の器形である。内外面にミガキが施され、丁寧な調整技法であるが、焼成はややあまい。口縁部外面の一部に横位で2条の沈線がみられるが、周回せず、整ったものでもない。須恵器や金属器などを模倣した可能性があるが、単なるミガキ痕かもしれない。21は口縁端部の一部を欠くのみで、ほかは割れもなく遺存する。頸部はやや短い。灰緑色の降灰軸が口縁部内面と胴部上位の肩部、底部内面に付着している。胴部外面下位は回転ヘラケズリが施されている。底部外面には回転糸切り痕がみえるが、高台部の貼り付け後にヨコナデが施され、かなり薄れている。器面の色調は褐色、断面の色調は灰色である。焼成は良好である。器面の一部に指紋がみられる。胎土は灰白色粒を多く含む。猿投窯などの東海産と思われる。22は頸部や胴部肩部の破片もあるが、接合しないため胴部上位以下の復元図にとどめた。図化しない部分を含めても全体の30%程度の遺存である。灰緑色の降灰軸が頸部内外面から胴部外面、底部内面に付着している。胴部の軸は中位から下位に幾度も垂下している。胴部外面下位に1条の沈線が周回している。外面の色調は黒灰色・黄灰色、内面の色調はわずかに黄色みを帯びた灰色である。焼成は良好である。胎土は灰白色の砂粒・小石を含む。東海産と思われる。23は口縁部から底部まで遺存するが、胴部の破損が多いため、全体を復元できない。図示したのは口縁部と胴部下位の部分である。外面は胴部から口縁部まで横位の平行タタキがみられる。また胴部下位外面はヘラケズリが施されている。底部外面は砂粒・繊維質の敷物など製作上の痕跡が顕著である。胎土は白雲母・砂粒を含む。色調は灰黄褐色で、焼成はかなりあまい。新治窯産の須恵器である。24は大形の甕の口縁部片である。胎土に白色針状物、灰白色の砂粒・小石を含む南比企窯産の須恵器である。色調はやや黄色みを帯びた暗灰色で、焼成は良好である。暗黄緑色の軸が口縁部内面に付着する。25は転用甕で、須恵器甕の胴部片を再利用したものである。内面が広範囲に滑らかであり、甕または砥石として使用されたものと思われる。26も大形の甕で、胴部の破片である。外面は淡黄色・灰緑色の軸が付着している。外面は平行タタキが施され、内面は無文の当て具痕が顕著である。胎土は灰白色の砂粒・小石を含む。小石の粒径はやや大きい。内面・断面の色調は灰色で、焼成は良好である。東海産と思われる。27は甕または瓶の口縁部・胴部上位の破片である。胴部外面に焼土化した山砂が付着している。28は胴部下位から底部にかけての破片である。胴部内面はロクロ目的な横位のうねりがあり、回転台上で制作された可能性が考えられる。また胴部外面下位は横位のヘラケズリが施され、須恵器的な技法がうかがえる。しかし色調・質感から須恵器窯で生産されたものではない。29は台付甕の脚部である。脚部の1/2の遺存である。

30～32は性格不明の鉄製品である。形態は長方形の板状で、刃をもたない。また目釘穴はX線写真でも確認できない。断面端部は角張っているが、30の長辺下側、31・32の長辺上側は丸みがなく、のみで断ち

切ったものと思われる。打ち延ばして長方形にした板材をさらに細長く切り取った様相がうかがえる。大きさをみると、長さは12cm弱から15cm、幅は3cm前後、厚さは2mmから3mm弱、重さは55gから83gである。30・32は似た大きさであるが、31はやや大きい。30は図示した面の一部に木質が付着し、また裏面中央にも繊維質の物質の付着がみられる。用途は不明であるが、建材に関係する可能性が考えられる。33は小型の鋸である<sup>11)</sup>。刃部の中央部と茎の末端部を欠損する。刃部先端は遺存する。33aと33bを同一個体として図示したが、菌の密度でやや違和感があり、別個体の可能性も考えられる。33bは遺存がよいが、33aの刃部は遺存が悪く、刃こぼれも顕著である。違和感はそのためとも思われ、両者が同一個体であれば33bの様相が本来のあり方であろう。33aの先端部と中央部から茎に欠けての破片、そして33bは各々接合しないため、全長は不明である。33aと33bを合わせた遺存長は20cm弱である。薄い作りで、33aの背の最大厚は2.5mm、幅は中央で1.5cm～1.7cmである。33bの幅は1.2cm～1.4cm、厚さは1.6mmである。鋸歯は1本1本の歯が二等辺三角形を呈する素歯(剣歯)である。鋸歯を交互に左右に振り分けたアサリについては、施されていないと思われる。鋸歯を研ぎ出したナゲシについても、錆のためにやや不明瞭であるが、特に施されていないと思われる。刃部先端はわずかに内側に曲がっている。背側が丸みをもって幅を減じ、刃側に近づくと、尖らずに途中で屈曲して鋸歯に至る。鋸歯は中央で直線的であるが、先端と茎寄り末端はわずかに湾曲している。間は背側・刃側ともにみられる。背側は刃部からかなりの鈍角で傾斜した後、いったん平坦となり、さらに緩やかに幅を減じて末端側に向かっている。刃間はわずかな段差であるが、背側の位置と対応している。刃間から1cmまでの部分には鋸歯がみられない。茎の幅は刃部際で1.3cm、欠損部近くでは6mmである。33bは一部に木質が付着している。33は小形の製品で薄い作りであること、鋸歯が素歯で目が細かいこと、アサリが不明瞭であること、などから木材の切断用ではなく、金属などの加工・細工のための製品である可能性が考えられる。30～32の鉄鋸とともに小鍛冶に関わる道具の一つであったかもしれない。

34～37・39～45は鉄釘である。いずれも頭部を「L」字形か逆「V」字形に片方に折り曲げて、頭頂部を方形に整えた角釘である。38は頭部及び先端を遺存しないため、やや断定しがたいが、鉄釘の可能性が高いと思われる。38を含めて記述する。釘の本数は12本である。曲がった製品が多く、小鍛冶の鉄素材として集められたが、再利用されることなく廃棄されたものと思われる。38と40はかなり欠損しているが、そのほかのものは比較的遺存がよい。錆のためやや不明瞭であるが、完存ないしほぼ完存なものとしては、34・36・37・41・42・43・44がある。35・39・45は先端を欠損する。本来はまっすぐなものとして、小さいものから順にその長さをみると、44は6.7cm、37は7.3cm、36は7.9cm、34は8.0cm、41は8.5cm、42は11.5cm、43は遺存長12.6cmである。35・39・45はいずれも先端を欠損する。遺存長は35が8.4cm、39が9.7cm、45が5.35cmである。38と40は長さが不明である。長さや厚さから、小形のもの44・45、中形のもの34・35・36・37・41、大形のもの39・42・43とみられる。39は遺存長が42・43よりも小さいが、太い釘であるため大形とした。中形のうち、34・36・37はやや小さく、35・41はやや大きい。35は先端が欠損しており、かなり長くなることも考えられる。39・41・43は一部に木質が付着している。46は雁又式の鉄鎌である。二股部扱りは深く、大振りの刃部が延びる。図示した左側の刃部はほぼ欠損し、右側の刃部は先端側を欠損する。頭部は短く、刃部から緩やかに移行する。箆被は頭部よりも一回り厚くなり、台状凹(四方凹)を形成する。茎は頭部よりも細く、より方形的な断面形態である。長茎であるが、末端部を含めてやや多く欠損する。47は小形の鑿と思われる。完形で、錆も少ない。頭部は台形的な方形で、最も厚く、先

端に向かって細くなる。木質が図示した左側面に多く付着している。木質の木目は上部が横方向、中央部が斜方向であり、異なっている。このことは近くにある複数の木材が錆び付いたことを示すと思われ、単一の木材に打ち付けられたものではないとみられる。48は大形の鑿か釘と思われる。先端が遺存する。頭部は欠損するが、欠損は少ないと思われる。先端が急に細くなっており、釘としてはやや不自然かもしれない。

遺物は堅穴全体から出土している。カマド周辺及び北東側がやや多い。図示した遺物の出土層位は床面から確認面までわたるが、下層・床面に比較的多い。焼土も広範囲にみられることから、堅穴住居跡廃棄後の焼却段階までに多くの遺物が廃棄されたか、流入したものと思われる。そして22のように広域で中・上層に及ぶ遺物もあることから、その後も遺物の廃棄や流入は続いたのであろう。

本遺構の場合、鉄製品の出土量の多さが注目される。それらも堅穴全体から出土している。出土層位をみると、床面・下層からの出土が多いが、一部は中・上層からの出土である。しかし中・上層のものも壁際からの出土が多く、壁際に若干の堆積土が存在したくらしい段階で廃棄されたか流入したものと思われる。廃材などの焼却時点で堅穴内に入った遺物が多いと思われる。これが単なる廃棄以上の祭祀的な意味合いをもつかどうか、出土状況からは断定しがたい。そのほかの遺物では最も遺存のよい21がカマド前方の床面から出土した。これも祭祀的な出土状況不明瞭である。

#### SI027 (第159図、図版13・46～49)

位置 調査区中央のK56-80グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は3.0m、副軸長は2.88mである。平面形はほぼ方形で、小形の堅穴住居跡である。確認面からの深さは15cm～24cmである。主軸方位はN<sup>9</sup>・Eである。確認面の面積は8.34㎡、床面積は7.25㎡である。

床面・壁溝 床面は概ね平坦である。中央を除いて貼床が施されている。中央はやや硬化している。壁溝は南西隅付近を除いて検出された。しかし貼床を掘りすぎていると思われ、本来は全周すると考える。全体に壁溝の幅が広いが、やはり貼床を掘りすぎたためであろう。

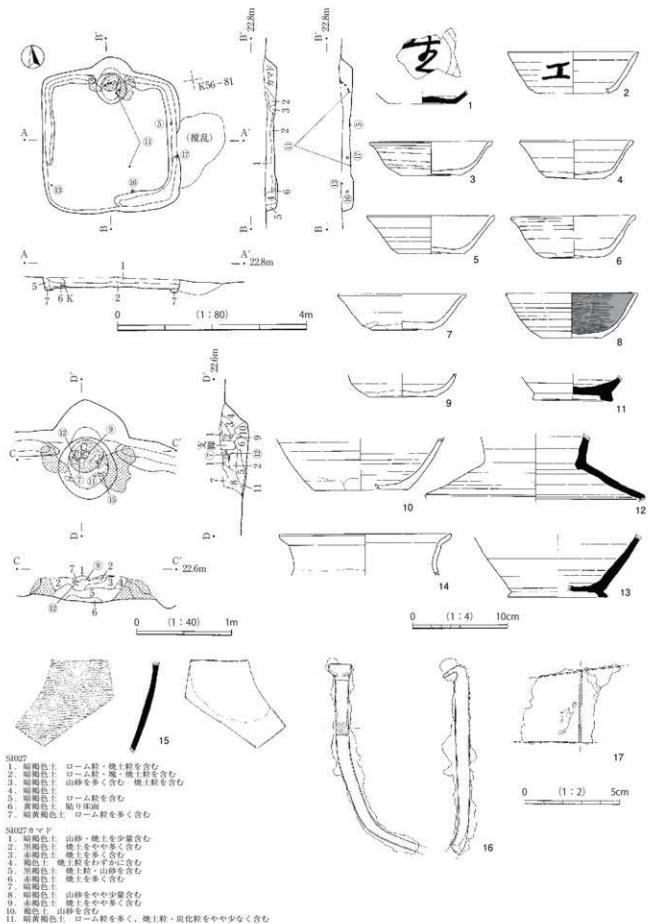
柱穴 主柱穴・出入口ピットとも検出されなかった。床面上には深さが15cmから20cm強のピットが幾つか検出されたが、不規則な位置関係であり、本遺構に伴うものとは思われない。

カマド 北辺中央に位置する。両袖の遺存は少なく、上部はかなり失われている。方形プランからの突出は大きくも小さくもない。火床底部面には赤化した範囲がみられる。火床底部面は床面よりも窪んでいるが、あまり深いものではない。

火床面よりも14cm上方から土製支脚が倒立した状態で出土した。また支脚の前からは正位の土師器杯7と伏せた状態(倒位)の土師器杯9が出土した。ただし7・9は破片であり、遺存はそれほど良くない。さらに7の下からは須恵器壺片12が7の下皿のような状態で出土した。支脚の周囲はやや上層であるにもかかわらず焼土を多く含む土層がみられることから、支脚の底部が最終的な火床面である可能性も若干考えられる。しかし支脚が倒位であること、7・9・12の出土が自然な廃棄の状態とは思えないことから、これらはカマド廃棄の祭祀に伴う可能性の方が高いと考える。これらの前方からは須恵器壺10や須恵器甕片の転用品15ほかの土器片が出土している。11は12と同一個の可能性があるが、出土状況からはSB0095などがカマド廃棄の祭祀に伴うものとは断定しがたく、むしろ関係が薄いとみておきたい。

カマド内の堆積土は複雑であるが、火床面上にも焼土を多く含む土層がある。





SI027

1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
3. 暗褐色土 山砂を多く含む 焼土粒を含む
4. 暗褐色土 山砂を多く含む 焼土粒を含む
5. 暗褐色土 ローム粒を含む
6. 黄褐色土 焼土粒を含む
7. 暗黄褐色土 ローム粒を多く含む

SI027キマフ

1. 暗褐色土 山砂・焼土を少量含む
2. 黒褐色土 焼土をやや多く含む
3. 赤褐色土 焼土を多く含む
4. 褐色土 焼土粒をわずかに含む
5. 黒褐色土 焼土粒・山砂を含む
6. 赤褐色土 焼土を多く含む
7. 暗褐色土 焼土を多く含む
8. 暗褐色土 山砂をやや少量含む
9. 赤褐色土 焼土をやや多く含む
10. 褐色土 山砂を含む
11. 暗黄褐色土 ローム粒を多く、焼土粒・炭化粒をやや少なく含む

第159図 SI027住居跡、出土遺物

堆積土 ローム粒・焼土粒を含む暗褐色土が主体である。遺存が少ないため、自然堆積か人為的堆積か判断しがたい。

重複遺構 東側で攪乱坑と重複し、本遺構が切っている。

出土遺物 図示した遺物は17点である。1は須恵器環、2～9・10はクロコ土師器環、11～13は須恵器壺、14は土師器甕、15は須恵器甕片転用品である。16・17は鉄製品である。

1は底部周辺の破片である。底部内面に「生」と思われる墨書文字がある。底部外面には回転糸切り離し痕がみられ、周縁と体部外面下位は回転ヘラケズリが施されている。器壁は薄い。胎土に白色針状物・灰白色粒を含み、南比企窯産と思われる。色調は黄灰白色で、焼成はややあまい。

土師器環のうち、3の遺存は全体の70%とやや多いが、4・5・8は1/2前後である。2・6・9・10は20%以下で遺存が悪い。2は体部外面に「エ」とみえる墨書がある。体部外面下位・底部外面の調整技法は、3～5・8が回転ヘラケズリ、6・7・9・10が手持ちヘラケズリである。ただし6は遺存が少ないため回転との区別がやや難しい。底部のヘラケズリは全面的で、3・10は切り離し痕がみえない。そのほかの坯も薄れているものが多いが、回転糸切り痕が中央部などの一部に若干みられる。8は内面に黒色処理が施されている。12は広口長頸壺で、頸部から胴部肩部にかけての破片である。11・13は壺底部周辺の破片である。12は頸部から肩部へは直角的に屈曲する。さらに肩部からそれ以下へは鋭角的に屈曲し、明瞭な稜線をもつ。肩部外面は強いヨコナデまたは回転ヘラケズリが施されている。灰黄緑色の軸が、12の頸部内面の一部及び肩部外面、11の底部内面に薄く付着している。11・12の胎土は灰白色粒を含むが、緻密である。また色調はともに灰白色で、焼成も良好である。双方とも東海産と思われる。13は胎土に淡黄色や灰白色の小石・褐色粒を多量に含む。夾雑物が多く、器面はざらついている。色調は暗灰色、焼成は良好である。南比企窯産と思われる。14は武蔵型甕の口縁部片である。明瞭な「コ」の字形口縁である。外面には山砂が付着している。15は須恵器甕胴部片の内面を硯または研ぎ具として再利用したものである。外面も比較的滑らかであるが、特に使われていないと思われる。

16は鉄製の角釘で、長さはあるがやや細身の作りである。先端を欠損する。頭部は「L」字形に折り曲げて方形に整えられているが、錆跡が著しく、やや不明瞭である。厚みはもう少しあるかもしれない。身の断面形はほぼ方形である。先端側でやや曲がっている。17は鉄製品の破片で用途は不明である。薄い板状を呈し、背と刃の区別が付かない。一部が緩やかに曲がっているが、本来の形状がわからない。図示した面に木質が若干付着している。

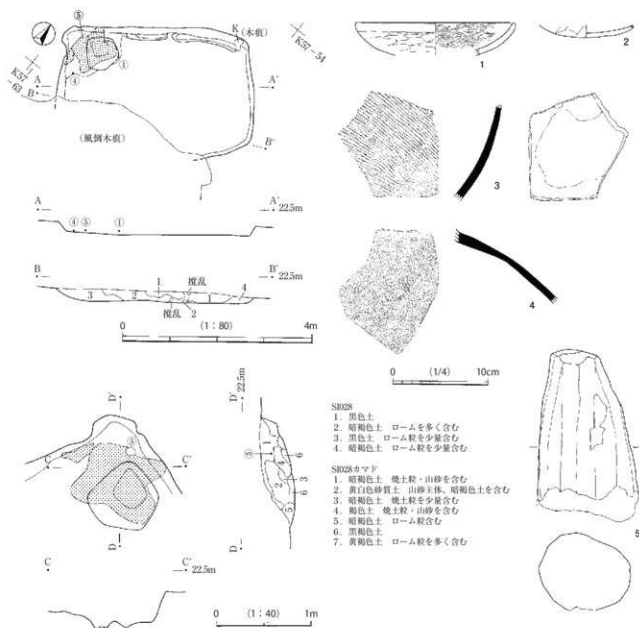
カマド以外の遺物出土状況を見ると、5は東壁際の壁溝上から、17も東壁際下層から出土した。11はカマド内のほか、中央南寄り床面に散っている。16は南壁側中層から出土した。13は上層出土である。

#### SI028 (第160図、図版13・47・49)

位置 調査区南東寄りのK57-57グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は3.08m、副軸長は4.56mである。平面形は横長の長方形をなす。確認面からの深さは10cm～30cmである。主軸方位はN-38°-Wである。確認面の面積は推定11㎡、床面積は推定9.5㎡である。隅カマドをもつ堅穴住居跡であり、主軸方向の把握が難しいが、SI019やSI029の様相から、短軸方向が主軸方向と思われる。南側が重複遺構の存在により不明瞭である。

床面・壁溝 床面は平坦で、全体に硬化している。壁溝は北壁でほぼ伴うが、ほかには検出されなかった。床面までやや浅く、本来的に全周するか不明である。



第160図 SI028住居跡、出土遺物

柱穴 主柱穴・出入口ピットとも検出されなかった。出入口ピットは南壁際に存在する可能性が考えられるが、重複遺構の存在により不明である。

カマド 北西隅に位置する。方形プランからの突出は小さい。構築材の山砂は崩落・流出により一つにまとまっており、形状をとどめていない。火床部底面に赤化した範囲はみられない。底面は床面よりも約12cm窪んでいるが、灰のかき出しやカマドの設置・造り替えによるものであろう。カマド内堆積土は焼土を含むが、概して多量ではなく、焼土主体の土層はみられない。土製支脚5が煙道部右袖寄り下層と思われる位置から出土した。壁際に寄っているため、使用時の位置からやや離れていると思われる。

堆積土 床面上・下層に焼土・炭化物を多く含む土層が堆積している。焼土の分布は特に中央から東壁側にかけて広範囲に及ぶ。しかし大きな炭化材の出土はなく、大規模な火災とは思えない。堅穴廃棄後の窪地におけるごみの焼却や焼土の廃棄などが考えられる。中・上層は焼土粒・炭化粒・ローム粒を含む暗褐

色土が主体である。自然堆積と思われる。

**重複遺構** 南西側で縄文時代の遺構SK034と重複し、本遺構が切っている。しかしこの遺構の存在により、南壁側の多くと西壁側の1/2程度を検出できなかった。

**出土遺物** 図示した遺物は5点である。1・2は土師器環である。3・4は須恵器甕であるが、3は破片の再利用品である。5は土製支脚である。

1・2は非ロクロの土師器環である。1は口縁・体部片、2は底部片であるが、別個体と思われる。1の内面は入念なミガキが施され、丁寧な作りである。2は底部内面に黒色物が付着している。外面の所々に山砂が付着しており、カマド内での使用に伴う焦げ付きと思われる。3の内面は磨られて滑らかである。甕または研ぎ具として再利用されたものである。4は胴部上位の破片である。わずかに頸部が遺存している。外面には灰緑色・淡黄色の釉が付着している。内面は当て具痕があるが、強いナデによりやや痕跡が弱くなっている。3・4とも色調は灰白色である。また胎土は淡黄色の砂粒・小石を含むが、概ね緻密である。焼成は4が良好であるが、3は須恵器としてはややあまい。ともに湖西窯産と思われる。

5は基部に若干の欠損があるが、最終的な使用状態としてはほとんど完形であった可能性がある。側面はやや細かく面取りされており、多くの稜をもつ。側面は扁平な部分があり、横断面形は楕円形に近い。長さは18.3cm、最大径は10.8cm×8.2cm、重さは1,079.3gである。

1・4はカマド周辺から出土した。図示しない遺物の出土もカマド周辺にやや多いが、ほかからも散在的に出土している。

#### SI029 (第161図、図版13・14・16・43)

**位置** 調査区南東のK57-57グリッド付近に位置する。

**形状・規模** 主軸長は3.82m、副軸長は4.56mである。平面形は横長の方角をなす。遺存が悪く、特に南側は床面・壁面の多くを失っている。しかし南辺中央がわずかに遺存していると思われるため、その部分で主軸長を計測した。確認面からの深さは残りのよい部分で7cmである。主軸方位はN-57°-Wである。確認面の面積は推定16.9㎡、床面積は推定15.7㎡である。

**床面・壁溝** 遺存が悪いため検出された床面は若干の凹凸がある。中央からカマド前を主体として硬化範囲がみられるが、遺存が悪い。壁溝は検出されなかった。

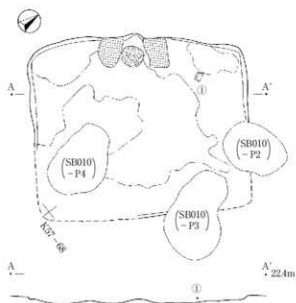
**柱穴** 主柱穴は検出されなかった。出入口ピットも未検出であるが、南壁際中央に存在する可能性が考えられる。

**カマド** 北西辺中央に位置する。床面近くのみ遺存であるが、両袖下部と赤化した火床面が遺存する。カマドはほとんどが方形プラン内に位置し、遺存が悪いことを考慮しても煙道部の突出は小さいといえる。火床面上には焼土主体の土層がみられる。底面には赤化した範囲がみられる。火床部底面は床面よりわずかに低くなる程度の窪みである。

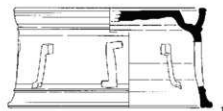
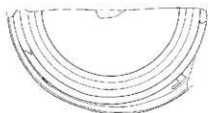
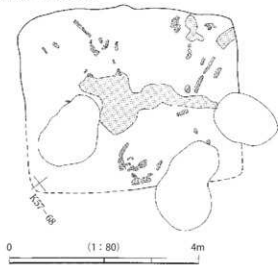
**堆積土** 床面上・下層に多量の炭化材と焼土が堆積している。廃材等の焼却や火災を受けたことが考えられる。

**重複遺構** 掘立柱建物SB010と重複し、南東側の各所が切られている。また南西側で縄文時代の炉穴SK058と重複し、本遺構が切っている。

**出土遺物** 図示した遺物は須恵器圈足円面甕1点である。1/2弱が遺存する。甕面は陸と海の区別が明瞭である。陸部は広く、ほぼ平坦であるが中央でわずかに低くなっている。中央側は磨られて滑らかで



炭化材 焼土検出状況



0 (1:4) 10cm

第161図 SI029住居跡、出土遺物

ある。陸部からは急角度で海部底面に至り、陸部外縁に明瞭な稜をもつ。海部は深く、底面は比較的平坦である。視部外縁には陸側同様に急角度で立ち上がる。圈足には鍵手状の透孔があいている。4か所残存するが、全体で8か所になると思われる。透孔のある広い圈足中間部の上下には各1条の突帯が廻っている。ともに幅の細い線状のものである。脚端部外面は若干横方向に突き出ている。接地部がやや広くなり、安定感が増している。内面はヨコナデ・ナデが施されている。指頭痕・爪形痕が圈面部と圈足部の接合か所や透孔間の一部に顕著に遺存する。縞襷痕が圈面や脚端の接地部の一部にみられる。灰緑色の降灰軸が脚端部外面などに付着している。胎土は白色・暗灰色などの細砂粒を含むが、非常に緻密である。色調は灰白色で、焼成は良好である。東海産と思われる。

1は堅穴右奥側の床面から破断面を上にした横向き状態で出土した。上部に炭化材がみられる。1/2弱に破損したため、廃材とともに廃棄された可能性が考えられる。しかし浅い遺構であるため、残りの1/2強を土表除去の際重機により取り去られている可能性もある。

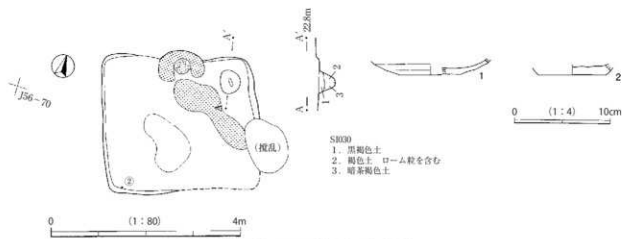
#### SI030 (第162図、図版14)

位置 調査区西側のJ56-60グリッド付近に位置する。

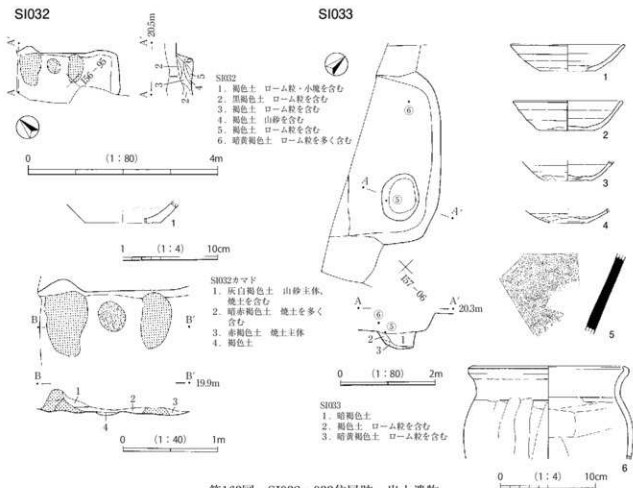
形状・規模 主軸長は2.84m、副軸長は3.32mである。平面形はやや横長の長方形で、小形の堅穴住居跡である。遺存が悪く、かなり多く床面・壁面を失っている。確認面からの深さは最も遺存がよいところで13cmである。主軸方位はN-15°-Wである。確認面の面積は9.4㎡、床面積は推定8.4㎡である。

床面・壁溝 床面は平坦である。硬化面が中央にみられるが、遺存が悪いためやや狭い範囲にとどまる。壁溝は検出されなかったが、本来的に存在しないか不明としたい。

柱穴 北東隅部に径49cm×43cm、床面からの深さ



第162図 SI030住居跡、出土遺物



第163図 SI032・033住居跡、出土遺物

が35cmのピットが検出されたが、ほかの3か所から主柱穴が検出されていないため、主柱穴とは思われない。本遺構に伴うものも不明である。出入口ピットも検出されなかった。

カマド 北辺中央に位置する。床面近くのみで遺存であるが、カマドの形状をうかがうことができる。方形プランからの突出はあまり大きくない。カマド構築材は両袖から煙道部側に崩落して遺存する。やや赤化した火床面がみられる。構築材はカマド前から東壁側中央にかけて流出している。

堆積土 若干のローム粒を含む暗褐色土・褐色土である。遺存が少ないため、自然堆積か人為的堆積か判断しがたい。

重複遺構 東側で土坑と重複し、本遺構が切られている。調査時にP1としたものであるが、本遺構の周辺には後世のものと思われる攪乱坑がやや多く存在している。これも同様のものであろう。

出土遺物 図示した遺物は2点である。1はロクロ土師器皿、2はロクロ土師器杯である。

1は体部下位から底部にかけての小破片である。底部外面には手持ちヘラケズリが施されているが、体部外面下位には施されていない。2は底部周辺の破片である。底部外面全面と体部外面下位に回転ヘラケズリが施され、切り離し痕はみえない。

2は南西隅際の床面から出土した。

SI031 (第164図、図版14・43・44・47)

位置 調査区西側のI56-78グリッド付近に位置する。

形状・規模 主軸長は3.68m、副軸長は3.84mである。平面形はほぼ方形をなす。確認面からの深さは13cm～40cmである。主軸方位はN-19°-Wである。確認面の面積は13.79㎡、床面積は12.94㎡である。カマド及び南壁やや西寄り部分が木根などの攪乱により破壊されている。

床面・壁溝 床面は平坦である。全面的に硬化しているが、壁際の硬化度がやや弱い。壁溝は全周する。

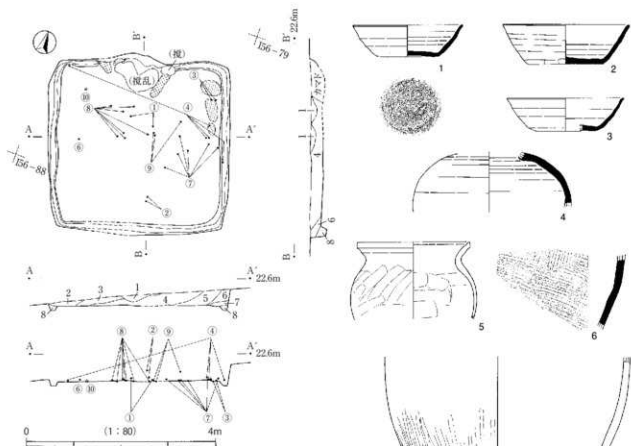
柱穴 主柱穴は検出されなかった。出入口ピットも検出されなかった。

カマド 北辺中央に位置する。攪乱により大きく破壊されている。方形ブランからの突出は小さい。構築材の山砂がカマドの左右から検出されたが、その間が広い。両軸部の本来の位置からはかなりずれていると思われ、多くが外側に崩落したものであろう。山砂はカマド前方にも流出している。火床部は木根によりほとんどこわされている。若干の焼土範囲が左側の山砂近くの壁際から検出された。

堆積土 若干のローム粒・ロームブロック・焼土粒・山砂を含む暗褐色土を主体とする。東壁際北寄りで、焼土・山砂の集中範囲が床面上で検出された。自然堆積と思われる。

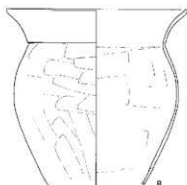
出土遺物 図示した遺物は10点である。1～3は須恵器杯、4は須恵器長頸壺、5・7・8は土師器甕(瓶)、6は須恵器甕または瓶、9は輪の羽口、10は鉄製品である。

1は40%、2は1/2強、3は20%の遺存である。2は胎土に灰白色の砂粒・小石を多量に含む。底部外面は回転ヘラ切り後全面に手持ちヘラケズリが施されている。新治窯産の杯である。1・3は底部外面全面に回転糸切り痕がみられる。胎土とともに白色針状物を含む。南北企窯産の杯と思われる。4は胴部上位の3/4が遺存するが、全体では30%程度の遺存であろう。口頸部と胴部中位以下を欠損する。器壁はやや厚く、器面は滑らかな質感をもつ。胎土は白色粒を含む。小石はあまりみられず、緻密である。白色針状物の含有は不明瞭である。色調は灰色を基調とするが、外面はやや褐色みを帯びる。焼成は良好である。東金子窯または南北企窯など北武蔵産の須恵器と思われる。5は小形の土師器甕である。口縁部から胴部上位にかけて全体の30%程度が遺存するが、口縁部は1/2の遺存である。胴部の器壁が薄い。色調は暗赤褐色であるが、内面は黒ずむ部分が多い。6は新治窯産の須恵器甕または瓶の胴部片である。胴部外面の平行タタキは横位と縦位の双方がみられる。胎土は白雲母、灰白色の砂粒・小石を多量に含む。7は常陸型の甕である。胴部外面下位にミガキが施されている。底部は孔があいており、端部が磨耗している。欠損後に底部を完全にくり抜き、端部を磨って甕として再利用したものである。胴部外面下位の一部が粘土帯の接合部分で割れており、底部は外れやすかったのであろう。胴部外面は被熱・使用に



SI031

1. 暗褐色土
2. 褐色土
3. 褐色土
4. 暗褐色土 山砂・焼土粒を含む
5. 暗黒褐色土 ローム粒を含む
6. 暗褐色土 ローム粒を含む
7. 暗褐色土 焼土粒を含む
8. 暗黒褐色土 ローム粒・小塊を含む



0 (1:4) 10cm

第164図 SI031住居跡、出土遺物

よりかなり剥落した部分がある。胎土は白雲母、灰白色の砂粒・小石を多量に含む。8は武蔵型の甕である。口縁部から底部まで遺存し、遺存度は高い。しかし器壁が薄いため接合できないものが多く、胴部下位・底部が因化できない。胴部の形態も最大径が本来の形よりも小さく、すはまりすぎていると思われる。口縁部は「く」の字口縁でかなり長さがある。口縁部外面中位にわずかに接合痕がみられる。

9は甕の羽口である。長さは10.9cm、最大径は8.1cmである。重さは536.8gである。内径は先端部側が



2.7cm～3.2cm、吸気部側が4.6cm～4.9cmである。器壁は最大厚で2.3cmであるが、吸気部側は薄くなり、9mm～1.8cmである。吸気部側の面は平坦である。先端部は溶融・破損により、一部で非常に薄くなっている。また溶融により黒褐色の色調を呈する。羽口装着角度は18度前後と思われる。吸気部側の外表面の色調は暗灰色・黄灰色・橙褐色と変化があり、断面及び孔内面は褐色である。外表面の一部は還元色、そのほかは酸化色を示す。

図示した遺物の出土は堅穴中央から東壁側が多い。4は広範に散っており、7・8もやや広い範囲で出土している。カマド周辺と西側の分布が少ないのは、攪乱及び堅穴の遺存が悪い影響であろう。出土層位は床面から確認面にわたるが、下層から出土したものが比較的多い。堆積土が少ない時点で廃棄されたか流入した遺物が多いと思われる。

#### SI032 (第163図)

位置 調査区西端のI56-95グリッド付近に位置する。

形状・規模 調査できたのは東隅側の一部分のみである。そのほかは調査区外に存在するため主軸長、副軸長とも不明、面積も不明である。確認面からの深さは32cm～72cmである。主軸方位はN-48°-Eである。形態は方形を基調とするが、正方形に近いのか、長方形か不明である。

床面・壁溝 発掘された部分が狭いため全体の様相に言及しがたいが、検出された床面は概ね平坦である。硬化面については不明である。カマドが調査範囲の多くを占めることもあって、壁溝は検出されなかったが、壁溝の有無は不明とした。

柱穴 主柱穴は検出されなかった。出入口ピットも未検出であるが、南西壁際に存在する可能性がある。カマド 北東辺南(右)寄りに位置する。両袖が検出されたが、遺存はあまり良好でない。特に右袖は下部のみの遺存である。火床部底面は若干の焼土層がみられ、その上部にも焼土を多く含む土層が堆積している。底面の窪みは小さい。煙道部分の壁面をやや掘りすぎているが、方形プランからの突出は小さいとみてよい。

堆積土 若干のローム粒・ロームブロック・焼土粒・山砂を含む暗褐色土・褐色土である。自然堆積と思われるが、調査範囲が少なく、やや断定しがたい。

重複遺構 溝状遺構SD015と重複し、上部が切られている。

出土遺物 図示した遺物は土師器甕1点である。胴部下位・底部の小片である。器面の磨耗が著しく、外面調整が不明瞭である。

#### SI033 (第163図、図版14・44)

位置 調査区西端のI56-95グリッド付近に位置する。

形状・規模 調査できたのは北東側の半分程度で、南西側半分は調査区外に存在する。北からはほぼ45度傾く方形の堅穴住居跡である。カマドが検出されていないため、主軸と副軸の区別ができないが、長さ(幅)は3.7mである。確認面からの深さは31cm～68cmである。面積は不明であるが、正方形に近い形態であれば13.5㎡前後であろう。

発掘写真をみると北東壁中央が突出しており、カマドの跡かとも思われるが、構築材が検出されておらず、断定しがたい。図示した遺構の図面はその部分を省略しており、攪乱と判断したものである。しかし仮に北東壁にカマドが存在するとみると、主軸方位はN-48°-E、上述の規模は副軸長である。そうではなく調査区外の北西壁にカマドが存在するとみると、主軸方位はN-42°-Wで、規模は主軸長である。

床面・壁溝 床面は平坦で、硬化面はみられない。壁溝は検出されなかった。

柱穴 主柱穴は検出されなかった。出入口ピットも未検出であるが、調査区外に存在する可能性がある。東隅部の床面で大きなピットが検出された。床面での径が98cm×79cm、底面径が74cm×55cm、床面からの深さが45cmである。性格は不明であるが、検出された位置から本遺構に伴う可能性が考えられる。

カマド カマドの存在は先述のとおり不明瞭であり、北東辺または北西辺に位置する二通りの可能性が考えられる。

堆積土 暗褐色土・明褐色土であるが、重複遺構の存在によって不明瞭である。自然堆積か人為的堆積か判断できない。ピットの堆積土は明褐色土主体で堅穴全体の堆積土と同様である。

重複遺構 溝状遺構SD015と重複し、多くが床面近くまで切られている。

出土遺物 図示した遺物は6点である。1～4はロクロ土師器環、5は須恵器甕、6は土師器甕である。遺物の遺存は概して少なく、2が1/2程度遺存するほかは、1/4以下の破片である。

ロクロ土師器環はいずれも小ぶりで、やや浅い。3・4は口縁部を欠損するが、底部については、4点とも全部または一部が遺存する。底部の調整技法はいずれも静止糸切り離し後無調整である。体部下位はいずれも手持ちヘラケズリが施されている。5は胴部片である。外面に平行タタキが施されているが、タタキの痕跡は弱い。緻密な胎土で、白色粒を含むが細粒である。内外面の色調は暗緑灰色であるが、断面内部は褐灰色を呈する。焼成は極めて良好である。猿投窯などの東海産と思われる。6は口縁部・胴部上位の破片である。口縁端部は内側に巻くような状態で立ち上がる。

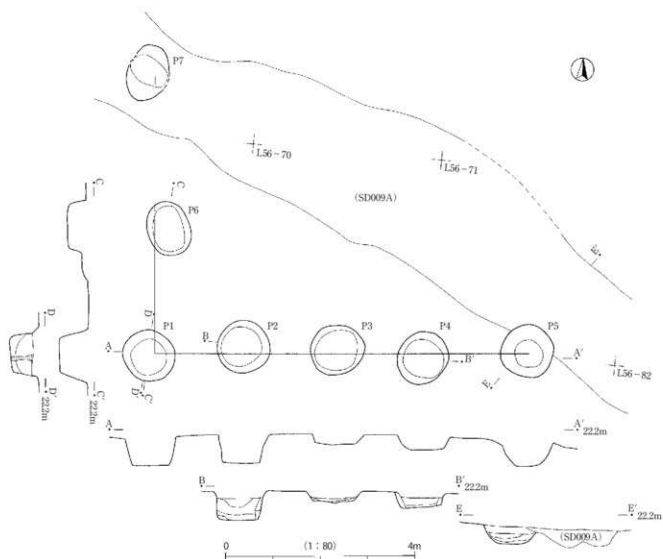
5はピット上で、床面と同じ深さから出土した。6は北側の中層から出土した。

## 2 掘立柱建物

### SB001 (第165図、図版11)

調査区東側中央のL56-70グリッド付近に位置する。桁行4間×梁行2間の欄柱東西棟建物であろう。現状では南欄柱と西妻柱の柱穴が「L」字形に遺存するが、塼とは思われない。北欄柱と東妻柱を構成する5か所の柱穴は、溝状遺構SD009Aに切られていることと確認面がやや低い影響で検出されなかったと思われる。桁行・梁行とも4間×2間以上の可能性もあるが、4間×2間の建物である可能性が高いとみておく。規模は桁行7.96m×梁行5.92mである。棟方位はN-85°-Eである。面積は47.1㎡である。柱痕は南西隅柱穴(P1)の土層断面で確認できたが、ほかには確認できなかった。柱間寸法は、桁行では1.86m～2.24m、梁行では2.78m～3.38mである。桁行の柱間が梁行の柱間に比べ短い。南欄柱列は柱筋のとおりがよいが、西妻柱中間柱穴(P6)が内に入る。柱掘り方は円形・楕円形で、径は1.1m前後のものが多く、西妻柱中間柱穴(P6)は短径が0.9mで、やや小さい。確認面からの深さは南欄柱中間柱穴(P3)及び南欄柱東第2柱穴(P4)が浅く、20cm及び28cmである。また西妻柱中間柱穴(P6)もやや浅く、40cmである。ほかの柱穴はそれよりも深く、やや浅い北西隅柱穴(P7)でも48cmである。南欄柱の両隅柱穴(P1・P5)及び西第2柱穴(P2)は60cm前後であり、差が少ない。深さの平均値は深い柱穴群で57cm、浅い柱穴群で29cmである。堆積土については、柱痕が残る南西隅柱穴P1をみると、中央の柱痕部分は黒色土で、ロームの含有は少ない。周囲の埋土はローム粒を含む黒色土で、下層はロームを多く含む。SB002及びSB002周辺の土坑群 (第166図、図版11)

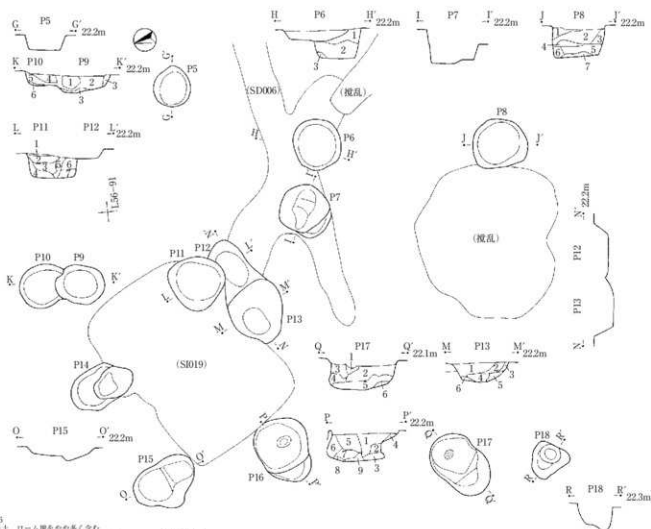
SB002は調査区東側中央のK56-98グリッドを中心に位置する。4基の柱穴が直列する遺構である。欄



第165図 SB001掘立柱建物

列や区画堀の可能性もあるが、掘立柱建物の西側柱穴列が検出されたものと思われる。東方には土坑群があり、そのなかには本遺構を構成する柱穴があるかもしれない。しかし組み合わせるのが判然としない。4基の柱穴群は底面までが浅く、組となる東方の柱穴群は確認面では検出できないことも考えられる。

検出された4基の柱穴列の両端が隅のものとなると、南北方向が3間の建物となるが、これらが桁行を構成する柱穴群か梁行を構成する柱穴群かわからない。東西棟、南北棟どちらの可能性もある。両端の柱穴間の長さは7.14mである。また柱穴群の直列方位はN-6°-Eである。柱間寸法は2.24m~2.6mで、ほぼ等間である。柱掘り方は円形・楕円形であるが、脇が掘られたと思われる形態を呈している。建て替えか、再利用のため柱が抜き取られたことが考えられる。径は0.9m~1.4mで、各柱穴の規模に大差はない。短径の1m前後が本来の径と思われるが、底面まで浅いことを考えると1m強程度であろうか。確認面からの深さは16cm~22cmで、深さも差が少ない。北端の柱穴P1で黒色土の柱状部分がみられ、柱痕と思われるが、周囲の土層もローム粒若干量を含む程度の黒色土であり、その差がやや不明瞭である。その外側はローム粒・ロームブロック主体の土層であり、明らかに埋め戻された土層である。また南第2柱穴(P2)は底面の一部が窪んでいる。断定しがたいが、柱位置の可能性が考えられる。



SB002-P6

1. 暗褐色土 ローム塊を中や多く含む
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む ローム塊を含む
3. 暗褐色土 ローム塊を少量含む

SB002-P8

1. 暗褐色土 ローム粒を中や少量含む
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
3. 暗褐色土 ローム粒を少量含む
4. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。ローム塊を中や少量含む
5. 暗褐色土 ローム粒・小塊を中や少量含む
6. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む
7. 暗褐色土 ローム粒を少量含む

SB002-P9-10

1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む ローム塊を含む
2. 暗褐色土 ローム粒を中や多く含む ローム塊を含む
3. 暗褐色土 ローム粒を中や多く含む
4. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む
5. 暗褐色土 ローム粒を多く含む ローム塊を含む
6. 黄褐色土 ローム土体

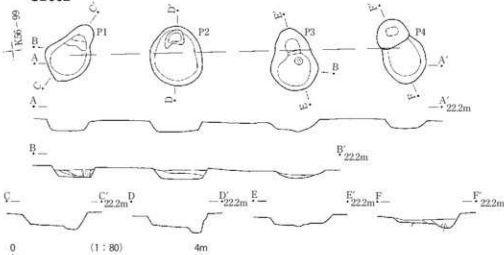
SB002-P11

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む しまりが強い
2. 暗褐色土 ローム粒・塊を含む
3. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む
4. 暗褐色土 ローム粒を含む
5. 暗褐色土 ローム粒・塊を少量含む
6. 黄褐色土 ローム土体
7. 暗褐色土 ローム塊を含む
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土 ローム粒を含む

SB002-P12

1. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む
2. 暗褐色土 ローム粒・塊を中や多く含む
3. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む
4. 黄褐色土 ローム土体
5. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む
6. 暗褐色土 ローム粒を含む
7. 黄褐色土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土 ローム粒を含む

SB002



SB002-P13

1. 暗褐色土 ローム粒を中や少量含む
2. 暗褐色土
3. 暗黄褐色土 ローム粒を多く含む
4. 暗褐色土 ローム粒・山跡を含む
5. 暗褐色土 ローム粒・塊を含む
6. 暗黄褐色土 ローム粒・塊を多く含む

SB002-P17

1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む ローム塊を含む
2. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む
3. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
4. 暗黄褐色土 ローム粒・塊を多く含む
5. 暗褐色土 ローム粒を多く含む ローム塊を含む
6. 黄褐色土 ハードローム土体

第166図 SB002掘立柱建物及び周辺の土坑群

SB002東方の土坑群はP5～P18の14基である。これらは遺物の出土が概して少なく、遺物からは各土坑の時期を特定できない。遺構の様相をみると、SB002東方に位置しており、SB002とともに掘立柱建物を構成する柱穴の存在が考えられる。しかし各土坑の並びは整然としたものではなく、掘立柱建物を明確に把握できない。またSB002の各柱穴が浅いため、失われた柱穴の存在も考えられる。検出された土坑の多くが他の遺構と重複していることも掘立柱建物の把握を難しくしている要因である。重複遺構は奈良・平安時代の堅穴住居跡SI019や中・近世以降と思われる溝状遺構SD006及び大きな攪乱坑であり、SB002東方の土坑群のなかに後世の土坑が混在する可能性もある。SI019と重複するP11の堆積土上層にはSI019の貼床かと思われるしまりの強い土層がみられるが、色調に黒みが強い点でやや難がある。もし貼床であるならば、P11はSI019以前の遺構となる。また縄文時代の堅穴住居跡SI016が近くに位置しているが、最も近いP18は他の土坑よりも形態が小さいこともあって、SI016の柱穴である可能性も考えられる。P14には木根がみられ、攪乱によるものとも思われるが、周囲の土坑との位置関係から削除しなかった。以上、掘立柱建物としての様相が不明瞭であるが、その可能性がある土坑群として、本項で掲載する。

SB002と組になる柱穴の深さがSB002の各柱穴と大差がないとすると、各土坑のうち、SB002に近いものはP5・P9～P12・P15の6基である。それらの深さは、P5が35cm、P9が36cm、P10が27cm、P11が38cm、P12が30cm、P15が28cmである。P9・P10はビットが2基接続した形態であり、土層の様相から南側のP9が北側のP10を切っている。P9がやや深いが、大きな差はない。なお各土坑とSB002底面の絶対的な高さは、確認面からの深さよりも差が少ない。

P9・P15はSB002のP1から直線的であるが、SB002のP1からP4までの直列軸からは大きく鈍角となるため、SB002を構成する掘立柱建物とは考えられない。両者はSB002のP1及びP14とともにやや直線的であり、別の掘立柱建物が存在する可能性が若干考えられる。

P5・P11とSB002のP1を結ぶラインはSB002のP1からP4のラインに対して直角的であり、P5・P11がSB002とともに一つの掘立柱建物を構成する可能性も若干考えられる。

その他の8基（P6～P8・P13・P14・P16～P18）はSB002よりも深い土坑である。そのうちP17は柱のあたりと思われる痕跡が検出され、P16も底面に柱のあたりと思われる若干の窪みがあり、両者は柱穴とみられる。確認面からの深さは、P16が67cm、P17が69cmであり、近い数値である。P16とP17の並びはSB002に対して並行的であり、SB002が壟を構成する柱穴列、P16とP17が身舎の柱穴の一部という想定が浮かぶが、これも少ない可能性を想定したものの一つである。P16・P17と深さが近いものにP6～P8があり、順に68cm・77cm・67cmの深さである。しかしこれらはP16・P17に対して整然とした配置にならない。

各土坑の平面形は円形・楕円形で、比較的整ったものと、やや不整なものがある。不整なものには土坑が2基重複していることや、片側が掘削されたことなどが考えられる。P16やP17の平面形は柱の抜き取りや設置によるものであることも考えられる。規模は土坑によって若干の差異があるが、平均的には径1m前後である。

土層断面が記録された土坑のうち、P15の1層は柱痕と思われる形態であるが、ローム粒を多量に含んでおり、柱痕と断定しがたい。P11は4層がロームの含有が少ない暗褐色土であり、柱痕の可能性はある。その周囲はロームの含有が多く、埋め戻された土層と思われる。またP11の最上層にはSI019の貼床と思われるしまりの強い土層がみられ、P11はSI019よりも古い掘立柱建物の柱穴か土坑と思われる。P13はSI019を切る遺構である。堆積土の主体は若干のロームを含む暗褐色土である。レンズ状に堆積しており、

自然堆積の可能性がある。

P16・P17以外の土坑は柱痕と思われる土層を確認できない。P16・P17は全体にローム粒の含有が多く、P16は暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土が複雑に堆積する。またP8は上中層にロームを多く含む。P8・P16・P17は埋め戻されていると思われる。P6はロームを比較的多く含む、埋め戻された可能性があるが、層序は単純であり、やや断定しがたい。P18は土層断面が掘り上げりの形態と合わないため掲載していないが、主体はローム粒を多く含む黒色土である。

#### SB003 (第167図、図版14・15)

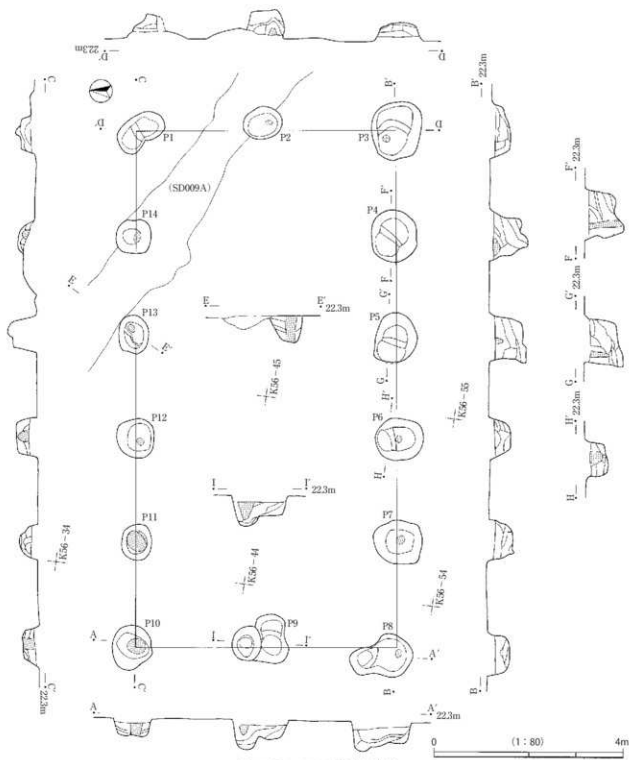
調査区北側中央のK56-45グリッド付近に位置する。桁行5間×梁行2間の側柱東西棟建物である。規模は桁行10.92m×梁行5.5mである。棟方位はN-83°-Eである。面積は60㎡である。柱のあたりまたは柱痕が多量の柱穴で確認された。柱間寸法は、桁行では1.9m～2.4m、梁行では2.35m～3.25mである。桁行の柱間が梁行の柱間に比べ短い。柱筋のとおりは桁行・梁行ともによく、整然とした作りである。柱掘り方は円形・楕円形で、径はおよそ0.6m～1.25mである。北側柱列の中間柱穴がやや小さい。幾つかのピットが二重・三重に重複したような形態の柱穴や底面に高低差のある柱穴は不整形な形態を呈するものも多く、規模も大きい。確認面からの深さは34cm～82cmである。隅柱穴が中間柱穴に比べて深い傾向はみられず、むしろ中間柱穴により深いものがある。また各辺でも深さの差に一定の傾向は認められない。柱痕の堆積土は黒色土・暗褐色土で、ロームの含有は概して少ないが、若干量を混入するものもある。柱周囲の埋土は、ローム粒・ロームブロックを多く含む黄褐色土層、あまり含まれない黒色土、その中間的な土層に分かれ、複雑な様相を示す。黄褐色土・暗黄褐色土が中層や上層に堆積するものや、黒色土と交互になるものなどがみられる。

#### SB004 (第168図、図版15)

調査区中央西寄りのJ56-67グリッドを中心に位置する。3間×3間の四面廂建物である。柱配置が正方形に近い形態の建物である。規模は桁行6.86m×梁行6.64mである。棟方位はN-8°-Wである。身舎は桁行1間×梁行1間で、規模は桁行2.98m×梁行2.86mである。面積は45.6㎡であるが、身舎部分は8.8㎡である。

廂の柱間寸法は、桁行では2.06m～2.42m、梁行では1.9m～2.66mである。南北の柱穴列はなかの間が長く、東西両端の間が短い。東西の柱穴列南北行ほど明瞭ではないが、ややなかの間が長く、北の間が短い。廂部分の柱筋のとおりは桁行・梁行ともによい。北西隅柱穴と東柱穴列南第2柱穴は2基のピットが連続し、柱の建て替えまたは抜き取りがなされたものと思われる。身舎部分の北東隅柱穴及び南東隅柱穴も小ピットと重複するが、周囲には固化した小ピットがあり、それらが本遺構に伴うものか不明である。

柱掘り方は円形・楕円形で、身舎の柱穴は規模が大きく、廂の柱穴は規模が小さい。径は身舎の柱穴が0.8m～1.32m、廂の柱穴が40cm前後である。確認面からの深さは身舎の柱穴が0.6m～1.04m、廂の柱穴が8cm～62cmである。南柱穴列の柱穴が深く、北柱穴列の柱穴が浅いが、遺存度の違いであろう。廂部分の柱穴で土層断面がとられたものについては、ほぼ柱痕が残っている。ほかのものも含めて土中部分の柱は残された可能性が大きい。柱痕の堆積土は黒色土で、ロームなどの含有はほとんどない。柱の周囲の土層は、若干のローム粒を含む暗褐色土・黒色土である。身舎部分の柱痕はやや不明瞭であるが、北西・北東の柱穴で若干の柱状部分を確認できる。その部分の堆積土はローム粒を若干混入する黒色土・暗褐色土で、廂部分よりもロームの混入が多い。周囲の埋土はローム粒・ロームブロックを主体とする黄褐色土層、若

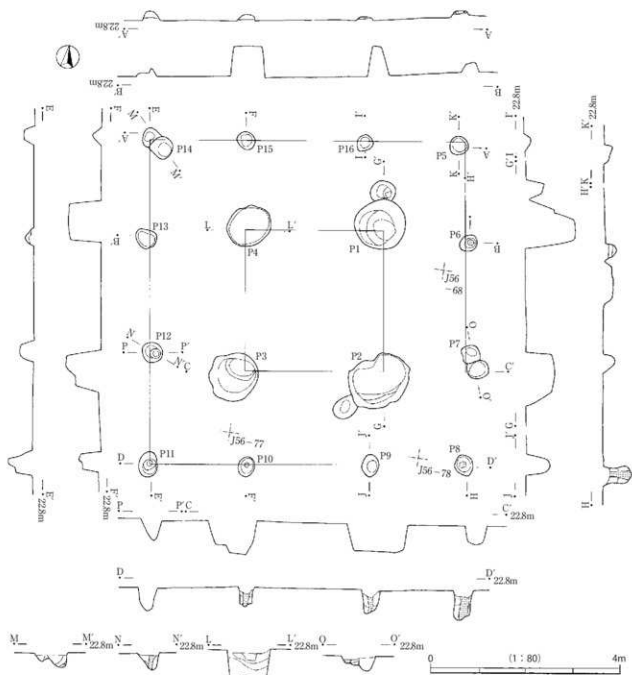


第167図 SB003掘立柱建物

干のロームを含む黒色土、その中間的な土層に分かれる。黄褐色土が上層や中層にも堆積している。

**SB005 (第169図、図版15)**

調査区中央西寄りのJ56-78グリッド付近に位置する。桁行2間×梁行2(3)間の掘立柱建物である。規模は桁行5.0m×梁行4.50mである。面積は23m<sup>2</sup>である。棟方位はN-68°-Eである。北からの傾きがやや

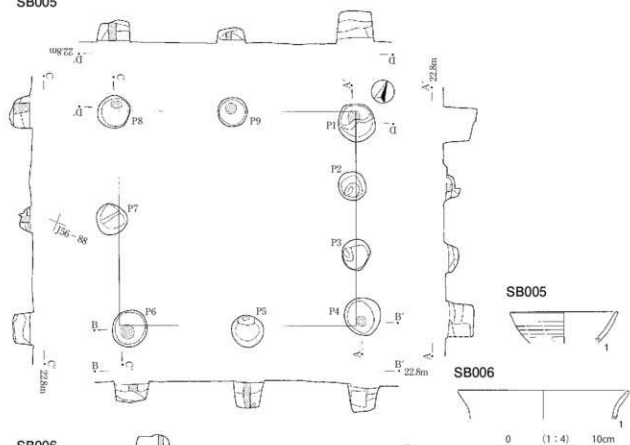


第168図 SB004掘立柱建物

大きいのが、概ね東西棟とみなして記述する。梁行は西側が2間であるが、東側は3間である。東側に入出口があったと思われる。柱のあたりまたは柱痕が東妻柱南第2柱穴（P3）を除く各柱穴の平面または土層断面で確認された。四隅の柱痕を結ぶと、西梁行が東梁行よりも若干長く、やや台形的な形態である。柱間寸法は、桁行では2.42m～2.62m、西梁行では2.36m、2.48m、東梁行では1.45m前後である。梁行の柱間は西側でも桁行の柱間に比べ短い。柱筋のとおりは比較的よい。柱掘り方は円形・楕円形で、径は58cm～80cmである。桁行・梁行とも中間柱穴がやや小さく、隅柱穴がやや大きい。確認面からの深さは隅柱穴が深く、中間柱穴は概して浅い。しかし南側隅柱中間柱穴（P5）だけは58cmで隅柱穴と同等以上の深さである。隅柱穴の深さは44cm～70cmで、平均値は56cmである。中間柱穴の深さは26cm～58cmで、平均値は



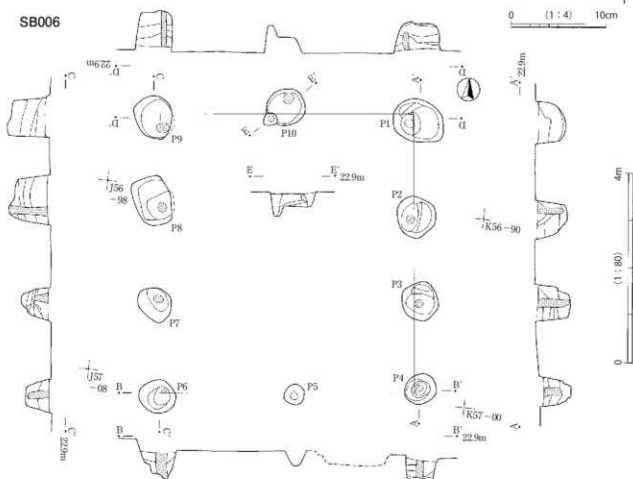
SB005



SB005

SB006

SB006



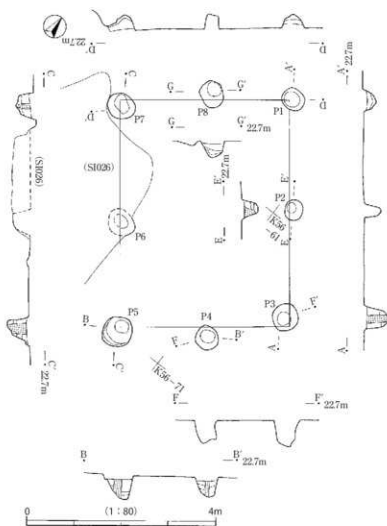
第169图 SB005・006掘立柱建物、出土遺物

36cmである。隅柱穴とは平均値で20cmの差がある。柱痕の堆積土は黒色土で、ロームの含有は概して少ない。周囲の埋土は暗褐色土、(暗)黄褐色土、黒色土である。中・下層にローム粒の含有が多い。

図示した遺物はロク土師器環1点である。口縁・体部の小破片である。器面は荒れ、口縁端部と外面の一部は焦げて黒ずんでいる。被熱痕跡が顕著である。南東隅柱穴(P4)から出土した。

#### SB006 (第169図、図版15)

調査区中央西寄りのJ56-99グリッド付近に位置する。桁行3間×梁行2間の欄柱南北棟建物である。規模は桁行5.92m×梁行5.36mである。面積は31.7㎡である。棟方位はN-6°-Wである。柱のあたりまたは柱痕が南妻柱中間柱穴(P5)を除く各柱穴の平面または土層断面で確認された。柱間寸法は、桁行では1.78m~2.24m、梁行では2.6m~2.76mで、桁行の方がやや短い。各柱穴は、北妻柱中間柱穴(P10)が整った建物の想定ラインよりもやや外側に位置する以外は、直線的である。しかしP10の柱のあたりをみると、柱穴の中心よりもさらに外側に位置し、その一方で北西隅柱穴(P9)の柱のあたりが南側に寄ることから、北妻柱の柱配置はかなりゆがんだ位置関係となる。そのほかの柱筋のとおりは直線的である。柱掘り方は円形・楕円形で、南妻柱中間柱穴(P5)を除いた径は62cm~112cmである。P5はかなり小さく、径44cmである。確認面からの深さはP5が32cm、P10が34cmで浅いが、そのほかは64cm~90cmであり、深い。なおP10は南西側に小ピットがあって、ほかの底面よりも24cm低くなっている。この部分に柱があったことも考えられるが、その場合北梁行の柱間寸法が東と西でかなり異なる。やや外に突き出すが、図示した柱のあたりの方が左右(東西)のバランスがよい。またP5とはほぼ同じ深さであり、共通性があるといえる。P5・P10を除く深さの平均値は75cmである。柱痕の堆積土は黒色土で、ロームの含有は少ない。周囲の埋土は暗褐色土、暗黄褐色土、黒色土である。中層や上層にローム粒を多く含む土層がみられるものや、黄褐色土と黒色土が交互に堆積する土層などがみられる。

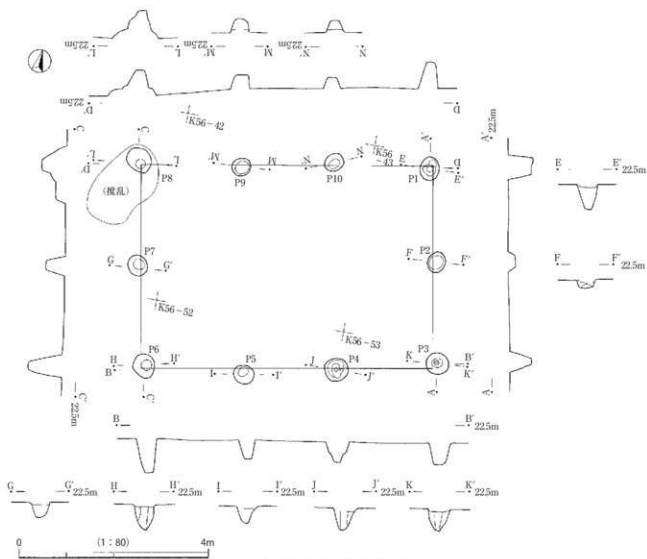


第170図 SB007掘立柱建物

く、径44cmである。確認面からの深さはP5が32cm、P10が34cmで浅いが、そのほかは64cm~90cmであり、深い。なおP10は南西側に小ピットがあって、ほかの底面よりも24cm低くなっている。この部分に柱があったことも考えられるが、その場合北梁行の柱間寸法が東と西でかなり異なる。やや外に突き出すが、図示した柱のあたりの方が左右(東西)のバランスがよい。またP5とはほぼ同じ深さであり、共通性があるといえる。P5・P10を除く深さの平均値は75cmである。柱痕の堆積土は黒色土で、ロームの含有は少ない。周囲の埋土は暗褐色土、暗黄褐色土、黒色土である。中層や上層にローム粒を多く含む土層がみられるものや、黄褐色土と黒色土が交互に堆積する土層などがみられる。

図示した遺物は武蔵型の土師器甕1点で、口縁部の小片である。北西隅柱穴(P9)から出土した。

SB007 (第170図、図版15) 調査区中央のK56-60グリッド付近に位置する。桁行2間×梁行2間の側柱建物である。規模は桁行4.80m×梁行3.58mである。面積は17.2㎡である。棟方位はN-38°-Wである。北からの傾きがかなり大きい。南北棟とみなして記述する。柱痕が比較的多くの柱穴から確認された。ほかのものも含めて土中部分の柱は残されていた可能性が大きい。柱間寸法は、桁行では2.22m～2.46m、梁行では1.65m～1.98mである。桁行の柱間が梁行の柱間に比べ長い。柱筋のとおりは南北妻柱列でありよくなく、中間柱穴がやや突き出ている。東西側柱列は妻柱列と比べれば直線的である。西側でSI026と重複し、西側柱中間柱穴(P6)の検出が十分にできなかった。SI026との新旧関係は不明である。柱掘り方は円形・楕円形で、径は38cm～70cm、確認面からの深さは30cm～52cmである。各柱穴の規模に大差はなく、隅柱穴が中間柱穴に比べて深い傾向もみられない。柱痕の堆積土は黒色土で、ロームの含有は少ない。柱周囲の埋土は、ローム粒・ロームブロックを若干含む暗褐色土、やや多く含む暗褐色土、かなり多く含む暗褐色土層に分かれる。南妻柱中間柱穴(P4)や、南西隅柱穴(P5)では暗褐色土と暗黄褐色土が交互に堆積している。



第171図 SB008掘立柱建物

**SB008 (第171図、図版15)**

調査区中央やや北寄りのK56-42グリッド付近に位置する。桁行3間×梁行2間の側柱東西棟建物である。規模は桁行6.18m×梁行4.28mである。面積は26.5㎡である。棟方位はN-81°-Eである。3か所の柱穴で柱痕が確認されたが、ほかは確認できなかった。柱間寸法は、桁行では1.92m～2.14m、梁行では2.10m～2.16mである。南北桁行なかの間がおおよそ1.9mで、ほかよりやや短い。そのほかは2.1m強で、梁行と桁行両端の間は等間である。柱筋のとおりは比較的よい。柱掘り方は円形・楕円形で、径は34cm～54cmである。各柱穴の平面規模は径が45cm前後のものが多く、概して同等の大きさである。しかし確認面からの深さは隅柱穴が深く、中間柱穴がやや浅い。隅柱穴の深さは46cm～72cmで、平均値は58cmである。中間柱穴は16cm～44cmで、平均値は32cmである。柱痕がわかる柱穴の土層をみると、柱痕部分の堆積土は黒色土で、ロームの含有は少ない。周囲の埋土はローム粒を多く含む黒褐色土を主体とする。

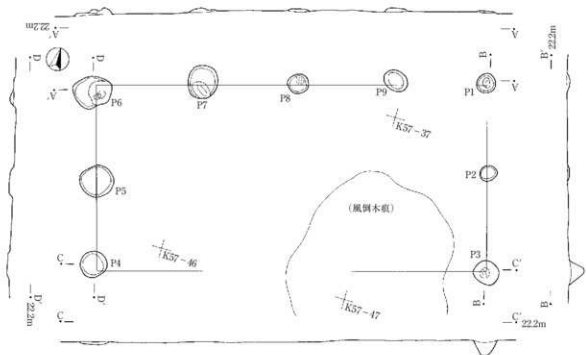
**SB009 (第172図、図版11・15)**

調査区南東側のK57-36グリッド付近に位置する。桁行4間×梁行2間の側柱東西棟建物である。規模は桁行8.28m×梁行3.94mである。面積は32.6㎡である。棟方位はN-74°-Eである。南側柱列中間柱穴は攪乱に破壊されことと、確認面よりも上部に存在したため、検出できなかった。検出された柱穴も概して浅い。柱のあたりが北西隅柱穴(P6)と北側柱列中間柱穴(P8)で確認されたが、そのほかの柱穴では確認できなかった。柱痕は土層断面でも不明である。柱間寸法は、梁行では1.8m～2.15m、桁行では1.95m～2.22mで、ほぼ等間である。柱筋のとおりは全体的に概ねよい。柱掘り方は円形・楕円形で、径は32cm～82cmで、東妻柱中間柱穴(P2)がやや小さく、北西隅柱穴(P6)・西妻柱中間柱穴(P5)がやや大きい。各柱穴の平面規模には若干の差があるが、遺存が悪いことも影響していると思われる。確認面からの深さは4cm～32cmである。南東隅柱穴(P3)がやや深い、そのほかは10cm以下のものが多い。南東隅柱穴以外の隅柱穴と中間柱穴で深さの差はない。堆積土はローム粒を若干含む黒色土が主体で、一部にローム粒を多く含む土層がみられる。

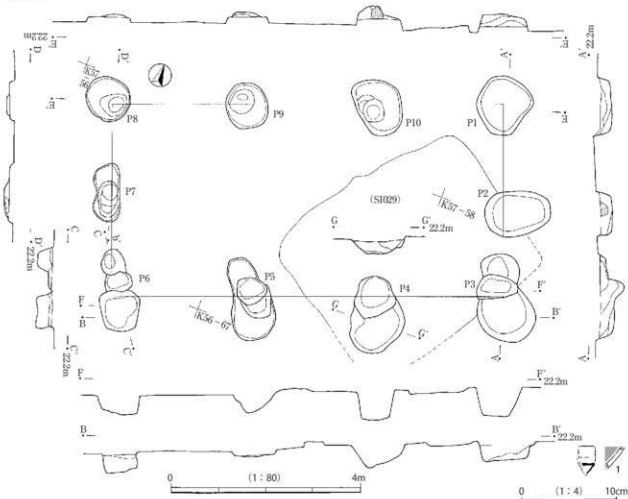
**SB010 (第172図、図版11・16)**

調査区南東側のK57-57グリッドを中心に位置する。桁行3間×梁行2間の側柱東西棟建物である。規模は桁行8.28m×梁行3.96mである。面積は32.8㎡である。棟方位はN-70°-Eである。ピットが二連・三連状に複合した形態を呈する柱穴が多く、柱が抜き取られ、建て替えが行われたものと思われる。柱痕が東妻柱中間柱穴(P2)と北側柱列第2柱穴(P10)の土層断面で確認されたが、ほかは不明である。柱間寸法は、梁行の数値がやや不明瞭であるが1.9m～2.3m程度であろう。桁行では2.7m～2.85mである。桁行が梁行の柱間に比べ長い。桁行の柱間はほぼ等間である。柱筋のとおりは南桁行がやや不明瞭であるが、概ねよいと思われる。東側でSI029と重複しているが、本遺構の方が深いため柱穴を検出することができた。SI029との新旧関係は不明である。柱掘り方は概ね円形・楕円形であるが、幾つかのピットが複合しているため、不整形な形状を呈するものが多い。径は比較的形のよい北西隅柱穴(P8)と北側柱列西第2柱穴(P9)で88cm～96cmである。そのほかは不整形な形態で、長径はそれ以上の数値である。しかし短径は80cm～90cm程度のものが多く、P8・P9と同等である。西妻柱中間柱穴(P7)は二つか三つのピットが複合した形態であるが、短径は48cm～58cmであり、ほかと比べて小さい。確認面からの深さは16cm～62cmである。北西側のP7・P8・P9が16cm～24cmで浅い。逆に南東隅柱穴(P3)・南側柱列第2柱穴(P4)は62cmで、深い柱穴である。そのほかの4柱穴は30cm～40cm台の深さである。平均値は38cmで

SB009



SB010



第172図 SB009・SB010掘立柱建物、出土遺物

ある。柱穴は深さの差が大きく、特定の傾向はみられない。柱痕の堆積土は黒色土で、ロームの含有は少ない。柱周囲の埋土は、ローム粒を若干含む黒色土、ローム粒・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土、ロームを主体とする黄褐色土である。

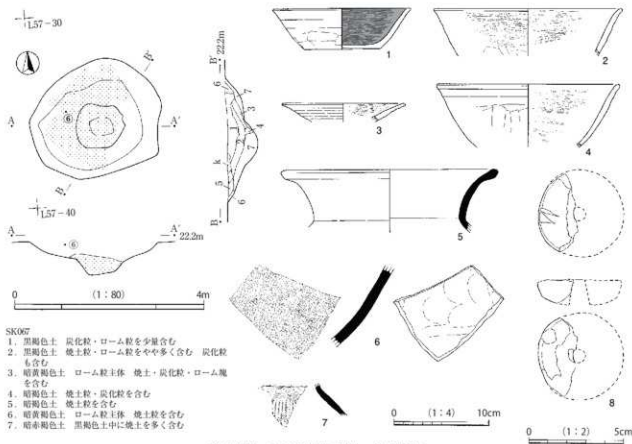
図示した遺物はロクロ土師器環の体部片1点である。体部外面に墨書があるが、小破片であり、判読できない。内面は黒色処理・ミガキが施されている。南桁行西第2柱穴（P5）から出土した、

### 3 土器焼成遺構・焼土遺構

#### SK067（第173図、図版16・44・47）

調査区南東側のL57-30グリッドに位置する。底面に焼土が厚く堆積する遺構である。SK068・SK067の存在から土器焼成遺構の可能性が考えられるが、確定しがたい。その可能性を含む焼土遺構としておく。平面形は楕円形で、確認面の長径は2.8m、短径は2.36mである。底面は中央で一段窪んでいる。底面全体の長径は2.19m、短径は1.68m、窪み部分の上端径は1.03m×87cm、下端径は46cm×37cmである。確認面からの窪みの底面までの深さは70cmである。窪み周辺の底面はなだらかに上がり、壁の傾斜も比較的緩やかである。壁と窪み周辺の底面との境はやや不明瞭なところがある。堆積土は焼土粒・炭化粒を含む土層が全体的に広がっている（図網点部分）。特に窪み部分には焼土が厚く堆積している。焼土の分布範囲は東側が空いており、本遺構が土器焼成遺構であった場合、東側が前部の可能性がある。

図示した遺物は8点である。1はロクロ土師器環、2・4はロクロ土師器鉢、3はロクロ土師器皿、5



第173図 SK067焼土遺構、出土遺物

～7は須恵器甕である。8は土製紡錘車である。

1は40%程度の遺存である。内面に黒色処理が施されている。体部下位外面・底部外面は手持ちヘラケズリが施され、切り離し痕はみえない。2～4は口縁・体部の破片である。2・4は環形の器形であるが、寸法が大きく、器高が深いため鉢とした。4は口縁端部外面が肥厚し、玉縁状の形態を呈する。2は内外面に、4は内面にミガキが施されている。4の体部外面は縦方向に手持ちヘラケズリが施され、調整も坏とは異なっている。5は口頸部の破片である。口縁部から頸部へはなだらかに移行し、境は不明瞭である。色調は黒灰色で、焼成はややあまい。胎土は灰白色の砂粒・小石、白雲母を含む。新治窯産の須恵器である。6は胴部の破片である。外面には筋状の線があり、ヘラ書きの可能性があるが、断定しがたい。調整痕の可能性の方が高いと思われる。内面は当て具痕がみられる。色調は灰色で、外面はやや黒ずむ。焼成は良好である。胎土は灰白色の砂粒・小石、白色針状物を含む。南比企窯産と思われる。7は胴部上位の破片である。外面は黒色、内面は黒灰色の色調である。7の外面は黒みが強いが、そのほかは5と似ており、同一個体と思われる。

8はやや扁平な紡錘車である。孔を境に割れており、1/2以下の遺存である。上面は平坦であるが、側面はやや凹凸がある。色調は淡褐色で、焼成はややあまい。

6は堆積土中層から出土した。ほかの遺物は出土位置が不明である。

#### SK068 (第174図、図版16・44)

調査区北側中央のK56-30グリッドを中心に位置する。土器焼成遺構と思われる遺構である。横長長方形部分の南側に下彫れした不整な楕円形部分が接している。楕円形部分は長方形部分に付属する施設と思われる。長方形部分の長径は1.64m、短径は1.4m、確認面からの深さは33cmである。楕円形部分の長径は東西方向で74cm、短径は南北方向で68cm、確認面からの深さは6cmである。全体の長さは南北方向で4.1m、長軸方位はN-0°-E(W)である。なお長軸方向は長方形部分の長径に直交する。楕円形部分は長方形部分の中心からほぼ真南の位置にある。

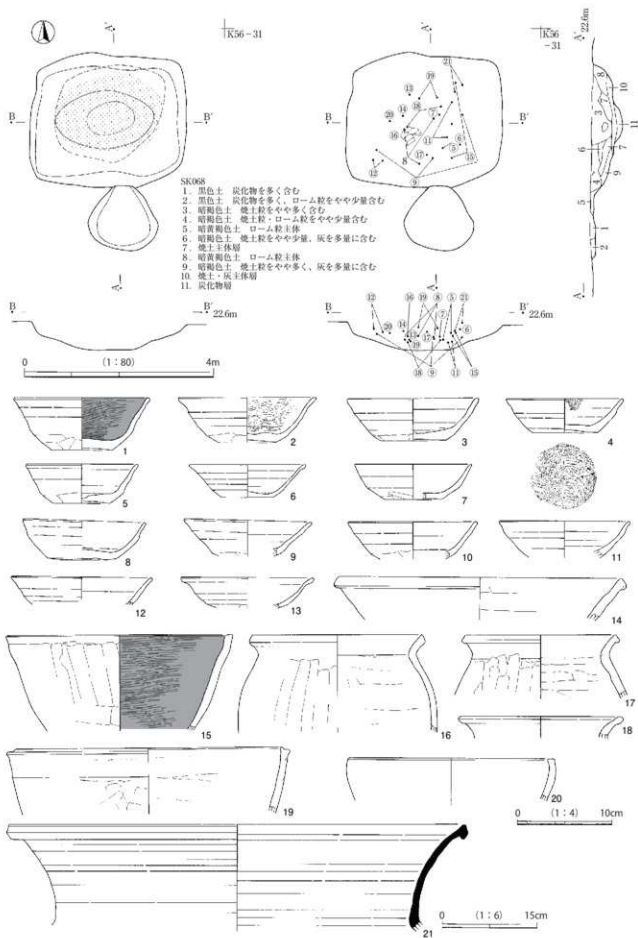
長方形部分の底面は中央が横長の楕円形状に窪んでおり、炭化物が堆積している。窪みの周囲の底面は壁まで緩やかに上がり、壁との境はあまり明瞭でない。壁はやや急角度で立ち上がり、上部はより垂直的であったと思われる。底面は広く被熱している(図網点部分)。また焼土・炭化物・灰が混じった土層が被熱範囲よりも若干広がって炭化物層の上部に堆積している。その範囲を破線で図示した。上層は焼土粒を若干含む暗褐色土が主体である。楕円形部分は炭化物を多く含む。

長方形部分は焼成遺構の中心部である。楕円形部分はその前側の施設で、送風口の役割を果たしていたと思われる。

図示した遺物は21点である。1～13はロクロ土師器坏、14・15・19・20は土師器鉢、16～18は土師器甕、21は須恵器甕である。器面の荒れや剝離、変色のみられる土器が多く、ほとんどの遺物が二次的に火を受けていると思われる。

4は口縁端部にわずかな欠損があるが、完形に近い土器である。4以外では8が60%程度遺存するが、やや細かく割れている。4・8以外の坏は1/2以下の遺存で、そのほかの器種も遺存が少ない。

4は欠損部を境に大きく2片に割れて接合する。また欠損部に小片が接合し、欠損部と合わせて逆三角形状をなす。打ち欠きされた可能性が考えられるが、断定しがたい。油煙が口縁端部内面の2か所と底部内面に付着しており、灯明器として使用された土器である。油煙は欠損部には付着していない。



第174図 SK068土器焼成遺構，出土遺物



調整技法をみると、3・4・5・7・8の底部には回転糸切り難し痕がみられる。4・8はその後無調整であるが、3・7は周縁に手持ちヘラケズリが施されている。ただし7はケズリが弱く、周縁まで糸切り痕がみられる。5は体部下位に手持ちヘラケズリが施されている。器面が荒れているため、底部外面にヘラケズリが施されているか不明瞭である。糸切り痕は周縁部までみられる。1・2の底部は全面に手持ちヘラケズリ、6は全面に回転ヘラケズリが施され、糸切り痕はみえない。5が不明瞭であるのを除いて、体部下位の調整は底部と同様である。4・8は体部にヘラケズリが施されていない。底部を欠く9・10・13の体部調整は手持ちヘラケズリと思われる。しかし13は回転の可能性も若干考えられる。1は内面に黒色処理・ミガキが、2は内面にミガキが、施されている。

14・15・19・20は大形の鉢で、器壁が厚い。遺存は口縁・体部の一部であり、少ない。口縁端部がいずれも角張っている。19は内面側が上方やや内側に突出し、外面側も外方に若干突出する。20も19ほどではないが、その傾向がうかがえる。また15も内面側が肥厚している。15は内面に黒色処理・ミガキが施されている。土師器甕16～18も鉢と同様に器壁が厚く、ずんぐりした作りである。口縁端部断面も16・17は角張っており、鉢と似ている。18はやや丸みが強いが、若干肥厚する点で共通性がうかがえる。21は須恵器大甕の口頭部片である。非常に大形のものであるので、遺存割合は少ないが、現存する破片だけでも重量感がある。口縁端部は外面に断面三角形の厚い突帯が廻っている。突帯の下方は垂下している。器壁は非常に厚い。わずかに遺存する胴部外面の肩部に灰黄色の降灰軸が付着している。色調は外面が黒灰色、内面が暗灰色である。焼成は良好で、硬質である。胎土は灰白色の砂粒・小石、黒色粒を多量に含む。また白色針状物もみられる。南比企窯産と思われる。

遺物は長方形部分全体から出土している。出土層位をみると、底面からはやや浮いており、特に最下層の炭化物層（11層）にはほとんど含まれていないと思われる。遺物は土器焼成遺構の廃絶後の窪地に廃棄されたものであろう。被熱痕跡がみられることから、ほかの不要物とともに焼却されたものと考えられる。

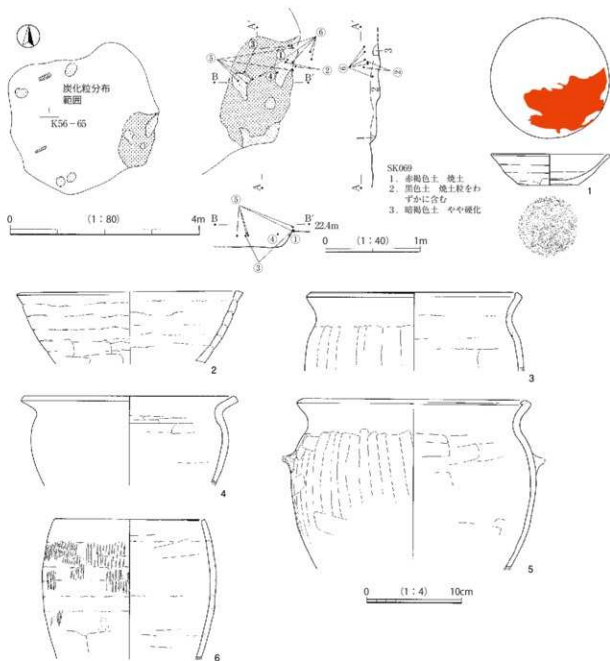
#### SK069（第175図、図版16・44）

調査区中央のK56-65グリッド付近に位置する。山砂・焼土・炭化物が集中する遺構であるが、その性格は不明瞭である。遺存の悪い堅穴住居跡や、少量の鉄滓が出土したことから小鍛冶遺構などの可能性が考えられるが、特定しがたい。広く焼土遺構としておく。山砂は長径1.2m×短径0.7m程度の範囲に集中している。その山砂の集中範囲の東側に炭化物・炭化材が分布する範囲が大きく広がっている。その範囲はおよそ長径3.1m×短径2.6mである。焼土範囲は山砂及び炭化物の分布範囲内の所々にみられる。山砂範囲内は焼土が濃く分布する。

本遺構の山砂がカマドの崩壊したものとすれば、炭化物の分布状況から東側にカマドをもつ堅穴住居跡ということになる。本遺跡における堅穴住居跡において、東側にカマドをもつものにSI032があるが、調査区内西端に位置し、本遺構とはかなり距離が離れている。しかもSI032のカマドは堅穴の北東側に位置するのに対して、本遺構の場合は東やや南寄りに位置することになり、違和感がある。

また本遺構は掘立柱建物SB003の南に位置するが、本遺構の南方及び東西には遺構がみられない。SB003や掘立柱建物SB008の南方が広場的な空間であったとすると、本遺構は広場の端にぽつんと設けられたように思われる。本遺構の位置には特異な様相がうかがえる。

したがって一般的な堅穴住居以外の選択肢として、SB003に付属する小鍛冶工房や、物的な確証はないが祭祀遺構の可能性も考えられる。



第175図 SK069焼土遺構、出土遺物

図示した遺物は6点である。1はロクロ土師器環、2は土師器鉢、3・4は土師器甕、5は土師器甕である。6は焼成質・器種ともに迷うが、土師器甕としておく。

1は全く破損のない完形の土器である。底部外面の調整は静止糸切り離し後ほぼ無調整である。体部外面下位は手持ちヘラケズリが施されている。内面には赤色物質の付着がみられる。なおそれ以外の内外面にも赤みや黒みをもつ部分が顕著で、二次的な被熱状況がうかがえる。しかし図示した部分の赤みは被熱によるものよりも濃く、筆で塗ったような痕跡があるため何らかの物質の付着とした。2は口縁・体部の1/4が遺存する。非ロクロと思われる土師器鉢である。内外面に粘土紐の接合痕が顕著であり、この点では作りが精良とはいえない。しかし焼成は良好である。口縁端部は角張っており、平坦面をもつ。横方向のナデが比較的丁寧に施されている。体部外面下位はやや粗い手持ちヘラケズリが施されている。3・

4は口縁・胴部上位の一部である。4は口径がやや大きいわりに器高が低い器形と思われる。器壁は厚く、口縁端部が角張っている。口縁部には指で押したような痕が2か所あるが、意図的なものかどうか不明である。胴部内外面は横方向のナデが施されている。ロクロ目かと思われる凹凸が若干みられ、回転台による成形の可能性があるが、断定しがたい。3は口縁端部が内面側上方に立ち上がる形態の甕である。4同様器壁が厚い。5は口縁部から胴部中下位まで、全体の1/4程度が遺存する。口縁端部は内側に丸く折り返された形態である。把手が1か所遺存するが、頂部がやや欠損する。胴部に貼り付けられており、貼り付け部分の形態は横長の楕円形である。内面も強く押されて、窪んでいる。調整は丁寧で、比較的作りがよい土器である。焼成は良好で、胎土は褐色粒を多く含む。6は全体で30%程度の遺存であるが、口縁部はもう少し遺存がよい。口縁部と胴部にくびれがなく、甕か鉢か迷う器形である。器高が深いことから一底甕としておく。また外面に須恵器技法である平行タタキがみられる。この点でも須恵器か土師器か迷うが、色調が淡褐色であり、須恵器窯で焼成していないと思われることから土師器とする。須恵器窯の停止後、須恵器技法を受け継いだ土器製作者が土器焼成遺構で焼成した製品と考える。タタキ目は弱く、消えている部分がある。胴部外面下位はヘラケズリが施されている。内面調整はヘラナデと思われる。粘土紐の接合痕が内外面にみられ、特に外面に著しい。二次的な被熱により内外面に赤みや黒みを帯びる部分がある。焼成はあまく、被熱も加わって器面は荒れている。

1～6はいずれも山砂集中範囲から出土した。確認面上での出土が多く、本来はより多く遺存していた可能性がある。1については正位・倒位などの状況は不明である。

#### SK070 (第176～177図、図版16・17・44・45・47)

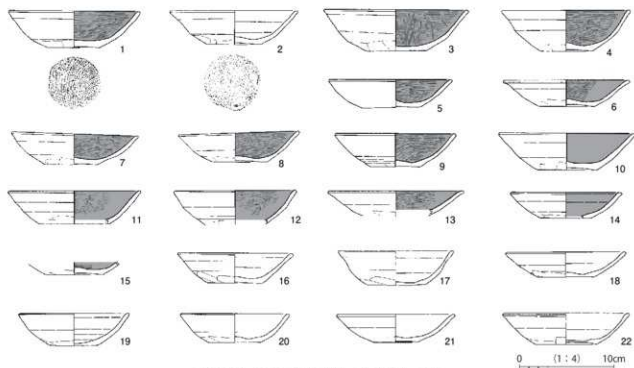
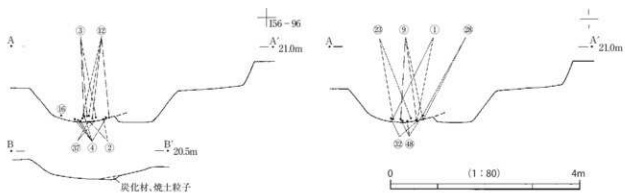
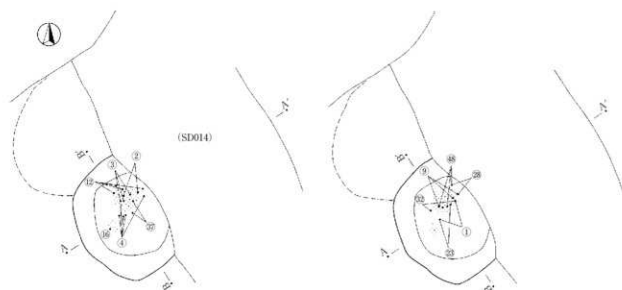
調査区西端のI56-85グリッドを中心に位置する。土器焼成遺構の可能性があるが、確定しがたいため焼土遺構としておく。北東側の一部が溝状遺構SD014により切られている。また北西側に広い焼土範囲がみられる。本遺構で生じた大量の焼土が廃棄されたものと思われる。

長径は1.26mである。遺存する短径は0.9mであるが、推定1.1m前後になると思われる。底面は長径が87cmである。遺存する短径は72cmで、本来の径もこれを若干上回る程度であろう。底面はかなり遺存すると思われる。確認面からの深さは34cmである。断面形は碗形状である。底面中央が最も低いが、壁に向かって緩やかに上昇する。遺存する壁の傾斜もあまり急ではなく、底面との境も不明瞭なところがある。底面には炭化材と焼土の集中する部分が、あまり広い範囲ではないがみられる(図網点部分)。

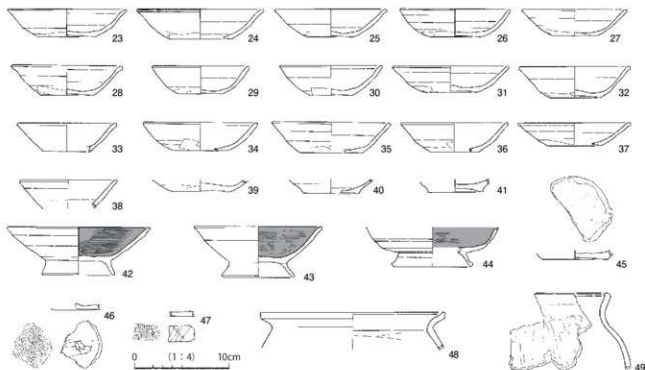
出土遺物は多量である。坏などの供膳具が多く、甕は少ない。1～41・45～47はロクロ土師器坏、42～44はロクロ土師器高台付坏、48・49は土師器甕である。

坏及び高台付坏の坏部は寸法に若干のばらつきがあるが、浅い器形で、底径は概して小さく、口縁・体部は内湾気味であるという相似の器形をもつ。図示した遺物のうち、1～5・7・8・16・19はかなり遺存がよく、2/3以上の遺存である。これらのうち、2は接合して完形の坏であり、16も接合して完形に近い坏である。ほかの坏はやや細かく割れている。

1・3～15・46・47の坏及び42～44の高台付坏は内面に黒色処理が施されている。2・16～41・45は黒色処理が施されていない坏である。底部の調整は糸切り後はほぼ無調整である。糸切り技法は41が回転糸切りである以外は静止糸切りである。坏の体部下位の調整は手持ちヘラケズリが多い。ヘラケズリが施されているが、ケズリ痕が弱いものもやや目立ち、ほぼ無調整か無調整に近いものもある(5・26)。45も同様と思われるが、体部の遺存が少なく、不明瞭である。40・41は全くケズリが施されておらず、底部が全



第176図 SK070焼土遺構、出土遺物 (1)



第177図 SK070焼土遺構出土遺物（2）

体にやや突出する。45は底部内面に黒色物が付着しているが、漆と思われる。漆容器またはパレットとして使用された土器である。46・47は底部外面に焼成前の条線がみられる。46はやや不整な4条の平行線で、交差する線があるようにも思われるが、不明瞭である。47は現状で4条の平行線と2条の平行線が斜めに交差する。これらはヘラ書きの可能性があるが、不明瞭である。単なる調整痕かもしれない。

42～44は無台の坏に似た坏部に低い高台が付くものである。高台径も坏部底径に合わせて小さく、「ハ」の字状に開く。48・49は甕の口縁部・胴部上位の破片である。48は常陸型の甕である。胎土は褐色粒・白色粒・暗灰色粒を含む。49は在地の甕である。口縁端部が内側側に肥厚し、内側に丸めたような形態を呈する。

図示した遺物のうち、遺構内での位置がわかるものは12点である（1～4・9・12・16・23・28・32・37・48）。これらは底面の北半部から出土した。出土層位が底面であることから、これらを含む大半の土器が本遺構の廃棄年代を示すと考えられる。

#### 4 土坑

##### SK071（第178図、図版17・45・48）

調査区南東側のK57～69グリッドに位置する。平面形はやや不整な長楕円形または長方形である。上端が曲線的な部分と直線的な部分がある。長径は3.41m、短径は1.42m～1.91m、確認面からの深さは79cm～93cmである。底面の形態も不整である。長径は1.58m～1.99m、短径は0.66m～1.0mである。底面は凹凸がある。また南東端から北西端に向かって10cm前後高まる。壁は北西側が斜めに立ち上がる。そのほかは比較的急で、短軸側上部は垂直的である。南東側の壁面は凹凸があって、やや不整である。長軸方位はN-40°-Wである。堆積土は若干のローム粒・焼土粒・炭化粒を含む暗褐色土が主体である。均一性が強く、

埋め戻された可能性がある。

図示した遺物は6点である。1～3はロクロ土師器杯、4・5はロクロ土師器高台付杯、6は鉄製品である。

1は70%の遺存である。1・2・3・5は各々接合関係がない。1の欠損部は口縁・体部の1/3弱のほか、口縁端部をわずかに欠く。欠損が意図的であるか断定しがたい。欠損部以外には破損がない。なお4を除いて接合関係がない。2は40%の遺存である。3は底部周辺の破片である。1・2の底部は糸切り離し後ほぼ無調整である。ただし1は体部下位に手持ちヘラケズリが施されており、そのケズリのなかには底部周縁のケズリとの差が微妙なものがある。2の体部はヨコナデのみであり、底部はわずかに突出気味である。器面は全体的に荒れ、内面は黒ずむ部分もみられる。二次的な被熱によるものと思われる。3は小さな底部から体部は屈曲して立ち上がる。体部下位外面・底部外面に回転ヘラケズリが施されており、切り離し痕がみえない。体部内面に油煙が濃く付着しており、灯明器として使用された土器である。4・5は足高台杯である。4は接合して90%が遺存する土器である。欠損は口縁部の一部である。杯部の接合破片は2片であり、少ない。本来は完形であったかもしれない。底部内面にひび割れがある。5は底部周辺の破片である。杯部底部と高台部上位の一部が遺存する。4よりも器壁が厚いが、高台部上位の径はほぼ同じである。

6は棒状の鉄製品である。同一個体と思われる2片が出土したが、接合しない。先端(末端)が遺存するが、上部を欠損するため製品を特定しがたい。釘、紡錘車の紡軸、工具・漁具などが考えられる。

1は北西側の壁に立ち上がる底面際から正位で出土した。3・4・5も平面的には1に近い位置からの出土であるが、各々出土層位が異なる。4は上層から正位で出土し、5も確認面付近からの出土である。本来はより遺存していた可能性がある。3は下層から出土した。2はやや離れて北西側北寄り底面から倒位で出土した。

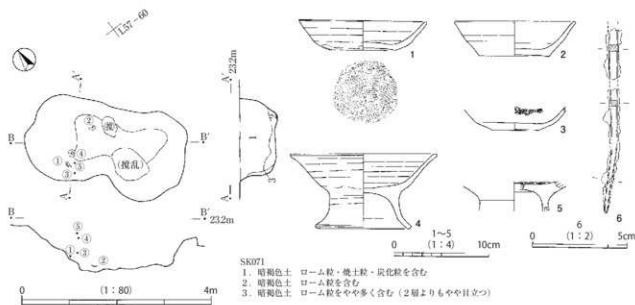
本遺構は土坑墓や祭祀的な土坑の可能性が考えられる。その理由としては、まず人為的に埋め戻されたと思われること、次に出土遺物の内容が、完形に近い高台杯(4)、かなり遺存が良いにもかかわらず欠損部以外に接合しない杯(1)、灯明器(3)などであること、それらが比較的まとまって出土したこと、などがあげられる。土坑墓とみた場合、本遺構は遺体を埋葬するのに十分な大きさがあるが、同様の遺構が周囲にみられないことが難点である。

#### SK072 (第179図、図版17・45)

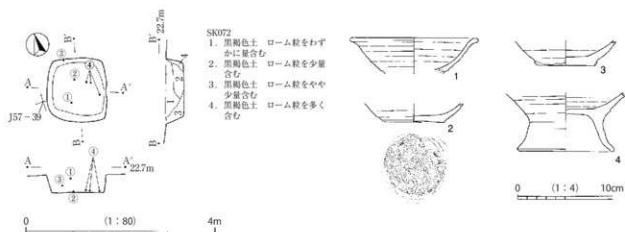
調査区南側のJ57-29・39グリッドに位置する。平面形は方形で、長径は1.34m、短径は1.24mである。長径と短径の差が少なく、正方形に近い形態である。底面は長径1.12m、短径1.08mである。東辺がわずかに張り出している。確認面からの深さは37cmである。底面は平坦で、壁は垂直的に立ち上がる。底面と壁の境は明瞭である。堆積土は若干のローム粒を含む黒褐色土である。

図示した遺物は4点である。1・2・3はロクロ土師器杯、4はロクロ土師器高台付杯(椀)である。

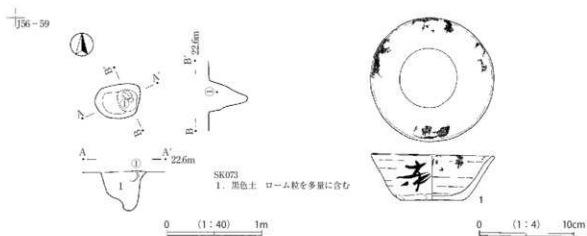
1は口縁・体部の破片で、口縁部は1/2弱遺存する。口縁部は外反し、端部が肥厚する。2・3は底部周辺の破片である。2は底部全体が遺存する。ともに底部は回転糸切り離し後無調整である。底部は全体に突出して、高台状であり、特に3が顕著である。また、ともに底部の粘土が体部側にはみ出す部分がある。1の体部下位も底部側からの粘土がはみ出したりは貼り付けがみられ、2・3と同様の底部をもつか、高台をもつと思われる。なお1は3と質感が異なり、別個体である。2と接合することはあり得ない。



第178図 SK071土坑、出土遺物



第179図 SK072土坑、出土遺物



第180図 SK073土坑、出土遺物

4は足高台の坏(碗)である。台部周辺の一部が遺存する。底部外面にはわずかに回転糸切り離しの痕跡がみられる。

1～4は散在的に出土した。出土層位をみると、2・4が床面・下層、3は中層、1は上層である。

#### SK073 (第180図、図版17・45)

調査区中央やや西寄りのJ56-59グリッドに位置する小土坑である。平面形は楕円形で、長径は49cm、短径は36cm、確認面からの深さは41cmである。底面は西側がやや浅く、東側が深い。

出土遺物はロクロ土師器坏1点である。底部にひび割れがあるほかはほぼ破損のない完形の土器である。体部外面に正位で「寺」の墨書文字がある。灯明器で、口縁・体部内面には油煙が4か所付着している。油煙が付着した1か所の口縁端部には、灯芯固定のためのわずかな打ち欠きが見られる。やや器高の深い土器で、底部外面・体部外面下位には手持ちヘラケズリが施されている。底部のケズリは全面に及び、切り離し痕は完全に消されている。

1は上層から出土した。口縁部が上であるが、かなり斜めに傾いた状態での出土である。墨書・灯明器で、なおかつ完形であることを考えると、意図的に埋納されたものと思われる。本遺構の西方6mのところには掘立柱建物SB004が所在する。SB004は村落内の仏堂とみられるが、墨書「寺」はSB004を指しているのではないかと考えられる。

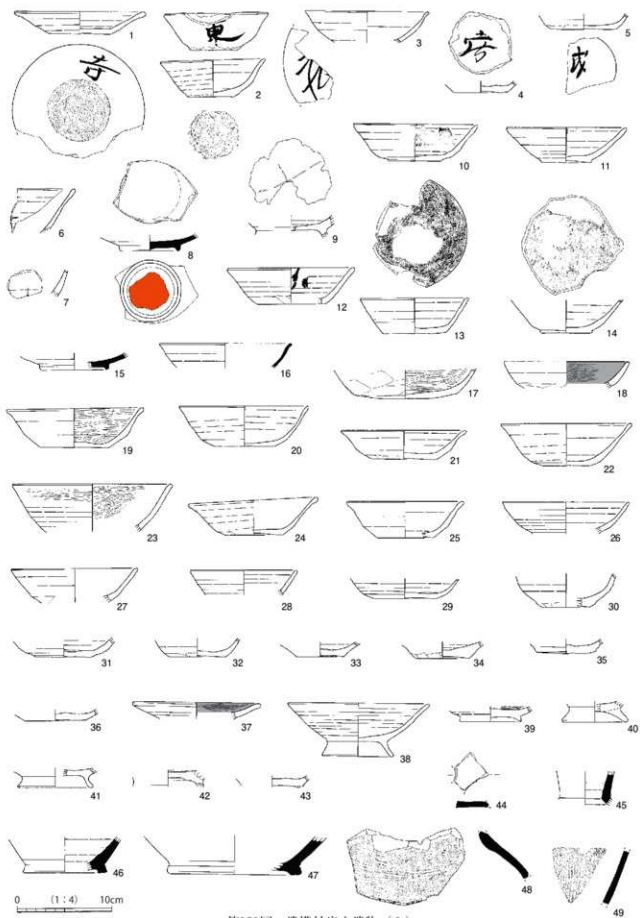
本遺構は柱穴状の土坑である。周囲に掘立柱建物が存在することから、本遺構も柱穴の可能性が考えられるが、細になる遺構が不明瞭である。柱穴であれば、東側に柱を立てたものと思われる。柱を抜き取ったときに1を埋納したのであろう。また柱穴ではなく、1を埋納する土坑であることも考えられる。

#### 5 遺構外出土遺物 (第181～182図、図版45～49)

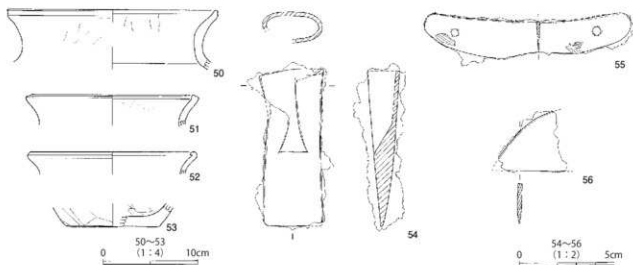
まず文字・記号をもつ資料及び転用硯について記述する。1～6は墨書をもつロクロ土師器坏皿である。1が皿である以外は坏である。7はロクロ土師器坏の小片で刻書(線刻)をもつと思われる。8は灰軸陶器を朱墨用の硯に転用したものである。9は刻書(ヘラ書き)をもつロクロ土師器高台付坏である。

1は体部外面に正位で「寺」の墨書がある。「寺」に対向する側の口縁・体部が1/2弱欠損する。破断面の形状から打ち欠きされたものと思われる。そのほかは割れていない土器である。底部外面は回転ヘラケズリが施されている。中央に回転糸切り痕が若干遺存する。体部外面にはヘラケズリが施されていない。2は体部外面に正位で「東」の墨書がある。「東」にかかって口縁部が弧状に欠損している。またこの欠損部から対向する位置に近い口縁部も若干欠損している。1同様、そのほかは割れていない遺存良好な土器である。欠損部は打ち欠きされたものと思われる。底部外面の調整は回転糸切り離し後無調整である。底部は小さく、突出している。3は体部外面に横位で「庄」の墨書がある。墨痕が濃く、かなり大きな文字である。4は墨書「庄」が底部内面にある。底部外面の調整は回転糸切り後無調整である。5は「成」と思われる墨書が底部外面にある。回転糸切り離し後底部外面周縁と体部外面下位に手持ちヘラケズリが施されている。6は体部外面に墨書の一部がみえるが、残りがわずかであり、判読できない。7はロクロ土師器坏の体部片を不整な円盤状に加工したものである。外面に焼成後の刻線と思われるものがみられる。縦方向に不連続の刻線であり整ったものではない。調整で生じたと思われる横方向の線があるが、線刻はそれに交差しており、結果として「+ (×)」の記号を意図したものと思われる。8は灰軸陶器碗で底部周辺に破片である。高台は丸みをもちながらも、やや角張っており、三日月高台が退化したものであ





第181图 遺構外出土遺物 (1)



第182図 遺構外出土遺物(2)

う。軸が薄く、見込みには施されていない。底部内面は磨滅している。また底部外面、高台内面もやや磨滅している。赤色物質が付着しているが、朱墨と思われる。内外面とも硯に転用されたものと思われる。9は底部内面に大きく「×」のヘラ書きがある。高台付坏の底部周辺の破片である。体部の欠損がほぼ同じ高さであり、意図的に整えられた可能性がある。器面は全体に磨滅している。

次に黒色の付着物をもつ資料をみでみる。10~13は内面に油煙が付着したロクロ土師器坏で、灯明器である。13は外面にも油煙が付着している。13は底部内外面の一部を除いて全体的に油煙が付着している。14は内面に漆が付着したロクロ土師器坏である。漆は内面全面にみられ、漆容器と思われる。1・10・11の底部は回転糸切り離し後無調整である。13は回転糸切り離し後、底部外面と体部外面下位に手持ちヘラケズリが施されている。

そのほかの資料を記述する。15は灰軸陶器椀である。16は須恵器坏である。南比企窯産と思われる。17・18は非ロクロの土師器坏である。17は口縁部を欠くが、坏部は浅い形態と思われる。底部はやや丸底気味である。19~36はロクロ土師器坏である。そのうち19~21・24は比較的遺存のよいロクロ土師器坏である。26は口縁部内外面の一部が被熱により、灰白色・暗灰色に変色している。37はロクロ土師器皿である。口縁・体部の破片であり、高台の有無は不明である。内面に黒色処理が施されている。胎土に白雲母が多量に含まれており、常陸南部産の土師器と思われる。39~43はロクロ土師器高台付坏である。このなかでは38の遺存がやや良い。39は底部全体が突出し、また周縁が中央よりやや高まる。回転糸切り後無調整の坏との違いがやや不明瞭であるが、高台付坏とした。44は須恵器瓶の底部片である。新治窯産である。45~47は須恵器壺である。45は長頸壺の頸部片、46・47は底部周辺の破片である。灰緑色の軸が45の内外面、46の外面に付着する。特に45の外面は軸が厚い。45・46は東海産と思われる。47は胎土に白色針状物を含む。南比企窯産と思われる。48・49は須恵器甕の胴部片を砥石に転用したものである。ともに断面の一部が磨滅しており、砥石として再利用されたものと思われる。なお砥石に転用された時期は中世かもしれないが、グリッド出土遺物であるため、判然としない。48は胎土に白色針状物を含み、南比企窯産と思われる。49は胎土が不明瞭であるが、北武蔵産と思われる。50~53は土師器甕である。

54は鉄斧である。よく形をとどめるが、錆影れや錆による欠損が目立つ。袋部の一部を欠損する。袋部

から刃部先端に向かってわずかに幅を増し、台形的な長方形の平面形をなす。柄の装着部は鉄板を両側から折り返して袋状に作り出し、横断面形は長楕円形をなす。袋部の長さは4cm程度であり、全長のおよそ半分である。刃先の研ぎ出しは錆のため観察できない。55は穂柄具である。目釘・柄を除いて遺存する。刃部中央が磨り減っている。目釘穴は円形である。木質が一部に付着している。56は鎌の切先の破片と思われる。刃側が断面図を作成したところ以外ではあまり尖っていないが、錆や刃こぼれによる影響であろう。大きさのわりに重量感があり、より新しい時代の遺物の可能性もあるが、本節で掲載した。

## 注

鋸の記述については以下の文献を参考とした。伊藤 実 1993「日本古代の鋸」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会

第15表 奈良・平安時代土器観察表

No.	遺跡	調査年度	発掘位置	層位	土師	底径 (cm)	高径 (cm)	口径 (cm)	体積 (cc)	重量 (g)	色内面	色外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面	瓦蓋	備考
1	50010	1	東部	坪	12.0	7.00	3.70	30	1074.136	1074.136	白色鉄質(赤)	白色鉄質(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年・3000-7000年	東北産
2	50010	2	東部	坪	—	7.00	3.50	25	753.516	753.516	白色鉄質(赤)	白色鉄質(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
3	50010	3	東部	坪	—	6.00	2.00	25	753.626オリーブ	753.626オリーブ	緑鉄(白多)・白色鉄質(赤)	緑鉄(白多)・白色鉄質(赤)	赤/黄/白	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年・3000-7000年	東北産
4	50010	4	東部	坪	17.00	—	3.00	25	753.626赤褐色	753.626赤褐色	緑鉄(白多)	緑鉄(白多)	赤	1.5等	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
5	50010	5	東部	坪	11.40	6.00	4.30	30	753.626赤褐色	753.626赤褐色	緑鉄(赤)・赤鉄	緑鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年・3000-7000年	東北産
6	50010	6	東部	坪	14.00	—	2.00	25	753.626赤褐色	753.626赤褐色	緑鉄	緑鉄	赤	1.5等	1.5等	コソナテ	3000-6000年	東北産
7	50010	7	東部	坪	12.00	—	3.00	25	753.626赤褐色	753.626赤褐色	緑鉄	緑鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
8	50010	8	東部	坪	13.00	—	4.00	25	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
9	50010	9	東部	坪	—	6.70	4.00	25	753.626赤褐色	753.626赤褐色	緑鉄	緑鉄	赤	1.5等	3000-6000年	3000-7000年	東北産	
10	50010	10	東部	坪	—	—	—	—	753.626	753.626	赤鉄・赤鉄	赤鉄・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
11	50010	11	東部	坪	—	4.30	3.00	25	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	1.5等	1.5等	コソナテ	3000-6000年	東北産
12	50010	12	東部	坪	12.10	—	3.00	25	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
13	50010	13	東部	坪	13.00	—	2.70	25	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
14	50010	14	東部	坪	—	6.00	4.10	25	1073.02.1赤	1073.02.1赤	白色鉄質	白色鉄質	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
15	50010	4	東部	坪	—	7.00	2.50	25	753.626.1赤	753.626.1赤	白色鉄質	白色鉄質	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
16	50010	5	東部	坪	20.00	—	15.10	1073.01.赤褐色	1073.01.赤褐色	白色鉄質	白色鉄質	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
17	50010	6	東部	坪	22.00	—	24.10	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
18	50010	7	東部	坪	12.00	6.00	3.00	30	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
19	50010	2	東部	坪	14.00	8.00	4.25	30	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
20	50010	2	東部	坪	—	4.40	3.10	25	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
21	50010	4	東部	坪	—	5.00	2.00	25	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
22	50010	2	東部	坪	13.00	—	4.10	1073.01.赤褐色	1073.01.赤褐色	赤鉄	赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
23	50010	2	東部	坪	20.00	—	20.70	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
24	50010	2	東部	坪	18.00	—	24.50	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
25	50010	1	東部	坪	13.20	6.20	4.00	30	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
26	50010	2	東部	坪	12.00	6.20	3.00	30	753.626オリーブ	753.626オリーブ	白色鉄質	白色鉄質	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
28	50010	3	東部	坪	12.00	7.20	4.00	30	753.626	753.626	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
29	50010	4	東部	坪	15.00	8.00	7.20	30	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
30	50010	5	東部	坪	12.00	—	2.00	25	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
31	50010	6	東部	坪	20.20	—	3.15	753.626赤褐色	753.626赤褐色	白色鉄質・赤鉄(赤)	白色鉄質・赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
32	50010	2	東部	坪	6.00	—	5.20	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
33	50010	8	東部	坪	—	4.00	1.15	753.626赤褐色	753.626赤褐色	白色鉄質・赤鉄(赤)	白色鉄質・赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
34	50010	9	東部	坪	—	8.30	3.05	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
35	50010	10	東部	坪	—	6.00	2.00	753.626	753.626	白色鉄質・赤鉄(赤)	白色鉄質・赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
36	50010	11	東部	坪	—	10.10	2.20	753.626	753.626	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
37	50010	12	東部	坪	—	2.70	1.70	1073.01.赤褐色	1073.01.赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
38	50010	13	東部	坪	—	11.50	4.40	753.626	753.626	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
39	50010	14	東部	坪	12.00	9.00	5.30	30	753.626オリーブ	753.626オリーブ	白色鉄質(赤)	白色鉄質(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
40	50010	2	東部	坪	12.00	8.00	4.10	30	5036	5036	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
41	50010	2	東部	坪	—	5.20	2.70	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
43	50010	4	東部	坪	—	7.70	4.40	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
42	50010	5	東部	坪	—	8.20	2.20	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄	赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
43	50010	6	東部	坪	—	12.00	2.00	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
44	50010	7	東部	坪	—	3.10	2.00	753.626オリーブ	753.626オリーブ	白色鉄質	白色鉄質	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
45	50010	8	東部	坪	—	8.15	3.00	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
46	50010	9	東部	坪	14.00	—	10.00	1073.01.赤褐色	1073.01.赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
47	50010	10	東部	坪	—	6.00	4.00	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
48	50010	11	東部	坪	14.00	7.00	3.35	30	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	1.5等	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
49	50010	2	東部	坪	12.00	6.00	4.30	30	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	1.5等	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
50	50010	3	東部	坪	11.00	6.00	4.30	30	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	1.5等	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
51	50010	4	東部	坪	—	—	—	—	753.626	753.626	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	1.5等	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
52	50010	5	東部	坪	—	7.00	3.70	1073.01.赤褐色	1073.01.赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
53	50010	6	東部	坪	—	5.00	1.60	753.626	753.626	白色鉄質・赤鉄(赤)	白色鉄質・赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
54	50010	7	東部	坪	—	—	—	—	753.626	753.626	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	5等	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
55	50010	1	東部	坪	—	3.30	2.00	753.626	753.626	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
56	50010	2	東部	坪	—	6.00	3.25	753.626オリーブ	753.626オリーブ	白色鉄質(赤)	白色鉄質(赤)	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
57	50010	3	東部	坪	14.00	—	3.00	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)	赤鉄(赤)	赤	1.5等	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
58	50010	4	東部	坪	13.20	7.00	3.05	30	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	1.5等	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
59	50010	5	東部	坪	12.00	6.00	3.20	30	1073.01.赤褐色	1073.01.赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
60	50010	6	東部	坪	12.20	6.00	3.20	30	753.626赤褐色	753.626赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産
61	50010	7	東部	坪	12.00	—	2.70	1073.01.赤褐色	1073.01.赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ	コソナテ	コソナテ	3000-6000年	東北産	
62	50010	8	東部	坪	—	5.80	2.20	1073.01.赤褐色	1073.01.赤褐色	赤鉄(赤)・赤鉄	赤鉄(赤)・赤鉄	赤	コソナテ</					





No.	品名	規格	単位	数量	仕入 (円)	原価 (円)	標準 (円)	色調内訳	色調外訳	船工	構成	製法内訳	製法外訳	組立	品名
206	50.070	4	1	標準	11.00	6.70	7.00	73395-296表	73395-296裏	練粉・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
207	50.071	1	1	標準	11.00	6.70	7.00	73397-411表	73397-411裏	練粉・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
208	50.072	2	1	標準	12.70	7.60	8.00	73396-6表	73396-6裏	白色粉(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
209	50.073	3	1	標準	5.00	2.50	2.50	73393-411表	73393-411裏	白色粉(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
210	50.074	4	1	標準	15.40	9.70	7.00	73397-6表	73397-6裏	白色粉(多)	具	3コナテ	1コナテ	3コナテ	3コナテ
211	50.075	5	1	標準	—	—	3.30	89385-311表	89385-296裏	白色粉(多)	具	3コナテ	ナテ	3コナテ	3コナテ
212	50.076	1	1	標準	13.00	—	—	73399-6	73399-6	練粉	具	3コナテ	ナテ	ナテ	3コナテ
213	50.077	2	1	標準	—	6.00	2.00	73399-6	73399-6	練粉	具	3コナテ	ナテ	ナテ	3コナテ
214	50.078	3	1	標準	—	6.30	2.70	73399-6	73399-6	練粉	具	3コナテ	ナテ	ナテ	3コナテ
215	50.079	4	1	標準	—	10.30	6.30	89399-6	73399-6	練粉	具	3コナテ	ナテ	ナテ	3コナテ
216	50.081	1	1	標準	12.70	6.00	4.00	73396-6	73396-6	練粉・亜色粉(少)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
217	50.082	1	1	標準	14.00	6.00	2.00	73396-6	73396-6	練粉・亜色粉・練粉・白色粉状物(少)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
218	50.083	2	1	標準	13.10	3.60	4.10	73396-6	73396-6	白色粉(多)・亜色粉(人)・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
219	50.084	3	1	標準	13.00	—	3.30	73395-411表	73395-411裏	白色粉(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
220	50.085	4	1	標準	—	5.00	1.50	73395-6	73395-6	白色粉(多)・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
221	50.086	5	1	標準	—	7.00	1.70	73396-6	73396-6	練粉・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
222	50.087	6	1	標準	—	—	—	73395-6	73395-6	練粉・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
223	50.088	7	1	標準	—	—	—	99386-411表	99386-411裏	練粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
224	50.089	8	1	標準	—	6.30	1.30	40377-296表	40377-296裏	練粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
225	50.090	9	1	標準	—	2.30	—	73397-411表	73397-411裏	練粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
226	50.091	10	1	標準	13.00	5.00	3.00	73392-1表	73396-6	練粉・亜色粉・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
227	50.092	11	1	標準	12.20	5.00	3.70	73396-411表	73396-411裏	練粉・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
228	50.093	12	1	標準	13.20	7.20	3.00	73396-411表	73396-411裏	練粉・亜色粉・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
229	50.094	13	1	標準	11.40	6.70	3.80	73396-6	89383-1裏	練粉・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
230	50.096	14	1	標準	—	3.40	3.00	73399-6	73399-6	練粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
231	50.097	15	1	標準	—	7.00	1.50	99386-411表	99386-411裏	練粉・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
232	50.098	16	1	標準	13.00	—	2.00	7335-1表	7335-1表	白色粉(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
233	50.099	17	1	標準	—	11.00	3.00	73393-6	73393-6	白色粉	具	1コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
234	50.100	18	1	標準	13.20	—	2.30	73392-1表	73395-411表	練粉・苳苳	具	1コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
235	50.102	19	1	標準	14.00	7.20	4.30	99386表	5コナテ	5コナテ	具	1コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
236	50.103	20	1	標準	13.00	6.40	4.30	73399-6	73399-6	白色粉・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
237	50.104	21	1	標準	13.20	6.80	3.20	73397-411表	73397-411裏	白色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
238	50.105	22	1	標準	13.00	5.00	4.00	99386-411表	99386-411裏	練粉・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
239	50.106	23	1	標準	16.50	—	5.10	73396-6	73397-411表	練粉・亜色粉	具	1コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
240	50.107	24	1	標準	13.00	6.20	4.00	73393-6	73397-411表	練粉・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
241	50.108	25	1	標準	13.20	6.00	3.00	73396-411表	73396-411裏	白色粉(多)・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
242	50.109	26	1	標準	—	5.00	1.00	73396-6	73396-6	白色粉(多)・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
243	50.120	27	1	標準	13.20	—	3.00	73396-411表	73396-411裏	白色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
244	50.126	28	1	標準	11.20	—	2.70	99386	99386	白色粉(多)・亜色粉(人)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
245	50.129	29	1	標準	—	6.00	2.30	73397-411表	73397-411裏	練粉・亜色粉・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
246	50.130	30	1	標準	—	5.00	3.00	73395-411表	73395-411裏	練粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
247	50.131	31	1	標準	—	6.00	2.20	73396-411表	73396-411裏	練粉・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
248	50.136	32	1	標準	—	6.00	2.00	99386	99386	白色粉・亜色粉(人)・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
249	50.139	33	1	標準	—	5.00	1.00	89387-311表	89387-311裏	練粉(多)・亜色粉(多)・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
250	50.140	34	1	標準	—	5.00	1.00	99386	99386	練粉(多)・亜色粉(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
251	50.141	35	1	標準	—	6.30	1.60	89387-411表	99388	練粉(多)・亜色粉(人)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
252	50.087A	36	1	標準	—	6.40	1.20	73397-1表	73397-1表	白色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
253	70.049	37	1	標準	13.20	—	1.80	73397-1表	73396-6	苳苳(多)・亜色粉	具	1コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
254	50.041	38	1	標準	10.00	7.00	2.70	89387-411表	89387-411裏	5コナテ	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
255	50.043A	39	1	標準	—	6.20	1.30	89387-411表	89387-411裏	白色粉・苳苳	具	1コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
256	50.040	40	1	標準	—	6.00	2.30	73396-411表	73396-411裏	白色粉・亜色粉(少)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
257	50.143	41	1	標準	—	7.00	2.10	99386	99386	練粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
258	50.140	42	1	標準	—	6.30	—	99386	99386	練粉(多)・亜色粉・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
259	50.143	43	1	標準	—	1.30	—	99387-411表	99387-411表	練粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
260	50.148	44	1	標準	—	—	—	2535-1裏	2535-1裏	苳苳(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
261	50.136	45	1	標準	—	3.00	—	99387-411表	99387-411表	5コナテ	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
262	50.139	46	1	標準	—	8.70	2.00	73396-296表	73396-296表	白色粉(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
263	50.143	47	1	標準	—	14.00	4.20	2535-296表	2535-296表	白色粉(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
264	50.142	48	1	標準	—	—	—	89387-1表	89387-1表	白色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
265	50.141	49	1	標準	—	—	—	2535-296表	89387-411表	白色粉(多)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
266	50.140	50	1	標準	—	20.00	—	73395-411表	73395-411表	白色粉(多)・亜色粉	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
267	50.040	51	1	標準	17.00	—	3.30	73396-6	73396-6	練粉(多)・亜色粉・苳苳	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
268	50.040C	52	1	標準	17.20	—	2.40	99386	99386	白色粉・亜色粉(少)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ
269	50.049	53	1	標準	—	10.00	2.50	73396-411表	73395-311表	白色粉(多)・亜色粉(人)	具	3コナテ	3コナテ	3コナテ	3コナテ

## 第4節 中・近世

中・近世の遺構として、火葬遺構や土坑、溝状遺構が検出された。少数の火葬遺構・土坑が調査区南東側に分布していた。溝状遺構はおもに調査区の周縁部分に位置し、調査区の中央部分を取り囲むような配置を見せている（第183図）。

中・近世の遺物は少ない。遺構にともなって出土した遺物はほとんどなく、グリッド別に一括して取り上げられたものが大半を占めていた。

### 1 遺構

検出された遺構は火葬遺構3基、土坑7基、溝状遺構17条であった。火葬遺構は調査区東端で溝状遺構と重複し、火葬遺構と溝状遺構との関連性がうかがえた。また土坑はおもに火葬遺構周辺に位置しているため、墓坑であった可能性が考えられる。また調査区東端の溝状遺構は、深さが浅く、小ピットが伴い、土地整形もしくは区画用の溝状遺構であった可能性がうかがえる。つまり調査区東端は土地を区画整形された墓域であったと考えられる。

溝状遺構は調査区の西側、北側、東側の周縁部分で南西から北東、北西から南東、北東から南西へと、調査区の中央部分を取り囲むように直交して直線状にのびている。南側は台地斜面となる。溝状遺構の深さは比較的浅く、地中深く掘り込んだ明瞭な溝というよりも、土地区画の目印になるような浅い整形遺構である。

出土した遺物の大部分が中世末から近世にかけての陶磁器片だったので、遺構の年代も同様に中世末から近世までの範囲に含まれると見てよからう。

#### SK074（第184図）

調査区の南東端、L57-43~44に位置する火葬遺構と墓坑である。西側に溝状遺構SD001がある。周囲には方形の土坑が多数分布していた。本遺構は一辺約1.4mの方形の土坑が東西に2基連続した形状をしていて、長軸3.65m、短軸1.55m、深さ0.52mであった。東端部がやや突出し、底面に小規模なピットがあって、骨片をふくんだ炭化材と焼土が薄い層となって堆積していた。ここで死体を火葬し、方形土坑に埋葬したと考えられる。周辺の方形土坑は、本遺構の方形土坑と同じ規模と形状であり、同じく墓坑と考えられる。

#### SK075（第184図、図版19）

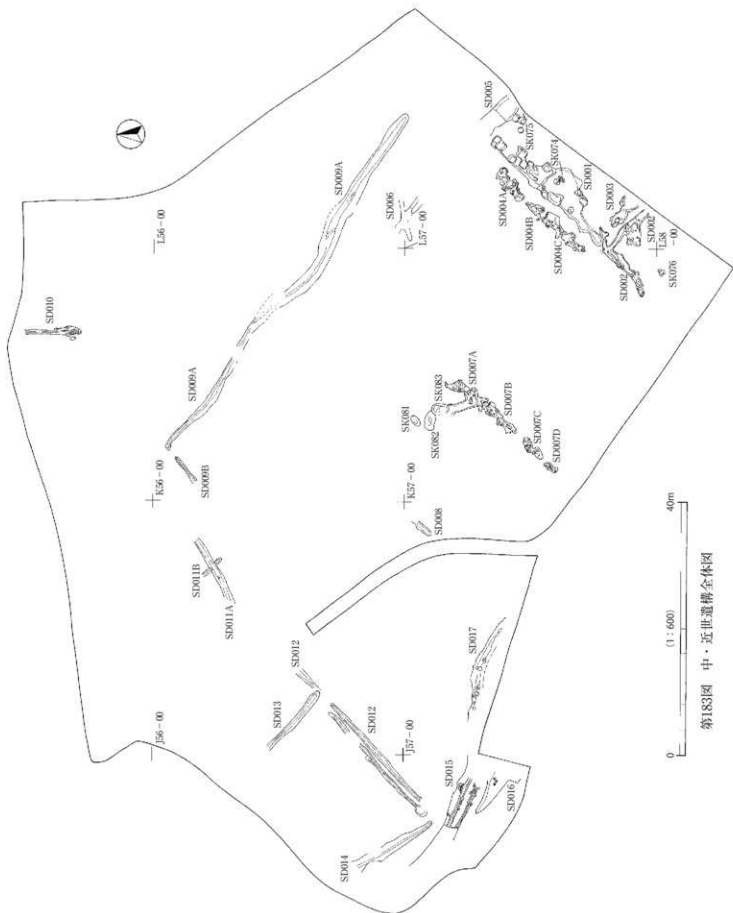
調査区の南東端、L57-63に位置する火葬遺構である。西側に溝状遺構SD001がある。周囲には土坑が分布していた。形状は、2基の平行する長方形土坑の中間を、細長い溝が直交している。南側の土坑は長軸1.21m、短軸0.59m、深さ0.45mで、焼土や炭、骨片が多量に堆積していた。底面で直交する溝は長さ1.08m、幅0.34mで、燃焼によって硬化した部分があった。この南側の土坑で死体が火葬されたのであり、底面の細長い溝は煙道だったと推測される。中近世の火葬遺構でしばしば見受けられるT字型の火葬方法を示している。周囲に分布する土坑も、墓坑と考えられる。

出土遺物として、焼けた人骨片があった。

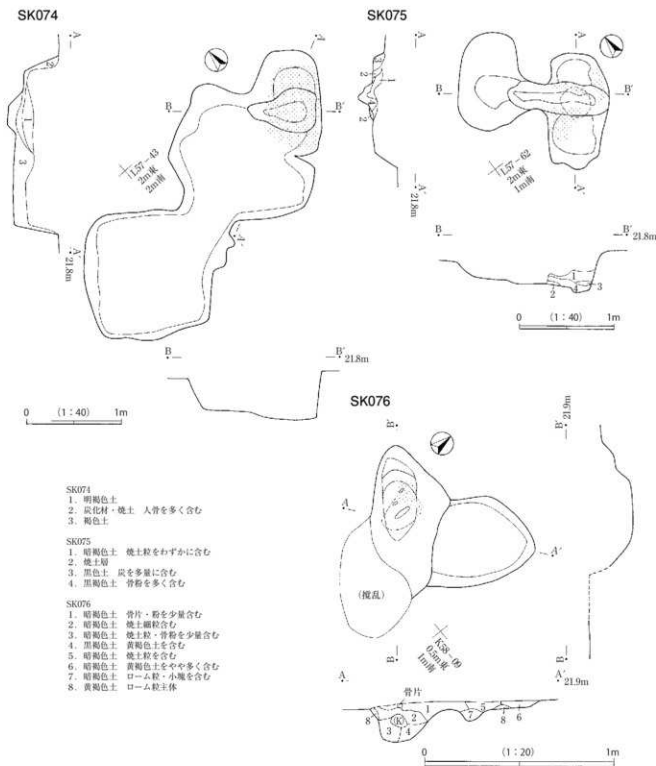
#### SK076（第184図、図版19）

調査区の南東端、K58-08~09に位置する火葬遺構である。北側に溝状遺構SD002がある。周囲に墓坑とみられる土坑が分布せず、やや孤立した存在である。2基のピットが結合した形状で、長軸0.95m、短





第183図 中・近世遺構全体図



第184図 SK074・075・076火葬遺構

軸0.55m、深さ0.19mであった。西側のビットがやや深くて覆土中に骨片と焼土がふくまれ、火葬の痕跡を示していた。調査区南東の外側にも墓域が広がっていたと思われるが、調査前に台地が削平されてしまい、墓坑の分布は不明となってしまった。

火葬跡から焼けた人骨片が出土した。

**SK077 (第185図)**

調査区の南東側、L57-44に位置する土坑である。西側にSK074火葬遺構、東側にSK078・079土坑がある。周囲には墓坑とみられる土坑が分布しているので、本土坑も墓坑と考えられる。形状は円形で、長軸0.93m、短軸0.89m、深さ0.35mであった。

**SK078 (第185図)**

調査区の南東側、L57-45に位置する土坑である。南側にSK077土坑、SK079土坑、SK080土坑がある。南側の土坑は墓坑とみられ、本土坑も墓坑と考えられる。形状は長方形で、長軸1.28m、短軸1.11m、深さ0.27mであった。

**SK079 (第185図)**

調査区の南東側、L57-44～45に位置する土坑である。西側にSK077土坑、北側にSK078土坑、東側にSK080土坑がある。遺構南端の一部は調査区外となった。周囲の土坑は墓坑とみられ、本土坑も墓坑と考えられる。形状は楕円形で、長軸1.20m、短軸1.06m、深さ0.20mであった。

**SK080 (第185図)**

調査区の南東側、L57-45に位置する土坑である。西側にSK079土坑がある。遺構の南側半分は調査区外となった。周囲に墓坑とみられる土坑が分布し、本土坑も墓坑と考えられる。形状は楕円形で、長軸は1m以上、深さ0.19mであった。

**SK081 (第186図、図版19)**

調査区中央、K57-02～03に位置する土坑である。南側にSK082土坑がある。形状は楕円形で、長軸1.88m、短軸1.17m、深さ0.23mであった。

**SK082 (第186図、図版19)**

調査区中央、K57-02～03、12～13に位置する土坑である。北側にSK081土坑、南側にSK083土坑がある。形状は楕円形で、長軸3.14m、短軸1.83m、深さ0.53mであった。

**SK083 (第186図)**

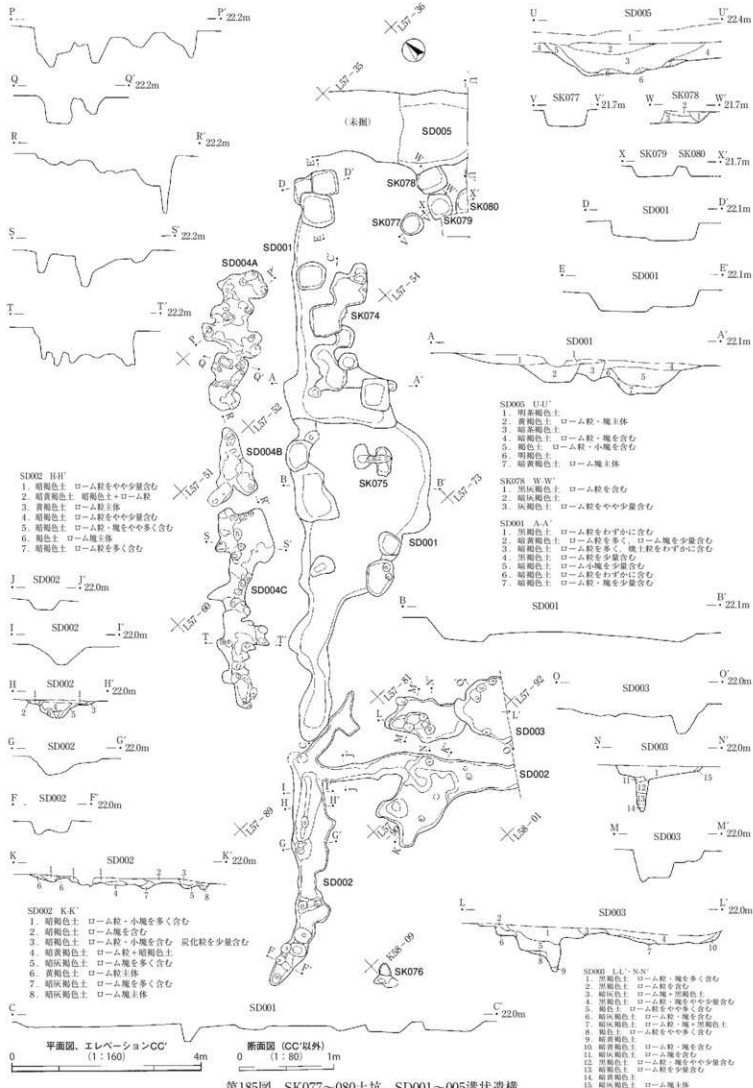
調査区中央、K57-13に位置する土坑である。北側にSK082土坑、南側にSD007A溝状遺構がある。遺構西側の一部が、風倒木による攪乱を受けていた。形状は楕円形で、長軸2.66m、短軸は約1.82m、深さ0.58mであった。

**SD001 (第185図)**

調査区の南東側、K57～L57に位置し、北東から南西へ直線状に伸びる溝状遺構である。東側にはSK074火葬遺構、SK075火葬遺構があり、南西側にSD002溝状遺構が接している。形状は不整形で、中間あたりで幅が広がり、南西側で幅がせばまり細くなる。長さ約22m、幅約0.2m、深さは約0.2mで浅い。直径約1mの円形土坑あるいは1辺約1.2mの方形土坑が、火葬遺構とともに遺構内から複数検出された。これらの土坑は墓坑と判断してよからう。

陶磁器片が少量出土し、その中に中世の青磁片(第190図2)や瀬戸・美濃産の甕(第190図7)が含まれていた。

掘込みが浅く、遺構の形状が不整形で、周辺に火葬遺構や墓坑が分布し、陶磁器片が出土したことから、本遺構は墓域に関する区画遺構と考えられる。



第185図 SK077~080土坑、SD001~005溝状遺構

#### SD002 (第185図)

調査区の南東端、K57～L57に位置し、南西から北東へ、さらに直角に曲がって南東へと鉤状に伸びる溝状遺構である。北東側にSD001溝状遺構が直線状に接している。南側にはSK076火葬遺構がある。全長約20m、幅は0.8m～4m、深さは約0.1mで浅い。形状は不整形で、掘込みの底面や幅が一定していない。遺構の内部から小規模なピットが複数検出されたが、配置や深さに規則性はうかがえず、櫛列のような構造物を想定するのは困難である。

#### SD003 (第185図)

調査区の南東端、L57に位置し、北西から南東へ、調査区外へと伸びる溝状遺構である。南西側にSD002溝状遺構が平行して伸びている。細長い土坑が2基直列したような形状で、長さ5.14m、幅1.1m～2.9m、深さは約0.1mであった。幅が一定せず、また底面から複数的小ピットが検出された。ピットの配置に規則性はうかがえない。

#### SD004A～C (第185図)

調査区の南東側、L57に位置し、北東から南西へ直線状に伸びる溝状遺構である。南側にSD001溝状遺構が平行して伸びていた。形状は不整形で、多数の小ピットが集合したような形態を示し、長さは20.6m、幅約1.0m～2.6mであった。小ピットの直径は0.2m前後、深さは様々で、なかには1mを超える深いものもあった。墓域を区画するSD001溝状遺構に平行して走り、小ピットの集合であることから、墓域区画に伴う柵のような施設であったかもしれない。北西約28mの地点にあるSD007溝状遺構も、本遺構と同じ方向、類似した形態を示している。

#### SD005 (第185図)

調査区の南東側、L57に位置し、北西から南東へ直線状に伸びる溝状遺構である。南側にSK077・078・079・080土坑が接するように分布している。底面まで完掘した部分は長さ3mだけであったが、未掘部分が北西へと続いている。幅3.2m、深さは0.36mであった。南側に墓坑とみられる土坑が接しているので、墓域を区画する機能があったのかもしれない。

#### SD006 (第188図)

調査区中央の南側、L56に位置し、直線状に伸びる2条の小規模な溝が交差する溝状遺構である。周囲に中近世の遺構は分布していない。長さ約6m、幅0.7m、深さ0.54mの溝状遺構と長さ約4.5m、幅0.94m、深さ0.12mの溝状遺構が交差していた。

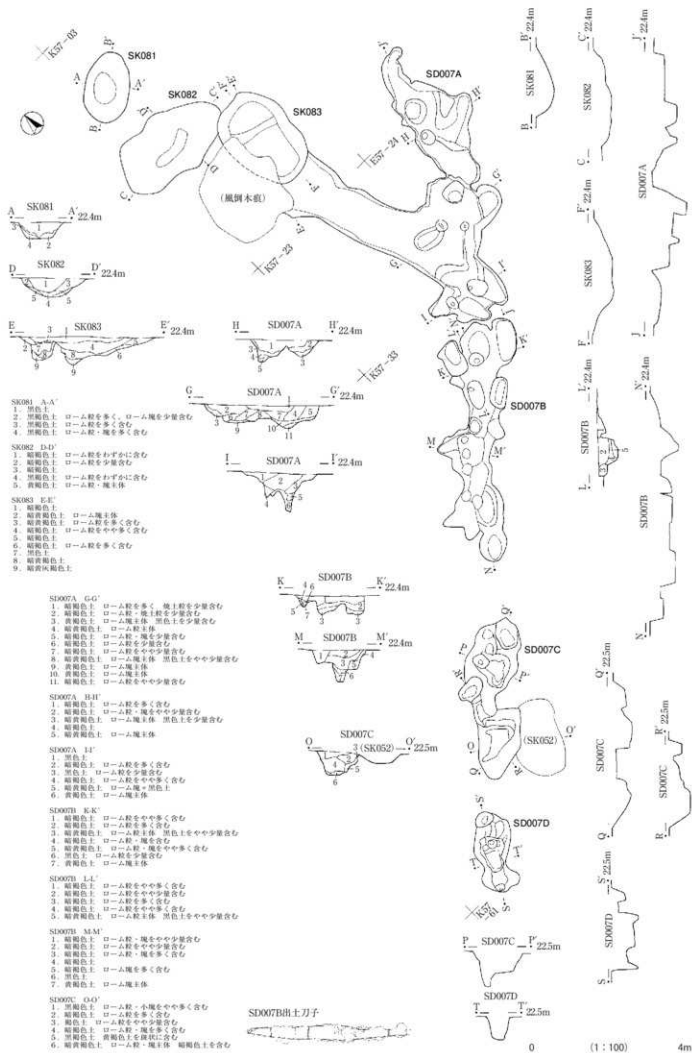
#### SD007A～D (第186図、図版18)

調査区中央の南側、K57に位置し、北東から南西へ直線状に伸びる溝状遺構である。北側にSK083土坑がある。形状は不整形で、多数の小ピットが集合したような形態を示し、長さ22.44m、幅0.7m～2.1mであった。小ピットの直径は約0.2m～1.0m、深さは様々で、約1mに達する深いものもあった。小ピットの集合で、南東側約28m離れた地点にあるSD004溝状遺構と同じ方向、類似した形態を示していることから、墓域区画に伴う柵のような施設であったかもしれない。

中間に位置するSD007Bから鉄製の刀子(第190図8)が出土した。

#### SD008 (第187図)

調査区中央の西側、J57に位置し、北東から南西へ直線状に伸びる溝状遺構である。周囲に中近世の遺構は分布していない。長さ3.72m、幅1.00m、深さ0.17mであった。底面が平坦で、比較的浅い溝状遺構



- SK081 A-A'
1. 黒色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土

- SK082 D-D'
1. 黒褐色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土

- SK083 E-E'
1. 黒褐色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土
  6. 黒褐色土
  7. 黒褐色土
  8. 黒褐色土
  9. 黒褐色土

- SD007A G-G'
1. 黒褐色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土
  6. 黒褐色土
  7. 黒褐色土
  8. 黒褐色土
  9. 黒褐色土
  10. 黒褐色土
  11. 黒褐色土

- SD007A B-B'
1. 黒褐色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土

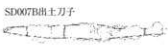
- SD007A H-H'
1. 黒色土
  2. 黒色土
  3. 黒色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土
  6. 黒褐色土

- SD007B K-K'
1. 黒褐色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土
  6. 黒褐色土
  7. 黒褐色土

- SD007B L-L'
1. 黒褐色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土

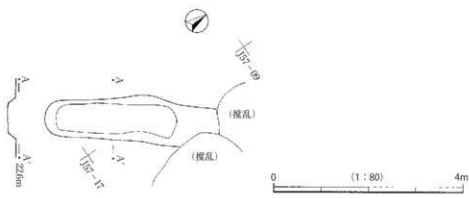
- SD007B M-M'
1. 黒褐色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土
  6. 黒褐色土
  7. 黒褐色土

- SD007C O-O'
1. 黒褐色土
  2. 黒褐色土
  3. 黒褐色土
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土
  6. 黒褐色土

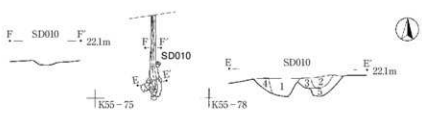


0 (1:100) 4m

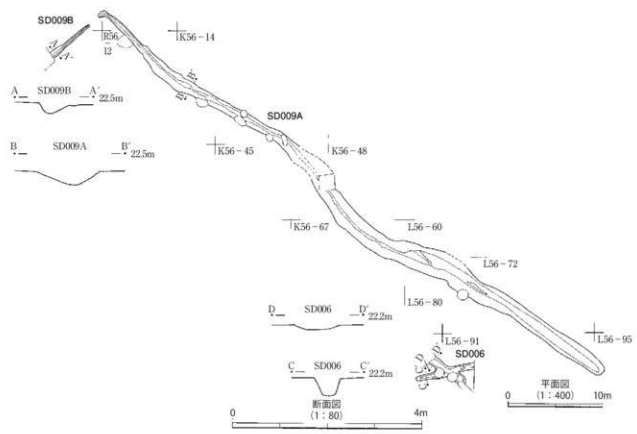
第186図 SK081・082・083土坑、SD007溝状遺構



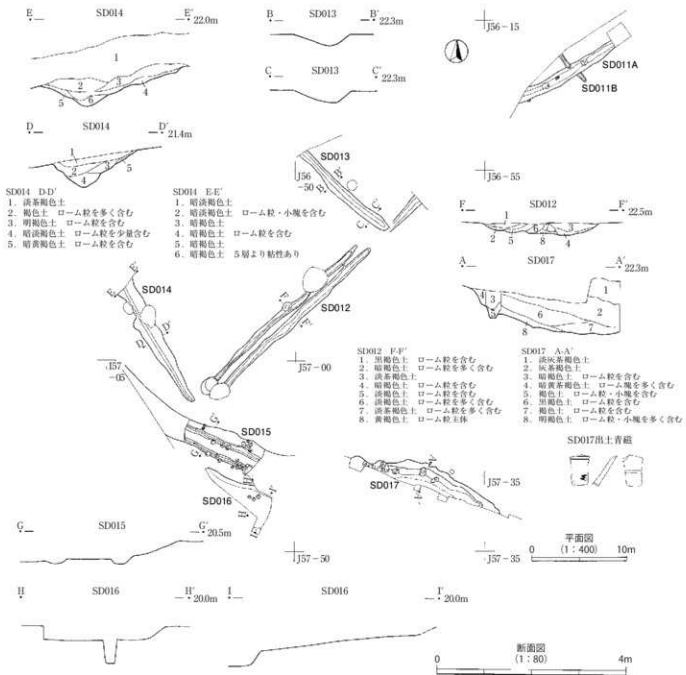
第187図 SD008溝状遺構



- SD010 E-E'
1. 暗褐色土 ローム粒を含む
  2. 黒褐色土
  3. 褐色土 ローム粒を含む
  4. 暗黄褐色土 ローム粒を含む
  5. 黒褐色土 ローム粒・小塊を含む



第188図 SD006・009・010溝状遺構



であった。

#### SD009A (第188図)

調査区中央の東側、K56～L56に位置し、北西から南東へ直線状に伸びる溝状遺構である。北西端の西側で溝状遺構SD009Bが直交するように伸びている。長さ65.4m、幅約0.5m～3.0m、深さ0.28mであった。北西半分は幅が狭く、南東半分は幅が広い。

近世の陶磁器片が少量出土した（未掲載）。

#### SD009B (第188図)

調査区中央の北西側、K56に位置し、北東から南西へ直線状に伸びている。北東端の東側で溝状遺構



SD009Aが直交するように伸びている。長さ5.2m、幅約0.3m～0.7m、深さ0.26mであった。

#### SD010 (第188図)

調査区中央の北東側、K55に位置し、北から南へ直線状に伸びている。長さ8.8m、幅約0.4m～2.4m、深さ0.1m～0.3mであった。北端では幅が狭く、南に向かうほど幅が広まる。南端では複数の小ピットが分布していた。

#### SD011A・B (第189図)

調査区中央の北西側、J56に位置する溝状遺構である。SD011Aが北東から南西へ直線状に伸びており、中間で幅の狭い小規模な溝状遺構SD011Bが直交して伸びている。SD011Aは長さ11.7m、幅1.35m、深さ0.26mであった。SD011Bは長さ6.0m、幅0.4m、深さ0.16mであった。

#### SD012 (第189図、図版18)

調査区の西側、J56～J57に位置し、北東から南西へ並行して直線状に伸びる2条の溝状遺構である。北東端ではSD013溝状遺構、南西端ではSD014溝状遺構が本遺構に直交する方向に伸びている。また南側にSD015溝状遺構がある。長さ23.40m、幅はそれぞれ0.80m前後、深さは約0.25mであった。本遺構の両脇に直交してSD013溝状遺構、SD014溝状遺構があり、3条の溝状遺構は土地を区画・整形する機能がうかがえる。

#### SD013 (第189図、図版18)

調査区の西側、J56に位置し、北西から南東へ直線状に伸び、さらに南東端から直交して北東へわずかな距離を伸びる溝状遺構である。南東端の南西にはSD012溝状遺構がある。長さ12.18m、幅1.30m、深さ約0.21mであった。南西約23mの地点でSD014溝状遺構が平行して伸びている。

#### SD014 (第189図、図版19)

調査区の西側、I56～I57に位置し、北西から南東へ直線状に伸びる溝状遺構である。南東端の北西にはSD012溝状遺構が直交して伸びている。南側にSD015溝状遺構がある。長さ14.30m、幅は北西端で最も広く3.18mあり、南東に向かって幅が狭くなる。深さは0.61mであった。北東約23mの地点でSD013溝状遺構が平行して伸びている。

#### SD015 (第189図、図版19)

調査区の西側、I57に位置し、台地縁部を北西から南東へ直線状に伸びる溝状遺構である。北西側にSD014溝状遺構、北東側にSD012溝状遺構、南側にSD016溝状遺構がある。東西に伸びる遺構のうち、部分的に長さ約8.5mの範囲を完掘した。幅0.5m、深さ0.1mの細くて浅い溝が2条並行して伸びていた。溝に沿って小ピットが複数分布していた。

#### SD016 (第189図、図版19)

調査区の西側、I57に位置し、台地端部を北西から南東へ直線状に伸びる溝状遺構である。北側にSD015溝状遺構がある。長さは約8.2mであった。溝状というよりも、台地端部斜面を削平して整形したような痕跡を示していた。底面に小ピットが3基あった。北側のSD015溝状遺構と関連性があるのかもしれない。

#### SD017 (第189図、図版19)

調査区の南西側、J57に位置し、台地端部を西から東へ湾曲するように伸びる溝状遺構である。長さは約16mである。溝状というよりも、台地端部斜面を削平して整形したような痕跡を示していた。道と思

れる細長い硬化面があり、小ピットが複数分布していた。約10m西側にあるSD015と関連性があるのかもしれない。

青磁の破片が出土した（第190図4）。

## 2 遺物（第190図、図版50）

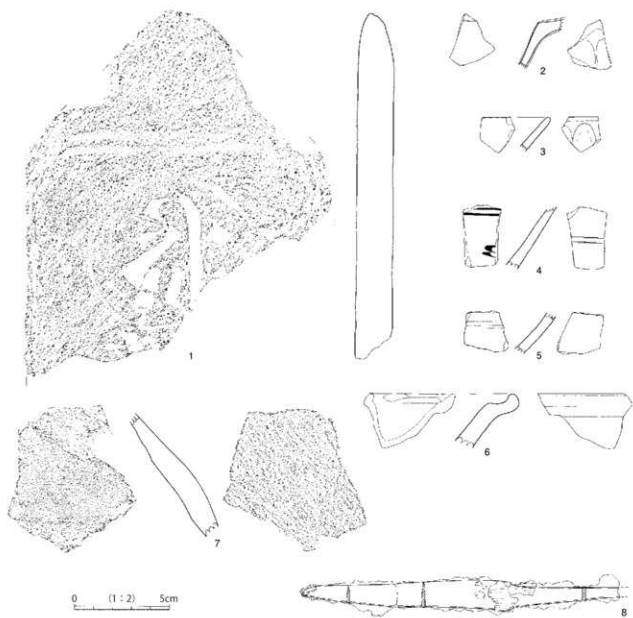
中近世の出土遺物のほとんどが陶磁器で、しかも器形を復元できないほど小さな破片ばかりだった。その他に板碑、人骨などが出土した。遺構にともなう遺物は少なく、グリッド別に一括して取り上げた遺物が多かった。

遺物の年代は、中世と思われる青磁、室町時代と思われる板碑など少量が中世に属すると考えられる。火葬遺構から出土した人骨もおそらく中世のものであろう。それ以外の大部分の陶磁器片は、近世に属すると思われる。SD007B溝状遺構から出土した鉄製刀子の年代は不明である。

本報告では、中世の板碑と陶磁器、および鉄製刀子を掲載し、人骨についてはその一部を写真で示すことにした。

1は、板碑である。調査区の南西側、I57グリッドから出土した。頭部から種子までの破片で、長さ約18cm、幅約16cm、厚さ約2cmであった。石材は緑泥片岩である。頭部の両側が若干欠損し、浅い彫りの2条線が横位に施されていた。種子は横幅のあるキリーク（弥陀）で、周囲に月輪が描かれている。キリーク下の向かって左側に蓮座がわずかに見える。薬研彫はあまり深くない。横幅なキリーク、やや浅い薬研彫、浅い2条線などの特長は、板碑としては比較的新しい様相を示しており、一応室町時代としておく。2～5は青磁である。2はSD001溝状遺構、3はK56-46グリッド、4はSD017溝状遺構、5はK56-51グリッドから出土した。2と3は龍泉窯系の青磁で、蓮弁が施されていた。6は瀬戸・美濃の鉢の口縁で、縄文時代のSI011竪穴住居跡覆土に混入していたものである。7は瀬戸・美濃の甕の肩部で、SD001溝状遺構から出土した。砥石として転用されている。6・7は中世の陶磁器と思われる。8は調査区中央の南側、SD007B溝状遺構から出土した鉄製刀子である。長さ16.85cm、幅1.5cm、厚さ1.9cmであった。遺存茎長は5.8cmである。現重量は21.7gである。関部分周辺や切先に若干の木質が残存していた。なお刃側の茎寄り部分は刃が存在するのか、欠損するのかやや微妙であるが、存在するとみて図化した。刃側・背側ともにみられる。やや鈍角をなす作りである。

人骨はおもにSK075火葬遺構とSK076火葬遺構から出土し、ほとんどが細かい骨片であった。図版50はSK075火葬墓のもので、熱で著しく変形しているが細長い骨は肋骨、円形の球関節の骨は上腕骨の骨頭と思われる。



第190図 中・近世の遺物

## 第3章 まとめ

### 第1節 縄文時代

#### 1 集落の変遷

思井上ノ内遺跡で確認された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡17軒、住居跡の可能性はあるが切底の焼け具合や不規則な配列のため住居跡と判断するには至らなかった遺構7基、土坑20基、貝ブロック8か所、炉穴25基、陥穴6基である。これらは大きく早期後葉と後期前葉に分けられる。以下、各時期に分けてそれぞれの状況を簡単にまとめておく。

##### (1) 早期の状況

早期後葉に属する遺構は竪穴住居跡2軒（SI001・SI002）、土坑2基（SK013・SK026）、炉穴25基が該当する。他に貝ブロック1か所から条痕文土器が出土しているほか、陥穴にも早期の可能性のあるものもあるが、確実な証拠はない。

該期の出土資料については遺構外出土遺物で第Ⅲ群と定義し、土器型式と器形に則して第1類から第5類まで分類し、さらに文様構成や技法などを基に種別分けした。この種別分けが時期変遷をおおむね示していると考えられるため、以下、種別ごとに遺構出土遺物をみたい。

第1類とした野島式土器では遺構から出土したものは皆無であり、遺構外出土もごく少量であった。活動の形跡はあるものの、本格的な居住には至っていないと考えられる。

第2類とした鞆ガ島台式土器は数量・種類とも最も豊富であり、遺構群形成の中心的時期に当たるといえる。種別ごとに見ていくと、まず1種は鞆ガ島台式でも古相を示すものであるが、遺構からはSK049炉穴で出土しているものの、同じ炉穴からより新しい段階の土器も出土しているため遺構の時期を示しているとは断定できない。ただし遺構外出土からは第91図99など良好な資料が多く、本格的な居住が開始されたことを物語るといえる。2種は1種より後出的な様相を示すもので、SK026土坑、SK054、SK060炉穴が該当する。なお、SK028貝ブロックからも同時期の遺物が出土しているが、風倒木内であり他の時期の土器も出土していることから時期については断定できない。3種は鞆ガ島台式終末期に相当するもので、SI001竪穴住居跡、SK056炉穴が該当する。その他、有文土器が出土しなかったため種別の細別には至らないものの、鞆ガ島台式期に帰属すると考えられる遺構にはSK042・043、SK051、SK059炉穴がある。遺構外遺物もこの2種及び3種の時期が量的にも最大となり、集落規模のピークに当たると考えられる。

第3類とした鞆ガ島台式から茅山下層式への過渡的段階の遺構は確認されず、第4類とした茅山下層から前期初頭までとした段階は、遺構ではSK057炉穴が1基のみが該当する。同類の遺構外出土遺物も量が減少するほか型的に欠落が認められるようになり、最終的には花積下層式まで出土するもの関山式は確認されず、断絶を迎える形となる。

以上見たとおり、思井上ノ内遺跡の早期遺構群は鞆ガ島台式を中心とした時期に構築されたことが推測されるが、一方で遺物が出土していないか出土しているも時期判別が困難な遺構が全体の半数以上存在する。それらもあわせて一体の遺構群として捉えていいかを判断するために、遺跡内における早期遺構全体の分布を俯瞰したい（第191図）。東側は中近世の溝状遺構により削平されているため空白域となっている



ものの、炉穴群と土坑が直径80mの環状を呈するように構築され、堅穴住居跡はその内側に構築されていることが分かる。施設の種別に応じて場所を使い分けている状況をうかがうことができ、これらの遺構群が一体のものとして営まれていた状況を物語っていると考えられる。当然全体の景観についても配慮があったと思われ、環状配列についても意識的であったと想定することは十分可能であると思われる。

前期以降の思井上ノ内遺跡は後期まで遺構が全くみられなくなるが、第1章で概観したとおり坂川を隔てた対岸には花積下層式から関山式の大集落である幸田貝塚が存在し、また、流山市域においても黒浜式以降はより内陸部に多くの集落が出現するようになっており、居住域の変動を物語る。海進の進行により漁労活動の範囲が移動したことが主たる要因と考えられ、人口の増加によって内陸部へ居住域が拡大したことがうかがえる。

## (2) 後期の状況

後期前葉に属する遺構は上記早期後葉に属するものと陥穴を除いたほぼすべてと考えられる。遺構群の継続時期は堀之内1式から加曽利B1式までである。

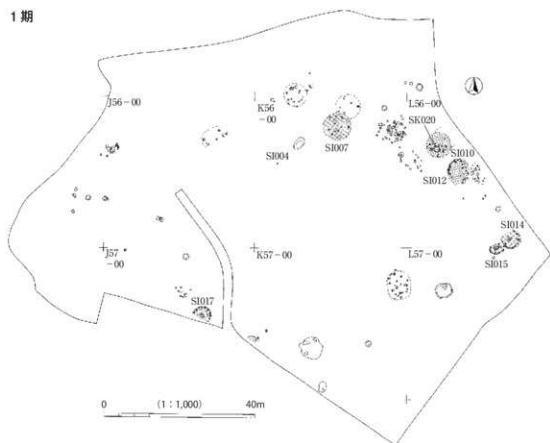
該期の出土資料については遺構外出土遺物の説明で第V群及び第VI群として分類し、さらに土器型式に則して類別し器形ごとに分類した。遺構の時期認定に当たっては当然これらの分類を基礎としたが、言うまでもなく出土遺物は単一の時期でまとまることはほとんどなく、時間差のある遺物が混在するのが通常である。したがって個々の土器ではさらなる細分が可能と思われるが、遺構についてはより幅を持たせた形で時期区分を行った。なお、SI003、SI011の各堅穴住居跡、SK001・004～006・008・012・017の各土坑、SK024・028～033・035の各貝ブロックについては時期を判断できなかった。

1期 堀之内1式の中段階から新段階にかけてを1期とした。SI007、SI010・SK020、SI012、SI014、SI015、SI017が該当する。土器の特徴としては、堀之内1式古段階に由来する単位文構成はやや崩れているもののある程度維持されている。棒状工具による一本書きの沈線による施文技法を主とする一方で、半截竹管あるいは節羽状工具を用いるものも出現する。器種としては東北地方の網取式に由来するくびれを持つ深鉢が主体であるが、直線的に開く器形を呈する深鉢も一定の割合が認められる。深鉢A1a種ではSI010・SK020-1(第48図1)が、深鉢A1b種ではSI007-2(第42図2)やSI017-4(第56図4)が代表例である。深鉢BではSI017-2(第56図2)が代表例である。

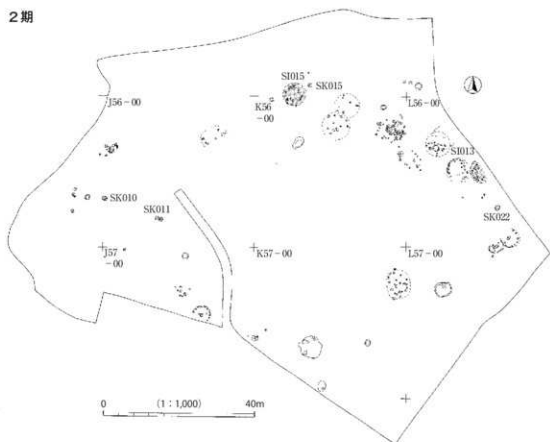
遺構の特徴としては、堅穴住居跡の数が各時期の中で最も多く、また住居跡自体も掘り込みが深く壁に沿って同じ規模の柱穴が規則正しく並ぶなど、かなりしっかりした構造であるものが主体である(代表例としてSI012、SI017など)。SI014は遺物が僅少であったものの、遺構の形態からこの時期に属すると判断した。

2期 堀之内1式の新段階から堀之内2式にかけてを2期とした。SI005、SI013、SK011、SK015が該当し、良好な資料が少なく判断が難しいもののSK010、SK022がここに属する可能性がある。土器の特徴としては、単位文構成はほぼ姿を消すか存在感が乏しいものとなり、棒状工具ならば集合沈線、半截竹管や節羽状工具ならば多条施文によって、器面を弧線や斜線で充填するものが主体となる。器種としては直線的に開く器形を呈する深鉢Aが主体となる。その深鉢Aは良好な資料に乏しいが、深鉢Cの中ではSK011-1(第61図1)が代表例である。なお、SI004の伏鉢については文様がないためはつきりしないが、1期から2期のいずれかに属するものと思われる。

1期

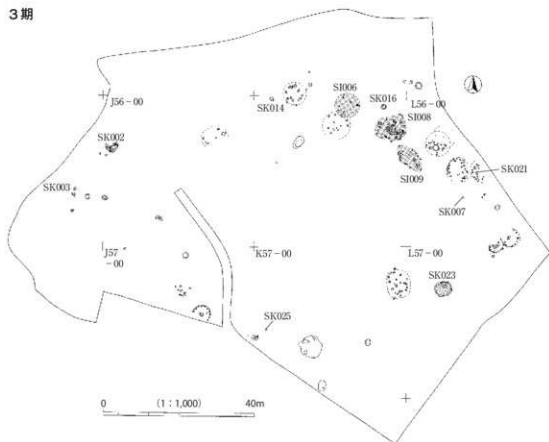


2期

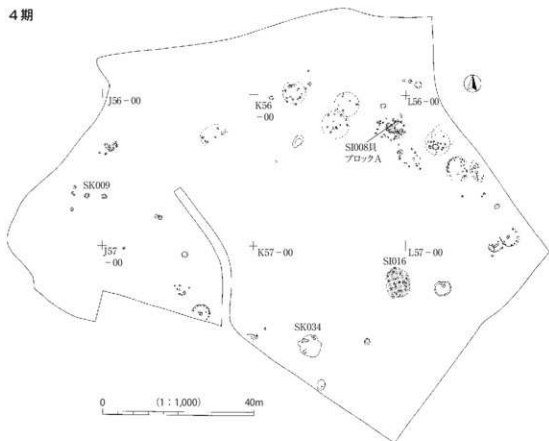


第193図 縄文時代後期遺構時期別変遷図(1)

3期



4期



第194図 縄文時代後期遺構時期別変遷図(2)



遺構の特徴であるが、堅穴住居跡は先述したとおり出土遺物から2期に帰属と断定できないもののSI005とSI013は掘り込みが浅く壁が検出できないことを除いて1期の特徴を残している。土坑は直径約1m、深さ1m～1.5mの円筒形を呈するものが出現し、貝ブロックの堆積も認められる。貯蔵穴としての用途が想定される。なお、1期は堅穴が多く2期は土坑が多いのはやや不自然であり、土坑については最終的に埋まる際に2期の遺物が多く流れ込んだものの、実際に使われていたのは1期であった可能性もある。

3期 堀之内2式の前段階から中段階にかけてを3期とした。前段階と中段階の区分については画期を見出すのが難しいが、さらに細分できる可能性もある。SI006貝ブロックB（貝ブロックAは風倒木痕出土のため除外）、SI008、SK003、SK007、SK014、SK016、SK021、SK023、SK025が該当し、SI009、SK002がここに属する可能性がある。土器の特徴としては、堀之内2式に特徴的な幾何学的な磨消縄文意匠が出現する一方で、地文縄文や懸垂文を主体とする意匠も残存し、全体として堀之内1式の影響を残している。幾何学的な磨消縄文意匠についても、基本的に横帯構成であるがSK014-2（第63図2）やSK016-1・2（第64図1・2）のように縦位の区画で文様帯を区切るものが多い。器形も堀之内2式の典型例である器壁が直線的に立ち上がり口縁部に向かって開いていくものが主体である一方で、深鉢ではSI008-4（第47図4）、甕AではSK014-1（第63図1）のように頸部にくびれを持ち縄文地文で懸垂意匠を配するものも存在し、堀之内1式の影響を残す代表例といえる。

遺構の特徴であるが、堅穴住居跡ではSI006は構造を把握するのはほぼ不可能でありSI008が唯一と言えるが、壁に沿って柱穴を配置するという構造は1・2期から引き継がれているものの、全体プランは長楕円形もしくは不整形円形を呈するようになる。柱穴自体も規模や形状がやや不揃いになるほか配置も規則性が崩れている。土坑は引き続き貯蔵穴と想定される円筒形土坑が構築されるが、規模は直径1mに満たないものが多く深さも50cm程度となり、小規模化するようになる。

4期 堀之内2式の新段階から加曾利B1式にかけてを4期とした。SI016、SK009、SK034及びSI008貝ブロックAが該当する。土器の特徴としては、深鉢の文様は懸垂意匠や縦位の区画がほぼ消滅し横帯化したものとなるほか、内面装飾や把手の発達が目立つのが特徴である。器形も器壁が直線的に立ち上がり口縁部に向かって開いていくものがほとんどとなる。浅鉢が占める割合が増加するのも特徴と言え、SI016-1（第55図1）が代表例である。

遺構の特徴であるが、堅穴住居跡はSI016のみで、プランは楕円形であり柱穴は壁際だけでなく内部にも掘られ、見方によっては同心円状を呈する。全体に規則性に乏しくなり、堀之内1式以来の伝統的な構造から変質していることがうかがえる。土坑では引き続き円筒形のものが構築されるが数は大きく減っている。

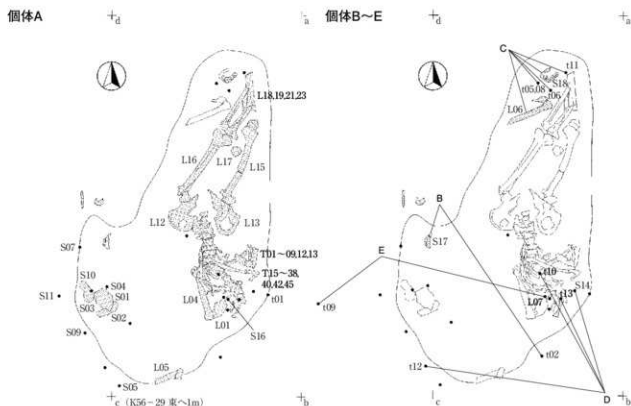
集落全体としては、1・2期においては堅穴住居跡が直径約80mの範囲に環状に分布しており、堅穴住居跡は北側、土坑が西側に多いなど、遺構の種類による分布域の違いが多少ではあるが認められる。3期になると土坑がより西側へ広がる一方で住居跡は北東側のみに構築されるなど、環状に構築する意識は希薄になっていき、4期に至って台地上に散在する状況となる。集落としての終焉を示す状況であるといえる。SI008貝ブロックAは人骨群を覆うように残されているが、時期は遺構群の終末期に相当しており、集落の営みの終結により葬送も終結したことを示している。

## 2 出土人骨について

思井上ノ内遺跡で検出された人骨は、最小個体数5であることが判明している（第195図）。遺存状況が不良であるため葬法について推測するのは困難が伴うが、遺構との対応、骨の変位、他遺跡の墓葬事例との比較を元に、そこから何が読み取れるか、若干ではあるが考察したい。

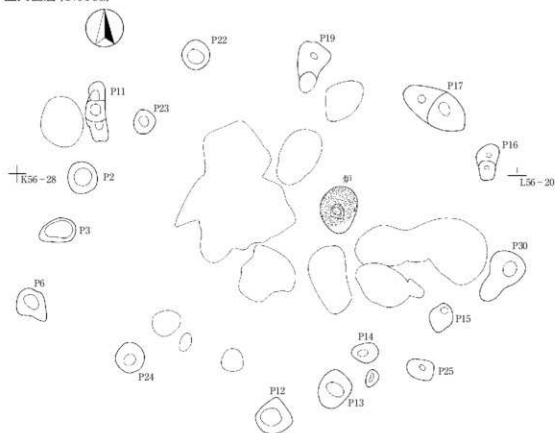
### (1) 人骨が検出された遺構について

人骨が安置された施設はどのようなものであったのか。人骨が検出されたSI008について再度検証したい。平面形状は第2章でも述べたとおり直径約6m～8mの楕円形プランと、直径約4mの円形プランの2種類が認められる（第196図）。双方の柱穴が同じ場所に二重に巡るが北東側は一列であり（P16・17・19）、併用していた様相を呈している。ここでは外側の大きいプランをSI008a（以下a）、内側の小さいプランをSI008b（以下b）としておく。こうした状況の平面プランについて、住居の拡張ないしは縮小が行われたとまずは考えがちであるが、aに属する柱穴は直径約50cm、深さは40～60cmではほぼ一定であり間隔も概ね均等であるのに対し、bに属する柱穴は直径がまちまちで深いが坑底の径が小さいものも多く、間隔もやや不揃いである。従ってここには最低2種の建物が存在していたが、堅穴住居跡の単純な拡張や縮小ではなく構造が異なる建物が別個に建っていたと想定される。プランの大きいaは通常の居住施設としての堅穴と考えられるが（第196図上）、小さいbは一般的な堅穴住居の柱に使う木材より細い木材を密に並べる、テントのような構造の建物であったと考えられる（第196図下）。人骨とそれを覆っている貝ブロックAはbの範囲内から出土している。また、形状を保たない粉末化した骨が面的に広がっているのが認められたが、その骨粉もbの北東側に散布している（破線の範囲）。以上の点から、bは居住を目的とした建物ではなく死体を安置することが目的とした施設であったと推測される。構造は簡素ではあるが覆屋

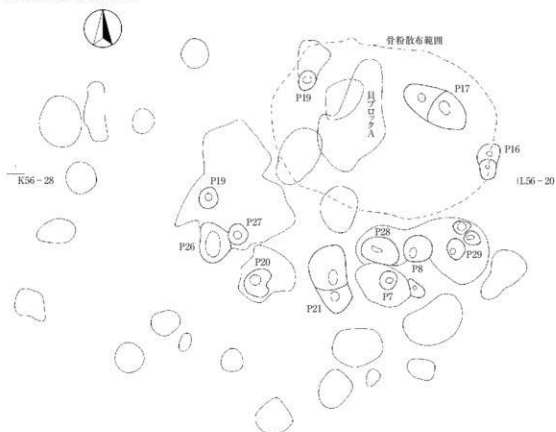


第195図 人骨個体別位置図

竪穴住居 (SI008a)



人骨安置施設 (SI008b)



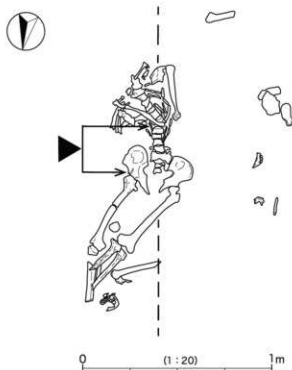
第196図 SI008及び人骨安置施設概念図

があるとかかなり気密性が高くなる。骨粉は貝ブロックに覆われなかったため風化した人骨と考えられ、破線の範囲内に死体が安置されていたと推測される。aとbの関係であるが、人骨の出土レベルは床面直上ではなく、床面上に10cm～20cm堆積した土の上から出土しており、aが腐絶してある程度埋まった後に死体が安置されたことを示している。さらに中心付近からaに伴う炉が1基検出されているが、人骨が安置されていた面より炉の検出面は完全に下位であり、人骨調査時に炉の存在は認識できる状況でなかったことから<sup>(1)</sup>、aの腐絶後にbが構築されたことを裏付けている。ただし先述したとおり東側の柱穴は双方で兼用していることから、残存しているaの柱を再利用する形でbが建てられたと考えられ、aの腐絶からbの設置までそれほど間を置かなかったと想定される。そして双方の柱穴から出土した遺物はほぼ同時期であることから、双方の建物が腐絶・腐朽し柱穴が埋まった時期にそれほど差はなかったと判断される。

## (2) 葬法について

5体の人骨の個別の状況から葬法について検討する(第195図)。個体B、D、Eはいずれも散乱してごく一部しか残されていない状況で、色調は白色で表面の滑沢が全く失われている。特にB、Dは下顎骨と臼歯が1m以上離れた位置から出土しているほか、幼児骨であるEでも臼歯と脛骨が1m以上離れて出土するなど、解剖学的位置を全く保っておらず、白骨化した後大きく動かされたことは明白である。個体Cは下顎骨(S18)の周辺からこれに伴うと思われる遊離歯がまとまって出土しているほか、上腕骨(L06)も近接して出土しており上半身が解剖学的位置に近い状態でとどまっていると推測されるが、色調は白色で骨の表面の滑沢が鈍い。最も遺存状況のよい個体Aはほぼ全身が残されているものの、頭蓋骨が西側に遊離した位置から出土しているなど、二次的な移動の痕跡が認められる。色調は鉛色を呈し、骨の表面には滑沢がみられる。個体CとAとの関係であるが、お互い近接していながらも干渉しておらずそれぞれある程度形状を保っていたことが想定される。これに対し個体D、Eは全く無視されて個体Aが安置されており、すでに散乱骨化していた状況がうかがえる。以上の状況から、安置された順位は以下の通り推測される。劣化が進行し散乱している個体B、D、Eが初期に安置されたものであろう。ただしそれらのうちどれが最初に当たるかは推測不能である。次いで劣化が開始している個体Cが安置され、最後に遺存状況の良い個体Aが安置されたものと考えられる。骨の劣化状況の違いは死後の経過時間の違いを示していると考えられる。

これらの人骨の葬法はどのようなものであったのか。それを考えるに当たり、まずは最後に埋葬されたと考えられる個体Aを検証したい。個体Aは頭部を除けば上肢骨から下肢骨まで概ね伸展葬の状況を保っているように見える。しかしよく観察すると、中・上位の椎骨から寛骨へのラインを体縦軸とした場合、股関節の位置と椎骨上位の位置の2か所で同じ角度で体縦軸より右方向に屈曲していることが観察される(第197図の破線が体縦軸)。その理由については最初に安置されたときの姿勢や状況に起因することも考えられるが、この2か所に対し横の同じ方向から同じ力が加えられた可能性が強いと推測される(第197図矢印)。屈曲した部分の骨の一連関節が脱していないのは、個体Aが腱や靭が腐朽途上で軟組織が残る状態にあったからと考えられる。押し込まれた椎骨下位に引きずられる形で椎骨上位は「く」の字状に屈曲し(文中写真1)、大腿骨は寛骨に引きずられる形で骨頭が寛骨臼から脱して捻転したものであろう(文中写真2、文中写真3の矢印)。ちなみに力が加えられた2か所の間隔を計測すると約25cmで、成人が両腕で押し込んだと考えれば無理のない数値である。以上の所見から、個体Aの変位は人為的なものである



第197図 人骨個体A変位概念図

と考えられる。腐朽途上状態にあった死体の右側から成人が右手を寛骨、左手を体幹中央に当て、両手で押し込んで動かすという行為が復元される。

それではなぜ死体を動かしたのか、改めてSI008bという建物の規模と形状を念頭に置いた上でこうした行為の意図を考えると、建物の内部中央にある死体を壁際へ押し込むという目的が想定される。個体Aは西方向へ動かされているが、建物の中央から壁際に押されていることが分かる。さらに個体Aよりも先に安置された個体Cがより壁に近い方へ押し込まれていることから、死者が発生すると建物の中央に安置し、追葬の反復により中央のスペースが無くなると旧葬死体を建物の壁際へ片付ける、といった死体收容の流れが復元される。すなわち個体Aの変位は、より新しく発生した死者の存在を示唆し、SI008bにはその規模に対応する個体数の人骨が收容されていたことが考えられる。骨粉の散布範囲が人骨集積の範囲を示しているとなれば、相当数の人骨が收容されていた可能性が指摘できよう。ただし問題点として、個体A以外の人骨の遺存度が極端に悪いことが挙げられる。貝ブロックに覆われていなかったため他の人骨は失われたというのがその理由となろうが、ある程度の量の人骨が集積していればもっと良好に残存していた可能性が強いと思われる（次項で述べる誉田高田貝塚が好例）、この施設



文中写真1 人骨拡大写真（椎骨）



文中写真2 人骨拡大写真（寛骨）



文中写真3 大腿骨捻転状況

が廃絶し貝ブロックを含む土で覆われた（あるいは覆った）段階で個体A以外の骨はほとんど残っていない可能性もある。改葬が行われた可能性も指摘しておきたい。

### （3）他遺跡の墓葬事例について

竪穴住居内に別個の埋葬施設を構えたと考えられる事例として、市原市祇園原貝塚3号人骨がある。これは4号住居址の中に作られた43号土坑内から出土した人骨の集積である<sup>(112)</sup>。人骨の時期は残念ながら報告書に明記されていないため不明な点があるが、4号住居址からは称名寺式から堀之内1式が出土しているため、同時期か近接した時期と考えられる。この土坑は一辺2m強の隅丸方形で住居址の壁際に構築され、壁とは反対の住居址中央側の辺に壁柱穴状の小ピットが並び、壁側の辺にはピットはない。全部で8体分の人骨が出土しているが、いずれの人骨も壁側の辺に寄せられていることから、住居の上屋構造を利用して人骨安置施設を作ったものと推測されている<sup>(113)</sup>。この施設を作ったときはまだ竪穴住居跡の上屋が十分使える状況だったことになり、思井上ノ内遺跡の事例に比べ住居と死体安置施設とがより密接な関係にあることを示す事例と言える。

建物内に旧葬死体の片付けを行いつつ反復追葬される事例としては、千葉市誉田高田貝塚7T-01人骨群が挙げられる<sup>(114)</sup>。径3.2mの略円形の建物内から少なくとも13個体以上の人骨が出土している。時期は堀之内中期とされる。人骨は自然位にはないが部分的に関節を保つものが目立つ。人骨は建物の壁に沿って幅60cm～80cmの帯状に分布しており、建物の中央には人骨が存在しない空間が存在する。空間は伸展葬に適う広さであることから、まずそこへ死体を安置し、追葬を反復するたびに旧葬死体を建物の壁際に片付けた状況を示している<sup>(115)</sup>。誉田高田貝塚の事例は竪穴住居に伴わない単独の死体安置施設と考えられるが、その点を除くと思井上ノ内遺跡の事例と共通点が多く、時期や地域性を勘案しても相互に関連のある墓制の一つと想定することが可能であるといえる。

これらの事例から、思井上ノ内遺跡の葬法はいわゆる合葬形態の一事例として捉えられると思われる。ここに採り上げなかった他遺跡の事例も含めて比較しても安置施設の構造や規模、葬法の形態など共通点と相違点が認められ、分析する余地は大きいと思われる。今後はより広範囲な事例収集が必要とされよう。

本稿を記すに当たり、人骨の分析を依頼した渡辺新氏には多くのご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

## 注

- 写真図版3の人骨検出状況写真で、右上の土囊のすぐ下側が炬の存在位置にあたる。同アングルのカラー写真を詳細に観察しても炬の存在は認識できない。
- (財)市原市文化財センター編 1991『千葉県市原市祇園原貝塚』市原市教育委員会
- 渡辺 新 2015『人骨集積—東京湾東岸域における後期前半の事例—』『季刊考古学第130号』(株)雄山閣
- 出口(西野)雅人 1991『千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書』千葉県教育委員会
- 渡辺 新 1999『千葉市誉田高田貝塚の多数遺体集積合葬—合葬形態の推定復元・出土歯牙データの提示—』『研究紀要19』(財)千葉県文化財センター

## 第2節 奈良・平安時代

### 1 集落の変遷（第198図）

奈良・平安時代の遺構について、以下の4期に区分した。各時期の遺構は以下のとおりである。

第16表 奈良・平安時代遺構の時期区分

遺構種別 時期	竪穴住居跡	掘立柱建物	焼土遺構・土坑
1期	SI019・SI028・SI029	SB007	
2期	SI018・SI022・SI023・SI024・ SI030・SI031	SB005・SB008・SB009・ SB010	
3期	SI020・SI025・SI026・SI027	SB001・SB002・SB003・ SB004・SB006	SK067・SK073
4期	SI033		SK071・SK072・SK068・SK069・SK070
不明	SI021・SI032		

また各時期の暦年代については、以下のとおりに想定する。

1期：8世紀前半

2期：8世紀後葉から9世紀初頭

3期：9世紀前葉から後葉

4期：9世紀末から10世紀

時期区分については、遺構の数量があまり多くなく、遺物も概して少ないことから、あまり細分していない。これは遺構の年代を特定しにくい掘立柱建物についてもなるべく区分したいと考えたことにもよる。特に3期は現在の土器研究の水準からみると長期であるが、そのなかでは古い土器様相や新しい土器様相をもつ遺構もあるので、個別にみていきたい。

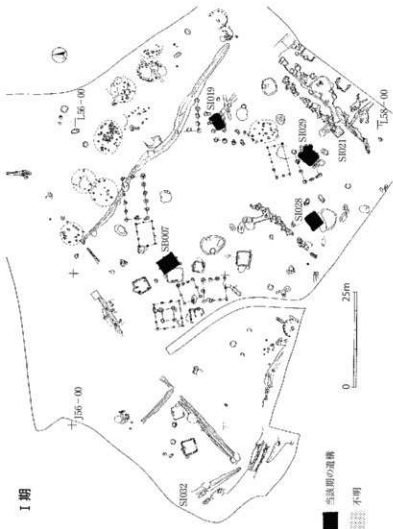
掘立柱建物については出土遺物が非常に少ないため、土器からの時期区分はほぼ不可能である。そのため竪穴住居跡や掘立柱建物同士の主軸・副軸方向、桁行・梁行方向の類似から時期を想定した。したがって区分の根拠は他の遺構以上に薄弱であるが、思井上ノ内遺跡の集落変遷に少しでも近づくため、あえて時期区分を行った。

各遺構から出土した土器はその遺構が廃絶した後に廃棄・遺棄されたか流入したものである。出土遺物のなかには遺構が存在していた時期よりも古い遺物が混入する可能性があるが、図化できる遺存のよい遺物は概して遺構廃絶以後のものとするのが妥当である。そのため近年では、遺構の年代は出土遺物よりも一世代古いとみて、集落を考察する研究もみられる<sup>(註1)</sup>。

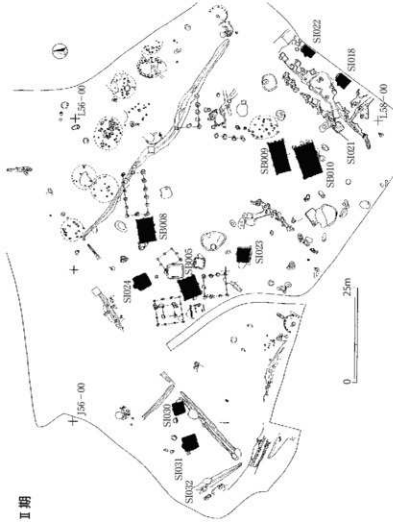
しかし本項で提示する各期の年代幅は長期であるため、遺構の年代も主として各期のうちに含まれるとみておきたい。

奈良・平安時代の遺構分布全体図を眺めると、中央に遺構の痕跡が存在しない空白域がみられる。掘立柱建物SB009のように残りの悪い遺構もあるため、ここに確認面では見つけられない遺構が存在したことも考えられる。しかし長期にわたって空白であることから、何らかの作業空間や多目的な広場などが存在した可能性が高いと考える。

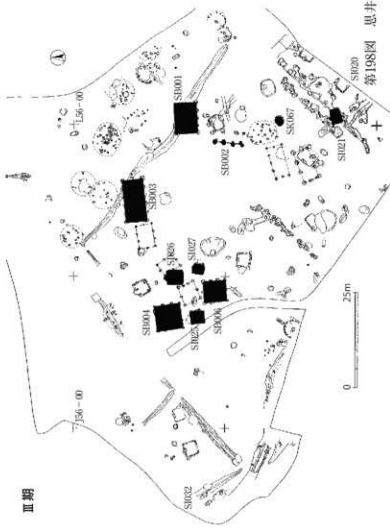
I期



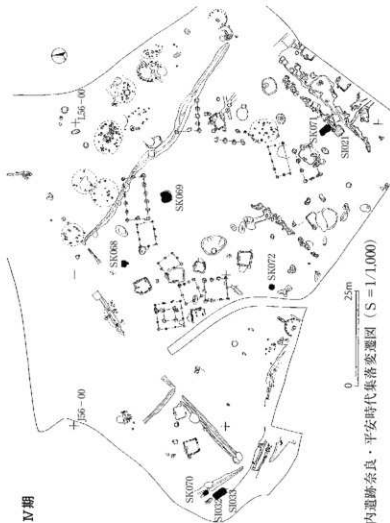
II期



III期



IV期



第198図 思井上ノ内遺跡奈良・平安時代集落変遷図 (S=1/1,000)



次に時期毎に集落の変遷をみていく。

**1期** 1期の遺構は、堅穴住居跡3軒、掘立柱建物1棟である。堅穴住居跡は台地の南東側に分布している。SI019とSI029は北西方向に主軸方位をもつ。SI028は隅カマドであるため主軸方位の認定が難しいが、堅穴の向きはSI019・SI029と近似する。また以上の3軒はいずれも横長長方形のプランをもつ点で共通性がある。

掘立柱建物を見ると、SB007の桁行方向がSI019の主軸方向及びSI028短辺方向と平行関係にある。このことからSB007を1期の掘立柱建物と考える。SB007は中央やや北側に位置し、堅穴住居跡群とはかなり距離がある。初期の掘立柱建物が北からかなり振れているのは、多くの官衙の様相とも共通する。

**2期** 2期の遺構は堅穴住居跡6軒、掘立柱建物4棟である。堅穴住居跡は台地の東西と中央に広く分布している。分布状況から4群に区分した。各群の内容は、①調査区南東端のSI018・SI022、②調査区西側のSI030・SI031、③調査区中央やや北寄りのSI024、④調査区中央やや南寄りのSI023である。SI018・SI022は近い位置関係で、SI018の建て替え前の主軸方位とSI022の主軸方位がほぼ同じである。SI030・SI031の主軸方位もほぼ同じ方向である。なおこの両群はともに北西方向に主軸方位をもつが、SI018・SI022の方が北からの傾きが強い。SI023・SI024の2軒は中央に位置するが、やや離れていることと主軸方位に開きがあることから、別群とした。各々単独の堅穴住居跡であるが、掘立柱建物と組になる可能性も考えられる。2期の堅穴住居跡全体をみると、SI023を除いて主軸方向が北西をとり、1期の堅穴住居跡のあり方を継承している。SI023の主軸方位は北からわずかに東であり、2期のなかでは新しいかもしれない。

掘立柱建物については、SB009梁行の方向がSI030・SI031の主軸方位と平行であり、SB009は2期の可能性が高い。またSB005の梁行方向とSB010の梁行方向は平行関係にあるため、SB005とSB010は同時期の掘立柱建物の可能性が高い。SB005の近くには堅穴住居跡SI026があるが、SI026は3期の堅穴住居跡と思われる遺構である。両者の同時存在は難しいと思われるため、SB005は3期以外の遺構であろう。SB005の向きをみると、北からかなり振れており、SI024の主軸方位とも比較的近い。そのためSB005については2期の可能性が高いとみておきたい。SB010は1期の堅穴住居跡SI029と重複しているため、1期以外の遺構である。SB005との関係からも2期の可能性が高い。SB008は3期の掘立柱建物とみたSB003の近くで、SB003との同時存在が困難と思われるため、2期の遺構としたが、根拠は弱い。長期である3期に属する可能性も考えられる。なお建物の向きから1期の遺構とみるのは難しい。

**3期** 3期の遺構は堅穴住居跡4軒、掘立柱建物5棟、焼土遺構・土坑2基である。堅穴住居跡は台地中央に3軒（SI025・SI026・SI027）、台地南東側に1軒（SI020）が分布する。中央の3軒は各々近い位置関係であるが、SI027は出土遺物の様相が新しく、SI025・SI026よりも後出の遺構とみられる。主軸方位をみると、SI026は真北であるが、SI027は北からやや東に振れている。SI025は東であるが、副軸の方位は北からやや西に振れている。SI020は北から西にSI025の副軸方位よりもやや大きく振れている。SI020については立地する地形の影響も考えられる。

土坑SK073から出土した土師器環は3期のなかでは古相である。環に記された墨書の「寺」は近くに位置する四面廂の掘立柱建物であるSB004を指すとみられる。またSB004身舎北側の柱穴列のラインを東方に延長するとSK073はほぼその線上に位置する。したがってSB004は本期に属する遺構と考えられる。またSB004の南北方向は堅穴住居跡SI025の副軸方向と平行である。両者はかなり近い位置関係であるが、建物の向きは整然としており、同時に存在したことが考えられる。また掘立柱建物SB003の南桁行柱穴列

のラインを西方に延長すると、SK073がほぼその線上に位置する。このことからSB003は3期に属することが考えられる。SB003は掘立柱建物SB001・SB006と建物の向きがほぼ平行・垂直関係にあり、SB001・SB006も3期に属する可能性が高いとみられる。SB002は柱穴列の方向がSI027の主軸方向と平行関係にあり、3期新相の可能性が考えられる。そのほか、SB002の南方に位置するSK067も出土土器から3期の遺構と思われる。

以上、3期の遺構をみてきたが、時間幅としてはSK073・SI027の様相から新田の2時期に区分できる。しかしすべての遺構を明瞭に区分することができないため、長期の時間幅のなかで各遺構を提示した。

**4期** 4期の遺構は、堅穴住居跡1軒、土器焼成遺構・焼土遺構3基、土坑2基である。堅穴住居跡はSI033で、調査区西端に位置する。調査された範囲ではカマドが検出されなかったが、形態・規模から建物遺構とみておく。ほかには堅穴住居跡がみられない。4期の住居が台地上に位置するならば掘り込みの浅いものか平地式である。あるいは斜面が微高地に移行していることも考えられる。

焼土遺構SK069は3期の掘立柱建物SB003中心から真南に位置する。このことからSB003は4期まで存続したか4期にまで影響を及ぼす遺構であったことが考えられる。土器焼成遺構SK068は台地中央やや北側に位置する。また土器焼成遺構の可能性のあるSK070は台地西端でSI033の近くに位置する。SI033はSK070に関わる堅穴住居跡の可能性が大きい。土坑SK071は調査区南東、SK072は台地中央南寄りに位置し、散漫な分布である。

**時期不明** 調査区南東に位置する堅穴住居跡SI021と、調査区西端に位置する堅穴住居跡SI032は出土遺物が少なく、時期が不明である。

## 2 土器の様相

**1期** 土師器は非ロクロのものである。SI019では北武蔵型甕、SI028では皿状の浅い甕が出土している。須恵器甕については、本遺跡では良好なものがみられない。SI019で出土した土師器甕は武蔵型のものである。口縁部は「く」の字形を呈する。SI019の6は長く延びて、接合痕がみられる。桜岡編年のⅢ期のものであろう。SI019の5はやや短く、丸みをもつ。桜岡編年のⅢ期かⅣ期のものであろう。須恵器甕は良好な個体がない。SI028で湖西窯産と思われる破片が出土している。SI029から出土した須恵器円面甕は東海産のもので、質感から湖西窯産と思われる。管見に触れる範囲では、透かしの形態等で類似の資料がみられないが、本期に属する資料と思われる。

栗田剛久は本遺跡に隣接する井井堀ノ内遺跡出土土器についての編年を提示しているが<sup>(註2)</sup>、本期は栗田編年Ⅰ期よりも先行する時期と思われる。

**2期** 須恵器は北武蔵産と新治窯産のものが混在する。実測個体では北武蔵産のものが優勢である。北武蔵産の須恵器は南比企窯産のものが多くと思われる。東金子窯産については不明瞭であるが、少数存在する可能性がある。南比企窯産のものはHⅣ期を主体として、前後の時期のものが若干含まれると思われる。土師器は遺存が良好なものは箱形を呈するロクロ土師器である。SI023の出土土器は本期のなかでもやや新しい様相である。ロクロ土師器の大きさが口径12cmの普通サイズのものとは15cmの大形のものに分化している。

土師器甕は、武蔵型の甕、常陸型の甕、在地の甕の3タイプがみられる。武蔵型の甕がやや多く、在地の甕が少ない。武蔵型の甕は、口縁部の形態が「く」の字形のもの、「く」の字形から「コ」の字形への

移行的なもの、「コ」の字形のもの三者がみられる。明瞭な「コ」の字形はSI023出土のものであるが、SI023からは「く」の字形のものも出土している。本期の主体をなすものは前二者である。常陸型の甕のなかには小型のものもみられる。またSI023では台付甕の台部片が多く出土している。

須恵器甕・甗は良好な資料がない。SI031に新治窯産の破片があり、外面に横位と縦位の平行タキがみられる。須恵器壺もあまり遺存のよい資料がない。SI024の7は東海産、SI031の4は北武蔵産のものである。

本期は栗田編年のⅠ期に相当するが、SI023はⅠ期からⅡ期にかけての時期であり、やや降る様相を含んでいる。

3期 須恵器椀坏類の数量は無台・有台ともに少ない。有台のSI026の2、無台のSI027の1は北武蔵産のものである。南比企窯産と思われるが、後者は東金子窯産の可能性も若干考えられる。土師器坏・皿はすべてロクロ土師器である。土師器坏の底径は口径の1/2前後である。大形の土器がいくつかみられる。内面に炭素吸着による黒色処理、ミガキが施されたものが散見されるが、大振りのものが目立つ。底部の切り離しがわかるものは回転糸切りである。その後手持ちまたは回転ヘラケズリが施されて、糸切り痕を確認できないものも多い。逆に回転糸切り後、ほぼ無調整のものもいくつかみられる。SI027出土の坏は底径が1/2以下のものや口縁部が肥厚するものが多く、3期の中でもやや降る様相がうかがえる。皿は有台のものであるが、有台碗と思われるものもある。坏・皿類については、文字・記号資料として「生」・「千」・「寺」などの墨書文字、「×」の線刻がみられるものがある。SK073から出土した「寺」の墨書がある坏は3期の中では古相と思われる。その他、土師器鉄鉢形土器が存在する。

灰釉陶器は非常に少ない。黒笹90号窯式と思われる碗・段皿がみられる。

須恵器壺については、東海産の小型壺・広口長頸壺・壺、南比企窯産と思われる壺がある。須恵器甕については、新治窯産・東海産のもの、南比企窯産と思われるものがある。

土師器甕は在地のものと同武蔵型のものがある。後者は明瞭な「コ」の字形口縁を呈するものである。在地の甕は口径が広く、また回転台上で製作された可能性が考えられるものがある。その他、台付甕がある。

本期は栗田編年のⅢ期に相当するが、SK073出土土器は古相を呈し、SI027は新しい様相がうかがえる。SI027は栗田編年のⅢ期からⅣ期にかけての時期と思われる。

4期 椀坏類については須恵器がみられず、土師器のみである。SK068出土の土師器坏は底径が口径の1/2前後であり、遺存のよい個体では1/2を上回るものと下回るもの数がほぼ拮抗する。切り離し技法は回転糸切りで、静止糸切りはみられない。切り離し後無調整のものと、手持ちまたは回転ヘラケズリが施されるものがある。全面にケズリが施されたものは切り離し痕を確認できない。内面が黒色処理されたやや大振りの坏がある。

SK070は多量の土師器坏が出土しており、底部調整は静止糸切り後無調整のものがほとんどである。内面に黒色処理が施されたものが、実測個体の比率で36%を占める。土器の寸法をみると、底径は口径の1/2以下のものがほとんどである。口径値は10cm~15cmまでみられる。黒色処理された坏に大振りのものが多い。黒色処理が施されていないものは11cm台が主体である。器高は概して浅くなり、皿的なものもみられる。高台付坏が若干量みられ、やや低い「ハ」の字状の高台が付く。それらは内面に黒色処理が施されている。SI033・SK069の土師器坏はSK070の様相に近い。SK071の土師器坏はSK070的なものと底部に回転ヘラケズリが施されたものがみられる。SK072の土師器坏の底部調整は回転糸切り後無調整である。

またSK071・SK072では足高台が出土している。

須恵器は非常に少なく、在地は生産停止後の時期といえよう。SK068出土の大甕は南比企窯産であろう。

土師器甕は武蔵型・常陸型ともみられず、在地のもののみである。器壁は概して厚い。口縁部はやや丸みをもち、端部で内側に小さく内傾する特徴をもつが、内傾や丸みの弱いものもある。土師器甕同様、口縁端部が内傾する土師器甕もみられる（SK069の5）。土師器鉢の出土も目立ち、甕同様、器壁が厚い。内面にミガキ・黒色処理が施された坏的な技法をもつ鉢が存在する（SK068の15）。またロクロ整形されたと思われるもの（SK068の19）や、外面にタタキ目をもつ鉢的な無頸の甕も存在する（SK069の6）。それらは須恵器生産終了後の土器の様相を呈している。

本期は栗田編年のⅤ期に相当する。

### 3 思井上ノ内遺跡をとりまく交通について（第199・200図）

思井上ノ内遺跡は下総国府・葛飾郡家推定地からみて北に直線距離でおよそ12kmである。下総国府・葛飾郡家から出発するとして、本遺跡までの最短の陸路をみると、国府・郡家が所在すると推定される国府台台地から北上して、現松戸駅周辺の台地で低地に降りていく。そこから本遺跡が所在する流山市南部の台地までは、江戸川（旧太日川）東岸で、坂川が流れる低地が広がっている。この低地を直進することが可能であるならば、国府・郡家から本遺跡までの道のりは地図上の最短距離である12kmをそれほど大きく上回らないとみられる。

しかし主として台地上が通常の交通路であったとすると、国府・郡家から松戸市二十世紀が丘付近で北北東方向に進み、本遺跡に近づくとところでやや西寄りに向きを変えて本遺跡に至るルートが考えられる。

一方、水上交通について本遺跡側からみると、南東から南方向に流れる坂川を經由して太日川に入るか、またはそれよりも早く西方に向かって太日川に入るコースが想定される。いずれにしても太日川を南進して真間の入り江から国府・郡家に上陸するルートである。あるいは陸路との併用であれば、先述した松戸駅付近の台地を上って国府・郡家に至るルートも考えられる。水上交通は特に川下りで有効であったと思われるが、上りの場合も、漕航か、ときに引き船によって行われたものと思われる。このような太日川を利用した水上交通の重要性については、すでに天野努が指摘している<sup>(註3)</sup>。

思井上ノ遺跡周辺は下総国の西端に位置しており、西方には武蔵国が存在する。そのため本遺跡周辺地域には武蔵型甕や北武蔵産須恵器など武蔵国由来の物資が流通している。また新治窯産須恵器や常陸型甕など常陸国由来の物資も多くみられる。本遺跡周辺は香取海水系からやや離れたが、香取海に連なる手賀沼からは比較的近い位置にある。また陸路でも新治窯周辺からはそれほど遠くないところに位置している。このように武蔵・常陸両国からの位置関係が本遺跡周辺での物資の流通に影響しているとみられる。

本遺跡周辺は奈良・平安時代の有力な集落が集中しているため、この地域に東海道西津駅が存在したとみる見解がある<sup>(註4)</sup>。西津駅の候補地は本遺跡周辺以外にも諸説があるが、なかでも有力であるのは柏市根戸・我孫子市船戸付近とみる見解である<sup>(註5)</sup>。その根拠としては、この地域に中馬場遺跡など奈良・平安時代の有力な遺跡が存在すること、手賀沼の端に位置するため陸上交通と水上交通の結節点と考えられること、柏市根戸に「花戸原」という地名があり、「カナヅハラ」と読むが、「アカネヅハラ」が転訛したとみられること、などがある<sup>(註6)</sup>。また西津駅から賦駅に至る路線近くに相馬郡家が存在することも、駅の設定にあたって考慮されたものと思われる。



1. 思井上ノ内遺跡 2. 思井堀ノ内遺跡 3. 下総国府推定地 4. 下総国分僧寺 5. 下総国分尼寺

第199図 下総国府・国分二寺と思井上ノ内遺跡・思井堀ノ内遺跡の位置  
(約1/10,000)

飯田付近を榎谷駅とするものである。このルートの場合、下総国府・常陸国府間はやや西寄りのルートとなるが、於賦駅を取手市小文間付近とするルートよりも直進的である<sup>(註9)</sup>。

しかし於賦駅は相馬郡意都郷・布佐郷が比定される我孫子市新木から布佐付近と思われることから、茜

言葉の面からみると、「茜」の草書体は「馬」と似ているため「馬」が誤記されたとのみかたもある。その場合「茜津」は「馬津」となるが、「馬津」は「松戸」に転訛することが考えられるため、茜津駅は松戸市松戸に比定される<sup>(註7)</sup>。

しかし松戸は井上駅が存在すると推定される下総国府周辺から4km～5kmの地点であり、駅間の距離としては短すぎると思われる。

下総国内の駅路について考察した西嶋定生は、茜津駅を根戸・船戸周辺、於賦駅を取手市小文間、榎谷駅を竜ヶ崎市半田付近に比定した<sup>(註8)</sup>。しかしこのルートで下総国府・常陸国府間を結ぶと東寄りに弧を描き、あまり直進的ではない。そこで西嶋は仮説として別のルートも考察している。それは本遺跡のある流山市周辺を茜津駅、常総市大生郷町付近を於賦駅、つくば市



第17表 流山運動公園周辺の奈良・平安時代遺跡と遺構数

遺跡名	調査対象面積 (㎡)	遺 構 種 別		
		竪穴住居	掘立柱建物	土坑・その他
思井上ノ内遺跡	8,629	16	10	20
思井堀ノ内遺跡	21,896	26	6	17
中中ノ台遺跡	5,875	7	5	12
後平井中通り遺跡	4,233	4		
前平井遺跡	27,295	71		
前平井堀米遺跡	14,856	11	2	
市野谷向山遺跡	13,722	2		
野々下大屋敷遺跡 (2)	6,769	2		
市野谷宮後遺跡 (5)	15,827	1		
三輪野山八幡前遺跡 (4)	8,535	3		
計	127,637	143	23	49

る。古道の東側にも本遺跡をはじめ、思井堀ノ内遺跡・中中ノ台遺跡・前平井遺跡・前平井堀米遺跡などの有力な遺跡が展開している。

近年、古道の東方を主体とする地域について、(公財)千葉県教育振興財団による発掘調査が継続的に実施されている。第17表は調査が行われた各遺跡における奈良・平安時代の遺構数の一覧(平成24年度末現在)である。平成27年度現在、思井堀ノ内遺跡が報告済み<sup>(12)</sup>、思井上ノ内遺跡が整理中である以外は、奈良・平安時代についての整理作業はかなり残っている。そのため遺構数や調査面積の数値については今後、変動が生じるとみられる。

表中の遺跡のなかでは、前平井遺跡が調査対象面積27,295㎡に対して、竪穴住居跡数が71棟であり、思井上ノ内遺跡・思井堀ノ内遺跡以上の遺構分布密度を示している。中中ノ台遺跡・後平井中通り遺跡の竪穴住居跡数はあまり多くないが、調査対象面積もやや小さい。

それに対して、市野谷向山遺跡・市野谷宮後遺跡・野々下大屋敷遺跡・三輪野山八幡前遺跡の4遺跡は調査対象面積が比較的広いわりに竪穴住居跡数が少なく、遺構分布密度が低い。また前平井遺跡・中中ノ台遺跡の東方、流山市古間木の台地では、当財団による調査がかなり実施されているにもかかわらず、奈良・平安時代の遺構は検出されていない。未調査地域が広く存在するため、遺構分布密度の濃い集落が全く存在しないとはいえないが、古間木・野々下・市野谷周辺など、坂川上流に面する台地上は既して分布密度が希薄である様相がうかがえる。

古道の北側である三輪野山周辺でも、これまでの調査成果から奈良・平安時代の遺構分布がやや希薄である。そのため加地区周辺から思井堀ノ内遺跡周辺までの地域が、奈良・平安時代集落の密集地帯といえよう。このように古道の東西に集落が密集するのに対して、古道に比較的近いにもかかわらず、東方の台地は集落分布が希薄になる様相がみられる。

坂川上流を臨む台地の集落分布が希薄であるのに対して、加地区の加村台遺跡など、江戸川(太日川)に向かって突出した台地上の集落の遺構密度が高いことから、古道とともに太日川の重要性がうかがえる。

以上みてきた流山市南部における集落分布の中核地帯については、奈良・平安時代の郷(里)の中心地域とみることができよう。そこで次に郷名の比定を考えてみたい。

本遺跡周辺は奈良・平安時代においては葛飾郡に属するが、『和名類聚抄』には葛飾郡に属する郷として度毛・八島・新居・桑原・栗原・余戸・駅家の八郷が記載されている<sup>(13)</sup>。なお八島郷は養老5(721)年における「葛飾郡大島郷戸籍」の存在から大島郷の誤記とする見解が確定的である。大島郷は東京都葛





第18表 思井上ノ内遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡

挿内No.	遺跡地No.	遺跡名	挿内No.	遺跡地No.	遺跡名
1	229	思井上ノ内遺跡	43	149	長崎五枚割遺跡
2	169	思井瀬ノ内遺跡	44		松戸市原の山遺跡
3	33	樋ヶ崎貝塚	45		松戸市道六神遺跡
4		西平井根郷遺跡	46	71	前ヶ崎宮本遺跡
5		西平井二階畑遺跡	47	70	前ヶ崎石神遺跡
6	168	中ノ台遺跡	48	64	名都借基本遺跡
7	170	平和台遺跡	49	67	名都借原古遺跡
8	47	流山院寺	50	162	清流院前遺跡
9	167	中中原敷遺跡	51	156	市野谷中島遺跡
10	36	古間木山王第1遺跡	52	218	市野谷宮尻遺跡
11	184	大原神社遺跡	53	29	下花輪荒井前遺跡
12	204	宮本遺跡	54	151	大野西側遺跡
13	226	前平井瀬米遺跡	55	150	下花輪荒井遺跡
14	227	古間木山王第2遺跡	56	152	大野中ノ割遺跡
15	159	芝崎大開遺跡	57	27	上長塚大門遺跡
16	38	古間木五斗遺跡	58	28	桐ヶ谷浅間様遺跡
17	158	古間木芳賀殿第1遺跡	59	203	花山東遺跡
18	160	古間木芳賀殿第2遺跡	60	24	桐ヶ谷南遺跡
19	32	前平井遺跡	61	135	桐ヶ谷新第1遺跡
20	225	後平井中遺跡	62	131	小原南遺跡
21	90	加村台遺跡	63	127	上新宿後遺跡
22		加東側遺跡	64	126	北南側遺跡
23	187	加若宮第1遺跡	65	125	北久保遺跡
24	186	加町畑遺跡	66	132	北兼師臨遺跡
25	188	加北谷津第1遺跡	67	124	北立山遺跡
26	215	市野谷地蔵宮遺跡	68	21	小谷貝塚
27	190	加若宮第2遺跡	69	20	富士見台第2遺跡
28	189	加北谷津第2遺跡	70	139	中野久木木の台遺跡
29	197	三輪野山八重塚第2遺跡	71	123	中野久木田ノ内遺跡
30	185	三輪野山八重塚遺跡	72	115	中野久木日暮第2遺跡
31	153	三輪野山八幡前遺跡	73	206	十太夫第2遺跡
32	211	三輪野山道六神遺跡	74	146	東初石6丁目第1遺跡
33	154	三輪野山宮前遺跡	75	147	東初石6丁目第2遺跡
34	78	三輪野山北浦遺跡	76	145	十太夫第1遺跡
35		茂侶神社	77	122	十太夫第2遺跡
36	43	野々下大塚敷遺跡	78	121	東初石4丁目第3遺跡
37	41	野々下山中遺跡	79	74	駒山上駒本遺跡
38	44	野々下根郷第1遺跡	80	120	東初石3丁目第2遺跡
39	45	野々下根郷第2遺跡	81	118	駒木新田遺跡
40	157	向下遺跡	82	116	青田第1遺跡
41	56	野々下元木戸遺跡	83	117	青田第2遺跡
42	76	長崎金楽院遺跡			

飾区柴又・江戸川区小岩付近に比定されている。また栗原郷は船橋市本中山・本郷周辺に比定されている。さらに駅家郷については異説もあるが、井上駅を下総国府周辺に比定することが有力であることから<sup>(14)</sup>、市川市市川周辺に比定するのが妥当である<sup>(15)</sup>。

他の5郷については、諸説が並立しており、定説が確定していないが、5郷のうち桑原郷については本遺跡周辺に比定されると考える。その根拠のひとつは地名の「加」と「桑」の音韻が類似すること、二つ目はこれまでみてきたとおり、本遺跡周辺に奈良・平安時代の集落が多く存在することである。

清宮秀堅は『下総国旧事考』において幸手領堤根村（現埼玉県杉戸町）に桑崎・桑塚という地名があることから、その周辺を桑原郷に比定した<sup>(16)</sup>。その後、吉田東伍は杉戸説に疑念を呈し、流山の「加村」が「桑村」の説であるとして流山説を提唱した<sup>(17)</sup>。

杉戸町周辺は本遺跡周辺ほど奈良・平安時代遺跡の分布密度が高くないことから、吉田の流山説が妥当と考える。「桑原」の「原」も台地上を立地の主体とする集落にふさわしいものと思われる。

桑原郷の中心地域については様相が明らかになりつつあるが、どこまでが桑原郷の範囲なのであろうか。

次にその点を考えてみたい。もちろん、古代の行政区界は現代のように判然としたものではない。しかし、ある程度の領域は存在したであろう。なお『和名類聚抄』の郡・郷は9世紀代の様相を反映したものとみられている。それまでの変遷によって消滅・成立した郷の存在が考えられ、8世紀代の「郷」・「里」については、若干様相が異なっていた可能性がある。そのため以下の記述は9世紀代に存在した桑原郷の範囲についての検討である。

桑原郷の範囲を探るために用意したものが第201図である。第201図は旧日本陸軍による明治13（1880）年測量の迅速図に、本遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡の位置を記入したものである。遺跡の出典は、主として『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）』<sup>⑩18</sup>（以下、「分布地図」とする）であり、第201図の範囲内において、「分布地図」における埋蔵文化財包蔵地所在地名一覧における時代（時期）等の項目で、奈良または平安と記載された遺跡の位置をすべて記入した。なお各遺跡の位置は、地形の細部が迅速図と現代の地図でずれる場合があるため、範囲は示さず、分布地図の各遺跡範囲のなるべく中央部分を点で図示した。

分布地図掲載の遺跡は発掘調査されていないものが大多数であるので、奈良・平安時代ではなく、古墳時代の遺跡であるものを若干含む可能性がある。逆に地目が山林などの場合は土器を採集しにくいことから、未発見の遺跡が埋もれている可能性も考えられる。しかし本遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡分布の傾向については、第201図でおおよそ把握できると考える。

結論から先に記せば、第201図に示した範囲は桑原郷の範囲とかなり重なると考える。

桑原郷の集落群は流山市南部の台地に所在する集落群を中核として、その周辺に散在する集落群である。ただし古間木・野々下・市野谷の様相から、中核地帯に近くても、そこからはずれた地域は集落分布が非常に希薄である。また加地区や前平井遺跡と比べれば、三輪野山周辺でも希薄であり、桑原郷の中心地域はかなり狭い範囲に限定される。

以上から流山市南部地域に匹敵する集落密度の高い地域は、かなり離れたところに所在するとみられる。印旛郡村神郷のように同一郷内に複数個所の拠点的な集落群が存在する例もあるが、東葛飾郡桑原郷周辺地域の場合、そのようなあり方とは思わず、離れた拠点的な集落群は他郷となるとみられる。したがって桑原郷のあり方は、中心域となる比較的狭いエリアの周囲のかなり遠方まで郷域が広がっていたと思われる。

流山市南部を中心として、北方をみると太日川東岸の北方地域については、野田市域で遺跡分布の密度が低くなり、桑原郷の北限もこのあたりまでと思われる。葛飾郡は南北に長い郡であるが、地形上、桑原郷も太日川東岸の南北に長い郷域が考えられる。なお太日川西岸は葛飾郡の他郷であろう。

南東方をみると、坂川流域の支谷を臨む集落群が桑原郷の集落群とみられる。松戸市幸田・流山市名都借は桑原郷の範囲内であろう。それよりも南方は現状では遺跡分布が少ない。桑原郷の南限は松戸市北部と思われるが、現状では河川・道路などによる明瞭な境界線を認めるのは困難である。古代においても漠然としたものだったかもしれない。

北東方をみると、73～83の遺跡が分布しているが、これらは大堀川の支谷を臨む台地上に所在する。大堀川は手賀沼に注ぐ河川であり、太日川・坂川流域とは水系が異なる。しかし太日川沿いの遺跡群に近い73～76については桑原郷内の可能性が高いと思われる。また77～80については、東方の79にやや不安があるが、太日川沿いの遺跡群に比較的近く、桑原郷に属する可能性が他郷よりもやや高いように思われる。

一方、81～83の地域については、現状では分水界である江戸川台周辺に遺跡分布が少ないため、積極的に桑原郷内の遺跡群とはいえない。その東方の柏市中山新田Ⅰ遺跡などの遺跡群から切れ目なく分布が続くようであれば、葛飾郡内の他郷または相馬郡内である可能性の方が高いと思われる。

東方の柏市豊四季、柏市笹原は、「分布地図」では奈良・平安時代の遺跡の所在が確認されていない。豊四季の東方は遺跡の分布が希薄であるが、柏市の中心市街地であり、遺跡の確認が困難な状況を反映していると考えられる。しかし奈良・平安時代の遺跡が存在するとしても、大堀川・大津川などの手賀沼水系の方が近いので、流山市南部の遺跡群と同一郷に属するとは思えない。

流山市初石付近では、東初石3丁目第Ⅲ遺跡(78)や東初石6丁目第Ⅰ遺跡(74)などいくつかの遺跡がみられるが、それらは手賀沼に注ぐ大堀川の支谷を臨む台地上に立地する。しかし三輪野山やその北方の上貝塚付近の遺跡から著しく遠いともいえず、桑原郷の範囲内か他郷か判断に迷う地域である。

三輪野山の北方では、下花輪から中野久木さらに第201図の範囲からはずれるが西深井周辺まで、江戸川寄りの台地に奈良・平安時代の遺跡が存在する。それらの東方で大堀川水系との分水界となる箇所は、現状では遺跡の分布が少ない。江戸川台周辺においては古くから開発が進んだ影響が考えられるが、本来的にやや少ないと思われる。流山市青田付近で青田第Ⅰ遺跡(82)などいくつかの遺跡が分布しているが、それらは江戸川沿いの遺跡群と水砂Ⅰ・Ⅱ遺跡など柏市大青田・中十余二付近の遺跡群の中間に所在する。水系的には手賀沼に注ぐ大堀川の支谷を臨む台地上に立地する。

西深井の北方は野田市域となるが、江戸川寄りの遺跡分布をみると、野田市山崎付近で、いくつかの遺跡が点在している。しかし奈良・平安時代の土器片が散布していない遺跡がかなりあり、遺跡分布は希薄になってくる。また山崎の北東は野田市三ツ堀周辺である。奈良・平安時代の遺跡はかなり少ないが、ここまでくと流山市南部の遺跡群からは非常に遠く、水系的にも鬼怒川水系であるため、両者が同じ郷内に属するとは考えられない。

以上から、桑原郷の郷域については、現流山市域を主体として南北に12km～13km、東西に4km～5km程度の南北に長い範囲が想定される。集落の分布密度が高い流山市南部地域は、郷域のなかでは南寄りである。中核地域については、台地を南北に貫く陸上交通路と太日川による水上交通路の重要性が考えられる。中核地域のなかでも、特に加地区や前平井あたりが中心と思われる。なかでも加町遺跡は広大な台地の中央に密度の高い掘立柱建物群をもつことから、現状では郷家の存在が考えられる最も有力な遺跡であろう。古代地名の遺称と考古学的成果も整合していると考えられる。

## 注

- 1 佐々木義則 2010「武田遺跡群からみた奈良・平安時代集落」『武田遺跡群 総括・補遺編』ひたちなか市教育委員会・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ公社
- 2 栗田剛久 2010「第3章 まとめ 第2節 奈良・平安時代」『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器時代～奈良・平安時代編)-』(財)千葉県教育振興財団
- 3 天野 努 2006「第1章 はじめに 第2節 遺跡の位置と環境」『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1-流山市思井堀ノ内遺跡(中世編)-』(財)千葉県教育振興財団
- 4 代表的な文献として以下のものがある。古宮隆信・下津谷達男 1988「下総の古東海道」『東葛上代文化の研究』古宮・下津谷両先生還暦記念祝賀事業実行委員会編

- 5 西津駅を柏市根戸周辺とみる近年の代表的な文献としては『千葉県の歴史』がある。山路直充 2001「房総の駅路」『千葉県の歴史』千葉県
- 6 西嶋定生 2005「下総国内の駅路と於賦駅の位置」『我孫子市史 原始・古代・中世篇』我孫子市教育委員会  
「花戸原」については西嶋2005では「カナヅハラ」と読まれているが、『角川日本地名大辞典』では「ハナトハラ」という振り仮名が付されている。  
竹内理三編 1984『角川日本地名大辞典12 千葉県』角川書店
- 7 吉田東伍 1903『大日本地名辞書』富山房
- 8 西嶋によれば「榛谷」は高山寺本『延喜式』に「坂田」という註が加えられており、「坂田」は「ハンダ」と読むことが指摘されている。注6前掲書。
- 9 注6前掲書。なお地名について、本項では現行行政上の名称に置き換えている。
- 10 山路直充 2001「房総の駅路」『千葉県の歴史』千葉県
- 11 北澤 滋 2012「古代から中世へ～国府と郡衙の中間にあった村～」『第7回千葉県北西部地区文化財発表会・巡回展 ムラから村へ～掘り起こす土地の歴史～』千葉県北西部地区文化財行政担当者連絡協議会
- 12 (財)千葉県教育振興財団編 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2～流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器～奈良・平安時代編)～』(財)千葉県教育振興財団
- 13 『和名類聚抄』は源順が承平年間(931年～938年)に編纂した書物である。
- 14 山路直充 1991「下総国井上駅について(上)」『市立市川考古博物館第20号』市立市川考古博物館
- 15 郷名の比定地に関してはこれまでに多数の文献があるが、ここでは近年の文献である以下の2書によっている。  
宮原武夫ほか 2001「古代房総三国の郡・郷・里の変遷と比定地一覧」『千葉県の歴史』千葉県  
今泉 潔ほか 2006「房総における郡衙遺跡の諸問題～下総国を中心として～」『研究紀要25』(財)千葉県教育振興財団
- 16 清宮秀堅 1846(弘化3)年頃『下総国旧事考 四』
- 17 吉田東伍 1903『大日本地名辞書』富山房
- 18 千葉県教育委員会編 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)～東葛飾・印旛地区(改訂版)』千葉県教育委員会

### 第3節 中・近世

中近世の遺構は、調査区の周縁に溝状遺構が直線状に伸び、調査区中央では遺構が検出されずに空白に近い。また調査区南東端には火葬遺構や、墓坑と思われる土坑が多数分布していた。出土した中近世の遺物は、近世陶磁器の小片がほとんどで、それ以外に板碑、青磁、人骨などがあった。

調査区南東端で台地を整形・区画する溝状遺構SD001、SD002、SD005で囲まれた範囲に、火葬遺構と墓坑が混然と分布していた。溝状遺構で区画された境域は墓域と考えられる。火葬遺構は1か所に集中することなく、分散して通常の墓坑に混じって検出されているので、被葬者が特殊な身分ないしは境遇だったかは予想できない。溝状遺構SD001から青磁が出土したこと、また離れた地点からだが、板碑が出土したことから、墓域は中世から存在していた可能性がうかがえる。ただし墓域として営まれた期間は不明である。

調査区の周縁に配置された溝状遺構は、台地中心部分を区画するような機能を示している。調査区東側を北西から南東へ直線状に長く伸びた溝状遺構SD009A・Bから、少量の近世陶磁器片が出土しているので、これらの溝状遺構が近世に造営された可能性があるだろう。調査区中央から明確な近世遺構は検出されず、また近世遺物の出土数量も微量であるため、顕著で長期的な人間活動、つまり居住のような痕跡はうかがえない。

調査区南東端に位置する溝状遺構SD004と調査区中央南側に位置する溝状遺構SD007は、両者ともほぼ同規模な小ピットからなる集合体で水落ちのような形状をしていた。この2条の溝状遺構は約28mを隔てて平行して伸びているが、あるいは水落ちが形成されるような構造物が地上に存在したのかもしれない。少量とはいえ、近世陶磁器が出土しているので、この遺跡で何らかの活動が営まれたはずなのだが、出土資料からその活動を推測するのは難しい。

## 付章 自然科学分析

### 第1節 SI008貝ブロックA出土人骨の分析

渡辺 新

#### 1 保存状態・出土状態の概況

保存状態は、総じて不良である。頭骨は破片となり原形を復することができない。顔面頭蓋においては細片ないし粉末化して原形を留めず、脳頭蓋においては比較的大きな破片が保存されるものの広範な接合に至らない。下顎骨においては断片ながら歯列を伴った破片の保存がある。

体幹骨は大凡一個体分の量が取り上げられているが、胸椎<T08>、腰椎<T19>の2個の骨が原形を留める他はいずれも接合困難な破片であり、その全量が同一個体であると確定するまでには到らない。

四肢骨は上腕骨L<L04>、大腿骨R<L15>、大腿骨L<L16>の3本の長管骨が接合によって略原形を復することができ、2個の手骨<L08><L09>と、1個の膝蓋骨<L17>が原形を留める。この他はいずれも破片であるが、寛骨<L12><L13>においてはやや広範な接合に至る。

比較的大きな頭骨の破片、大部分の体幹骨、原形・略原形ないし広範な接合に至る四肢骨は、黄色味を帯びた色調で骨質が共通し、欠損面の摩擦が小さく、同一個体であると見なされる。他にこれとは明らかに色調と骨質の異なる骨破片が混じっている。それら破片はいずれも断片的で、欠損面摩擦と骨表面「肌荒れ」がやや著明であり、先の同一個体と見做される骨とは別個体である様相を呈する。

出土状態は、破片の状態の頭骨と体幹骨、折損する四肢骨の各々が大略解剖学的位置関係を保ち、一瞥すると単体葬の態様にある。しかし、解剖学的位置関係から外れた位置にも骨片が点在する状況にあったため、発掘調査では複数個体の存在を念頭に、骨の破片一点ごとに番号を付し、あわせて周辺の微物も同様の扱いで資料採取が実施される。

#### 2 骨破片の部位同定

人骨分析に供するため採取された資料は264に上るが、過半は分析に適わない微細片・粉末状である他、獣骨や貝破片も多数混じっており、部位同定に至ったのは100である。その内訳は頭骨18、体幹骨45、四肢骨24、遊離歯牙13となる（第19・20・24表）。

結果、頭骨においては下顎関節突起Lで部位重複2<S14><S15>、下顎体Lで部位重複3<S16><S17><S18>を確認。四肢骨においては肩甲骨Lで部位重複2<L01><L02>、上腕骨Lで部位重複2<L04><L06>を確認する。また、部位重複3となる下顎体Lにはそれぞれ下顎第2大臼歯が伴う他に、遊離歯牙において下顎第2大臼歯左<t12>を認めるので部位重複4となる。さらに、部位重複4となる下顎第2大臼歯左がいずれも咬耗が進行する中、全く咬耗が無い形成途上未萌出の上顎第1大臼歯<t09>を認める。したがって、採取された資料には最小5個体分の人骨が含まれているとの結論にいたる。

#### 3 所見

最小5個体分との導出に到った歯牙を個体識別の基準にして、それに照応する骨の確認を行い、個体ご

との形質的な特徴を順に記載する。なお、記載にあたっては5個体が略同年代の一定のまとまりをもった人骨群であることを前提としている。

**個体A** 遊離する下顎第2大臼歯左<I01>を識別基準とする。この第2大臼歯は下顎骨<S16>に植立。下顎骨に植立していた第1大臼歯の遠心隣接面耗と遊離していた第2大臼歯の近心隣接面耗の契合を確認する。第2の遠心隣接面耗も進行著しく、永久歯列完成個体であることを認める。個体Aは大臼歯冠が大きく、第2で近遠心径が12mm・頬舌径が11mmを超える(第21表)。下顎体厚69(3)は13.9mm、斜線・顎舌骨筋線が発達して“頑丈”である。後述する個体Bと比較して、大臼歯冠の大きさや下顎体の厚さに大差があり、筋線の発達具合による“頑丈”“華奢”の差も歴然としている。両者の較差は性差を示唆するものとする。

この下顎第2大臼歯左を識別基準とする個体Aに照応する骨は、保存不良ながら大略解剖学的位置関係を保って出土した全身骨であると考え。全身骨と歯牙が植立した下顎骨<S16>は、黄色味を帯びた色調と骨質が共通し、形質的な特徴が5個体中唯一、齟齬のない一致をみる。

性の判定材料には、比較的広範な接合に至る寛骨<L12><L13>がある。左右共に大坐骨切痕が保存されており、狭窄を呈している。男性であると判定して大過なく、歯冠計測値・下顎骨形質の在り方との一致を確認する。

年齢については、寛骨の硬骨化の完了、保存される全ての四肢長管骨端の癒合の完了を観察して、加齢段階に達する大人であると判定。下顎歯列の在り方との一致を確認する。矢状線の後部が保存される頭頂骨破片<S02><S05>においては、縫合の癒合が殆ど進行していない様子が観察されるので、40歳には達しないとみる。仙椎<T21>～<T24>が未癒合であることも参考として、20代半ば～30代の幅で年齢推定するに大過ないとする。

身体的特徴については、大腿骨最大長の計測値が得られており推定身長を計算することができる。大腿骨R<L15>の最大長の値は425mmであり、藤井の身長推定式〔藤井1960〕にあてはめれば159.87cmと算出される。縄文時代人の男性の平均身長159.11cm〔平本1977〕に近似値であることを確認する。他に上腕骨の左を限定とする著明な発達を見る。上腕骨L<L04>は骨幹が太く滑車も発達し、内・外縁が大きく張り出して水かき状を呈し“頑丈”著明である。比較して上腕骨R<L05>は骨幹が細く滑車も小振りであるから、左利きであったと察す。左利きが先天的であったのか、または不自由な右腕を補う形での左利きであったのかは、上腕骨Rの保存が遠位半に止どまるため詳らかでないが、保存の範囲では傷痕の痕跡は観察されない。

**個体B** 下顎骨<S17>に植立する下顎第2大臼歯左を識別基準とする。下顎骨には遊離する第3大臼歯<I02>が植立。永久歯列完成個体であることを認める。下顎骨の他は照応する骨を確定するに至らない。

性については、個体Aとの歯冠計測値・下顎骨形質の較差が判定材料になる。個体Bは大臼歯冠が小さく、第2で近遠心径・頬舌径が11mmに満たない(第22表)。下顎体厚69(3)は12.7mm、斜線・顎舌骨筋線の発達に乏しく“華奢”である。歴然とした個体Aとの較差は性差を示唆していると考え、女性であると比較判定する。

年齢については、第3大臼歯の歯根完成と咬耗・隣接面耗の進行を確認し、下限を20代と推定する。個体Aと比較して咬耗・隣接面耗の度合いが弱く、その度合いに性差があることを勘案しても、年齢上限を30代と比較推定するに大過ないとする。

**個体C** 下顎骨<S18>に植立する下顎第2大臼歯左を識別基準とする。なお、下顎骨は風化軽鬆していた

とみられ採取資料中においては粉末になっており、分析材料は菌群に限定される。これら菌群に照応する骨が、形質的な特徴から上腕骨L<L06>であるに齟齬ないことは後述する。

性については、菌冠計測値が類推材料になる。大白菌冠が大きく、第1は近遠心径12.5mm・頬舌径11.5mm、第2は近遠心径12.2mm・頬舌径11.1mm。個体Aと同等の大きさであり、男性であると類推する。

年齢については、第3大白菌の菌根が分岐部下方を形成途上としていることを確認し、10代後半と推定する。照応とみる上腕骨L<L06>は、骨線線が明瞭に残存する10代後半段階を示しており、第3大白菌根の形成状態と齟齬のない一致を認める。

**個体D** 遊離する下顎第2大白菌左<t12>を識別基準とする。遠心隣接耗が僅かながら進行しており、永久歯列完成個体であることを確認する。遊離下顎第3大白菌左<t13>とは隣接面耗同士に密着感を認めるので同一個体の可能性を考える。照応する骨は確定するに至らない。

性については、第2大白菌の計測値が近遠心径11.1mm・頬舌径10.5mmで、個体A・Cと個体Bの中間値を示し、その別を決するに出来ない。

年齢については、第3大白菌の菌根が根尖において形成途上であることを参考として、20歳前後である可能性を考えておく。

**個体E** 遊離する上顎第1大白菌右<t09>を識別基準とする。形成途上未萌出歯に特有の光沢を欠いた菌冠であり、全く咬耗が無い。四肢骨において骨頭の硬骨化を一切見ない橈骨破片<L07>が抽出されていることを合わせて、少なくとも1個体の幼児の存在を確実とする。

菌根は欠失しているが菌冠の完成を認めるので、3歳～5歳の範囲で年齢推定する。橈骨が近位面で皿状を呈する軟骨遊離面となる様は、歯牙による推定年齢段階に一致する形質的特徴である。

#### 4 摘要

人骨分析に供する採取資料においては、同定の結果により最小5個体が混存することを確認した。それら個体別の所見摘要を以下に列挙する。

**個体A**：保存は全身に及ぶ。性別は男性であると判定。年齢は20代半ば～30代と推定。推定身長159.87cm。左利きであったと察す。

**個体B**：保存は断片的。性別は女性であると比較判定。年齢は下限を20代と推定、上限を30代と比較推定。

**個体C**：保存は部分的。性別は男性であると類推。年齢は10代後半と推定。

**個体D**：保存は断片的。性別は不明。年齢は20歳前後の可能性。

**個体E**：保存は断片的。3歳～5歳と推定。

#### 参考文献（アルファベット順）

- 馬場悠男 1991「第Ⅱ部 人骨計測法」『人体計測法 人類学講座別巻1』雄山閣出版  
藤井 明 1960「四肢長骨の長さとし長との関係に就て」『順天堂大学体育学部紀要』3  
藤田恒太郎 1949「歯の計測規準について」『人類学雑誌』61（1）  
藤田恒太郎・桐野忠大 1976『歯の解剖学』（第21版）金原出版  
藤田恒太郎・桐野忠大・山下靖雄 1995『歯の解剖学』（第22版）金原出版  
平本嘉助 1977「日本人身長の時代的变化」『自然科学と博物館』44（4）



金子丑之介 1989『日本人体解剖学 第一卷』南山堂

瀬田季茂・吉野峰生 1990『白骨死体の鑑定』令文社

津田征郎 1990『新法医学』（改訂第2版）日本醫事新報社

渡辺 新 1999『千葉市誉田高田貝塚の多数遺体集積合葬』『研究紀要19』（財）千葉県文化財センター

第19表 骨破片部位同定 (1)

No (遺物No)	個体	部 位	保 存	備 考
S01 (0207)	A	後頭骨	破 片	人字線R、内後頭稜
S02 (0209)	A	頭頂骨R	破 片	矢状線、前頭線
S03 (0208)	A	前頭骨	破 片	頭頂線
S04 (0260)	A	上顎骨L	破 片	眼窩下縫合、眼窩面
S05 (0059)	A	頭頂骨L	破 片	矢状線
S06 (0016)		前頭骨	破 片	眼窩上線L、側頭線
S07 (0089)	A	頭 蓋	細 片	
S08 (0036)		頭 蓋	細 片	
S09 (0058)	A	頭 蓋	細 片	
S10 (0123)	A	頭 蓋	細 片	
S11 (0090)	A	頭 蓋	細 片	
S12 (0121)	A	頭 蓋	破 片	磨滅著明
S13 (0158)		頭 蓋	破 片	磨滅著明
S14 (0066)	D	下顎骨L	破 片	関節突起、枝後線、角
S15 (0047)		下顎骨L	破 片	関節突起
S16 (0213)	A	下顎骨L	破 片	体部P1～M3歯槽、歯牙2植立、69 (3) 体厚=13.9mm
S17 (0259)	B	下顎骨L	破 片	体部I2～M3歯槽、歯牙3植立、69 (3) 体厚=12.7mm
S18 (0204)	C	下顎骨L	粉末化	歯牙7
T01 (0176)	A	胸 椎	破 片	
T02 (0175)	A	胸 椎	破 片	
T03 (0180)	A	胸 椎	破 片	
T04 (0177)	A	椎 骨	破 片	
T05 (0178)	A	胸 椎	破 片	
T06 (0179)	A	胸 椎	破 片	
T07 (0164)	A	頸・胸椎	破片群	
T08 (0181)	A	胸 椎	一部欠	
T09 (0140)	A	頸 椎	破 片	
T10 (0147)		椎 骨	細 片	
T11 (0210)		椎 骨	細 片	
T12 (0249)	A	椎 骨	細 片	
T13 (0250)	A	椎骨・肋骨	細 片	
T14 (0264)		椎 骨	細 片	
T15 (0182)	A	椎 骨	細片群	
T16 (0187)	A	胸 椎	細片群	
T17 (0183)	A	腰 椎	細片群	
T18 (0184)	A	腰 椎	細片群	
T19 (0185)	A	腰 椎	一部欠	
T20 (0186)	A	腰 椎	破 片	
T21 (0191)	A	仙 椎	細片群	未癒合
T22 (0192)	A	仙 椎	細片群	未癒合
T23 (0190)	A	仙 椎	細片群	未癒合

T24 (0181)	A	仙椎尖	細片	未癒合
T25 (0167)	A	肋骨	破片	
T26 (0173)	A	肋骨	破片	
T27 (0171)	A	肋骨	破片	
T28 (0237)	A	肋骨	破片	
T29 (0168)	A	肋骨	破片群	
T30 (0169)	A	肋骨	破片群	
T31 (0170)	A	肋骨	破片群	
T32 (0235)	A	肋骨	破片群	
T33 (0163)	A	肋骨	細片群	
T34 (0172)	A	肋骨	細片群	
T35 (0234)	A	肋骨	細片群	
T36 (0233)	A	肋骨	細片群	
T37 (0239)	A	肋骨	細片群	
T38 (0236)	A	肋骨	細片群	
T39 (0211)		肋骨	細片	
T40 (0216)	A	肋骨	細片	
T41 (0139)		肋骨	細片	
T42 (0240)	A	肋骨	細片	
T43 (0145)		肋骨	細片	
T44 (0103)		肋骨	細片	
T45 (0166)	A	肋骨	細片	

第20表 骨破片部位同定 (2)

No. (遺物No.)	個體	部位	保存	備考
L01 (0162)	A	肩甲骨L	破片	關節窩、切痕、鳥口突起、肩峰
L02 (0238)		肩甲骨L	破片	關節窩
L03 (0110)		肩甲骨	細片	
L04 (0174)	A	上腕骨L	略完存	
L05 (0052)	A	上腕骨R	遠位半	
L06 (0205)	C	上腕骨L	近位半	骨端線殘存、風化著明
L07 (0258)	E	橈骨	破片	未癒合骨頭遺離欠
L08 (0256)		月狀骨	略完存	
L09 (0148)		手基節	略完存	
L10 (0091)		手基節	破片	
L11 (0217)		中手骨	細片	
L12 (0193)	A	寬骨L	破片	大坐骨切痕 (狹窄)、坐骨結節、白窩、腸骨窩
L13 (0188)	A	寬骨R	破片	大坐骨切痕 (狹窄)、坐骨結節、白窩、腸骨窩
L14 (0155)		恥骨	細片	
L15 (0197)	A	大腿骨R	略完存	最大長 = 425mm
L16 (0195)	A	大腿骨L	略完存	最大長 = 424mm
L17 (0196)	A	膝蓋L	略完存	
L18 (0199)	A	脛骨L	近位半	
L19 (0201)	A	脛骨R	細片群	
L20 (0121)		脛骨	破片	骨體
L21 (0200)	A	腓骨L	近位2/3	
L22 (0223)		腓骨R	破片	骨頭
L23 (0202)	A	腓骨R	破片群	骨體
L24 (0118)		中足骨	破片	

第21表 NaS16下顎骨に伴う歯牙群

No (遺物No)	歯種	保存 冠/根	歯冠計測値<mm>		咬耗	齧蝕	形態観察
			m-d	b-l			
S16 (0213)	下C 左	歯槽開放					
S16 (0213)	下P1 左	歯槽開放					
S16 (0213)	下P2 左	歯槽開放					
S16 (0213)	下M1 左	○/△	122	11.7	3	0	Y5+1
t01 (0073)	下M2 左	○/△	120	11.1	2	0	X5 [S16植立] 表記は [渡辺1999] に準拠

第22表 NaS17下顎骨に伴う歯牙群

No (遺物No)	歯種	保存 冠/根	歯冠計測値<mm>		咬耗	齧蝕	形態観察
			m-d	b-l			
S17 (0259)	下I2 左	歯槽開放					
S17 (0259)	下C 左	歯槽閉鎖					
S17 (0259)	下P1 左	歯槽開放					
S17 (0259)	下P2 左	○/○	7.2	8.1	2	0	
S17 (0259)	下M1 左	○/○	11.4	11.2	2	0	Y5+1 第6咬頭<2>
S17 (0259)	下M2 左	○/○	10.8	10.0	2	0	+5
t02 (0055)	下M3 左	○/○	9.7	9.1	1	0	X5 [S17植立] 表記は [渡辺1999] に準拠

第23表 NaS18下顎骨に伴う歯牙群

No (遺物No)	歯種	保存 冠/根	歯冠計測値<mm>		咬耗	齧蝕	形態観察
			m-d	b-l			
S18 (0204)	上C 左	○/×	7.5	7.9	1	0	
S18 (0204)	上P2 左	○/×	6.4	9.0	1-	0	
S18 (0204)	下C 左	○/△	7.1	7.1	1-	0	
S18 (0204)	下P2 左	○/×	7.2	7.6	1-	0	
S18 (0204)	下M1 左	○/△	12.5	11.5	1	0	Y5+1 第6咬頭<3>
S18 (0204)	下M2 左	○/△	12.2	11.1	1-	0	X5
S18 (0204)	下M3 左	○/△	10.4	9.8	0	0	X4 (根形成途上) 表記は [渡辺1999] に準拠

第24表 遊離歯牙群

No (遺物No)	歯種	保存 冠/根	歯冠計測値<mm>		咬耗	齧蝕	形態観察
			m-d	b-l			
t03 (0203)	上I2 右	△/○	7.5		1	0	シャベル<tr>
t04 (0228)	上I2 左	○/△	7.4	6.6	1	0	シャベル<tr>
t05 (0079)	上P1 左	△/×					
t06 (0100)	上M1 右	○/×	11.6	11.9	1	0	咬頭4 遠心舌側咬頭遠心縁突出著明
t07 (0203)	上M1 左	○/×	11.5	11.8	1	0	咬頭4 遠心舌側咬頭遠心縁突出著明
t08 (0079)	下P1 左	△/△	6.7	8.2	1	0	
t09 (0007)	上M1 右	△/×			0	0	(形成途上埋伏歯)
t10 (0135)	上M2 右	○/○	10.0	11.7	2	1	
t11 (0088)	下M2 右	○/△	11.6	10.9	1-	0	Y4
t12 (0054)	下M2 左	○/○	11.1	10.5	1-	0	Y4 三根性
t13 (0065)	下M3 右	○/△	9.3	8.9	1-	0	(根形成途上) 表記は [渡辺1999] に準拠

## 第2節 思井上ノ内遺跡出土の動物遺体

芝田 英行

### 1 はじめに

本項で扱う資料は、思井上ノ内遺跡で検出された貝層・貝ブロックより、コラム・サンプルとして得られた資料から抽出された動物遺体である。種の同定作業においては、種名特定が困難な骨片などは種不明としたほか、椎体長2mm～3mmやそれ以下といった微小な魚類椎骨には、ボラなどの稚魚や数種の小型魚類のものが含まれていると思われるものの、本報告においては種名を断定するには至れず、これらは種名未特定としてその数量のみを記載した。

以下、検出確認された動物遺体の種名表（微小貝別掲）を記し、次に各遺構における概要を記載することとする。第25～60表は、動物遺体各種の検出数量を一覧としてまとめたものである。

### 2 種名表

#### 節足動物門 ARTHROPODA

顎脚綱 Maxillopoda

無柄目 Sessilia

フジツボ科 Balanidae

フジツボ類 Balanidae sp.

#### 軟体動物門 MOLLUSCA

##### a. 腹足綱 Gastropoda

原始腹足目 Archaeogastropoda

ニシキウズガイ科 Trochidae

イボキサゴ *Umbonium (Suchium) moniliferum*

サザエ科 Turbinidae

スガイ *Lunella coronate corensis*

中腹足目 Mesogastropoda

フトヘナタリ科 Potamididae

フトヘナタリ *Cerithidea rhizophorarum*

ウミナナ科 Batillariidae

ウミナナ類 Batillariidae sp.

新腹足目 Neogastropoda

アッキガイ科 Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

イボニシ *Thais (Reishia) clarigera*

フトコロガイ科 Columbelloidea

マルテンスマツムシ *Mitrella (Indomitrella) martensi*

ムシロガイ科 Nassariidae

アラムシロ *Reticunassa festiva*

##### b. 二枚貝綱 Bivalvia

ツノガイ目 Dentaliida

ツノガイ科 Dentaliidae

ツノガイ類 Dentaliidae sp.

フネガイ目 Arcoida (Filibranchia)

フネガイ科 Arcida

サルボオ *Scapharea kagoshimensis*

ハイガイ *Tegillarca granosa*

ウグイスガイ目 Pteroida

ナミマガシワ科 Anomiidae

ナミマガシワ *Anomia chinensis*

イタボガキ科 Ostreidae

イタボガキ *Ostrea denselamellosa*

マガキ *Crassostrea gigas*

- イシガイ目 Unionoida
  - イシガイ科 Unionidae
    - イシガイ科の一種 Unionidae sp.
- マルスタレガイ目 Veneroida
  - バカガイ科 Mactriidae
    - シオフキガイ *Mactra quadrangularis*
  - ニッコウガイ科 Tellinidae
    - イチョウシラトリ *Merisca capsoides*
  - シオサザナミ科 Psammobiidae
    - ムラサキガイ *Soletellina diphos (S.adamsii, Hiattula diphos)*
  - マテガイ科 Solenidae
    - マテガイ *Solen strictus*
  - フナガタガイ科 Trapeziidae
    - ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum*
  - シジミ科 Corbiculidae
    - ヤマトシジミ *Corbicula japonica*
  - マルスタレガイ科 Veneridae
    - カガミガイ *Phacosoma japonicum*
    - アサリ *Ruditapes philippinarum*
    - オキアサリ *Gomphina (Macridiscus) aequalatera*
    - ハマグリ *Meretrix lusoria*
    - オキシジミ *Cyclina sinensis*
- オオノガイ目 Myoida
  - オオノガイ科 Myidae
    - オオノガイ *Mya arenaria oonogai*
  - ニオガイ科 Pholadidae
    - イシゴロモ *Aspidopholas yoshimurai*
- 脊椎動物門 VERTEBRATA
  - a. 軟骨魚綱 Chondrichthyes
    - エイ目 (トビエイ目) Rajiformes (Myliobatiformes)
      - アカエイ科 Dasyatididae
        - アカエイ属の一種 *Dasyatis* sp.
      - トビエイ科 Myliobatididae
        - トビエイ類 Myliobatidae sp.
  - b. 硬骨魚綱 Osteichthyes
    - ウナギ目 Anguilliformes
      - ウナギ科 Anguillidae
        - ウナギ *Anguilla japonica*
      - ハモ科 Muraenesocidae
        - ハモ *Muraenesox cinereus*
      - アナゴ科 Congridae
        - マアナゴ *Conger myriaster*
    - ニシン目 Clupeiformes
      - カタクチイワシ科 Engraulidae
        - カタクチイワシ *Engraulis japonicus*
      - ニシン科 Clupeidae
        - マイワシ *Sardinops melanostictus*
        - コノシロ *Konosirus punctatus*
        - ニシン科の一種 Clupeidae sp.
    - コイ目 Cypriniformes
      - コイ科 Cyprinidae
        - ギンブナ *Carassius auratus langsdorffi*
  - ボラ目 Mugiliformes
    - ボラ科 Mugilidae
      - ボラ *Mugil cephalus cephalus*
  - ダツ目 Beloniformes
    - ダツ科 Belonidae
      - ダツ? *Strongylura anastomella?*

- サヨリ科 Hemiramphidae  
   サヨリ *Hyporhamphus sajori*  
 カサゴ目 Scorpaeniformes  
   フサカサゴ科 Scorpaenidae  
     カサゴ *Sebastes marmoratus*  
     メバル *Sebastes inermis*  
     ホウボウ *Chelidonichthys spinosus*  
     オニオコゼ? *Inimicus japonicus*?  
   コチ科 Platycephalidae  
     マゴチ *Platycephalus sp.2*  
   アイナメ科 Hexagrammidae  
     アイナメ類 Hexagrammidae sp.  
 スズキ目 Perciformes  
   スズキ科 Moronidae  
     スズキ *Lateolabrax japonicus*  
   ハタ科 Serranidae  
     ハタ科の一種? *Serranidae sp.?*  
   キス科 Sillaginidae  
     キス属の一種 *Sillago sp.*  
   アジ科 Carangidae  
     マアジ *Trachurus japonicus*  
     ブリ *Seriola quinqueradiata*  
   タイ科 Sparidae  
     ヘタイ *Sparus sarba*  
     クロタイ *Acanthopagrus schlegelii*  
     マタイ *Pagurus major*  
     チタイ *Erynnis japonica*  
     キタイ? *Dentex tumifrons*?  
   ハゼ科 Gobiidae  
     ハゼ類 Gobiidae sp.  
   サバ科 Scombridae  
     サバ属の一種 *Scomber sp.*  
     マグロ属の一種 *Thunnus sp.*  
   ニベ科 Sciaenidae  
     ニベ? *Nibea mitsukurii*?  
     シログチ *Pennahia argentata*  
   ウミタナゴ科 Embiotocidae  
     ウミタナゴ *Ditrema temmincki temmincki*  
 カレイ目 Pleuronectiformes  
   ヒラメ科 Paralichthyidae  
     ヒラメ *Paralichthys olivaceus*  
   カレイ科 Pleuronectidae  
     イシガレイ *Kareius bicoloratus*  
     マガレイ *Pseudopleuronectes herzensteini*  
     マコガレイ *Pleuronectes yokohamae*  
     ムシガレイ? *Eopsetta grigorjeui*?  
     カレイ類 Pleuronectidae sp.  
   ササウシノシタ科 Soleidae  
     ウシノシタ類 Soleidae sp.  
 フグ目 Tetraodontiformes  
   フグ科 Tetraodontidae  
     フグ類 Tetraodontidae sp.
- c. 両生綱 Amphibia  
   カエル目 Anura  
   科・属不明 fam. et gen. indet.
- d. 爬虫綱 Reptilia  
   有鱗目 Squamata  
   科・属不明 fam. et gen. indet.

- e. 鳥綱 Aves
- アビ目 Gaviiformes
    - カイツブリ科 Podicipitidae
    - カイツブリ *Podiceps ruficollis*
  - カモ目 Anseriformes
    - カモ科 Anatidae
    - カモ類 Anatidae sp.
  - スズメ目 Passeriformes
    - ヒタキ科 Muscicapidae
    - ツグミ? *Turdus naumanni*?
- f. 哺乳綱 Mammalia
- モグラ目(トガリネズミ目) Insectivora (Soricomorpha)
    - モグラ科 Talpidae
    - アズマモグラ *Mogera imaizumii*
  - サル目 Primates
    - ヒト科 Hominidae
    - ヒト *Homo sapiens*
  - ウサギ目 Lagomorpha
    - ウサギ科 Leporidae
    - ノウサギ *Lepus brachyurus*
  - ネズミ目 Rodentia
    - ネズミ科 Muridae
    - ヒメネズミ *Apodemus argenteus*
    - ハタネズミ *Microtus montebelli*
  - ネコ目 Carnivora
    - イヌ科 Canidae
    - タヌキ? *Nyctereutes procyonoides*?
    - イヌ *Canis lupus familiaris*
  - ウシ目 Artiodactyla
    - イノシシ科 Suidae
    - イノシシ *Sus scrofa*
    - ニホンジカ *Cervus Nippon*

上記のうち、魚類について付記しておく。軟骨魚綱においては、椎骨中にサメ類のものも含まれる可能性があるが、特に確実にサメ類のものとして判断できる資料がなく、特徴的な歯も検出されなかったため、種名表に記載しなかった。ニシン科の一種としたものは、マイワシかコノシロと思われる椎骨である。ウルメイワシやサッパと判断されるものは認められなかった。コイ科のなかには、ギンブナ以外にも別種が含まれる可能性があったが、明確にし得なかった。カサゴ類のなかには、記載以外の種が含まれる可能性がある。アイナメ類は、アイナメとクジメをまとめたものである。ハタ科の一種は、腹椎がハタ科のものに似るものであるが、確実な判断はできなかった。サバ属の一種は、マサバとゴマサバのどちらかに相当する資料である。カレイ類は、イシガレイ・マガレイ・マコガレイおよびムシガレイの可能性のある資料をまとめたものであるが、さらに別種が含まれる可能性がある。

### 3 各遺構内貝層における動物遺体の概要

#### SI005 (P1)

##### 貝類

サンプルAでは、カット4は貝の量がわずかとなるが、カット1から3まで、いずれもハマグリが主体でオキシジミがこれに次ぐ。サンプルBのカット5から9、サンプルCのカット10から16も、サンプルA

と同じ様相である。

#### 魚類

トビエイ類、ウナギ、カタクチイワシ、マイワシ、スズキ、マアジ、タイ類、ヒラメ、ウシノシタ類、フグ類が検出されたが、すべて最小個体数は1個体である。マアジの稜鱗やタイ類の歯は各カットで検出され、魚種によるカット間での差異は認められない。

#### 哺乳類

骨片が検出されている。詳細不明。

### SI005 (P15)

#### 貝類

カット1から13まで、いずれもハマグリを主体とし、オキシジミ、シオフキガイ、ハイガイ、アサリといった種がわずかな量的差をもちながらこれに次ぐ。

#### 魚類

魚骨類としては少量だが、アカエイ属、ウナギ、カタクチイワシ、イワシ類、マゴチ、スズキ、マアジ、タイ類、ハゼ類、ウシノシタ類、フグ類と、種数は比較的多い。

#### 鳥類

骨片が検出されたが、小片であり、詳細は不明である。

#### 哺乳類

ネズミ類の下顎第3大臼歯と上顎門歯片が、各1点検出された。下顎第3大臼歯は、ハタネズミのものである。ほかに骨片も検出されたが、詳細は不明である。

### SI006 (貝ブロックA)

#### 魚類

量的に少なく、軟骨魚類、スズキ、クロダイ、フグ類が検出された。

#### 哺乳類

ニホンジカの肩甲骨、中手骨片、脛骨が検出されている。

### SI006 (貝ブロックB)

#### 魚類

量的にも検出魚種数にしても、SK016での様相とほぼ同じである。

#### 鳥類

骨片が検出されたが、小片であり、詳細不明である。

#### 哺乳類

ネズミ類の下顎、寛骨、大腿骨、脛骨、イノシシの下顎犬歯、ニホンジカの中手骨片、基節骨が検出された。ネズミ類は下顎骨からするとヒメネズミのものであり、他の骨も本種のものであろう。ほかに胸骨片が検出されたが、種名は特定できなかった。

### SI008

#### 貝類

カット1から4まで、いずれもハマグリを主体とする。オキシジミやハイガイなども含まれるが、少量である。



#### 魚類

量的には少なく、イワシ類、スズキ、マアジ、タイ類が検出された。

#### 爬虫類

ヘビ類の椎骨が検出された。ごく小型のものである。

#### 哺乳類

ネズミ類の上顎門歯、ニホンジカの歯の断片が検出されている。カット3においては、ヒトの中節骨が1点含まれていたが、カット2および3では、ほかに人骨・歯が検出されている。骨片も数点検出されているが、詳細は不明であり、なかには焼骨も含まれている。

#### SI014

##### 貝類

カット1から8までは、貝量がわずかなものである。カット18ではサルボオが主体であり、カット28では少量ながらマガキが主体となる。

#### 魚類

量的には少なく、イワシ類、スズキ、タイ類などが検出された。

#### 哺乳類

骨片が検出されているが、詳細は不明である。

#### SI015

##### 貝類

ハマグリが主体であり、シオフキガイ、オキシジミがこれに次ぐ。

#### 魚類

量的には少なく、エイ類、スズキ、アジ類、クロダイが検出された。

#### 哺乳類

骨片が検出されたが、詳細は不明である。一部は焼骨である。

#### SI017

##### 貝類

貝の総量が少なく、主体貝種を明確にし得ないが、カット1から5までを総括すれば、ハマグリ主体と考えられる。灰層においてはハマグリは検出されず、サルボオ、オオノガイ、シオフキガイの破片のみが確認された。

#### 魚類

量的にも検出魚種も比較的多い。検出魚種はSK015のものとはほぼ同じであるが、シログチなどが加わる。比較的大型のスズキが最多であり、他の魚種は小型で1～2個体と少ない。

#### 哺乳類

ネズミ類の下顎第1大臼歯、上下顎門歯、イヌ科の歯片、指骨、イノシシの犬歯、ニホンジカの中足骨片が検出されている。ネズミ類の下顎第1大臼歯は、ヒメネズミのものと思われる。上下顎門歯も、ヒメネズミのものである可能性がある。イヌ科の歯片は種名を特定し得ず、指骨は焼けていた。ほかに骨片が検出されているが、詳細は不明であり、一部は焼けている。

#### SK001

#### 哺乳類

イヌ科の切歯片が検出された。小片であり、種名は特定できない。

#### SK005

##### 貝類

全体的にアサリが主体で、サルボオがこれに次ぐが、カット3でアサリとサルボオがほぼ同じ量となる。また、カット1では、焼けた貝が多く確認された。

##### 魚類

アジ類の稜鱗、タイ類の歯などが、わずかに検出されたのみである。

#### SK012

##### 魚類

魚骨が多く層をなす部分の資料は、椎骨からすると椎体長5mm前後から10mm未満のものが大半を占めるが、種によってはその範囲内で小さいものから大きいものまで数型が含まれる。検出魚種はSI017やSK015のものと同様で、サメ類、トビエイ類、ウナギ、ハモ、アナゴ、カタクチイワシ、コノシロ、マイワシ、コイ科の一種、フナ、ボラ、ダツ？、サヨリ、カサゴ、ホウボウ、メバル、マゴチ、アイナメ類、スズキ、キス類、マアジ、ブリ、マダイ、チダイ、クロダイ、キダイ？、ハゼ類、サバ類、マグロ類、シログチ、ヒラメ、ムシガレイ、マコガレイ、イシガレイ、ウシノシタ類、フグ類であり、カレイ類ではマガレイも含まれるかもしれない。最小個体数ではマアジが群を抜いて多く、スズキがこれに次ぐ。ボラ、ブリ、ハゼ類、カレイ類、ウナギも比較的多い。

##### 哺乳類

ネズミ類の下顎骨、下顎第1大白歯、門歯片、大腿骨が検出されている。下顎骨からするとヒメネズミのものであり、他の骨も本種のものである可能性がある。

##### 両生類

カエル類の椎骨、橈尺骨が検出された。

#### SK014

##### 貝類

サンプルAのカット1から8まで、いずれもハマグリを主体とし、貝種構成はSI005のP15内貝層と近似する。

##### 魚類

検出種数はSI005のP15出土のものよりもやや多く、ボラやブリのほかヘダイといった種も認められた。量的にも比較的多く、スズキが最多で、マアジ、タイ類がこれに次ぐ。各カット間で様相の差異は認められない。

##### 鳥類

小型の脛足根骨片と趾骨が各1点、骨片が数点検出された。脛足根骨の形状と大きさはツグミの同骨標本と近似するが、断定するには至らなかったため、同定結果には疑問符を付した。趾骨は種名を特定できず、骨片は小片でもあり、これらは詳細不明である。

##### 哺乳類

ネズミ類の下顎第3大白歯、イヌ科の脛骨片、ニホンジカの仙骨が各1点検出されている。ネズミ類の

歯は種名は特定できないが、ハタネズミのものではなく、ヒメネズミのものかもしれない。イヌ科の脛骨片は、遠近位両端が欠けており明確ではないが、タヌキのものである可能性がある。ほかに骨片が検出されているが、詳細は不明である。

#### SK015

##### 貝類

カット1から14まではハマグリを主体とし、とくにカット1から11までは、貝の数量自体が少なく、ハマグリ以外の貝種はわずかである。カット12より下層でサルボオ、ハイガイといった貝種がやや多くなり、カット15ではサルボオが主体となり、カット16ではハイガイが主体となる。カット17・18でまたハマグリが主体となるが、貝の総量は少なく、カット19ではマガキ破片のみとなる。

##### 魚類

量的には、SK012出土のものに次いで多い。アカエイ属、トビエイ類、ウナギ、ハモ、アナゴ、カタクチイワシ、マイワシ、フナ、ボラ、ダツ？、サヨリ、カサゴ、メバル、マゴチ、アイナメ類、スズキ、マアジ、ブリ、タイ類、ハゼ類、カマス類、サバ類、マグロ類、ヒラメ、カレイ類、ウシノシタ類、フグ類などと検出魚種も多いが、それらの椎骨からすると、いずれもほぼ2mm～5mmほどの小さなもので、全長10cm前後の小型魚が集中的に漁獲されたものと思われる。なかでも、マグロ類の椎骨が含まれていることは興味深い。最小個体数ではマアジが最多で、カタクチイワシ、タイ類、ハゼ類、ウナギ、スズキがこれに次ぐ。各カットでの検出状況からすると、カット15より下層で魚骨の量、種数が増加する。貝類の状況と合わせて鑑みると、本貝層は、数層に分かれるものと判断される。

##### 両生・爬虫類

カエル類の椎骨と橈尺骨、およびヘビ類の椎骨が検出された。いずれも小型のものである。

##### 哺乳類

ネズミ類の下顎骨、上下顎門歯、下顎第3大臼歯、椎骨、上腕骨、尺骨など、さらにニホンジカの腰椎が検出されている。ネズミ類に関して、下顎骨はヒメネズミのものであり、その他の歯などもヒメネズミのものかもしれない。ニホンジカの腰椎は椎頭・椎窩が遊離しており、未成熟個体のものである。ほかに骨片が検出されているが、詳細は不明である。

#### SK016

##### 貝類

ハマグリを主体とし、アサリ、シオフキガイ、オキシジミがこれに次ぐ。

##### 魚類

量的にはやや多く、トビエイ類、スズキ、マアジ、ブリ、タイ類、ヒラメ、カレイ類、フグ類といった魚種が確認された。スズキが最多であり、スズキやタイ類には比較的大きな個体も含まれる。

##### 鳥類

中足骨が1点検出され、形状などからカイツブリのものと考えられる。ほかに骨片が検出されたが、小片であり、詳細不明である。

##### 哺乳類

イノシシの乳臼歯とニホンジカの下顎第1切歯が検出されている。また、本サンプルには、鹿角も含まれていたもようである。骨片も数点検出されたが、詳細不明であり、一部は焼けていた。

## SK022

### 貝類

ハマグリ主体で、オキシジミがこれに次ぐ。

### 魚類

量的にはやや多く、とくにウナギ、スズキは多く、スズキは最小個体数からしても最多である。検出魚種は、エイ類、ウナギ、ハモ、カタクチイワシ、マイワシ、ボラ、カサゴ、メバル、マゴチ、アイナメ類、スズキ、キス類、マアジ、ブリ、クロダイ、ハゼ類、ヒラメ、カレイ類、フグ類などである。

### 鳥類

骨片が検出されたが、小片であり、詳細不明である。

### 哺乳類

ネズミ類の下顎門歯、寛骨、大腿骨、イヌ科の下顎犬歯が検出されている。ネズミ類は、ヒメネズミのものである可能性が高い。イヌ科の犬歯は小型のもので、幼犬のものかもしれない。

## SK023

### 貝類

カット1から10まで、いずれもハマグリが主体であり、オキシジミがこれに次ぎ、少量のシオフキガイやアサリといった種が含まれる。

### 魚類

検出された魚骨の数量は少ない。最小個体数ではスズキが2個体で他種よりは多いが、アジ類は後鱗のみが検出され、タイ類は顎骨片1点のほかは歯のみが検出され、実相は不明である。

### 哺乳類

骨片が検出されている。詳細不明。

## SK024

### 貝類

サンプルAのカット1から8まで、いずれもハマグリが主体で、ハイガイがこれに次ぐ。また、下層でマガキの量が多くなる。

### 魚類

魚骨類としては少量で、アジ類後鱗、クロダイのものと思われる耳石やタイ類歯、ヒラメと思われる歯が検出されている。

## SK030

### 魚類

タイ類の顎骨片と歯が1点検出されたのみである。

### 哺乳類

ネズミ類の下顎骨、上顎門歯、上腕骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛腓骨、ニホンジカの上腕骨片が検出されている。ネズミ類は下顎骨からするとヒメネズミのものであり、他の骨も本種のものと考えられる。

## SK031

### 貝類

全体的に貝量は少ないが、カット1から3まで、ハマグリが主体である。

魚類

量的に少なく、エイ類、マアジ、タイ類が検出された。

SK032

貝類

カット1、2、ともにハマグリ主体である。

魚類

アカエイ属の歯、ウナギの尾椎、タイ類の歯が各1点検出されたのみである。

SK034

貝類

サンプルAカット8のみでの状況であるが、ハイガイが主体であり、ハマグリがこれに次ぐ。オキシジミもやや多く含まれている。

魚類

量的には少ないが、エイ類、ウナギ、イワシ類、スズキ、マアジ、タイ類、サバ類、ヒラメ、フグ類が検出された。いずれも小型のものである。

鳥類

カモ類の尺骨が1点検出された。大きさはマガモと同大である。ほかに骨片も検出されたが、小片であり、詳細不明である。

哺乳類

ネズミ類の上下顎門歯、尾椎、大腿骨、アズマモグラの下顎骨、尺骨、橈骨、ノウサギの上腕骨、尺骨、橈骨、イノシシの上腕骨、ニホンジカの上顎第2前臼歯、肩甲骨、上腕骨が検出されている。ネズミ類は多く、最小個体数で6頭を数える。ほかに長管骨片が検出されたが、種名は特定できなかった。また、骨片が検出されているが、詳細は不明である。

SK045

貝類

カット1から4まで、いずれもマガキを主体とし、ハイガイ、ハマグリ、オオノガイなどが少量ずつ含まれるが、そのなかでもオオノガイが比較的多い。

SK051

貝類

カット1から7まで、いずれもマガキを主体とする。ハイガイ、ハマグリ、シオフキガイが少量ながらこれに次ぎ、ハイガイ、アサリといった種もわずかに含まれる。また、カット5より上層で、ウミナナの量がマガキに次いで多くなる。

魚類

タイ類の歯が1点のみ検出された。

哺乳類

骨片が検出されている。詳細不明。

SK056

貝類

カット1から3まで、いずれもマガギを主体とする。カット1ではシオフキガイがこれに次ぎ、カット2と3ではオキシジミがマガギに次ぐ。

#### 魚類

イワシ類の尾椎、アジ類稚鱗、タイ類歯がわずかに検出された。

#### 遺構外

#### 魚類

サメ類の椎骨が1点出土したのみである。

#### 哺乳類

イノシシの第3後臼歯1点のほか、詳細不明の骨が検出されている。

## 4 微小貝について

検出種名と遺構ごとの出土状況については、第59・60表にまとめた。

陸産微小貝については、コハクガイとヒメコハクガイが含まれている。これらは外来種であり、後世における混入が考えられる。ただし、縄文時代の貝塚よりこの2種が検出されることはよくあることである。そのため、日本には古くからこれらの類似種が生息していたものと捉え、コハクガイ類似種、ヒメコハクガイ類似種として出土報告される場合もある。しかし、現段階ではその類似種の実体が不明瞭であるため、本報告においてはコハクガイ、ヒメコハクガイのまま記載することとした。現代において、こうした貝類は、オカチョウジガイやキセルガイ類なども含めて、植物の根がはっているところで集中的にみられたりする。それだけに、後世において植物の根が侵入しているような貝層では、陸産微小貝はつねに混入の可能性が疑われよう。よって、本報告では検出種名を記載するとどめることとする。ちなみに、検出された種は他の遺跡でも普通にみられるものであり、特記すべきものはない。

## 5 まとめ

コラム・サンプルなので、各遺構内における貝層・貝ブロックの全体像を示しているわけではない。それでもおおよそまとめると、以下の通りとなる。

貝類の組成は、早期の遺構内貝層はマガギが主体であり、後期の遺構内貝層は概してハマグリを主体とする。ハマグリの特徴は計測可能個体が少ないものの、平均3cm～4cmのもので占められると思われ、ハマグリとしては小さいものが多いと判断される。

魚骨の検出量はSI017・SK012・SK015各遺構内貝層のものが多い。特にSK015検出のものは全長10cm未満の小型魚で占められ、最小個体数ではマアジが最多となる。従来、東京湾岸の縄文後期前半の貝塚においては小型のアジ類が多いとされることと合致し、同時期の横浜市三ツ沢貝塚での近年調査結果とも一致する(芝田 2007)。三ツ沢貝塚においてはアジ類に限らず検出魚種の大半が小型であったが、そのことも本遺跡のSK015検出魚類遺体の状況と等しい。三ツ沢貝塚の動物遺体分析はまだ続いている段階だが、検出魚種についてもほぼ同様であると思われる。本遺跡のSI017では最多魚種が比較的大きなスズキとなるが、構成魚種が小型であることは同じであり、SK012検出魚類はSK015のものよりやや大きくなるが、やはり縄文後期前半貝塚の特徴をあらわしているものと思われる。また、本資料のなかには、マグロ類の稚魚と判断される椎骨が検出されている。これまで、東京湾内の貝塚からマグロ類の骨が出土したことは

報告されていなかった。1956～75年のマグロ類稚魚の分布を調査した結果によれば、クロマグロの稚魚は4～6月に関東沿岸海域に出現することが確認されている（水産庁遠洋水産研究所 1978）。この調査では東京湾内の状況までは不明であるが、稚魚を含む東京湾内の魚類相を調査した結果では、マグロ類の稚魚は確認されていない（東京海洋大学魚類学研究室編 2006）。しかし、マグロ類稚魚のものと思われる稚骨は三ツ沢貝塚資料にも含まれるようであり、縄文時代後期といった時期・環境下においては、東京湾奥に入り込むことがあったのであろう。

鳥類や哺乳類の骨は少ない。イノシシやニホンジカなどの骨は、ほんの一部が検出されたのみであった。一方、ネズミ類は比較的多く、とくにSK034ではヒメネズミが最小個体数で6頭が認められた。なお、ヒメネズミは若齢個体のものが多い。貝層中に大・中型動物の遺存骨が少なく、ネズミ類や小型の鳥の骨が多く数えられる状況は、やはり三ツ沢貝塚でも同様である。大・中型動物の解体場所や骨の処理については、貝層とは別に考えなければならないだろう。

#### 参考文献

- 坂詰秀一監修・品川区立品川歴史館編 2008『東京の貝塚を考える』雄山閣
- 芝田英行 2007「IV貝層 2. 貝層出土の動物遺体について」『三ツ沢貝塚-沢波55番80号地点の調査-』有明文化財研究所
- 水産庁遠洋水産研究所 1978『マグロ類、カジキ類および近縁種稚魚の分布図：調査船俊鷹丸、照洋丸による稚魚調査結果（1956～1975）』
- 東京海洋大学魚類学研究室編・河野博監修 2006『東京湾 魚の自然誌』平凡社



















第42表 SK015出土魚類遺体一覧(3)

種名	カット No. 出土 地点	R/L	部位													その他 特徴	最小 単位 数				
			頭骨	第一 背骨	第二 背骨	第三 背骨	第四 背骨	第五 背骨	第六 背骨	第七 背骨	第八 背骨	第九 背骨	第十 背骨	第十一 背骨	第十二 背骨			尾骨			
アイナメ類	5																		タジメ?	1	
	15	R																			
	16	R																			
	18	L																	尾椎骨体長72mm		
スズキ	1	R																		タジメ?	4
	5	R																			
	14	R																			
	15	L	鱗片:1																	尾椎骨体長72mm	
	16	R																			
	17	R																			
	18	R																			
	19	R																			
	0002	L																			
	キス類?	16	L																		
1																					
マサジ	3																				
	4																				
	5																				
	10	R																			
	12	L																			
	13	R																			
	14	L																			
	15	R																			
	16	R																			
	17	L																			
	18	R																			
	19	R																			
	0002	R																			
	ブリ	16	R																		
18		L																			
1		L																			
タイ類	4																				
	6																				
	7																				
	8																				
	9																				
	10																				
	11																				
	12																				
	13	R																			
	14	R																			
	15	R																			
	16	R																			
	17	L	上背鱗片:1																		
	18	R	鱗片:1																		
	19	L																			

















## SK023

種名	カット No 出上 地点	遺存状況										備考		
不明	0002 0003	骨片												

## SK030

種名	出上 地点	R L	部位																	最小 個体数	
			頭部		骨格					前肢				後肢				その他 備考			
頭蓋骨	下 顎骨	歯	頸椎	胸椎	腰椎	仙骨	尾椎	肩甲骨	上 腕骨	前腕骨	中 手骨	中 指骨	大 指骨	掌骨	指骨	中 足骨	中 指骨		その他 備考		
ヒメネズミ	0003	R	1																	2	
ネズミ類	0003	R	1	上顎門歯：1																	1
		L		上顎門歯：1																	
ニホンジカ	0004	R																			1
		L							1												

ニホンジカ上腕骨L産出部位最大幅46.6mm、滑車最大幅41.9mm

## SK034

種名	カット No 出上 地点	R L	部位																	最小 個体数	
			頭部		骨格					前肢				後肢				その他 備考			
頭蓋骨	下 顎骨	歯	頸椎	胸椎	腰椎	仙骨	尾椎	肩甲骨	上 腕骨	前腕骨	中 手骨	中 指骨	大 指骨	掌骨	指骨	中 足骨	中 指骨		その他 備考		
ネズミ類	A8 0007	R L																			6
		R		上顎門歯：2																	
		L		下顎門歯：6																	
		R		上顎門歯：3																	
		L		下顎門歯：3																	
アズマ モグラ	(3) 0007	R L	1																		1
		R																			
		L																			
ノウサギ	(3) 0029	R L																			1
		R																			
		L																			
イノシシ	(3) 0005	R L																			1
		R		上顎門歯：1																	
		L																			
ニホンジカ	(3) 0007	R L																			1
		R																			
		L																			
		R																			
		L																			
不明	(3) 0077	R L																			1
		R																			
		L																			
		R																			
		L																			

## SK051

種名	カット No	遺存状況										備考		
不明	1	骨片												

## 遺構外

種名	出上 地点	R L	部位																	最小 個体数	
			頭部		骨格					前肢				後肢				その他 備考			
頭蓋骨	下 顎骨	歯	頸椎	胸椎	腰椎	仙骨	尾椎	肩甲骨	上 腕骨	前腕骨	中 手骨	中 指骨	大 指骨	掌骨	指骨	中 足骨	中 指骨		その他 備考		
イノシシ	K55	R																			1
不明	K56-19 -004	R L																			1
		R																			
		L																			



第59表 微小貝一覧 (1)

歯形類小貝

腹足綱 Gastropoda

原始腹足目 Architaenioglossa

ヤマタニシ科 Cyclophoridae

ヒジリヤマタニシ? *Nahuelia microm?*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ
6	○		A2	○			A2	○								

ゴマガイ科 Diplommatinidae

ヤマトゴマガイ *Diplommatina nipponensis*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ
			A5	○	6	○	A7	○	1	○	AR	○				5
			A7	○	7	○			3	○						
					9	○										
					10	○										
					11	○										
					13	○										

ヒザリヤマゴマガイ *Patania pusilla*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ
			A7	○	12	○	A3	○	5	○						

有輪目 Pulmonata

キセルガイ科 Clausiliidae

ヒメギセル, キセルガイ類 *Vivipharofusa micropus*, Clausiliidae sp.

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ
3	○		2	○		A4	○	6	○	A2	○	3	○	AR	○	1
7	○					A5	○	8	○	A3	○	4	○		2	○
9	○							9	○	A4	○	5	○		3	○
								11	○	A5	○					
										A6	○					
										A7	○					
										A8	○					

オオクサキレガイ科 Subulinidae

オオサキレガイ *Allopos clavellum*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ
1	○	3	○	2	○	A7	○	4	○	A2	○					丸
2	○	6	○	3	○			5	○	A3	○					丸
3	○							6	○	A4	○					
4	○							7	○	A5	○					
5	○							8	○	A6	○					
6	○							9	○	A7	○					
7	○							10	○	A8	○					
8	○							11	○							
10	○							12	○							

オソサキレガイ *Allopos pygmaea*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ

ベッコウマイガイ科 Helicariionidae

ハクマイビ *Parahelicella harimensis*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ

ヒメベッコウマイガイ *Dicocentulus simpulatus*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ
1	○	1	○			9	○	A3	○	3	○	AR	○	1	○	
3	○	2	○			10	○	A4	○			2	○			
4	○	4	○			11	○	A5	○			3	○			
5	○					12	○	A6	○							
7	○					13	○	A7	○							
9	○															

ウツロヒベッコウ *Utsurochlamys doerzanti?*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ
1	○															

コソサキガイ科 Zonitidae

コソサキ *Zonitoides arboris*

SK023	SK001	SK045	SK005 (P1)	SK024	SK005 (P15)	SK004	SK005	SK034	SK006	SK008	SK016	SK014	SK003	SK022	SK015	SK017
カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ	カッタ				カッタ

○: 検出有, ◯: 検出多数

第60表 微小貝一覧 (2)

ヒヨコハガイ目 <i>Haustorium minutula</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
1	□	1	□	2	□					2	□		1	□		□
2	□	2	□	3	□		A4	□		3	□					
3	□	3	□													
4	□	5	□													
5	□															
6	□															
オシシママイ科 <i>Bradybaenidae</i>																
エビスマイマイ <i>Trichaphysa conopsea</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
				11	□											
ヒドリマキマイ目 <i>Euhadra quaestio</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
					□											
キビガイ目 <i>Gastrodenticula stemogera</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
						A4	□									
海牛類小目																
原形腕足目 (カサガイ目) <i>Archaeogastropoda (Patellogastropoda)</i>																
ツツノハガイ科 <i>Patellidae</i>																
ツツノハガイ <i>Celima torama</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
		3	□				A6	□								
カサガイ目 <i>Celima mansuetifera</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
		2	□													
アマノヅネガイ科 <i>Neritidae</i>																
ヒロカサノコ <i>Neritina (Dentia) violacea</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
						A4	□									
中腹足目 <i>Mesogastropoda</i>																
カワヤシロガイ目 <i>Assiniiridae</i>																
カワヤシロガイ科 <i>Assiniiridae</i> sp.																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
3	□	3	□							3	□					
4	□															
クワイロカワヤシロ <i>Angustationina castanea</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
						10	□									
ミズゴマボ <i>Stenochyridae</i>																
ミズゴマボ <i>Stenochyris glabra</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
									2	□		□				
リソソボ科 <i>Rissoiidae</i>																
キンスジキョウガイ <i>Rissoina cerithiformis</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
		4	□													
イソマイ目 <i>Tornidae</i>																
シラネ <i>Pandolphia pulchella</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
		3	□													
扇貝目 <i>Entomommatina</i>																
トウチガイ目 <i>Pyramidellidae</i>																
チキネガイ <i>Oriella pulchella</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
						A7	□								□	
チキネ下年属の種 <i>Oleostoma</i> sp.																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
8	□		2	□		A7	□					1	□			
		3	□				A5	□				2	□			
頭脚目 <i>Cephalaspidea</i>																
ヘコミツラガイ目 <i>Retusidae</i>																
コツラガイ <i>Retusa (Decorifer) imignis</i>																
SK023	SK061	SK045	SI005 (P1)	SK024	SI005 (P15)	SK014	SK005	SK034	SK056	SI008	SK016	SI014	SK001	SK022	SI015	SI017
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
						A7	□									



# 写 真 图 版





思非北ノ内遺跡



上層掘削状況 (1)



上層掘削状況 (1)



上層掘削状況 (2)



上層掘削状況 (3)



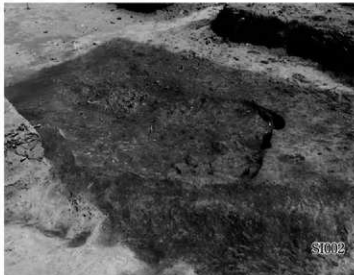
SK0400000



上層掘削状況



SK001

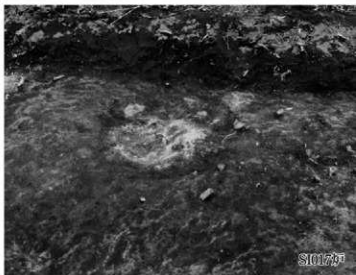


SK002











SK012



SK012土層断面



SK014



SK014遺物出土状況



SK015



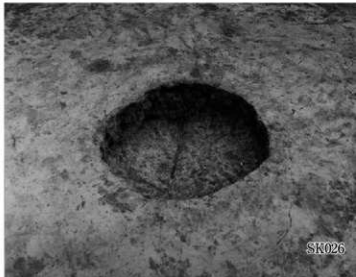
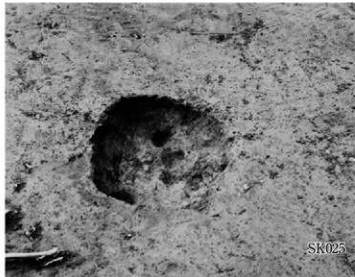
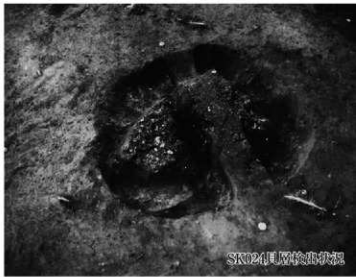
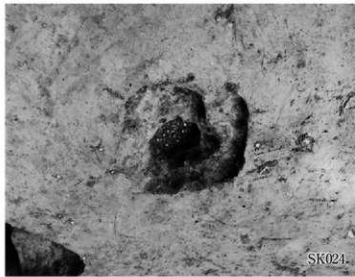
SK016

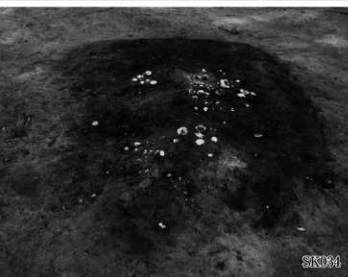


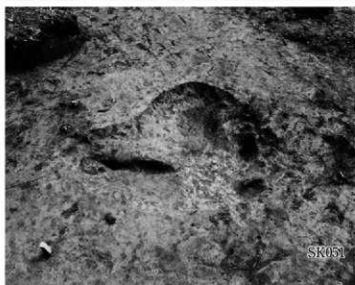
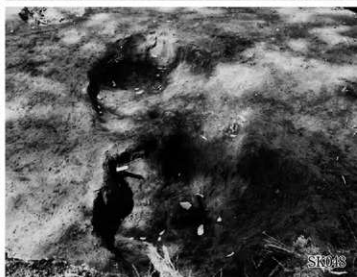
SK017

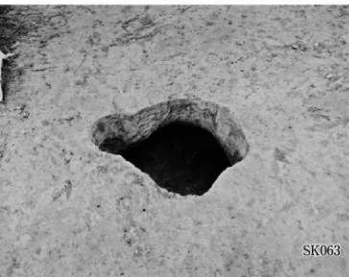


SK018・SK019











調査区中央部航空写真(1)



調査区中央部航空写真(2)







SI018



SI019



SI022



SI023



SI023遺物出土状況



SI023カメラ下



SI024



SI025

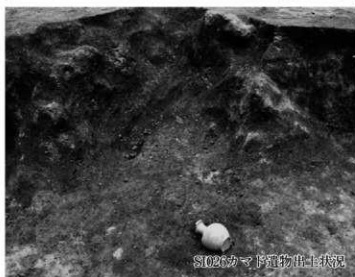


SI025



図版13

SI026



SI026カマ下植物出土状況



SI027



SI027カマ下植物出土状況



SI028



SI029・SB009



SI029



SI029(1)



SI029(2)



SI030



SI031



SI032



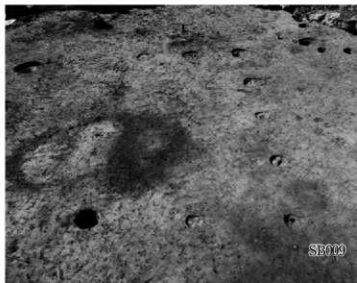
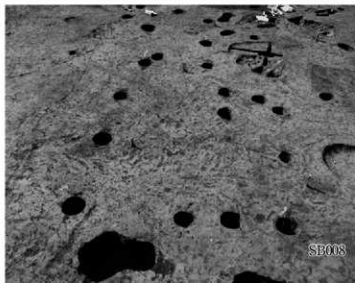
SI031

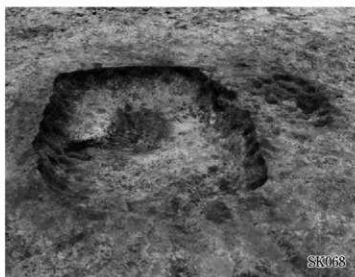


SI033



SB003







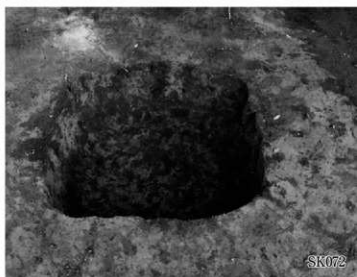
SK070遺物出土状況



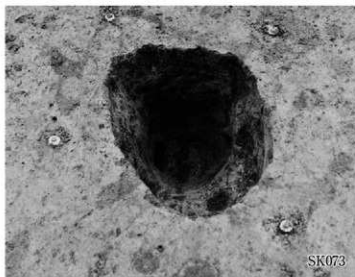
SK071



SK071遺物出土状況



SK072



SK073



SK073遺物出土状況

図版18



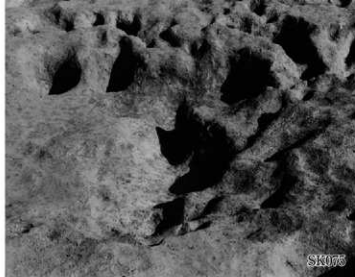
SD007A ~ D



SD012



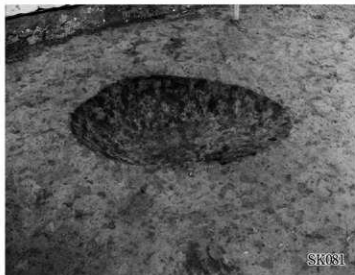
SD013



SK075



SK076



SK081



SK082



SD014



SD015



SD016



SD017





旧石器時代出土遺物（1）L56ブロック



旧石器時代出土遺物（2）L56ブロック



旧石器時代出土遺物（3）L56・J56・I56ブロック



旧石器時代出土遺物（4）L56ブロック



L56ブロック及び周辺部



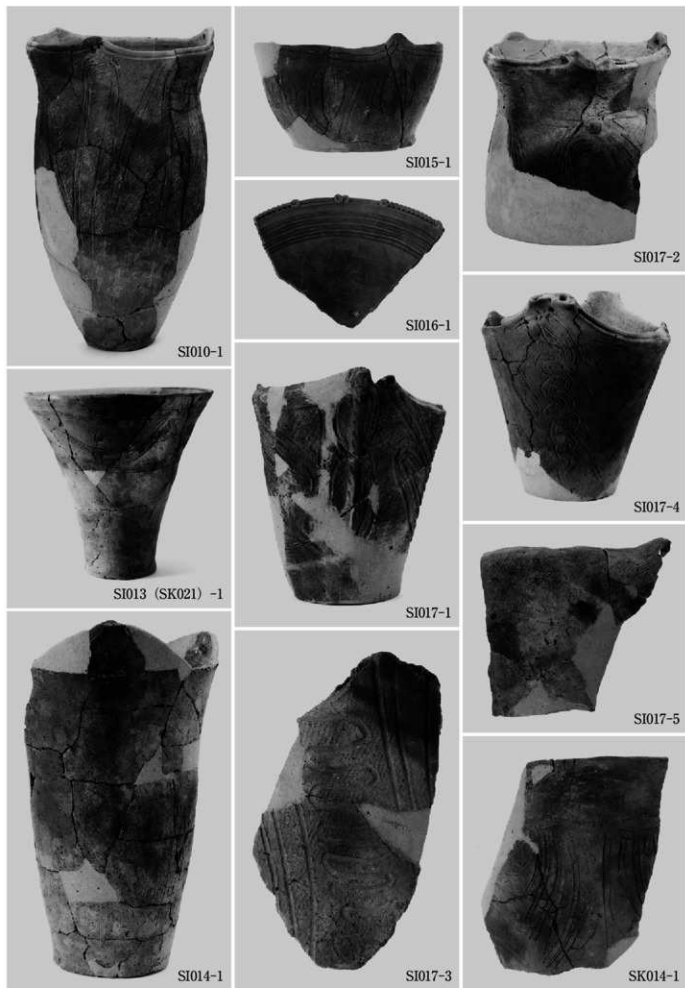
J56・L56ブロック



上層遺構



遺構出土縄文土器 (1)

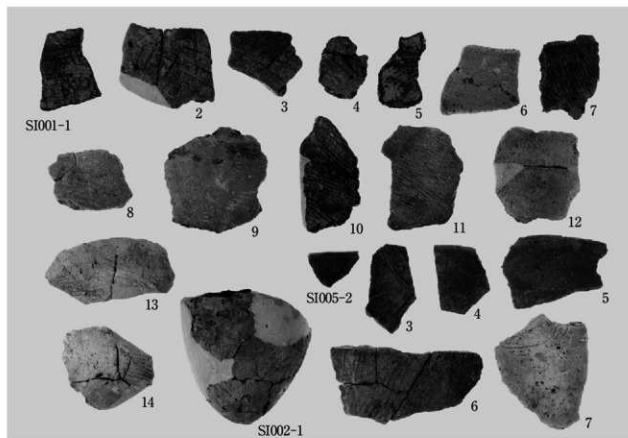


遺構出土縄文土器(2)

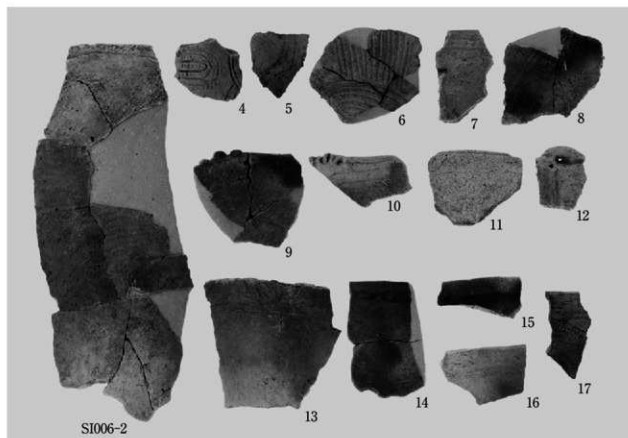


遺構出土縄文土器(3)

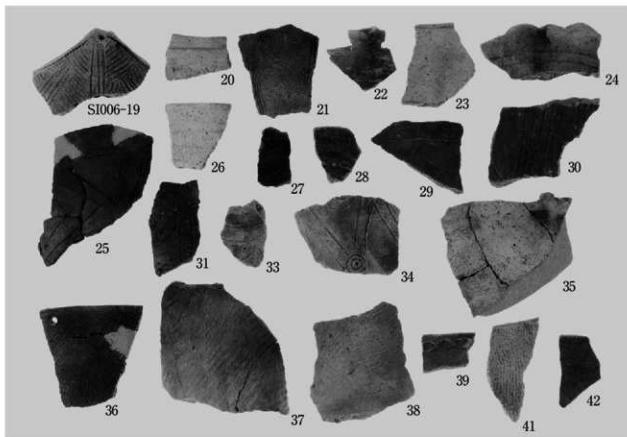




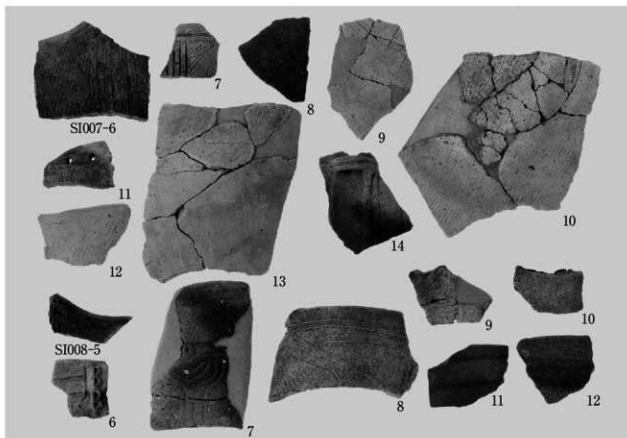
遺構出土縄文土器 (4)



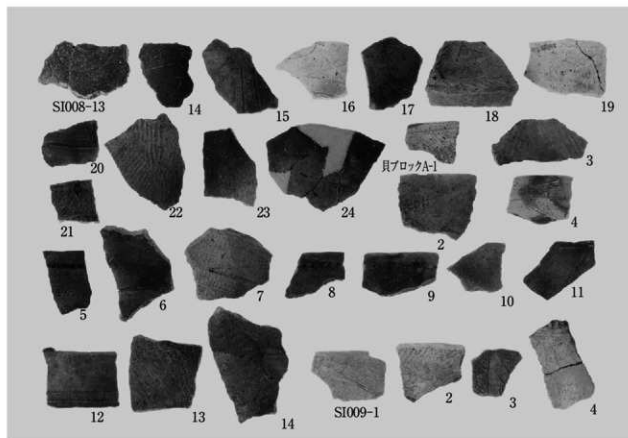
遺構出土縄文土器 (5)



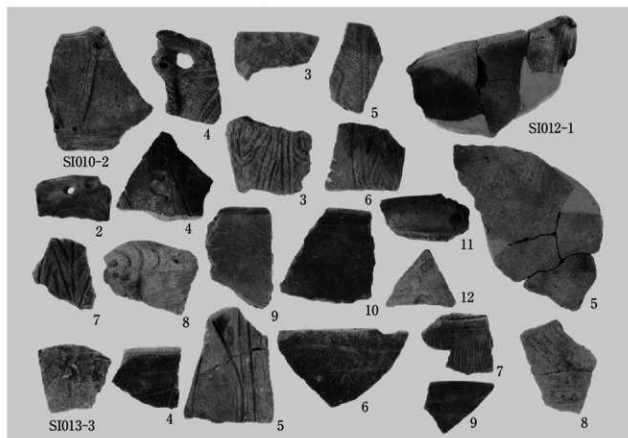
遺構出土縄文土器 (6)



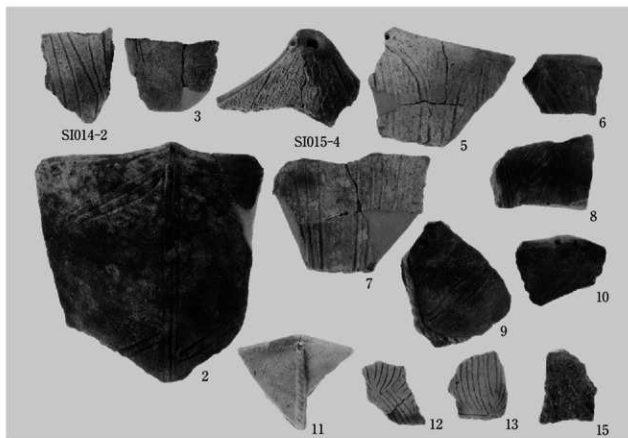
遺構出土縄文土器 (7)



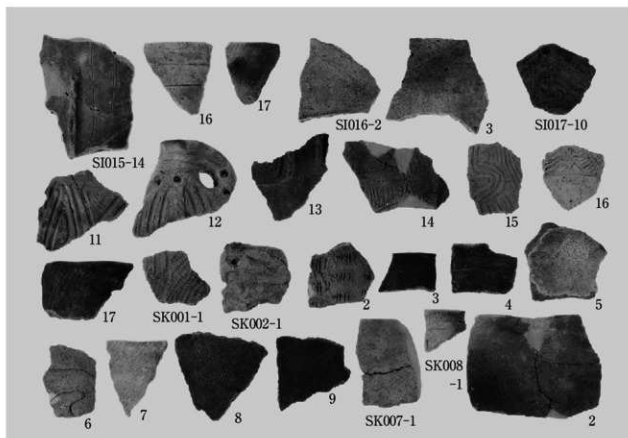
遺構出土縄文土器 (8)



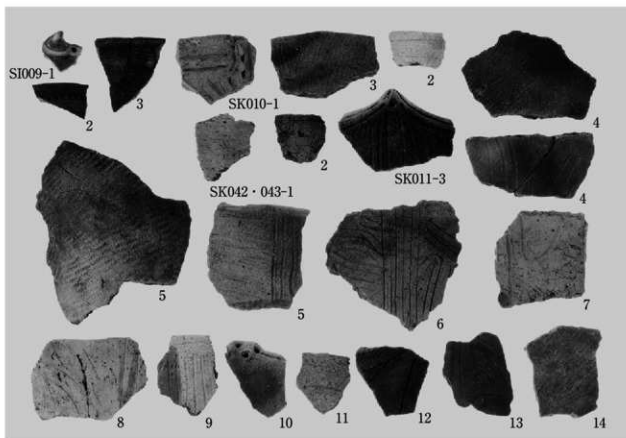
遺構出土縄文土器 (9)



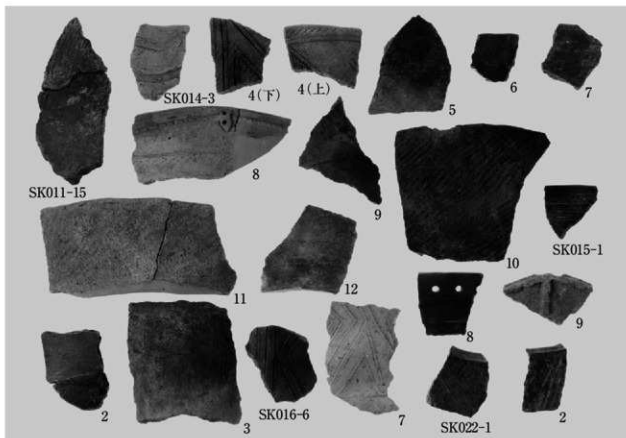
遺構出土縄文土器 (10)



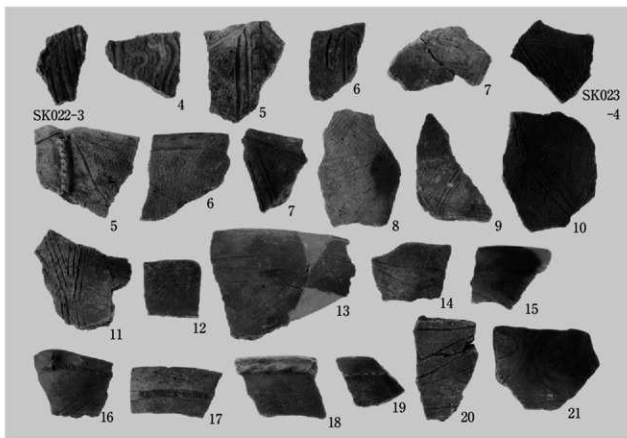
遺構出土縄文土器 (11)



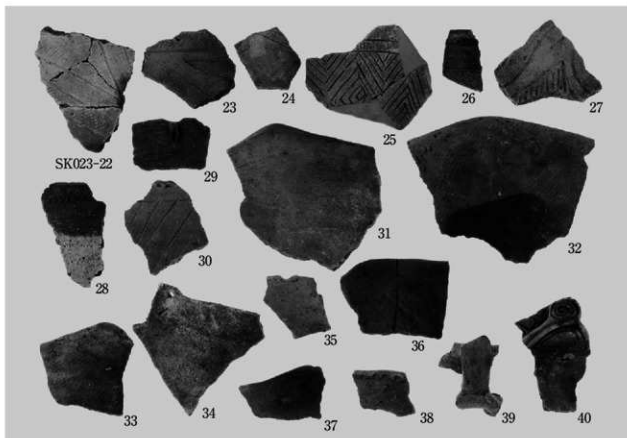
遺構出土縄文土器 (12)



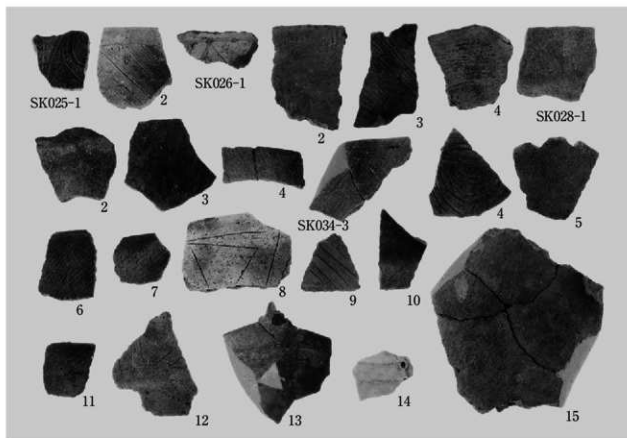
遺構出土縄文土器 (13)



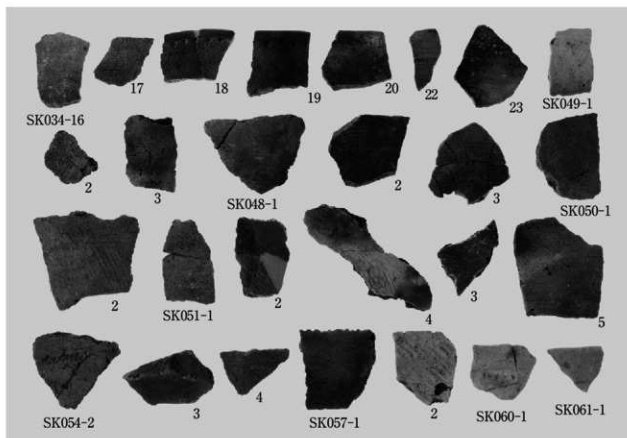
遺構出土縄文土器 (14)



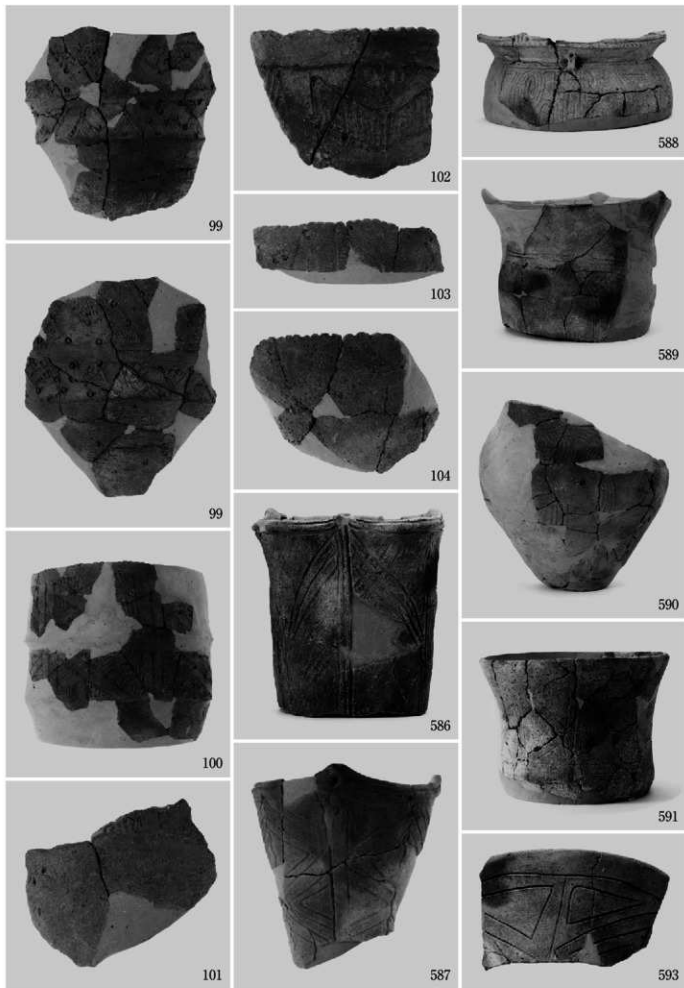
遺構出土縄文土器 (15)



遺構出土縄文土器 (16)

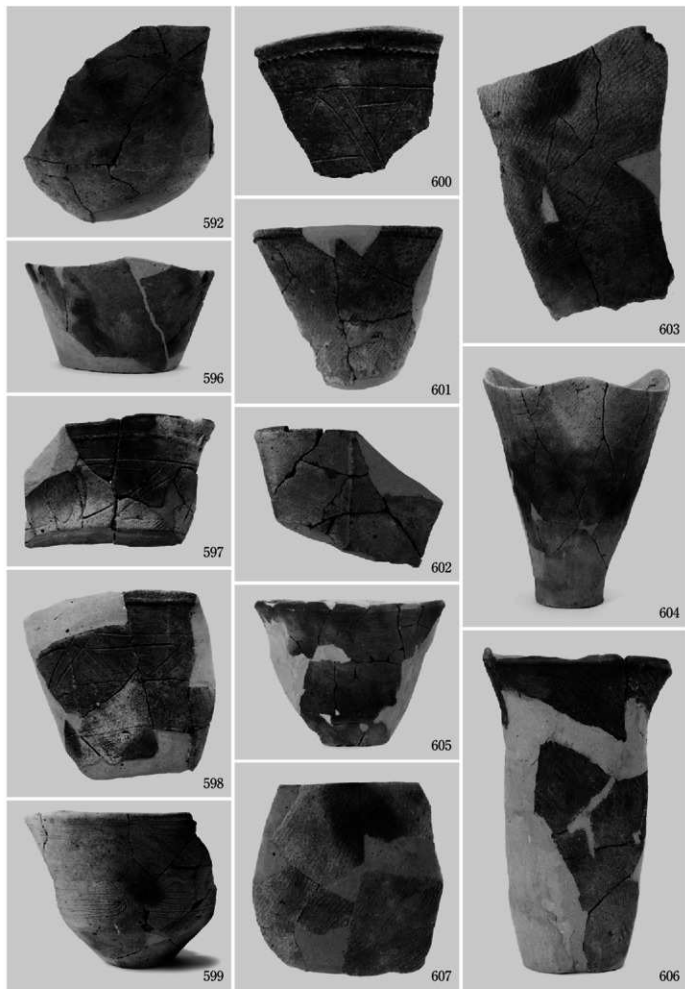


遺構出土縄文土器 (17)

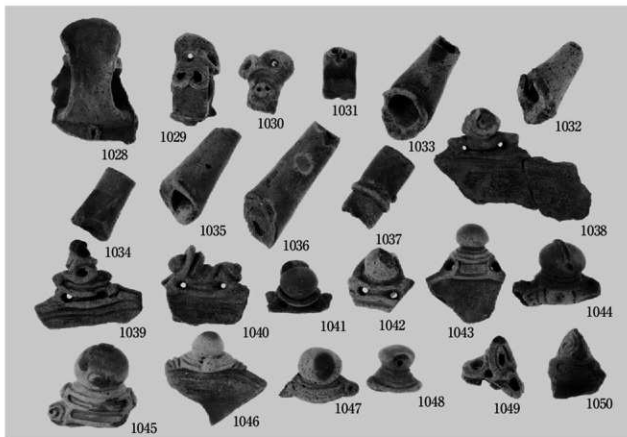


遺構外出土縄文土器（1）

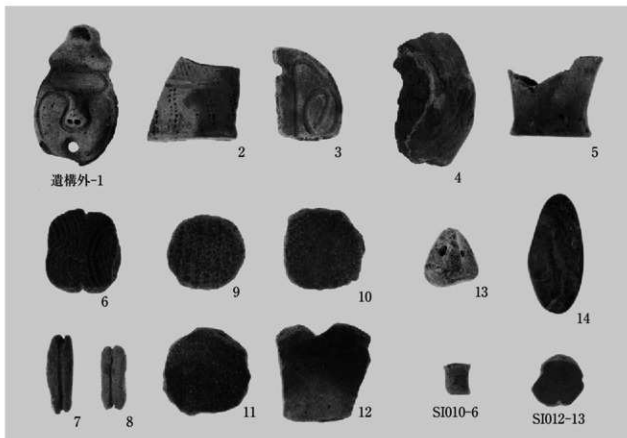




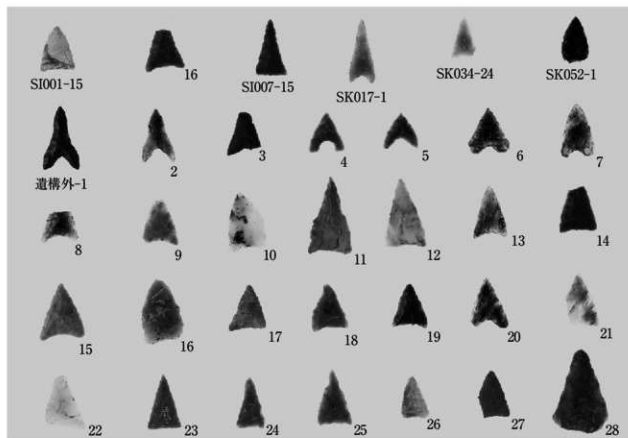
遺構外出土縄文土器（2）



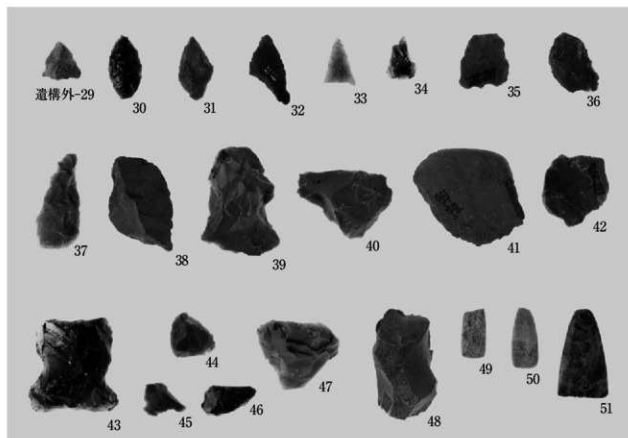
遺構外出土縄文土器（3）



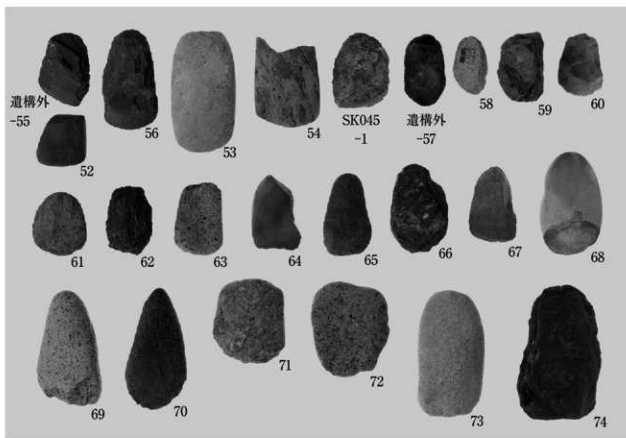
縄文時代土製品・石製品



縄文時代石器 (1)



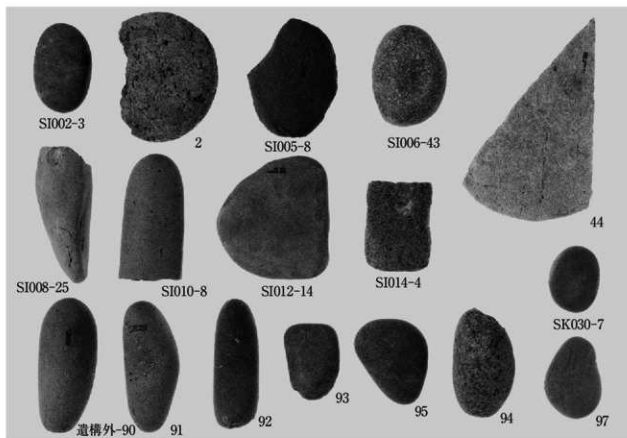
縄文時代石器 (2)



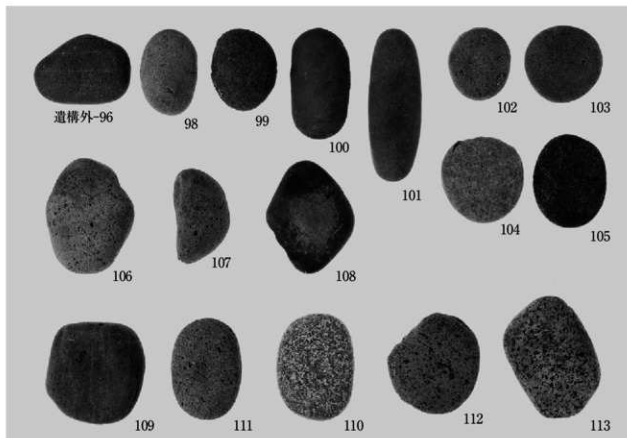
縄文時代石器 (3)



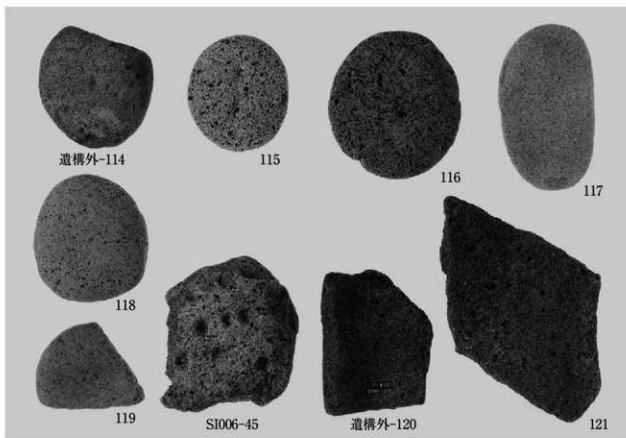
縄文時代石器 (4)



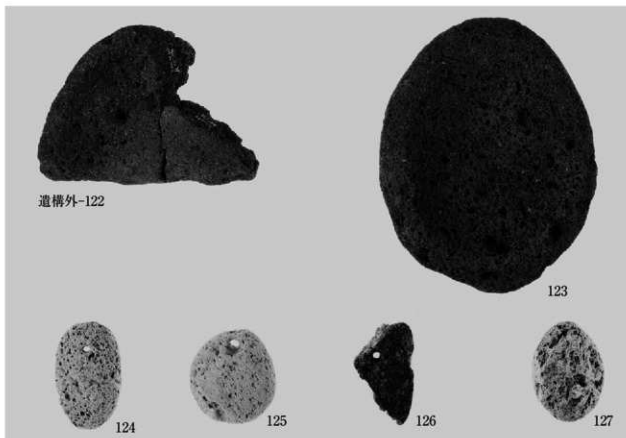
縄文時代石器 (5)



縄文時代石器 (6)



縄文時代石器 (7)



縄文時代石器 (8)

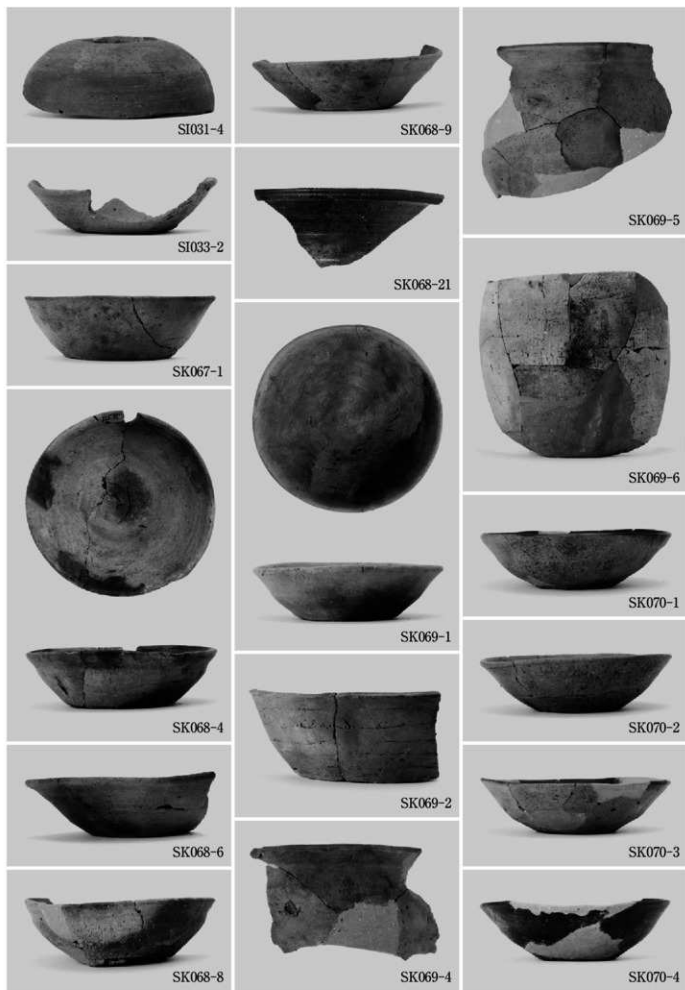


奈良・平安時代土器（1）



奈良・平安時代土器（2）

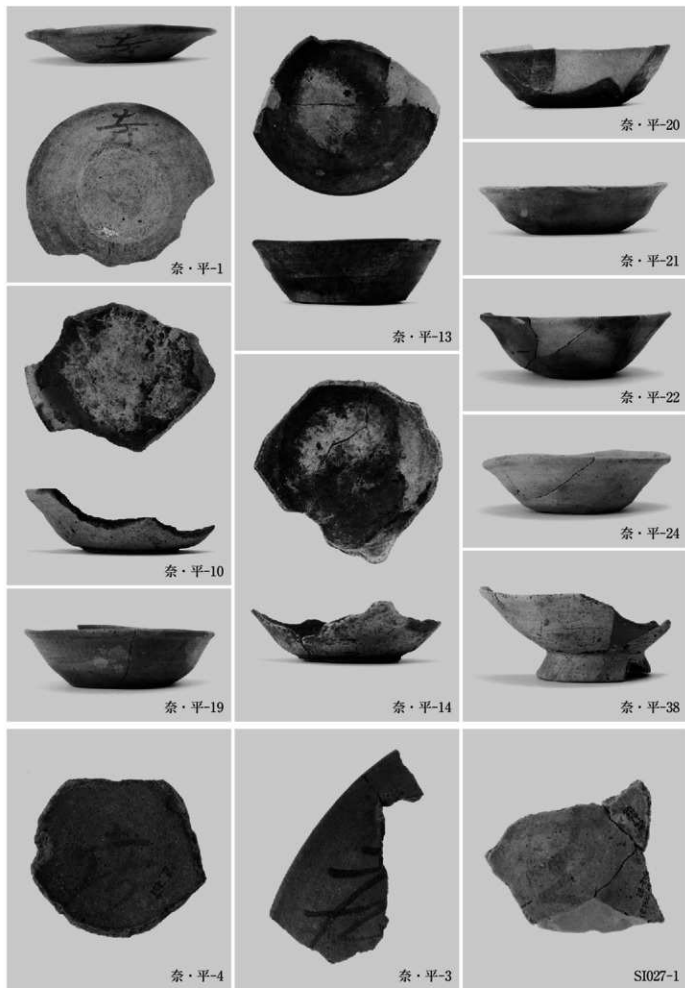




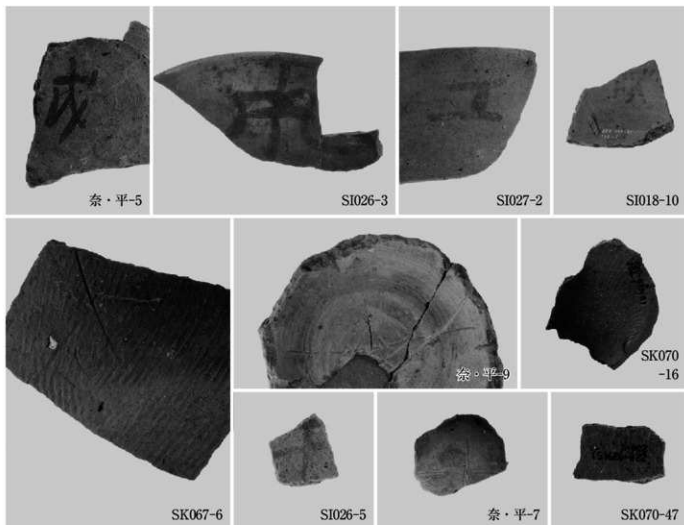


奈良・平安時代土器（4）

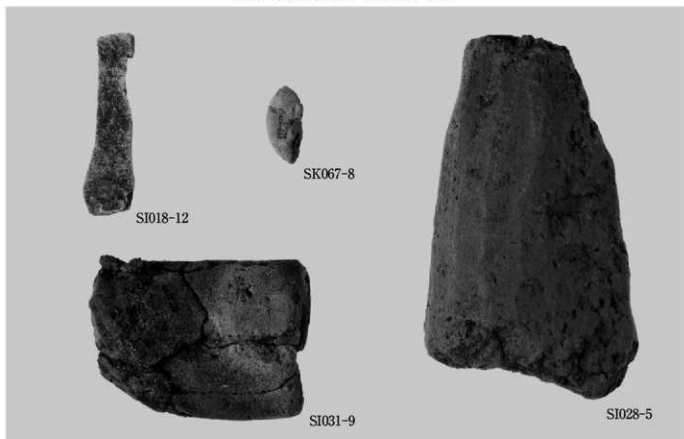
奈・平2



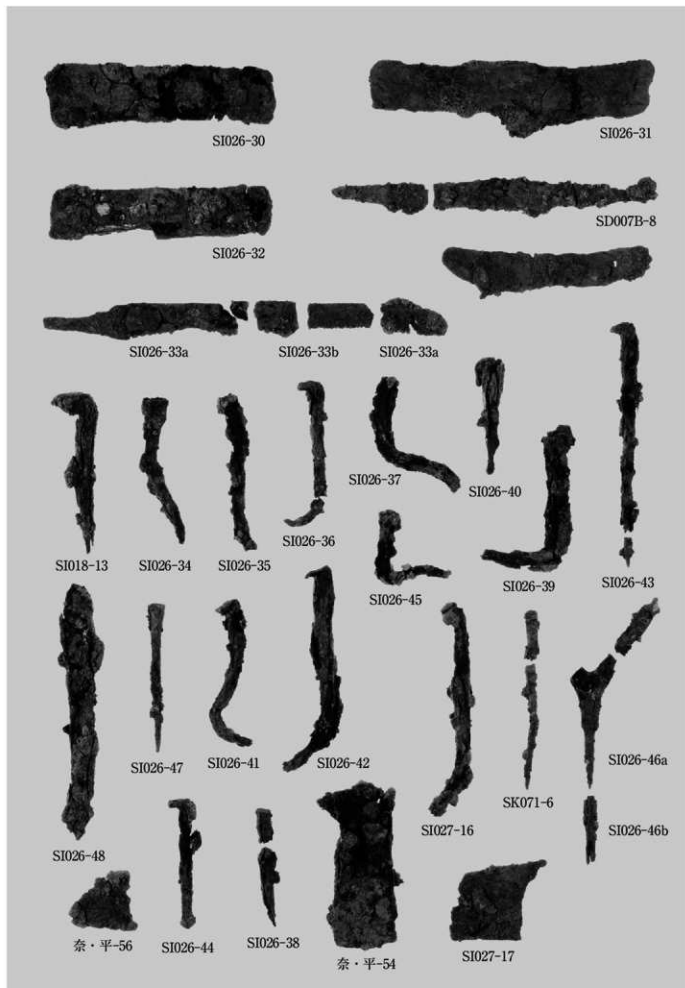
奈良・平安時代土器(5)・文字記号資料(1)

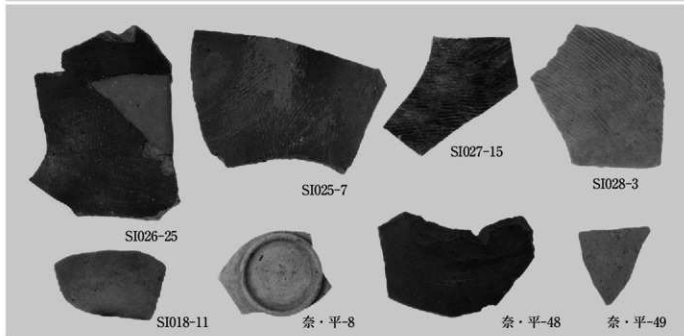
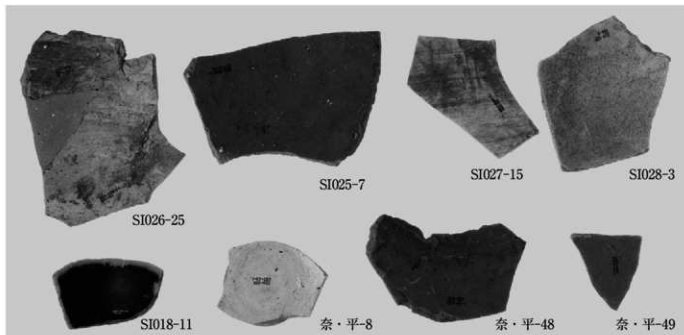


奈良・平安時代文字・記号資料(2)

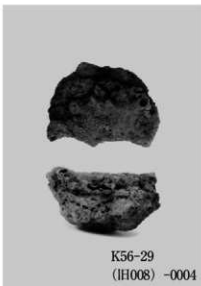


砥石・土製紡錘車・輪羽口・土製支脚

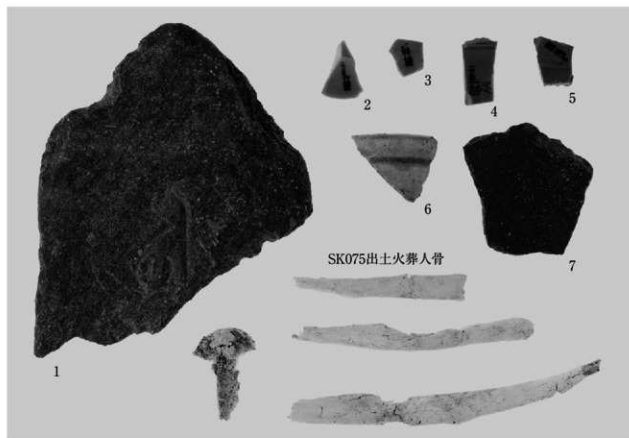




奈良・平安時代土器転用硯・転用品



鉄滓



中·近世遺物



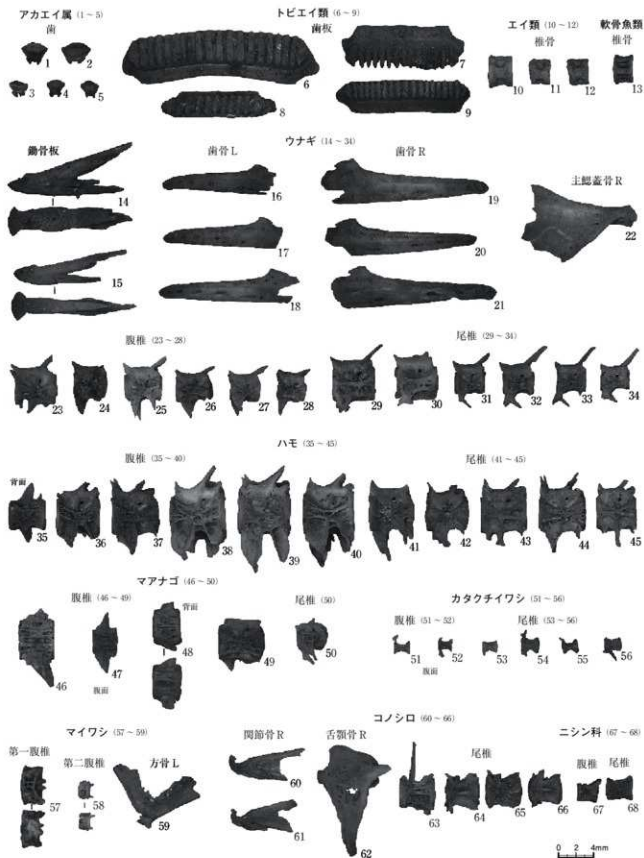
個体A (a.個体識別基準下顎第2大白歯左 (・印) b.寛骨R c.寛骨L d.上腕骨R e.上腕骨L  
f.大腿骨R g.大腿骨L)





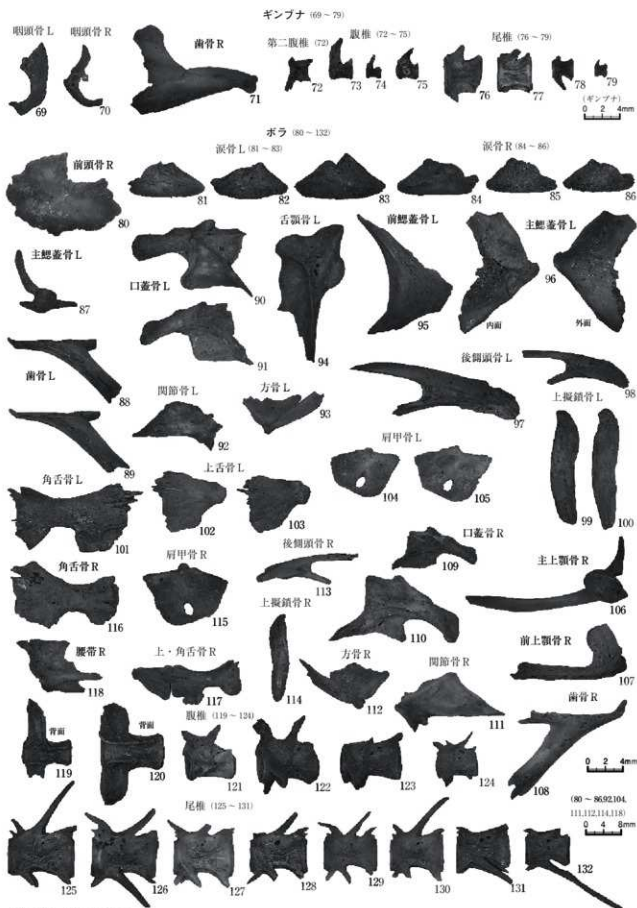
1.個体B 個体識別基準下顎第2大白歯左（・印） 2.個体C (a.個体識別基準下顎第2大白歯左（・印）  
b.上腕骨L） 3.個体D 個体識別基準下顎第2大白歯左 4.個体E 個体識別基準上顎第1大白歯右

SI008貝ブロックA出土人骨（2）



## 魚類遺体 (微小資料 1)

1 ~ 5・51・52 : SK015 カット 16 出土, 57・58 : SK015 カット 17 出土, それ以外は SK012 魚骨層出土



魚類遺体 (微小資料2)

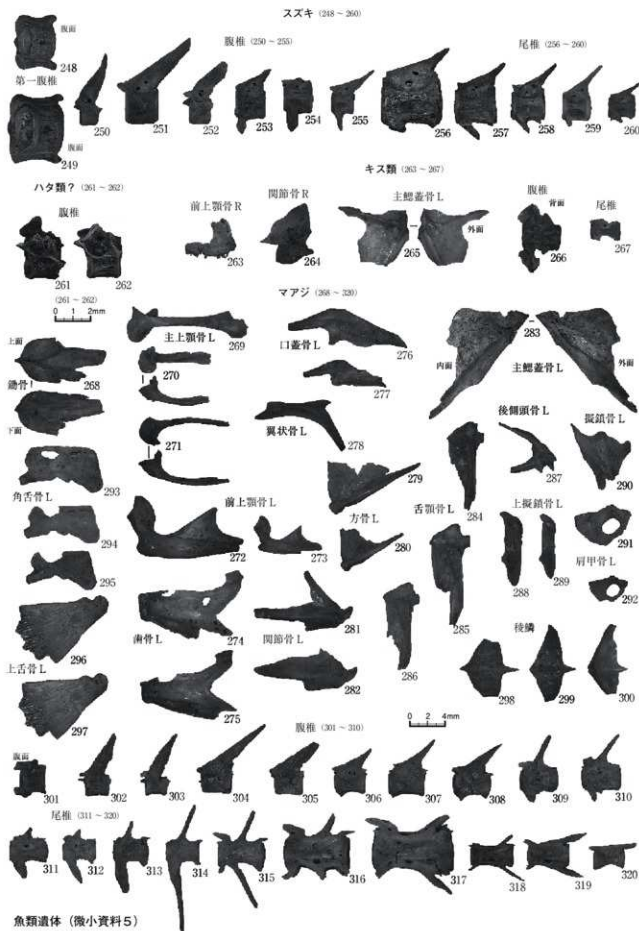
72・73・78・79: SK015 カット 16 出土、74・75: SK015 カット 17 出土、それ以外は SK012 魚骨層出土



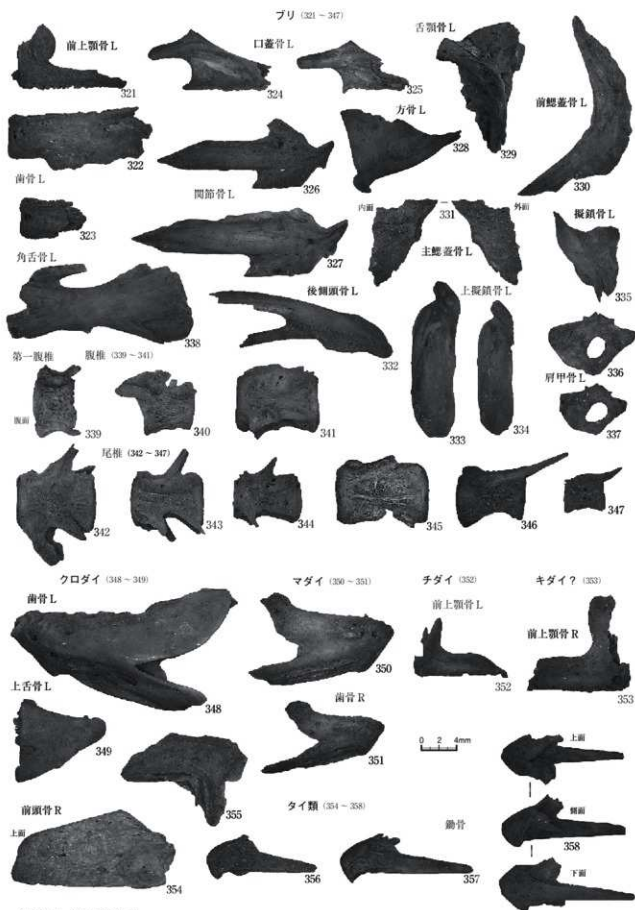
魚類遺体 (微小資料3)

135・136: SK015 カット 16 出土, 143: SK015 カット 11 出土, それ以外は SK012 魚骨層出土



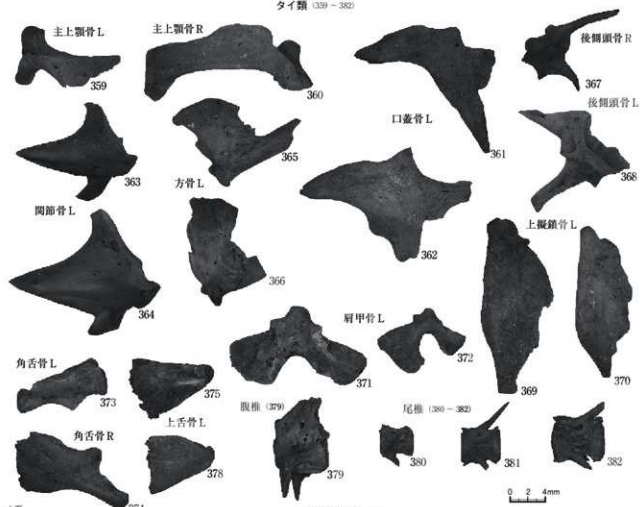


魚類遺体 (微小資料 5)  
すべて SK012 魚骨層出土



魚類遺体 (微小資料6)  
すべてSK012魚骨層出土

タイ類 (339 - 382)

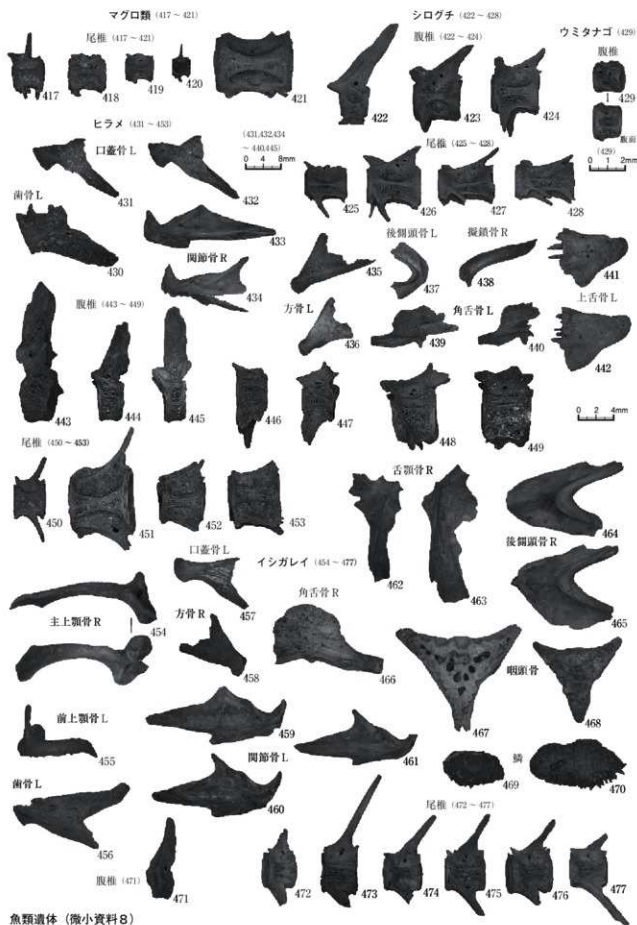


ハゼ類 (383 - 411)



魚類遺体 (微小資料7)  
すべて SK012 魚骨層出土





魚類遺体 (微小資料 8)

429: SK015 カット 18 出土、それ以外は SK012 魚骨層出土



ムシガレイ? (504 ~ 511)



ウシノシタ類 (533 ~ 539)



0 2 4mm

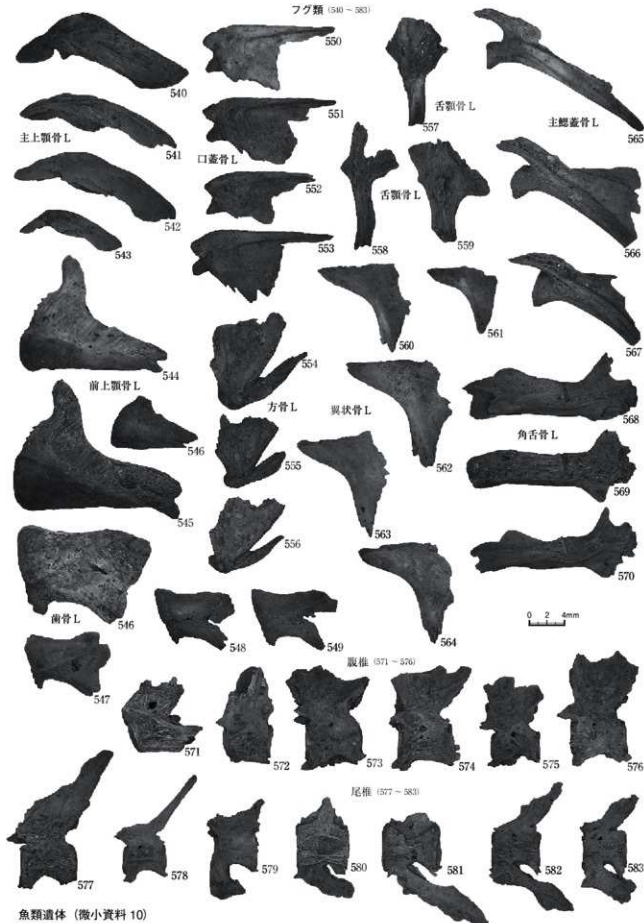
カレイ類 (512 ~ 522)



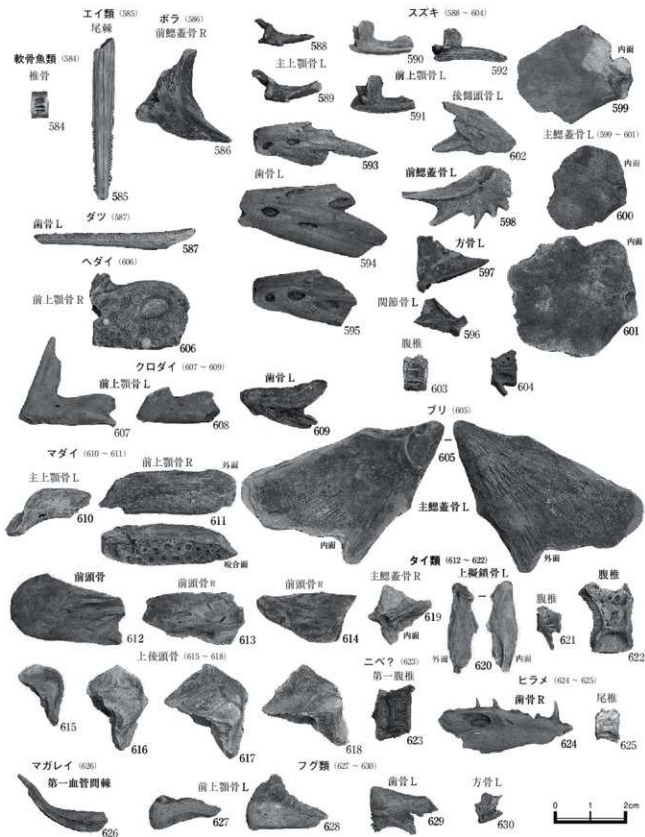
魚類遺体 (微小資料 9)

すべて SK012 魚骨層出土

フグ類 (540 - 583)



魚類遺体 (微小資料 10)  
すべて SK012 魚骨層出土



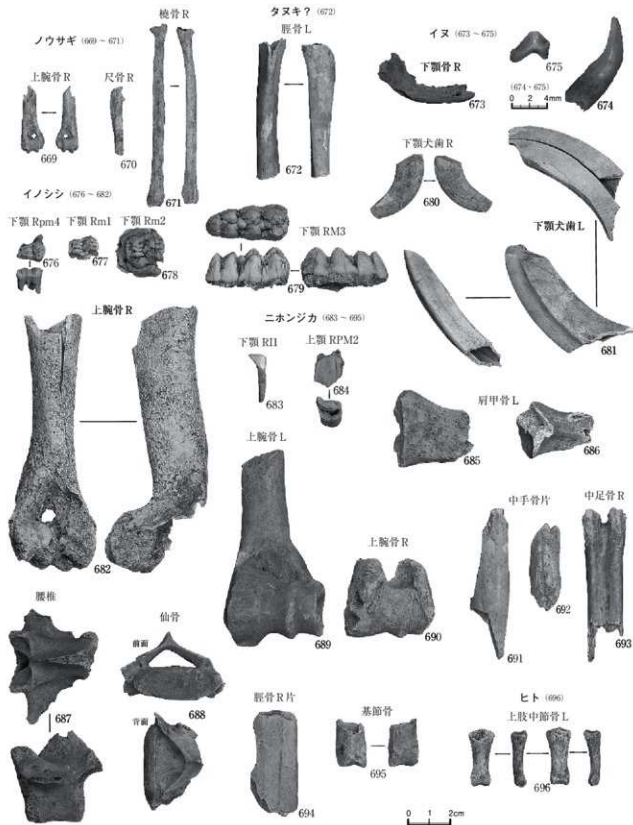
## 魚類遺体 (11)

584: K56-19 グリッド出土, 585-588-591-593-594-598 ~ 600-602-607-608-612-615-618-620-622-628-630: SI006 (貝ブロック B) 出土,  
 586-589-592-595 ~ 597-601-603-605-609-623-626: SI017 出土, 587: SI017 カット 4 出土, 590-610-611-621-625: SK034 出土,  
 604: SK015 カット 15 出土, 606: SK014 出土, 613-614-617-624-627-629: SK016 出土, 616: SI008 カット 3 出土, 618-628-630: SI006 (貝  
 ブロック A) 出土, 619: SK015 カット 19 出土



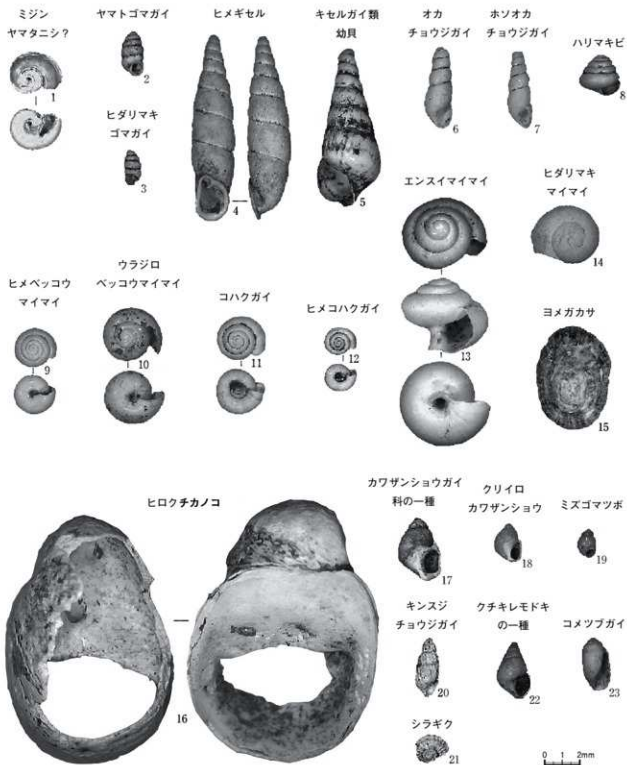
両生・爬虫類、鳥類遺体、哺乳類遺体 (1)

633:SK015 カット 15 出土, 635:SI008 カット 2 出土, 636:SK016 出土, 637-639 ~ 644-661-662:SK034 出土, 638:SK015 カット 16 出土, 639 ~ 644-661-662:SK034 出土, 645 ~ 648-651-653 ~ 655-657:SI006 出土, 649-650-652-656-658-659:SK030 出土, 660:SI005 (P15) カット 5 出土, 663:SK014 カット A8 出土, 664:SK015 カット 14 出土, 665:SK015 カット 7 出土, 666 ~ 668:SK014 カット A2 出土, それ以外は SK012 魚骨層出土



## 哺乳類遺体 (2)

669~671・682・684・685・690:SK034 出土, 672・688:SK014 出土, 673・674:SK022 出土, 675:SI017 カット 2 出土, 676~678・683:SK016 出土, 679:K55 グリッド出土, 680・686・691・692・695:SI006 (具ブロック B) 出土, 681・693:SI017 出土, 682・684:SK034 出土, 686・692・694:SI006 (具ブロック A) 出土, 687:SK015 出土, 689:SK030 出土, 696:SI008 カット 3 出土



微小貝類

1: SK023 カット 4 出土, 2: SI005 (P15) カット 7 出土, 3・12: SI005 (P15) カット 12 出土, 4・15: SK014 カット A6 出土, 5・8・23: SK014 カット A7 出土, 6・9・12: SK023 カット 1 出土, 7: SK023 カット 6 出土, 10: SI005 カット 11 出土, 11: SK051 カット 5 出土, 13: SI005 カット 11 出土, 14: SK024 カット A8 出土, 16: SK014 カット A4 出土, 17: SK023 カット 3 出土, 19: SK056 カット 2 出土, 20: SK045 カット 4 出土, 21: SK045 カット 3 出土, 22: SI014 カット 1 出土

# 報告書抄録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書
副書名	流山市思井上ノ内遺跡
巻次	3
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第11集
編著者名	安井健一・高梨友子・島立 桂・西川博孝・四柳 隆・糸川道行・森本和男・渡辺 新・芝田英行
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129
発行年月日	西暦2016年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
思井上ノ内	流山市思井 字上ノ内418-1 ほか	12220	039	35度 50分 53秒	139度 54分 43秒	19990201～ 20021220	8,629㎡	土地区画整理 事業
				日本測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
思井上ノ内	包蔵地	旧石器	石器集中地点 3か所	ナイフ型石器、剥片、RF、敲石、接合資料	
	集落跡	縄文	竪穴住居跡 17軒 炬跡・ピット群 7基 土坑 20基 貝ブロック 8か所 炬穴 25基 陥穴 6基 人骨 1地点	縄文土器(早期～後期)、縄文時代石器(石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石類、石皿)、土製品(土偶、蓋形土製品、土錘、土器片円盤)、石製品(垂飾)、動物骨、人骨	
	集落跡	奈良・平安	竪穴住居 16軒 掘立柱建物 10棟 土器焼成遺構・焼土遺構 4基 土坑 3基	土師器、須恵器、灰軸陶器、鉄製品(刀子、釘、鏝)、土製品(支脚、紡錘車)	
		中・近世	溝状遺構・区画整形遺構 21条 火葬遺構 3基 土坑 7基	陶磁器、板碑、鉄製品(刀子)	
要約	立川ローMⅤ層から検出されたブロックは6か所のクラスターに区分され、環状ブロックを構成する可能性がある。縄文時代早期の炬穴は縄文島台式期を中心とし、台地全体に環状に構築される。後期縄文1式から2式にかけては竪穴住居、貯蔵穴などによって構成される環状集落が形成され、小規模な貝ブロックが形成されるほか多遺体を反覆追葬したと考えられる人骨群が出土している。奈良・平安時代の遺構は8世紀から10世紀にかけて竪穴住居のほか、掘立柱建物群や土器焼成遺構が検出されている。下総国府から常陸、相馬方面へ通じる古代東海道相馬路が至近にあり、葛飾郡桑原郷を構成する集落の一つであったと考えられる。				





千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第11集

## 流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書 3

－流山市思井上ノ内遺跡－

---

平成28年 3月25日発行

編集・発行	千葉県教育委員会 千葉県中央区市場町1-1
印刷	株式会社 弘文社 千葉県市川市市川南2-7-2

---



